THE CENTRAL REVIEW

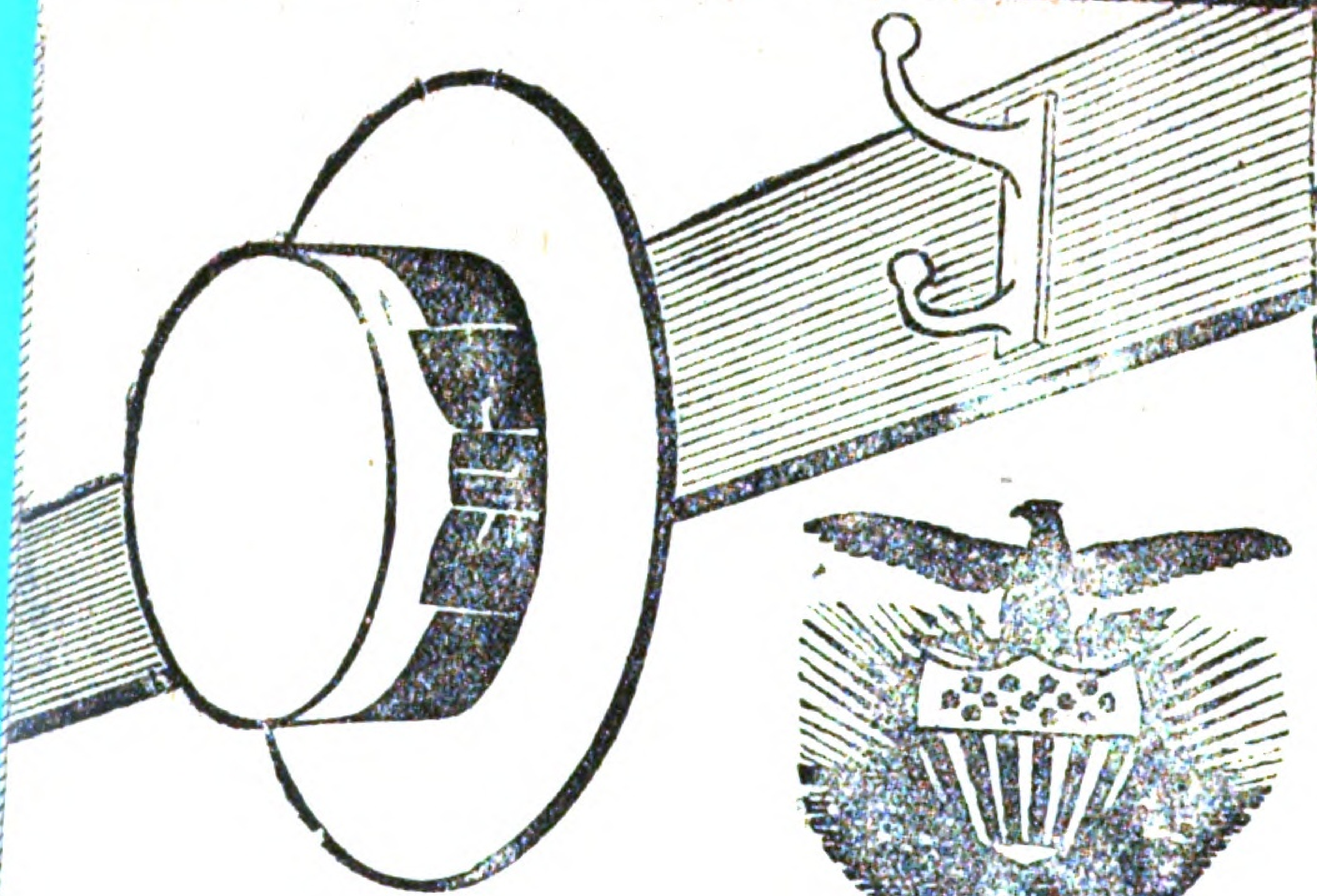
中央公論

7-1923

七月號

第三十八年 第八號 第四百二十四號


染めたと見えぬ
生れ付の黒髪と同色に染る
ちらが
赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
タツタ二十分で染る。
自然の髪の色艶に染る。
襟枕に汚染の憫なく。
洗ふて剥げず永く保ち。
用法至極手輕便利也。
發賣元大阪東京
丹平商會
全國化粧品店及び藥店にあり

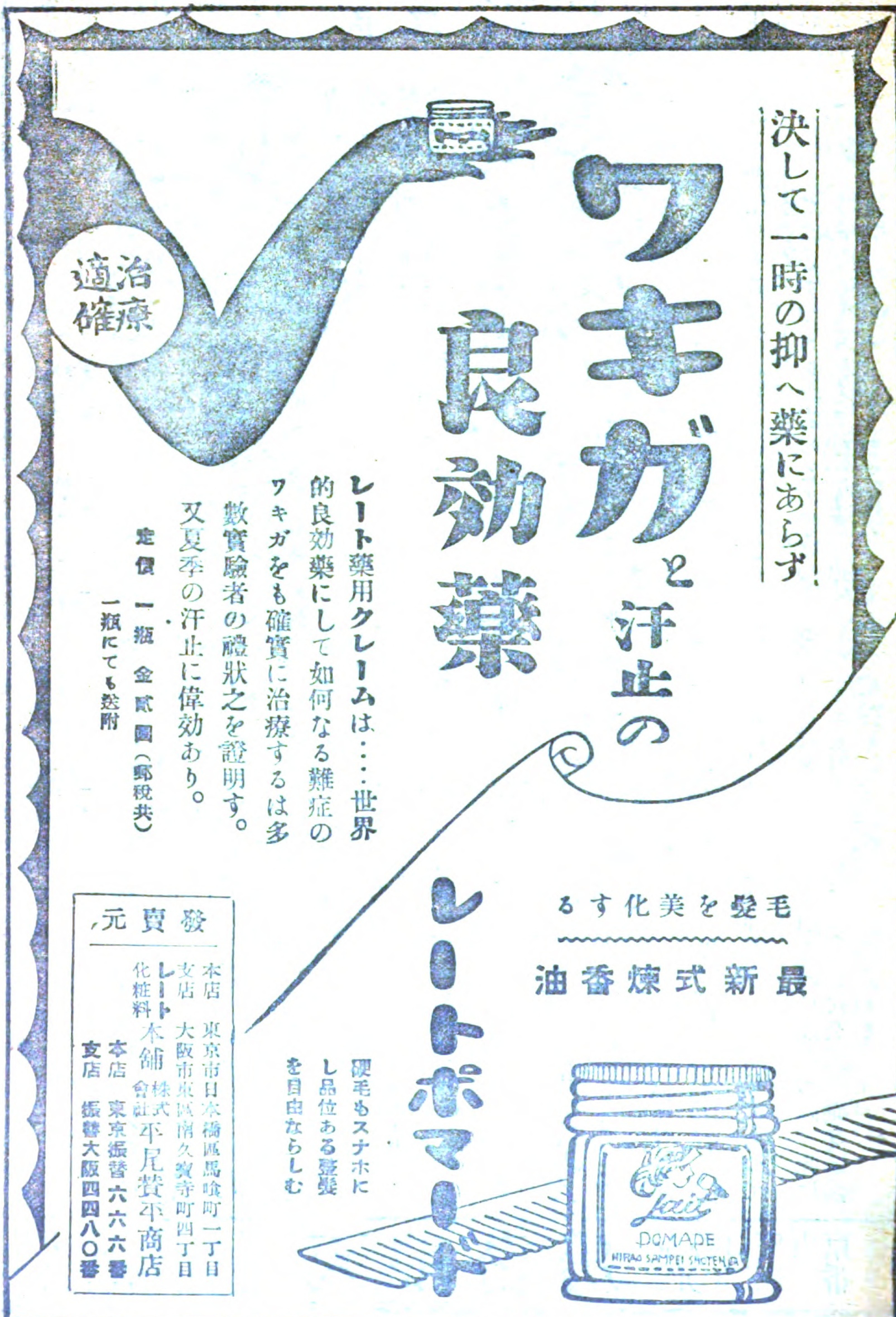


▼説苑


改造の時代に生れて
改造を生みつゝある
プラトン
萬年筆
材料が良い
体裁が良い
持ちが良い
中んづくペン先が良い
万年筆用
事務用
學生用
プラトンインキ
日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣



生々　　小川芋銭筆


決して一時の抑へ薬にあらず
ワキガと汗止の良効薬
治療適確
レート薬用クレームは‥‥世界的良効薬にして如何なる難症のワキガをも確實に治療するは多數實驗者の證狀之を證明す。又夏季の汗止に偉効あり。
定價 一瓶 金貳圓（郵稅共）
一瓶にても送附
毛髮を美化する
最新式煉香油
レートポマード
硬毛もスナホにし品位ある整髪を自由ならしむ
Lait
POMADE
HIRAO SAMPEI SHOTEN
發賣元
本店 東京市日本橋區馬喰町一丁目
支店 大阪市東區南久寶寺町四丁目
レート化粧料本舗 株式會社平尾贊平商店
本店 東京振替六六六番
支店 振替大阪四四八〇番

武藤と後藤

記者の知人に一實業家がある。或る事を當局のなにがしに求めたるに、どうしても聽いて呉れない。困り切つた揚句、圖らず、さる人の勸めに從ひ、政友會の陣笠某代議士に之を諮つた。手輕に引き受けたこの代議士が、自働車を當局の役所に走らせて歸つて來ると、見よ、願の筋は譯もなくきゝ容れられたのである。政友會にすがれば鉛も金になる。之に楯突いては何事も出來ない。有り難いといへば有りがたいが、怖しいといへば又怖しくもある。而して最近この怖しい勢力に對し無暴にも大それた反逆を試みる者が現れた。實業同志會の創立者武藤山治即是れ。

今日の世の中に在て媚ぶる者に有り難く逆ふ者に此上もなく怖しいものに、政友會の外、元老と軍閥とがある。尤も軍閥や元老の恐しさ有り難さは、直接に我々平民の生活には交渉がない。去り乍ら、所謂政界の野心家に取て、彼等の一顰一笑は實に天下そのものよりも重いのである。然るにも拘らず、最近またこの怖しき勢力に面を背けて政界に多少の波瀾を捲き起さんとするらしい者が現れた。日露問題を提げて起つた子爵後藤新平が正に其人だ。

武藤の實業同志會は、固より政友會に對する反對黨を作るを直接の目的とするものではない。商工業に從事する所謂實業家が結束して一獨立政黨を組成するの可否は、純理上自ら議論の存する所であらうが、當今の政界が、實業同志會の宣言綱領の示す通り正に『專門政治家に壟斷せら』れ、之等の輩がまた『公衆の利益を無視する國家の保護』を以て一部の政商を利し、爲めに凡ゆる腐敗手段を弄するの實狀なる以上、當面の急務として暫く獨立の政治的活動を試んとするは、決して無用の事業ではない。彼に反感を有する一部の實業家は、政治と實業との所謂職分上の分界を理由として、政黨組織に反對を表して居るさうだが、是れ出來る丈け民衆の耳目を政事から遠くるに利益を有する官僚主義者の宣傳に毒せられたる謬想にして、眞の立憲主義は、總ての人に現實の參政を要求するものである。其の職業の實業家たると教育家たると將た勞働者たるとは其の問ふ所ではない。尤も之を解して、專門政治家の存在を否認するといふ意味とされても困る。政界に許す可らざる弊根は、職業政治家の存在ではなくして、之に對する民衆的監督の缺如である。但し當今の所謂政治家は、餘りに永く民衆の要求を無

視するに慣れて居るから、彼等を徹底的に排斥する所なくしては、政治に對する所謂民衆的監督の實を擧ぐることは出來なからう。此點に於て武藤一派の運動は、慥に時代の弊根を正しく突いて居る。

前にも云つた如く、武藤の實業同志會は、固より政友會を唯一の敵と目指すのではない。が併し、彼の運動によりて覿面に大打撃を蒙るものゝ政友會であることは亦疑を容れない。玆に武藤の運動が、我國政界の進展に貢献すべき一面があると思ふ。政友會が今日の如くにして居然たる大勢力を擁するは、國家の爲には勿論、政友會それ自身の爲にも本來不利益なのだ。之を破ることに依て始めて政界の廓淸は期待し得る。實業同志會が積極的に我國の政界に何物を貢献し得べきかは頗る疑はしいが、政友會の大を挫くといふ消極的効果だけは間違なかりさうだ。たゞ此點だけでも彼の運動は慥に正直なる國民の感謝に値するものがある。

後藤の日露問題に關連して爲に示せる態度に至ては、彼が多年政界の野心家として知られて居る丈け、最初頗る世人疑惑の標的であつたが、同業「改造」の六月號に公にせる長篇に於て、彼は最も露骨に元老軍閥に對する挑戰的態度を宣明して了つた。彼を圍繞し、彼に倚つて何等かに有り附かんとせる輩は恐らく之を目して驚くべき輕卒といつただらう。深く決する所ありてのことか、將た行掛り上思はず背水の陣を張るに至つたのか、兎に角あゝまで大膽に宣戰を布告した以上、彼は最早從來の政治家と同じ途に由て政界に雄飛するの見込は全く塞がつたと謂はねばならぬ。望を前途に斷つて隱居する積りでない限り、彼の今後の活動が實に吾人の興味の中心となつて來るのである。

傳統的勢力を無視する活動の、成功を期し得べき唯一の途は、覺醒したる民衆を味方とし、又兼ねて誠實なる努力に依て民衆を覺醒することの外にはない。武藤には若干此趨勢を洞察するの聰明を缺くが如きも、飽くまで所信を貫かんとするの奮鬪的熱情は確にある樣だ。後藤は聰明を缺く點に於て武藤と相距る遠からず、熱情に於て世の信頼に孤負せざるものありやは全く未知數だ。前者は既に陣容を盛にして可なり世上の同情を集めて居るが、後者の動靜に至ては今の所海の者とも山のものとも分らぬ。が、更に何彼等が進んで、廣く民衆と偕にせずんば成功し難き底の新天地に自ら投じた點に於て、亦政界革新の陳勝呉廣たるを失はぬ。卑近な政略的の意味に於てゞはあるが、吾人は切に彼等の奮鬪を望んでやまないものである。

中央公論



第卅八年第八號
七月號
第四百二十四號

社會組織に於ける指導意識の進化

長谷川如是閑

人間の社會的生活と他の生物の群生活との重大な差點が何處にあるかといふ問題は、極めて複雜であるが、その主た

る特徴として、他の生物の群生活に於いては、各個體は殆ど一樣に種の本能を同じ樣態に於いて働き出してゐて、或る個體が群そのものに對し特別の地位を占むるやうなことが無い。これに反して人類の社會に於いては、所謂本能の動作は種々なる後發的の事情に制せられて複雜な形を取り、從つて各個體の動作が甚だしく同一性を失ふと同時に、或る個體は非常に他の一般の個體と異なる生活動作を取ることとなり、爲めに或は全群と離れたり、又或は全群を指導するやうな特別の地位を得る。その結果、人間の集團に於いては、全群がその內の一つ又は一團の個體に盲從して、一定の方向を取るに至る。このことが人間の社會を一般生物の社會と異なる地位にまで進歩せしめた主な事情であるといふ見解がある。

この見解は、人類社會の進歩をその動作の上から觀れば、確かに事實に合してゐるのである。如何なる人間社會も、一定の指導者を有たなかつたことは無い。そして所謂歷史的現象はこの指導者の意識目的の實現であると見られ、場合によつては一國又は一社會を組成する各員は、その集團的生活の必然に從つたと云ふよりは、寧ろその內の或る一員の意志感情に基く觀念を實踐的に働き出したと見られるやうな傾になつてゐる。かういふことは他の群生動物には全く見ることの出來ない現象であつて、かかる現象が無かつた爲めに、他の一般生物の社會は、人間のそれのやうな進歩を見ることが出來なかつたのであると考へる外はない。

このことは所謂文化の歷史を觀察して見ても、疑ふことは出來ない。今日までの人類の社會に於いては、文化的現象は一般人類又は一つの集團全體の現象として發生してはゐないのであつて、歷史の示す通り、特に文化現象を産み出し、それを享樂する特定の個人又は階級が存在してゐるのである。人類の數千年間に於ける進歩は非常なものであると云はれてゐるが、それは社會全員の進歩ではなく、特に限られた個人又は集團の進歩であつて、社會の或る部分には依然と

して舊態を保つてゐる階級があり、より惡い狀態に進みつつある階級があり、そしてさういふ階級は並に於いて決して全部に對して少い部分ではないのである。即ち人間の群生活に於いては、動物のやうに生活態樣が固定してゐずに、絕えず進化してゐるといふが、然しその進化は特定の個人の間に止まつてゐるのである。例へば衣食住の生活が非常に進んだと云はれてゐるに拘らず、それは或る一部に於いて、家や衣服や食物やの進歩が、多數のそれと沒交涉に進展しつつあるので、他の部分には、野蠻人のそれよりも、生活に取つてもつと破壞的であるといふ悲慘な狀態に置かれてゐるものがある。また意識の世界に於いても、科學・哲學の進歩は驚くべきものであるが、丁度牛や馬がそれと沒交涉に置かれてゐると同じやうに、科學・哲學の進歩と全く沒交涉な多數人があるのである。のみならず、社會群として見ると、その進歩した衣食住や科學・哲學やは、何處にそれ自體の世界を持つてゐるかが甚だ明瞭でない。社會群は時々殆ど定期的にその進歩した外的文化及び內的文化、即ち建築や科學・哲學やを打ち破らうとする。而してその動作は動物の群生活のそれと全く同じやうな、集團的同一性を有つた本能的の働きであつて、一種の還元作用として働き出されてゐる。

かくて人間の社會生活を特徵づける特權を有つた個人又は階級の發生は、一種のパラドックスである。それが人間社會を動物のそれから引き離して、今日の文明にまで持ち來たしたものでありながら、その指導者及び指導者の階級は、常に崩壞の運命に在る。而してそれが全く崩壞しない固定狀態に於いて硬化してしまふと、今度は全社會が崩壞する。指導者はその指導によつて全人類を引き上げながら、常に自己の生存固執が反社會的となるといふ難局に陷る。

この現象を正確に理解することは、社會進化の過程を意識することに於いて甚だ重大であるが、この現象の豫備的研究が不完全である爲めに、それはまだ正確に企てられたことは無いと云つてよい。本論はこの問題に對して唯ヒントを與へるに止まるのである

一　指導者及び指導意識發生の過程

人間の社會群に於いて、個體が特權的地位を得るに至る過程は、生物界に於けるやうな同一の本能的動作に、或る變化を與へる後天的條件があるのであるが、人間が動物と違つてさういふ後天的條件を得るに至つたについては、人間特有の生活能力が與へられてゐなければならない。それは即ち經驗的知識が、人間だけに於いて特別に蓄積されたといふことである。動物にも感覺はあり、記憶もあり、經驗の生活化も多少あるが、人間はその以上に複雜な意識の過程を取つて、經驗を偶然な生活化だけに委せずに、これを抽象し、組織立て、意識的に生活を方向づける能力を有つに至つた。

この能力は、同一の群生活内に於ても、個人の環境の差異によつて決して一樣には行かない。この個人の環境の差には二種ある。第一は時間的である。第二は空間的である。第一の時間的の差は、年齡の差である。第二の空間的の差は、場所・境遇等生活環境の相違である。ところがこの二つの差異の中の後者、即ち生活環境の差は、集團の世界が狹い小さな部落的であつた時代には個人の間に發生することが少い。一つの部落内では、各人は大抵同一の生活環境を有つてゐるので、個人的特殊をそれによつて惹き起すことは少い。で、第一次的には、時間的の差が個人を一番能く特徴づける。即ち個人的特殊は先づ年齡の差に現はれる。原始的部落の生活に於いては、老人と若い者とは非常に違つた個人的差別を有つ。老人は殆ど神のやうな地位にある。若い者はそれに盲從する地位にある。何となれば、老人は若い者の全く知らなかつた世界、即ち若い者に取つて神秘の世界であるところの過去を經驗してゐる人間である。これは未來を經驗してゐるもの（神）と似寄つた生活經驗を有つ人間である。それが爲めに老人は原始社會の最も優れた經驗者であり、從つて社會に對し、その經驗的叡智に基く意識的支配を開始するに適した地位にあるものである。これが長老政治

發生の過程である。老人の神秘的性質は遂に老人と神との合體となり、丁度後代に於いて、神を知るものが種々なる支配狀態を導き出したやうに、老人はその長老政治に於いて、當然神を知つた唯一の人間として、支配狀態を開始したのである。これは動物の社會群に於いては全く無かつたことである。この過程を單に意識の進化と認めてはならない。何となれば、意識は後代の哲學者が考へてゐるやうに、それ自體の本質から派生せしめたものではなく、又それ自體の因果律で進展して行くものでもなく、社會群の生活の一つの作用として群の生活作用に伴つて起つた、そしてそれに伴つて進んだ能力である。人間の第一次的の意識が神秘的であり、象徴的であつたのは、經驗的知識が甚だ單純で、もつと理知的に現象を理解する働きを缺いてゐたからに外ならない。然らば何故に正確な理知の發達する前に、そんな迷信的な意識が人間の心に生れたのであるかと云へば、そこに意識と生活との離るべからざる結び付きがあるからである。人間は、知覺しないものは、これを想像する。雨の降る原因を知覺することが出來ない爲めに、龍のやうな雨の神を意識する。何の必要があるかと云へば、極めて偶然的な雨が收獲を規則立ててゐるといふことは、この上もない生活の不安であるから、雨も亦、一定の意識目的を有つたものが、人間の生活に適ふやうにそれを降らしてくれると意識して、生活動作の懷疑的破壞を免かれるのである。(後の科學的知識に據れば雨が收獲に適ふやうに降るのではなく、人間の耕作する麥なり米なりが、一定の雨期を有つ天然狀態に適應して保存された植物なのである。人間それ自體も亦、一定の天候を有つ天然狀態に適する生理的狀態に於いて保存された生物であつて、天然が麥や人間の生活に適するやうに働いてゐるといふわけではない。然しかういふ進化論的見地が、吾々の生活を安定する意識を吾々に與へることの出來なかつた時代には、人間は別の意識で同じ安定を得やうとしたのである。迷信が即ちそれである。)

それ故に、長老の支配を發生せしめた一種の社會的意識は、意識それ自體の目的で發生し、發展したのではなく、現

質の生活に於いて、老人の經驗が、社會群を方向づけるに非常に有力な働きをしたからである。例へば火を作るについても、それを一つの神秘的の作業とし、女子供に見ることを禁じたり、濫りに火を消したりすることを禁じたりしたのは、この火の作られるについては、火の發生する現象に對する 恐らく何千年かの經驗の蓄積を要した爲めであつて、それを初めて作つたものは、必ず異常な科學的經驗の蓄積者であつたと見なければならない。かやうな實際生活の經驗の蓄積者は、比較的環境の一樣な原始部落に於いては、横に廣く見聞した人といふよりは、縱に過去の經驗の遠いものであるわけである。穀物の耕作が季節と關係する事情の如きも、無論書物などは無いのだから、いろいろの季節の變化に出來るだけ多く遭遇した老人が、一番の經驗者であつたわけである。

で、社會群に於ける生活指導は、迷信の支配であつたにしても、その迷信が生活に役立つたことを條件とするのである。これが指導者發生の社會的意義、言ひ換へれば、本質的意義である。

この原始的社會群に發生した支配は、今日の國家にまで發展した制度であると信じられたこともあつたが、今日の研究に據ると、この謂はば自然的社會的な支配は、決してそのまま今日の國家と發展したといふ歴史的事實が無い。法理學者が國家權力の起源は父權に淵源するといふやうなことを考へたのは、右の自然的な社會的な支配が、そのまま延長して國家となつたといふ意味であるが、これは凡ゆる歴史上の國家と一致してゐない見地である。なるほど小社會群に於いては、全部がさうであつたかどうかは分らないが、往々一つの家族群から成つてゐたものもあつた、この場合に於いては、最年長者は家長であるから、前に云つた長老の支配は即ち家長の支配と同一である。然しかういふ社會群がそのまま發展して出來上つた國家は無い。或る社會群が一家族群から成り立つてゐたといふのは集團の意識であつて、集團の事實ではない。孰れにしても、その第一次的の社會群が、他の條件なしに國家に發達したものは無い。從つて國家

權力を家長權の延長とは考へられない。言ひ換へれば、今日の國家組織、政治組織、社會組織に於ける指導者並びに指導原理を、前述の社會的な極めて自然的な支配狀態の延長と觀ることは出來ない。

然らばその後の國家生活に於ける特權的個人や、特權階級や、又その特權を根柢づける意識やは、何處から來てゐるのであらうか。

この問題について考察すれば、人間的社會群の特徵である個體の優越、並びにその指導には二つの種類があることが分る。一つは今述べた本質的の、言ひ換へれば、社會それ自體の有機的作用として發生した指導、卽ち特權の支配であつて、他の一つは社會群の內から有機的に發生せずに、群と群との接觸から結果したところのものである。前者は歷史的過程としては極めて原始的な時代にだけ存在した現象であるが、後者はその後の歷史を通じて一定不變に存續した現象である。次ぎにこの後者について考へて見よう。

二　生產本位の指導意識より享樂本位の指導意識へ

社會群が膨脹する過程は、それ自體の有機的發展と、二個以上の有機體の合體とである。歷史の過程はその後者であつて、社會群の接觸が、或る程度の合成體を造り出すまでは、歷史は決して發展しなかつた。然らば數千年間の人類の歷史は、この群の接觸が、所謂國家的集團と發展した後の過程であつて、從つてその生活を基礎づけるものは、前に述べた自然的社會的有機的指導者、並びに指導意識ではなく、畢竟社會群膨脹の第二の形式、卽ち群の接觸の結果產み出された指導者、並びに指導意識でなければならない、

社會群は生存の競爭上から接觸するものであることは、言ふまでもない。この接觸に於いては、食物並びに生殖の目

的の爲めの掠奪が、本質的に附隨してゐる。そして生産の乏しいものが劇しい原始的收獲方法、卽ち狩獵によつて生活する群であるから、その特徵は生産方法を缺いてゐて、戰鬪に熟達してゐるといふ點にある。つまり腕力があつて貧乏なものが、今日でもさうである如く、原始時代に於いても强い群だつたのである、社會群が接觸する時には、さういふ群が威力を振ふ。そして比較的生産に豐かな社會群を掠奪するといふことになる。――生産に豐かなのは、生活が安定して生存の資料を平和の方法、殊に自分の社會群の生産勞働によつて得てゐたものである。――この掠奪は社會群接觸の目的それ自體である。平和な弱い群の生産物•男子•女子等は掠奪の目的物となつて、忽ち戰鬪的な强い群の消費材料乃至生産原料となつてしまふ。卽ち男子は奴隷、女子は妻となり、生産物はそれ等の奴隷群の生産勞働によつて作り出され、征服した社會群は被征服者の生産に寄食する組織が完成する。

この過程は卽ち社會群自體の有機的膨脹ではなく、群の接觸による膨脹であつて、自ら群自體の有機的に膨脹する過程とは別な進化である。そこでは今まで社會群それ自體の有機的發展に基いた自然の過程が中斷されて、突然新しい體制が出來上る。この體制が卽ち後代の國家とまで進展したそれである。

この體制は、それ故に、重要な點に於いて前に云つた自然的指導によ々體制と異つてゐる。重要な點とは、卽ち前の自然的又本質的社會組織に於いては、支配が生活それ自體に役立つ信仰•習•空想•管理等に基いて有機的に成り立つたのであるが、この征服的社會群に於いては、支配は生活それ自體の信仰•習等によらずに、征服事實の特別な條件を根柢として成立してゐることである。卽ち生活そのものの有機的進展に於いては、生活に役立つ意識が支配の基調を形造つたのであるが、次ぎの體制に於いては、群の接觸に於ける生存の競爭を基調として、それが社會群を指導する基礎となつたのである。前者が所謂生存の互助に立脚してゐたのに反し、後者は生存の鬪爭に立脚するのである。

故にその後の社會群は、鬪爭の機能を本位とし、生產の機能は恰かも鬪爭の機能を支へる輜重隊のやうな地位に置かれた。これはさういふ社會群の社會意識であつたが、この意識は必ずしもその社會群の生活事實と一致してゐたとは云はれないけれども、その社會群の指導原理は必ずこの意識に基いてゐた。

そこで當然社會群に於ける指導者の性質が全く異つたものとなつた。原始時代の社會群に於いて最も重大な働きをなした意識は、この後の社會群に於いては極端に壓迫された。即ち社會的生存に役立つ動作は、社會的地位に於いて最も劣等な奴隷階級の生活様式とされ、前の社會群に於いて長老の支配を產み出した意識作用は、この社會群に於いては意義を失つた。即ち老人の信仰と叡智が生活安定の指導意識であつたのは、全くその老人の人間的能力が生存の手段とその手段に忠實ならしむる信仰とを支配した爲めであつたが、後の體制に於いては、さういふ社會的意義の能率は蔑視され、戰鬪能力をローマン的空想と結び付けて、社會群の指導意識とすることになつた。言ひ換へれば、生活の上での生存保障が指導原理を形造らないで、人間にある空想的意識作用の昂進から產れた詩的空想が、社會群の指導原理となつた。これは社會群の生活が、生存を保障する生產者の指導から離れて、唯その生產物を享樂する階級の指導に歸した爲めである。そこで初めて社會群の生活意識が、生產本位から享樂本位に轉じたのである。さうして數千年間その儘に進行したのである。今日の生活意識が依然として享樂本位であることは、即ちかやうな經過によつてゐるのである。

三　古代國家の傳說に現はれた生產本位の指導意識

初めに云つた如く、人類の社會群に於いては、他の生物の社會群に見ることの出來ない特權的個體が發生し、動物の社會群に於いては一樣にただ本能的に行動する外はない群を、人間社會では優れた個體の意識目的で指導し、そこに人

間的文化現象を産み出したことはその特徴であつたが、然し凡ゆる人間的特質は、それが生活から見て二次的三次的と次第に派生的になるに及んで、そこに自ら生存の第一次的條件を離れることとなる。そして何時かそれが却つて生活障碍となつて、長所が同時に弱點となる。これを譬ふれば、人體の進化に似てゐる。人體は動物のやうな四足獸の地位から進化して二足になり、その爲めに前の二足が今の兩手と變化して、生活作用を非常の能率で助けた爲めに、今日のやうな人間とまで進歩させたのである。だから人間が立位にあるといふことは、それだけで文明の唯一の基礎であると云つてもいいくらゐで、若し人間が依然として四足獸であつたなら、決して猿猴類以上の社會は産み出されなかつたであらう。ところが非常に生活に役立つた立位の地位は、元來四足から發達した身體に取つては非常に不利益な地位であつて、それが爲めに凡ゆる內臟は悉く不自然の地位に置かれ、人間特有の種々なる病氣が人體を冒すこととなつた。そして生理的には人間が凡べての動物中一番弱いものになつてしまつた。そこで次第に動物の生理を研究することによつて、人體を絶えず補正して行かないと、人間は生きて行かれないといふ面倒な有樣になつた。

これは極端な例であるが、然し社會群の體制に於いても、それと同じく、その進化は必ずしも常に群の生存の第一次的條件と合致するものではない。人類を今日の繁榮にまで持ち來した體制は、數千年來の生命を保ち、殆どそれが本質的であり、第一次的の自然狀態であるとまで考へられたが、その體制の進化の間に、各時代の人間が遭遇したいろいろな社會現象は、必ずしもこの體制がそれほど本質的のものではないといふ意識を折り折り人間に與へたくらゐであつて、殊にそれが近代に於いて著しくなつた。文化の非常に古く發達した國に於いては、この近代的現象が既に非常に古くから現はれてゐた。例へば支那の如き、有史以前の國家が餘程完全な發達を遂げてゐたらしく思はれるが、その結果、歷史が出來た當時に於いて、既に現代的意識に似た社會群の鬪爭的本質に對する懷疑があつた。傳說として遺つてゐ

るところに據ると、支那古代の國家意識そのものが後代の國家意識とは非常に異つたものであつて、寧ろ前に述べた原始的社會群のそれに似たもの、言ひ換れば生活の第一次的條件、即ち生産動作を本位とする意識であつたらしく思はれるが、さういふ國家に對してすら、懷疑的な意識が古代民にあつて、當時の國家組織が生活意識と懸け離れた指導原理によつてゐることを感じ、生産者がそれを無視し「帝力何ぞ我に有らん哉」と歌つた。さうしてこの社會意識を代表した知識階級は、更にこの意識を高調させて、國家といふ言葉を耳にしても、これを穢はしいとして耳を洗つたさうである。かういふ傳說は、恐らくそれほど古い時代の意識ではなく、寧ろ國家が一層軍國的體制となつた後、生活の上からそれを批判しなければならない狀態に立ち至つて發生した意識であるかも分らないが、然しかなり古くわたくしの所謂原始的指導原理、即ち生活本位のそれに立つて、鬪爭本位の體制を批判する意識があつたことは疑ひない。それは支那のやうな國家に特別な現象ではなく、右の二次的の體制が極端に發達した時代に於いては、必ずさういふ原始的生活の意識が復活したのである。ルイ朝の盛時に於けるルッソオの思想、德川文化の末期に於ける本居、平田等の思想は、即ち孰れもその復古的精神によつて第二次的體制、即ち國家の指導原理を排斥して、國家以前の生活的指導原理に立ち戻らうとするのである。(本居宣長が古事記傳のはしがきに於いて猛烈に儒教を攻擊した精神は、第二次的體制即ち征服國家の指導意識が産んだ觀念の世界を、極めて現實的な、極めて具體的な、極めて自然主義的な立場から攻擊したものであつて、革命期に於ける生活恢復の意識の特徵として興味あるもので、さういふ點からあの時代の精神を研究することは、今日の社會意識構成の上で極めて肝要であると思ふ。さういふ點から云へば、各國に於いて同じ過程が繰返へされたことが證明されるに違ひないが、それは他日に讓る。)

或る社會群の生存が征服者の指導意識による社會に就いては、右の如く生存の第一次的條件が壓迫され、群の生存保

障が重大な意義を爲さずに、却つて最下等の人間的動作と考へらるるに至つたが、その場合に於いても、さういふ指導意識が必ずしも群の生活事實と一致したものでないことは明かである。即ち社會がその生存を第一次的の生活動作、即ち生產勞働によつて維持されてゐることは、如何なる社會に於ても變りのないことなので、從つて原始的生活意識は何等かの形で保存されなければならない。右に云つた支那の古代意識——國家否定の意識——は即ち生產者の階級に保存された原始的生活意識であつて、その階級の生活動作が現實の社會生活を保障してゐることを、その階級の意識として保存せしめてゐたのである。而かもこの意識は支配者の意識としてもまた、或る程度まで取り入れないわけには行かない。國家成立の初期に於いては、さういふ生產階級の意識の方が寧ろ強いのであつて、例へば支那の古代國家の意識に於いては、生產が第一次的に考られてをつたことは、後代の國家意識とは正反對である。後代の國家意識では支配階級の生活意識、即ち權力の淵源としての觀念上の存在を高調して、凡ての國家動作をその觀念から發動する働きと見たのである。哲學的には先づ國家理想が存在し、——それは生活の第一次的條件とは懸け離れた非生產的生活意識の所產である。——法律的には國家的權力が存在し、——それも亦、原始社會の長老の權力のやうに、生存に役立つ生活動作に基いたものではなく、生活の享樂の道德的根柢とも言ふべき非生活的の力である。——それを基調として凡ての國家的動作が働き出されたのである。從つて生產動作はこの哲學及び法律の上では極端に無視せられ、意識の構成上、さういふ要素は取り入れられてゐない。發達した國家哲學、發達した國家法理は、生產的生活の約束を眼中に置かないか、又は置いても極めて二次的に考へる。ところが古代の國家意識がその反對であつたのは、古代國家が國家以前の社會群を去ること遠くなかつた爲めの當然の結果ではあるが、頗る面白い現象である。謂はば後の國家意識は階級的軌範意識に立脚し、古代國家は社會的生活意識に立脚してゐたのである。即ち第一次の生活條件を高調するのが古代意識であ

り、享樂的な生活を構成する軌範條件を高調するのが後代の國家意識である。この區別は支那の古代國家を觀察すると、頗る能く窺ひ知ることが出來る。

無論それは正確な歴史的事實かどうか、恐らくは支那民族特有の生産的生活意識が、後代の軍國的國家を批判する態度として創造したものであるかも知れないが、所謂堯舜の國家の組織――組織よりは意識がそれである。

それは支那が帝國的統一を遂げた當初の國家制度であつたが、この堯舜の時代の國家意識を、支那民族が模範的としてゐる點は何處にあるかと云へば、それは生活の第一次的條件、即ち生産動作を國家的動作の第一次的のものとした點にある。西洋の歴史家の研究に據ると、古代支那の民族は極めて生産的な特徴を有つてゐる點で稀有の原始民族であつたといふ點に一致してゐるが、その特徴は即ち古代の國家意識に現はれて、所謂唐虞三代の理想國家を造り出したのである。この國家の特徴は、生産行爲を國家動作の起點とし、生産勞働を第一義となした點にある。支配を軍國的又は哲學的意義に結び付けないで、全く生産的意義に結び付けたのが理想國家である。これは如何にもよく支那民族の生活態度を表明したものである。傳說に據れば、この時代以前に既に種々なる生産動作が完成され、三皇五帝時代にかなり文明的に耕作法・醫術・商業組織・暦法・數學・貨幣制度等が完成した如く云はれてゐるが、さういふ事實の眞僞は別として、堯の國家に起つたといふ洪水の傳說を、當時の國家意識と結び付けてゐるのが甚だ興味のある點である。舜が堯から位を讓られる時に、堯が後繼者を選ぶに方つて、『湯湯として洪水方に割ひ、蕩蕩として山を懷ね、陵に襄り、浩浩として天に滔る。下民其れ咨く、能くするものあらば、乂めしめん。』と云つて、つまり土木技師を求めて後繼者としようとしたのである。舜は即位の時に『十有二牧に咨つて曰く、食なる哉惟れ時。』と云つてゐる。そして禹を任命して洪水を治めしめた時に、『黎民飢に阻む。汝稷に后として時の百穀を播け。』と云つてゐる。その舜が國家動作を規定した

時にどういふ順序に據つたかと云ふに、第一は食であつた。第二は五教、即ち父・母・兄・弟・子の道德、即と性的生活の約束であつた。第三は刑罰であり、第四は土工金工その他の所謂六工であり、第五は草木禽獸、即ち自然資源であり、第六は祭祀であり、第七は音樂であり、第八が官制であつた。この順序は全く後代の國家のそれを顚倒したものであつて、支那の古代國家が如何に生産働作を國家意義の基調としたかゞ想はれる。

洪水を治めた技師として帝位に登つた禹の時代の國家的軌範意識であつた所謂『洪範九疇』なるものを見ても、第一は五行、即ち水・火・木・金・土――一種の自然哲學――に始まり、第二に五事、即ち貌・言・視・聽・思であり、第三に八政 即ち食・貨幣・祭祀・工事・教育・刑罰・軍事の順序で、食が一番先きで軍事が一番終りであるのも甚だ皮肉である。第四は五紀、即ち天文學であり、第五が皇極、即ち帝王道德であり、第六は三德、即ち普通人の道德であり、第四は稽疑即ちト筮――天氣豫報を含む――であり、第八は庶徵、即ち天候に對する支配者の責任であり、第九は五福六極、即ち一種の人生哲學である。これ等は全く國家的軌範意識であるが、それが如何に生活的であつて、軍國的でもなければ、後代の所謂國家的でもないことを示してゐるのである。

かういふ支配意識は、前に云つた自然的社會的な――社會自體の有機的の過程であるところの――指導原理であつて、後の征服國家のそれとは甚だしく違つたものである。支那民族がその帝國的事業を完成した時に 言ひ換へれば、軍國的征服國家が完成した時に、かやうな國家意識を理想的としたのは、頗る皮肉の現象であつて、殊にその軍國的國家のまつただなかに生れた國家意識を代表した儒教の開祖の孔子が、かやうな――孔子自身の國家意識とは正反對の――國家意識を高調したのは餘程珍である。『論語』には孔子が屢々彼と正反對な生活意識を有つた階級、即ち生産階級の代表者のやうな人間に邂逅したことを記載してゐるのが、如何にもその記載が、さういふ人物を孔子自身より一段

上の人間であるが如くに記るしてゐるのも、餘程面白い現象である。楚の狂人接輿だとか、長阻桀溺だとか、丈人だとかいふやうな隱者は、皆孔子のやうな國家意識を否定する人物であるが、孔子はその人々と絶對に一致しないことを明言しながら、何となくこれに尊敬を拂つてゐるやうな無意識な態度が窺へる。これは確かに支那民族の傳統的意識が生産的であつて、如何なる國家的發展も、この民族の本質的生活意識を如何ともすることが出來なかつたことを示してゐるのである。孔子自身は、樊遲が人民の爲めに農業を學ばんことを願つたところが、その樊遲を罵つて、民を教へるならば禮・義・信を教へるがいい、『小人なる哉、樊』と云つたくらゐ後代の軍國的國家意識に支配されてゐたのであつたが、それでも何處かに支那民族的性質を潜ませてゐたと見える。

かやうな古代支那に於ける如き國家意識は、世界の國家の歷史の上では稀であるが、然しそれは記錄以前の狀態が傳はらなかつた爲めか、又は支那民族ほど平和的な又生産的な民族が無かつた爲めであるか明かでないが、とにかくエジプト、バビロン、アッシリア等の發達した古代國家に匹敵する國家であつて、尙ほかくまで生産本位の社會意識を保存せしめてゐたことは稀らしい例で、今日の支那民族が、政治的には亡國的でありながら。生産的には世界の如何なる民族にもまして有力であることの、決して偶然でないのを證明してゐるのである。

然し生活の意識が國家に於いてはどう現はれてゐるにしても、生活事實としては、生産的勞働を社會群の生活の本位とするより仕方が無いのである。征服國家の發達以來、國家生活の指導原理がこの本質的を性質を失つたのは、歷史の上で常に指導者及び指導階級の絕えざる崩壞が行はれる所以である。

四　享樂階級の浪費の不可能と生産的指導意識の勃興

征服による社會群の生活意識が崩壞する過程は、一樣に生存の保障が害はれた場合に起るのであるが、どういふ風にその指導意識が生存條件から離れるかと云ふに、それを通じて、生産材の浪費と生産階級の虐待といふことが一貫してゐる。生産を蔑視する階級の生存は、即ち消費の生活であるが、この消費は人間の享樂生活を極端に向上せしめる必然の費用であつて、その濫費の程度は、古代國家に於いて最も甚だしかつたと考へられる。エジプト以來ギリシア、ローマに至る大國家小國家の文化は目醒ましいものであつて、殊に生活に關係ない大土木工事、エジプトの宮殿・墓、バビロンの庭園、ギリシア、ローマの市民の享樂機關に於ける消費は、近代國家の財政に於いては全然不可能な浪費であつた。エジプトの帝王は數百年を費して大石殿を造り、數十萬人の勢力を犧牲としてピラミットを造り、ソロモンの榮華は東洋の秦の始皇帝の贅澤と相並んで、帝王式濫費の標本となつてゐる。これ等は指導階級の享樂に文化の基調を置いた國家意識が有形的な文化形式に現はれたのである。これに反してギリシア人の享樂生活は所謂文化生活的であつて、非常に洗練された日常の生活樣式、及び精神的生活の滿足を充たす爲めに、眼に見えないところに非常の濫費を行つた。中流のギリシア市民が當り前の生活をしようとすると、一人について少くとも五六十人の奴隷が必要であつたといふことが記錄されてゐるが、かくの如きは全くエジプト、バビロンの帝王の浪費を、各市民が日常生活の上に、別の形で行つてゐたのである。

近代文明が同じ意味で生産階級の收穫を浪費してゐることは、社會組織が同一系統を追つてゐるものである限り、當然考へられることであるが、然し近代國家又は近代人は、エジプト乃至ギリシア、ローマ人のやうな浪費は出來ない。ローマの貴族のうちには、寢るから起きるまで、悉く他人の手を煩はすので、極端に筋が自動力を失つて、往來を歩いても、足許にある石を避けることが出來なくなつたといふやうな人間が出來上つたさうである。現代に於いても、貴族

又は資産家等の不生産的生活に變りはないが、まさかそんな貴族があるとは思へない。

この國家及び個人の階級的大濫費が、だんだん減却して行くといふことは、何を示してゐる現象であるかと云ふに、それは即ち征服的社會群の生活は、既に古代國家に於いて頂點に達したものであることを示してゐるのである。帝國主義の頂點はローマ帝國であつたが、そのローマ帝國すら征服的社會群の最大盛時ではなく、既にその末期であつたのである。その後の國家生活は、次第に征服的支配階級の掠奪的濫費を制限しつつ、近代國家にまで及んだのである。(日本の國家には、國土の小さい結果、その征服事業が小規模であつた爲め、未だ曾て世界的大帝國の行つたやうな、生産掠奪と大浪費とが行はれなかつたのである。殊に主權者の意識が社會的で、遂に有史以後に於いては、軍國的征服者として現はれたことの無かつたのは、他國に類の無い現象である。これは日本の原始的征服階級が、その權力を種族内の軍國貴族に奪はれた爲めに、禍をその軍國貴族の上に轉嫁することを得た爲めである。)

かやうに觀察して來ると、國家生活に於ける指導階級は、その生産の基礎が成り立たなくなることによつて崩壞するのである。生活の根本條件を離れて、享樂的浪費――建築から藝術・哲學等を含む――に進む結果、輜重がこれに續かないことになるのである。軍國貴族が倒れたのもその爲めであり、絶對王權が制限を受くるに至つたのもその爲めであり、近代的民衆國家が現に行き詰りつゝあるのもその爲めである、それは必ず生産的の壓迫が、社會群を生かす生活資料を缺乏させる結果となるからである。生活資料の缺乏ではなく、その資料を以つて指導者、即ち特權階級の享樂的生活を支へる組織が成り立たなくなるからである。軍備縮小が、軍國機關を支へる費用、即ち軍國的浪費の資源を得ることが出來ないところから起つたと同じやうに、指導者の特權的地位は、その享樂本位の建築・衣食・宗教・哲學を十分に享樂せしむる爲めの浪費が困難になつて、その階級的構造が崩れ出すのである。

右の現象は意識の上に如何に現はれるかと云ふに、それは生産的生活意識の恢復となつて現はれること、前に云つた革命期の還元的思想勃興と同一過程を取るのである。この意識は、然しながら、崩壊せんとする階級の意識的組み立てを打ち破ることは出來ない。言ひ換れば、生産的生活意識は文化哲學を打ち破ることは出來ない。なぜならば、階級的文化の産んだ生活意識は、もともと生産を離れた享樂的生活の意識であつて、その發生と發展とは全く生産階級の世界とは別な天地の所産である。本居宣長は『美知(ミチ)とはこの記（古事記）に味御路(ウマシミチ)と書ける如く、山路野路などの路(ミチ)にて……ただものに行く路ぞこれをおきては上ツ代に道といふものはなかりしぞかし』と云つてゐるが、丁度この思想が、生活の現實的の態度と、享樂階級に於ける軌範的意識の態度との差を、よく示してゐるものである『道』といふ儒教の道徳的意識は、本居の還元的思想によつて全體的に否定する外は無いのである。階級的生活意識の道徳・法律・宗教は、その階級の崩壊とともに崩れる外は無いのであつて、その階級の生活が成り立つてゐる限り、その道徳法律等も成り立つてゐるが、階級の生活が崩壊すれば、その道徳・法律等は社會的權威を失つて、骨董物として愛玩されるに止まるのである。

五　破壞及び建設の過程に於ける指導意識の變遷――現代的運動の特質

享樂階級の指導意識による組織が崩壊する時に、生産恢復の要求が起るのは、これを一つの社會生理學的現象と見ることが出來る。生活體を生理的に觀れば、營養の吸收によつて生理的の機關及びその機能を完全に維持し、全體の組織の靜態と動態とを圓滿に發展せしめて行くことであるが、病氣はこの生理的機關及び生理的機能に故障を生じ、營養が

組織を作り出す働きを失ふのである。この場合、健全な生活力を失はない身體ならば、直ちにそれ自體に恢復作用が起る。例へば消化機關が冒された時には、下痢又は嘔吐を起して、營養を妨害する汚雜物を排除する作用を、それ自身に働かさせる。それ自體がさういふ作用を起し得ない時には、藥物を投じてその作用を助ける。又呼吸機關が傷はれた時には、その損傷部を恢復させる爲めに、盛んな營養を攝らなければならない。孰れにしても生理體は、組織を作り出す物質の補給を受け、その機關の作用を維持する爲めに燃料を供給されなければならない。病弱な身體は、要するにその組織を維持するだけの燃料を吸收することの出來ないものである。そこで營養恢復が第一次的となる。藥も、運動も、場合によつては安靜も、皆この恢復の手續きである。

社會がその群生組織に於いて衰退する時にも亦、別な事情が働くのではなくて、その組織を維持する營養を吸收する作用の缺陷によるのである。それは第一に生產の組織の缺陷である。屢々言つた如く、社會的生存の組織制度は、その組織制度が如何に宏壯を極めても、これを基礎づける生產狀態の變化によつて必然に左右される。畢竟營養が第一次的なのである。帝國の崩壞も、封建國家の崩壞も、階級も崩壞も、凡べてそれを原因とする。故にその社會群が生活を存續させる爲めには、全體の組織の上にこの營養狀態を妨げる障碍として現はれてゐるものを排除しようとするのである。――下痢や嘔吐を起すやうに――これは卽ちその生活體の自存作用であつて、組織そのもののうちに障碍を排除する働きを起す力が現はれるのである。生活恢復の要求は卽ちこの作用に外ならない。

近代の初めに於いて世界的に大小國家の崩壞と再建設とが行はれ、舊帝國を破壞し、新國家を起し、民族主義の勃興となり、新國家主義の發展となり、所謂自主的國家の支配が世界的の大勢となつたが、それは畢竟その新たな組織によつて生產を恢復することに外ならなかつた。それまで極端に妨げられた各國間の交通が自由にされ、生產原料の使用が

自由となり、生産品の製作が苛刻の收斂を免かれ、奴隷勞働が緩和され、法律的保護が確實となり、人間的能力の伸張が自由となり……さういふ風に組織制度の上に一大變革が起つたのは、一體何を要求したのであるかといふに、哲學者の言ふやうに、人格的自由の要求であり、人間的解放といふ靈的要求であるといふ風にも解釋されやうが、これを社會群の生理的組織の歴史として觀ると、――つまり博物學的に觀ると――組織維持の運動である。身體に於いて起る組織維持の運動と同じやうに、それは營養組織の恢復運動である。即ち生産狀態の進化である。

この進化は、それ故に、最も顯著に生産手段の革命となつて現はれた。近代科學の發達は、畢竟その要求に對する人間的能力の發動である。汽車・汽船の發明は、要するに物資の移動によつて生産を助ける作用に外ならない。電信・電話その他交通の科學が異常の發達を遂げたのは、丁度フランス革命の憲法が、交通の自由を保障した精神と同じものの現はれである。その他一切の科學の社會的原因は畢竟そこにあつたのであつて、一時世界が生産方法の行き詰りによつて人間はその生活を脅かされると考へたマルサス式杞憂を、この科學が一掃したのであつた。それは社會組織の中に、行き詰つた營養作用を恢復させる自動的の働きが起つたことなのである。

かくの如き場合に於いて、所謂指導意識が働き出す過程を見ると、初めに云つた如く、二つの指導原理――生活的即ち本質的社會作用としての指導意識と、消費的即ち享樂的階級組織の指導意識――の岐れるところが明かに看取される。

支那の戰國時代に、老莊の衝動的、自然主義的意識が起つたのも、畢竟軍國生活が作り上げた指導意識の非生産的特質は、それが如何に完成しても支那民族の營養作用に何等の指導的價値を有つことの出來ない爲めに、それを破壞する意識作用として起つたのである。かやうな意識的破壞作用は、その基調が如何に衝動的であり、自然的であり、生産的

であつても、畢竟意識の世界に棲む階級、即ち當時の貴族的知識階級の傳統破壞の動作たるに止まつてゐて、ちつとも建設的ではない。それはつまり今日の日本やこの間までのロシアの貴族社會に、甚だ建設的でない破壞思想が起つたのと同じで、階級自體の破壞作用である。卽ち所謂世紀末的現象である。ところが實際生活を恢復せしむるのは、さういふ意識そのものではなく、その意識の基調をなす生活作用を無意識に働き出してゐる多數生産者その人である。で、近代の世界的生活恢復に於いても、所謂『革命』思想等は、畢竟世紀末的破壞作用であつて、一向建設的ではなかつた。そしてそれはそれでよいのであつた。然し實際に生活を恢復したものは、さういふ意識を産み出した階級ではなく、その階級以外に埋もれてゐた生産者であつた。彼等は意識に於いては甚だ發達しない生物であるが、社會群の生活を事實の上で恢復すべく働き出し、そこに次の時代を建設したのであつた。

近代の哲學は畢竟現實の生活者が建設した新組織の意識を組立てる役割を勤めたものであつて、自由主義・人格主義等個人的生活の解放は實は哲學的現象である前に、生産組織の現象であつたのである。然しその新しい建設に伴ふ生活意識は、指導原理として必ず舊組織の指導原理と食ひ違ふものである。近代の始めに、陸上の交通が開け、航海が擴張されるに從つて國家的接觸が頻繁となり、今までのやうに國家が接觸しさへすれば鬪爭するといふやうな非群生的狀態にあつては生存が困難になるといふ時に、グロチウスの國際法の思想が生れたのである。これは確かに新しい狀態が新たな指導原理を産んだのである。而してこの新たな原理は舊國家の指導原理と食ひ違つて、グロチウスは迫害を免かれなかつた。もつと近代的な破壞並びに建設に伴ふ社會的意識が舊組織の意識と食ひ違つて、新建設の指導者が常に現狀維持の階級から迫害されるのは當然であるが、その意識の世紀末的でないもの、卽ちより科學的なものは、必ず生産條件の基礎の上に立つのである。

グロチウスの思想は交通の發展に伴つた一つの意識であつたが、それと同じやうな建設的、組織的意識——組織制度の進化に役立つ意識——は必ず生産關係を基調とする意識である。これは革命思想が單なる貴族的、世紀末的、哲學的、享樂的破壞思想でなければならないやうに考へてゐる人々の深く考慮しなければならない點である。それ等の所謂『革命思想』は、要するに享樂階級の內に發生した腐敗菌であつて、それによつて階級そのものを崩壞せしむるには最も有力なものであるが、要するに次の時代を建設する生活力を有つたものではなく、唯破壞力として働く一種の藥物である。而かもこの藥物はそれ自體が享樂階級の所産である爲めに、その思想、その生活それ自體が自己滿足的で、自己發揚的で、頹廢的で、畢竟それが破壞しやうとする階級的思想及び生活の特徵を、同じやうに具備してゐる性質のものである。故にそれらの破壞的意識は、それ自身では生産恢復の指導意識といふことは出來ない。之に反して前に云つた、より科學的な、より生活的な意識は、それ自體生活の根本條件に役立つ生活意識として起つたものであつて、それはたとひ科學的に不完全であり、その建設的思想の或る部分に空想を有つてゐるにしろ、そこに享樂階級の特徵たる自己發揚、自己滿足、痛快慾、超人意識……そんなものを有つてはゐない。そして遂に社會群の生活組織の進化の上に働き出すところの意識目的として役立つ性質のものである。例へばクロポトキンの思想にしろ、その正反對のマルクスの思想にしろ、それは丁度交通發達とグロチウスの思想とが相互關係を有ち、舊國家・舊寺院崩壞とダアウヰン、スペンサアの思想が相互關係を有ち、舊經濟組織の崩壞及び十八九世紀經濟組織の建設とアダム・スミス、ミル等の思想が相互關係を有つやうに、生活の組織進化に即した意識作用である。決して世紀末的革命思想のやうに、唯破壞的痛快味や滅亡の感傷性やを發揮してゐるに止まるものではない

生活恢復の意識が指導原理として働くことが、組織の進化に缺くべからざるものであるとすると、現代に於ける運動の主潮が生産的であることは、極めて樂觀すべき現象である。而かもこの現代的運動の最も重大な特徴は、十八九世紀のそれに對照して、明かにそれを見定めることが出來る。

十八九世紀の生活恢復の目的は、生産手段の發見であつた。科學的知識はこの生産方法に於いて革命的の變化を持ち來たし、同一の人間的勞力が何十倍何百倍の生産を持ち來す結果となり、マルサスの心配を杞憂に終らしめたのである。ところが現代のそれは、この發達した生産手段の爲めに出來上つた社會組織が多數人の生活を壓迫したことに對する恢復の要求であつて、今度は生産から分配に移つたのであると經濟學者の言ふ通り、近代的生産手段の組織に對する要求である。即ち十八九世紀のそれが新たに産み出した享樂階級の社會的地位に對する進擊である。今までの社會革命的意識に表はれなかつた程度と性質とに於いて、生産階級の意識が現代の社會意識として表はれて來たのである。

今日までの組織の進化は、常に生産を生活の基礎とする階級の壓迫によつて崩れながら、新たな建設は依然として生産階級以外の享樂階級の管理に歸し、その階級の意識が指導原理となることに於いて變りがなかつた。然るに現代のそれは、この生産階級の生活意識が指導原理として作用するのであつて、今までのそれと根柢的に異つた性質を有つ。今までの近代的組織變化を歴史的順序で云へば、封建貴族に對する國民運動が第一であり、その次ぎは國民運動の指導者たる貴族階級の支配に市民階級が代つたのであるが、これ等は皆悉く生産階級を奴隷的地位に置く組織の上に立つた階級の要求であつた。然るに最後の現代のそれは、生産階級が市民階級のそれに代る運動である。これを要するに、今までの組織變化は、引き括めて享樂階級の建設であつたが、現代のそれだけが生産階級の建設なのである。

前にも享樂階級の生産濫費の過程は、文明の進むに從つて制限を受け、エジプト、バビロンのやうな浪費は、今日の

階級生活では絶對に難くしなつたと云つたが、その進化過程は即ち遂に生産階級の指導意識を社會的生存の本位としなければならない傾向にまで進んだのである。

それは即ち奇妙にも、社會意識が社會群の接觸による闘爭を本位とするそれから、遂に社會それ自體の生存維持の生産的生活動作を本位とするそれに逆轉しようとしてゐるのである。それは人間の生活に於いて第一次的のものは、原始社會に於いて重大であつたが如く、文明社會に於いても重大であることの當然の結果である。數千年の人間の歴史は、この第一次的條件を閑却して、壯麗なる文化を造り上げたが、その享樂本位の時代は、漸く經過しつつあるのである。

社會組織に於ける指導原理がかやうな進化過程を取りつつあるに當つては、國家的にも社會的にも、この生産者本位の本質的社會的な指導意識に基く組織制度の更新に向つて努力することが社會的生存維持の第一次的肝要である。それには享樂本位の組織の傳統的哲學よりは、先づ生産本位の組織の科學に向つて進むことが、最も生活的の指導意識でなければならない。傳統的指導意識が、この最も肝要なものを無視し壓迫して、依然として享樂階級維持の意識目的によつて進むことの如何に危險であるかは、特に指摘するまでもないことである。

勞農ロシヤ新民法を中心として

東大教授　高柳賢三

一、はしがき

私は今年の春靜養の爲めに數週間を伊豆の熱海ホテルで過した。滯在の目的は時節柄世間で評判のヨツフェ氏に會見するといふのでもなく、又之を機會にロシヤを研究しようと云ふのでもない。ロシヤには――しかも極東の一角に――僅か數日しか滯在した事のない自分には、又ロシヤ語に就て充分の素養を缺く自分には、ロシヤを研究すべき資格の大部分を缺いて居るのであるから、ロシヤを研究せんとする熱も自ら薄からざるを得ない次第である。

併し私の熱海ホテル滯在の目的は純靜養と云ふ事にあつたのであるけれど長閑なる春の一日は單に散策と讀書とに其全部を費すには餘りに長い。ホテルの讀書室で新聞に目を曝して居る間に、私はヨツフェ君の書記X君や、最近モスカウから勞農政府の用命を帶びて着いたと云ふ評判のY君などゝ世間話を語り合ふ事になつた。初めの中は月並の文學だとか旅行だとかの話をして居つたのみであるが漸次「危險地帶」の領域に屬する政治や經濟や外交の話までもする樣になつた。マルクスの唯物史觀の熱烈なる信者であり、「資本論」をバイブルの樣に金科玉條として奉戴するY君は、唯物史觀を、少くもエンゲルスが提供した形では、唯一の眞理として信仰出來ず、又「資本論」も、一名著であると考へる以上に尊奉する事の出來ない自分を以て濟度す可らざる迷想者であると考へた樣であつた。そして私達の議論は毎日二三時間は繼續した。Y氏の議論は結局自分を屈服せしむるに至らなかつたけれど、その間に色々な、自分の知らなかつたロシヤの內情に關するデイテールスを聞かして貰つたので大に裨益する處があつた。併し、Y君は法律家ではなかつたためロシヤの法律狀態には餘り精通しては居られなかつたので此方面に於ての、私の質問には充分に解答を與へて呉れなかつた。今年の初めから施行されたと傳へられて居るロシヤ新民法典は私

の詳細に知らんと欲する所であつたにかゝはらず、彼は只之に關する二三の材料を供給して呉れ得たに過ぎなかつた。もう一人のX君は親切にもモスカウから新民法典の條文を取寄せて呉れる樣に自分に約束した。併し本篇を執筆する際にテキストは未だ私の机上に屆いて居らない。

ロシヤの國情を知らない自分、ロシヤ語の充分に分らない自分、ロシヤ新民法のテキストを完全な形で持たない自分には勿論ロシヤ新民法の詳細に就て之を論議する資格は全然ない。併し斷片的に耳にしたり、目にしたりした處に就いて自ら法律學研究者として雜多な感想はある。私は是等の感想をY君やX君などに話した、勿論忽ちにして多大の反對に出會つた。私がロシヤの實狀を知らないからそう云ふ誤つた感想を懷くのだと云つた。成程或はこの方が御尤かも知れぬ。併し感想は語るもの自らの表現であつて事實の陳述ではない。その意味に於て、感想中にも見方に依て幾分の眞理を認めても宜からう。私は私の標題を「勞農ロシヤ新民法に就て」と云はずして、「勞農ロシヤ新民法を中心として」とした。私の說かんとするのは勞農ロシヤ新民法そのものの詳細なる解說ではなくして、むしろ、之を中心とする私の感想である。

二、社會法學とロシヤ民法典

十九世紀初頭に於ける歐米の法律學者が、若しも千九百二十三年勞農ロシヤの新民法々典を繙いたと假定すれば、彼は驚異の眼を見張つて驚いたであらう。彼等は彼等が神聖不可侵であると考へた私人所有權や契約自由の原則が内容の確定せない國家權力のために常に脅威を受けて居る點を指摘してその非合理、專制的なるに憤らざるを得ないであらう。それは勞農ロシヤ新民法々典の標榜する法律理想が彼等の懷いて居つた法律理想とある意味で正反對の側に立つて居るからである。

併し、二十世紀の歐米並に我國の法律學者が此同じ民法々典を繙いた時に彼は決して驚異の眼を見張らないであらう。或者は彼等の平常說いて居た所が炳として法文の形となつて表現せられて居るのを見て快哉を叫ぶであらう。或者はこれは少し薬が利き過ぎて居ると歎聲を洩らすであらう。併しながら、ロシヤ新民法々典の内容は二十世紀の多くの法律家の眼には、決して驚異の感を起さしむるの價値なきものである事丈は確かである。時勢はそれ程までに動いた。思潮はそれ程までに變つて居る。良かれ、惡かれ。

言ふまでもなく、十九世紀初頭からの民法思潮の基調は個人主

義である、自由主義である。そしてその背後には近代的精神である自我の覺醒がある。フランス革命のモットーとして「自由、平等、友愛」が高唱せられた、併し十九世紀初期に出來上つて漸次各國で模範とせられたフランス民法々典の基調は「友愛」又は「平等」であると云ふよりも一層「自由」であると稱する事を得よう。又新大陸に國を爲した開拓者國家(パイオニヤ ステート)たるアメリカが漸次發達させた判例私法も亦基調を「個人の自由」に置いて居る樣である。

勿論「個人の自由」と云ふ概念も、之を哲理的に深めて行けば決して二十世紀の法律思潮と矛盾撞着するものとは考へられない。それはカントやヘーゲルが解いた樣に「自由」を解釋すれば例へば近代法學者の盛に唱道する「社會連帶」思想と相反する性質のものであとは云へまい。或は「社會連帶」論者の所説よりは一層の深みのある見方である樣にも思はれる。併し現實の社會は哲學者の考へた理想的形相に於ては流轉しなかつた。十九世紀の民法の基調たる自由は十九世紀民法の他の特質である財物偏重主義と結び就いた。此の連結を觀過しては十九世紀民法の特質は正當に之を理解する事は出來まい、又十九世紀末からの「社會の發見」とか「協調主義」とか「社會連帶主義」とかの反動的傾向をも之を正當に理解する事は出來まい。

若しも自由の概念が財産と結び付かずに一層多く「人格權」と結び付いたならば、事態は全く變つて居つたであらう。フランス民法は財産權に就て詳細に規定を置いて居るに反し人格權とか勞働權とか云ふ事になると僅かしか規定を置いて居ない。獨乙民法の編別法も財産偏長の渦の中に卷かれて居る。又英米の判例法に就て見ても人格權は主として財産權の名の下に、間接に附隨的に保護せられて居つたに過ぎない。これは十九世紀の私法が如何に財産に重きを置いて居つたかを示すものに非ずして何であらう。

個人の自由が私有財産の保護と結び付いて出來上つたのが個人所有權不可侵の原則であり、契約自由の原則である。そして「自由」の名の下に、所有權保護、契約自由の保護の美名の下に、幾多の惡立法と惡判例とが下されたかは既に周知の事實で今更此所に詳説するまでもあるまい。

そして國に依て幾分づゝ異るにせよ、先づ十九世紀の中頃から個人主義自由主義の立法に對する反動として俗に「法律の社會化」とか「個人本位から社會本位へ」とか「個人主義から集團主義へ」とか「私法の公法化」とか「個人主義法學から社會主義法學へ」とか一寸アトラクテイヴな標語を冠して説明される現象が各國に現はれて來た。是等の現象も今此所に長々と説

く事はせまい。ドイツとスウイスに就ては未完ながらヘーデマンの「十九世紀に於ける民法の進化」（Hedemann. Die Fortschritte des Zivilrecht im XIX ten Jahrhundert）がある。フランスに就てはデユギーの「私法變遷論」（Duguit, Transformations du droit privé）がある。イギリスに就てはダイシーの「十九世紀英國に於る法律と輿論との關係」（Dicey, The Relation between Law and Public Opinion in England during the Nineteenth Century）がある、アメリカに就てはパウンド氏の「コンモンローの精神」（Pound, Spirit of the Common Law）の內に幾分その說述を發見する事が出來る。今更事々しく述べ立てる必要もあるまい。

之を要するに現代一般の法律思潮は、良かれ惡かれ、社會から出立して居る。個人から立出して居ない。そして「所有權」でも「契約自由」でも社會的價値判斷の上から之を活殺する事自由自在である。勿論人に依て價値判斷の結果は異つて居る。併し社會と云ふ「化物」を何等かの形式で認めて所謂個人の自由を批判して居るのは概ねその規を一にして居る。その當否に就ては大に議論したい事はある。然しそれは暫く預つて置いて、兎に角思想の傾向が個人を出立點としないで社會を出立點とするのが泰西でも日本でも現代の傾向の樣である。現代の流行思想である樣である。

かゝる思潮に養はれた現代の法律家にとつて勞農ロシヤの新民法典は少しも驚くに足らない。その規定の詳細に付て或は之を是とし或は之を非とすることはあらう。それは十人十種の各人の價値判斷に依つて定まるのであるからである。併し價値判斷の基準に於ては勞農ロシヤ新民法の採用して居る基準と變つた處はない。從て、千九百二十三年勞農ロシヤ民法典は何等二十世紀の法律家を驚かすに足るものではないのである。

三、ロシヤ民法典編纂までの經過

ロシヤ革命前のロシヤ帝國――フインランド、ボルテイツク沿海三州、ポーランド、ヘツサラビア、チエルニゴヴ、ポルタワ等を除き――に施行せられて居つた民法々典は、十六卷から成る所謂 Swod Sakonow（法律全典）の一部として千八百三十三年勅令として發布され千八百三十五年一月一日から實施せらるゝに到つたものであつた。その後屢々改正はあつたけれど右の民法々典が基礎となつて居つた樣である。

右の民法典は、十九世紀に於ける諸國の立法と共に、フランス民法典の影響の下に制定せられたものであつた。處が、其後ドイツの法律學が漸次盛になるに及んで、ロシヤの民法學者も

學說は當然主としてドイツ法學の影響の下に立つ樣になつた。又千八百八十二年に民法典編纂委員會が設置せられて民法典草案が千九百五年には出來上つた(所謂第二草案)、此草案は明かに獨逸民法典及び獨乙法學の影響の下に立つて居る。

處が、千九百十七年秋ロシヤ革命が完成すると共に革命前の私法は全部廢止せらて了つた。千八百十八年七月十日第五全露ソヴイエツト會議で採用になつたロシヤ社會主義ソヴイエツト共和國憲法第三條で土地、森林、鑛山、鐵道、その他の生産及交通機關が國有と宣言せられ、千九百十八年の相續權廢止令で相續權が廢止せられ千九百十八年九月十六日の「身分登記婚姻親子關係及び後見に關する法典」で舊來の親族法を廢止して此點に就て丈新しい立法を試みたのであつた。併しながら、私有財産制の廢止が私人の有する總ての財貨に及んだのでない事は言ふを俟たない。勿論必要上――又は時に必要以上に――私人の消費物の無償徵發が盛に行はれて居つた樣であるから、私人所有權の安固は――その認められた狹い範圍に於ても――頗る薄弱なものであつたに違ひない。又契約法と云ふ近代社會に無くてならない法律も不明であつたらしい。即ち物權法及債權法と云ふ財産に關する重要なる法規の一體は殆んどなかつたものと見る可きであらう。そして人民裁判所は法規の無い場合に舊法を參照する事を禁止せられて居つて、只社會主義的法律意識を基礎として(Auf Grund ihres sozialistischen Rechtsbewusstseins)判決を下さなければならないのであつたらうから、多くの場合所謂「法律に依らざる裁判」(Justice Without Law)が行はれて居つたのであらう。その實際が「大岡裁判」であつたか、將た又アラビヤ物語にある樣な「暴君裁判」であつたか、それは知るべき何等の正確な材料を私は持たない。

右の樣な私人所有權の不安狀態は、ソヴイエツト政府の說明者をして云はしむれば、何等社會主義的政策の當然の結果ではなくして、革命完成後の內外の狀勢が個人の權利を犧牲にして社會全體――社會主義國家其者の成立存在を可能ならしめんが爲めの變態的狀態に過ぎざるものであるとする「軍事的國家」に伴ふ當然の結果に過ぎざるものであるとする。それは兎に角として千九百二十一年新經濟政策採用の前後からして私人所有權保護の傾向がある程度まで、現はれ出して來た樣である。それは大體に於て左の如くである。

(一)千九百二十年九月二十三日の布告でソヴイエツト政府が外國人に與へたコンセツシヨンに關して、その契約期間コンセツシヨンの目的物が、徵發、沒收を受くる事なき事、とそれから又長期間に涉つてロシヤの富源を開拓するに必要な諸種の保

障を與へて居る。これは外國から資本と技術者とを輸入してロシヤの回復を企圖せんとした政策の現れであらう。

(二)企業の國有化に就ても新經濟政策採用以來之を中止するに至つた。卽ち爾來、産業及び商業的企業の國有を中止すべき事が、立法府に依て決定せられ、同時に人民最高經濟委員會は地方官憲に對し千九百十八年乃至千九百二十年間の諸布告に依つて國有とすべかりし産業的施設でも、事實上國家機關の占有に歸しなかつたものは、前所有者に屬し、前所有者は自由に之を運轉する事を得る旨を訓示した。それから又、千九百十九年乃至千九百二十年の間に國有となつた産業及商業的諸事業も到底全部を政府でやつて行く事が出來ぬ事を悟り、國家自ら經營するのは國家に必要缺くべからざる少數の大企業に限り、その殘部に就ては、或は之を企業自身の内部的自治に委して、之を商業的基礎の上に置くか、或は又、前所有者又は第三者に賃貸する事にした。そして是等の賃貸契約は人民裁判所の判決なくしては之を取消す事を得ない事になつた。更に千九百二十一年十二月十日には全露執行委員會は、國有となつた工場及企業で活動を中止して居つたもの、又は其活動が不適當である場合には前所有者に於て之を取戻す權利がある事となした。

(三)私人所有物の徵發に就ては、既に千九百二十一年四月十六日の布告で徵發沒收權に明確且つ狭少な限界を附し、徵發沒收權を行ひ得る機關及手續を確定し、更に人民委員から數多の布告を發して、益々徵發沒收權を制限し、又人民司法委員會は裁判所その他地方の司法機關に訓令を發して、是等の諸布告を執行する事に努めて居つた。

千九百二十一年十一月十七日の布告で人民委員會は地方官憲に依る徵發沒收の權を全廢し、下の如き規定を置いた。

(イ)徵發は——非常手段として——最高中央權力卽ち人民委員會に附屬した勞働及防衛委員會に依りてのみ之を行ふ事を得る。

(ロ)徵發せらるゝ財物の所有者は徵發當時の通常の市價で一箇月以内に對價の支拂を受ける。

(ハ)徵發物の徵發及評價は一定の規則に從てのみ行ひ得る。

(ニ)對價の支拂なき徵發は犯罪に對する刑罰としての外許されない。

(四)更に又新經濟政策の實現として産業勞働及手工業勞働の自由を許し、私取引の自由を認め、又貴金屬及金貨の占有及使用を認め、金ルーブルに依る取引を許すに至つた。

ロシヤ新民法々典が編纂せらるゝに至つたのは以上の樣な私人所有權及私人取引を漸次保護するに至つた政策の延長であ

り、その完成であつたと云へよう。

千九百二十二年五月二十二日中央執行委員會は「ロシヤ社會主義聯合ソヴイエツト共和國に依つて認められ、その法律に依り保障せられ、その裁判所に依て保護される土地財産法に就て」と云ふ布告で中央執行委員會及人民委員會に新民法典の起草を委託し、その完成と共に草案を中央執行委員會に呈出する事を命じた。そして半年位で法典編纂事業が完成し、千九百二十二年十一月十二日の「イスヴエスティヤ」(官報)第二百六號で公布され本年の一月一日には既に施行せらるゝに至つた。由來法典編纂事業は長年月を要するものであつた。獨逸民法の如きは三十年もかゝつたし、急造で有名な我民法でも尚ほ數年を要した。それが六ケ月と云ふ短日月の間に起草、實施、と云ふ事に至つたのは驚くべき速さである。起草委員の有能なる爲めかそれとも又革命法に通例である粗品濫造の一例であらうか？

四、法典編纂史から見たロシヤ民法典

今まで法典編纂を企てた國には二種あるものと見る事が出來る。

第一は其國の法律と法律學が充分に發達し切り圓熟の結果として簡略な法典と云ふ形を採るに到る場合である。此場合には法典は其國の過去に於ける法律文明の結晶であると見る事が出來よう。ジヤスティニヤンの法典、フランスの民法典、獨乙の民法典、オーストラリヤ民法典、スウイスの民法典等はその例であると見るべきであらう。

第二は其國家の法律は充分發達して居つたのであるが社會事情の激變の爲めに全然古來の法律と異つた法律を要求する樣になる場合に法典が編纂せらるゝので、社會事情の激變と云ふのは從來では封建的社會又は農業的社會から產業的及商業的社會への變遷であつた樣である。此意味に於ける法典編纂は千八百三十三年ロシヤの「法律全典」、士耳古の法典、英印法典(1861—1862)それから我國の法典の如きは即ち此部に屬するものであると見る事が出來る。

勞農ロシヤの新民法典は、寧ろ第二種の部類に屬するものと斷ずべきものであらう。只從來に於ける第二種の法典編纂は先に述べた樣に、產業的及商業的社會への激變に伴ふ現象であつたのであるけれども、勞農ロシヤの新民法々典は共產的社會(緩和されては居るが)への激變に伴つて居る點に於て法典史上新奇なる現象として頗る趣味あるものである。私はかう云つた純學術的趣味の上からして、ロシヤ新民法編纂の詳細なる研究をして見たいのであるけれど今はその材料もなくして之を爲す事

が出來ない事を遺憾とすものである。

五、ロシヤ民法典の體裁

勞農ロシヤ新民法典は僅に四百三十五條から成つて居る。近代諸國の民法々典に比して、條文の數の少い事に氣附くのである。假令親族法を包含せぬと云ふ事實があるにせよ、又勞働法が殊別法に移されて居ると云ふ事實があるにせよ、著しく少い事は注目に値する。條文の少いのは多くの法律上の問題に就いて解決を見合し、追々判例などで定まつて行くのを待つと云ふ主旨であるかどうか、後に單行法で補充すると云ふ主旨であるか、その邊の消息は未だテキストを手に入れる事の出來ない私には判斷し兼ねるのである。

法典は四大部門から成る。總則、物權法、債權法、及び相續法がこれである。親族法は採用せられなかつたので、千九百十八年九月十六日の「身分登記、婚姻、親子關係、及後見に關する法典」がその儘行はれて居る事になつて居る

法典編纂の方式は獨乙の學者がローマ法から發展せしめたパンデクテン式中のザクセン式と云ふ行き方で、我國の民法々典の方式と同樣である。只右に述べた樣に親族法が省略されてある丈である。獨乙民法が債權法、物權法と云ふ順序で行つて居るのは所謂バイエルン式であるがロシヤの新民法典は物權法債權法と云ふ順序でドイツ民法の例に從はなかつた。

ドイツ民法の編別法に就ては嘗て社會主義を信奉するオーストリヤの法律家アントン・メンガー氏が其著「民法々典と無產階級」の中で痛烈な批評を下したのを想起せしむる。彼は此點に就て下の樣な事を述べて居る。

『純粹に事物の性質に從ふ民法典であるならば先づ第一に婚姻親子關係及後見を包含する親族法が規定せられねばならない。それは、親族法は全社會の基礎となる法律制度であつて、特殊の階級の爲めの特權の設定を目的とするのでなく、有產者と無產者とを問はず、すべての者が均等に關與する事を許す法律制度であるからである。

親族法に次いで、自然の順序として、有產者と無產者との對立を成立せしむる法律制度、即ち國民の大多數は單に消極的利益を有する法律的制度(財產法)が來るべきである。財產法では先づ所有權及び所有權類似の諸物權を規定すべきである(物權法)。そしてその後で初めて債務關係即ち、所有權又は個々の所有權中に包含する權能の取得と云ふ目的を專心遂行せんとする――少數の例外を除いて――債務關係が來る可きである。私法體系の終結は當然相續法が來る可きである、蓋し相續法は社會

の"Enterbten"（無産者）にとつて何等の意義を有せざる許りでなく有産者、教養ある者の間に於ても、割合に狹い範圍の人達丈が關與するに過ぎぬからである。

ドイツ法律學に久しい以前から行はれて居る系統は、以上の社會的見地で定まる排列とは異つて居るので物權法債權法に細分せらるゝ財産法は親族法に先つて置かれて居る。此のドイツ法學の特性は外國の立法及法律學では模倣せられなかつたのであるが、社會の自然的基礎が所有權の利益のために如何に顚倒せられて居るかと云ふ外部要因を示して居るので特に顯著である。此珍妙な本末轉倒の立場からして辯護される見方は親族法は相續法と密接な關係に立ち、兩者は所謂「連續私法」を構成する、卽ち人間の時間的連續と財産の推移とを規律する私法體係の部分だと云ふ考である。

債務關係法（債權法）、物權法、親族法、相續法と云ふ順序で規定を置いてる獨乙民法草案（卽ち現今民法）は自然的排列から最も離れたものである。債務關係はその法律上及び經濟上の目的は殆んど例外なく、所有權を取得し保有し、確保するに存するにかゝはらず、先づ債務關係に就て規定されて居る。次に所有權その他の物權、そして第三に於て初めて親族法を規定して居る。故に後に述ぶべき他の多くの特質と共に民法草案は商人に對する顧慮、然のみならず所有者に對する顧慮が重きをなし、取引上の利益が支配する時代の産物である。若し起草者がその草案に於て相續法を第一位に置いたならば首尾顚倒は完全無缺であつたらう。』

以上の批評は隨分酷烈で特に最後の部分は皮肉たつぷりな書き方である。我民法典で親族法を第三位に置いたのは矢張りメンガー氏のお叱りを受けるのであらう。併し物權を債權の先きに置いたのはメンガー氏の「外國に於ては模倣せられなかつた」一例として氏の意を得たものであらう。ロシヤ新民法典では親族法を何處に置く積りであつたか知れないが民法々典を規定するずつと前の千九百十八年に既に詳細な規定を置いたのは、メンガー君地下に大喜びであらう。又物權法を債權法の前に置いたのもメンガー氏の賞讃を博する事であらう。ロシヤの法典起草者が、編別に付てかゝる意識を以てやつたかどうか、それは今の處では正確に知る可き何等の材料が無い。然しその結果に於ては社會主義法學者アントン・メンガー氏の意見に合致したものと見るべきである。

六、私權の相對性

ロシヤ新民法々典の第一條には「私權は法律に依て保護せら

る。但し私權が其社會經濟的意義に反して實現せらるゝ場合は此限に非ず」とある。

右の條文はロシヤ民法が創定した新奇な法律上の原則でも何でもない。實は近代法學に於けるトゥルイズムを言明したに過ぎない。

勿論、之れを十九世紀初頭に旺盛であつた「個人權利の神聖不可侵」と云ふ思想とは正に正反對に立つものと云ふ事が出來よう、併しながら、近代の法學者で「私權の絕體不可侵性」を信ずるものは殆んど無いと云ふて宜しい。「私權の相對性」は近代法學の通説である。又近代法に於ける諸種の法律現象に內在する指導原則である。

ローマ法では私權の絕體性が認められて居ると考へる人がある樣であるけれども自然法の影響の强かつた所謂クラシカルピリオッドでも、例へば他人を害する目的で土地を使用する場合にまでも私權の行使が許されるものであるとは必ずしも考られて居らなかつた事はディゲスタのテキストから明かである樣である。

そして發達したローマ法の「他人を害する目的で權利を行使してはならぬ」と云ふ思想はドイツの學者が十九世紀に利用して居つた。そしてドイツ民法第二百二十六條には「權利の行使は他人を害するの目的のみを以て之を爲す事を許さず」と云ふ規定があり、又同法第八百二十六條には「善良の風俗に反した行爲に依り、故意に他人に損害を生ぜしめた者は、損害賠償の責に任ず」べき旨を規定して居る。瑞西民法第二條にも「各人は其の權利の行使義務の履行に就て誠實なる可し、權利の明白なる濫用は法律の保護を受くる事なし」とある。フランスでも古くは「權利の行使の絕體性」が考へられて居つた。そしてフランス民法にはドイツや瑞西の樣な條文はないけれど判例と學說とで所謂「權利濫用」(l'abus du droit)の法理が發達するに至つた。英米でも漸次異つた形で同樣な法律思想が發達しつゝある。我國の學說判例も漸次同樣の理論を發達せしめつゝある。

然し、ドイツ民法でも瑞西民法でも「權利行使の道德性」の色彩が多い。それはクラシカルピリオッドのローマ法と同樣である。十八世紀に於ける「法律の道德化」と云ふ傾向の一の傳統的繼續であらう。然しながら、最近に於ては更に一步を進めて「動機」の問題を基準としないで權利行使の「客觀的價値」と云ふ方から權利行使の限界を定めんとする傾向が强い。特に「權利の不行使」までも禁ずると云ふ立法も屢々企てられて居る位なのである。

ロシヤ新民法が私權が其社會經濟的意義に反して行使せらる

る場合は此限に非ず」としたのは「道義的基準」を取らずして「社會的基準」を採用した點に於ては最近の法律思潮に合致して居るものと云へよう。

法律關係は嘗ては「救濟方法」と云ふ座標から眺められた事もある。「義務」と云ふ座標から眺められた事もある。そして十九世紀の法律家は「權利」と云ふ座標からして之を眺めた。そして法律を「權利」の學問であると考へた。此思想に對する反動として二つの反對の思想が現れて來て居る。一つた權利の背後にある欲求（利益）に着眼し、欲求の保護調節と云ふ方面から權利を認定し之に限界を附せんとする思想である。座標は「權利」から「欲求」に移つて居る。アメリカのロスコー、パウンド氏は現在に於ける此派の有力な代表者である。之に反し他は權利と云ふ觀念其者を否定し「社會的奉仕」と云ふ立場から法律に對せんとする。「社會連帶」と云ふ立場から新に法律構成を試みんとする。その實際的歸結は義務本位への復歸（異つた衣粧の下に）であらう。フランスのレオン・デュギーが現今其最も有力なる代表者である。

ロシヤ新民法第一條は此點から着眼すれば法律構成は少くもその形式に於いて「權利」を座標として居る點に於て、假令「權利行使の社會經濟性」と云ふ大斧を振つて制限して居るにかゝはらず、十九世紀の形骸を脱しては居らない。そこには形式上何等のオリジナリティが無い。且つ「個人」と「社會」との對立と云ふ古いデュアリスティックな考を其儘現はして居る。

七、物權法殊に所有權問題

近代の所謂社會問題に關連して最も重大なる法律問題は云ふまでもなく、個人所有權の問題である。共産主義的な勞農ロシヤに於て此問題を如何に解決したか、所謂新經濟政策なるものは如何なる程度まで共産主義を緩和して居るのであるか。これは吾々法律研究者の正に知らんとする趣味多き問題である。此點に就ては未だ詳細に且つ正確には之を知る事は出來ないのであるけれども、知り得たる斷片的報道を綜合すると共産主義を破壞しうる程度には個人所有權は認められて居らない樣である。此點に於ては個人所有權を原則とし、集團所有權を例外とする近代國家の私法とは未だ可成りに距離が遠い樣に見えるのである。

個人所有權の客體となる「物」の範圍に就ても總則篇第二十一條に「土地は國家の所有に屬して私的取引の目的物となるを得ず土地の占有は使用權に付てのみ之を許容す」とあり第二十二條には「國有及び市有に歸したる企業、其設備、鐵道及其輪

轉材料、國有に歸したる船舶並に國有及市有に屬したる建築物は私取引を禁止せられたるものとす云々」とあり第二十三條には「武器、爆發物、軍需品、航空機及無線電信機、廢棄せられたる有價證券、法定の制限を超えたる酒類飲料、及劇藥は私取引を禁止せられたるものとす」とあるのであるからして、土地の全部と動產中廣い範圍の財貨は所謂不融通物――res extra commercium――の範圍に入れられて居るので個人所有權の客體とならないのである。

又物權編第五十二條には所有權を分つて國家所有權（國有及市有）組合（コーペラティヴ）所有權、及び私人所有權の觀念を區別して居る。その內の私人所有權の客體となる可きものを列擧的に制限を置いて居る。即ち、第五十四條に依ると(1)建物（國家又は公共團體のために使用せらるゝ以外）(2)一定の人員を超えざる勞働者使用人を有する商事的及工業的企業 (3)生產用器具機械 (4)通貨、有價證券、その他金銀貨幣、外國證券等の有價品、(5)家庭又は個人の使用品、(6)法律に依り販賣を禁ぜざる商品及び取引の目的物となる總ての財產がこれである。

又私人所有權保護の範圍に就ては第五十八條で「所有者は法定の範圍で所有物の占有利用及處分を爲す事を得」とし且つ第五十九條で「所有者は其所有權を回復し、侵害を禁止する事を得る」旨を規定し第七十條で「沒收は法律に規定せられた場合及手續に依り刑罰としてのみ之を爲す事を得」として居る。是等の規定の形式は他國の民法典に於ると同樣であるが第四十四條で「訴權は三ケ年の期間滿了後消滅す但法律に異りたる時効期間の定めある時は此限に非ず」として所謂時効期間の短縮を行つた事や、第六十條で「所有者は其財產を紛失し若くは盜難に依り奪れたるときに限り所有者より直接に其財產を取得したるに非ざる善意の取得者に對し返還を請求する事を得」とした事などは之を制限する作用を發揮するであらう。又私權行使に關する第一條の規定が私權の行使を大に制限する結果を來すべきは勿論である。

以上簡單な敍述からしてロシヤ新民法に於ける所有權に就て二つの點が注目せらる可であらう。第一は所有權の客體が著しく狹少である事である。第二は所有權の効力が著しく公共の利益の爲めに制限を受けて居る點である。ロシヤ新民法は此兩面の制限に依てその主義とする共產的國家の理想の私人所有權に依る緩和を最小限度に止めんと努力せんとしつゝある樣に見られる。

十八世紀十九世紀の法律は、大體に於て、一面所有權の目的物を最も廣く認めて居ると同時に、その効力に就ても最も强烈

を極めた様に思はれる。從て十九世紀の法律史家は一面に於て原始社會に於ける團體に依る財物共有制が「家」の分割に伴ふ「財産」の分割と各種家族の特有財産の漸次的容認とに依て、現今各國に於ける様な個人獨占權制へ推移する主旨を說き、集團共有制はフランス等で認めらるゝ夫婦財産共有制や入會の如き合有制として例外的にのみ殘存する事を指摘すると同時に、他面に於て物の支配の保護が所持（detention; natural possession: Custody）から占有（Possession; seizen）、占有から所有（dominium; ownership）への進化を示しつゝ漸次に完成せられた事を說いた。併しながら、十九世紀の半頃からして立法及裁判の實際は漸次逆轉の外觀を呈する様になつて來た。

第一は即ち所有權客體の制限である。經濟學者の所謂「國有化」「市有化」と云ふ現象、即ち法律的に云へば res extra Commercium——不融通物の增加がその尤も顯著なるものである。かくして多くの「物」が個人の支配から離れて團體の支配の下に置かれ、私的取引の範圍外に置かるゝに至つたのである。此點は既に周知の事實であつて今更說くまでも無からう。

之と同様な現象、そして餘り注意されない事實は、公用物 res communes（例へば灌漑用又は電力に使用せらるゝ流水）を公有物 res Publicae として一層個人使用の嚴格な規律を可能ならしむる傾向と無主物（例へば野生の鳥獸）——res Nullius を公有物 res publicae に轉化して個人の發見及先占による所有權の取得を制限せんとする傾向である。この二つの傾向は所有權を最も強烈に認めて居るアメリカですらも見られる現象である。

從てロシヤ新民法が「公有物」の範圍を非常に廣く認めたと云ふ事は只此近代的傾向に更に一歩を進めたものに過ぎぬ。

第二は即ち、所有權の効力の制限的傾向である。所有權の內容を實現する事に對する幾多の制限である。所謂フランスで發達した「權利濫用の法理」は所有物の使用に對する一大制限として働くのである。その他相隣間に於ける關係の詳細な規則、都市計畫法などの制定で私人の所有物使用權は著しく制限を受けて來て居る。又「處分」と云ふ所有權の內容に於ても制限を受ける傾向がある。アメリカのある州では勞働者が賃銀請求權を高利貸に讓渡するためには妻の同意を要するものとする。家具の質入に就ても妻の同意を要するものとして居る。是等は皆所有權の効力を弱める傾向にあるものではないか。それ許りでない、取引の安全を保護する爲めの我民法の「即時取得」の規定佛民法の Possession vaut titre. 流通性の理論 Negotiability 等は矢張り所有權効力の制限として働く。それから各國で認め

られる消滅時効の規定も取引の安全のためにする所有權効力の制限である。ドイツ新憲法が「所有權は義務を伴ふ」Eigentum verpflichtet としたのは此傾向に原理的形式を與へたものに過ぎない。

かくの如き思想を背景としてロシヤ民法の私人所有權に關する規定を眺めて見れば、只從來の理論を稍極端に實行したと云ふに過ぎないものであらう。

ロシヤ新民法典では物權の數が非常に少ない。所有權(國有・組合有・私有) 建築地上權、及び質權の三つに過ぎない。

建築地上權は住宅難を緩和する目的で私人の家屋建築を奬勵する爲めに認められた物權で我民法の地上權に近いものである。即ち石造家屋に就ては四十九年、その他の家屋に就ては二十年を最長期として建築權を國有の土地の上に自治部から取得する事が出來る。但し此期間を經過した後には建築權者は、對價を受けて、建物を自治部に讓渡す義務が課せられて居る。

擔保物權に於て色々な種類を別々に規定して居ないで只「質權」丈であるのであるけれど、質權の觀念は廣汎であつて法定質權と契約質權を包含し契約質權の内には我民法の「抵當權」に該當するものをも含ませる趣旨の樣であるから、形式上は唯一であるが、内容上は從來の擔保物權法に比して大した異つた事は無いものと見て差支ないのであらう。

八　債權法殊に契約自由の原則

信用經濟に基礎を置く社會では、各人の富の大部分は約束の形で存する。卽ち他人が約束を履行する事に依て實現する利益が彼の財産の大部分を形成して居るのである。そしてこの約束をその正當なる範圍に於て保護するのが債權法中の主要部分たる契約法の主たる職分である。

法律が契約から生ずる債務關係を保護するに至つた歷史的徑路には趣味多き背景と變遷とがある。併し今此處に之を詳説する事は止める。只歐大陸に繼受せられたローマ法の複雜な契約のカテゴリーの背後に存在する精神を抽出して契約自由の原則を確立したのは恐らく佛のポテイエールの功績であらう。そしてこの契約自由の原則はフランス民法その他諸國の民法に依て認められた契約法の潛在原理を形成するに至つた。英米の法學界でも此法律思想の影響が顯著であつた——英米法律の實際は此理論を裏切る幾多の實例を提供して居つたけれども。特に米國では契約自由の原則は聯邦憲法の保障の下に私有財産權と共に極端まで保護せられて居つたのであつた。そして實質上契約と云ふのは無理な法律關係までも契約で說明せんとする傾向が

各國に起り「契約萬能時代」を現出するに至つた。イギリス歷史派の泰斗ヘンリー・サムナー・メーンが法律の進化は「身分より契約へ」遷るのだと云ふた格言はメーンの眞意以上に、メーンの注意深く斷つてある制限を無視してまでも、又メーンの書物を熟讀せない學者（？）までもこれを口眞似するに至つた。それは契約萬能時代の表徵であつて、當時時代思潮であつた自由放任主義に想應はしい現象であると見られよう。

併しながら、十九世紀の末頃から契約自由の原則は非常に制限を受ける傾向が現はれて來て、二十世紀には益々かゝる傾向が顯著になつて來て居る。勿論契約自由の原則の旺盛な時代でも、法律（强行法）の規定に違反したり、公の秩序善良の風俗に違反する樣な契約には效力を發生せしめないと云ふ主旨の法理は各國にあつたのであるけれども、契約自由を制限する法律は成る可く制定せぬ、又成る可く公の秩序善良の風俗に反せぬものと裁判所で解釋すると云ふ風潮があつたのであるが、この風潮が一變して契約自由を制限する立法が殊に勞働立法その他で數多く設けられ、又判例の傾向も契約自由の制限に向つて居る。そして、レセ・フエーアの思想から一轉して、進んだのになると契約が何等か積極的に社會全體の利益を向上せしむる性質を有する場合丈に國家は之を保護すると云ふ程度まで行つた判例もある。又學說としては殆んど月並となつて居る。契約自由の原則は國家非干涉主義と云ふ消極的考案から國家機關が契約の社會經濟に合致するや否やを判斷して效力を定めると云ふ積極的考察に移りつゝある。それがロシヤ新民法制定當時に於ける各國に於ける契約理論の大勢であつた。

ロシヤ民法典第五條には「前條の規定に從ひ（權利能力に關する規定）勞農露國同盟ソヴイエット共和國人民は勞農領域內に於て自由に移轉及居住し、法律に依り禁止せられざる業務及職業を選擇し、法律に規定したる制限內に於て財產を取得又は喪失し、法律行爲を爲し、又義務を負ひ及商工業活動を規律し且勞力使用を保護する總ての法令に準據して商工企業を組織する權利を有す」とあり第三十條には「違法の目的を有する行爲若くは脫法行爲、及び明に國家に損失を與ふべき行爲は之を無效とす」とする。

此三個條に現はれた法律思想の形式は舊い形式で十九世紀各國の民法の契約の自由とその制限を規定する規則と表現の形式を同くし「法律に違反せざる範圍での契約の自由」と云ふ消極的なフオームユレーションである。只「國家に損失を與ふべき」と云ふ妙な制限を明示した點が眼新しい樣であるがその趣旨に於ては十九世紀の諸立法と同樣であらう。

只第一條の「私權は法律之を保護す、但私權の行使が其社會經濟的の使命と相牴觸するときは此限に非ず」と云ふ規定が私權をも包含する關係上契約自由の原則も幾分積極的色彩を帶びて居るのだとも云へよう。併し、未だ學術上珍とするには足らないであらう。

併し又、飜て、實質的に考察すればロシヤ民法の許容する「契約の自由」は非常に制限された範圍に止まるものであらう。第一には不融物の範圍が前述の如く非常に廣汎な財貨にまで及んで是等に就ては契約の自由が制限される事である第二には勞農露國では國營事業の範圍が廣汎である結果としてそれ丈人の契約の範圍は、制限を受ける事である。第三には「國家萬能思想」の强烈な勞農ロシヤでは將來の「法律」で色々な制限を設ける事も豫想し易い第四に裁判官も「共產主義」的思想が强烈であらうから、判決も「契約自由」をどれ程までに尊重するかは疑問である。

之を要するに近代債權法の中心問題となつて居る「契約の自由」に就てのロシヤ民法の規定は、形式に於て何等新し味を感ぜしむるものが無い樣であるけれど、實質に於ては他國以上に制限を受けて居るものと見るべきものであらうか。

ロシヤ債權法の規定は總則、契約より生ずる義務、使用貸借、賣買、交換、消費貸借、請負、保證、委任、信託、會社(一、普通組合、合名會社、合資會社、有限責任會社、株式會社、保險不當利得に基く義務、損害賠償、義務、と云ふ順序で全部十三章から成つて居る。然しその規定の詳細に就ては今之を知る事は出來ない。只一萬金留以上の贈與を無効として居る第百三十八條が物珍しい。

九　相續法

死者の遺產を相續する權利の合理的基礎卽ち所謂「相續權の基礎」は諸說紛々であるが、それは畢竟相續が行はれる社會の典型に依て定まるべきで、何れが是で何れが非であるかを抽象的に論斷する事は困難である。否不能である。かゝる論斷は畢竟空論に終るものであらう。家長的（パトリアーカル）な社會には之に相應はしい相續理論が妥當であるし、封建的な社會には之に妥當た相續論があり、個人主義的な商業的工業的社會にはそれ相應な相續理論がある。それは古代ローマの相續法や、中世の相續法や、近世の相續法を研究考察する者の容易に氣付く處である。我國現在の相續法の如きも家長的思想、封建的思想、及個人主義的思想の混亂した社會を表現して居つて所謂相續權の基礎の問題に就ても亦單純な說明は困難である。私は今此處に相續權の基礎に

就て各種典型の社會に夫々妥當な相續權の基礎と云ふ問題に就て詳說する暇を有たない。

併しながら、十九世紀に於ける歐米各國の相續法に現はれて居る根本思想は第一に財產は原則として私人に依て所有せらるべき筋合のものであると云ふ考と第二に近親の者が死者の財產を承繼するのが當り前だと云ふ「自然法」的考へと第三には死者がその財產で扶養して居つた者が扶養者の死亡で忽ち扶養を受けなくなるのは穩當でないと云ふ三つの考に基いて居るものだと私は觀察して居る。勿論例外的には封建的考方の遺物たる相續規則も各國の相續法に殘存はして居るにしても、大勢は以上の三つの考から出立して居るものであると見て大過なきを信ずるものである。それから又相續權の制限と云ふ問題に就ても理論としては相續權否認論まであつたが實際に於ては租稅の形式で相續財產の一部を國家に沒收する位が關の山であつた。

遺言に就ても沿革的には法定相續のみが認められた社會、遺言が例外的に認められた社會、遺言が遺留分と云ふ樣な制限なしに自由に認められた社會、遺言が原則で例外的に遺留分制度を認める社會等があり、その變遷は法律上趣味津々たる題目の一つである。併しながら十九世紀の歐米では以上の中第三と第四とが通常であつた。前者は英米の社會(幾分の例外はあるが)に之を見出し得第四は歐大陸に之を見出し得た。更に尙遺言自由の原則は財產處分權の延長として當然であると云ふ考が大體に於て支配して居つたのである。

以上の樣な思想的背景を念頭に置きながらロシヤ新民法典の相續權に關する規定を眺めて見よう。

第一に近代相續法の思想的根據の一つである死者の財產は何人かの所有に歸屬せしめねばならないと云ふ考は非常にモディファイされて來て居る。卽ち第四百十六條に「次條以下の規定に從ひ法律及遺言に基き死者の全債務を控除したる殘餘財產價格一萬金留を超えざる限度に於て相續を爲す事を得」とあり、第四百十七條に「相續財產の總額が一萬金留を超ゆる場合には國家を代表する財務部及其機關と法律及遺言に基き相續權を有する個人との間に於て相續財產を分割又は淸算し制限額を超ゆる部分を利害關係を有する國家機關に與ふるものとす」とあるのが卽ち之れである。この規定は私人相續權を一萬留に制限した處に今までの、相續稅などゝは趣を異にした非常の新奇な制限がある。併し、一萬金留以上の遺産に就て國家を相續權者とした處に近代相續法の潛在前提たる思想の破壞がある點に於て法律思想上に於ける最も顯著なる革命があると見る可きである。それは共產主義を國家の根本組織と見、私有財產を例外的

制度であると見る社會には當然な現象であらう。併し兎に角、この規定は法律思想の上から特に注意を要するものであると考へる。

第二に近代相續法の基礎となる近親の者殊に妻子が遺産を取得するのが當然だと云ふ自然法的考と扶養を中心とする考、この二つはロシヤ新民法でも限られた範圍内に於て認められて居る様に見える。併し、扶養思想の方が色彩が一層強い點に特色がある。即ち第四百十八條「四百十六條に規定したる二個の根據に基き相續權を有する者は死亡者の直系卑屬(子、孫、曾孫)及生存配偶者並に死者の死亡前一個年以上事實上全然死亡者に依り扶養せられ居たる勞働能力なく且つ資産なき者に限る」。前段は「近親思想」と「扶養思想」とが共存してゐるのであらうがそれでも扶養思想が強い様に見える、後段は主として扶養思想に基くのであると見る事が出來よう。相續權者の範圍を親族中では生産配偶者と直系卑屬に限つた點即所謂コラテラル・インヘリタンスを認めない點及直系尊屬に及ばない點は注意に値する。其規定の背後に法の經濟的解釋の色彩が頗る濃厚な事が窺はれるのであるから。

第三に遺言の自由と云ふ近代法の考が著しく制限せられて居る傾向がロシヤ新民法典では非常に強く認められて居る。額に關して一萬金留と云ふ制限があるのは前述の如くであるが、單にそれ丈に止まらない。遺言の無い場合には第四百二十條で相續財産は之を第四百十八條に掲げた總ての者の間に人數に應じ平等に分割せられるのであるが、此均分相續の原則をモディフアイすると云ふ狹い範圍丈に遺言自由の原則は限定せられて居るのであつて、例へば赤の他人に財産を遺贈すると云ふが如きは許されぬのである。即ち第四百二十二條には「遺言とは遺言者死亡の場合四百十八條に記載したる者の中の一人若は數人に財産を與へ若くは財産を數人又は其の總てに對し第四百二十條の規定と異りたる手續に依り分配すべき事を文書の形式に依り定めたる處分方法を云ふ」とあるのが之れである。考方は法定相續が原理で遺言は例外であると云ふので現代の相續法思想と正反對な立場に立ち返つた處に特色がある様に思はれるのである。

之を要するにロシヤ新民法で相續法丈は非常に法律思想の上で異つた特色であり、經濟的法律觀が隨分よく徹底して居る樣である。其處に可成りなオリジナリテイが見られる。但し徹底した法律は必ずしも法律として善良なものとは云へないけれども。

十　親族法

先に述べた様にロシヤ新民法典の中には親族法の規定が無い。そして千九百十八年九月十六日の「身分登記婚姻親子關係及び後見に關する法典」が現行ロシヤ親族法として止まつて居る。右の法典は第一章出生登記婚姻登記死亡登記法、第二章婚姻法、第三章親子法、第四章後見法と云ふ仕組で二百四十六條から成る詳細な法典である。此方はテキストも英譯になつて居り且つ穗積重遠博士の明快な紹介が既にあつたので今更之を繰返す必要は無い譯であるが、序であるから之を附け加へて置かうと思ふ。

親族法の中心たるべきものは何と云つても夫婦關係であらう。そして此點に就て、風說ではロシヤでは「婦人國有」が行はれて居る樣に說くものが歐米でも又我國でも隨分あつた樣であるが、かゝる形跡は法典中には根跡をも止めて居らない。一夫一婦主義、それがロシヤの親族法の中核原則であるので此點は從來の思想と少しも異つた處はない。如何なる革命も此種の「人情」を無視しては永續するものでない。それ許りでなく、ロシヤ舊法ではマホメツト教徒に就ては一夫多妻を認めたのであるが、新法典では重婚禁止は絕對で各人の宗教的信條に依て除外規定がないものである故、舊法以上一夫一婦主義を勵行したものとする事が出來よう。

婚姻に就て最も顯著なのは、婚姻關係を宗教の力、教會の力から解放せしめんとする努力である。元來歐洲の婚姻法はキリスト教會の勢力の下に宗教的分子が可成り强く、ロシヤ帝政時代にはギリシヤ、カトリツク教會の勢力が婚姻關係に影響する事が强かつたのであるが、新法典では、フランス革命憲法で「婚姻は民事契約に外ならずと認む」と規定したと同樣、理由書で「ロシヤ無產階級は先づ第一に教會及宗教から其國家に於ける權威を剝奪せねばならぬ」として純民事婚姻主義を採用し第五十二條に「民事婚姻にして公簿に登記せられたるものゝみが本節に規定する夫婦間の權利義務を發生せしむ。宗教儀式に從ひ宗教師の補助に依り締結せられたる婚姻は法定形式に於て登記せらるゝに非されば當事者間に何等の權利義務を生ずる事なし」と明言した。婚姻の地方登記局又は地方ソヴイエツト書記局で行はるゝ事とつて居り、登記局では局長又は次長と書記又は書記補、ソヴイエツトにあつては書記長及び書記の面前で擧行せられ、婚姻登記簿に登錄するのである。立會官吏は其登記を當事者に讀み聞かせ、婚姻が成立した旨を宣言し、夫婦の請求に應じ婚姻證書を交附するのである。婚姻の効力は婚姻登

記簿に登錄せられた時から發生する。

婚姻の要件中では「婚姻は契約當事者の合意に依りてのみ締結せらる」とあつて父母の同意を要せぬ事とした事、近親相婚の範圍を直系血族間と兄弟姉妹間丈に限定した事などが著しい。

それから又女が婚姻をすると夫の姓を稱したり夫の籍を取得したりする樣な法律は男子本位だと憤慨するフエミニストは世界各國にあるのだが是等のフエミニストはロシヤ新法典が「婚姻關係に在る男女は同一の姓を稱すべし。婚姻手續擧行の際當事者は夫たるべき者の姓、妻たるべき者の姓、又は兩姓を結合せるものを今後の姓とすべき旨を表示する事を得」(第百條)「婚姻の當事者の一方がロシヤ人にして他方が外國人なる場合には當事者が相當の手續を履みて其請求を爲さゞる限り各當事者のに國籍變更を生ずることなし」(第百三條)とした規定には隨喜の涙を流す事であらう。

又「配偶者の一方の住所の變更は他方に隨從の義務を生ずる事なし」(第百四條)と云ふ規定は同居義務を法律上强制せないと云ふ點丈の主旨ならば敢て珍とするに足らないが、併しかゝる規定を表面に明示する處は矢張りロシヤ式である。否、革命ロシヤ式である。

夫婦間の財産關係に付ても「婚姻は配偶者間に財産の共有を惹起する事なし」で財産分離制を取り、夫婦間の扶養義務に就ては第百七條に「配偶者の一方が窮乏にして且つ虛弱なる時は之を扶助する事を得る地位に在る配偶者の他方より扶養を請求する權利を有す」とあり、詳細な扶養に關する諸規定がある。「夫が扶養義務を有する」と云ふ舊式の考方から完全に脫却してゐる。

離婚に就て協議上の離婚を認めたのは歐米としては一英斷(?!)であらう。これもフランス革命後千七百九十二年九月二十日の法律で協議上の離婚を認めたと同一筆法で、教會主義に對する一大チヤレンジであると云はれよう。併し、尙ほ「出生婚姻死亡登記課での手續として「出生婚姻死亡登記課長は離婚の請求が眞に兩配偶者に依りて爲されたるものなる事を確めたる後離婚の宣言を爲すべし。而して離婚當事者の請求あるときは之に離婚證書を交附すべし」(第九十條)とし、又地方裁判所に於ける手續に就て「協議上の離婚の申立を受けたる時は判事は裁判期日を指定し、兩配偶者又は他人を裁判所に召喚すべし」(第九十六條)「離婚許可決定を宣告したる後、判事は離婚當事者の請求に應じて離婚證書を之に交附すべし。判事は三日以内に其決定の旨を出生婚姻死亡登記課又は右離婚せられたる婚姻

の記錄を保存する機關に送附すべし」（第九十七條）とし登記局又は裁判所で兩配偶者の意志を確かめる手段を執らせるのは我民法で一片の屆出丈で協議上の離婚が完成せらるゝ程進歩（？）しては居ない。

又裁判上の離婚に就て離婚原因を列擧しないで裁判官が相當の理由ありや否やを決定して離婚を許す主義を採つて居るのは異彩を放つて居る。

親子法の範圍内で最も顯著な改革は私生子制度の廢止である。「親子關係の基礎は眞實の血統たる可し。私生血統と嫡出血統との間に何等の差別をも設くべからず」（第百十三條）。そして親子關係の確認は「登記籍に父母として登錄せられたる者は子の父と推定せらる」（第百二十四條）とし、登記に就ては誰が母であるかの問題は事實に基き得るので問題とならず、又父に就ても、婚姻があつた時や、婚姻が無くとも父が認知した場合は別段問題は無いけれど、その以外の場合には父の確定が困難な問題となる。即ち所謂私生子認知の問題が之である、これに就て法典は新たな確定方法を定めて居る。それに依ると、妻ならざる女が懷胎した時は、子が出生すべき期から三箇月以前に、受胎の時期及び子の父の氏名住所を登記所に申立てさせ、（第百四十條）、登記吏は父と指名せのれた者に其旨を通知する。其者は二週間以内に母の申立に對し取消の訴を起す事が出來る。其期間申立を爭はないと其者は子を己の子と認知したものと看做される。そしてこの取消の訴は通常の手續で裁判される。そして夫は無暗と取消の訴を起すと「僞證罪」と云ふ恐ろしい罪名に問はれる恐がある，又「父と指名せられたる者が子の受胎當時、子の母と關係ありたると同時に他の者も關係ありたる事を訴訟の進行中に裁判所が認むるときは裁判所は有すべての關係者を訴訟當事者として召喚し、姙娠産褥出生及子の扶養の費用を分擔せしむることになつて居る。

それから又養子制度の存廢も顯著である。「本法施行後は自己の子又は他人の子を養子と爲す事を得ず」（第百八十三條）とあるはこれである。

親權に就ても「父及び母は其親權を同時に行ふ可し」「親權は子の利益の爲めにのみ行使せらるべきものとす」等の規定は近來の親權思想と合致して居る。又「父母は子の監護教育を爲し且有用なる職業の爲めの訓練を與ふる事を要す」としたのも面白い。又「父母は子を教育訓練の設備に入らしむる權利を有す。然れども父母は十六歳以上十八歳以下の子の爲めに其明白なる承諾なくして勞務契約を締結する事を得ず」とした親の威光で子の勞働をエキスプロイットせんとする惡性の親に對する戒と

なるであらう。

親子の財産關係に就ては「子は其父母の財産に對し何等の權利を有する事なし、同樣に父母は其子の財産に對して何等の權利を有する事なし」として親子間には財産上の權利義務の關係なき事を原則とし只「父母は未成年、勞働無能力又は窮乏の子を扶養すべし」「子は勞働無能力又は窮乏の父母を扶養すべし」として扶養に關する例外を置いて居る。

後見に就ては全部國家がやるべきものだと云ふのが社會主義理論家に依て說かれた處であるけれどロシヤ新法はそこまで極端には行つて居らない。即ちファミリーの保護ある限り原則として之に委ね、之を失つたすべての兒童は財産を有すると否とにかゝはらず、國家機關たる社會福利局が之を行ふ事になる。然し社會福利局は特に後見人又は管財人を任命して之に當らしめる事を得る事になつて居る。社會福利局が直接に後見を行ふ事を認めた點は確かに「國家後見主義」の確立であるが、それを近親の保護を得られぬ場合に限り、しかも尙ほ個人たる後見人又は管理人に委する事を得るのであるから、實質に於てはラデイカルな變更ではあるまい。

要するに十九世紀以來歐米の親族法變遷の基調は妻の獨立人格の確立であり、子の人格の尊重であつた、それは各國に於ける立法及び判例の變遷の間に潛在する潛勢力である。それと同時に親權や後見を單に「家」の私事とせずして「公」の問題とするの風潮は程度は國に依て異るにせよ、之れ又觀取し得る立法及判例の暗流である。是等の傾向をロシヤの親族法は大膽に言明した迄である。個々の點に就ては色々議論の餘地はあらう。又諸問題の解決が非常に價値のあるものであるかは疑問であらう。併し、全體に於ては兎に角、二十世紀親族法理論と調和する法律であると云へようか。

十一　結　論

以上私はロシヤ民法典を中心として論議を試みた。先にも斷つて置いた通り、私はロシヤ民法典のテキストを完全な形で有つて居らず、散在した材料を綜合して、僅かに之を知り得たのみである。殊に私はイギリスの法律家メートランドと共に「一國の法律は、全國民生活に關連せしめてのみ研究する事を得」(The law of a nation can only be studied in relation to the whole national life) と云ふ事を信ずる一人であるので、新ロシヤ民法典に就て之を充分に批判する資格の無いものである事を充分に感ずるのである。新法典がロシヤ全國民の福利を增進する制度として働く力を有するや否や、それが果してロシ

ヤの經濟政治人情風俗と合致し得るや否や、是等の問題は私の論究し得ざる論點である。それはロシヤの日常生活に對する異常なる透視力があつて初めて出來る論議である。それはロシヤの經濟と社會とに對する正確なる智識を前提として初めて有益であらう。私は只以上の散漫な說述を試みつゝ感じたる二三の點を述べて此論文を終り度いと思ふ。

第一には革命法的立法の特色がロシヤ新民法典にも著しく見らるゝ點である。革命法は舊制度を打破して新制度を確立せんとするために設けられる。從て旗色頗る鮮明である。そして、「革命者の理想」を雄辯に且つ明白に揭げん事に努力する「自由、平等」と云ふ政治革命的色彩がアメリカ革命フランス革命の立法を彩つた樣に「プロレタリアの支配」と云ふ經濟革命的色彩がロシヤ新民法の到る處に見える。勿論民法典の制定は財產法の範圍に就ては新經濟政策の實現として共產主義を緩和せんとするにあつたにせよ、共產主義の基礎を傷けられざらんとするの努力が各部に見えて居る。革命法は明白であつて妥協を嫌ふ。この態度を著しく表明して居るのは新親族法典の理由書の宣言である。曰く

「親子法の範圍に於ては我等の第一法典はあらゆる擬制を排斥して眞實有の儘の狀態卽ち實際の親子關係を直ちに表面に現はした。これ單に言語によつてのみならず事實によつて人民を眞實を語ることに慣れしめ、彼等を各種の迷信から解放せんが爲めである。」

併しながら、旗色鮮明な丈に革命の熱がさめた時國民の微妙の心理と生活經驗とに合致せぬ事はあらう。それはかつて革命法が經驗した運命であつた。從てロシヤ新民法典も將來は大にモディフィケーションを要するかと思はれる。然し更に何ジュリスティック・ニュー・スタートとして、新立法新判例の基調として働く力は充分にある。

第二は內容に就てはドイツ民法、スウイス民法及びロシヤ民法草案などを充分參照して制定されたものであらうから、テクニックに於ては最新法學の貢獻を利用して居る。しかも共產主義の理論でローマ法的色彩を緩和せんとして居る樣である。この意味で、ロシヤ民法は過去の法律文化の繼續であり、その延長であると同時に、新しいプレミセスを明白に確立した新しい立法であると云へよう。勿論そのプレミセスは從來の學說、立法判例では認められて居つたにせよ、ロシヤ民法が之を明白に民法典で實現したのは新しい事實である。

第三には「國家」が到る處にその「威力」と「特權」とを主張して居る事である。「國家」と云ふ大きな l'état, c'est の口が常に開

いて「個人」に迫つて居る點である。それはロシヤ民法典の到る處に見られるのであるが法律の解釋に就ての勞農ロシヤ民法施行に關する法律第五條の文句はその最も顯著なものであらう。

「勞農ロシヤ民法の擴張解釋は勞農國家及び勞働民衆の利益を保護する爲必要とする場合に限り之を許容す」

かゝるレジムが果して將來革命の熱が醒めた頃のロシヤ人を納得せしむるを得る良制度であらうか、或は又、ロシヤ人も亦その濫用に堪えなくなつて「個人的」の Magna Carta を要求するに至るであらうか、それは將來の問題として殘るであらう「自由」と「國權」との爭は永劫の爭であらうから。(完)

性慾の問題

醫學博士 文學博士 富士川游

性慾に因由する事件の種々なるものが、近時頻りに新聞紙上に報道せられて世間の人々の耳目を驚かすやうであるが、それにつけても余が第一に思ひ起すことは性慾に關する知識の普及といふことである。元來性慾といふものは人類の生活に伴ふて起るところの自然現象の一種のものであるから、それにつきて十分の知識を得ることは人類の生活の上に必要缺くべからざることである。これを狹く考へて日常生活の上から言ふも、性慾をば一種の非道徳的のものとして臭い物に蓋をするといふ主義にて、これを取扱ふがために、性慾に關する意外の事件が續々として發呈することは現在目前に示されて居る。自然現象としての性慾が自然科學的に研究せらるべきは當然であるが、近代に至るまでそれが等閑に附せられて何等の科學的研究が行はれなかつたのは不思議といはねばならぬ。性慾は何れの時代にも現はれ、又何れの人種にも同じく存するものであるから、早くから科學的の研究の對象となるべき筈であるが、どうしたものか、性慾の科學的研究は度外におかれ、この三十年來僅かに科學的の性慾研究が始まつたのである。勿論、性慾に關する敍述は尠からず存在して居つて、たとへば十八世紀に著はされたる

サード（Marquis de Lade）の小說（Die 120 Tage von Sodom獨逸譯）の中には幾多の病的性慾の症例が擧げられて居るのみならず、その種類は後に精神病學者のクラフト、エービング氏が著したる專書に擧げられたるものよりも尙ほ多數である。この他にもこれと同樣の資料は多數であるが、しかしながらこれ等のものはすべて性慾に關する事實を擧げたるもので科學的に性欲を敍述したものでは無い。

科學的に性慾の研究を企てたのは、精神病學者及び神經病學者を以てその始とし、それに續きて人類學者、民俗學者、心理學者、美學者及び文化學者等が參加して、今日では已に性慾學 (Sexalwissenschaft) と稱せらるるところの一學科を成すまでに至つた。その學者の中で最も著名のものを擧ぐればクラフト、エービング、マンテガツツア、オイレンブルグ、シユレンク、ノツチング、クラウス、レーウエンフエルド、ハーヴエロツク、エリス、ヒルシユフエルド、クレルラ、フユールブリンゲル、ローレデル、イワン、ブロツホ、ブラシユコー、メービウス、ロムブローゾー、フイオー・フリードレデル等諸家である。余は今ここに、性慾の問題に就て、精細に敍述しやうとするのではない、ただ目下の現狀に照して、余は性慾學上より敍述することが急務であると考へるものを略擧しやうと思ふのである。

性慾學の成立

ウイルヘルム、オストワルド氏の定義に從へば、科學とは過去及び現在の認識よりして當來の豫言を爲すことを得べき知識を蒐集することを期するもので、この知識は現象の自然法則を立つるところまで進むものであるから、性慾學もこの定義に從ひて、性慾の現象の各個のものよりして共通の自然法則を認むることを期圖するにある。從て性慾を科學的に研究するには、種々の方面よりすべきものであるから、性慾學には更に幾多の分科がある。すなはち、

性解剖學 (Sexalanatomie) の研究は細胞の構造にまで進み、更に女性的に變性したる「プロトプラスマ」と男性的に變性したる「プロトプラスマ」との認識にまで深く進みて研究せねばならぬ、それはこの兩個の「プロトプラスマ」の混合によりて性的の個性が成立するからである。

性生理學 (Sexalphysiologie) は戀愛及び性慾によりて起れる身體の變化及び過程を對象として研究する。そうして、この變化及び過程は爾他の生理學的現象と同じく理學的及び化學的の方則に歸著すべきものであるから、生理學的の研究に據りて、性慾の現象としての反射及び反應の成立は全くこれを說明

することが出來る。しかしながら何故に性慾の感覺が一定の方法によりて特殊的に現はるるものであるかといふことは到底生理學上より說明し得べきことでは無い。ここに於て

性心理學 (Sexalpsychologie) の知識が必要である。性心理學はただ外部印象の精神的作用のみならず、內部的精神生活よりして外界に及ぼすところの作用、すなはち性慾が文化及び藝術、道德及び罪惡に及ぼすところの影響をも硏究することを期するのである。

此の如くにして、性慾は先づ解剖學、生理學及び心理學の諸方面よりして攻究すべきものであるが、しかしながらこれは主に成熟したる大人につきて硏究せらるべきものである。それ故に性慾の科學的硏究はその發生的方面に進まねばならぬ。

性發生論 (Die sexuelle Evolution) は他の生活機能と同樣に性慾の發生に一定の順序の存在することを追究するもので、その發生が內分泌と一定の關係の存在することが知られてから、近時に至りて更に

性化學作用論 (Der sexuelle Chemismus) が硏究せられるやうになつた。性慾の化學作用は一定の腺より分泌せられるところの內分泌性物質に本づくもので、それが性慾中樞を刺戟し刺戟を遞すことによりて性慾の發動を見るものである。中に就て最も重要のものは性腺で、性腺が侵さるるときは性慾及び全身の上に著しい影響を及ぼすことは已に證明せられたる事實である。

更に性慾學の補助學科として缺ぐべからざるものは

比較性生物學 (Vergleichende Sexualbiologie) である。動物の戀愛生活は「アメーバ」にまで溯り觀察することが出來る。そうして動物につきて硏究したるものはこれを人類の戀愛生活に類推することが出來る。

此の如くにして、人類の性生物學に關する知識が、深くなればなるほど、性慾的關係に於て、有害であるか又は有要であるかといふことを判決するの知識が出來る。これによりて

性衞生 (Die sexuelle Hygiene) の硏究が始まり、性交、婚姻、思春期、月經、姙娠、產褥、受乳、更年期等の衞生が合理的に行はれるやうになる。一方には過多の受胎を防ぎ、一方には不姙を治し又生活方法と性慾との關渉を佳良とするために衞生學的の硏究を必要とする。

性敎育 (Sexualpädagogik) も亦その重要なる部分は性衞生に屬する。兒童がその性慾の發動に方りて驚異の眼を以て自から性慾の硏究をなすに放任せずして、合理的の方法によりて眞面目に性慾の說明をなすことをつとむるのが性敎育の趣旨であ

る。

性豫防法 (Die sexuelle prophylaxe) も性衛生の一部で、知識によりて意思の力を強くすることをこの主要の目的とするのである。中にも性慾に基因するところの賣笑婦の如きは常に花柳病を蔓延するの中心となるものであるから、それに對して完全の方策を施すことを必要とする。又性慾の發動をば國家及び社會に對して有要のものとするがために

性政策(Der Sexualpolitik)の實施を必要とする。輓近の國家は固定的の性的秩序を設けてこれを文化的重要の基礎として居るのであるが、國家的法則と自然的法則とが著しく矛盾して居ることは到底永久に繼續して行はるべきものでは無い。

性法律 (Die sexuelle Gesetzgebung) は性政策の一部として實際上重要のものである。國家としてはその住民に對してその自由意思を尊重して身體、財産及び名譽を保護するの義務があるから、それがために性慾の發動に對しても一定の規範を設定するの必要を感ずる、たとへば結婚及び離婚の法律の如きすなはちこれである。又性政策と親密の關係を有するものは

性倫理 (Die Sexualethik) である。性倫論は性衛生及び性政策と同じく性生理學に服從せねばならぬものである。道德律といふものは畢竟人性の自然から流れ出づるもので、若し倫理的の要求が自然法則に不可能のものであつた場合には畢竟無益に屬する。

性人種學 (Die sexuelle Ethnologie) はあらゆる國民と、あらゆる時代との性慾生活の歷史を研究するもので、性慾が爾他の社會的及び文化的生活の焼點としてあらはれるところの形式を明にするがために人種學的の研究を必要とする。その他

性病理學及び性變異 (Die sexueelen Varietäten und die sexuelle Pathologie)も亦性慾を科學的に研究する上には必要のものである。性變異といふのは人類學的のものであるが、それと病的の性慾變態とを區別することの困難なる場合がある。性慾の異常はこれを解剖的のものと、機能的のものと、内因によるものと、外因によるものと、身體的のものと精神的のものとに區別する。更に又個性的の基本的性質を明にするために

性統計 (Die Sexualstatistik) を應用して、統計學的方法によりて性慾發動の規律及び法則を明にし、それによりて種々の性慾問題の解決に資すべきである。

男の戀愛と女の戀愛

此の如くにして成立したる性慾學の知識によりて見れば、男の戀愛と女の戀愛との間には著明の相異がある。それは戀愛の

性質が戀愛者の性格(Charakter)に關係するものであるといふ點よりして、男と女との普汎的差異に比して更に著明の差異が現はれるのである。チュボック氏(Jul. Duboc, Die Psychologie der Liebe, 1893)氏は嘗てこの點に論及して、戀愛に於ける男女兩性の態度は同一であると主張したが、この説は當を得て居ない。固より男と女との戀愛によりて互に共通の狀況を示すことの尠なくないといふことは無論の次第であるが、しかしながら男の戀愛と女の戀愛とがその性質に於て差異を示すことは明瞭である。概して言へば、男の戀愛感覺は尊大で且つ勢力を意識してのものであり、女の戀愛感覺は內氣で憧憬的のものである。女の戀愛感覺はその保護と倚賴との要求の大なるに相當して男の戀愛感覺よりも著しく歸依と信賴とに富むで居る。又女にありてはそれ自身及びその子孫の經濟的扶助を求むるといふことが戀愛を生ずるところの主要の動機をなし、又その方向を轉換するところの原因を成すものである。それ故に女の戀愛は已に得たる戀愛をどこまでも維持しやうとする希望が男に於けるよりも强烈である。男の戀愛にありては攻擊的及征服的の歡樂を滿足せしむることと、無頓着及び無責任とがその動機をなすものであるから、性慾の滿足を得るといふことが主要である、エドワード、カーペンター氏(Edward Carpenter, Die Liebe in der freien gesellschaft)の説に據ると、女の戀愛は男のに比して廣汎性である、すなはち性慾の領域に限局せられて居ない。又ローゼンタール氏(Rosenthal, Männlicheund weibliche Liebe, 1911)の說くところに據ると、男の戀愛と女の戀愛とにありて、その戀愛の目的が達せられたるときに現はれるところの變化に著しい差異がある。男にありてこの變化が劇しく、戀愛の目的が達せられたときより以前と以後とには著しき相違があるから、多くの戀愛女はこれを見て一驚を喫するのが常である。男が戀愛の熱望を達せむと焦慮するときには冒險をも物ともせず、犧牲をも顧みることなく、場合によりては最愚の行爲をもなして少しも頓著しない。戀愛の熱望を達せむがために洗滌水を飮み、小指を截りてこれを相思のものに送つたといふやうなことがある。しかるに、一旦その目的が達せられた後にはその狀態は一變して、以前とは全然相違せる感覺が突如として現はれる。すなはち屈服の心と犧牲の心とは忽にして消散して、義務の觀念は除かれ、責任を無視し、時としては多婚性の素質と征服的の歡樂とが現はれて更に新しき戀愛に馳ろことがある。これを要するに男の戀愛は女の戀愛に比して著しく利己的である。それ故に戀愛の熱望は缺げて居るときでも女から持ちかけるときは常にこれを歡迎するのが常である。

此の如くに、男の戀愛と女の戀愛との間に、著しき差異の存すると同じく、男の性慾と、女の性慾との間にも亦著明の相異が認められる。

男の性慾と女の性慾

性慾に就ては諸家の研究が公にせられて居るが、リープマン氏（W. Liepmann, Psychologie der Frau, 1920）に據れば、性慾は身體的即ち自然慾（Naturtrieb）と、精神的即ち精神慾（Seelentrieb）との二個の要素から成立して居る。この自然慾と精神慾とは共に遺傳性のものにして、自然慾がその前に立ち、精神慾は教育、道德、宗教、哲學等によりて著しく影響せられるものである。女兒の精神慾はその根柢に於て遺傳性の慈愛を存し、男兒にありてはこれは缺如して居る。女兒が他のものの福祉に對して配慮することは人形遊びに於て明かにこれを認むることが出來る。從て女兒が朋友としての女兒及び女教師に對して著しき戀愛を生ずるはこの精神慾の發動によるもので、男兒にありてはこの非性慾的の戀愛は缺けて居る。男兒にありて又少年にありて、又成年の男子にありてそれが女性に近づくことは自然慾に本づくものである。完全にして嚴格なる教育を受けて、その環境の善良なるところに生長したる男子でも同じく自然慾を主とする。幼年の女兒にして近世的羞恥の觀念の養成を受けたるものはただ精神的の戀愛を知り、この戀愛は先づ朋友としての女兒に向けられ、次で男に及ぶものである。女にありて自然慾を覺醒せしむることは相思の男の任務である。それは受働的靜止の狀態にあるところの卵子をして生產的に活動せしむることが精蟲の任務であると同樣である。

此の如く、女の「プラスマ」が受働性であるといふことが男女兩性の差異をあらはす根本の原因で、精神慾は女性の「プラスマ」に恰適せる强劇の反應性によりて反應を起すものである。自然慾はこれに反して淫佚なる環境、男或は女の誘惑によりて早期に發呈せしめられる。さうしてこの男女兩性の間に於ける性慾の差異は、時として重大の結果をあらはすに至るもので、たとへば若年の男子が社會的の事由よりして早期に結婚することが出來ぬといふやうな場合には、その自然慾が劇しく活動する餘りに多妻及び二重道德をあらはすやうになることがある。

生物學上の研究に據るに、男性の「プロトプラスマ」は能働性のものであり、女性の「プロトプラスマ」は受働性のものである。それによりて男性にありては初發性の性慾衝動樣狀態が認められ、女性にありては初發性の精神慾が證明せられる。若し女性にありて初發性の自然慾が認められたる場合にありても

注意して觀察するときはそれが外界の刺戟産物であつて、實際續發性のものであるといふことが證明せられるのである。リーブマン氏は村落の女子にありて自然慾が初發性であるといふ説を駁して、若し女子にして自然慾があらはれて居るときはそれは常に續發性であると主張して居る。普通に性慾と名づけられて居るところのものは本能的の結合熱望にして、それによりて男は女に引き寄せられ、女は男に引き附けられるのであるが、しかしながら兩性の結合に於て、この熱望を達すべき希望は男から現れるもので、通常の女は相思の男に動かされるに過ぎないもので、その性慾の滿足は徐々に亢進するものである。リーブマン氏に據れば、女子の戀愛にありて精神慾及び自然慾が現はるるに至るものは生殖慾にその根本を有するもので、女子にして單純の自然慾のみを有して精神慾のみを有するものは稀有である、若し此の如きものがあるとすればそれは性慾感覺亢進(Hyperaesthesia sexualis)の輕度のものである。又女子にして單純の精神慾のみを有して自然慾の現はれたる男子と同棲することを不快とするものは甚だ尠なくない。

尋常の男子にありては、自然慾を有せずして精神慾を有することは絶無である。すべての戀愛は結局の兩性結合を熱望するものでモル氏が言ふところの接觸慾(Der Kontrektationstrieb)は終に消腫慾(Der Detumeszenztrieb)に移るべきものである。又男子にして自然慾を有せざるものは甚だ稀有のことで、若しあれば陰萎である。これに反して、女子にして自然慾の發育の輕微なるもの或はそれが缺如せるものは、殊に大都會にありては多數に存在するもので、アドレル氏の調査に據れば都會の女子の二十五乃至四十%は正にこの種類に屬するものであるといふことである。これを性慾冷淡(Frigiditas sexualis)と名づける。しかしながら性慾冷淡のものでも姙娠することは通常の女子に於けると同様である。娩産及び産褥の上にも何等の影響が無い。これによつて見ると、自然慾は男子にありては生殖の上に必要のものであるが、女子にありては左ほど重要のものでないといふことが明瞭に認められる。

性慾の素質

此の如く、性慾は男と女とにありて著明の差異を呈するものであるが、元來性慾は小兒が生れたときから已にその萌芽を有して居るもので、思春期に至りて、生殖器の發達と、それによりて起るところの刺戟とによりて發現するものである。そうしてこの刺戟は末梢的に各種の外部印象と、中樞的に内部感覺によるもので、思春期に方りて外部印象として性慾を衝動するも

のは多種である。殊に大都府に於ける吾人の文化生活にはその數莫大であるといはねばならぬ。文化が進めば進むほど性慾の發動も著しくなる。村落にありては教育の狀態と、身體的勞働と、單純の食餌とのために大都府のものに比して、性慾の發達が相異して居る。内部感覺によりての刺戟は兩性の構造に基づきて相違がありて、此の如き性慾の内部刺戟は女子にあつて男子よりも劇しいのである。しかしながら、概して言へば男子の性慾と、女子の性慾とはその强度を略ぼ同じくするものである。勿論性慾の强度は同一の個人にありても季節、氣分、氣候榮養、精神及び身體的過程によりて著しき差異を示すものであるから、性慾の强度を規定することは甚だ困難である。已に上章にも言つた通ほりに、女子は人間の性慾生活にありて概して受働的で男子のために侵擊せられ、征服せられ、その所有とせられるものである。これに反して男子の性慾は侵擊的のもので女子を征服してこれをその所有とするものである。しかしながら男子にありては思春期に方りて精液分泌が始まり、それが精囊に蓄積せられ、その機能が成熟するときに、已に性慾はあらはれるものであるが、女子にありてはこれに反して月經が始りて卵の成熟の作用があらはれそれが脫離するやうになつても性慾はあらはれずして、第一回の性交の後に至りて漸次に發達するものである。從來諸家の說くところに據ると、女子は概して男子に比して性慾に對して冷淡であるとせられて居つた。たとへばロムブローゾー及びフェルレロ兩氏の如きは女子は元來性慾に冷淡であると說いて居り、フュールブリンゲル、モル、クラフト、エービング、レーヴェンフェルド、アドレル等の諸家も略ぼこれと同樣の說をなして居つた。しかるにブラックウェル氏の如きは全然これに反對して、女子の性慾の素質は男子よりも强劇であると論じ、キッシュ、オイレンブルグ、マンテガッツァ等諸氏も同樣の意見を有して居る。ローレデル氏は始め女子の性慾は男子の性慾に比して概して弱いやうであるといつて居つたが、その後の多數の實驗に徵して、遂に男子の性慾と女子の性慾とは略ぼ同樣の强度を有するものであると主張するに至つた。

これを要するに、男子の性慾と女子の性慾との相違はその强度ではなくて、その發呈の種類である。すなはち性慾の本態が男女兩性にありて變動するものである。勿論性慾は榮養、職業、氣候及び他の文化的感作、殊に年齡によりて種々の相違を呈するものであることは言ふまでも無い次第であるが、中に就てその素質の相違が重要であるといふことはこれを承認せねばならぬ。

性慾の精神化

上章に述べたところは性慾の尋常の狀態に就てのことであるが、性慾は又、精神作用を亢進せしむることがあり、或は他の精神作用を補償することがある。藝術、科學及び哲學にありて屢々此の如き性慾同等狀態（Sexuelle Aequivalente）が認められる。古代から近世までの大哲學者の中にはプラトン及びアリストテレスからライプニツツ、スピノツア、デカルトを經てカント、ショペンハウエル、ニーチエに至るまで結婚せぬものが澤山にある。宗教も亦性慾の補償たることがあると言はれて居る。クラフト、エービング氏の說に據ると、宗教的の感動狀態と性慾的の感動狀態とはその發達の頂點にありては發揚の分量と性質とが一致する、それ故に相當の場合にありては代辨せられる。その他、普般的の人間愛、各種の人道的努力殊に政治的及び社會的の事業、動物愛護等には戀愛の補充として見るべきものがある。身體的作業殊に遊伎的競爭が性慾によりてその力が强められることがありとせられて居る。

若し果して性慾の禁制が精神的產生の上に佳良の作用を及ぼすものであるとすれば禁慾は精神的に有要のもので、藝術、科學及びその他、性慾同等狀態と認めらるるものに奬勵すべきである。しかしながら實際にありてすべての場合にさうで無く、却て禁慾は特別の活動性を現はさぬように見えるのである。レーヴエンフエルド氏（Löwenfeld, Ueber die sexuelle Konstitution.）はこの點に就て「カトリック」の宣教師と「プロテスタント」の宣教師とを比較して、獨身生活をなすところの「カトリック」の宣教師が「プロテスタント」の宣教師に比して智力、勢力及び作業に於て超越して居るとは斷定することが出來ないと言つて居る。オイレンブルグ氏はショペンハウエル、アレキサンデル、フオン、フムボルト、カント、デカルト、スピノーツアの如き多數の偉人を擧げてそれが長壽の獨身者であつたといふことを證明して居るが、ヒルシユフエルド氏はこれを批評して、結婚的の獨身者と性慾禁制とは同等に見るべきものでないと言つて居る。又有名の男子及び女子にして戀愛生活が强劇であつたもので同時に精神生活が强劇であつたといふ實例が示されて居る。

精神的の受胎と身體的の受胎との間に關係があるといふことは認められる。天才的のものにありてはその子孫の性質と分量とが著しく微弱であるが、これは腦髓の作用が睾丸の機能の上に著しき影響を及ぼすがためであるとせられて居る。

性慾の張力が勢力に轉換するといふことにつきては確實に證

明せらるべきものは尠ないが、性慾が宗教的の勢力に轉換し、又性慾が單純の運動力に轉換することは認められる。イワン、ブロッホ氏 (Iwan Bloch, Das Sexualleben unserer Zeit.)の說に據ると、一定の意味に於て、宗教の歴史は人類の性慾の特別の現象の歴史として見ることが出來る。性慾が運動力に轉換することは叫喚、涕泣等にあらはれる。ヒルシユフエルド氏の說に據れば、强劇の感動に惱める女子にして數千通の書狀を認むることによりてその苦痛から逃れることを得たものが多數にあつたといふことである。又性慾の不安が轉じて彷徨浮浪を起した例も尠なくない。

近頃フロイド氏一派の精神分析說もあるが、吾人の意識作用は固より精神の全體ではないから、意識に上ぼらないもの（所謂下意識若しくは潜意識）が性慾の影響を受ることは認められるが、吾人の精神作用のすべてが、皆性慾の影響を受くるもののやうに說くのは極端である、冷靜の見地に立ちて考ふるときはフロイド氏一派の精神分析說は一部の眞理を含めるもので、その全部を承認すべきものでは無い。從てフロイド氏一派が說くやうな意味にて性慾の精神化を認むることは出來ないと余は信ずる。

禁慾生活

性交は罪惡なりとの信仰に基づきて終身禁慾生活を營むべしとの說（トルストイ、ウエイニンゲル、グラボフスキー、クルニヒ等諸家）は批評すべき限でない。尋常の性慾は自然の現象でもと純潔且つ倫理的のものである。しかるに、人類が妄想的の眩惑と倫理的に非難すべき所爲によりてその固有の本態を誤まりてこれを所謂罪惡となすのである。人類は生れながらにして性慾の滿足を得べき自然の權利を有して居るもので、絕對に禁慾生活を營むべしとの說は固より取るに足らぬものである。性慾學上よりして言へば此の如く絕對的禁慾生活は固より自然の法則に背きたるものであるが、しかしながら持續して衞生的非難すべきことの無い性交をなすことを得るに至るまで關係的禁慾生活を營むことは合理的のこととして推稱せねばならぬ。又倫理學上よりして言ふも男女兩性が結婚をなすまでは男女兩性共に性慾を禁制することを正當とすべきである。

モーリツツ、アルントは八十九歲の高齡のときに、書をエーナの學生倶樂部に贈りて、身體及び精神が完全に成熟するまで、すなはち二十五歲まで、性慾を禁制することを得るならば最大の幸福であると論じた。しかしながらこれは實際にありて

不可能のことである。若し可能といふことを本として、個人衞生的及び社會衞生的に論ずれば尠なくとも二十歳に至るまで性交は全然禁制すべきであるとイワンブロッホ氏は說いて居る(Iwan Bloch, Das Lexualleben unserer Zeit)、それなれば別に何等の障碍もなくして實施することを得べく、又實際にありて多數の男女かこれを實施して居るのである。しかるに實際にありて、文化諸國にありては男女の性慾の成熟が身體及び精神の成熟と同時で無くして、男子の發育が完成するのは先づ二十歳乃至二十二歳頃であるから、それまでの間には、性慾を人工的に覺醒せしめず又これを養育しない場合には手淫及び遺精の弊に陷ることとなく性慾の發動も輕微にしてこれを抑制することは容易である。二十歳以後になるとその狀態は一變して性慾の緊張が强くなるから、そこに自然的の解決の方法として性交が要求せられる、若し性交が爲し得られぬときには自然の方法として遺精が現はれ、又不自然の方法として手淫が行はれる。しかしながらこの場合、性慾を禁制したからと言つて、多くの場合には、別に障碍を呈することは無い。現にルブォル、ヘガー、オイレンブルグ、シユールブリンゲル、アルベルト、モル等の諸家は成熟したる男女が禁慾生活を營むでも別に些の障碍を呈することは無いと主張して居る。有名なる神經病學者ウイルヘルム、エルブ氏は禁慾の結果として神經性病狀を發呈することを主張して居るが、固より一定の場合にありては禁慾生活に堪ゆることが出來ずして、精神不安、「ヒポコンドリー」性思想、眩暈、鬱憂、不眠及び作業不能等を起して、それがために著しき障碍を呈することがある、しかしながらこれは神經性の病者及びこれに類似せるものの中にて一定の場合に限るもので、健康のものにありては若年のときは勿論、後年に至りても禁慾生活のために別に著しき障碍を呈することに認められぬのである。レーヴエンフエルド氏の說に據ると、女子は禁慾生活に堪ゆることが男子よりも强い、場合によりては女子が禁慾生活を營むことによりて「ヒステリー」性神經衰弱の狀態を呈することもあるが、健康のものに此の如き障碍を起すことは尠ない。

これを文化の見地よりするも禁慾といふことは意思を强くするがための良法の一つであり、又野合的の戀愛の危險に對して保護の効力を有するものであるから、尠なくとも二十歳までの男女に對してこれを强要することは當然であらう。世の中には懷疑論者もあつて、絕對的禁慾は固よりのこと、關係的禁慾も亦實際に行はるべきものでないと論ずるものがあるが、この說は排斥すべきである。しかしながら人類は一個の自然物である、その性慾は自然的のもので、性慾そのものとして合理的の

本能である。同時に又人類は一個の文化本態である。文化は自然を向上し、尊崇し、又これを說明するものであるから衝動及び勢力の强劇に過ぐるものは文化によりてこれを制限し又能くこれを調和せねばならぬ。それ故に性慾の滿足を獲得するの權利があると同時に性慾を一定の限度に制して、性慾のために個人及び社會が受るところの障碍を排除して、他の慾情と同樣にこれを文化發展の目的に適するやうにするの義務がある。この目的に對して關係的禁慾は實に推稱すべき價値があるといはねばならぬ。

しかるに、この關係的禁慾をば獨り女子のみに求め、男子に對しては性慾の滿足を得ることを許すといふことは不合理である。此の如き道德的法則は我邦にては古くより行はれて、貞操は主に女子にのみ要求せられたのであるが、男子には許して女子には許さずといふが如き二重道德（Lucus a non lucendo）と不都合窮まるものであるから、速かに此の如き因襲的の道德法則を廢して、男子も女子も共に尠なくとも二十歲までは禁慾生活を營ましむるやうにせねばならぬ。しかも余はこの事が今日の性慾の問題の中にも最大緊要のものの一とつであると信ずる。

ドリーシュの生物哲學に就て

費　鴻　年
(Henry Fey)

ドリーシュ氏の略傳

ドリーシュ氏は一八七七——一八八六年迄ハイデルベルヒ文科中學に學び一八八七——一八八九年迄フライブルヒやイェーナ（Jena）大學で動物學を學び "Tektonische Studien an Hydroidpolypen" と云ふ論文で學位を得たのである。一八九〇年に熱帶地方で動物集採に從事し、一八九一年にイタリヤ海岸で旅行研究をなす、その間に多く

動物學上の論文を出した。一八九一――一九〇〇年迄はナポリ研究所に居られ、一九〇七年にスコツトランドのギッツフォート講師（Gifford Lecturer）として生物哲學を講演した。その後ハイデルベルヒ大學の動物教授となつて一九一七年にキヨエールン（Köln）大學の哲學教授に轉職し一九二一年にライプチッヒ大學教授となつた。その間に多くの著作を出して居る。尙氏は七月中旬に來朝される豫定夏期大學で七回の講演をなさる筈である。

尙この原稿を一讀の勞を取られし井上博士並びに恩師谷津博士に對して感謝の意を表す。

一

あらゆる自然科學の發達史を考へて見れば、我々は何時も一つの共通な法則を見出すことが出來る。卽ち科學がまだ發達して居ない場合には、その科學の中に餘計に哲學的又は認識論的分子が澤山入つて居る、それに反して科學が發達すれば、發達する程、その哲學的分子が段々減つて行くのである。科學の發源であると云はれる希臘時代に於ては、あらゆる自然科學は皆自然哲學と云ふものの中に入れられて、無論科學と哲學との境は少しも存在しないのであるが、十七八世紀になると物理や化學は次第に哲學から離れて各々獨立な學問となり科學は科學共自身の幾多の概念（Begriff）の上に建てられる樣になつてから始めて科學は全然哲學的色彩を除くことが出來た。然しそれは各科學の進步の結果であつて、進步しない科學には今でも又近い將來でも尙哲學的概念を以て科學の基礎とするものがいくらもある、生物學は卽ちその一つである。

元來科學と云ふものは必ず幾くつかの基礎概念（grundlegende Begriffe）がある。普通は二種ある。一つは事物的概念（objekt-begriffe）例へば原素とか細胞とか云ふ樣なものが皆それである。一ツは機能的概念（Funktion-begriffe）例へば力とか價（Valenz）とか生命とか云ふ樣なものがそれに屬して居る。事物的概念は何時も變らない性質を持つて居るからその解釋もあまり問題とならないが、此れに反して機能的概念はその場合その事情によりて時々變るから、科學の進步して居ない場合には大概哲學の中心となつて色々な解釋が出來て來るのである。現在では物理上に於て力と云ふものは物質と加速度の積であると解釋され、化學上に於て價と云ふものは原素と原素との化合の關係數であると表明されて居るから明かにそれは皆科學的概念であつて少も哲學的分子が入つて居ないのであるが、然し生命と云ふものは果してスペンサーの定義する樣に生物の內

部と外部との調和であるか何うかは餘程疑問である。生命と云ふ概念が明かに解釋がないと云ふことは卽ち生物學がまだ物理學化學程に發達して居ないと云ふ證據である。

多くの生物學者は生命に就いて明かにしやうと思つたが、然しその解釋は大抵哲學的であつて科學的ではない。それは生物の現象があまり複雜な爲に生命に就いて共通なる性質を見出され難いからである。我々はその種々な學說を總括して見れば大概兩派に分けることが出來る。卽ち機械主義（Mechanismus）と生機主義（Vitalismus）である。その二つの主義は今迄互ひに一勝一敗、絕えず繰返して相爭ひ、又現に互に相爭ひつゝある。私はそのことに就いては詳しく論じたくないが、然しドリーシュの學說と非常に重大なる關係を持つて居るから一言だけ述べて見たいと思ふのである。

そもそも機械主義と云ふのは何であるか、生機主義と云ふのは何であるかと云ふことに就いては學者の意見は全然一致して居ると云ふ譯ではないが、一般には前者卽ち機械主義は生命が理化學的現象の一種であつて、生物と無生物とは嚴密なる境がないと說くのである。もう少し詳しく云へば、生命現象とその他の自然現象とが同じ法則に支配されて、生命の歷程（プロセッス）と秩序（オーダー）は單に宇宙間に於ける法則と歷程とのある特別な場合に過ぎない。宇宙を構成する各元素の構造（constellation）と生物各歷程の構造とは同じ性質を持つて居ると。ドリーシュがそれを靜的目的論（Static teleology）と名づけて居る。機械論者の中に最も吾々の注意を惹いたのは、卽ちフエルボオルン（Max Verworn）氏の有名な「一般生理學」の中に引用されて居る生命を火焰で說明する見方である。その說明によると瓦斯の火焰は何時も一定な輪廓（假りに瓦斯が壓力と外界の狀態が變らないとすると）を持つて居る。瓦斯火焰は一つの炭素と酸素との化合作用であるが炭素の分子と酸素の分子は時々刻々に新しいのと入替はつて居るにも拘らず一定な輪廓を持つて居ると云ふのは、まさしく生物が時々刻々新陳代謝の作用をやりながら一定な形を保て居ることと同じ譯であらうと。かような說明は機械主義の中で最も極端なものであるが、然し近代に於てはことに生理學研究の中に隨分極端に生命を機械として解釋する人がいくらもある。ハクスレー（Huxley）が「生命の物質的基礎」（八六八年）を發表して、總べての生命現象は皆原形質の作用に本づいて居ると云つて居つたが、この樣な學說は今に於ては少しも珍らしくない、生物學者の中には寧ろ理化學を應用してあらゆる生命現象を解釋するのを得意として來た。ロイブ（J.Loeb）はまさしくその代表者の一人とも云ふべきであらう。

生機主義と云ふのは生命現象が理化學的法則を用ひて說明することは到底出來なく、生命は一種の特別な現象であつて絕對に理化學的法則に支配されないものであると說くものである。ドリーシュはそれを動的目的論（dynamic teleology）と名づけた。この學說を首唱したのはアリストートルである。彼れは生物が他の自然物との異は靈魂のあるとないとに依る、靈魂はあらゆる生物體の主體（Principle）であると說いた。靈魂と身體との關係は、彼れに依れば丁度眼と眼力との關係の樣な譯で、眼が身體とすれば、眼力が卽ち靈魂であると云たのである。こんな生機主義はたとへ今でも辯護する人あるにしても兎に角あまり神秘的であり又粗末であるから單に原始的生機主義として認められるに過ぎない。後世に於てこの學說を繼續する者は隨分あつたが、十九世紀になつて唯物主義の影響を受けて一時は殆ど何の形跡もなかつた樣な狀態に陷つたこともある。近代になつてカントやライル（Reil）等が生機主義を取り、ミュウラー（Müller）が「人類生理學提要」（Manual of Human Physiology）に於て人類並びに動物の生機現象を研究して生的刺激（life Stimuli）——卽ち生活の必要件——と死の現象から生物が特別な有機力を持つて居ると云ふことを證明して以來、ハルトマン（Hartmann）やルー（Roux）やラインケ（Reinke）やドリーシュ等が出て來て一時は生機主義はまた盛んな狀態になつて來たのである。

二

斯くの如く生機論者は隨分あるから、無論各々其主張する處は一致して居らないのである。今ドリーシュの學說が生機主義の中で如何なる地位に居るかを示す爲にラヴジョイ（Lovegoy）の意見によりて（Science）雜誌1909. Nov. 25; 1911, April, 21; 1911, July 21; 1921, Nov. 15 連載）先づ生機主義を二派に分つことにする。

（1.）科學の性質上の立場から自然界の現象は單に機械的說明で盡されるものでないと云ふ說。換言すれば自然界は全然機械的ではないが然し生物と無生物との間には別に嚴密な境があると云ふことを主張しないのであると。この一派に屬して居るのは第一は化學者オストワルドである。彼れは「唯勢論」（Energytik）と云ふ學說を唱へて勢力を持つてあらゆる現象を說明しやうとしたのである。ロッツエ（Lotze）が「生命と生命力」（Life and Life-force）と云ふ書物を出し、上卷に於ては極力生機主義に反對したが、下卷になつて冥想とか欲望とか感覺とか云ふ樣なものは到底理化學では說明されないから、やは

り靈魂を用ひて解釋しなければならないと主張した。彼れが靈魂と云ふのは即ち本能と云ふ意味に用ひて居るが、本能說を以つて生命の特殊な現象を解釋しやうとして、然も生物が無生物と別に區別あると主張しないのは即ち彼が第一派たる色彩を帶びて居る處である。

(II.)第二派の生機主義は自然界に於て生物と無生物とは嚴密な境がある、それ故に生命を說明しやうと思ふならば先づ生命自身に就いて考へなければならんと主張するのである。換言すれば生命が何であるかと云ふことを研究するには先づ生命の現象と他の自然現象との根本的區別が何處にあるかと云ふこととを解決しなければならん。この生機主義に就いては又幾つかの學派を分けることが出來るが今細かい處に立ち入る前に、先づこの兩種の生機主義は何處に違つて居るかと云ふことに就いて少し解釋を加へて見たいと思ふのである。これは二派の主張する處はあまり明かに區別ない樣であるが、然し前者は廣義的で後者は狹義的であるから往々(I)の推論から(II)の結論に導いて行く樣な混亂もある。それを分けるにはジェンニングス(Jennings)の意見に依れば次の樣である。("Doctrines held as Vitalism." American Naturalist. 1913 vol. XLVII p.887.)「假りにある人が機械的法則を以て生物の各現象を說明するには不充分であると主張する場合には、その人に同時に無生物を說明するには充分であると云ふ附加的條件をつけなければその生機主義が成立つか何うかと云ことを聽いて見れば直ぐ分るのである」

若し彼の答が成立するのだと云ふならば彼れの主張は第一派の生機主義に屬して居る、それに反する場合には第二派に屬して居る。つまり前者は生物と無生物との差別に就いてはあまり重きを置かないのである。

ラードル(Rádl)が次の樣な話しを書いた、「因果の觀念に就いて三つの見方がある。ある者は因果觀念を全然科學から排斥して居る、ある者は數量的元素を以つてそれを說明し然も因果の由來に就いて一言も言はないのがある、又ある者は性質ある實在的な原素を以つて因果的觀念を說明するのである。この三つの見方は第一は幾何學である、第二は機械主義である、第三は生機主義である。」(Rádl: Geschichte der Biologischen Theorien. Bd. I. S. 81.)このラードルの云つた生機主義はやはり第一派の生機主義である、普通我々の云ふ生機主義は大抵第一派の生機主義である。

然らば第二派の生機主義は何う云ふ分派があるかと云ふと先づ心理的生機主義と形而上學的生機主義との二種に分けること

が出來る。

（甲）心理的生機主義は心理的現象から生物の特殊的現象を解釋しやうとするのである。例へば生物の進化の原因は淘汰作用によるとすれば、その淘汰作用は單に機械的作用かそれとも別な作用かと云ふ疑問は自然に起るべきものである。近頃の新ラマルク學派　(Neo-Lamarckian)　では隨分多くの學者が進化の淘汰作用は單に機械的でなくて、それは意識のある精神作用が淘汰の重な因子をなして居ると主張するのである。との學説を最も烈しく唱へるのは生物學者パウリー　(von Pauly)　氏である。その他スペーマン　(Spemann)　やボヴェーリー(Boveri)等が皆その説を唱へて居る。

その他心理學者は意識とか衝動とか意志とか云ふ様なものを用ひて生物が特別な法則を證明しやうと云ふのは隨分あるけれども種々の缺點があるからあまり有力な學説とはなれない。

（乙）形而上學的生機主義は超自然的因子を用ひて生物の特殊な作用を説明するのである。例へばベルグソンやラインケ氏等皆そうである。その他ヴォルフ(Wolff)氏が(機械主義と生機主義）と云ふ著作の中に屢々「第一目的」(Primäre Zweckmässigkeit）と云ふ語を使て居るが例へば「ヰモリ」(Triton teniatus) の眼レンズを剔出すれば新しいレンズが出來て來る。然しそれは虹彩 (Iris) から出來るのでヴォルフはその作用を第一目的だと云つて居る。やはり一種の超自然因子と考へて居る。

ドリーシュの生機主義はやはりこの部門に屬して居る。彼はエンテレキー (Entelechy) と云ふ超自然的因子を用ひて生物現象の根本だと主張して居る。彼は一八九四年に「生物發生に關する分析的學説」(Analytische Theorie der Organischen Entwicklung)と云ふ論文を出して居るが、その時には彼れは卵體は一種の目的がある。然もその目的は全然機械の様に何か條件を定むれば卵の發育の歴程も測られると云つて居つた。ことに「發生の分析は將來必ず一種明かな理化學的生理又は構造の原素に歸すべきものである」と云つたのによつて之を觀れば、彼れが生機主義者であることは明かである。後になりて彼れは「動作」に就いて研究した結果、到底機械主義では説明されない幾多の現象に出會つたのである。その爲に彼は一八九六年に生命の機械説 (Die Machinentheorie des Lebens) と一八九九年に「形體發生に於ける方位」(Die Lokalisation morphogenetischer Vorgänge) と云ふ二ツの論文を出して全然考へを變へてしまツた。彼が「私は從來生物學上の各種の特殊な有機歴程は一定の構造又は秩序の上には皆靜的建築の様なものだと考へた、今は何故にその考へ方を捨てるかと云ふことに就いて

はもう云ふ必要もないが、とに角生物の現象の中にある生機的動力（Vital agent）が、なければならない。」と云つたのは如何に彼れの思想がその時に一變したかをよく示して居る。

三

以上に述べた處を考へればドリーシュは生機主義の中で如何なる關係を持つて居るかはよく分ると思ふのである。生機主義は今迄「活力論」と名つけて居るが、然し生機主義は前にも述べた樣に必ずしも活力（Vital force）を生物界の根本だと主張しては居らないから、ことに新生機主義（Neo-vitalism）――即ちドリーシュ一派――にはエンテレーキーと云ふのは何も力（フォース）でもないから誤解を避ける爲に私は生機と云つた方がいいと思ふのである。ドリーシュの生機主義は生物が自律的(Autonomy)であると云ふことに重きを置いて居る。そのことに就いては彼は三つの證明がある。これは彼れの實驗的精神で學説の中心とも云ふべきものであるから少し詳しく述べて見たいと思ふ。

第一證　實驗形態學から證明したものである。抑々十九世紀に於て實驗的生物學が非常に盛んになつて來た爲に、種々の生物學上の問題は皆試驗方法によりて解決をすることは一ツの新傾向である。發生學に於ても從來二つの反對の學説がある、一ツは豫定説（preformation Theory）で一ツは新生説（epigenesis Theory）である。前者は動物は卵の中に初めから出來て居つてそれが卵の發育に從つて段々發展して行くのであると主張し、後者は動物は卵の發育に從つて漸次に新しい器官が出來て各部分は皆各時期に出來たものだと主張するのである。

この二つの學説は近代になつて少し形を變へて尚互に爭ふ樣な狀態であるが、果して孰れが正しいかと云ふと先づドリーシュの解釋に依りて次の事が云へやう。

先づ記述的方面から始めやう。吾々は動物受精現象に就いて知つて居ることは成熟した卵と精子とが融合すると卵細胞は分裂を始める。先づ二つに割れる、それから四ツになつて八ツになる。かような分割は2^{9}迄に繼けると皆球狀に列べ始まる。それをブラスチュラ（Blastula）と稱する。それから細胞列がある部分が中の方へ陷込んで宛もゴムの球が一部分を引込む樣な形狀である。それから漸次に發育して行くと二層の球が出來次第に左右相稱（bilateral symmetry）をもつ完全な幼體となる。

ドリーシュの意見に依るとかような變化は皆新たに出來たものであつて、少しも始めから出來て居つた形跡がない。動物の

發生時期例へばd期からg期迄にはef兩期を經過するのであるが我々は、dの全體がgの全體に變つたと云ふことは云へるがgがd+e+fに等しいとは云へない。又gの内にある部分が即ちfであると云ふことも云へない。これは植物と違ふ處で我々が豫定説を是認し得ないのはその爲であると。

次に實驗方面から云ふと一八七四年ヒス（Wilhelm His）の「體形論」（Unsere Körperform）と云ふ著作の中に鷄の發生期中胚盤の各部は後になつて皆一定な場所の器官になると云ふことを書いて居るが、無論それは胎兒が豫め卵の中に出來て居るとは云はんが、一定な部分が一定な器官になると云ふのは、つまり豫定説の變形である。動物學者で有名なランケースター（Lankester）やホイットマン（Whitman）等は皆この説を贊成して居つた。

發生生理學の創始者と云はれるルー氏は蛙卵の實驗をやつた。(Über das Künstliche Hervorbringen halber Embryonen durch Zerstörung der beiden ersten Furchungskugeln. 1888. Virchow's Archiv für Ent. Bd. 114.) 彼は卵細胞が二つに分裂した時に熱い針でその二つ細胞の一ツを刺殺し殘る一つ細胞を發育させて見た。その結果發育した胚は唯體の半分しかないのでそれが確とかにヒスの學説を證明した考へた。

然るにドリーシュがウニの卵でやつて見た處が二細胞期で二ツの中に一ツを切り殘してもやはり完全な胚が出來る。卵の細胞が四ツになつた時に三ツを切つて一ツを殘す場合にはやはり完全な胚が出來て唯體積が普通(ノーマル)の四分の一しかないのである。この實驗はドリーシュが豫定説を否定したと共に又彼の哲學の出發であるから彼の哲學上に最も意味ある事實である。

彼れの意見によると斯くの如き動物の卵、例へある部分を割去しても、尙普通の通り發育して「完全」な一ツ幼體になると云ふことは、各細胞が皆「相等しい」潜勢力（Potency）を持つて居るからである。それでこう云ふ動物體を一ツの系（System）と見做せばこの卵は「等勢系」(äquipotentielle Systeme)と稱すべきである。然し各細胞が各々等しい潜勢力を持つて居るが全系として考へる時には、細胞は各々全系の一部分の職務をなすから必ずしも全系のプロセッスが各單一の潜勢力(ポーテンシー)の總和とは一致しない。普通潜勢力の可能性（彼はprospective potency と名けて居る）は何時も形態上に顯はれる實現性（彼はprospective value と名つけて居る）よりも大きい。こう云ふ等勢系は調和的等勢系（Harmonisch-äquipotentielle Systeme）と稱す

然らばこの調和の作用——換言すればその秩序（order）——

が何處から來たか。我々が生物體の一部が傷つけた場合に同復(Restitution) 又は再生 (Regeneration) の現象が起る、これも一種の調和作用であるが。これらの作用は單に機械と見なすべきか、それとも他に因子があるかは、この議論の要點である。若しそれが機械だとすれば我々の知つてる機械は皆三元空間に於て、ある一部分を變更もしくは失ふ時には、必ず全部の秩序を失つてしまふのである。それで斯くの如き可能性の平均的分佈(homogeneous distribution of possilbities) ——即ち各細胞が皆同じポーテンシーを持つて居ること——が實現性の相異的分佈 (heterogen ous distribution of reafities) ——即ち細胞が特別部分は特別機能を持つてること——に變ると云ふことは普通理化學上に見られない因果律であるから、それをとくに個性因果律 (Individualising Causality) と名づけて居る。その個性因果律をなす因子は即ちエンテレキーである。

第二證は形體發生の同復 (morphogenetic restitution) から證明したものである。上に述べた調和等勢系の外にまだ一種の等勢系がある。それを複雜等勢系 (Komplex-äquipotentiel System) と云ふ。調和等勢系に於ては形體成生は各單一な原基の調和的作用によるのであるが、複雜等勢系に於ては各原基(即ち細胞)は全體を構成することが出來る。それで前者は單一的工作であり後者は複雜な工作を營むのである。例へば植物の形成層 (Cambium) は顯花植物の莖枝や幹の內外兩層の細胞の間にある。枝が傷ある場合には、形成層の一ツの細胞で直ることが出來る。それが即ち複雜等勢系の代表的例である。

動物に於ては例が澤山ある。キモリが脚を傷つけると直ちに再生するが、こう云ふ切口は即ち複雜等勢系である。ミヽズや他の環虫類に於ては最も再生力が強いのである。

最も見られ易い例は生殖細胞であるが、一つの卵はその起源は一つの細胞に過ぎない。それが幾度も分割して始めて胚になる。この樣な作用は我々は到底機械說では明になれない。機械は何十同そはを分割して、尙機械の役目をなすものは恐くないであらう。例へばここに一ツの汽船がある、それの機械が壞れたらそれを取り換へ、今度は船が壞れたら船を取り換へ、そうすればやはり同じ船が出來るけれども、その「同じ」と云ふ意味は動植物の再生や、回復現象とは全然違つて居るのである。

單に再生や回復現象で生物の自律的であることを證明しようとするにはあまり漠然であるが、今度はドリーシュが適應(adaptation) からそれを說明したことがある。それは我々の知つてる通り昆虫の體色はよく樹葉や何かに模倣して自身を隱すことがある。濠洲に曾てある植物を高山の上に植えさして、その

植物の新しい環境に對する適應を試せした。その結果は、その植物は新しい厚い皮が出來してその寒さに抵抗して居ることを發見した。ルー氏が「機能的適應」と云ふ學語を作つて居るがそれは例へば腎臟病に掛つた人が、その一つの腎臟を切つてしまへば殘る一つが二つの腎臟の役目をしなければならないから、次第に增大して來ることがある。この作用は生物の自主を證明する一つの例である。

それから生物の體の中にある毒素が入るとそれに對する抵抗素が自然に出來る。然もあるものに對して各適當なものが出來る。卽ち毒素（Toxins）に對しては抗毒素（Antitoxins）が出來る。この作用は普通化學的反應とは趣きが異つて居るから機械說で解釋されないものである。

第三證は行動に就いて證明したものである。心理學で本能はあるかないかと、餘程問題になつて居るが、然し行動に就ては殊に人類の行動に就いては我々が二つの特徵を見出すことが出來る。一つは歷史的基礎（Historical basis of action）があることと、一つは個性化の反應（individual correspondence）があると云ふことである。歷史的基礎とは何であるかと云ふと、卽ち今迄の刺戟と事實は皆我々の行動の基礎をなして居る。例へば私がある友人と大阪に行くと假定し、始めは路がわからないが、然し一度二度位行くと、一人でも路がわかつて來る。それから一ツかばんを買ふと、始めはその鍵が開けられないで色々工夫して漸く開いたとすれば、二度目には工夫しなくとも同じ方法で直ちに開けられる。これらの事實は卽ち歷史の基礎である。ある人が機械も歷史の基礎を持つて居ると主張するが、然し蓄音機が歷史の基礎あるとすれば（蓄音機が一度吹込むものが今度繰返して歌ふのであるから）それが第一回の歌つたものと第三十第四十回のと全く同一なもので、つまり出す反應と受けた刺戟と全然同じものである。人の行動はこれに反してその受けた刺戟が分散して新たに結合するから、その場合その時に應じて、結合の方が全然違ふのである。假に人間が、脊髓の樣なものでＡＢＣＤＥＦ等の歷史の基礎が入つてるとすれば、我人の行動はそれらのＡＢＣＤ……歷史の基礎に準じて行ふけれども、必ずしも原の順序と一致することはしない。或る場合はＡＣＤＥとし、ある場合にはＥＤＡＢとして、新たに配合するので、機械と最も異なる處である、これが機械說で說明されないのである。

次は反應の個性化に就いて一例を擧げよう。假りに友人である甲乙兩人は皆英國に居るとし、彼等は獨逸語と英語イタリヤ語の三つの言語を覺えてるとする。甲が獨逸語で乙に對して

「私の父は病氣が非常に重い」と云へば乙が甲の友人であるから、自然にそれを聽いて非常に氣の毒と思ふが……とにかくそれは乙が甲の刺戟を受けた反應である。今假りに甲が英語で語せば無論乙が英語を知つて居るからその受けた反應は同じものである。それから意太利語を語せばやはり同じである、處が今假りに甲がその語の內容の一ツ字を變ると、「貴方の父は病氣が非常に重い」とすれば、その言語に對する反應が全然違つて來る。物質上から云へば Mein Vater ist ernstlich erkrankt と Dein Vater ist ernstlich erkrankt との違ひはMとDとの一字丈であるから、當然その刺戟の變化は三國語を變る時よりも小さい筈であるが然しその反應は全然反對と云ふのはこれ即ち個性化の關係から起るものである。

四

以上の三つの生物自主律の證明は卽ちドリーシュの哲學の出發點で、云ひ換へれば生物の因果律と無生物の因果律とは全然異なるものであると證明した譯である。然らば生物界の因果律とは何であるか、無生物界の因果律とは何であるかと云ふと、ドリーシュの意見によれば無生界は單一的因果律 (simple causality) であつて、生物界は個性的因果律である。このことに就いては後で述べることにするが、今ドリーシュのエンテレキーの概念に就いて少しく述べておかうと思ふ。

エンテレキーと云ふ字は曾て數千年の昔アリストートルが動物發生の研究に用ひた言葉である。希臘語の εν (在る) τελος (目的) εχειν (有る) と云ふ三つの字の結合で終極體と云ふ意味である。ドリーシュは生命に就いて科學的にその概念を明かにしようとしたがそれが動機として遂にエンテレキーに導ひたことは氏に取つて成功か不成功か別として、我々は科學の立場でなく哲學的立場で論ずるならば別に非難される處が少しもない、否や寧ろ彼れの理想主義の最も高潮に達する點である。彼の名著生物の科學と哲學 (Science and philosophy of the organism, Gifford Lecture) 獨譯 (Philosophie des Organismen 1902) の中に殆ど三分の一はこの問題の爲に用ひられて居るから、彼の哲學の體系に取つて如何に重要であるかはそれで分ると思ふ。然しそれを詳しく論ずれば餘程紙幅を要するから、今其要點丈擧げると、エンテレキーはエネルギーではなし、物質でもなし、十八世紀に所謂活力でもなし、又デカルトの靈魂でもない。それは一種の空間に入る動力で純粹の論理上に屬するものである。彼が「生機主義の歷史及び理論」と云ふ著作の中に明かにそう記して居る。

"It may be well to explain here in detail that entelechy—or any other individualising agent, if such there be—is itself neither "an energy" nor "a material substance" of any spatial kind: such an assumption would lead to absurdities. Entelechy is an agent *sui generis*, non-material and non-spatial, but acting "into" Space, so to speak; an agent, however, that belongs to nature in the purely logical sence in which we use this word" (The history and Theory of Vitalism p. 204)

自然界上に事件の起る普通條件は、即ち何か不平衡な強度(intensity)——例へばエネルギー等——がなければならん。假りに二つの等しくない勢力があるとすれば、それら勢力が互に相作用して何の方が力が大きければ大きい方から運動が始まる。ドリーシュの云ふにはエンテレキーもそうである。今強弱二ツの力があるとすればエンテレキーがそれを充補し調和することが出來れば又時に於ては起るきべき作動を抑止することも出來る。又時によれば再びそれらの動作を放任にすることも出來る。生物上に於ける現象は皆この作用によるものであると。「同復再生及び適應上から見ればエンテレキーは實時に起るべき反應を抑へ、且一定の目的に應じて任意にこの方面の反應を抑へ又はある方面の反應を抑へることが出來る。斯くの如き作用はエンテレキーの特有なものでエンテレキーのみそれが出來る」(Science and Philosophy of The Organism Vol. II. pp. 180, 185, 187,)

譬へば一個の細胞の中にＡＢＣＤ——等化學成分を含んで居る。そしてそれらが皆互に接觸しようとして居る。エンテレキー任意にＡとＤを化合させて、ＤとＢ、ＣとＤを抑へることが出來る、この四ツの化學成分は H_2SO_4(硫酸) HCl(鹽酸) KOH (苛性カリウム) NaOH (苛性ナトリウム) とすれば、H_2SO_4 とKOHとを抑へ N.OH と HCL を化合させば、一定の化合物が出來る。若しその抑へ方と化合方とが反對にやれば又異なつた化合物が出來る。毒素が體の中に入る場合にはエンテレキーがそれを抑へて、又組織に他の抵抗素を生ぜしめる。卵の細胞は皆同じ體の各部にある可能性を以て居る、然しエンテレキーが何の細胞が何の部分にならせることが出來る。そうして生物各動作を行ふ同一の條件を以て居る時には、エンテレキーがそれを決定させることが出來る。斯くの如き動作を抑へる時には運動エネルギーを潜伏エネルギーに變ることが出來る、且又反對の方面に同復することも出來る。それでエネルギー法則とは矛盾しないが然しエンテレキー自身がエネルギーではな

い。

ドリーシュの用ひた例で簡單に云へば假りにM質量ある運動の原素がある。運動の間にエンテレキーが抑へれば運動エネルギーは同量の潜伏エネルギーに變つてM質量の中に蓄へらる。今度抑へを緩めたら（"Auslösung"）再び運動エネルギーに返つて來る。それで同一性質の物質が運動する場合にエンテレキーに抑へられて居るのと抑へられないものとは結果は餘程違つて來るので生物學上同一狀態の下に異なる結果を出すのは即ちエンテレキーの作用であると。

總てエンテレキーはドリーシュの生物哲學上より歸納して產出した概念である。果して實際にこう云ふものがあるか何うかは到底明かにされないのである。然し生物界に平均に分布した可能性が、種々の異なる實現性に變ると云ふことは、確かに何か因子がある樣である、遺憾ながらドリーシュがそれ以上に我々に智識を與へることが出來ない。生物と云ふ謎はエンテレキーと云ふ謎に變つたに過ぎない樣であるが、然しドリーシュが斯くの如く論理的に綿密に生機主義の體系を產出して生機主義の哲學史上に一大光彩を放つたとも云ふべきもので、今は新生機主義の代表者として近代哲學に名聲を博して居るのも、決して偶然のことではない。唯物主義の橫行する現代に於て勇敢に反對の旗幟を擧げ衆敵と挑戰するドリーシュ氏の精神は我々大に敬服すべき者である。

五

以上に述べたものは所謂彼の生物哲學の中心であるが、今一步進んで彼れの哲學全體の體系を少し述べて置こう。

我々がドリーシュの生物の自主律に關する三つの證明の中で最も顯著な現象として認めるべきものは、即ち生物は皆完全性（Ganzheit）に向けると云ふ特徵を持つて居ることである。例へば細胞が胎になる。生理上に毀損ある場合には回復と云ふ現象が起つてそれを補ふ。生理上にある器官が變化ある場合には他の器管が變化を起してそれに調和する。――云換へれば生物が皆「完全」を保て居るのである。この生物が完全に達せんとして居ることとは即ち有機體の大なる目的である。宇宙も一大有機體であるが人間がその間に生れ、この全體を紊れることなく整理して始めて秩序と云ふものが出來る。若しこの宇宙が秩序ある全體（One ordered Totality）となつたならば我々の學問も既に終つたに相違ない。ドリーシュが全體性の論理は論理の始めであり且又論理の終りである（The Logic of wholeness is the beginning and the end of all Logics.）と云放

つたのもこの意味である。全體と云ひ秩序と云ひ皆論理の根本であり又人類智識の泉源である。ドリーシュがこの二つの觀念を以つて彼れの哲學を建てたのである。

今彼れ自身の Mein System und sein Werdegang (Philosophie der Gegenwart in selbtdarstellungen Bd. I) と云ふ論文の中に示した系統を引用すれば次の樣である。

哲學系統
- 1. Lehre vom Ausgang（出發論）
- 2. Ordnungslehre（秩序論）
  - 1 Allgemeine Ordnungslehre（一般秩序論）
  - 2. Naturordnungslehre（自然秩序論）
  - 3. Seelenordnungslehre（心靈秩序論）
- 3. Wirklichkeit（實在論）

我々がドリーシュの哲學著作を讀む時に、最も驚くことは卽ち彼れはよく創作した語を使つて、あまり新カント派の慣用語を用ひないことである。例へば Jetzt-hier-so-Verknüpfungen とか Khordnungsgültige とかよく彼の著作の中にあるがこれは新カント派に滿足しない表示である。

I 出發論　ドリーシュの哲學と新カント派との差異は彼の出發論に於て最も明かに分るのである。新カント派の哲學は思考を以て哲學の出發點とし、ドリーシュは「有る」(Haben) と「知る」(Weiss) を以て哲學の出發とする。思考と云ふのは概念を聯合して斷定を下すと云ふことで、自發的一種の活動である。然るにドリーシュは、最近の思想心理學の研究から「活動」とか「なす」とか云ふものは、靈魂に屬し、我々の哲學上に於る「思」と云ふのは、實際 Haben と云ふ狀態で活動と云ふ原素が入つて居らないと主張して哲學の出發は單に「ある物を知る」と云ふ形式丈で思とか欲とか云ふ分子が少しもない筈であると證明した。

それでドリーシュは「私があるものを意識して居る」(Ich habe bewusst Etwas) と云ふ根本語を出して居る。その一句は三ツの部分からなつて居る、卽ち「私」と「意識して居る」と「ある物」とである。この三つの關係はドリーシュが原始關係 (Urbeziehung) と云ふ名稱を用ひて居る。

私とある物との間には、始めは何も活動とかなすとか云ふ關係はなくて唯「觀る」(Schauen) と云ふ丈である。觀ると云ふことは卽ちこの原始關係の下に某物の秩序の符號 (Ordnungszeichen) を發見することで、秩序符號の最終體は唯「彼レ」「此レ」「關係」とか云ふ樣なものであるから動作なしでも直觀で得られるのである。

この「我れ知る」と云ふことは、もとより自分の知つて居る

限りで他人が何であるかと云ふことに對しては問はないのである。それでドリーシュが自分の哲學研究の出發方法を「方法的我知主義」(Der methodische Solipsismus) と云つて居る。これはもとより彼れの哲學の出發方法であつて、哲學の全部ではない。

II 秩序論　ドリーシュの秩序論は三部に分けて居る。曰く一般秩序論、曰く自然界の秩序論、曰く心靈界の秩序論である。ドリーシュの哲學出發に云ふには人が事物に對して、ある秩序を求めそうして宇宙の大なる全秩序が同樣に一覽の下に得られんことを冀望して居る。この複雜なる宇宙が我々見る時にあだかも首尾よく亂れない完全な全體になるのは我々人間の理想であると。この思想が秩序一元主義 (Ordnungsmonismus) 或は秩序一元主義的理想 (Ordnungsmonistische Ideal) と彼れは名づけた。彼の「知と思」(Wissen und Denken) と云ふ著作の中に次のことを書いて居る。

Ich wünsche das Etwas, welches ich habe, so zuschauen, dass es trotz seiner vielbicht bestehenden Mannigfaltigkeit ein Ganges ist, und zwar in jeder Begiehung.

然るにこの理想は得られないのは甚だ明かである。それである物に就ての秩序は單に一般秩序だけは求られる。一般秩序論は所謂秩序の最終體 (Ordnungsletztheiten) 或は分析されたい秩序の意義を研究し、これらの符號を各科學に應用して科學の基礎を吟味するのである。彼れの秩序符號と云ふのは「此れ」(Dieses)「此でない」(Nicht-dieses)「コンナ」(Solches) 關係」(Bezogen)「違フ」(Verschieden)「數」(Zahl)「相並べ」(Neben)「度」(Grade)「平行」(Parallele)「綠」(grün)「酸い」(sauer)「音符」(Cis)「樂」(Lust) 等である。これらの中に五官で知るものは「綠と酸」等で五官でわからないのは「關係」等である。然し感覺でわかるかわからないかは別としてとにかく皆最終性の秩序符號である。論理學は彼れこれの內容の關係の關係學說であり、數學は多少の關係の關係學說である。又幾何學は「相並」(Neben) の觀念の上に建てるからこれらの符號はこれらの科學の基礎である。然しそれは論理學や數學には適用するが、自然科學や精神科學には適用されない。こう云ふ場合に於て所謂自然界の秩序論と心靈界の秩序論が出來て來る。

自然界秩序と心靈界性序　先に述べた樣に最終性の符號は「此れ」「此れでない」等であつて我々の意識の中にある物はこの二つの符號の孰れかを持つて居るべきものである。かような符號を持つ物は直接對象と云つて直接に我々の意識の中にあ

る。然し直接對象の彼此の關係は始めには別に一定の秩序がある譯でもなし、全然紛亂的である。ドリーシュは "Objectivity in immediateness remains chaotic" ("Problem of Individuality" 1914, p. 44,) と云つたのは即ちこの意味である。然るにこの紛亂したるものを秩序ある者に變らせるには如何と云へば、ドリーシュの考へに據ると、先づ「當時」(Der Damals-Ton) と云ふ念から始まる。當時と云ふのは前後を比較する分段の點からなる一度の列 (Eine eindimensionale Reiche) である。即ち時間の觀念の出發である。我々に意識される物が永續の時間に對して不永續的であればそれを「變」(Werden) と稱し永續の時間に對して不變的であればそれを「恒」(Dauer) と稱する。直接對象が何時も變らない場合にはそれが同時に間接對象 (mittelbaren Gegenstand) になるのである。換言すればこの瞬間に意識される直接對象がこの前の瞬間又は次の瞬間に於ける同一な直接對象が意識の流と同時に變つたか變らないかと云ふことによつて、この對象は直接對象と間接對象と同一のものになるかならんかを決定するのである。若しそれが同一なる場合には即ちこの對象が我々の意識されるか意識されないかに拘らず常に獨立存在するらしい樣になつて居る。この獨立存在するらしい間接對象の全體が即ち自然界である (Die Gesamtheit der so gemeinten mittelbaren Gegenstande heisst die Natur) それで自然界と云ふのも秩序の概念に過ぎない。

然し自然界に於て秩序一元的理想に到達されないことは一般秩序論と同一である。この理想に代るものは即ち「分類」(Klassen) と「系統」(Systematik) と「因果律」との三者である。同類のものを一つの類の中に入れることは即ち分類である、同類のものの相異を考へその理由を見出すのは即ち系統である。そして自然の因果關係を見出すのは即ち因果律である。

因果律はドリーシュの考へによると四つある。第一單獨因果律即ち前の一事を原因とすれば後の一事を結果とする物理化學上の因果律である。第二個性因果律或は全體性因果律即ち前の一狀態たゞ數字排列であれば後の一狀態になると一全體になる樣な因果律で一般に生物界に見られるものである。この外又二つあるが、一は物の創造で、一つは動の創造である。この二つは現世界に於て發見されないから事實上に於て問題とならないが單獨因果律と個性因果律は確かに自然界によく見られるのである。然らば全體性の因果律は生物の他にまだ何かあるかと云ふと、學者の中に種族沿革論及び歷史學に於て皆人類と歷史は皆目的を持つて居るからやはり全體性の因果律があると云ふ人もあるか、然しドリーシュの考へによれば、それらの證據はま

だ不十分であるから斷定が出來ないと云つて居る。

心靈秩序に於てドリーシュが心靈と云ふ言葉に解釋を與へて居る。先づ「我」(Ich) と云ふのは瞬的なもので能動的なものではない。「我」と外物との關係は單に斷續的點の關係を持つて居るに過ぎない。然し「自己」(Selbst) になると、それは記憶に本づいて居る、から前後の關係はあるが永續の時間に對しては尙不永續的である。何故ならば我々は睡眠する時にこの記憶或は經驗の流 (Erlebnisstrom) は常に中斷するからである。それでこの流は眞の流でなくて電流の光燄の樣なものである。(Wissen und Denken p. 40.) 我々が若し其の流を求めたいならば、それは靈魂である。換言すれば記憶の主體は「自己」であるが記憶の外に潜意識の全體が靈魂である。前に述べた樣に直接對象が獨立の樣な間接對象になる時に於て、自然界の概念が始めて成立ツと同樣に、直接對象が靈魂上に獨立な間接對象になる時に於て靈魂の概念が成立つのである。靈魂の説があれば始めてカントの所謂官覺理性が解釋出來るから、ドリーシュはこれを以て心理學の根本として居る。この「我」について原始關係中の超時間の我 (Ich) と記憶中にある我の「自己」と永續的一貫の主體を有する我の「靈魂」との三つに分けて居ることは、ドリーシュの心理學に關する意見である（詳しいことは「知と思」P. 45にある)。

六

III 實在論　ドリーシュの哲學は「我知る」と云ふことを以て出發して居るから、事物の實在に就いては何も議論しないと私は先きで云つた樣だが、然しそれは單に出發の方法であつて、若し我々はそれで滿足するならば、到底宇宙の眞理を見出すことが出來ないであらう。それで彼は物の實在の認識に於ては「實在論」を以て秩序論に代るのである。ドリーシュの認識論を以て秩序論は先づ經驗界の內容を以て物の實在を搜す、云ひ換へれば經驗界の現象を結果とし實在を原因として、結果から原因を推測するのである。それ故に形而上學は假定の性質を免れないとドリーシュが云つたのである。彼れの實在論は二部に分けて居る。曰く一般實在論曰く實在の形式論 (Lehre von den Wirklichkeitsformen) である。この二部は死の研究を以てそれを連絡して居る。一般實在論の中に研究される問題は(一)空間の解釋(二)變 (Werden) の解釋(三)因果の解釋(四)特別と普遍(五)全體問題或は秩序一元主義等である。ドリーシュは以上の各問題に於て種々の實例を引用して事物の千變萬化到底我々の知る限りでは盡されないものであると云ふことを證明し、秩序論で所謂知て居るとは實在論になると我々が知つて居ると云ふことは云へないのであると吟味したのである。それで普通で空間と云へば相並 (Neben) と云ふ意味であるとなつて居るが然し事物そのものに就いて云へば、果して相並べし得べきものではない。カントが空間は主觀的觀察の形式であるか、それとも種々の形狀を表現して居るかは我々の研究ると云つて居たが然し相並そのものに就ては、始めは何も答へ

なかつた。たゞ經驗界の空間的事物と空間的現象から見れば、實在界に於て必ず一種の特種關係形態（Ein besonderes Beziehungsgefüge）があるに相違ないと云つた。然しこの特種の關係形態は到底我々の知るべき處ではないのである。スペンサーが「實在は必ず空間を占領する」と云つた。ドリーシュの考へによると、物理化學上の現象は、それであるかも知れないが生物界の現象に就いては、その結果を見れば空間を占領するが、その原因（エンテレキー）に就いて云へば必ず空間を占領することも云へないのである。つまり生物界の實在は現象の上に現れて居ないものがある。單に現象界に捉らはれて宇宙の全體を云はうとするのが如何に困難であらうと云ふこともその一例によつて明かである。

因果問題に就いても空間問題の樣に、到底斷定的に解釋することが困難である。我々が物理界の變化に於て一因一果は易く云ふが、超個人的變化に於て、例へば種族沿革や歷史等に就いては何が原因であるか何が結果であるかは到底云へないのである。それで超個人的變化中に單に自由のみあつて因果がないと云ふ哲學者がある。それは即ちベルグリンである。我々は論理的假定の因果論を承認すべきか、それともベルグソンの Dieu scait を承認すべきかは要するに人の信仰如何によつて論理的に斷定されないものである。

以上は所謂現象を結果とし實在を原因として結果から原因を推測する立場より論じたものである。今一步進んでその方法を捨てゝ、他の一界に突進するには、死の研究を持つてその導線としなければならない。死そのものに就いては既に經驗界に屬しないから、何人もその性質を說明することが出來ない。然し死は經驗界の事實であると云ふことは又何人も否定しないのである。人が生は始りであり、死は終りであるとよく云ふのであるが、これは單に時間を標準として云たもので若し時間を標準としない場合には、その反對とも云へないことはない。終りと云ふ意味は、ある形式から他の形式に移行く階段である。換言すれば「時間的」から「非時間」に移り行く境である。それ故に死と云ふのはやはり時間的から非時間的に移行く狀態である。我々は生物等の研究によつて生物體は非空間的から來つたものであるから、同時に「非時間的」から來たものであるに相違ないと斷定することが出來る。生物の始りは非時間的から來たものであるから、終りも非時間に歸ると云ふのも決して無理はない話である。この死を以て時間的から非時間に變る境界と云へば非時間的の變遷の基礎は何であるかと云ふ疑問が自然に起るのである。ドリーシュの考によればその基礎は即ち「神」である。神は一切現象の根本で未發展的の發展可能の概念（unentwickelte entwickelbarer Begriff）で即ち大全體の中に各部分が同時に存在して居るものである。この神の說について、種々な意見があるが要するに可能的であつて決定的ではない。ドリーシュは種々の神の說に就いて批評して居たが斷言は與へて居らなかつたのである。

七

以上の論述を見れば、ドリーシュの哲學は如何なるものかと云ふ概念は先づ得られるだらうと信ずるのである。我々はドリーシュの生物哲學に於て、最も明に認られらる點は、即ち彼は實驗的生物學から生機主義に導き、その生機主義の體系をつくる爲に論理學に入る。從つて彼の秩序論と云ふものが出來る。そうして秩序論を擴張する爲に、彼は形而上學に入つたのである。これは彼れの哲學の發展順序である。そして彼の哲學の精神は多くはカントや新カント派やことにフオルケルト（Volkelt）やマイノング（meinong）から影響を受けて居る。彼の精神は理性主義であるが共二元論的分子は屢々各著作の中に見られる。それは彼れの眼の前に於ける宇宙が實際そうなつて居るから良心の責咎によつてそれを承認しなければならないのであると彼れ自身が云つて居る。この點に於てドリーシュは多く哲學者の武斷主義の弊に陷る樣な傾向を持つて居らないことを證明するに十分である。嘗てハイデルベルヒ大學の動物學を講じたる氏は一度英國の名譽あるギツフオード（Gifford）講師として招聘されて斯界に於て哲學の名望を博し、そしてキエールン大學の哲學教授時代に於てロンドン大學に招聘されて又大なる歡迎を受け今や獨逸哲學界に最も有望として人氣を一身に集めて居る次第で、彼れの哲學價値はそれで十分に證左となすことが出來る。私は今この文の終りに際して、教授の最も有名な著作を紹介して置かう。

1. Analytische Theorie der Organischen Entwicklung. Leipzig. 1894.
2. Die "seele" als elementaler Naturfactor. Leipzig. 1903.
3. Naturbegriffe und Natururteil. Leipzig 1904.
4. Der Vitalismus als Geschichte und Lehre 1905. The History and Theory of Vitalism. by Ogden.
5. Science and Philosophy of the Organism (Gifford Lecture.) 2 vol. 1907–1908. Philosophie des Organischen. 1908.
6. Vorträge zur Naturphilosophie.
7. Ordnungslehre. 1912.
8. Problem of Individuality (London Uni. Lecture) London. 1913.
9. Die Logik als Aufgabe. 1913.
10. Leib und Seele. 1916.
11. Wirklichkeitlehre. 1917.
12. Logische studien über Entwicklung. 1918. Heiderberg.
13. Wissen und Denken. 1919.
14. Logische studien zum problem teleologischen Geschehens. 1921. Cöln.
15. Das Ganze und die Summe. 1922. Leipzig.

其の他諸雜誌に掲載された論文や動物學上に關する專門的の著作は合計百種近くある。（終）

共產黨結社嫌疑檢擧事件の嚴正批判

國家と大學

杉森孝次郎

國家が大學を承認する意思は、學問研究を保護し、間接にそれに奉仕するに存すべきだ。それゆゑに、大學が大學としての、すなはち學問研究の社會機能を代表する一組織としての、本分に忠實である限り、その大學が、いかなる材料をいかに扱ふかは、いひかへるならば、問題をいかに選擇し、いかなる方法を採用してそれを研究するかは、その大學の自治の範圍内に屬する事柄であるといふことを、現代に於いて、もろ〳〵の社會機能の綜合的保導の任を負ふ國家としては、自身進んで主張すべきだ。

學問研究の純眞なる精神、態度、方法を確保することは、いふまでもなく大學の本分だ。その代はり、その本分が遵奉されてゐる限り、國家は、その大學の內事に、權力をもつて干與すべきでない。したがつて、例へば定義通りの正しき意味に理解された警察が、あるひは內務、司法等の國家吏員が、定義通りの正しき意味に理解された大學を、それの研究室や教場等を、臨檢する場合の正當存在は考へられない。

內務、司法等の國家吏員が、大學の研究室や教場等を臨檢してよい場合があるとするならば、それは、それらの研究室や教場等が、研究室や教場としてでない、ある他の目的にむかつて使用されたといふ相當の嫌疑として、あるひは見當としての判斷がその吏員のがわに成り立ち、そして、その吏員が、かれの公職上の目的を達するために、臨檢を合法的に必要とされた場

合に限る。換言すれば、研究室や教場等の使用者としての教授、講師等が、大學の内に於いてなり、外に於いてなり、國法を侵犯した行動があつたといふ相當の判斷を法の當局者から受け、法の當局者は、その判斷を確證する目的に於いて、ある研究室や教場等に有力なる材料があるかも知れんと考へ、大學の當局にむかつて臨檢の意思を通じ、その當局はまた目的とされた研究室の使用當事者に事情をのべ、國法吏は、それら當局及び當時者の應承を經、もしくは經ざるも國法吏としての自由と責任にしたがつて、いはば權力をもつて臨檢を斷行するといふ正當な場合は、研究室が研究室として使はれなかつたといふ事實が、國法侵犯的行動の材料もしくは證據物件を有力に帶着し、含有するかたちに於いて存在する場合に限るのだ。その存在が絶對確實として豫知されてゐないまでも、ある程度以上に確實に豫知されてゐることは、國法吏の輕擧、妄動、不明を成り立たせないためにも、大學の自治を保護するためにも、一肝要事だ。

國法吏が、いかなる程度に、臨檢の正當必要を客觀的に具有してゐたかは、取り調べが進むにしたがつて明確にされる犯罪行爲の有無によつて證示される。

開きなほつた議論は別として、臨檢の大に比して結果が小であつた場合には、臨檢に純化の餘地があつたことが示される。その餘地だけは、臨檢者の不功績ともいへるし、ある深い、廣い意味に於いて無責任とも、職務不忠實ともいへる。そして、大學の當局についていふならば、その餘地だけは、痛くない腹をさぐられた迷惑をも意味するし、敢然として立つて豫じめ臨檢の不用を學校及び國法吏の兩者のために釋明し、辯說するだけの理解と知識が、自校の教職員に對しては平素から準備されてゐることが望ましいし、内部の同僚に對する外部からの嫌疑を、いはば濾過せずに通ほさないだけの、聰明なる善意をその同僚及び外部に示しうることが望ましい。

ある種類の研究は、結論に達した瞬間に於いて、ある意味の宣傳に移る必然性を持つ。またある種類の宣傳は、ある觀念の行動的實現を必然的に内容とする。それゆゑに、研究と宣傳、研究と行動とを、すべての場合に完全に二元的事實として扱ひうるかといふに、決してさうではない。要するに、純眞にして高尚な、そして溫たかい人間愛に盛られた理想主義、眞理追求主義が基礎的必要條件だ。信仰の差は、いまでは公刑をも私刑をも戰爭をも伴はなくなつた。いかなる意見や趣味や理想の差も、ある種類の友人間に於ける如くに、すべての人人の間に、まじめな、眞劍な、平和的自由論究のかたちと精神とに於いて十分に發表し合はれることが最も望ましい。社會科學と人性科學の

研究は、自然科學の研究に比しては、宣傳化と行動化を直接に促進させる本質的必要を餘計に持つ。けれども、社會科學及び人性科學の、殊にも社會科學の研究は、現代の最大責任、最大時務の一だ。その研究が、結論らしい結論に達するか達しないうちに、早くすでに爭鬪や私刑や公刑が發動して來るやうでは、學問研究、眞理探求は保護されないゆゑに發達しない。

なまぬるく手間どるやうに見えやうとも、撲滅や强制に使ふ以上の決意と勇氣を内にそなへて、やはり、說得、啓蒙、教化、改信の方法を、現代人としては、十分に活用すべきだ。

研究と宣傳、研究と行動との間に、かならずしも截然たる區劃をほどこすことは本質的に不可能だといふことは、研究には研究の自治領域があり、宣傳や行動には、またそれぞれの責任、秩序、方法があるといふことを否定し、非認し、無視するわけではない。すくなくとも大學程度の研究室に於いては、目的が研究に存する限り、いかなる種類の經驗を研究の對象としても、決して不思議であつてはならん。かへつて、研究の對象、材料、題目の種類に、眞理愛以外の動機にもとづいて制限を設けるならば、それこそ大學としては恥づべき罪惡だ。不完全だ。國家が大學を承認する理由からいつても、それは同樣に罪惡であり、不完全であるとしてみとめられなければならん。研究心の前には、眞理愛のほかに、なんらの信仰對象もありえない。研究室から、例へばいかなる現存または既設の制度や權威に對する研究が露見しやうとも、それは、國家が、大學に、當然期待すべき事實のある種類が見つかつただけの事であるとして、國家として、これを問題にする餘地はないわけだ。もしも、その餘地が多少でもあるとするならば、現代の國家が、進化すべき餘地がそこにも示されてゐるのだ。

大學が眞理探求の職責を國家、社會から公認されてゐても、かならずしもその職責を果たす能力に於いて遺憾なからず、國法吏が秩序維持の職責を帶んでゐても、かれもまた能力に於いてかならずしも常に遺憾なしとせない。眞理探求の社會的一中心機能たる大學が、存外に愚昧な場合もあれば、官吏が頑冥な場合もある。大學の第一恥は似而非眞理探求にあり、官吏の破心事は似而非秩序維持に落ち入らぬことだ。國家と大學の兩方に聰明なる良心さへあれば、すなはち保守すべきものと、進取すべきものとを正しく知る力さへあれば、兩者間に變な排嫉的恐憎的關係はありえない筈だ。眞理を見る目と、眞理を言ふ勇氣との所有者が、昨今の事情を見るにつけても、奮起すべき必要が高いと思はれる。

大學には眞理探求の生活に直接に關係する自治が必要だ。し

かし、大學は社會の一內容にすぎないゆゑに、他のすべての正善內容との關係を目的とする責任が同時に必要だ。正しきかたちの國權の發動は、その責任の發動でなくてはならん。自治と責任とが、理想的原則としては一全體の兩特徵にほかならないが、經驗的には、時あつてか生存競爭の形式を取ることは、人間が不完全であることの一證據であると同時に、不完全なる人間が、進歩のために拂ふ高い犧牲の一種だ。

眞の左傾者と眞の右傾者とには、判斷と識見の問題を除けば、淸い、熱い血液が多量に流れて見える場合がまれでない。眞の中正者は、聰明といふ側面からさがしても、勇氣といふ側面からさがしても、さらに、さらにまれにしか見つからない。けれども、左傾も、右傾も、それがほんものである限り、それ自身非眞理といふ不完全を有すると同時に、生活の浪費だ。ここで、ほんものでない左傾及び右傾と呼んだのは、誤認された左傾及び右傾をさしたのだ。

わたくしは、國際間に友人主義を主張する如くに、社會科學研究者の間にも、友人主義を提唱する。われらは、全人のために一事を爭ふことの賢明を知る。一事のために容易に全人を犧牲にすることの偏狹を忘じえない。

普選も、勞働組合も許可されてゐない日本に於いて、靑、壯年者の興味は、滔々として左りを追ふ。現實の自由をあまりに吝嗇に與へられた個人と民衆は、想像の自由を畸形的に贅澤にむさぼる心理的必然性の一發現か。早きに臨んで社會不安の拔本塞源の明策を講ずるを要する。大學としては、人性科學及び社會科學の根本的研究に眞實に開眼せよ。

作用から離れた原理を幻覺的及び錯覺的に妄想してゐるのが現代のいはゆる哲學のほとんど全部だ。現代の教育組織は、學校を社會から隔離して保つところに學生の純眞性及び理想熱を保護する長處を有すると同時に、學生々活をして、ある種類の惡抽象主義に墮落させる短處をも有するやうに考察される。政治組織、經濟組織、家庭組織の反省と批判と改造が現代の必要であるに加へて、教育組織そのものが、それは實に大學組織や、學生々活といふ制度をも完全に含めて、反省、批判、改造の一大對象たるべきことを、なに人かついに疑ひえよう。

學園の自由と臨檢捜査

法學博士　吉野作造

× × × × ×

今度の事件に關連して學園の自由といふ事が問題になつて居る樣だ。併し研究室を臨檢捜索したといふに就て司法官憲を責むべき理由はないやうに僕は思ふ。其のやり方が亂暴に過ぎるといふ樣な點で攻撃するのなら格別、只臨檢捜査したといふ丈なら、研究室だからとて遠慮せねばならぬ理由は些ともない。寧ろそんな點に餘計な氣兼ねをせずにドン／＼敏速に目的を達すべき筋のものと考へる。

若し學園の自由といふ見地から責めらるべき者がありとすれば、それは早稻田大學の當局者でなければならぬ。必要があつて許されたる職權内で官憲の學園に立ち入るのは當然の話だが、之を當然として指をくはえて傍觀する學校當局者は、徒に神聖なる學園の自由に泥を塗つた咎を免るゝことは出來ぬ。

何故か。

學校は教授講師の人格識見を信頼して講釋と研鑽とを托し、其爲に研究室を提供して居るのだ。從つて學校と教師との間には密接なる信頼敬重の關係が成立つて居る筈だ。官憲が不幸にして之等教師の一二に重大なる刑事事件の嫌疑をかけしとせば、その爲めの臨檢捜査は已むを得ぬとして、一應は必要なる措置を自らの責任の下に取る丈の決心が學校當局者に無くてはなるまいではないか。例へば暫く司法當局の直接に手を下すを猶豫して貰ひ、其代りに研究室は封印をした同樣に一時何人も其中に入らしめず、徐ろに嫌疑の的とされる教師を招き本人をして堂々と其筋の質問に答へしめることも出來やうではないか。學校側から熱心に之を乞うて、官憲の耳傾けぬこともあるまい。不幸にして耳傾けなかつたら、始めて學園自由の蹂躙を叫んでもいゝ。兎に角、教師その人の人格を相當に重んずる丈の手續を盡した上でこそ、官憲の意の儘にまかすべきであつて、其の要求に遇ふや直に一も二もなく之に應ずるは、啻に教師其人に對する非禮であるのみならず、又自ら侮るの甚しきも

のではなからうか。狼狽か、意氣地のないのか。早稲田大學當局の措置は餘りに醜態を極めて居る樣に見へる。

昨今傳ふる所に依れば、高田總長は急に維持員會とかを召集して、學園の權威の爲に場合に依ては當局を糺彈すべきの決議をしたとやら。彼等は一體何を戸惑して居るのであらう。學園の權威の爲に鉛玉に上げらるべきは、唯一つ學校當局者であつて、斷じて司法官憲ではない。世人はこの點を見誤つてはならぬ。

尤も事件の一切が明白になつた後、臨檢捜査する程の事でなかつたことが分つて、その上で別に司法官憲の輕卒を問題にするのは妨げないが、之れなら何も學校に對する場合に限ることではない。殊に今度の樣な質の事件に就ては、概して我國官憲に斯の弊がある、併し之は一般の問題として取扱ふべきもので、之を擧げて特に學園の自由を傷けた問題だとすることは出來まい。

要するに學園の自由は學園自ら守るべきものだ。學園自ら擁護の道を誤つて、ひとり徒らに他を責むるは、飛んでもない見當違ひだ。司法當局に對しては學園の要求あらば相當穩便の處置に出でられんことを希望するが、何の要求もなかつたのなら、普通一般の方法でドン／＼捜索の手を進めて少しも不都合はないのである。

特殊の問題、特殊の相手、といふことに拘泥せず、冷靜公平に物を觀る人は、必ずや僕のこの見解に異議はなからうと信ずる。

×　×　×　×　×

そんなら司法當局に全然責むべき餘地はないかと云ふに、さうではない。臨檢その事に異議はないが、事件を臨檢捜査に値する重大事と觀たその見識に聊か疑問がある。

尤も之は事件の眞相が分つた上でないと容易に速斷は出來ぬ。どんな事を企てたのか、之を詳にせずしては何ともいへぬのである。只僕の感ずるが儘をいへばかうだ。(一)問題となつて居る人々、殊に早稲田大學關係の學者達は、そんな大それた事を企らむ樣な人々ではないと思ふ。官憲は彼等の計劃と稱せらるゝものと彼等の平素の人格とを結びつけて能く考へたであらうか。(二)外國から多少の運動費を得たとか又は外國の同志と何等かの連絡あるとかいふが假りに事實として、さて斯かる事柄を官憲は非常に怖しいものの樣に考へてゐるのではあるまいか。斯かる事實が實際にどれ丈の災を我國に加へ得るものかを、彼等は冷靜に考へたことがあるだらうか。(三)共産主義といふ名と又内密に同志を連繫するといふ計劃とを、何等か怖

しい陰謀でゞもあるかの様に妄想して居るのではなからうか。こんなものは無い方がいゝに相違ない。有つたにしても大したものではないと思ふのに、此邊の觀方が我々と官憲の諸君子とは大部違ふ様だ。そこで我々が屁でもないと思ふ事に、官憲が飛んでもない大げさな力瘤の入れ方をするのであるまいか。馬鹿々々しいと思ふが、併しさう信じてゐられるのなら仕方がない。而してさう信じてゐる以上、些細のことにも氣を廻して、やれ臨檢だやれ搜索だと騒ぐのも亦已むを得ないとする。故にいふ。臨檢搜索その事には罪はない。只之を臨檢搜査に値する重大事だと信じたその低級な見識に文句をつければつけられると思ふのである。

× × × × ×

假りにたとへば共産黨結社に關する重要書類が研究室から發見されたとせば如何。それでも僕の前述の立場は變らない。官憲の見識の低いことと、早稲田大學當局の意氣地ないことに變りはないからである。只此場合に別に問題となるのは當該教師の態度そのものでなければならぬ。

教師が學術の研鑽以外實際運動に干與するの是非は別に論ずるの餘地あるが、假りに實際運動に與るとして、研究室を其の策動の一根據地とするは、學園の期待を無視するの甚しきものである。研究室を設備する學校の目的はもと決して無條件ではない。換言すれば提供を受けた教師は研究室を何に使つてもいいといふのではない。だからこそ、研究室は神聖なりとせらるるのだ。研究室といふ名に神聖なる性質があるとして、茲處を丁度いゝ安全なる策源地とするは、卑怯でもあり又憎むべき學界の冒瀆でもある。事實の如何を今僕は知らないが、若し少しでも學術以外の證據品が多量にここに見出されたとすれば、僕は當該教師の不謹愼を極度に責めざるを得ない。

× × × × ×

終りに學者の實際運動に干與する可否について僕の平素考へて居ることを一言する。

僕は研究に忙しかるべきの理由を以て實際運動に干與すべからずとするの說を取らない。研究に忙しくして運動を顧慮する遑なしといふなら、それで隱遁的生活を送るもいゝ。又時に感激する所ありて無爲にして居るに堪へずと思はゞ、その熱情を實際運動に移すも妨げない。良心の命ずる所に忠順なる限り、どつちになつても差支はないと思ふ。

けれども我々は結局に於て學者として立たんとする限り、換言すれば眞理の探究者として始終せんと欲する限り、如何に實際運動に熱情を覺へても、其現實の目的の達成の爲に些でも所

信を枉ぐるが如きは、其の能くし得ざる所でなければならぬ。世の中の實際運動には、良心に對する絶對的忠順を傷ふことなしに出來るものもあるが、又大同に合して多少の妥協に服し、場合に依つては目的の急速たる成就の爲に不本意なる非義をすら默過せねばならぬ底のものもある。政治運動や社會運動にはことに這般の種類のものが多い。

だから僕は、どこまでも學者として立たんとの潔癖より、常に絶對的な批評の自由を體せんと欲して、出來る丈け實際運動には腐れ縁を結ばぬやうにと自らを警戒して居る。尋ねらるれば意見は述ぶる。時としては進んで助言もする。が、どんなに心やすい人のやる事でも、實際運動には容易に沒入せぬことに用心して居る。之が學者としての當然の態度だと信ずるからである。

さればと云つて、實際運動に干與するその事がわるいと云ふのではない。この方面に自己の使命を感ずるなら、其方に方向を轉換するがいゝ。併し其時は則ち現實の目的達成の爲に從來の所信の或程度に於ける讓歩をば豫め許すことを意味するのだから、最早學者としての純眞な生活は送り得ぬことに諦めをつけなければならぬ。さうでなくて依然學者の衣を脱がないなら、それは取りも直さず學者の地位にかくるるものであつて、結局に於て自ら保つ所以にあらず、又兼ねて學界を瀆す處爲だと考へる。この點に於ても或は早稻田の一二の教師は問題になるかも知れぬ。が併し僕の知つて居る限りでは此事に就ても彼等は大抵無難な様だ。大山郁夫君の如き、隨分あぶない様に世間からは見られて居るが、あれで實際界には一歩も足を踏み入れて居ない様だ。だからこそあれ程思ひ切つた評論を下し得るのであらう。いづれ事件の眞相の明になるに從つて其中にはこの邊の事情もはつきりするだらう。

極端な反動政策を執るは愚

安部磯雄

此度の事件が世間を驚かした理由は次の三點に在ると思ふ。第一は最初に非常な大規模な警視廳の活動で、餘程多數の社會主義者、共産主義者が逮捕せられるだらうといふ豫期から隨分世人は驚いたやうである。第二に、號外が出たのを見ると大陰謀といふやうな事が見出しにあつたから、また昔の幸徳事件のやうな大事件が起つたのではないかと非常に世人の注意を惹いた。いま一つの點は未だ嘗てない事柄で、此度の事件に關聯して早稻田大學の研究室までが捜索された事が、前例がないだけに世人の神經を強く刺戟したやうに思はれる。

其當時いろ／＼な人の感想が新聞などに現れて居る所を見ると、それはほんの感想であるから取立てゝ云ふほどのことではないが、或人はきつと過激思想取締法案を政府が出す前提ではないかと云つて居る。又或人は事件を小さく見て、政府當局者がスパイに誤られて此度のやうな事をやつたので、實際は大した事件ではないと考へる。しかし私自身は斯ういふ風な考を抱いて居る。實際此事件の發展と終局を見た後でなければはつきりした事は分らないけれども、今迄社會の表面に現れた社會主義の運動や、社會主義者の代表者とも云ふべき人々の今日までの思想や行動を見ると、私はどうしても次のやうに考へざるを得ないのである。第一に此度の事件が大なる陰謀であるとは自分には思はれない。或新聞などにはさういふ風に書いたものもあるが、譬えば此度の企は現内閣の大臣を暗殺する事が其目的の一つであると傳へられて居るが、之れが事實ならば大陰謀に相違ない。しかし、之れは現在の社會主義運動の牛耳を執る人々の態度に就いて見てもさういふ事が有り得るとは考へられない。若し此社會主義運動が比較的若い人々に依つてなされて居るならば、隨分青年の血氣に逸る所から、全然暗殺といふ事がないとは斷言出來ないけれども、何と云つても堺君や、山川君のやうな人は多年社會主義運動に携り、十分經驗にも思慮にも富んで居るのであるから暗殺といふやうな事を企てる筈がな

い。次に之れは一番不可能な事であり、あり得べからざる事と考へるが、それは暗殺ではなく、それの形を變へたものであつて、つまり今の政府は社會主義者、共產主義者の眼から見れば資本家政府であるから、何等かの手段で之れを顚覆しやうとするのであり、それを企てるのが此度の事件であるといふならば、それをも私は否認するのである。一體政府の顚覆などゝいふ事が僅かの人間の團結で出來ることかどうか。若しそれが遠い將來の事であるならば全然可能性がないとは云へぬが、目下の運動としてそれを目的とすると云ふならば之れ程無謀なことはないと思ふ。少くとも老練な堺君や山川君などが斯う云ふ考を抱いて居るとは信ぜられない。然らば此度の事件をもつと輕く見て、露西亞と何か實際的關係をつけて、日本をして露西亞のやうに共產主義の國にする、所謂赤化運動を企てたのではなかつたか、つまりさういふ意味で結社を作つたのではなかつたかと云ふに、私は此事すらもさういふ風に考へることが出來ない。若し露西亞との實際的關係をつけるといふ事を考へるならば、當然人の頭に浮ぶのは運動費を露西亞から出して貰つて大々的に赤化運動をやるといふ事であるが、事實今迄に此意味で露西亞から隨分金を取つた者もあるといふ評判もあるけれども、自分の聞くところでは堺君や山川君などが運動費を露西亞から仰いで赤化運動をやつたといふことはほんたうらしくない。今迄に露西亞から金を貰つた者があれば、多くはつまらぬ目的のためにそれを費消し、當初の目的が大概失敗に了つて居るので評判が甚だ宜しくない際であるから、自重せねばならぬ立場に在る堺君や山川君などがさういふ危險な手段を執るとは想像され得ない。若し人の云ふ如く秘密結社を作り、團結して大々的に劃策するといふことが事實なら、それは單に大規模に主義の宣傳をやる計畫に過ぎなかつたのではないか。無論それが秘密結社である以上、法律に觸れて相當の制裁を受けねばならないが、其結社の目的が單に大規模の主義宣傳に在るならば、現在の政府に對してどうするといふ事でもなく、それは決して世人が考へるやうに大陰謀でも大事件でもない。併し之れは單に私丈けの考であつて、此度の事件が果して今云つたやうな性質のものであるかどうかは今後の成行を見なければ分らないが、只私は此際政府當局に對しても、社會に對しても一言注意を喚起して置きたい必要のあることを感じるのである。それを玆に述べることは決して無益のことではない。

　思想と行動とは出來る丈け區別すべきであつて、行動は實際にそれが行動として現れた時に取締らねばならぬが、思想それ自身は元來取締るべきものではないといふのが平素私の唱へて

居る所である。然るに今迄の歴史に就いて見ると、何時も何か或る事件が起つた時に、それと反對の立場に在る者の思想、所謂反動思想が盛になり、其事件を引き起したと目さるゝ思想に對して嚴重な制裁をする傾向があつた。それは決して成功しなかつたが、動もすると政府も社會もそれを是認しやうとしたのである。要するに行動に現れたものを見て其原因と見る思想を取締らうとしたのであるが、其結果はいつも善くなかつたのであるから、此度の事件に就いても其點政府も社會も冷靜に考へる所がなければならないのであるが、譬えば帝政時代の露西亞がさうであつて、大臣を暗殺するとか、或は政府を顚覆するといふ企があると、今度は非常に思想を壓迫したといふやうな事實があり、獨逸に於ても亦社會黨の勢力が次第に盛になつた時に、社會黨とは全然關係のない者で獨逸皇帝に危害を加へやうとした者があつたが、以後ビスマークは其事件が直接社會主義とは關係なきに拘はらず、それを嚴重に取締つたが、しかしそれは露西亞の場合と同じで結局功を奏しなかつた。此度の事件がどういふ風になるかといふことは未だ分らないが、此事件のために過激思想取締法案などが次の議會に提出されたり、或は勅命で發布されるとなれば、之れは非常に不幸な事であるが、然し前にも云つたやうに、若し如何なる主義でも之れが實行方面に現れて來て、それが政府にとつて危險となつた場合には、之れを取締るのみならず進んで相當の處分をするといふことは何等不都合なことではなく、それは政府の立場から云つて當然の處置と云はなければならぬ。で、昔から政府に對して危害を加へた者に對して嚴重な處置を取らなかつた政府といふものはない。此事は其當時の政府が善い政府であつたか、惡い政府であつたかといふことは此場合問題ではなく、當時に於ける政府は皆自衛策として自分を顚覆しやうとするやうな者を取締つて之れに相當の處分を加へたのである。それは今日の露西亞の政府も同じであつて、ソビエツト政府の立場から云へば警察力や兵力を用ひることは決して理想ではないが、事實はソビエツト政府が出來た時に帝政時代の軍人が各地に起つて兵力でソビエツト政府を倒さうとした際に、政府は矢張軍隊で之れに當つて居る。斯く考へると如何なる主義でもそれが實行に現れて、當時の政府の存在を危くする恐れがあるならば、飽く迄も自己防衛のためにそれを取締り處分することは非難すべきでないことは前に云つた通りであるが、只此場合我々は思想其物の自由さへ十分に認めて貰へれるならば滿足する者であつて、それ以上のものを要求するのではない。更に其點をもう少し明にして置くならば、政府に反對することも、或點までは實行に現れて差

支ないことがある。譬へば今日のやうに政黨が存在する時には、在野黨が政府を攻撃する場合に現政府を倒さなければ國民の不幸であるといふやうなことを公然と云ひ、或は内閣の大臣に總辭職を勸告したり、演説會を開いたりして政府を非難攻撃することがあるが、之れも確かに實行の一面で、或點までは政府反對の思想が實行に現れても世人は之れを見て不都合とは思はない。それは何故であるかと云ふに、注意すべき點は茲にあるので、即ち反對黨が政府を攻撃しても其方法が其當時に於ける法律の範圍内に於ける合法的行動であるから許されるのであつて、之れに反して合法的でない手段で政府を攻撃し顚覆を圖る所に危險が生ずるのであるから其處に初めて取締や處罰の必要が起るのである。此度の事件に就いても、或團體が合法的ならざる手段に依つて主義の宣傳を爲し、政府存在の基礎を危くする恐れがある場合には當局は之れを取締り處罰しても社會はそれを咎めないのである。

茲に猶考ふべきことは動もすると人は斯ういふ誤りに陷り易いことである。それは思想はそれが實行に導く所に危險が伏在するので、危險な行動となつて現れさうな思想はそれが實行に現れない以前に取締る必要があるといふ風な考へ方である。然し危險は寧ろさういふ考へ方にあるので、若し或思想が危險であるならば他の方法に依つてそれを破るべきであつて、法律の力でそれを取締るのは大なる見當違であると云はなければならない。之れを一言にして云へば危險な思想は健全な思想を以て對抗せしむべきであつて、思想は思想を以て取り締るといふことが原則であるべきである。或思想が危險な行爲を生み出すことは稀にある場合であつて、或思想は必しも危險な行爲に導くとは限らない。即ち思想の濫用から危險な行動に陷入る場合は極めて稀れであるから、少數の悪結果を見て思想全體を壓迫することは社會のために大なる損失である。公平に見て思想は人類進歩の原動力であつて、社會の進歩は一に思想の新陳代謝といふ點に在る。今日我々が人類のために非常に幸福であると考へる自由とか平等とか云ふ思想も嘗ては大なる迫害に逢つたこともあるのであるが、さういふことを考へるに就いても、思想に對しては出來る丈け寛大でなければならないのである。

或人はまた思想は本來自由であつて、それに對する態度は寛大でなければならないが、然しそれは研究の範圍に止まるべきで、一歩進んでそれを宣傳することになると、既に實行の範圍になるから取締る必要があると云ふ。之説も一應尤もらしくして實は危險な分子を含んで居る。一般に思想は同時に宣傳的性質を持つ。或一つの思想を抱くことは恰も宗教的信念を有つのと

同様で、人が自己の思想を演説や、新聞、雑誌に於て發表する時には、如何に研究的態度を執つても、それは信念であるから其性質として宣傳的になり易い。然るに宣傳は不可いといふことになると甚だ窮屈である。此點に關しては政府當局者の態度は誤つて居ると思ふ。譬えば五月一日に行はれるメーデーに於ける勞働者のデモンストレーションは、單に思想ではなく、それは實行であり、或は宣傳である。卽ち勞働者の威力を外に示す所の宣傳である。之に對する警察の態度は、警視總監の公言する所に依れば、騷動の起らない限りに於て示威運動は自由に許すといふのであつて、換言すれば宣傳もそれが騷動に移らぬ限り特別に取締らぬ方針であるといふことであつた、然らば思想も或程度までは宣傳であつて、實際に於てはそれの何處までが研究の範圍であり、或は宣傳の領域であるかといふことを見分けるのは困難であるが、兎に角思想はそれを宣傳であると見ても、時の政府又は國家に對して危害を及ぼすものでなければ、それが思想である限りに於て、假令そこに幾分の危險な分子を含むとしても、さういふ思想に對しては他の思想を以て當らしむべきであつて、徒に權力を以て取締るべきものではない。森戸問題の起つた時には、森戸君の論文が共産主義の宣傳であるといふ點に於て森戸君が處罰されたが結果は甚だ面白くなかつたやうに思ふ。假りに森戸君の論文が共産主義の宣傳であるとして、それを禁止しても結果は反つて宣傳になつて、共産主義の書物が好奇心から多くの人の間に讀まれたやうな事實もある。で、今假りに此度の事件に就いて想像されるやうに過激思想取締法案が出るとなると、森戸問題の場合と同じ結果になつて、法それ自身が或思想を宣傳することになるのである。思想はそれが人々に依つて共鳴されるものでなければ、如何にそれを宣傳しても、心配することも、恐怖する必要もない。之れに反して共思想か社會の大部分の人々に依つて共鳴されるやうな思想であれば、幾らそれを禁壓して見ても、何時かはそれが人々の間に普及することを免れない。斯くの如き事實を考へれば、此度の事件に就いても極端な反動政策を執ることは決して賢明なる方法であるといふことが出來ない。

所謂主義者狩りの魂膽か

水野廣徳

世の中は益々物騷になつて來た。さて右に物騷となつたか、左に物騷となつたかは、觀る人の立場に依つて異なるであらう。一方には、早稻田あたりに右黨暴行團が頻りに横行して妄に他人の居宅を襲ひ、不法に通行人を擲り倒し、不法監禁暴行凌辱を恣まにし、而かも被害者の訴へに對して警察も裁判所も取り上げないと云ふ風評がある。若し事實とすれば政府自ら其の行政權力を拋棄するもので、腕力萬能の無政府狀態と云ふべきである。私刑の公認！　日本國民は最早や米國民を非難するの資格は無い。他方には、政府顚覆、大官暗殺の陰謀團など、、官憲前布令の下に頗る大袈裟なる共產主義者の檢擧が行はれ、大學教授中にも嫌疑者ありとて屢神聖なるべき大學研究室にまで搜索の手が及んだ。さらでだに社會不安に焦ら〳〵せる國民の神經をばイヤが上に尖んがらかせた。

革命騷動でも突發したかの如き鳴物入りの大宣傳と、警視廳總上げの大作戰とを以て行はれたる今回の檢擧も、罪人製造業者に取りては明けて悔やしき玉手箱で、僅に治安警察法違犯たる秘密結社の微罪に過ぎないとか云ふことである。所謂泰山鳴動鼠一匹の類で、前ぶれの仰山なりしに比し龍頭蛇尾の感がある。併し如何なる場合に於ても犯罪の龍頭蛇尾は國家の爲めにも、犯罪者の爲めにも、慶すべく祝すべきである。是に於てか世間種々の疑惑と臆測とを生じ、檢擧に對する各種の批評を耳にする。或は第三次日露交涉に入るに際し露國並にヨッフェ氏に對する反共產主義の示威行動であると云ふものもある。常に誠意を標榜せる現政府としては、正か斯かる小刀細工的の不誠意はやらぬであらうと信ずる。或は過激社會運動取締法案發布の口實を作る爲めであると說くものもある。如何に二枚舌などと反對黨から惡口を云はるゝ加藤首相とても、三個月以前議會に於ける自己の言明を反古にする如き不信は爲さぬであらうと思ふ。或は早稻田大學軍事研究團の解散に對する軍閥派の復讐であると稱ふるものもある。軍閥過去の行動に徵すれば或は其

の位の事はやり兼ねないと疑はれる點もある。先づ軍閥目の上の瘤たる左黨を叩き付け、然る後學校の軍隊化を強行する魂丹かとも想像せられる。併し如何に軍人内閣とは云へ、多少世界を見るの目があると言はるゝ加藤首相ともあるものが、今更教育を軍國主義化する爲め軍閥の提灯を持たうとも思はれない。して見ると、矢張り治警違犯の法律を楯に、社會主義者に對する威嚇砲撃に過ぎないかも知れぬ。要するに或る攻略上の常套手段として從來屢ゝ行はれたる所謂主義者狩りなるものゝ範圍を出でぬであらう。唯聊か異なる點は檢擧御定連の外に大學の先生が關係せる嫌疑のあることである。

善であれ、惡であれ、時代適合であれ、時代錯誤であれ、兎に角法律の嚴存する限り之に違犯したるものは、假令其の說く處が眞理であらうと、其の爲す處が正義であらうと、又其の精神が愛國の至誠であらうと、憂國の赤心であらうと、法の命ずる處に從ひ取締るべきは、官憲として當然爲すべき責務である。而も其の取締たるや、右に對するも、左に對するも、社會主義に對するも、國粹主義に對するも、一視同仁に公平でなければならぬ。此處に國家の威嚴と社會の安寧とが保たれるのである。然るに若し國法運用の任に當る者が、自己に都合好き犯罪は故意に之を寛假し、都合惡しき犯罪は惡意に之を摘發する如き偏頗の行爲ある時は、國法に對する國民の尊重心を傷け、官憲に對する國民の信頼心を損するに至るを免れない。思想の爭闘激烈なる現時の我が國に於て、動もすれば右の犯罪に過寛にして左の犯罪に過酷なるの形跡あるは、國家將來の爲め甚だ憂ふべきである。

今回行はれたる共產主義者の檢擧なるものが、果して世上傳ふる如き彼等の秘密結社にありとすれば、法律上に於ける問題は極めて單純である。若し犯罪の性質が例の伸縮自在なる朝憲紊亂まで捏ね上げらるゝとせば問題は稍や重大化するも、是等の點は裁判の進捗を待たねば判らない。今回の檢擧に就きて世人の留意すべきは、法律上政治上の問題よりも寧ろ社會に及ぼす影響である。中にも最も重要なる點は大學に於ける研究室の臨檢捜索である。假令大學であらうと、官署であらうと、絶對治外法權の許されざるは勿論である。併しながら學問の獨立と研究の自由とは、許さるゝ最大限度迄尊重されねばならぬ。徼々たる嫌疑の爲めに、輕々に學者の研究を脅威し、學府の神聖を蹂躙するが如きは、國家社會の進歩を妨ぐること誠に大であると信ずる。左れば此の問題の如きは窮屈なる法律眼を離れて政治の大局より考慮するが肝要である。早稻田大學研究室捜索の當否は事件の眞相尚ほ不明なる今日未だ批評の時機でない。

唯學校の責任者が電話の交渉に依り、唯々諾々として司法官憲の要求に應じたるは、學問の權威に生くる學者の態度としては聊か自己輕侮の憾がある。此の問題に關しては吾人門外漢の妄評よりも、直接重大なる關係を有する學者の評論を聞かんことを望むものである。

こゝに吾人の述べんと欲する處は、今回の檢擧が社會人心に對して如何なる刺戟を與へ、如何なる効果を齎らしたかの點である。警視廳の宣傳に基づくか、將た新聞の誇張に依るかは知らねど、今回の事件は當初極めて大袈裟に報道せられ、世人をして第二幸德事件の勃發かの如く思はしめた。然るに其後の發表に依れば僅に治警違犯の微罪であつた。全國新聞紙の此の大々的報道に依り、我が國に共產主義團體の存することが津々浦々にまでも廣告せられた。凡そ恐い物見たきは人間普遍の天性である。奇を好み新を愛するは人間通有の本能である。思想問題に無關心なる山間の樵夫も、僻濱の漁夫も、苟くも新聞を讀む以上此の大報道を見て、坐談の材料を得んが爲め共產主義の何たるを知らんと欲するであらう。而して村內の物知り者に向つて「共產主義たア何だつぺい？」と尋ねるであらう。若し物知り者が共產主義の善惡を說いて答ふれば、政府に取りては「思ふ壺」である。併しながら農村問題の紛糾せる今日、地方の青年中には堺信者も、山川教徒も恐らく尠くはないであらう。共產主義の趣旨は金持にこそ不可解なれ、貧乏人の頭には極めて入り易い。主義者の爲めには官費の宣傳である。無料の廣告である。坐ながらの勸進帳である。

曾て森戶事件なるものがあつた。此の事件に依つて吾人は初めて、日露戰爭の際露國滿洲軍司令官たりしクロパトキン以外に、學者のクロポトキンなる人があることを知つた。而して好奇心に驅られて問題の文を讀んで見た。其の說ける處が、道德知識の尙ほ幼劣なる現代の人間に適應するや否やの實際問題は別とし、苟くも一世の大學者が幾多の迫害に屈せず、畢生の知力を傾注して研究したる學理だけありて、弊害と缺陷との多き現代の制度組織に對する新しき眞理を敎へられた。多くの日本人をして、官憲の最も好まざるクロポトキンの思想に觸れしむるの勞を取りたるものは、森戶學士にあらずして日本の官憲自身であつた。而して此の若き學士は牢獄の苦を嘗めたる代償として、多くの人々より殉敎者の尊敬を博し得た。刑の精神は一人を罪して萬人を警むるに在りと云はるゝも、思想や信仰に於ては、一人を罪したるが爲に萬人を歸依せしむるが常である。日蓮は法難を重ぬる每に信者が殖へた。十字架上の耶蘇は基督敎宣傳の爲めには絕大の力である。

今回檢擧せられたる人々の信奉せる主義思想の是非や、現行法律の時代に適するや否やは今日批判の限りでない。苟くも法律の存する限り、此等の人々の所作行動が法に觸るゝ以上、嚴正に之を處斷することに對し國民として何人も異議のあるべき筈がない。併しながら若し官憲當局者が單に是等の人々の抱ける主義思想が自己と異なるが故を以て、或は自己の利益に反せるが故を以て、異教徒的感情と、商賣仇的嫉妬とに依り、他の方面に在つては看過默視する如き微罪をも强ゐて爬羅抉剔し、剩さへ聲を大にして故意に其の罪を誇張する如きことあらば、是れ所謂毛を吹いて疵を求め、藪をつゝいて蛇を出すの愚に陷ゐるであらう。劍の力を以て人の信仰を曲げしむることは出來ない。法の力を以て人の思想を改めしむることは出來ない。眞の信仰と、眞の思想とを有する者は、血を見て益强く、苦を受けて益固くなるであらう。思想に對しては思想を以て戰へとは平凡たる眞理である。官憲にして或る種の主義思想に反對ならば、正々堂々公同の態度を以て合法的に之と爭ふべきである。權力を濫用惡使して陰險なる策略や愚劣なる宣傳の如きは、却て敵者の輕侮と、識者の反感とを招くに過ぎない。今回檢擧せられ或は嫌疑を被むれる人々の多くは思想界一方の重鎭である。吾人と主義思想の異同は別とし、其の學識に於ては大學教授に匹儔する人もあるであらう。其の識見に於ては廟堂の大臣に優る人もあるであらう。殊に其の孤軍奮鬪の勇氣と、不撓不屈の意氣とに至りては功一級の大將にも過ぐるものがある。而して其の毅然たる人格に於ては、曲學阿官の學者や、利權漁りの政治家や、脅喝肥腹の僞國士よりも遙かに尊敬すべきものがあると思ふ。吾人は此等の人々に對して右黨一派の人々が放つが如き陋劣陰險なる中傷讒誣の言を信じない。

罪を罪として嚴正公明に糾彈せよ。思想を思想として人間の自由を尊重せよ。而して官憲は所謂主義者狩にのみ沒頭する代りに、國法を蔑視し、人權を蹂躪する暴力團の跋扈を取締れ！國民は共産主義に身振ひする代りに、國利を壟斷し、民福を阻止する特殊階級の專橫を抑壓せよ！。義民宗五郎は佐倉の窮民を救はんが爲めに、藩主の虐政に抗して立ちたる一種の社會主義者である。大鹽平八郎は大阪の飢民を助けんが爲めに、富豪の横暴に激して立ちたる一種の共産主義者である。然るに宗五郎は神として祭られ、中齋は義人として尊敬せられて居る。官憲にして社會主義を根絶せんと欲せば、先づ宗五郎神社の扉を釘づけ、徳川歴史より大鹽中齋を抹殺することが必要である。

併しながら元來社會主義なるものは汚水に生きたる孑孑と等しく、停滯腐爛せる現代社會の缺陷が生みたる自然の産物であ

る。人造物でなく天產物である。制度組織の大改革に依つて社會缺陷の除かれざる限り、現代的宗五郎平八郎の輩出は絕へぬであらう。現狀を固執しながら社會主義の撲滅を圖るは、恰かも汚水に發生する孑孑を摘み絕やさんとすると同一の愚である。勞多くして効は無い。蛇の石垣に巢くうは穴がある爲めである。蛇を嫌ふてオツカナ、ビツクリ、晝も夜も蛇の番をするよりも、先づ石垣の穴をつぶせ。蛇は遂はずして自ら去るであらう。社會主義を恐れ呪ふ暇に現代社會の缺陷を除け、國民にして健全ならば、共產主義も、無政府主義も、官憲や國粹團の手を煩はずして自然に消滅するであらう。抑も社會主義は主義として貧者の身方である。主義者の背後には隱れたる幾多の信者、共鳴者、同情者がある。一の堺氏、一の山川氏を牢獄にぶち込むことに依つてのみ社會主義の撲滅を圖るならば、恐らくは一人の基督を十字架に張り付けて、十二の使徒を世界に赴かしめたる猶太人の錯誤に陷ゐるであらう。

事の善惡は時代に於ける道德の標準に依つて變ずる。併しながら眞理は不易である。不易なればこそ、眇たる一個の名主宗五郎や、眇たる一介の儒者平八郎が、當年權勢を恣まにしたる將軍大名の上を越へて、曉天の明星の如く燦として後世に光を放つのである。社會主義を恐れ呪ふ政府も國民も、先づ省みて其の本に還へれ。

共產主義者檢擧事件に就て

法學博士　堀江歸一

一

政府が過般豫てから共產主義者とか、社會主義者とか稱されて、所謂黑表に上つて居つた人の多數を拘引收監したことは誠に近來の一事件であつて、吾人をして種々の感を懷かしめた。然しながら此事件は目下豫審中であつて、其內容の委曲を明にするを得ない。隨つて突込んだ批評を試みるが如きは、到底爲し難き所であるが、新聞紙上の報道した事實を總て間違ひなき

ものとし、之を根據として、私の胸裡に感じた所を述べる。

我國が立憲國であり、法治國である以上は、共產主義であらうが、社會主義であらうが、其信條が憲法の條章に據り、立法部の決議の下に、行はれるものとすれば、事の可否は姑く措き、之が實行する上に於て、何等咎む可きものありとするを得ない。然るに此正當の路を踏まず、暴力に訴へて、主義の實行を試みようとするからには、其處に必ず公共の秩序を破壞することの伴ひ來る道理であつて、斯くて官憲の壓迫を蒙ることを以つて必然の成行とするであらう。文明諸國の經濟組織は從來資本主義に其根柢を置いて、築き上げて居るようなもの丶、如何なる國と雖も資本主義の無制限に行はれることを覺悟して居るものはない、必ず種々の方面に於て、資本主義の働きを掣肘することを企てつ丶あるは、掩ふ可からざる所に屬する。而して何に據つて、資本主義の働きを掣肘するかと云へば、其據る所は多く社會的思想に外ならない。現に英國の如き多數の人々に依つて、個人主義の本據を以つて目され、又個人主義が無遠慮に適用されて居ると考へられた時代に於て、實際の立法は集產主義の思想を取入れて、着々個人主義的傾向を排除するに勉めて、倦まなかつた。此事はダイシー氏が「英國に於ける法律と輿論」なる一書に於て、精密なる研究を公にして以來、何人にも了解される所と爲つた。隨つて今日文明國の立法に於て、學者の立てた一ツの主義ばかりを基礎とするが如きものは、實際に絕無であつて、幾多の主義が色々の形に於て、攝取され、包攝されて居る。唯其間に於て聊か資本主義に偏倚して居ることは、從來の趨勢として已むを得ざる所であり、隨つて此主義を眞正面から殺す他の主義を實行しようとするに當つて、種々の無理が起り、更に此無理を貫徹するに暴力を以つてしようとすれば、犯罪の成立するのは免かれ難き所と考へられる。

二

今日問題と爲つた共產主義者の檢擧なるもの丶眞相は私の與り知らない所であるが、新聞紙に傳へられる所に據れば、

一、主義者は何か不穩なる陰謀を計畫し、
二、露西亞から宣傳費用として、幾萬と云ふ金額を給與され、
三、軍隊に向つて共產主義の宣傳を試みようとし、
四、主義者間に露國勞農政府擬ひの組織を設け、其れ〴〵役割を定めた

と云ふ話である。右の如き目的を達する爲めに、秘密結社を設け、外國から資金を給與されて、國內の秩序を攪亂し、殊に軍隊に向つて、非軍國主義の思想を注入することに勉めたとすれ

ば、是等行爲の一又は二を以てして、官權の壓迫の加へられることは免かれ難き所であり、殊に新聞紙に傳へられる第一項の「不穩なる陰謀」云々に就ての實證でも擧げられたならば、事は甚だ面倒に爲ることゝ思はれる。

然しながら今度檢擧された人々又は身邊危しと感じて所在を晦した人々の内には、相當の學識を持ち、學者として、思想家として、近き將來の社會に重きを成すと矚目されつゝある者もある。社會主義者が官憲の壓迫を受け、最後の糧道まで絶たれ、自暴自棄の境遇に陷つて、前後の利害を顧みず、無謀の擧を企てた事は以前我國にもあつたようであるが、是れとは違ひ、將來に開拓され可き有望なる運命を持つ人が新聞紙に傳へられるような輕擧を敢てし、其或る者は空しく囹圄の人と爲り、其或る者は風に木の葉の戰ぐのをも恐れる落人と爲つたと云ふに至つては、私は是等の人々の常識に一時の錯覺に依つて、何か急劇の狂ひを生じた結果ではあるまいかと考へられざるを得ないのである。

三

今度の事件に關聯して、官憲は學者の書齋に對して、又其學者の屬する大學の研究室に對して、家宅搜索を行ひ、頻に證據物件の押收を試みたようである。斯る搜索に依つて、官憲は果して的確なる物件を掌裡に收め得たかどうか、此事は私の全然知るを得ない所であるが、之に關聯して私が官憲に對して、注意を求めたいのは、研究と宣傳との領域である。學者が社會現象を研究する場合には、其對象とする所たり、其取材とするものなりは、絶對無限でなければならぬ。無政府主義であらうが、共産主義であらうが、將た又如何なる反社會思想であらうが、學者が認めて一個の題目に適すると考へた以上は、縱横無盡に研究す可きものであり、唯之を世間に發表して、社會生活を害すると認めた場合に、自己の良心又は德義に制されて、發表を差控へ可きだけの話である。若し官憲が或る學者の書齋なり、研究室なりを搜索して、不穩の議論を書き列ねた文書があつたことを理由とし、此學者は未だ其種の議論を世間に發表しなかつたに拘はらず、之を以て學者の有罪を斷定する證據物件に充てたとしたならば、恰も醫師の藥局に「モルヒネ」や「ストレキニーネ」があつたとか、又は私共の家庭に「猫入らず」があつたとか云ふの故を以つて、謀殺罪の嫌疑を掛けることの不條理であるの愚なると擇ぶ所を知らないのである。

官憲が大學の研究室に搜索を行つたことは、見方に依つては、學問研究の自由に對する壓迫と云へるであらう。學者が孜々營

々或る科目の研究に耽り、議論を推敲して、其曉に一場の夢物語りに類する結論に達することもあらう。而して備忘の一端として、之を書綴るなり、或は要項だけを記錄するなり、兎に角紙片を殘したとして、官憲が之を押收し、理想と實行、究研と宣傳とを混合して、其學者を罪しようとしたならば、學者は大正の聖代に生れながら、幕末に於ける渡邊華山や、高野長英と同様の境遇に陥らざるを得ない。官憲が有力なる證據物件を押收するに、必要であると認めたからには、研究室や、書齋の搜索が已むを得ないとしよう、唯研究室や、書齋に於ける文書が研究の材料であるか、宣傳の道具であるかは、官憲自ら嚴重に識別することを要する、此點に誤まりがあつたならば、官憲は權力を濫用して、學者の研究を妨害する罪を免れないのである。

四

之と同時に私が我國の學者に向つて、希望する所は學者自ら其本領を守る一事である。學者は宜しく街頭に出でよとか、民衆に接觸せよとか云ふことは、頻に世人の唱へる所であり、又我國に於ては何か國民的運動が起りでもすると、其運動を眞面目のものたらしめる爲めか、時に學者をして陣頭に立たしめることがある。然しながら學者が研究と思索とを本領とし、一方に職業として講演とか、出版とか云ふような仕事に與つて居る以上は、街頭に出て、實際運動に從うが如き餘裕は全然無い道理であり、又學者自身も自己の研究の結果を世間に發表し、其發表された事が世人を啓發し、誘導し、實行運動を事とする人々を左右して、自説の何時か世間に行はれるに至ることを以つて、滿足す可きものである。若しも學者が本分を守らず、自己の思索し、研究した結果を一日も早く世に現はさうと云ふ考への下に、同志を語ひ、同一主義者を集めて、實行運動を試みたならば、其人は最早や學者の領域を脫して、一種の政治家政略家に墮し去つた者と云へるし、隨つて其人の研究室や、書齋には何等神聖の意味はなく、由井正雪や、丸橋忠彌の道場と少しも異なる所を見ない。其處を搜索すれば、的確なる證據も擧げられるかも知れず、擧げられるとすれば、官憲の搜索固より憚る所なしと解される。

故に大學なり、學者なりにして研究室や、書齋の神聖を主張し、又研究其もの丶自由を要求するからには、同時に學問研究の純乎たる領域に終始し、此以外には一歩だも踏み出さない、思索研究と、實行運動とは全然別物であり、又別人に依つて、爲さる可きものであると云ふ態度を定めなければならぬ。俗人から見れば、學者の日常は閑散を極めるように考へられる、

實は學者の如き其本分を盡す以上は、多忙も亦甚だしいものであつて、實際運動の如きは、及びも付かない所である。學者にして其本分とする所を格守したならば、研究室なり、書齋なりの神聖不可侵は求めずして、來る可きものと考へられる。時に無理解なる官憲が研究室書齋に闖入して、根太板を剝し、瓦を捲る底の搜索をした所で、一物の得られ可きものもなく、却つて世間の物笑を買ふに止まるであらう。早稻田大學の研究室に對して行はれた搜索の結果は如何であつたらうか、之を知るを得ないが、同大學の教授が研究室を所謂秘密運動の本據に充てた證跡の明になつたやうな場合は、大學教授自ら自己の本分を冒瀆し、大學研究室を不當に使用したことの責を免かれないし、搜索の曉に、何ものも證據を得られなかつた、得られたものは、純乎たる研究上の資料に過ぎなかつたとすれば、官憲は權勢を挾んで、本來自由に置かれ可き學者の研究に壓迫を加へる、少なくとも或る煩勞を感ぜしめるの非難を蒙らざるを得ない。

五

今度の事件に依つて、檢擧された人々の內には、常識もあり、教養もある立派な士人があり、隨つて私は是等の人々までが無謀なる、或は稚氣を帶びたとも評す可き所業を敢てして、世間

を騷がしたり、外國から金錢を給與されて、內國の人心を亂したりするやうな愚なる運動をするものであるかどうか、今日に至つて、尙ほ斷定に苦まざるを得ない。何れ公判に爲つてから、公正なる司直の府に依つて、世間に公けにされることであらうが、兎に角我國に於て共產主義の團結が成立したとか、其團結が或る實行運動に着手したとか云ふことは、吾人に何を語るであらうか。極めて之を輕く見る人々は其原因を以つて、第一社會主義者とか、共產主義者とか、一種の札を付けられた人々が行く所まで行かうとする焦燥、第二外國の社會運動に化せられた青年の雷同、第三新奇を求め、變化を遂はんとする思想家の宣傳に歸するであらう。隨つて今度の檢擧の如く何か不穩の計畫に參加したとか、參加した證跡のあるとか言ふ者を一網打盡に檢擧すれば、其後幾年の間は斯る運動なり、思想なりを絕滅し得るものと簡單至極に片付けるやうであるが、私が此點に於て觀察する所は少し異ならざるを得ない。詳細の議論は他日に讓ることゝし、此短文を草しつゝある時卽ち六月十五日の朝、諸新聞紙は何を吾人に報じたかと云へば、酒井某と稱する舊大名の家に於て催ほした書畫骨董の賣立事件であつた、其れに據れば、此不景氣風の吹き荒みつゝある今日に於て、賣上金額が二百三十一萬圓に上り、一枚の反古紙一個の古道具に三四萬の價

格が付せられたと云ふことである。而して斯の如き高價を生じたのは、一に富豪とか、貴族とか稱する階級の間だけに一種の盥廻しや、ロッグ、ローリングの行はれる結果であるとすれば、吾人は何としても現在の經濟組織に大なる缺陷の存することを認めざるを得ない。同時に私の入手した「ニユー、リーダー」の雜錄に英國の藏相ボールドウヰン氏が六十歳以上の男女に一週二十志の年金を與へたならば、一億三千萬磅の經費を要し、國庫に於て其負擔に堪へないと述べた言を捉へ、一方に此二倍半以上に當る三億三千五百磅の經費を軍事公債の利子として支拂ふ事實を指摘して、藏相を揶揄した一文の載せられたのを見た。何れの國にも社會には大なる缺陷がある。斯る缺陷あればこそ、其隙に乘じて、所謂不穩の計畫も起れば、不祥の運動も現はれる。實行運動に從つた共産主義者を監禁することとも、處罰することも共に宜しからう。然し當局者が彼等を監禁し、處罰したゞけで、彼等の同類や、其後繼者を絕滅し得ると考へたならば、其れは大なる誤解であつて、政府自ら進んで經濟組織の根柢に改善を加へない限り、所謂危險思想家や、不逞者流の路を絕つ可きものでない。私は東京の新聞紙に現はれた古道具賣立の記事と、「ニユー、リーダー」の記事とに依つて、大なる刺戟を感じつゝ、此一文を草した。我國現時の政治家にして共産主義者檢擧の善後に就て、遠く思を廻らして居る人があるであらうか、私の心許なく感ずる所である。

或は政府は今回の事件を口實として、例の過激社會運動取締法を制定する底意を有するやに傳へられる。然しながら此種の取締法の存在しない今日に於て、政府が自由自在に怪しいと認めた者を拘引し、檢擧し、告發し、收監し得るならば一面に於て新法律を制定して、更に社會を威嚇するの無用であるを語るものに外ならない。政府の欲する所は運動の取締を名として、思想にまで及ぼさうとするものであるか。斯の如きは甚だ無理なる希望であつて、勞して益なき事は、私の斷言するに憚らざる所である。

社會運動は遊戯でない

林　癸未夫

此際、政治學や法律哲學の純理論を振り翳すことは避けなければならない。私は何處までも、大正十二年に於ける、大日本帝國内に起つた一事件として、此問題を考へて見たいと思ふ。かういふ見方からするならば、今回の問題に直接の關係を有つた司法官憲も、大學の理事者も、研究室を臨檢された教授も、秘密結社を組織したと傳へられる、社會主義者も、等しく現在の法律命令に支配されて、否でも應でも其拘束の下に服從するほかはない地位に立たされてゐる者であることを、吾等は先づ念頭に置かなければならぬ。現在の法律命令の是非に關する議論は――やりたい人はやつても可いが――私から見れば此場合無用の沙汰である。何となれば、現在の法規の是非に關する批判は、何うしても、かくの如き法規を制定したる現存の國家組織、竝に其國家組織を支持しつゝある現在の政治思想にまで遡及しなければ、到底徹底した議論にはならないからである。併し、そこまで徹底した議論をする日になれば、今回の主義者檢擧や、大學臨檢の問題の如きは、實に極めて些細な偶發事であつて、隣家に生れた猫の毛なみを論ずるに、生物進化論の原理から說き初めるのと同樣な始末になるのである。今の私は、到底そんなことをやつてゐる閑暇をもたない。

そこで、此問題を現在の國法を基礎として考察することになると、要するに、之に關係した官憲、主義者、大學理事者教職員等の取つた方法なり、態度なりが、國法の命ずるところに適當してゐたか、違背してゐたか、或は違背はしてゐないとしても、其手段、手續等に妥當を缺くところはなかつたか、といふことに就ての批判をなし得るに止まるのである。そして其批判としては、私が次に述べるやうな見解が、最も公正な意見として普く識者に首肯せらるべきであると私は信ずるのである。

先づ第一に社會主義者と稱せらるゝ某々等が秘密結社を組織したといふことが事實であるとして、それを我が國法が禁止してゐるものとすれば、彼等は明に國禁を犯した者であつて、之

を檢擧しやうとする官憲の處置は當然であると認めるより外はないのである。が併し、かういふ事には常習犯者と言つても可いやうな札付の主義者連中を檢擧するに、從來曾て見なかつたやうな大騷ぎを警察が演じて、內亂、朝憲紊亂、第二の幸德事件といふやうな暗示を、たとひ一時たりとも國民に與へて、一種異常な Thril を上下に感ぜしめたといふことは、恰も蚤を一匹つかまへるために、鉢卷、たすきがけで飛出すやうなもので、餘りに芝居氣があり過ぎ、眞面目を缺いで居り、個人的に言へば、オツチョコチョイのやり口であつて、確に政府の威信を傷けたこと甚だ大なりと評せざるを得ないのである。

第二には早稻田大學の研究室臨檢に對する學校理事者の態度であるが、私は司法官憲に對して之を拒み得なかつた理事者の處置は、止むを得なかつた事態として、之を寬恕して然るべきものと考へる。當時學校に臨んだ檢事は、學校理事者に對し、高壓的な言葉使ひはしなかつたさうであるけれども、併し彼等は研究室を搜索して然るべきか何うかを學校の理事者に相談して行つたのでは決してない。國法の許す權力を以て其處に臨んでゐたのである。從つて、若し、理事者が、研究の自由、學問の獨立を楯として、臨檢を拒絕したからと言つて、それで檢事等が決してオメ〳〵と引下る筈はなかつたのである。又理事者と雖、其學校の教職員中に、國法の禁ずる行爲を計畫及實行しつゝある者が、絕對に無いとは確信し得なかつたに相違ない。又その計畫及實行に關係した書類や物件が、研究室に絕對に保存されてないとは保證することができなかつたに相違ない。既にその確信のなかつたこと、及保證のできなかつたことが、其場合の彼等として當然であつたと考へられる以上は、彼等が國家の權力を背後にして來り臨んでゐる檢事等に對し、其臨檢を拒絕すべき理由を見出し得なかつたことは、亦當然であると言はなければならぬ。まして、學校理事者に向ひ、萬一にも檢事等によつて發見さるることあるべき可能性を有つたかも知れなかつたところの犯罪に對し、教職員を庇護するの義務を要求するが如きは、餘りに無理難題を彼等に强ゐるものである。現在の國法の下に、私立大學といふ一つの大きな社會事業を經營しつゝある彼等の立場は、しかし單純ではあり得ないことを、吾等は諒としなければならぬ。

第三に大學の研究室に立入つて、犯罪の證據を搜索した司法官憲の態度が是認さるべきか何うかといふ問題であるが、此問題は、學校の教職員が、國法の禁ずるが如き實際運動に參加することが、學者の本領から見て、是か非かといふ問題には無關係である。が併し、學者が實際運動の目的又は便宜のために、

學校の教職員としての地位を利用することが、認容さるべきであるか何うかといふ問題とは、直接關聯して考へなければならぬ問題である。學者の本領は、眞理の探求と、その啓示に在る。從つて研究の自由と、其結果の發表の自由は完全に學者に與へられなければならぬ。此目的の範圍内に在つては、學者は學校の圖書館なり、教室なり、研究室なりを十分に利用すべき權利を與へらるべきであることは勿論である。併しながら、それと同時に、學者は、此目的の範圍外には、教室や、研究室を使用しないことを以て、自己の義務としなければならぬのである。故に若し、社會改造の實際運動に參加してゐる學者があつたとして、彼等が名を講義に籍りて、學生を自己の運動に引込む意圖を以て、宣傳的の目的に教室を利用したり、或は研究室内で實際運動の宣言文を起草したり、其處で同志と謀議を凝らしたり、又は其處を秘密の通信や、秘密文書の隱し場所に利用したりするやうな行動があつたとするならば、それは明に、教職員たる自己の地位を濫用して、教室や研究室を本來の目的以外に使用し、自ら其神聖を汚したものと認めなければならぬ。そしてそれから生ずる責任は當然彼等が負擔しなければならぬのである。從つて私は、學者が其研究室を専ら學問研究の目的にのみ使用しつゝある限りに於ては、司法官憲が犯罪捜査の便宜上から之を臨檢するといふやうなことは、現法規の下では不法ではないとしても、甚だ不穩當な處置であつて、嚴に之を避くるのが彼等として當然であると考へる。又國法の眞精神に忠實な所以であると考へる。併しながら之を吾々が司法官憲に向つて要求すると同時に、吾々も亦、學者として、研究室を決して學問研究以外の目的には絶對に使用しないといふことを良心に誓ひ、且之を實行するの義務を負はなければならぬ。吾々が此義務を履行しないで、只司法官憲の横暴を非議するのは、餘りに頑童的口吻であると私は思ふ。併し、さう言つたところで、私は早稻田大學の教職員中に此義務に、違背した者があつたと想像してゐるのでは決してない。否、恐らくは、研究室の神聖が立派に保たれてゐたであらうと考へてゐる。が、吾々が司法官憲の處置に對し、最後の斷案を下す前には、彼等の捜索の結果が明にされなければならぬ。若し司法官憲が、捜索の結果、教職員等が研究室の神聖を汚したと認むべき、何等の證據をも提供し得なかつた場合には、彼等は國法に違背はしなかつたにしても、之を適用するに當つて、甚だ不用意、不謹愼、淺慮、短見であつたことの責任を免かれることはできないのである。

第四に議すべきは所謂主義者の行爲であるが、併しそれは目

本共產黨とやらいふ秘密結社を組織したとかいふ風聞が新聞紙に傳へられたゞけであるから、――少くとも私自身はそれ以上の事を何にも承知しないのであるから、今直に之を批評して見やうもないのである。が併し、姑く今回の事件を離れて、最近數年間に於ける日本の主義者連中の實際運動なるものを概括的に批評して見るならば、私はそれが甚しく眞面目を缺いで居ると思ふ。餘りに遊戯的であるやうに思ふ。とかく名聲慾や、物質慾が先に立つて、眞劍味が失はれて來たやうに思ふ。

その原因は蓋しかうである。原內閣の成立以來、社會主義の學理的研究竝に其發表を、公許とまでは行かないにしても、餘程寛大に取扱はれるやうになつた結果として、その前までは、文章にも講演にも、殆ど一言半句を發することすら禁ぜられてゐた社會主義者の先輩連中が、時こそ來れとばかりに、盛に――彼等としては或はそれでも控へ目であつたのかも知れないが――多年の蘊蓄を傾倒し初めたのであつた。そしてそれが又丁度、戰爭末期の民主主義的思想の、世界的發揚と相響應した、めに、忽ちにして彼等は言論界の猛將鬪士として、一部の學生や勞働組合員の尊敬の的となつたのである。利を見るに敏い雜誌の編輯者や書肆の番頭は、彼等の門前に市を爲して、原稿の惠投を懇請した。一夜漬けの勞働指導者たる學校卒業生等は、彼等の謦咳に接することを光榮とした。かくの如くにして彼等は十二分に其社會的名聲と、其生活上の安易とを併せ得ることができたのである。彼等が進んでそれを漁つたといふは當らないにしても、事實結果はその通りであつたのである。

併し、かくの如き彼等の名聲と安易とは、日本に於ける社會改造運動を、多年の陰性から急に陽性にしたことに與つて力があつたやうに思はれる。密室のヒソヒソ話が、堂々たる公會演說となり、秘密文書の交換が、書房の店頭に堆を爲す流行雜誌と變じた。がそれは結構である。一進步と認めて可い。唯私の竊に彼等のために憂ふるのは、そのために彼等の鬪志が薄弱となり、眞劍味が乏しくなつたことである。彼等は唯文章の上で惡罵を交換したり、勞働組合の集會を攪亂したり、宣傳文書なるものを電信柱に貼り付けたり、公會場で巡査ととつくみあつたり、するやうな事ばかり浮身を窶してゐる。そして新聞の三面に、大きな活字で自分の名が表はれることを喜んでゐる。つまり浮調子な遊戯氣分が彼等の間に橫溢してゐるやうに感ぜられるのである。首領株や學校出身者は原稿稼ぎに忙殺せられ、下廻り連中は警察官との「かくれんぼ」遊びに熱中してゐるといふのが、彼等の現在の實狀であるやうに私には思はれる。かくの如くにして社會革命家たり得るならば、社會革命家たる亦容

易いかなと言ふべきである。かくの如くにして他日、レーニンたり、トロツキーたり、ルナチヤルスキーたり、ブハリンたることを夢想するのは、餘りに蟲が好すぎはしないだらうか。

「社會運動は遊戯じやないぞ！」かういふ一語を、私は彼等の面上に投げつけてやりたいと思ふのである。

社會心理に明敏なれ

（思想の暗示―社會主義の宗教）

井上忻治

□

最近政府の手によりて行はれた社會主義者の大檢擧は、兎も角も社會に或る異常なる衝撃を與へた近來には一寸珍らしい問題の一つであつた。そして、それは、事件が社會主義者の檢擧であつたのと、その檢擧が恰かも一網打盡的に可成り手廣く行はれたのと、殊にその捜索の手が純粹なる學府であるべきはずの某大學にまで及んだのと、主としてこの三つの理由で、著しく人心を刺激したように思はれる。

事件の眞相なり、内容なりがまだ少しも發表されて居ないので、今この事件そのものに就いて彼れ是れ批判することは、差控へねばならないし、また第一不可能なことでもあるが、而し、新聞紙の傳ふるところによれば、それが共産主義者の秘密結社に關するものであることだけは、ほゞ明かなようである。しかし、それが單に治安警察法の問題だけに止まるのか、それとも刑法の問題にまで及んで居るのか、その邊は無論不明であるが、しかし、そんな法律上の問題は、この際私にとつては、どうでも良いのである。只事件が上記のごときものであつたといふ假定の下に、私はこの事件に關聯して、少しばかり感想を述べて見たい。

□

現存の秩序に對して危害を與へる個人の行動は、凡て國法悪なのであるから、これに對して反動する國家の權力行爲は常に合法的のものだと看做されねばならないのは、言ふまでもないが、しかし、合法は必ずしも目的ではないのである。制度は日と共に硬化するばかりであるのに、思想は絶へず進化して行くから、この兩者の距離が増大するに從つて、益々個人と社會との調和が困難となつて來る。それが極度に達すれば、そこに兩者の間に大衝突が起つて、遂には政治的若しくば社會的の革命をまで招來するようなことにもなるのである。社會制度を支持する本源の力は社會精神である。それ故に、本來、時代思潮の變化に伴つて、社會制度もまた自から變革されて行くのが、進化の當然の理法ではあるが、しかし、事實に於ては、決して制度の進化は思想の進化と平行して行くものではない。制度の進化は常に思想の進化から取り殘されて行くのがその常態なのであるから、制度が永く存續すればするほど、新思想と舊制度との衝突は、免れがたい必然の運命になつて來るのである。そこで、個人對社會の衝突が、若しこの社會進化の根本問題に原由して居るものであつたならば、その社會秩序に對する個人の反抗は、行爲としての法律悪ではあるが、必ずしも道德悪であるとは限らない。まして時代悪では絶對にないのである。却て時代悪が制度そのものに存するがために、結局この衝突を招いたのであるから、この場合、爲政者の取るべき方針と手段とには、極めて重大なる社會的意義が與へられねばならないことになるのである。

● □

制度は思想の背景なくては、絶對に維持されない。時代思潮は常に時代の要求を代表する。それ故に、時代思潮に著しい變化があつて、制度と思想との間の調節が失はれることになれば、遲かれ早かれ、制度の變革は到底免かれがたい。この進化の理法を人力で阻止しようとしても、それは結局無駄なことであるばかりではなしに、また絶對不可能なことなのである。それを無理に阻止しようとすれば、勢ひ堤は決潰されずには濟まない。而し、これは社會進化の正則なる過程ではない。從つて、かような不自然なる變化は、個人のためにも、社會のためにも、決して望ましき事態ではないのである。この不自然なる變化を避け得る唯一の方法は、思想の疏通に對して、出來得るかぎり自由なる道を拓くことのほかにはない。そして、これがまた老衰したる制度にその天壽を全ふせしむる唯一の賢明なる攝生法なのである。而るに時勢に盲目なる特權階級の頑迷と不覺とは、この睹易き道理をすら辨へないで、しばしば革命の悲

慘事の中に、自から求めてその滅落の時期を早めるような愚を學ばふとする。革命の責任者が常にその時代の特權階級であつたことは、歴史が正に明瞭に證明して居る通りなのである。それ故に、事態のかゝる時期に於ける權力の行使は、合法ではあつても、必ずしも合目的ではいことを、爲政者は常に念頭に置いてかゝらねばならぬ。權力を掌握する爲政者の手は、兎角生硬に働きたがるものではあるが、この場合の權力行使には、特に柔軟な手が必要なのである。そして求めて不自然なる社會的變革の不祥事を招來するか否かは、一つに爲政者の時勢に對する聰明と社會心理に對する理解との有無に係はるものであることを、彼等は常に銘記せねばならないのである。

□

一體思想そのものは、假令どんな過激なものであらうとも――これに對立する思想から見て――それが社會の要求に充分の根差しを有つて居るものでない限りは、社會的に左程危險なものではない。尠くも、時代の社會感情にこれを受け入れるだけの下地が出來て居る場合でなければ、假りにこれが幾ら宣傳されたからとて、時代精神を形造るだけの力のあるべき譯のものではない。のみならず、一般の人心に對して何程の効果を與へ得るものでもないのであるから、結局は線香花火に終るべきもので、到底一般的の思想運動として發展し得るはずのものではないのである。而し、或る思想が既に一つの社會運動として發展して來た場合には、その思想は、尠くとも既に時代の社會感情の中に、相當深い根を下ろして居るものに違いないのであるから、權力をもつてこれを抑壓しようとしても、それは最早絶對に不可能なことである。權力をもつて對抗すればするほど却てその根幹を培ふことゝしかならない。これは社會心理上動かない事實であつて、各時代に於ける思想抑壓策の失敗に關する數多き歴史上の記録が、最も雄辯にこれを證明して居るのである。それ故に、新しい思想運動は假令それが實行の域に這入つても、大體に於て放任して置いて差支ない。寧ろその方が政策としては賢明でもあれば、合目的でもあるのである。その自然の發展を人爲的に阻害しようとすればこそ、却てその勢ひを激成して、不自然にその成功の時期を早めるような危險をさへ伴ふのであるが、これに反して、新思想が單に平坦な道を辿りながら、その自然の歩みを運んで行くのであつたらば、それが漸時、舊思想を征服して、愈々傳統的勢力を殲滅し得るまでに至るのは、なかなか容易な業ではないのである。何故といふに、傳統の力は表面極めて微弱なように見えても、第一、私共がこの傳統の繫縛から全然解放されるといふことは、殆ど不可

能なことだと言つても良い位、傳統は極めて根強く私共の精神の中に喰い入つて、常に無意識的に私共の行動の一部を支配して居るものだからである。そして傳統的精神はまた新しい反對の勢力に對して、常に盲目的に反動する不思議な性質を有つて居るからである。こゝに一つの新しい思想運動が初まれば、どこからともなく、これに對する反動思想が必らず擡頭して來るものなのである。現に昨日の新聞を見ると、一方に於て、社會運動の犧牲者に對する防援會といふようなものの成立を報じて居るかと思へば、他方には、明らかにこれとは反對な思想傾向の上に立つて居る國民軍事研究會といつたようなものゝ成立を報じて居る。爲政者が殊更不自然な防衛をしなくとも、傳統的思想そのものが、既に充分なる防禦力を有つて居るのであるから、餘り神經過敏な干渉を試みるよりも、大體方針としては、成るべく自然の成行に放任して置く方が、却て社會を健全なる進化の方向に導くことになるのである。

□

今度の事件が共産主義者の秘密結社であつたかぎり、これに對する國權の發動は極めて當然のことであつて、今後とても類似の事件に對して、適當なる取締と鎭壓とを必要とすべきは、國家として固より是非ないことではあるが、しかし、その遣り方と手加減とに就ては、餘程愼重なる注意を拂ふ必要があるであらう。

國家が違法行爲に對して反動するのは當然である。現存の社會秩序に對して危險だと思惟する私人の行動を取締るといふことも、また止むを得ない。實行そのものは固より取締られねばならぬ。が、しかし、それが同時に論議、若しくは言論そのものにまで及ぶようなことがあつてはならない。言論の自由はあらゆる進歩の母として、絶對に尊重すべきである。言論の抑壓は或る思想の宣傳に對する鎭壓政策としても、決して賢明なる方法ではない。凡そ思想の傳播は理智を介してゞはなく、主として感情を介して行はれるものであつて、またこの場合に於てのみ、初めて大きな効果が現はれて來るものなのである。そして、思想傳播のための最も重要な役割を演じて居るものは、宣傳そのものではなくて、思想そのものによりて與へられる暗示なのである。而るに、この思想の暗示力は、思想そのものに精密なる科學的分析が加へられるに從つて、却つてその度を減じて來る。思想が漠然として暗中模索の狀態に置かれてある間に於て、民衆に對する思想の暗示力は最も強大なのである。それ故に、思想傳播のために、一番恐るべきものは宣傳そのものではなくて、一度現はれたる思想にベールを掛けて、そのはつきり

した本當の正體を見物人の民衆に見せまいとする彌縫政策なのである。これは、特に今度の事件に關聯して、是非とも當局者が考へねばならない大切な點であらうと、私も思ふ。殊に後に述べるがように、社會主義は科學としてよりも、寧ろ宗教として、より多く現代の人心を支配して居るものであるとするならば、尚更、これに對しては、臭い物に蓋をするような方針を取つてはならない。その自由なる討議と論戰とに、出來得るだけ、充分なる機會を與へて、その正體が遺憾なく爬羅剔抉されるように仕向けると同時に、思想上の自然淘汰の法則に服せしめることが、その不健全なる傳播を妨止して、社會主義の理論を、眞に社會の健全なる進歩のために役立たしめる最も賢い方法なのである。殊に今度の檢擧そのものによりて、一般民衆には、まだはつきりとその正體の分つて居ない共產主義といふ難有そうな神性の暗示力を一層大きくしたことは、否みがたい社會心理なのであるから、當局者はこの際、成るべく迅速に事件の眞相を公表するとともに、また今後は、共產主義そのものの科學的論議に出來得るだけ完全なる自由を與へることが、最も肝要なことであらうと、私は考へる。今度の檢擧が或る意味に於て、藪をつゝいて却て蛇を出した嫌ひのあることは否定しがたいのである。

尚ほ、當局者が大學の研究室にまで搜索の手を延ばしたのは、固より餘議ない必要のために、止むを得ず斷行したことであらうが、成るべくならば避けたい事柄であつた。この點に就いて詳論する暇はないが、兎に角、思想の自由若しくば研究の自由と司法權との交渉に關する問題は別としても、社會心理の立場から見れば、これもまた確かに藪蛇の嫌ひがあつた。

□

社會主義は現在各國を通じて、最も普遍化された世界的傾向の一つである。しかし、社會主義理論は今日に於ても、まだ決して一つの科學的體系を構成して居る譯ではない。寧ろ、その理論は、殆ど總ての討論を無用ならしめるほどの動性を帶びて居り、異相を有つて居るといつても良い位なのである。それにも拘らず、社會主義運動が、世界何れの國に於ても、今日見るがような目醒ましい勢ひをもつて進展しつゝあるのは、一體どういふ譯なのであるか？　それは全く社會主義が理論としてゞはなく、一個の宗教として一般民衆から受け入れられて居るがためにほかならないのである。

私はこの問題に就いては、何れ別の機會に於て論じて見たいと思つて居るのであるが、それは兎も角として、社會主義は民衆に取つては一つの信仰の對象なのである。そして社會主義が

どうしてその勢力の秘密を構成するこの宗教的形態を、かくも速かに獲得するに至つたかと言へば、それは恰かも、現代の最も本質的な特質をなして居る信仰喪失といふ現代人の一般的弱點に恰かも注文通りに投合したがためなのである。現代は舊信仰がその支配を失つて、まだこれに代るべき新しい信仰が建設されて居ない過渡時代の一つを代表する。社會主義は恰かもかういふ歴史上の罕れな時代に、忽然として現はれて來たのである。人間は結局神なしに生き得るものではない。舊い神性の力が著しく衰へて、人々が新しき神を求めつゝあるこの稀有なる時期に際して、舊い神ですらも人間に與へることの出來なかつた現世安樂の最大幸福を人間に授けようと約束する社會主義が、どうして彼等の信仰の對象となり得ないはずがあらう？ 社會主義には、それが古い神の地位を取つて代ることに於て成功し得ない何物もないはずである。人間再生の約束の下に、その空しき生の前に點火された夢のような希望の魅力によりて、社會主義は、理論としてゞはなく、立派な宗教的形式の信仰になつてしまつて居るのである。それ故に社會主義理論が如何に動搖的なものであらうと、また不定的なものであらうと、そんなことは社會主義の普及のために、少しの妨げにもなるものではないのである。寧ろこの曖昧にして、不確定なることが、社會主義の教理をして、多樣なる必要に順應することの可能を許す所以なのである。また歴史の一定の時期に於ける多數不滿家の、限りなき雜多なる願望に滿足を與へることを許す所以なのである。それ故に、社會主義理論の不定性は、むしろその成功の一條件だと言はねばならない。

だからして、社會主義學說の大部分が假令どれだけ不合理性を含んで居ようとも、それが宗教的信仰の對象としての勝利を妨げるものと思つてはならない。何故なれば、これ等の學說は、長い間各國民を支配して來た宗教的信仰の何れに比しても、更に大きな非眞實的空想を含んで居るものでは斷じてないからである。信仰の不合理性は決してその傳播や普及を妨げるものではない。從つて、社會主義普及の見地からいへば、理論家の討究は一向重要なものではない。群集はこれを聽かうとはしない。彼等が社會主義を信奉する理由は極めて簡單なのである。即ち彼等は一定の搾取者の犧牲である。社會主義はこの搾取者によりて無慘にも奪ひ去られた自分等の幸福を再び取戾して呉れる唯一の救濟者だと彼等は信じきつて居る。この信賴の一念が社會主義の不思議な殿堂の前に、彼等をして隨喜の涙を以て熱誠なる禮拜を捧げしめて居る所以なのである。それ故に、彼等の精神を支配する唯一の觀念は、時代惡の凡ては現在

の社會組織の不合理性に存するのであるから、この組織を變更するためには、革命的に科せらるべき善意の命令を以て足りるとする根本觀念なのである。理性によりて指導される理論家は研鑽によりて進化するが、只理論を大摑みにしか受け入れない群集は決して進化しない。彼等の信仰は常に極めて簡單な形を取るのである。そしてそれが一度その原始的な腦漿の中に植附けられたかぎり、その信仰は殆ど永久に不動なのである。

□

社會主義普及の心理は實にかくのごとくなのである。民衆が社會主義の名の下に期待して居るものは、單に享樂の最大、閑散の最大、そして個人的犠牲の最小――この三つの要求が誰れにでも無條件に滿される世界なのである。しかし、私共はこれを以て單なる空想として一笑に附する譯には行かない。元來、文明人と名けられるものは、如何なる時代に於てども、常に、凡ての競爭、凡ての嫉妬、凡ての不平等が永久に呪はれてあつたかのエデンの園に類する一種の運命の幻影を追ひまはして生きて居るのではないか。それが所謂文明人なのである。この文明人の頭の中に社會主義の信仰が永久に植付けられたからとて、少しの不思議もないはずである。社會主義の信者からこの信條を奪ひ去ることは、到底不可能のこととされねばならない。

併しながら、この信條を組立てる理論が何であらうと、それは少しも彼等の關するところではない。共産主義であらうと集産主義であらうと、そんなことはどうでもいゝのである。要するにその信條を滿し得るものでさへあれば、イズムの如何は彼等の問ふところではない。それだけにまたこの信仰の根深しは極めて深いものとされねばならないのである。彼等はその信仰の近き勝利を疑はない。そしてまた何人も彼等の奉ずる信條に代り得べきより善き信條を工夫し得ようはずがないのである。それ故に、殘されたる唯一の問題は、この信條を基礎づけるより合理的な原理を考案することの一點よりほかにはないはずである。

かくのごとく社會主義が既に理智を超越した信仰の問題であるとすれば、假令これを抑壓しようとしても、それは到底不可能なことゝされねばならない。社會主義に對する抑壓政策は、たゞ徒らに回復すべからからざる絶望的危險を冒すだけに止まつて、寸毫の效果をも奏すべきではない。それ故に爲政家の取るべき賢明なる政策は、一方に於て、社會主義の掲ぐる信條を課題として、その最善なる合理的基礎を考案せしむるために、思想家に對して、新理論の標榜する一切のイズムの自由研究を

出來得るだけ助成する方針を取ると共に、他の一方に於ては、マルクスの暗示を逆用して、彼の所謂欺瞞であり、微温的である社會政策の方法により、出來得るだけ現狀の危急を脱出して、彼の所謂社會革命の時期を出來得るだけ遲延せしむるために、最善の努力を試みるよりほかには、別に取るべき道はあるまいと思ふ。そして、これが、かの不自然なる革命的邪道に逸脱するの危險を妨止して、常に正則なる徑路に於て、健全なる社會的進化を誘導する唯一の方法ではないかと、私は私かに考へて居るのである。(十二、六、十五)

思想研究の獨立自由性と法權

千葉龜雄

極東共産黨の秘密結社とやらいふもので、いわゆる大檢擧なるものが行はれた。その澤山の勇敢な行動の中で、早稻田大學研究室のじうりんといふ一つの事實が、特にやかましい批判の的になつて居るやうに思はれる。なぜそれが、そんなやかましい問題になるかとなれば、要は、一方が他方を侵害し得るところの、自由の獨立權が、法權と學問の研究とそのどちらにあるか。それとも、絶對の權力を持つた二つのものが、はしなく衝突したといふのであるか。それ等の見方の違ひによつて、自然と結論の抽き出し方も分れて來るわけである。

つまり二つのものは、所詮は、人類、もしくは社會、もしくは民衆のよりよき生活を目標とし、唯一それ等のためにのみ存在する點に、同一の使命をば持つものでありながら、發生の原理においては、全く本質を異にする。即ち思想の側にあつては、何がよりよき生活を約束するか。何がより惡い生活を持ち來すかを、宇宙の一切の與料によつて討檢し、その中から、最も賢こく、正しい生活の目標をより出して、それを民衆に與ふるのがその職務である故に、研究の與料としては、或る時代、或る階級の側から見て、どんなに有害だとか、邪惡だとか考へられ

るどんなものであつても、それを採り入れて惡いといふ事は決して有り得ない。いな、民衆のよりよい生活を生かすためには、その有害であり、邪惡であると一般に考へられて居るものを、なほ眞實に眺め、それを檢討して、その本當の價値を與へることこそは、なほ一層、本當の思想者の使命なのである。またそれを檢討した揚句、その邪惡であると一般に考へられて居るものが、本當は最も尊とく民衆の生活を惠む思想であつたなら、世間が何といはうと、斷乎としてそれを民衆の前に押し進めることは、またまことの思想者の使命といはるべきものである。かくして、よりよい生活への十字軍であることが、いかなる時代にも、またいかなる世界にも、人類共同の大目標であるならば、その目標へ達する唯一根本の機構が、そのよりよい生活に對する、思想的研究より以上のものがない事は、あまりに自明な話であらう。だから凡ての思想的研究には、一切の價値を比較し討檢して、その最高最善のものをえり出すために、研究の絶對的自由が、まづ何よりも第一に保障されねばならぬ。そして大學の研究室は、その凡ての機構の總元締の地位を占めるべきものである故に、その自由はなほ以上に絶對的に保障されねばならぬのである。

いな、それより以上に、思想討究の絶對的自由が保障されねばならぬもう一つの理由がこゝにある。それは將來は知らず、現代までの世界の思想的歴史の上では、本當に、その時代より將來の、人類の幸福を約束すべき思想は、多くの場合、思想あり、知識のある少數の自由思想家の胸にのみ秘かに宿つて居て、容易に實行された世界の光とはならなかつた。なぜなら、その少數の知識者を除く大多數の人々は、いつもいろいろな傳統の思想の闇に掩はれて居て、その光りの光りである內容を見出すことが出來なかつた。いな、そればかりではない、大抵は、その新思想を發表する人々を囚へて、煽動者であるとし、人を迷はす迷夢を語るものとして、精神的に、或は肉體的に虐殺してしまつた。そしてそれだけよりよい生活の進みを自分から遲くして居た。ことに現代までのやうに、人類の幸福に、きまつて反蹠的に逆行して居たところの、諸種の支配階級が引つきりなしに世界を統治して居た時代では、これらの新思想は、いつもきまつてそれ等の支配階級の金箔を、無殘に引きはぐ役目をつとめたものであつた爲に、その新思想者達は、なほの事、悲惨な目に逢ひ通して居た譯であつた。そして彼等の説いた眞理が、彼等の肉體が地下に朽ち果てた後世にいたつて、始めて民衆に悟られたところが、その爲に民衆の幸福が、數世紀を後らかされ

た損害を償ふ何ものも無かつたのである、しかも現代にいたつても、そうした支配階級の理不盡な統治は、なほ何程も縄をゆるめないのであるが、しかし他方に、現代の文化が、なほ何程か進展されたといふならば、その名譽の保障にすらも、現代ではそれらの不合理な思想統治から、一切の思想言論の獨立自由權を救ひ上げ、それによつて逆に斯の如き思想の暴虐性を、一時も早く滅ぼして了ふ手段を講ずるのが何よりの急務である。それは單に新思想の生存そのものの爲に必要なばかりでない。民衆生活のよりよい幸福のためにさへも必要なのである。言を換へれば、現代には、かゝる不合理な思想專制が、自由に横行して、やゝもすれば民衆の正しい思想をおびやかす危險が到る所に存在する爲にこそ、なほと思想討究の獨立自由權が嚴密に保障されねばならないのである。もしそれと反對に、この思想の獨立自由が、風にふるへる葉のやうに、政治當局者とか、地上の法律とか、警察權とか、兵力とかいふ強制力の下に、その時々の都合によつて、絶えず脅やかされる或有性があるならば、それは必ず遠からずその國家の思想的滅亡を豫約するのである。

然らば法律とは何ものか。人類には叡智がある、思想がある。この叡智をもつて思想を推進するところに、たゞ人類の生活があり、幸福な生活があるのである。また人類個人の自律となり、更に個々人をつなぐ他律となる道德と呼ばれるものさへも、みなこの叡智を背景とした思想に過ぎない。たゞ人類の知識と自覺が充分で無い時代にあつては、人類は、單に個人の營みに忙がはしくて、個々に交渉した社會的觀念を充分に生長させるまでの隙がなかつた爲に止むを得ず、內在する道德に代つて、社會の他律として生れたのが法律である。それは單に言理ばかりで説き伏せる事が出來ないのを目安として、強制と力をもつて社會人類を結び付けやうとしたところの一つの方便的社會法則に過ぎないのであつた。しかし人類はその本能として、すべてが自由を好んで束縛をきらう。然るに法律はその束縛をいやがる反本能力を利用して、充分の効力を舉げやうとするものである故に、法律が存在の原理において、已に反人間性のものであり、或ひは理想の社會から見て、反社會性のものであることは之でもわかる。なぜなら、理想の文化の社會では、一切の外的強制をとりのける事を目標とす。故に、少くとも將來へ目ざす生活への過程では、今日まで萬能力をふりまわして居た法律力を、段々と縮小して行かねばならぬ點において、さながら、兵力が、滅びて行く風にする事が非常に必要である。

かくて思想や知識が人間の自然性であり、法律が之に反して、反人間性の、人爲の方便的機械であることがわかる。前者は本質であり、後者は派生である。前者は自然性である故にそれが永遠に繼續するのに、後者は理想の後世においていつか絶滅せねばならぬ。また前者は物を生むための肯定であるに拘はらず、後者はどこまでも、禁止と否定と拘制とを意味する。そしてこの禁止と否定と拘制とは、或るものの禁止と否定と拘制を意味するものである故に、その「或る者」が存在しない限り、法律は決して存在しない。即ち法律はこの點において、どこまでも應用であり、相對であり、思想のやうに本質的な獨立的なものを含んで居ない事が明らかである。これが例證としては、法律の力が一番民衆の心にはつきり理解される場合は、その應用が、世間通の法官の手心によつて、最も人情的に適合された時にあることでもわかる。故に現代における理想的な法律とは、それが現代の社會理想によく適合し、その不合理であるものを闡明して、合理的な正義に赴かする用意そのものにある。また前述の如く、法律力は今日のやうな時代にあつて、決して絶對の獨立權を持たぬ。それを合宜に適用する點に、その効力を發揮する事があることを知るならば、少くも早稻田研究室の臨檢に當つても、もしそれが時代を知る法官であつたならば、彼等は必ず思想の自由と獨立性を知る故に、どんなにせつぱつまつても、決して今日に至つて世間の批難と反感を買ふやうな、ああいふ間違つた「自由」は擇ばなかつたであらう。またたとへ臨檢の必要があるにしても、また或る教授に、國法によつて臨檢される嫌疑があつたにしても、あゝした無遠慮な手段を採る事までは遠慮したであらう。が、一方にかゝる研究室の特權を利用して、明らかに研究以外の行動を敢てしたのが事實であるならば、その教授の行爲はもとより指彈すべき事ではあるが、その見やうについては、現代の政府側の思想にも、平生その判斷を明らかにさせ得ない幾多の誤まりがあるので、どう見たらよいか判らぬが、それにしても、あの臨檢の無遠慮さが正しい手段だとして考へられるものにはなり相もない。

また學校當事者が、平生かくの如く思想研究の獨立自由性を尊重する事を理解すると共に、現はれたやうなあゝした研究室臨檢が、必ずしも、絶對に避け得られないものでなかつた事を法律の性質から考へたならば、彼等は決してあんな輕はづみな全く無權威な手段を採るべき筈でなかつた事を信ずる。

けれども學校當局のあの意氣地ない屈辱は、決してこの一事によつて始めて暴露された譯では無い。官立と云はず、私立と

云はゞ、凡そ今日の學校や、研究室で、長い間、官僚的教育精神によつてじうりんされてない學校が恐らく一つも有るだらうか。凡そ官僚といひ、國法といひ、じうりんされる事は一つである。已に一つのじうりんを許すならば、自然他の二つも三つも四つもを許したとて大した違ひはない。吾人がこの思想討究自由の危機に接して、將來二度とこのじうりんを取て荒しめない爲に、飽までも奮鬪しやうとするのは、單にこの國法の無法な思想自由のじうりんの爲ばかりではない。更にこのじうりんを許す機會を作つたところの、官僚的教育精神に向つても、同時に同じ宣戰をしやうとするのである。

社會主義懼るゝに足らず

文學博士 三宅雪嶺

社會主義としての認識こそ新たな事とすれ、其事實は多少何處でも知られて居つた。儒教にも佛教にも、之に類似した思想の少くないとし、多く文字を知らぬ者も、幾分か此邊に考へ及んで居つた。石川五右衛門が太閤秀吉と問答し、お互に同じ事をする者と説いたといふ事の知れ渡つて居るのは、作り事にせよ、一般世間で此邊に考へ及ぶによる。鼠小僧が大名の財物を奪ひ、之を貧民に撒いたとて、墓に香花の絶えぬのは、事實であつてもなくても、何かの筋道がありさうに思はれるからである。支那にも日本にも俠客といふ者があり、双方全く同じでなけれど、強きを挫き弱きを扶けるの稱すべきを覺えて居る。日本で博徒といふのは、賭博して得た金を博奕で分つのであり惡事と知りつゝ何か取柄あるかに考へて居り、甚だしいのに盗賊其者を演劇に仕組み、五人男とて喝采したりする。支那では現に土匪が大袈裟に同樣の事を實行して居り、水滸傳は四大奇書の一として持て囃される。歐洲でアレキサンドル王がトラキアの盗賊にやりこめられたといふのは、何時頃作り出された話か、五右衛門の事と同じである。

然し是等は特殊の盗賊に理由を見出すのであつて、財產共物

について考へては居らぬ。財産とは何か、盜んだ物である、と佛國のプルウドンが言ひ出した時、世間で耳を欹てずに居れなんだ。アレキサドルがトラキアの盜賊よりも大なる盜賊とせば其處に考へ及ぶの自然であるけれど、前に政權が問題になり、金權がそれ程問題にならず、財産が盜み物であるや否やに注意せず、歐洲でも漸く十八世紀の末、蒸氣力の應用・紡績機械の發明等で此邊に考へるやうになつた。東洋では其れ程の事なく、暴を以て暴に代へるの已むを得ぬ場合あるを認める位であつて天保八年（一八三七年）大鹽平八郎が兵を起し、大阪市中を燒き拂ひ、富豪の財物を人々勝手に取るやうにと振れ廻つたのが一種の社會主義を實行するの意に出でた者と看做し得られる。昨年の春、大隈山縣二元老が續いて八十五歲で歿したが、大隈侯は屢々明言した、我輩は天保の饑饉に產れた者であつて、大鹽が黑焦げになつた翌年の事であると。大鹽の檄文は、普通の俠客の考へ及ぶ所でなく、隨分筋道を立てて說いて居り、四海困窮せば天祿長く終へんといふ所から出發し、標語も明かに救民とし、天誅とする。本來孔孟の教に社會主義的分子を含み、王陽明に於て之を著しくし、大鹽は陽明學を體得し、更に大饑饉で民衆が難儀し、役人と金持とが目の當り之を見て救はうとせぬのを怒り、眼に物見せてやらうとしたのである。成功を期したか何うか。破れかぶれに打て出たのか。何れにしても、主張と云ひ、運動と云ひ、歐洲の社會主義者が企てない所を決行した形があり、プルウドンどころの話でない。主義と認むべきに至らぬのは、商工業地の或る部分で必要を感じ、他は多く諒解しなかつたに出る。富豪の財物を抛り出し勝手に取れよと云ふたとて、一般の農家は單に亂暴としか考へぬ。併し幕府で平八を極刑に處したに拘らず、大阪市民が平八郎樣と云ふの偶然でない事、矢部駿河守が藤田東湖に語つた所でも察せられる。必要あれば、彼の如き事を演ずるに至る。

　歐洲の社會主義は佛國革命に引き續いて起つたが、佛國革命は、社會主義を考へずに之を加味して居る。壓政政府を顚覆しさへせば、一般に幸福を得られると考へ、自由・平等・友愛で、現世に樂園を造り得るとした。パンを與へよと叫んだのは、明かに經濟問題であつて、特に經濟を調査するの勢になつて居らぬ。政府を顚覆すれば何うにかなると思ひ、恐怖時代に次ぐにナポレオンの戰勝時代を以てし、それが倒れて、戰後の疲弊に苦しみ、何うにかせねばならぬといふので、社會改造を工夫し社會主義なるものが廣く知らるゝに及んだ。佛國で一通り社會主義を考へ、それから獨逸及び露國に一層力を注ぐ者が出で、マルクスが主なる權威と見られたりする。

日本では歐洲の書を讀み、新たに社會主義の知識を得たとするが、明治維新は幾何か佛國革命と趣を同じくし、尊王攘夷で幕府を仆しさへせば、治國平天下の理想に達し得るとした。其處で門閥を一掃せうと企てる。愚劣なる者が富貴の位置に居るのを怪しむ所もあり、能力あつても、小祿で辛じて暮らし、或は浪人して食ふに困るのがあり、尊王攘夷で現狀打破を敢てしそれが思ふたよりも容易に爲し遂げられ、さて考へて見れば、不滿足の事が頗る多い。廢藩置縣で門閥を一掃したけれど、貧乏士族は依然貧乏暮しせねばならぬ。是れ皆な政府の處置が惡いのであつて、民選議院を設立せば、之を改め得るとて、自由民權運動が盛んになり、剩へ福島事件とか加波山事件とか、いろいろ騷ぎが起つた。それでいよいよ憲法發布あり、帝國議會が設けられ、豫期通りになつたと云へるか。前に自由を旗幟にし政黨を組織した者が、漸次力を衆議院に伸し、後に黨首が大命を拜し內閣を組織するに至たり、それが自ら滿足し、現狀維持に專らなのは、何の爲めか。政府からも、特殊銀行會社からも或る事業經營者からも、種々の利益を得、之を分配する所が與かつて居る。如何に金を拂はねばならぬかは、桂公が實驗して人に語つた所であり、其の反對黨として存在する憲政會も、之と同樣の位置を得やうとし、元老の機嫌を取結ぶに骨折る。政黨は有り餘る所から金を取り、之を廣く選擧人に頒ち、平均を企てゝ居る。唯恰かも博徒が自分の仲間だけ富して滿足するが如く、政黨と云ふ團體だけが利益を得れば可いとする。滿鐵ならば法外に高く炭鑛を買はしめ、法外な分を捲き取らうとする。得べくんば金融の饒かな所に對し悉く同樣の事をするを望む。政友會の大立物たる星亨は博徒の親分肌と云はれたが、政友會は實際に大なる博徒團體と云へるのであつて、憲政會は之に倣はうとして居るらしい。

併し此の團體以外に不滿足を感ずる者が少くない。團體員自らは從來の習慣で過ぎて來たり、社會主義と何の關係あるかを考へぬが、團體內に粗朴なる社會主義を實行する所がある。若し政府で之に利益を與へねば、何の騷ぎを起すか知れぬ。歐洲で社會主義と云ふのはある團體に限るのでなく、國家全體に及び、或は廣く國際間に及ぼうとするのである。之には日本で所謂主義者なるものが加はつて居るが、明かに政黨を組織するを禁ぜられ、自らも禁ぜられるので政黨を組織しようとせず、動もすれば議會無用論を唱へるに至る。政黨を組織せずに何を爲さうとするか。直接行動で社會を改造するの時機あると云ふが、それではいよいよ團體組織を禁ぜられる事になる。歐洲では社會黨又は勞働黨と銘打つて居て、議會に勢力を占めるのがいろ

いろある。日本ではさうなつて居らず、さうなるべきでないとすること、政府も主義者も共に考へ直すべき所でないか。

社會主義に種類あり、現に國家社會主義を標榜する者が、主義者の名ある者を壓迫しようとし、主義者中或は非常手段に訴へようとしたりするが、社會主義と看板を掲げねばならぬ事がない。他に相當の名義が幾らでもある。社會主義は範圍頗る廣く、何時でも何處でも幾分か之を行ひ、今の日本政府で何れ程之を行つて居るか知れぬ。社會政策であつて社會主義でないと云ふが、それは主義の解釋次第である。普通に社會主義者の唱へる所の或る部分を實行して居り、ただ其の程度が低いだけである。所得税にせよ、相續税にせよ、幾何か平均を求める所がある。それ位では燒石に水としても、水を掛けて居るを認めねばならず、多く水を掛ければ燒石が冷えてしまふ

社會主義者は直接行動で秩序を破壞するの虞れありとせられるが、之れ政黨を組織し得ないからであつて、明かに政黨を組織し、總選擧に爭ふ事にしては何ういふものか。安寧秩序を紊すが如き、政黨を組織しても、しなくても、嚴に處分すべきものに屬す。公安を妨げぬ限りに於いて、社會主義の實行を期し得ないと云はれぬ。主義者の名前で疑ある者は、悉く引き括るといふやうでは、決して事の宜しきを得るとせぬ。等しく社會主義と稱しても、何種の主義か之を訊ねれば分るでないか。刑事付きの主義者もあれば、大學で教鞭を執つて居る社會主義說明者もある。相應の位置に居る官吏にも社會主義者がある。近頃或る實業家の會合に、官吏と賀川氏とが講演し、後者の頗る穩かなのに似ず、前者が無產階級の肩を持つので一座が驚いた。危險と思ふのが案外危險でなく、穩健と思ふのが案外穩健でない。現はれた所のみで判斷すれば事が間違ふ。

日本では昔から劇しい爭がなく、明治維新西郷が江戶を燒き拂らつてやると云ひつゝ、勝と笑ひ話し、一切を之に任かせて去つた。憲法も平穩に發布された。佛門の如く、貴族僧侶が全國土地の三分の二を占め、露國の如く、帝室の財產百億圓と云はれたりしては、大變動の起るを免かれぬ。日本は其れ程の懸隔を生ずる事なく、多少不穩當と氣付けば、自づと改めるに傾く。それで物足らぬ所あり、又好い所もある。今日まで日本の社會主義者は、虐められて僻がむやうになつて居る。繼子は僻がむので虐め、虐めるのでいよいよ僻む。その中で何と云はれても堺氏が、社會主義で通して來て居る所、少からぬ骨折りと云はねばならぬ。山川氏の性格及び學識は敬意を値する。特に夫人菊枝子の如きがあるのは、外國人に聽かせても、肩幅の廣きを覺える。他にもいろいろの人物があり、濫りに主義者とし

特殊部落扱ひすべきでない。中に贋物もあり、屑もあるが、それは何事にも免かれない。

『迫害は砂の縄を綯ふが如し』

内ヶ崎作三郎

一、迫害の心理と動機

『迫害の歴史は自然をあざむき、水をして山に登らしめ、砂にて縄をなふが如き努力の歴史である。その行爲者が多數であらふが、一人であらふが、專制者であらふが、亂民であらふが、何等の相違がない。一つの亂民團は自ら好んで、理性を失ひ、その作用を妨ぐる肉體の一社會である。亂民とは好んで野獸性に墮落せんとする人間である。其ふさはしい活動の時は夜である。その行動はその全組織の如く狂的である。其は一つの主義を迫害し、一つの正義を鞭撻せんとする。そは之を所持する人とその家に放火し暴行を加へて、正義にタールを塗り羽を付け（北米印度人間の制裁の様式）んとする。そは兒戲に類する。そは火消ポンプを以て燗々として星にまで達する極光を消し止めるやうなものである。凛乎として犯すべからざる精神は惡を行ふ者に對して怨恨を向ける。殉教者の名譽は沒することが出來ぬ。加へられたる鞭は名譽の冠である。あらゆる牢獄は有名なる邸宅となる。あらゆる焚かれたる書と家とは世を照らす。あらゆる抑壓せられ、削除せられたる言葉は世界の隅より隅へ反響する。正氣と考察の時は常に個人にも社會にも來りつゝある。その時には眞理は承認せられ、殉教者が無罪なりと宣告されるのである。』

エマースン

これはエマースンの報償（コンペンセーション）論の一節である。米國は民主國であるから、眞理を迫害するものは民衆である、多數者である。されば彼は亂民を攻撃するに少しも遠慮しない、毫も假借する

所がない。

しかし迫害は今にはじまつたことでない。東西古今を通じて行はれ來たものである。たとへば原始社會に於て種族があつて個人が認められなかつた。個人の意志がなくして、種族の意志が絕大至高であつた。個人は種族の風俗習慣に服從するより外に方法がなかつた。若し之に從はぬものがあれば隨分思ひ切つた制裁が加へられたのである。

然らば何故に迫害が生ずるかといふと、これには幾つかの原因があると見なければならぬ。たとへば、宗教の場合に於て、一つの宗派の主張者が、自ら信ずる處が唯一無二の絕對の眞理であると確信し、他の信仰を不完全にしては虛僞ありと考ふる場合に、必ず何等かの形に於て迫害が行はれる。

又政權を掌握するものが國家社會の安寧秩序を維持するは自己の職分もしくは天職なりと信じ、他の異れる政治學說と異端邪道視する。而してその說の斷行を默認するは國家社會を危くするものと考へて、之を迫害するか、嚴禁するか、或はその唱導者を拘引するか、投獄するか、極端なる場合には死刑にも處するのである。

若し一宗教が國家と結び付いて、政治的一要素となり、その國家の秩序を維持する一方便となる時、その宗教は他の異說を迫害するのである。たとへば基督教は最初ローマの秩序を亂すものとして迫害せられた。しかるにこの熱心なる新宗教は迫害を以て絕滅せらるゝにはあまりに多くの生命を藏してゐた。基督教はとう／＼ローマ帝國の國教となつた。一度國教となつたローマ教會は中世紀に於て盛に異端征伐をやつた。宗教改革以後に於て新舊二派の爭鬪は全く內亂以上の大戰爭さへも實現したのである

しかし近頃は宗教上の迫害は勢力を失ふに至つた。蓋し政教の分離が世界の重なる國々に於て行はれるやうになりて、宗教のみが、社會の秩序の保持であるといふ責任から解除されたからである。しかし政治上の迫害は中々やみそうもない。しかし多くの場合に於てこれも不成功である。革命前のロシア政府の革命黨に對する態度が之を證明する。カイゼルの政府が社會民主黨に對する高壓的政策もあまりきゝめがなかつたやうである。今日カイゼルの感想果して如何。

政治にせよ、宗教にせよ、迫害は大した功能がなかつた、あつたとすれば迫害によつてその所說を廣告し、宣傳してやるやうなものに過ぎないではないか。

二　ミルの言論自由の說

ミルは「思想及び言語の自由」に於て、思想の自由及び言論の自由が人類の精神的幸福に必要なるを述べたが、その結論は左の數點に歸するのである。

第一、茲に或人が新説を發表したとする。それを官權が沈默を強ひたとせよ。然るにその新説は官權のために都合が惡いから、この方法を執るのであるが、實際その新説が眞實であるかも知れぬ。若し官權がこの新説を否定するとなれば、自ら誤謬に陥るらないと斷言することが出來ぬ。

第二、かりに沈默を強ひられたる新説が全體として誤謬であつても、眞理の一部分を含んでゐるかも知れない。實際往々にしてかゝる事がある。一體何事によらず、新説が眞理の全部を含むことが珍しいし、またかゝる場合は殆んど絶無であるから、眞理の他の殘れる部分にて其缺陥を補ふことが必要である。このためには反對する諸説をして衝突せしめて見なければならぬ。然るに早くも新説の自由を束縛すれば異説と切磋琢磨する機會がなくなるから、眞理の闡明は幾分か妨害を感ずる次第である。

第三、又新説が本當の物で、完全の眞理であつたとしても、熱心に論議することが許されないとしたならば、之を信ずるものも、いい加減に信ずるから、其合理的論據を理解しないかもしれぬ。例へば現在の或る國家論が絶對の眞理であると假定して、之を批評し評論する自由が與へられぬ時は、折角の眞理であつてもその論點が不明瞭となり不徹底とならないと限らない。

第四、もし反對論を抑壓すれば「眞理」そのものゝ意義が閑却せられ、然らざれば衰微する恐れがある。從つて人の品性と行爲とを支配すべき活動力が失はれる。蓋し反對論を許容せざる既定説は單に形式一片の宣言となりて何等の結果を生ぜず、道理または自己の體驗に基く眞摯熱實なる心證を得ることが不可能となるからである。

要するにそれは自由討論によりて眞理は闡明せらるべきもので、一説を固守して他のいかなる説をも抑壓するは、結局その説自身のためにも不幸なる結果となる。凡そ敵國なきものは危いと古人がいつたやうに、いかなる國家も、政體も、眞理も、批評や反對を包容する雅量がなければ、却つて損失を蒙るのである。されば爲政家が大に考慮しなければならぬ點であつて、

ミルの自由論は今日も猶吾々に教ふる節々が少くないやうに感ぜられる。

三　法難がパウロと日蓮とを偉大にした

眞に確く信ずる所ありて立つ者を法律や社會民衆の壓迫を以て之を無視せんとした計劃は常に失敗に歸した。基督の使徒パウロは猶太の同胞に責められ、ローマの官權に壓迫せられても猶次の如く揚言したではないか。

『我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ。患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危險か、劍か。錄して、「汝等のために我等は終日殺されて屠らるべき羊の如きものと爲されたり」とあるが如し。然れど凡てこれらの事の中にありても我らを愛し給ふ者に賴り、勝ち得て餘あり。われ確く信ず、死も生命も、御使も、權威ある者も、今ある者も、後あらん者も、力ある者も、高きも、深きも、此の外の造られたるものも、我らの主、イエス・キリストにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。』(ローマ書第八章)

『ユダヤ人より四十に一つ足らぬ鞭を受けしこと五度、笞にて打たれしこと三たび、石にて打たれしこと一たび、破船に遭ひしこと三度にして、一晝夜海にありき。しば／＼旅行して河の難、盜賊の難、同族の難、異邦人の難、市中の難、荒野の難、海上の難、僞兄弟の難にあひ、勞し、苦しみ、しばしば眠らず、飢ゑ渇き、しばしば斷食し、凍え、裸なりき。』(コリント後書十一章)

パウロは内外の困難、窮乏、誤解、迫害に對して撓まず屈せず、終に信仰の勝利をえたのである。

日蓮が鄕里淸澄山に開敎して、追放せられ、松葉ケ谷の法難となり、伊豆に流罪せられ、更に小松ケ原の法難あり、龍ノ口の危機あり、佐渡の謫居生活となつた。しかも彼の信念は一難を經て、更に一層の堅實と深刻とを加へたのであつた。

『今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、誰の人か法華經につけて、諸人に惡口罵詈せられ、刀杖等を加へらるゝ者ある。……當世三類の强敵なくば誰か佛敎を信受せん。日蓮なくば誰をか法華經の行者として佛語を助けん。……善につけ、惡につけ、法華經をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てん。

日本國の位を讓らん、法華經をすてゝ觀經等について後世を期せよ。父母の頸を刎ねん、念佛申さねば。なんどの種々の大難出來すとも智者に我が義破られずば用ひじとなり。その外の大難風の前の塵なるべし」(開目抄)

日蓮のこの意氣と信念に對しては、鎌倉幕府の威光も何の施す術がなかつたではないか。迫害と嫉視とのうちに生れ出でた改革佛教は終に勝利の榮冠を今日に得てゐるではないか。

依つて私はエマーソンの「迫害の歴史は砂の縄を綯ふが如し」といふ語の意味の深長なるを考ふる。僞政家が國家の秩序を重んじ、之を維持する必要より、法律に基いて行動するやむをえざる事であらふ。但し「儀文は殺し、靈は活かす」といふ言がある。法律の文字に捉へられずして、その生命を發揮することが必要である。然らざれば却て豎子をして名を成さしむるに止まるではないか。

四　免疫性政策を實行すべし

今日我が國に於て宗教上の迫害は殆んど跡を絶つたが、政治上のそれは中々やみそうもない。大戰後の大動搖時代に、殊に幾多の帝國が倒れて共和政やら、ソヴイエツト政府が成立した今日に於て、その波瀾重疊して、東海の島帝國に大波小波の打ちよせて來ることは當然である。ことに東部シベリアに於て緩衝地帶の實現が夢となりて、赤露の勢力が沿海州にまで及べる今日、その影響が我が國に來るはやむをえない。されぱというて、この思想的勢力を絶滅することが出來ぬ。言論は中止しても思想が隱れて普及し成長するからきゝめがない。むしろ免疫的積極方策を採用するより外に方法はない。

第一、に露西亞の現狀を忠實に研究し、その長短を遠慮なく批評すべきである。

第二、社會主義の運動といひ、共産主義の運動といひ、現在の社會國家の制度とは全然一致するものではない。しかし我が國は或る程度までの國家社會主義を實行してゐる。家族制度のうちには幾分の共産主義のひらめきなきにしもあらずである。故に是等の立場にある人々の要求を參考として、現行の政治や法律を徐々として改正すべきである。大本は動かさずに、讓歩せられうべき點は幾らもあるに違ひない。この點から考察すると、普選斷行も遠慮して實施しかねてゐるやうではその態度のあまりに無關心に驚かざるをえない。

第三、かりに僞政家の立場よりして秘密結社を檢擧することが必要なりとして、何故にもうすこし靜かにやれぬもので

あらうか。此度の檢擧の如きはあまりに吹聽がひど過ぎたやうである。鳴物入りの大騷きである。かゝる方法は檢擧された人をえらい男にする功能はあるが、その思想の宣傳を妨ぐるさき目はあまりなささうである。

第四、今日の我が國の社會問題の中樞は人口問題に伴ふ就職難である。この問題が解決されぬ間、社會的動搖が常に起ると見なければならぬ。暴力團の發生も多くは無職が原因であらう。左傾的運動は間接には同一原因を有することゝ考ふる。内務當局は社會主義者の演說を中止したり、共產主義者を檢擧することがやむをえぬとして、人口問題に對して、何等の成案ありやを承はりたい。現内閣の諸大臣は何等の抱負ありや、發表されてほしい。然らされば政治家といふ稱號を撤廢してあげなければならぬ。

第五、今日までの檢擧の結果、左傾的思想が弱くなつたと思はれない。一體これまで社會主義者を投獄すれば彼等は勉强して新しい一國語位を研究したさうだから、官費で洋行をさせたよふなものである。またやたらに演說の中止をさせるも考へもので、一度分の材料を數回にも數十回にも流用する機會を與へたでないか。

第六、警視廳は治安を維持するにある。眞の理想社會は成るたけ事件のない社會である。しかるに事件がなければ成績が擧らぬやうに見ゆるから、努めて事件なり問題なりを作るやうにも評判されてゐる。これは當局者が眞面目に考ふべき點である。その結果一介の青年をして知名の士たらしめ、平凡なる人間を一人前の志士に仕立てるのである。如何なる國に於ても牢屋は革命志士の養成所であるから、餘り此處を用ゐぬ方針をとるがよい。一體人間が反動的、彈力性があるから、壓迫が强いと、反動も自然に强くなる。この手加減は爲政家の腕前だと思ふ。新聞に大袈裟に吹聽して檢擧することなどは改良の餘地があるやうに思はれる。

要するに自由討論及び研究の精神と方法とを奬勵して、舊新の說と意見とを鬪はし、互に刺戟して進步發達するやうに社會を仕向けねばならない。同時に政府は社會政策を徹底的に斷行して不平不安を減少しなければならぬ。もし檢擧と裁判と刑務所の費用が積極的社會政策の方面に使用せらるゝ時は、左傾的思想發達を緩和すること疑ないと思ふ。

光雲翁昔ばなし（續篇）

田村松魚聞書



葦(よし)の葉のおもちゃのはなし

暫らく話を途切らしたんで、少し調子がをかしい……何處(どこ)まで話して居りましたつけ……左様……此の前の話の處で先づ一段落附いたことになつてゐた。此れからは、ずつと、私の仕事が社會的に働きかけて行かうといふ順序になるので、私の境遇——生活狀態も隨つてまた實際的で復雜になつて行くことになりますが、話の手順は却つて秩序よく運んで行くことゝ思ふ。

處で、今日は暫らく振りであつたから、無駄話を一つ二つして、それから改めてやることにしませう。此の話は堀田原の家を師匠が賣つたについて、壽町へ立ち退いた時代で、明治十一二年の頃、父兼松が六十一二、私が二十六七といふ時、隨分他愛もない話であるが、私の記憶には印象の深いものとなつて居る。……東京の年中行事の一つである鳥(とり)の市(まち)で熊手を賣つたといふ話や、葦(よし)の葉の虫のおもちやを賣つた話など……今日、斯うして此所に坐つて居つて其當時のことを考へると不思議な氣がします。

私の父兼松は、もはや還曆に達した老人となつたが、至極達者なもので、私が一家のことをやつて居るので、隱居で遊んでゐてもよろしいのであるけれども、始終、何かしら自分で働く

ことを替へ自分の小遣ひ位は自分で稼いでゐる、何と云つて取りとまつたことはないが、前申す如く、大體器用な人で、手術は人並すぐれてゐる所から、何かしら自分の工夫で小細工をやつて見たい。安閑としてぶらり遊んでゐることは嫌ひで必ずしも自分の仕事が錢にならなくても、手と腦とを使つて自分の意匠を出して物を製へて見やうといふのである。それで、孫が出來れば、孫の爲におもちやをこしらへる。引越しをすれば、越した先の家の破損を繕ふ。籬を結び直す。羽目を新らしくする。欄を造るとか、勝手元の働き都合の好いやうに模様を變へるとか、それはまめなもので、一家に取つて重寶と云つては此の上もない質の人でありました。

それに、元來、稼ぐといふ道は若い時から苦勞をして居るから充分に知つてゐる。手術が持前で好き上手であるので、道樂半分、數奇半分、欲得づくでなく、何か自分のこしらへたものを其時々の時候に應じ、場所に適めて、賣れるものなら賣つて見やうといふのが父兼松の其頃の樂しみの一つでありましたが、それも買手が氣持よく自分の趣向をおもしろいと思つて喜んで買つて行けばよし、さうで無ければ賣る氣もない。元手と利益を勘定づくにしてやる商賣ではなく隱居の道樂に、洒落で何か人の氣を「成程、これは、どうも、おもしろい。好い趣向だ。」と感心させて見たいといふ氣分で、此れが此の老人に隨いて刎はつた癖でありました。

それで、ドンなものを父は製へるかといふと、此の前話した火消人形のやうなものから、いろ／＼妙なものがありますが、其中で、夏向きになつて來ると、種々な虫の形を土で拵へて足は針金で、羽根は寒冷紗又は適當な物で造り、色は虫其物によつて彩色を施し、一見實物に見える樣拵へるのです。其種類は、蜂、蟬、鈴虫、きり／＼す、赤蜻蛉、蝶々、バッタなどですが、一寸見ると、今にも這ひ出したり、羽根をひろげて飛び出さうといふやうに見えます。

「どうだ。本當の赤蜻蛉に見えるだらう。此のバッタは何うだ。此の脚の張り工合が趣向なんだ。」

など云つて、障子の棧へなど留らせると、本當に赤蜻蛉とバッタが陽氣の加減で出て來て居るやうに見える。老人は得意になつて、其儘ぶらり何處かへ出て行つてしまふ。何處へ行かれたかと思つてゐると、やがて歸つて來られる。手に青々とした葦を持つてゐる。何處か淺草田圃の方へ行つて取つて來たのでせう。

「葦を取つて御出でなすつたね。それをどうするのですか。」

「此れか。此れが趣向なんだ。」

老人は細工は流々と云つたやうな自信のある顔をして、またぽつ〳〵仕事を初め出します。何をするのかと思ふと、その切つて來た萩の葉へ、今のバツタや赤蜻蛉などを留らせて、と見、かう見してゐる

「此れは、何うだ。異だらう。」

老人は萩の葉を緣先へ立てゝ見せる。成程、自然の色を持つた若葉の淺緑の生々した葉裏などに、その夏虫のとまつてゐる所は、如何にもおもしろい。異でもあり、妙でもあつて、とても、市中の玩具屋を探して歩いてもある品ではない。此の妙な思ひ附きが一つの趣向で老人はすつかり好い氣持になつて、それを持つて、彼岸の人出する場所、或は六阿彌陀のやうな所へぶら〳〵と行つて見るのであります。時候はよし、四方の景色はよし、木蔭の石塔籠の傍などに、今の玩具を置いて其所に腰打ち掛けて一服やつてゐる。通り掛りの參詣仲間の人達が、不圖目を附け、これは異だ、妙だと云つてる中に、何となく好奇心にそゝられて、その赤蜻蛉のを私に一本、その蝶々のを私に二本といふやうに、つい興がつて買ふ氣になるのです。斯うなると老人の得意は嘸かし、手間は相應掛つても、元が掛らない手細工ですから、幾金にしても儲はある。二時間、三時間、氣の向いた道を景色を眺めて散歩してゐる間に幾金かのお小遣ひが取れるのであります。

老人は日暮れ近くになつて、ぶら〳〵と歸つて來られる。取れた儲けの中から、お土産などを買つて……手間と元手も實はもうそのお土産になつてしまふこともあるが、それでも老人は萬と儲けたやうな氣分「今日は中々おもしろかつた。」と云つて罪なく笑壺に入つてゐる所は洵に人の好いもので、私達夫婦は、つい貰ひ笑ひをして、

「お父さん、折角儲けたのを皆んなお土産にしてしまつてはお氣の毒ですね。それでは商賣にならないでせう。」

などいふと、

「何に、先方が馬鹿に俺の趣向をおもしろがつて買つてくれるんだ。儲けなくても、それ丈けでも氣保養だのに、斯んなお土産が貰へて、まだ少し位殘つた所などは感心ぢやないか。」

など、何處までもお人柄な隱居氣質。斯ういふところは生馬の目を拔くやうな江戸の眞中で若い時から苦勞づくめの商賣をした人のやうでもなく、どうかすれば歌俳諧でもやりさうな隱栖でありました。それに、をかしいのは、老人の斯の新案の萩のおもちやは極く日中は不可ないのでした。薄曇つた日とか、

朝夕位のところでないと、家の若葉がしぼれるので、ほんの僅間の生々しい氣分を賓物にするといふ、まことに妙な玩具でありました。

老人はまた思ひ附くと何んでも拵へました。大山登山の行者などはお得意のものであつた。行者を白い紙で拵へ、山を、小さな、芝居の岩山のやうなものにして、登山のさまを見るやうにこしらへました。指先が利くので、一片の紙の片ツ端でも、此の人の手に掛ると不思議に生きて來たのであります。結局自分の感じたおもしろ味を、文字で無く、物の形にして、それを即興的に現はしたもので、當座の興でありましたが、また其頃には斯うした趣味をよろこぶ人が多少ともあつたものでありました。

熊手を拵へて賣つたはなし

斯ういふことが續いてゐたが、或年、大分大仕掛けに、父は熊手を拵へ出しました。

鳥の市で無くてならないあの熊手は誰でも知つてゐる通りのもの。眞中に俵が三俵。千兩箱、大福帳、蕪、隠れ蓑、隠れ笠、おかめの面などの賓盡しが張子紙で出來て、それをいろいろな繪具で塗り附ける。枝珊瑚などは紅の方でも際立つたもの、その配色の工合で生かして綺麗に景色の好いものとなる。此の方は夏の中から拵へますが、熊手になる方の竹は、市の間際にならないといけない。此は青い竹を使ふので、枯れてゐては色が死んでおもしろくない。五寸、六寸、七寸、尺などといふ寸法は熊手の曲つた竹一本の長さできまる。いづれも竹の先を曲げて物を掻き込む形となつて縁起を取るのであるが、その曲げやうにも、老人の語る處によると、矢張り手心があつて、絲などを使つて曲げを吊つてゐたり、厚ぼつたかつたりするのは拙手なので、絲無しで薄くしまつて出來たのが旨いのだなど中々斯んなことでも老人は凝つてやつたものです。

一本一本出來て數が積り、百本二百本といふやうになると、恐ろしく嵩張つて場所ふさげなものです。併しまた數が積つて狭い室一杯に出來揃つた所は賑やかで悪るくもないものです。其のいろ〳〵の飾り物の中で、例のおかめの面、大根じめ、積俵は三河島が本場（百姓が内職にしてゐる）だから、其方から仕入れる。熊手の眞中に先づ大根締を取附け、其上に俵を三俵又は五俵眞中に積み、其後に帆の附いた帆掛け船の形が出來て、其まはりにいろいろな賓が積み込んであるやうに見せて、

竹の串で刺し留めてある。丁度大根締めと俵とに刺さるやうになるのです。さうして、金箔がぴか〳〵して、俵面には大福帳とか大寶惠帳なぞと縁喜よい字で胡粉の白い所へ、筆太に出し、千兩箱は杢目や金物は彩色をし、黒汁で威勢よく金千兩と書くのです。

斯んな風だから、相當此れは資本が掛ります。中々葦の葉の玩具のやうに無雜作には參らぬ。日に增し寒さが嚴しく、お鳥樣の日も近づくと、滅切り多忙しくなるので、老人は夜業を始め出す。私も傍で見てゐる譯にいかず自然手傳ふやうになる。家内中、手が空いた時は老人の仕事を手傳ひ〳〵豫定の數へ漕ぎ附けました。

當日が來る。

お鳥樣の境内、その界隈には前日から地割小屋掛が出來てゐる。平生は人氣も稀な荒寥とした野天に差掛けの店が出來てゐるので、前の日の夜の十二時頃から熊手を荒長持に入れて出掛けるのですが、最高のものだから、サシで擔がなければなりません。その片棒を私がやつて、親子で、諏町の家を出て、入谷田圃を拔て擔で行く。

御承知の通り大鷲神社の境内は狹いので、皆無理をして店を拵へる。私達の店は、毎年店を出す黒人が半分池の上に丸太を渡し其上に板を並べ、自分の店を拵へて、其餘りを、私の父が貸りました。場所がよくて、割合に安いが、實に危險です。それは隣りの店の餘りで、池の上に跳出しになつてゐるのです。前は手欄で、後は葭簀張り、大きいのから高い方へ差し、何んでも一側に景氣の引立つて見えるやうに趣向をする。緣起をかつぐ連中は午前一時頃から押掛けて來る。いの一番に參詣して一年中の福德を自分一人で受ける考――朝は一寸人が減く、午前十時頃からまた追々雜踏するが、昔の客は割合にお人柄で、夕刻から夜に掛けてお店物並に職人のわい〳〵連中が押して來て非常な騷ぎとなる。何んでも一年中で此の鳥の市程甚い雜踏はないのだから、實に無茶雜多な人間が流れ込んで來る。兎に角、生馬の目でも拔からうといふ盛り場のことで、ぼんやりしてゐては飛んだ目に逢ふのですが、私の父は、さう云つた人中の商賣は黒人のことですから、萬事に拔目が無く、例令ば賣溜の錢などは、バラで抛つて置いてある。商賣用の葛籠の蓋を引つくり返して、其中へ錢をバラで抛り込んで置く。そんな投げやりなことをして好いのかと私は心配をして父に注意すると、

「何に、此れが一番だ。小さな入物などに入れて置いては、隙を狙らつて掠つて行かれてしまふ。斯うして置けば奪らうたつて奪

れやしない。」

と、自分の經驗を話したりして、中々巧みなものである。師匠の店で彫物ばかりしてゐる私には中々珍らしく感じました。

さて、夜が明けて當日になると、晝間は中々聲が出せない。默つて店にぼんやりしてゐるやうなことでは不可ないので、何んでも緣喜で、威勢がよくなくつちやならないのですから、呼聲を立てないといけない。それが中々私などには出來ません。

併し、何時までも迷惑な顏をしておど〳〵してゐれば何時迄經つても聲は出ない。思ひ切つてやれば、やれるもので、斯ういふ處へ出れば、また自然その氣になるものか、半日もやつてゐると、さういふことも平氣になるのはをかしなものです。

當日の夜はまた一層の人出で、八時から九時頃にかけて出盛る。今日のやうに社の前を電車が通つては居りません。兩方がずつと田圃で、田の畷を傳つて、畷とも道ともつかない小逕を無數の人影がうよ〳〵してゐる。田圃の中には燈火が萬燈のやうに明るく點つてゐる。平生寂寥の田の中が急に賑ひ盛るので、その夜景は不思議なものに見える。時候も今日のやうに冬に入る初めで無く、陰曆の十一月ですから、筑波颪がまともに吹いて來て震え上る程寒い。その寒さを何とも思はず、群衆はこね返してゐる。商賣人の方は尙更、此所を先途と聲を張つて景氣を附けてゐるのです。

併し、札附きの商賣人になると、決して賣ることを急がない。中々落付いたもので、店番の手傳ひに任せ、主人はぶらり一體の景氣を見て歩き、さうして、今度の市の相場を視察してゐる。今夜は、八寸から一尺迄がよく出るとか、ちやんと目星をつける。さうして賣れる方の側のものは仕舞ひ込んでしまふ。丁度、素人のすることゝ反對のことをしてゐる。さうして、賣れ向きの悪るい方から賣つて行つて、それが賣り切れになると、賣れる方のを三本か四本位出して、蠟燭四本の物なら二本へらして薄くらくして置く、すると買ひ手の方は要求してゐるものが其所にあるから、値を聞く。賣手は他店にもう品切れと踏んでゐるから、吹つ掛けて出る。一聲で負けたところで、利分は充分。それに商賣が仕易いのであります。さうして賣れないものは無理に賣らうとはせず、二の鳥を俟ち、三の鳥があればそれをも俟つといふ風で、決して素人のやうに賣り急ぎをしないのださうであります。際どいのは、もう仕舞ひ際になると、蠟燭(薩摩らうそく)やカンテラを消して店を方附け、只つた一本位出して置いて、客がつくと、それを賣る。もう無いのかと思ふと、もう一本ある。他の客が奪ふやうにして買つて行く。段

々とさうして餘分に儲けるなど中々その駈引があるものだと云ひます。けれど、此方は其所迄はやれない。此の商賣はほんの駈出しだから、何んでもかまわず早く賣りたくて仕方がなかつたものでした。

私達の店は今も申す通り、大きい店の袖にあつた跳ね出しの店です。此の方が割方安くて却つて都合がよろしい。大分、もう賣つて行つて殆んど出盛りのテッペンと思ふ頃、仕事をしに入込んでゐた掏徒の連中が、丁度私達の店の前で喧嘩を始めた。此れは馴合ひ喧嘩といふので、その混雜の中で、懐中を抜くとか、賣り溜を掠らふとかするのです。それ喧嘩だといふと、大勢が崩れて、私達の跳ね出し店の手摺を破り、店ぐるみ葭簀張りを打ち抜いて、どうと背後まで崩れ込んで行つたものです。處が、背後は池の半分跳出しだから、池の中へ群衆は一と溜りもなく陥ち込んでしまつた。

私は一寸用を足しに他へ行つてゐたのでしたが、歸つて見ると、店は粉な微塵になつてゐる。池へ落ちた群衆が溝渠鼠のやうになつて這ひ上つて、寒さに震へてゐる。父は散ばつた熊手を方附けてゐる處でしたが、容子を聞くと、スリが馴れ合ひ喧嘩をしたのだといふ。よく、池にも落ちず、怪我もしなかつたことを私は安心しましたが、父は斯んな突發的な場合にも素早く、馴れたもので、それといふと、葛籠の中の賣溜を脇に挾んで、池を飛び越へて向ふへ立つてスリの立ち廻りを見物してゐたさうで、私は、いつも乍ら、年は老つても父の機敏なのに驚いたことであつた。

斯んな、中途の故障で、何うも仕方がないから、私達は後始末をして歸ることにした。八分通りは賣つたので、まあ此れで引上げやうと父は歸りましたが、まだ賣れ殘りがあるので、私はそれを持つて歸るのも業腹で、私は、此れを賣つてから歸りますと後に殘りました。

私は二十本位の熊手を擔ぎ、さて、何うしたものかと考へたが、一つ吉原へ這入つて行つて賣つて見やうと、非常門から京町へ這入ると、一丁目二丁目で五六本賣り、江戸町の方へ行く迄に悉皆賣　盡してしまひました。店の女達が珍らしいので、私にも、私にもと云つて買ひ、格子先に立つてる嫖客などが、では、俺等も買はうと買つたりして、旨くはけてしまつたので、私も大に手輕になつてよろこびました。

私は空手になつてぶら〳〵歸りました。

其頃は、もう、ぞろ〳〵と淺草一帯は鳥の市の歸りの客で賑ひ、大きな熊手を擔いだ仕事仕の連中が其所等の飲食店へ這入つて、熊手を店先に立て掛け上つだりしてゐる。何處の店も、大小料理店いづれも繁昌で、夜透しであつた。前に云ひ落したが、其頃小料理屋で、駒形に初富士とか、茶漬屋で曙など云つた店があつて斯んな時に客を呼んでゐた。

私が歸ると、父は、あれから何うしたといふ。吉原へ這入つて殘つた奴を皆んな賣りましたといふと、それはゑらい。俺よりは上手だなど云つて大笑ひしました。

都合、凡ての賣上げを勘定して、二拾圓足らずありました。元手と手間をかけると、トン〳〵位のものか。それでも父は大儲けをした氣でよろこんでゐました。

此の熊手を拵へて賣つたことは、そのずつと以前浦島町時代に一度やつたことがありましたが、私が父の仕事を手傳つて一緒に働いたのは此の時の方であつた。

故人になつた林美雲なども出掛けて來て手傳つてくれました。

歳の市のことなど

それから、もう一つ、歳の市をやつたことがあります。

歳の市の賣り物は正月用意のものです。父の賣つたものは、此れは老人自身の一と趣向なので、巾八寸位の蒲鉾板位のものに青竹を左右に立て、松を根じめにして、注連繩を張つて、眞中に橙を置き、海老、福包み（榧、勝栗などを紙に包んで水引を掛けて包んだもの、延命袋のやうなもの）などを附けて門飾りにしたものです。

此は、大小拵へた。一寸と床の間などに置いても置かれるもので、何方かと云へば待合式のもので、待合の神棚とか、お茶屋の緣喜棚に飾ると似合はしいものです。

歳の市の方は鳥の市とは違ひ、景氣附け一方でする氣合ひ商賣でないから、ずつと質味になります。緣日商人の方で「流れ」と云ふことを云ひますが、此はチラリホラリ見物の客が賑やかな場所から靜かな方へ散つて來るはづれの場所に店を出して客の足を留めるので、飴屋などは此の「流れ」の方のものに屬するのださうです。

「大流れ」といふのは、更に離れてポツンと一つ店を出して置くなど、中々、斯ういふことにも、氣を働かさねばならないものと見えます。父のやつた門飾りの賣物なども流れの方へ屬したやり方でありました。

歳の市は淺草觀音の市が昔から第一、其次は神田明神の市愛宕の市、それから藥研堀の不動の市、仲橋廣小路の市と、此の五ケ所が大きかつた。

藥研堀と、仲橋廣小路の市は、社寺の境內でなく、往來に立つたのだから、その地割が其筋でやかましく、いろ〳〵干渉されますので、土地の世話役は旨く極合ひを附けるのか骨が折れたものです。

それは往來の許す限り大小店が數多出來て、自然往來へはみ出すからです。警察がやかましく、世話役を呼びつけ、彼所をもつと、どうかしろと、棒を出すと、ハイハイと云つて置いて其儘にして置く。すると、また呼び出される。今度は別の男が行く。同じことを注意されると、畏まりましたで引退る。又呼ばれると又別の男が出る。その不得要領の中に緣日は濟んでしまふのださうです。

仲橋廣小路の市は、丁度餡屋の近邊が一番賑かであつた。(江戸の名物餡屋は淺草の駒形、京橋で中橋、下谷で埋堀、兩國で藥研堀、此の四軒で、いづれも餡專門で汁と丸煮丈である)仲橋は下町でも目拔きの場所であるから、市などの景況も下町氣分で淺草とはまた變つた所がありました。

歳の市は飾松、竹、〆繩、裏白、橙、ゆづり葉、ほん俵、鎌倉海老など、いづれも正月に使用するものですから「相更らず……」と云つて何事も無事泰平であるやうに、毎年同じ店で馴染の客が同じ品を買ふといふ習慣などもあつた。それでも、海老などは氣合もの丶方に屬し、形の大小、本場のよしあしなどで時々の相場があつて、品ふつていになると、熊手の賣方と同じやうに買手の慾しがる大きさを一つ位ほん俵の上などにとまらせて、客を引いたりして、是にも中々掛引があるのだといふことです。

私の父は斯ういふ緣日商人のことに就いては中々詳しく、自分また若い時は自ら手を下して地割などのことにも關係したので、時々他の繩張りのものとの間に出入を生じ、生命の遣り取りといふ程のことには至らなくても、際どい喧嘩場などに一方の立物となつたりしたことがあります。上野の三枚橋を中にして、双方が睨み合つてる中に、父の弟分なり乾兒なりであつた肴屋の辰どいふ六尺近くもある大男の豪のものが飛び出して、相手を一挫ぎにしたので、銀松の名が一層仲間のものに知られたといふ話もあります、斯んな話は数々あるが先づ略します。

東雲師の家の跡のことなど

序乍ら、師匠東雲師の家の跡のことを云つて置きませう。

師が沒せられて後私の兄弟子三枝松政吉氏が後のことを私に代つてやつたことは、先日話しました。東雲の二代目になる息子は、雷門の燒けた丑年生れで、師の沒せられた時は十四五、名を榮吉と云つて、後に二代東雲となりましたが、此人、氣性は父に似て至つて正直で、物堅い人、また甚だ樂天家でありましたが、可也酒量の強い方の人であつた。併しその爲、他人に迷惑を掛けるといふやうなことは決してなかつた。一時瓦斯株を買つて大に儲け、從前よりも一層派出にやつてゐた時代もあつたが、其後、また都合が惡るくなつたといふことであつた。或は株の下落した爲であつたことであらう。其中、未亡人も沒し、政吉氏も亡くなつて、とても大店がやつて行けなくなり、手元は不如意勝ちで遂に店を人手に渡すことになりました。榮吉氏の弟に豐次郎といふ人があつたが、此は早世しました。妹のかね子といふ人は、女ながら中々確りした人で、仕事も出來、手もよく書き、貞女にて、千住中組の商家に嫁く、良人の沒後後家で店を立派にやつて行き、今日も繁昌致し居ります。

二代東雲の榮吉氏の子息は、祖父東雲師の技倆を其儘受繼いだやうに中々望みある人物であります。此は私の弟子にして丹精致しまして、目下獨立して高村晴雲と號して居ります。三代目東雲となるべき人であります。只、惜しいことには、健康すぐれず、今は湘南の地に轉地保養をして居りますが、健康恢復すれば、必ず祖父の名を辱めぬ人となることゝ私は望を嘱して居ります。

さて、また、彼の金谷おきせさん（東雲師末の妹）は良人沒後再嫁し、娘が出來ました。その娘が金物商中山家へ緣附きました。中山氏は北海道、樺太地方に事業を起し、今日では樺太屈指の豪商となつて居る。で、その弟息子に金谷の家の跡を襲がせることになつて居ります。中山家と、私宅とは今日親密の交際を致し、同氏出京の時は必ず拙宅に訪問されて居ります。右樣なわけにて師匠東雲師の跡は先づよろしき方で殘つて居るわけであります。

龍池會の起つたはなし

さて、今日迄の話は、私の蔭の仕事ばかりで何等此の社會とは交渉のないものであつたが、此れからは漸く私の生活が世間

的に芽を出し掛けたことになります。即ち自分の仕事として、その仕事が世の中に現はれて來るといふことになる譯です。と云つて、まだ〳〵漸くそれは世の中に顏を出した位のものであります。

それは、どういふ事から起因したかといふと、明治十七年頃日本美術協會といふものがあつた。此れが私の世の中に顏を出した所で、謂はゞ初舞臺とでもいふものであらうか。此の一つの會が私といふものを社會的に紹介してくれたことになるのであります。が、此の事を話さうとすると、その以前に遡つて美術協會といふものゝ基を話さなければなりません。それを話しませんと顏を出した譯が分らんのです。

私は、それ迄は世の中がどういふ風に進んでゐるのか、我が邦の美術界がどんな有樣になつてゐるのか、實の所一向知りませんのでした。また、實際さういふことを特に知らうといふ氣もありませんでした。丁度それは第一回の博覧會があつた當時、その事にまるで風馬牛であつたやうに、一向世の中のこと……世の中のことゝ云つても世の中のことも種々ありますが、今日で云へば美術界とか、藝術界とかいふ方の世界のことは一切何んな風に風潮が動いてゐるか、その方面のことは一向知らずにゐたのであります。で、どういふ會が出來てゐて、何ういふ人達が會合して、どんなことを話し合つたり研究しあつたりしてゐるかなどは更に知らない。只、自分の仕事を毎日の仕事として、てく〳〵克明にやつてゐたばかりであつたのです。

處が、明治十七年に初めて日本美術協會といふものに或る一つの小品を高村光雲の名で出品しました。これが抑の私の世間的に自分の製作として公にした最初のことであつた。今日迄は全く蔭の仕事、人目には立たぬ仕事、如何に精力を振ひ、腕によりをかけたものであつても、それは私の仕事としては社會的に注目されるものではなかつたのでありました。

此所で美術協會の起りの抑の最初のことを話します。明治十三年頃に、當時或る一部の數寄者——單に數寄者と云つては意を盡せませんが、或る一部の學者物識りであつて、日本の美術工藝を愛好する人達——さういふ人達が、其頃の日本の繪畫、彫刻其他種々の工藝的製作が日に增して衰退し行く有樣を見るにつけ、どうも此儘打ちやつて置いては行末の程も案じられる。此は今日に於て何等か然るべき挽回の策を講じなくてはならない。と、斯う考へ及んだのであります。その人達といふの

は、山高信離、山本五郎、納富介次郎、松尾儀助、大森惟中、鹽田眞、岸光景等十人足らずの諸氏でありました。此人達は日頃から逢へば必ず此のことを話し合ひ、何か一つ適當な方法を取らうではないかといふて居つたが、先づ何はともあれ、差し當つて、手近な處から一つの催しを始めやうではないか、といふことになつたのである。それは、お互に所藏して居る古い品物を持ち寄つて、それを鑑賞し批評し合つて研究することになつたのです。それは樂しみ半分で、數寄の氣持でやつたことで決してむづかしいことではなかつた。それで若し工人側の人達で此の會に參會することを望んで出品物を見たいとか、話しを傍聽したいといふ希望の人達があるなら喜んで此を迎へ、鑑賞側の人と、工人側の人とが一坐し、一緒になつて話し合つたならば更に面白からうといふことになつて、月に一回宛の催しを始め、各自に古いものを持ち寄つたのであつた。

　場所は池ノ端辨天の境内靜地院。それで龍池會と名附けた。此會が段々と育つて行くにつけて次第に會員も多くなり、繪畫、彫刻は素より、蒔繪、金工等の諸家をも勸誘して入會させることにし、會を重ねる毎に發展して行つたのであつた。此所で會頭を佐野常民氏、副會頭を河瀬秀治氏（同氏は今日尙健在である）に推薦し、日本美術協會と名を改め、毎月一度宛常會を、年に一度展覽會を開くといふことになつて、是を觀古美術會といふ。そして長い間それが續いたのでありました。

　會員の中には私が此れからお話しやうと思つてゐる石川光明、旭玉山、金田兼次郎、島村俊明の諸氏、蒔繪師では白山松哉氏なども居て、會は益々旺んとなり觀古美術會を開くことになつたのでありました。

　觀古美術會は更に一歩進んだ形のもので、會員所藏の逸品と云つても數限りのあること故、一般に上流諸家から秘藏品並に宮內省御物等をも拜借し、各種に亙つた名畫名器等を陳列し、それを一般に縱覽を許すことにしました。さうして、宮樣を總裁に頂きまして、歴とした會が成立したのであつた。

　會場は下谷の海禪寺（合羽橋側）東本願寺等であつた。此會は二三回續きましたが、美術思想を一般に普及した功は多大でありました。

　斯んな有樣で、龍池會から出た日本美術協會の年中行事として觀古美術會の會員は益々殖え、大分工人側の人達も這入つて來たのでありますから、會員の意見の交換など屢々ある中に、

從來の如く、單に古いものばかりを出陳するといふことよりも更に新奇なものを加へて出陳してはどうか。彫刻、繪畫、蒔繪、彫金等の名家も多いこと故、此の人々自ら製作して、それを出したら一層おもしろからう。さうして古人の作は參考品としたら更に興味が深いであらうといふ議が起りまして、それが決まると、早速築地本願寺で開會することになつた。此が即ち美術協會の新古展覽會の第一回で、明治十七年のことでありました。其時私は白檀で蝦蟇仙人を彫つて出品しました。

私の製作を自分の名で世間へ發表したそもそもの初めです。私は其時三等賞を貰ひました。

所が、私は、實の所、日本美術協會といふものゝ存在さへも知らなかつたのです。明治十三年頃から龍池會といふものがあり、それが發展して今日美術協會といふものが出來てゐるなどいふことを一切知らなかつた。ですから、何ういふ人達がどんなことを話したり、論じたりしてゐるかなどは知らうやうもない。私は毎度申す通り、只こつこつと仕事をしてゐたのである。それ程何も世間のことを知らなかつた私が、何うして日本美術協會のあることを知り、また出品したかといふと、それは、石川光明といふ牙彫の名人で、當時既に牙彫では日本で一二を爭ふ人となつてゐた人の紹介であつたのです。

光明氏は私と同年輩の人、人格は申す迄もなく、風采も至つて上品で、流石に一技に優れた人程あつて見上げたところのある人であつた。後年美術學校教授を奉職し私とは同僚となりました。

私は光明氏に勸められて美術協會に出品したのが縁となつて、石川氏との交際は愈々親しくなり、また同會とも接近して行くやうになつた。亞いで會員となることをも勸められましたが、とてもまだ會員になる資格はないと辭退をしましたけれども、會頭の佐野氏からもいろいろ御言葉があり、或時は、同氏のお宅へ招待され、大層歡待を受けた上に、また入會のことを勸められたりしましたので、私も遂に會員の末席を汚すやうなことになりました。

此の時から私はいろいろの人の顏も知り、また當時の美術界に重きを爲せる人々の所說をも聞き、明治十三年以降其當時に及んでゐる斯界の趨勢の大略をも知ることが出來、また、その現在の有樣をも了解することが出來たやうなわけで、此所で私は一遍に世間を眺め、一度きに眼を開いたやうな感を致しました。

今日迄は實に眼の前に黒い幕が引かれてゐたやうなもので、此の時一時にそれが取れたといふ感じでありました。

石川光明氏と心安くなつたはなし

さて、話は自然私が何うして石川光明氏と交を結ぶことになつたかといふことに落ちて來ます。それを話します。

明治十五年、私は西町三番地の家で毎日仕事をして居りました。仕事場は往來を前にした處で、前述の通りのやうに至つて質素な、只仕事が出來るといふ位の處であつた。

其頃、木彫は衰へ切つて居る。併し牙彫の方は全盛で、此の方には知名の人が多く立派に門戸を張つてやつて居る。其中で私は石川光明氏の名前は知つて居りました。それは明治十四年第二回勸業博覧會に同氏の出品があつて、それを見て、心私かに感服したので能く其名を覺えてゐました。

同氏の出品は薄肉の額で、同氏得意のもので、世評も大したものであつたらしく、私が見ても牙彫界恐らく此の人の右に出るものはなからうと思ひました。併し、その人は知らない。また此の時に島村俊明氏兄弟の出品もあり、此も中々すぐれてゐると感服して見たことで、光明氏なり、俊明氏なり、いまだ逢つたこともなく顔は見知らぬが定めし立派な人であらうと思ふて居りました。

光明氏は其頃下谷竹町の生駒様の屋敷中に立派な邸宅を構へ、弟子の七八人も使つて居られ、既に立派な先生として世に立つて居られたのであるが、そんなこと迄は其時は知らず、只、名前丈けを記憶に留めて居つたのでした。

私は相更らず降つても照つても西町の仕事場でコツ／＼と仕事をやつてゐた。

すると、時折ちよい／＼私の仕事場の前に立ち留つて私の仕事をしてゐるのを見てゐる人がある。時には朝晩立つことがあるので、私も氣が附き、その人の人品を見覺えるやうになつた。その人といふのは小柄な人で、髯をちよいと生し、打ち見たところお醫師か、詩人か、さうで無ければ書家畫家と云つたやうな風體で至極人品のよい人である。格子の外から熱心に覗いて見てゐる。私も熱心に仕事をして居るのだが、どうかして一寸頭を上げてその人の方を見ると、その人は面伏なやうな顔をしてふいと去つてしまふ。斯ういふことが幾度となく重なつてゐました。

私は、妙な人だと思つてゐた。いづれ數寄者で、彫刻を見る

のが珍らしいのであらう位に思つてゐた。風采の上から、先づ自分の見當は違ふまいなど思つてゐた。兎に角私の記憶には、もう何處で逢つても見覺えのついてゐる人であつた。

すると、或夏のこと、先年、私が鑄物師大島氏の家にゐた時分、其家で心易くなつてゐた牧光弘といふ鑄物師があつて、久方振私の仕事をしてゐる處へ訪ねて來られた。久濶を舒し、いろ／＼話の中に、牧氏のいふには、

「高村さん、あなたに大變こがれてゐる人があるんだが、一つ其人に逢つてやりませんか。先方では是非一度逢ひたいもんだと云つて大變逢ひたがつてゐるんですよ。此間も行つたらまたあなたの話が出てね。是非逢ひたいつて云つてました。あなた逢ふ氣がありますかね。」

斯ふいふ話。此は珍らしいと私は思つた。

「私に逢ひたがつてる人があるんですつて、それは誰ですね。」

「その人ですか。それは石川光明といふ牙彫家ですよ。」

私はびつくりしました。

「えゝ、石川光明さん、其人が私に逢ひたがつてるつてんですか。さうですか。石川さんならまだ逢つたことはないが、あの人の仕事は私も知つてる。今の世にどうも恐ろしい人があるもんだと實は私は驚いてゐるんだ。」

「あなたも石川さんの仕事を感心してゐますか。」

「感心どころのことではない。敬服してゐますよ。私とは違つて牙彫の方だけれども、當今、日本廣しと雖、牙彫師としてはあの人の右に出るものは恐らくありますまい。私は博覽會の薄肉の額を見た時から、すつかり敬服してゐるんだ。其の石川さんが私に逢ひたいなんて……そんなら此方からお目に掛りに行きたいもんです。案内してくれますか。」

「そりや、案内するのは譯はありませんが、併し、高村さん、そりや不可ませんよ。先方があなたに逢ひたがつて、是非一度引逢はせてくれと云つてるんです。先方から云ひ出したことだから、先方が此方へ出向いて來るのが順序ですよ。何もあなたの方から出掛けて行かなくても、先方がやつて來ますよ。で、あなたは逢ひますね。」

「逢ひますとも、……私もお目に掛りたいもんだ。あの石川さんなら。」

「では、私が今石川さんを貴宅につれて來ませう。此れは話がおもしろくなつた。」

「併し、どうもそれでは恐れ入るが、ぢや、あなたの云ふ通りにしてお茶でも沸して待つて居ませう。」

私は素直に牧氏のいふ通りに從ひました。牧氏は直ぐ坐を立つて出て行きました。拙宅からは竹町は二丁位の所、牧氏は直ぐ其所だから譯は無いと云つて出て行きました。

暫らくすると兩人が這入つて來る。不圖、私が、今一人の人の顏を見ると驚きました。其人は、醫師か、詩人か、書畫の先生でもあらうかと鑑定を附けた毎度自分の仕事場の前に立つ見覺えのある人であつたので、牧氏が兩人を紹介さぬ前に、もう兩人は顏と顏とを見合つて微笑まぬわけには行かないのでした。

「あなたですか。」

「えゝ、どうも……」

と、互に名乘り合ひこそしてはゐないが、豫てから顏は充分見知つてゐる中、自然に其事が談話の皮切りとなり、私が頭を擡ち上げると、きまり惡るさうに其所を去つたことなども笑ひ話の中に出て、石川光明氏は如何にも人づきの好い人。かねてから逢ひたい〳〵と思ふてゐたのに、今日は牧氏の橋渡しで念が屆いて滿足と光明氏が云へば、私もまた、お作にはかねてから敬服して、何ういふ方であらうか、嘸ぞ立派な人であらうと心に床しく思ひ居つたのに知らぬこととて、毎度仕事場をお見舞ひ下された方が石川さんあなたであつたとは洵に奇緣。私は本懷至極に思ひますなど、逢つた其日其時から、一見舊知といふ言葉を其儘に打ち解け、互に仕事の話など根こそげ話をして時の經つのを知らない位でありました。

石川氏は既に一流の大家であつて、堂々門戶を張つてゐる當時の流行ッ兒ですが、それでゐて言葉使ひ、物腰、如何にも謙遜で少しも高ぶつたところが無い。私は云ふ迄も無く、まだ無名の人間、世に賣れてゐる人達の仕事場などに比べては見る蔭もない程の手挾な處、當り前ならば、此方から辭を低くして訪問もすべきであるのを、氣輕に此所へわざ〳〵訪ねて來てくれられた人の心も嬉しいと、私は茶など入れ、菓子などはさんで待遇す。互に話は盡きませんのでした。

「高村さん。私は隨分前からあなたを知つてゐますよ。此宅へお出でになつてからのお顏馴染ではないんですよ。北元町にお出での時から知つてゐますよ。」

光明氏は靜かに話す。

「それはまた何ういふ譯ですね。」

「あなたは、北元町の高雲師匠のお店にお出の時分、西行を彫つてゐたことがありませう。」

「えゝ、ありますo それを知つてゐるのですか。」

「私は、毎朝、毎晩、樂しみにして、あなたの仕事を店先から覗いて行つたものですよ。確か西行は一週間位掛りましたね。」

「さうです〳〵。丁度七日目に彫り上げました。どうしてまたそんなことを詳しく知つてお出でなのですか。」

「それは斯ういふ譯です。私の宅は其頃下谷の松山町にありましたので、其所から日本橋の馬喰町の越中屋といふ本地商(象牙の)の家へ仕事に毎日行くんでしてね。その往復毎日北元町を通るんで、つい、職業柄、お仕事の容子を覗いて見たやうな譯なんで……」

光明氏はちやんと何もかも知つてゐる。成程、名人になる人は、平生の心掛けがまた別なものだ。職業柄とは云ひ乍ら、他人の仕事をも斯く細かに注目し、朝夕立ち寄つて見ては、それを樂しく感じたとは、熱心の程も推察される。此の心あつてこそ、腦も腕も上達するといふもの、まだ〳〵我々は其所迄は行かない。名人上手の心掛けはまた別なものだと私は心私かに石川氏の心持に敬服したことでありました。

石川光明氏と私とは、嘉永五年子歳の同年生れです。私は二月、石川氏は五月生れといふから、少し私が兄である。

私は下谷北淸嶋町に生れ、光明氏も矢張り下谷で、北淸嶋町からは何程も無い稻荷町の宮彫師石川家に生れた人です。(稻荷町は行德寺の稻荷と柳の稻荷と兩つあるが、光明氏は柳の稻荷の方)父親に早く別れ、祖父の養育で、十二歳の時に根岸在住の菊川といふ牙彫の師匠の家に弟子入りをして、十一年の年季を勤め上げ、年明けが二十三の時、それから日本橋の馬喰町の木地問屋に仕事に通ひ出したといふのですから、その少年時代から青年へ掛けての逕路は、殆んど私と同じであつて、只私が佛師の家の弟子となり、光明氏が牙彫師の家の弟子となつたといふ相違丈けです。共に二十三歳にして年が明けてから、一方は松山町から馬喰町へ、一方は淸嶋町から藏前元町へ通ふ。その道程も略ぼ同じこと、恐らく修業の有様も、牙彫木彫の相違はあつても、一生懸命であつたことは同じことであつたと思はれます。但、石川氏は牙彫であつた爲、時流に投じ、早く、出世をして、世の中へ出て名人の名を贏ち得たので、既に明治十三年の龍池會が出來た時分、間もなくその會員となつて、山高、山本、岸などいふ諸先生と知り合ひ、美術のことを研究してゐられたのであつた。もつとも、光明氏が拔群の技倆があつてこそ斯る幸運に際會するを得たのでありますが、私は、それに反し、木彫のやうな時勢と逆行したものにたづさはり、世の

中に遅れ、斯る會合のあることも何にも知らず、十三年から四年目に、初めて石川氏に邂逅して、其御手によつて漸く世間へ顏を出したやうな譯、隨分遲れてゐたと云はねばなりません。

其後兩人は毎度訪ね合つてゐる。

光明氏は頻りと木彫をやつて見たいことなど話され、

「ほんとに木彫は面白いですねえ。今度の美術會には是非一つあなたの木彫を出品して下さい。毎度それは評判になりますよ。」

など毎々私に向つて勸められる。

「どうも、中々、まだ、さういふ處までに行きませんよ。もつと修業をしなければ。」

私が答へますと、

「そんなことがあるものですか。何んでも好い。あなたの手に成つたものなら何んでも結構……是非出品して下さい。」

石川氏は熱心に云はれる。

「さう、あなたが云つて下さるなら私も何んだかやつて見たい氣がして來ました。どんなものを製作へませうか。」

「何んだつて、あなたの好きなもので好いでせう。」

「では、何んともつかず、一つこしらへて見ませう。」

さう云つて製作したのが蝦蟇仙人であつたのでした。是が相當評判よろしく三等賞を貰つたやうなわけで、全く光明氏の知遇によつて此の緣を生じたやうなわけで、それから間もなく會員になつたりして、會員中の主立つた龍池會當時の先輩は申す迄もなく、工人側でも金田兼次郎氏、旭玉山氏、島村俊明氏其他當時知名の彫刻家や、蒔繪師、金工の人達とも知り合ひましたが、其中でも石川光明氏とは特に親密で兄弟も啻ならずといふやうに交際しました。それで、世間では、光明氏も光が附き、私も光が附いてゐるので、兄弟弟子ででもあるかのやうに、餘り仲が好いものですから、思つてゐた人もありました。

兎に角、明治十三年に生れた龍池會といふものは、其後に起つた美術界のいろ／＼な會の母でありました。そして好い根柢を植え附けたのであつた。

つまり、小數の先覺者が、幕末より明治初年にかけ、日本の美術は衰微し行くに拘はらず、在來の日本古美術は、どし／＼西洋人に持つて行かれ、好いものを製へる人は少なくなり、日本にあるものは持つて行かれ、日本の美術が空になつて行く有樣を見て是は斯うしては置けないと氣が附き、一方此を救濟し、一方此を奬勵するといふことが動機となつて、遂に龍池會が始

きつたのですが、此の事は洵に日本の美術界に取つては有難いことであつたのであります

而して、明治十七年日本美術協會が生れてから、更に進歩發達の度を高めて行つたのでありました。美術協會が上野に引越して來た時は、副會頭の河瀬秀治氏がやめ、九鬼隆一氏が其後を繼ぎました。會頭の佐野常民氏は洵に我が美術界に取つての大恩人で、人物と云ひ、見識と云ひ、實に得難い方でありました。

彫工會の成立ちに就いて

此頃になつて一時に種々の事が一緒に起つて來るので、どの話をしてよろしいか自分ながら選擇に苦しみますが、先に日本美術協會の話をしたから、引續き、序に東京彫工會のことに就いて話します。

東京彫工會といふものゝ出來たのは、妙なことが動機となつて出來たのであります。(一寸斷つて置きますが、その當時の彫刻家は全部牙彫と云ふ有樣であつた。)其彫刻界に一つの刺撃が與へられ、それが導火線となつて此の會が起つたのであります。一方に既に美術協會が成立し、それが益々盛大になつて居るのであるから、此際別に彫工會といふやうな會の起る必要を感じない譯であるが、それが出來なければならない機運となつて來ました。此の彫工會發會のことに就いては私は木彫家のことで關係は薄い。私が當面に立つて立ち働いたといふ譯でもないのであるが、當時の牙彫界には友人の多い關係から多少助力をしたことであるから其の成きさつを話して置きます。

此の事は、最初は象牙彫刻の方の人達のいさかいから初まる……といふもをかしな話ですが、先づさう云つた形であつた。

當時、牙彫の方は全盛期であるから、その工人も實に夥多しいもので、彫刻師と云へば牙彫をする人達のことを指していふのであると世間から思はれた位。此の事は前に度々申したが、其中で變り物の私位が木の方をやつて居る位のものであつて、殆んど全部が牙彫であつた。で、斯う物が盛んで流行り出せば、何人の業にもあることであるが、その工人仲間の人々の中に黨派とか流派とかいふやうなものが出來て、同じ牙彫の工人の中でも、比較的上等なものを取り扱つて、高尚な方へかたまつてゐる人達と、牙彫商人の賣物にはめて、貿易向き一方をやり、出來榮は第二にして、先づ手間にさへなればよろしいと云ふ側の人達と、斯う二つの派に別れば分けられると云つた形に

なつて來る。前のは、中々商人の云ふ儘にはならない。自分で一己の了見があつて、製作本位に仕事をする。つまり先生株の人達であり、後のは、何處までも職人的で手間取りが目的、商人の云ふ儘に何うともならうといふ側である。斯う先づ二派に別れるのでありますが、その高尚の方の先生株には、旭玉山氏、石川光明氏、島村俊明氏などを筆頭として、其他澤山ありますが、此の人達が先づ代表的の人、孰れも商人の方で一目置いてゐる。一方は商人に使はれる組で、一口に云へば賣物專門で貿易目的である。此の方も中々旺んにやつて居る人達があつて、その大將株の親方が谷中に住つて居つた。中々勢力があつたもので、商人との取引も盛んなところから弟子や職工を澤山使つてゐる。牙彫界では此れを谷中派と稱して居つたのです。

所で、當時、東京府（多分府であつたと思ふ）の仕事の中に諸職業の組合組織といふものを許可することになつた。それは、其等の團體が一塊となつて共通的な行動を取るやうに仕組まれた組織で、一つの組合には組長、副組長といふものがあつて、その社會の種々な規約的なことを總括する一つの機關であるのですが、此の事が發表になると、牙彫の方でも谷中派の連中が先づその組合といふものを組織し出したのです。それは例へば、牙彫業者が數に三百人あるとして、その三分の二以上の人數——即ち二百人が結托して組合を組織すれば、其組合といふものは、その業務に從事してゐる凡ての人の上に權力を働かすことが出來るのであつて、よし、他に不贊成者があるとしても、少數者は其規則の下に服さねばならんと云つた譯であつた。若し不贊成者があれば、市内から離れて郡部へ行かねばならんといふのである。其組合の規約が隨分不條理なもので壓制的であると思つても、差し當つて職業のことに影響するから、嫌でも入らなければならない。よく〳〵いやならば郊外へ出るより他はない。……と斯ういふ有樣であつた。

其所で、谷中派の大將株の人達は、自分側の方で、此の組合を作つて通過させ、權力を握りたいものであるが、併し、牙彫界を見渡したところで、前申す如き有樣であるから、どうも頭が閊へてゐる。自分達の好き勝手な眞似ばかりをするわけにも參りません。それで彼等は自分達の方の麾下のものを糾合し遊說して二百人からの人數をこしらへまして、その組合といふものを組織したのであつた。

府の掛りの方でも、牙彫界に幾人の人數が現在にあるものか、

充分調べも附いてゐないので、谷中派の組織して出した願書を許可したのであつた。即ち谷中派の差出した願書には二百人以上有るから、此の人数は、現在の彫刻師の人数の三分の二強であらうと掛りの人は思つてゐたので許可したのでせう。それとも、さういふことまで考へも及ばなかつたのか。兎に角、谷中派のした仕事は通つたのであつた。

其所で、組長、副組長は谷中派の大將株の兩名がなることになつて、規則書が出來上つたのである。所が、それを見ると、親方の方の都合の好いやうなことばかり並べてある。例令ば親方が弟子や職人を使ふのに都合よいこと、つまり、後進者を牽制する向きの箇條が甚だ多い。年季中に暇を取るものは罰金を取るとか、或る親方から他に移り變るものは組合中使用せぬとか、除名するとか、此れから修業しやうといふ弟子側に取つては不利益な規約ばかりである。斯ういふものが出來上つて、それを牙彫界一般に配附したのであります。此を手にした一流側の人々は大に面喰つたわけでありました。併し、旭玉山氏や石川光明氏とか、島村俊明、田中玉寶氏などいふ人達は名人肌な人で、別に斯ういふ世間的のことには一向關係しないので、平生から自分の腕丈けのものを作り、氣位は高く、先生氣取りの人達であるから、只、變なことが初まつたものだと思ふ位であるが、他には、さういふ人計りでもないので、先づ谷中派の人達に出し拔かれた形で、一體此れは何うしたものかと問題になつたのであります。

元來、谷中派と先生派とこれに屬する技術家とは技術に對する心掛けが違つて居るのであるから、何にも此際、弟子側のものを壓迫する必要も感じないし、またいろ／＼な規約の中に押籠められる因縁もないと思つてゐる。云はゞ成丈面倒な事には關係しないで仕事にのみ忠實熱心である方ですから、斯ういふ不條理な規約書が郵便で、各自の許に舞ひ込んで來て見ると、甚だ迷惑に感じた。若し、不贊成を唱へるとなると、市中で職業が出來ないといふ。郊外へ退いて行かねばならないとなると、此れは差當つて考へ物である。さて、それが困るからと云つて規約に贊成して、組合へ這入るとなると、平生から仕事の上で侮蔑してゐる所の谷中派の支配を受けねばならない。是は郊外へ退去するよりも一層馬鹿氣てゐる。それもまあ好いとしても、修業盛りの弟子達を何にも壓迫して呵責めることはない。彼是、此の組合規則なるものは甚だ不都合千萬なのである。此はとても這入るわけには參らんといふのが此の派の人達一般の意向でありました。

併し乍ら、既に斯うして、府からの許可を得て組合規則を出して來たものに對して、不贊成であるからと云つて、反抗の趣意を申し立てるにしても、此際、反抗する丈けの何等か確たる材料がないことに於ては、對抗的に運動することも出來ないと云ふことに氣が附くと、皆々氣を揉んで、何うしたら宜らうかとより／＼協議するやうな有樣であつた。

すると、此所に金田兼次郎といふ人が一つの意見を提出しました。金田氏は元と刀劍の鞘師でありましたが、後牙彫商になつて淺草向柳原に店を持つてゐる貿易商人で、主に上等品を取扱つて居るので、先生株の牙彫の人達と懇意な間柄である。(現時金田氏の二代目は日本橋區大鋸町に店がある。)今、一人、外山長藏といふ同業の人達も寄合ひ、相談をした席で、金田氏の云ふには、「それに就いて、私が思ひ附いた面白いことがありますが、一つ皆さんへ申上げて見ませう。實は近頃私宅へ牙彫家の人名錄を作りたいから贊成して吳れないかといふ相談を持込んで居るものがあります。此の話を一つ利用しては如何でせう。といふのは、先方も營利的に人名錄を作るのでありますから、此際我々の方から相當補助してやれば、至急に調査が精細に行き亘つて右の人名錄は出來上るわけでありますが、此現在の牙彫家の人數が明瞭になつた曉には、谷中派が出願した組合の人數が、同業者の三分の二に達して居るか居らんかといふことが自然當局の方へも分ることになりますから、さうすれば當然成立すべき資格をもつてゐない組合が成立してゐることになつて、谷中派の立場を覆へさないまでも、根柢のぐらついたものであることを世間に知らせることも出來ますし、また、府の當局の許可が不當であつたことをも掛りの人達に了解させることも出來る譯で、結局、人名錄が證據になつて立派に反抗する丈けの材料となり、物を云ふことにならうと思ふのですが如何でせう。」といふ意味を申述べました。成程、是れは至極宜い案であるから、人名が多いか、些いか、精細に調べさせて見やうと相談は忽ち一決して早速人名錄作成の人に補助することにして、至急人名調査に取掛つたのでありました。

其所で精細に調べ上げた人數を見ると、四百何十人約五百名といふ數である。谷中派が三百人と見て、三分の二の二百人を糾合して組合を組織したことは、百何十人かを無視したといふ事實が上つて來ました。人名錄も出來上つて、ヅラリ宿所氏名の人別が立派に乘つて居る以上、是程確かなことは無い。其所で、府の當局者が許可すべからさるものを許可したのだといふ抑へ

所も出來たので、それでは府の掛りをねがつてやれといふので、人名錄を附けて意見書を府の掛りの課へ突出したのでした。

是には掛りの人も一本參つた。併し、一旦、許可したのを、今更だげに解散させるといふわけにも參らぬので、事を有耶無耶の中に葬らうとして、何方つかずの態度を取ることになつた。つまり、谷中派の組合をも確實に認定せず、先生側の意見書をも取上げぬと云つた形になつたのである。斯うなると金田氏の案は立派に成功したことになつて先生側の方の一同は孰れも大喜びで、もはや、谷中派の組合に這入る這入らぬを問題にする必要も無くなり、同時に谷中派が組合の權能を振り廻す權利を認める必要もなくなりました。

「組合は組合で放棄つて置け。彼等の書いた種が[illegible]れば、相手にする必要はない。文句を云つて來たら、人名錄を突附けて先方の落度を抑へてやれば好い。放棄つて置け〳〵。」

と云ふやうなことで、先生側の意氣は大に振つたわけでありました。

斯うなつて來ると、形勢が逆になつて來た。技術派の方へ加擔をするものが却つて多くなつて、同情が高まり、旭玉山、石川光明氏等へ味方するものが續々と出て來ました。今までイヤ〳〵乍ら組合へ盲從してゐたものも脫けたり、思案して居つたものは急に活路を見出したやうに此方へ附いて來るやうになりましたから、谷中派の方は急に氣勢が挫け、人數が減り、看板丈けは上げてあつても、實際の人數は半數にも滿たないやうな結果になつて、結局、技術側の勝ちと云つたやうなことになつたのでありました。

彫工會の成立は、此の事件が導火線となつたのであります。今まで、種々、組合の對抗運動に就いて奔走斡旋した人々の中で、旭玉山氏は主要な人でありました。同氏は湯島天神町一丁目（天神境內）に邸宅を構へ、堂々門戶を張つて居りました。現在は京都に住居して八十三の高齡で現存の人でありますが、中々文學もあり、緻密な腦の人で、工人に似ず高尙な人で、面倒な事務を引受けて整理して呉れましたから、誰推すとなく、玉山氏を先生派の中心人物のやうにして居る處から、同氏宅を假事務所に宛て、此所へ技術派の重な人々が五人十人毎日集まつては善後策を講じたわけでありました。

「折角、此所まで進んで來て、此儘で濟ましてしまふのは惜しいではないか。何んとかしやうではないか。」

といふ意見が誰云ふとなく起つて來た。

「それでは一つ此の意氣組で會を起さうではないか。今、此の場合ひに揃へて置かんと又此後野心家が面倒なことをやり出すかも知れん。今會を起せば三百人や二百五十人位の會員は忽ち集る。會を起さう。」

といふ相談が纏りました。

此は行掛りの上の勢から自然斯ういふ風になつたのであります。其所で愈々一つの會を起すとなると、相當學識のある人もなくてはならない。また會の事務に當る事務的才能のある人、また會則を作るといふことに精通した人をも要することになつて來ましたが、其向きの人々には誂へたやうな先生達が美術協會の會員の方にある。幸、美術協會の關係で豫て協會員として懇意の人々のこと故、鹽田眞氏、前田健次郎氏、平山英造氏、大森惟中氏などを頼んで相談相手となつて貰ひました。

此の人々は官民間で夙に美術界のことに盡力してゐた人で、當時の物識りであり、先覺者でもあつたのであります。

此所で私も此の人達の集りの中に顏を出すことになるのですが、併し、私は牙彫の方ではありませんから、直接此の事件の起つた當時から此の行きさつの中へ無論這入つて居らぬのでありますが、何ういふ相談があつたものか、此の方から私へ使を遣こして私にも相談相手になつて貰ひたいといふ申込みがありました。

もつとも、此は石川光明氏とは私は兄弟も啻ならぬ親密の中のこと故、同氏からの話もあり、他の玉山氏其他の人々とも日頃懇意の仲柄であるから、私を引張り出さうといふことになつたと見えます。私は、仕事の方でも畠違ひ、最初から關係もないことで、大してお役にも立つまいが、彫刻界の發達向上の爲のことゝあればお仲間へ這入らうと承諾をしたのでありました。

それから、毎晩、天神の玉山氏宅へ參つて、人々と膝を交へ、發會の相談にあづかつたわけでありました。

さて、會を起すに就いては、會則を作り、會頭、理事、評議員といふやうなものゝ必要を生じて來る。會の取扱ふべき事柄に就いてもいろ／＼討議する。毎月常會を開き、青年子弟の養成といふことに就いて、特に重要視し、先づ若い人々の製作を集めて常會に出品し優劣を評定して褒美として參考書の類を投けるといふことなどを初めとして、種々審議されました結果、彫刻の大會を年に一回開催するといふ話が纏つたのであります。さうして、會費のやうなものも、甲乙丙の三種で、師匠分の人は甲、獨立してゐる程度の所は乙、まだ年中の者で、弟子

連中は内とかいふやうに公平に取扱ひ、會の維持法等に就いては、合理的に能く相談を致し、また會頭、幹事並に理事部長の任期何年といふ事を討究の末略ぼ決定しました。

會の名のことなど

其所で、此の會名の相談になつたのでありますが、牙彫家の集團の會であるから、牙彫の「牙」といふ文字を入れるか、入れないかといふ問題になつた。

無論牙彫の人達計りのこと故「牙」を入れるが當然であるが、然し、御相談を受けて私も其席上にあつて此の話を聽いてゐたことであつたが、元來、私は牙彫師で無いのに拘らず、此の會合の仲間に這入つて來て居るので、或人などは、高村は畠違ひへ踏み込んで來て牙彫の土を持つてゐるなど惡口を云つて居ることも私は薄々耳にして居る所である。けれど、私の考としては、彫刻界の發達進歩の事に骨を折る會合であると思つて此の會に仲間入りして居るのでありますからして、彫刻といふ大きい意味の世界のことに就いての利害得失に關しては、充分に自己の考へをも申述べる積りで、眞面目に審議の是非に就いて考へて居た所でありました。

で、右の會名の問題となつて「牙」の文字を入れる入れないとなつて、さうして、入れるが當然といふ話になると、私は一應自分の考へを述べる必要を感じたのであつた。

「私の考へを申しますが、「牙」を表はすことになると「木」をも表はして貰ひたいと私は思ひます。」

斯ういふ意味で述べました。

つまり、私の考は、今日の審議する所は、單に牙彫と限られた會の名を附ける主意のもので無くして、日本の彫刻家の集合でもつと廣義な意味のものであると思ふのであつたわけであります。

すると、或人は、

「成程、お考は一應御尤と存じますが、併し木の方は幾人ありますか。」

といふ質問をされました。

「幾人あるかとお質問ねに對しては、只今の所差當り私一人で、弟子に林美雲といふものがある位のもので、何んともお答への仕樣もありませんが、併し、今日、私一人であつても、何時迄も一人や二人といふ譯はありますまい。他日、幾人に殖えて來るかも分りません。木彫の方が若し殖へた場合「牙」の字を表はした會名では如何かと思はれます。で、牙は牙、木は木と其部によつて部を作る時が來ることでありませうが、其時に

は自から部長といふものが必要であらうと思ひます。で、會名は牙を表し、又、木を表はす必要は無い。牙も木も凡てを總括した彫刻の意を全體に云ひ表はす會名が命けられるならば、それは甚だ結構と思ひます。私は木の方であつて、當席に連つて居りますのですが、既に列席を致して居る以上、右の主意は申上げて置きたいのであります。」

といふ意味のことを申述べた。

「只今、木の方の部長といふことを申されたが、木の方はどういふことになりますか。」

また斯ういふ質問が出ました。

「只今も申す如く木は私一人であるから、部長も何もあり得ることではないが、段々殖えると見るべきが至當であつて、人物丈けは今日此の會の成立に際して拵へて置くが順序でないかと思ひます。木の人員が私一人でも、既に一人はあるのである。他に今一人あるから兩人は既にあるのである。今日の場合は部長を缺くといふことにして、他日殖へた場合に部長を置いたらよろしからうと思ひます。」

と意見を述べた。

私の此の主張は大體に於て人々の了解を得ました。また了解を得られたことは至當のことであつたと思ひます。其所で、大森、鹽田、前田などの學者側の人と相談をして「東京彫工會」と命名したのであります。

内部の献立が悉皆出來上り、會名が附いたので届を出し、許可になつたので、其年の秋即ち明治十九年十一月向兩國の貸席井生村樓で發會することになつた。

發會當時及び其後のことなど

當日は會の發表式を兼ねて製作展覽を催したのでありました。

展覽の方は今日のやうに硝子箱に製品を陳列するなどの準備などは無論無く、無雜作なやり方ではあつたが、牙彫の製品は可成出品があつて賑やかであつた。木彫の方は私は都合が惡るくて出品しませんでしたが、林美雲が一點丈け牙彫の中に混つて出品しました。

發會式は非常な景氣で諸方からお遣物などが來て盛大を極め、會合するもの三百人以上で豫期以上の成功であつた。

それに井生村樓の女將が同會に大變肩を入れ、樓の全部の席を同會の爲に提供して與れ、而かも席料なども安くしてくれ、非常に同情的に蔭に後援してくれたのでいろ／＼都合がよく、會員一同も女將の好意を感謝したことであつた。

會は充分の成功をもつて終りました。

本會の成立に就いて、特に盡力をされた人々は旭玉山、石川光明、島村俊明、金田兼次郎、鹽田眞、前田健次郎、大森惟中平山英造の諸氏で、事務所は假りに玉山先生の自宅に置き、當分同氏が事務を扱つて呉れました。そして井生村で此の會は二三回催されました。

斯ういふ風に東京彫工會の成立が豫期以上に盛大でありましたので、形勢全く一變し、東京の彫刻界を風靡するといふ有樣で、會員は渦を卷いて集まつて來て、三百人以上と稱されました。

さうなると、今度は谷中派の方から却つて和解を申込んで來たりして、兩派に關係のあつた人達を介して會員になりたいなど續々申納れがあつたりしました、彫工會の方は素より心から谷中派を敵視してゐるわけで無いから、さういふ要求は快よく容れましたので、谷中側の人も大分入會したやうな譯でした。

先生側の人々が反抗態度を手強くし、歩調を揃へて熱心に行動を取つた爲に却つて好結果を來たしたやうな譯で、隨つて兩派の軋轢も穩便に濟んだのでした。もつとも初めから喧嘩をしたわけではない。暗鬪的ないさかひはあつたが、見ともなく喧嘩するやうなことは無くて終つたのであつた。

それで府の勸業課の掛りの人達もよろこび、中に彫刻熱心の人達が贊助會員になつたりしました。

既に彫工會も充分成立の基礎が認められたので、學藝員と一般會員の多數で二十一年上野の美術協會陳列館で第一回彫刻競技會を開き一般の觀覽を許しました。是が彫工會の競技會の初まりです。斯うなると愈々會頭が無くてはならないので、最初の會頭に渡邊洪基氏を撰みました。同氏は永く會の爲に盡力されました。途中死去され、沒後は榎本武揚氏。氏が沒して後は土方久元氏。それから現在の會頭は平山成信氏で、井生村で發會以來今日まで凡四十餘年の間繼續されて居ります。

右の如く東京彫工會は、彫刻會の先驅であつた日本美術協會に次いでの古い會でありますが、當初美術協會の存在してゐるのに拘はらず、此の會の出來たのは、美術協會に對して不平があつて分派したとか獨立したとかいふ譯では無くして、前述の通りの行きさつから勢として生じたものでありますが、此の彫工會の方は全く彫刻專門であつた。後日に到つて彫刻の世界のものは種々包含されて、木の部に竹彫が入つて木竹部となりました。牙彫の方は牙角介甲部となり其他種々部が出來て、今で

は十何部となつて凡てを網羅したのであるが、最初は牙彫丈けで、木彫は一兩人であつたのです。

斯の如く、種々網羅されるにつけて、會の性質が美術協會に似て來ましたが、併し協會の方は繪畫が中堅となつて居り、蒔繪、織物、刺繍、寫眞など工藝的に一層範圍が廣く、彫工會の彫刻と限られたのとはもつと廣大なものになりました。さうして彫工會の方でも、金工部は金工會など獨立して會を成立しますし、また協會の方でも蒔繪の方では漆工會などが獨立して、種々雜多な會が現はれて來ました。

要するに、東京彫工會もまた當時美術界に貢献することの多かつたことは美術協會に次いでの功績であつたことゝ思ひます。

同會は現在の會員數は八百名以上で有ります。

大病をした時のことなど

丁度此の彫工會發會當時前後は私は西町にゐました。

其節、彼の三河屋の老人と心易くなつて三河屋の仕事をしたことは前に話しましたが、その關係上、少しでも三河屋の方に近くなる方が都合がよかつたので、老人の勸めもあつて、仲御徒町壹丁目三十七番地へ轉宅しました。西町の宅よりも四丁程近くなつたわけでした。

さて、彫工會の發會等も凡て落着し私は是れから大にやらうと意氣組んでゐた矢先、大病に罹りました。

掛つた醫師は友人の漢法醫で、合田義和といふ人であつた。此人は漢法ではあるが、中々の名醫でありました。

私の病氣は何んとも病名の分らぬ難病であつて、一時は殆んど家内のものも絶望した位で、私も覺悟を極めて居つたのでした。何ういふ病氣かと申すと、身體全體が痛む。實に何んとも云ひやうの無い疼痛を感じて、ゐても起つてもゐられない位……僂麻質斯とか、神經痛とかいふのでも無く、何んでも啖が内訌して斯く全身が痛むのであるとかで、强ひて名を附ければ啖陰性といふ餘り多く無い病氣だと合田氏は診斷してゐる。一時は腰が拔けて起つことも出來ない。寢てゐても時を頻つて咳き上げて來て氣息を吐くことも出來ない。實に恐ろしく苦しみました。

それで、醫師の合田氏は、此れはいけないと非常な丹精をして吳れまして、夜も歸宅らず、徹宵附き添ひ、藥も自身煎じて看護してくれられました。その丹精が無かつたら恐らく私は生命を取られたことゝ思ひますが、三ケ月程して漸く快方に趣いた

のであつた。

此の合川氏といふ醫師は、是又一種の變人であつて、金持ちを嫌ひといふ人。貧乏人の爲には藥代も取らぬといふ程に貧窮者に對して同情のあつた人で、醫は仁術なりといふ言葉を其儘實行されたやうな珍らしい人でありました。氣性が高潔である如く、醫術も非常に上手でありました。私が斯ういふ名醫に友人があつて其人の手に有ゆる親切と同情をもつて看護されたことは全く私の幸福でありました。

併し、私は、既に世の中に顏を出して來ては居つたものゝ、まだ／＼木彫が行はれてゐるといふ世の中にならず、相變らずの貧乏でありますから、醫師にお禮をしたくてもするわけに行きません。大病で、三ケ月も床に就いてゐることだから、生活には追はれて來る。知人などの見舞ひのもので其日を過してゐたやうな有樣でありました。けれども、何うにか都合をして藥代丈けは拂ひましたが、合川氏の普ならぬ丹精に對しては、まだお禮が出來ぬので、私はそれを心苦しく感じてゐる中、段々身體も元に恢復して參つて、仕事も出來るやうになりましたので、日頃念頭を離れぬ合川氏への御禮のことをいろ／＼考へましたが、病後の生活には是と云つて適當な方法も考へ附かず心ならずも一日一日と送つて居りました。さり乍ら、人の普通ならぬ親切を受けて其儘でゐることは如何にも氣が濟まぬ。何か形をもつて謝禮の意を致したいものであると私は切に感じてゐたことであつた。

是より先、私は一人の道具商を知つてゐました。齋藤政吉と云つて同業者の間では名の賣れた人であつたが、此の人が明製の白衣觀音を持つて居つた。それは非常な逸品でもあるといふので、齋藤が自慢に私に見せてくれた。見ると、自慢する丈けのことはあつて中々優れたものである。で、私もそれがほしい氣がして、凡そ、幾金のものかと聞くと、百五十圓だといふこと、藥代さへも漸く工面をして拂つた時代のことで、私に金のありやう譯でないから買ひ取ることは思ひも寄りません。で、或時、齋藤氏にとても自分はあの白衣觀音を買ふことが出來ぬが、作は如何にも結構と思ひ、心に殘つて居る。若し、あれを借りることが出來れば、私はあの通りのものを寫して置きたいと思ふが何うであらうと、話すと齋藤氏は快よく承知して私に貸してくれました。

其處で私は仕事の隙々を見て、櫻の木で、その儘そつくりに模刻をした。そして右の觀音を佛間に飾つて置いたのでした。不圖、私は此の觀音のことに氣が附き、此を合田醫師へお禮としては何うであらう、と思ひました。隨分自分としては精神を籠めて寫したものである、寫したとは云ひ乍ら、原作が優れて居り自分も手間をかまわず丹念にやつた仕事であるので、此れならば自分のお禮の意味も滿更ではあるまい。此がよろしからうと思ひましたので、或日、それに熨斗を附け、病中一方ならぬ世話に預つたお禮のしるしといふ意を述べて、それを合田氏に贈りました、

すると、合田氏は大變に滿足した顔で、君から斯うしたものを頂くことは私も心苦しいが、併し、此は君の手になつたものであり、君の心持もよく分つて居るので、他品とか、金錢ならばお貰ひしないが、此れは快よく有難く貰ひませう。實は自分も日頃から、何か君に一つ拵へて頂きたいと希望して居りましたが、病後のことでもあり、聊かなりとも君に盡した後に於て、此方より物をおたのみすることは如何かと遠慮して居つた處であるが、君より進んで此れを僕に下さるとあれば、何よりのことで、甚だ心悦ばしい。と合田氏は大變によろこんで呉れますので、私も日頃の念が屆き、やつと肩の荷を卸した氣になつたことであつた。

然るに、此の合田氏も貧乏では餘り引けを取らぬ方で……元來、今申す通りの性格の人であるから金持ちでありやうがない。それで家計の都合が惡い所から隨分大事にしてあつた右の白衣觀音を質に入れました。此は後に私が知つたことであるが、さういふことになつた。もつとも賣つたのではありません。今に都合が好くなり次第受け出す積りで合田氏は一時手離したのでありませうが、其中に合田氏は病氣で亡くなりました。永眠の際も及ばず乍らお世話もしたやうな次第で、墓は千住の大橋で誓願寺にあつて、今日とても時々墓參をしてゐる次第であるが……月日は何時か經つて三十餘年を過ぎ、當時の知人朋友も亡くなつて行く中、彼の觀音はめぐりめぐつて去年の秋のこと、或人が箱書きをしてくれと云つて持つて來た作を見ると、それが合田氏に贈つた其觀音でありました。

私は、どうも、亡くなつた子にでも逢つたやうな氣持で、懐かしくそれを眺めたことで、私の作に相違ない旨を箱書して持主に戻しましたが、何んでも持主は千五百圓とかで手に入れたのださうであります。私は餘り懐かしく思つた儘、當時を追懐

し、右の觀音をまた其儘に模刻して記念の爲に殘し、只今は佛間に飾つてあるやうなわけであります。

此の合田義和醫師の家と現時美術學校に佛語を教授をして居られる合田清氏の家とは遠緣に當るさうで、何んでも清氏の令閨が合田醫師の姪とかに當るといふことを後に至つて知りました。

さて、私は、都合上御徒町へ轉居したのであつたが、早々大病をしたりして、此の家は緣喜のよくない家になつて家內のもの等が嫌がりましたが、どうやら其年の秋になつて病氣も全快、押し詰つまつてから突然皇居御造營に就いて私も其事に當る一員として召し出される旨の命令を受けて、今迄緣喜がよくないと嫌がつた家が、急に持ち直して却つて好い春を迎へたやうな譯で、何がどう變化するか、人間一生の中には洵にいろ〳〵な移り變りのあるものと思ふことであつた。

此の御徒町の家は三十七坪あつて、地面は借りてゐきましたが、玄關二疊、六疊に、四疊に、臺所物置、それに庭が少しあつて、時の相場六拾圓で買つたのでありました。さうして一家の生計が、どうしても三拾圓は掛りました。當時、一日の手間一圓を働くことは容易なことでは無つたのですが、併し五六年以前一月の手間七圓五拾錢から見ると、私の生計はずつと張つて居り、また手間や物價なども高くなつて居りました。

とは云へ、相當の家一軒六拾圓といふ値は今日から考へるとをかしい位のものであります。

大隈綾子刀自の思出

話がずつと後戻りしますが、今日は少し別のはなしをしやうかと思ひますが、何うですか。

……では、そのはなしをすることにしませう。

實は、先日來、大隈未亡人綾子刀自が御重體であると新聞紙上で承はり、昔、お見知りの人のことで、陰ながらお案じしてゐた次第であつたが、今朝（大正十二年四月二十九日）の新聞を見ると、お歿なりになつたさうで、まことに御愁傷のことである。

それにつけて、此頃、綾子刀自の素性のことに就いて、いろ〳〵噂を聞いたり、また新聞などで見たりしますと、元、料理屋の女中であつたなど、誰々の妾であつたなどいふやうなこと

が傳へられてゐるが、さういふことは皆間違ひで一つも據處がない。斯ういふ噂は何處から出たものか。察するに綾子刀自が大隈家へ嫁がれた時分は、丁度何もかも徳川瓦解の後を受けたドサクサの時代で、其頃の政治家といふ人達は多くお國侍で、東京へ出て假りの住居をして居つて、急に地位が高くなり政治家成金とでもいふやうな有樣で、何でもヤンチヤな世の中……殺風景なことが多く、隨つてその配偶者のことなども亂暴無雜作なこと勝ちで、藝妓、藝人を妻や妾にするとか、女結髪の娘でも縹緻がよければ一足飛びに奥さんにするとかいふ風であつたから、斯ういふ一體の風習の中へ綾子刀自のことも一緒に卷き込まれて、同じやうな行き方であつたらうなど推測し、右のやうな噂が今日も傳へられるのであらうかと思はれますが、此れば全く大間違ひであるのです。

といふ譯は、その因緣を話しませんと分りませんが、實は、私は、昔、綾子刀自の娘盛りの時代を妙なことで能く知つて居る。此の事を話せばおのずから綾子刀自の素性が明らかになることで、何時か、此の事を何かの序に話して置くか、書き留めて置きたいと思つて居つたことであつたが、今日は丁度よい折とも思ひますから一通り話しませう。

幕府瓦解の後は旗下御家人といふやうな格の家が急に生計の方法に困つていろ〱苦勞をしたものであつた。

其頃、舊旗下で三枝龍之介といふ方がありました。此の方の屋敷は御徒町にあつた。立花家の屋敷を前にした右側（上野の方から）にありました。祿は何程であつたか、七八百石位でもあつたか、內證豐かな小旗下であつた。

此の三枝家が私の師匠東雲師の仕事先、俗に云ふ華客場であつたので、師匠は平常當主の龍之介氏と極く懇意にして居りました。其中旗下は徳川の扶持を離れ、士族になつて、世の中の變るにつれ、今迄の武家の格式も棄て、町人百姓とも交際をせねばならなくなつたので、私の師匠は從前よりも一層親しく三枝家の相談を受けて居つたことでしたが、三枝家でも世變の爲にいろ〱事情もあつて、今迄の屋敷が不用になつたから、それを賣りたいといふので師匠は相談を受けて居つた。けれども、他に好い買手もなかつたが、師匠がその屋敷を買ひ取ることになつて、一時、向島へ預けて置いたが、預り主が風のよくない人で、預けた材木が段々減つて行くやうな有樣なので、師匠は空地を見附け、右の三枝家から買ひ取つた家の材木で家作を立てました。此の家が卽ち前お話した堀田原の家。師匠の姉のお悅さんの住んでゐた家であります。お悅さんは私の養母であ

つて、私も其所に焼香をし、後には一家凡てが引移つたのです。座敷など三枝家の時と其儘で武家風な作りであつた。

當時、龍之介氏も他の旗下衆の人達と同じやうに一家の事も充分でなかつたと見え、或日、東雲師の家に來られて、「東雲さん、私も、どうも此頃運が惡るくて困る。一つ運が好くなるやうに、縁喜直しに大黑さんを彫つてくれませんか。」といふ頼み、師匠も常ならぬ三枝氏の頼みだから「それは、早速彫りませう。」と云つて和白檀で二寸四分の小さな大黑さんを彫つて上げました。すると、それが大變龍之介氏の氣に入つたのでした。といふのは、木の木目の玉が、頭巾にも腹のところにも、又、俵の左右の寶珠のところにも、まるで珠のやうに旨く出たのであつたので、それが縁喜が好いと云つて三枝氏が大層よろこんだのでした。

此の木の玉の出るのは、必ずしも偶然ではなく、木取りの仕樣で、出さうと思へば出るものです。師匠は特にさういふ風に作られたのですが、素人には左ういふことは分らないから、奇瑞のやうにも思はれてよろこんだのでありました。すると、此の大黑が出來上つて間もなく、妹御のお綾さんが、時の大官大隈重信といふ人の處へ貰はれて大變に出世をされた。此れは東雲師の彫つた大黑の御利益だと云つて三枝家の親類の人達は目出度がつて、自分達もあやかりたいものだと、二軒の御親類から、又、大黑を頼まれたが、此の方は御利益があつたか、私は其所迄は知りません。

龍之介氏と妹御のお綾さんとの母親になる方は、其頃は未亡人で、頭を丸めてお比丘さんのやうに坊さんでしたが、そんなにお婆さんではありませんでした。俗に云ふ美人型の面長な顔で、品格と云ひ縹緻と云ひ、旗下の奥さんとして恥しからぬ相貌の方で、中々立派な婦人でありました。お綾さんも、母親に似てまことに美しかつたが、も些つと丸顔であつた。後に歳を老られてからの寫眞を新聞などで見ても、失張り、その時の俤がよく殘つて居つて、母人よりも丸い方に私は思つたことだが……それは兎に角、三枝未亡人は、此のお綾さんのことを心配されて、より／＼師匠へ縁談のことに就いて相談をして居られました。

或時も三枝未亡人が駒形の師匠の宅へ見えられ、娘のことについて師匠に相談をされてゐる。

「……今日では、もはや、武家、町人と區別を立てる時節でもなく、町家でも手堅い家であり、また氣立ての好い人物なら

ば、親を何處へでもお世話をお願ひしたい。貴君は世間が廣いから、好い緣があらば、どうか、おたのみします。」

など話して居られる。(私はまだ小僧時代であるが、店のことや、奥のことも走り使ひをしてゐる時のことで、よく其消息を知つて居る。)それで、師匠も其事に就いて心配をして居られました。

此所にまた師匠の華客先で神田和泉橋に辻屋といふ絲屋がありました。絲屋でこそあれ辻屋は土地の舊家で身代も中々確りしたもの、普通の絲屋と異つて、鎧の縅の絲、下緒の糸など専門にした老舗であつた。主人は代々上品な數寄者であつて、いろ〳〵其頃の名工の作など集められた。それで師匠も辻屋に出入をして居つた譯である。彼の彫金の大先生加納夏雄さんが京から江戸へ出た時に草鞋を脱いだ家が此の辻屋と云ふことです。今日でいふ美術家とはいろ〳〵深い緣故のある家であつた。

此の辻屋の次男に貨一郎といふ人があつた。神田お玉池に德川樣のお大工棟梁をしてゐた柏木稲葉といふ人の養子になつて柏木貨一郎と名乗つて居つた。二十四五の立派な人品のよい、頗る美男子で、少し小柄ではあるが大家の若旦那と云つて耻しからぬ人でした。此の人もまた美術愛好家であつて、夏雄さんの彫物では鏡蓋、前金具、煙管など澤山に所持して居り、また古いものにも精通して居られ、柏木貨一郎と云ふと其頃の數寄者仲間には知られた人で、同氏が所持してゐたものと云へば、それを讓り受けるにも人が安心した位、信用のあつた人でありました。

此の柏木氏は今申す通り、大工棟梁の家筋で素の町人ではない。屋敷も門構へで武家住居のやうな立派な構、隨つて資産もあり、男振りは美男子といふのであるから、私の師匠は此の人に目を附けたのでした。此は師匠の見立てが、甚だ適當で、一方お旗下のお孃樣であるお綾さんには如何にも似合ひの緣邊と云ふべきであつた。それにお綾さんはまた中々の美人であり、武家の家庭のことで教育は充分、生れつき怜悧で、母人はまたよろしい方、今は瓦解をして士族になつて、多少は昔の威光が薄くなつて居るけれども、まだ〳〵品格は昔の儘である。で、此の柏木貨一郎さんとお綾さんとを並べると、それこそお雛樣の女夫のやうな一對の美しい夫婦が出來ると、師匠も家にゐてその事を母者などに話し、どうか、此の緣は纒めて見たいものだ、と云つて居られました。

師匠は此の縁談を柏木家へ申込んだのでありました。此は師匠が辻屋に出入をしてゐた關係で柏木家へも出入する。柏木家の未亡人からも養子に相當な嫁が有つたら世話してくれと頼まれてゐたので、丁度兩方からの依頼で、自然と一對のものが出來たやうな鹽梅になつたのですから、師匠も是は出來ると思つて柏木家へ申込んだのであります。すると、案の條、柏木家でもまことに結構とある。其所で柏木家から改めて師匠を介して三枚家へお綾さんを貰ひたいと申込んだのです。三枚さんでは師匠に一切を仕した位に師匠を信じて頼んで居るのであるから、此方も又甚だ結構といふことで、どうか骨折つて纏めてくれといふ挨拶である。で、師匠が双方を幾度か往復して愈々見合ひをしやうといふ運びになりました。

さて、見合ひといふことになりましたが、當時世の中もまだ充分に靜謐になつたといふではなく、明治新政の手の附け初めで、何となく騷々しい時で、前から多少とも物持ちの家でも財産を減らさぬやうにと心掛け、萬事控え目にした時でありますから、此の見合ひのことなども双方共に極く質素に致すがよろしからうといふことで、師匠の宅の坐敷で、双方が落ち合ふやうにしたらといふのであつたが、師匠は、どうも、自分宅と云つても坐敷といふ程の坐敷も無し、柏木家と三枚家との歴とした兩方の關係者をお招きする丈けのことは出來ませんから、何處か、極く儉約で、人目に立たない好い場所を考へさせうと云つて、思ひ附いたのが諏訪町河岸の「坊主そば」の二階であつた。

此のそば屋のことは、前に淺草界隈の名代な店のはなしをした折はなしました通り、主人が聾であるから「聾そば」とも云つて中々名の賣れた店で並の二八そばやではない。此の二階をその見合ひの場所にするといふことになつた。

當日は無論、私の師匠は双方の仲介者であるから誰を差措いても出掛けなければなりません。で、師匠は羽織など着て出掛けることになつたが、そのお伴は相變らず私である。私はその時分はまだ小僧で、師匠に幸吉々々と可愛がられ重寶がられたもので、使先のことは素より、お伴も毎々のことで、辻屋でも、三枚さんでも、また柏木家でも師匠と多少とも關係交渉のあつた家は何處でも知つて居り、また種々な事件の眞相なども大方は心得て居つたものでありました。それで、今度もお伴を仰せつかつて師匠の後から「坊主そば屋」へお伴をして參つた

のでありました。

彼是する中に柏木貨一郎さんが養母と共に見える。三枝のお孃さんお綾さんには附添人のおびくさんが附いて見えられる。二階で落ち合つて蕎麥を食べて見合ひをされた。一方は水の垂るやうな美男子、一方は近所でも美人の評ある舊旗下のお孃さん、まことに似合ひの縹緻人揃ひのことで、何方に嫌のあらう筈なく、相談は倏ち整つたのでありました。此時、お綾さんは確か十八で、貨一郎さんは二十五位であつたと思ふ。私はお綾さんよりは一つ年下で十七であつた。小僧とは云つても最早中小僧で、今日で云へば中學校の青年位の年輩であるから、記憶などは人間一生の中で一番確かな時分――見合ひといふものは、何ういふことをするものかなど恐らく好奇心もあつたか、婿さんの貨一郎さんも、お嫁さんの方のお綾さんも、今日でもその美しい似合ひの一對であつたことがハツキリと記憶に殘つて居ります。

其所で此の緣談は整ひ、早速仕度をしてお輿入といふ段になつて、目出度婚儀は整ひました。然るに、此れが意外にも不緣となつてしまつたのでありますが、此れにはまた理由があつた。……といふのは貨一郎さんには養母がある。此は柏木家の未亡人で、即ちお大工棟梁稻葉と云ふ人の後家さんであります。此の方が、今日で云へばヒステリイのやうな工合の人で、中々一寸始末の惡い質の婦人。先づ一種の癇癪かひで、好いとなると火の附くやうに事を急き立て、また惡いとなり嫌となると前後の分別もなく、纏つたことでも破談にしてしまふといふ質で、甚だ面倒な人であつた。

斯ういふ性質の人を養母にしてゐた柏木貨一郎さんは、とても此緣は一生添ひ遂げることは困難しからうと思はれたらしい。元來、此の貨一郎といふ人は考へ深い人であつたから、今度の緣談に就いては、いろ／＼深く考へて居つたものらしく思はれる。此れは私の後日に到つての想像でありますが、どうもさうと解釋される。つまり、貨一郎氏の肚では、あの養母がゐられる間は、如何に發明な婦人を妻としたとても、一家に波が立たずに濟まふとも思はず、また添ひ遂げ得られやうとも思はれぬ。どうで、添ひ遂げられぬものなら、一旦、自分の妻となつた女であつても、その人へ傷を附けたくない。と斯う考へられたものと見える。それで御夫婦の間のことは極く疎遠であつたらしい。夫婦のかための杯はあつたが、夫婦の語らひはなかつた。で、お綾さんが里へ來て、その事をお母樣へお話をしたものらしい。

三枝未亡人が此の娘の話を聞くと、意外に感じたことは道理なこと。此れは先づ何より媒約人の東雲さんに話すが好からう。此は嫁入前より何か他に思ひ込んだ婦人でもあるのではないか。若し左うい事なら今の内引取つた方が双方の爲に好からうといふので、御母樣が來て話されましたので、東雲師も此は困つたと思つたが、貨一郎氏にも深い考へあつてしてゐる心持ちが分ると、夫婦の中へ立ち入つて好い工合ひに纏めることも出來ず共儘になつてゐる中とう〳〵柏木未亡人方にも何か都合があつて、双方話合で愈々破談となつてお綾さんは里へ引取られることになりました。

三枝家の方では、婿の貨一郎さんの眞意のある所が分りませんから、矢張疑惑を懷き、先方の仕打を面白く思はないのも道理な次第です。又、柏木貨一郎氏の心の中には種々辛いこともあつたでありませう。併し、當人に傷の附かない中に綺麗に還すといふことが、此際何よりのことゝ最初から思ひ極め、お綾さんの爲に後々のことを心配し、また自分にも用心をして非常にたしなんでゐたものらしいが、さういふ深い實情は三枝家の方には分りやうもなく、遂に双方の間に意思の疎通を缺いた儘不緣となつたことは洵に殘念なことでありました。

私の師匠も此の間に挾まつて、いろ〳〵斡旋しましたことは云ふ迄もないが、何しろ、一方のお袋さんが、嫁を貰ふ時には貨一郎氏が何んと云つても自分先に立つて極めてしまひ、少し氣に向かなければ、中々氣隨者で、云ひ張つたとなると、誰が何んと云つても我意を張り通すやうな有樣で、隨分手古摺されたやうな塩梅でありました。私は小僧のことで直接にはさういふ交渉に當つたわけではないが、毎度、此等の要件のことで師匠の意を受けてお使ひをしたり、また師匠が妻君に話してゐること、時々、私に愚痴を洩らされることなどで、此の結婚が破れるのであらうといふことを豫想して居りました。後に至つても偶々師匠が當時のことを私に話して、本當に媒約人をするといふことは重大な責任のあるものであることを語られましたが、此の時の心配苦労の一通りでなかつたことが推察されました。

さて、其後、お綾さんが里へ歸られ、間もなく大隈さんへ貰はれることになつたのですが、此の關係は私は知りません。また、師匠も此の時のことには立ち入つて居りませんでした。併し、或日、三枝未亡人が師匠宅へ見えられてお綾さんの其後の

ことに就いて話して居られました。

「……實は、綾のことですが、今度お國のお侍で大隈といふ人から是非慾しいといふので、遣はすことに承諾しましたのですが、まるで娘を掠奪はれるやうな工合で、私も實に驚ろきました。」

と、愚痴交りに云つて居られた所を見ると、未亡人も承諾はしたものゝ、先方の行方が亂暴なので迷惑に感じたやうな口裏であつた。

此は、一方は直參のお旗下で、兎に角、お上品で、三指式に行かうといふところへ、一方は、西國大名の中でも荒い評判の鍋島藩中のお國侍、大隈八太郎と云つて非常な論客で政治に熱狂してゐた志士の一人。其時は既に大官を得て出世してゐるとは云へ、萬事が粗野放膽で婚儀のことなど禮節に拘らず、妻を娶るは品物のやり取り位に思つてゐたであらうから、お品の好い御殿風な三枝未亡人を驚ろかしたも無理ならぬことと思はれます。何んでも人力車に書生をつけてよこして、花嫁御寮を乘せて、さつさと伴れて行つたりしては、お袋さんも娘の出世はよろこんでも、愚痴の一つも云ひたくなつて、東雲師の宅へ出掛けてお出でになつたものと見えます。

東雲師は、默つて話しを聽いて居られたが、

「成程、併し、そりや仕方がありませんよ。東京の方と、田舍の人とでは、どうも……」

など挨拶をしてゐる。

「でもねえ、何んだか、私は不安心ですよ。綾が取つて食べられさうな人なんで……」

「いや、御隠居樣。今の世の中は、さういふ男が役に立つのでございますよ。御安心なさいまし。」

師匠は高聲で、笑聲も交つて奥で話してゐられる。私は店にゐて、聞くともなく左樣な話しを聞いて、あの御婦人も今度田舍のお武士へお方附きになつたかと思つたことでありました。

其後、幾日かを經て、三枝未亡人はまた東雲師宅へ參られ、申すには、東雲さん、今日は妙なことを一寸お願ひしたいので參りましたが、實は此れを貴君に始末して頂かうと思つて持つて參じました。と云つて風呂敷包みを解かれると、中に絹の服紗に包んだものが米ならば一升五合もあらうかと思ふ程の嵩になつてゐる。それを擴げると、中から出たものが無數の紙片の束であつた。

「此れは綾子が宅に居ります時分、長い間掛つて丹精して書きためたものですが、仕舞つて置くにしても置所も無し、焼いて

棄てるにしては勿體なし。貴君は佛師のことで、斯ういふものの始末はよく御存じと思ひますので、何んとか好い方法で始末をなすつて下さい。」

との事。

師匠は何んであるかと、其物を見ると、其等の紙片は短冊なりに切つた長さ三寸巾六七分位の薄様美濃に一枚々々南無阿彌陀佛の御名號が書いてある。それが一束々々になつて居るが、一束が千枚あるか、二千枚あるか。實に非常な數である。

「どうも此は驚きました。此れをお嬢様がお書きになつたのでございますか。」

「左様で……」

「何か御心願でもあつて斯様に御丹精をなされたのでございますか。」

「さあ、何うで御座いますか。あの娘の心持は私にも分りませんが、何んでも毎日の勤行のやうにして、幾年か掛つて書きためたのですが、一心の籠つたもの故、斯うして置くのは勿體なく……」

「成程、宜しうございます。では、之は隅田川で川施餓鬼のある時に川へ流すことに致しませう。燒いて棄てるは勿體ない。此儘佛間になど置きましてもよろしいが、それより川へ流せば一番綺麗でよろしうございませう。」

「では、どうか、よろしく……」

といふやうな談話をして、三枚末亡人は歸られました。

それから、其年の夏に隅田川で川施餓鬼のあつた日、師匠は私を呼んで、此れを吾妻橋から流すやうにと云ひつかりました。

で、弟弟子の小澤松五郎を作れ、(上野戰爭のはなしの條にて、牛さんの家へ私と一緒に參つた小僧)小風呂敷に包んだものを持つて吾妻橋へ行きました。川施餓鬼の船がテンテンテンチンと囃して卒塔婆を積んで橋下を拔けて行くのを見掛け、私と松五郎と南無阿彌陀佛の名號の書いてある紙片を一枚一枚水面へ向けて流し出しました。妙なもので、どうも斯ういふ風に一枚一枚丹念に名號が書かれてある短冊ですから、それを束なりに川の中へ抛り込むわけには行かない。流すといふ心持ちになりますと、先張り一枚一枚と我が手から離れて風がひら〳〵と持つて行つて水に流れて行くのでないと流した心になりませんから、私達は丁寧に一枚一枚とめくつては流したことですが、何しろ、無數の紙片のこと故、二三時間も掛つて漸つと流してしまひました。

私は、其時は別に何んとも深く考へもしはしませんでしたが、後年、その時のことを想ひ出して、信神も信神であるが、此れ丈けのことを倦きず撓まず、毎日毎日やり透すといふことは普通のものに出來ることではない。噂に聞けば大隈夫人綾子と云ふ人は、大層よく出來た人だとの評判であるが、成程、娘時代からあれ丈けの辛抱をして心を錬つて居られた丈あつて、今日天下一二と云はれる政治家の夫人となつても矢張その妻としての役儀を立派に仕終せるといふは、心掛けがまた別なものであるかと感心したことでありました。

私が綾子刀自に就いて知つて居る因緣ばなしといふのは此れ丈のことで、其外何もありません。

けれども、私は、刀自が初緣の際の見合ひに仲介人の師匠のお伴までして其席を實見した程、其時代のことを能く知つて居り、正銘疑無しの話である。よつて、私は、此の奇妙な話は洵に不思議とも云ふべきであるから、何時かは何かに書き殘して置きたいとも思つてゐたのですが、此所にそれを差し控へ、今日迄、嘗て口外したことも無く、此れ丈けの話を其儘默つて居つたのは、綾子刀自が大隈家へ方附れたのが、初緣でないのであるから、若し、ひよつとさういふことを私の口から口外しては、と遠慮を致したわけでありました。もつとも、大隈家へ再緣されたと申しても、事情は前申す通りの譯で、一向虚飾といふに疑りはないことで、刀自の身上に何等潔白を傷ける次第でもありませんが、御當人、及び其御良人の存生中は善悪共に他人の兎角を云ふべき筈もないことゝ、實は口を緘して居つたわけであります。

が、今日はもはや、御兩方とも黄泉の客となられた場合、私が此のはなしをしたとて、さして差閊へもないことかと思ふ計りでなく、却つて此のはなしは、刀自の素性に就いて世間の噂が全く間違つて、飛んでもない惡名をつけるやうな有樣になつて、女中であるとか、藝妓をしてゐたとか、甚だしきは他人のおめかけであつたなど取りとめもつかぬ噂を立てるのを耳にもし、また目にもするにつけ、昔は舊お旗下の令孃にて、立派に輿入れをされ、また靜々元の身の儘にて里へ歸され、さうして、また立派に大隈家へ貰はれてお出でになつた當時の事實を、知り乍ら默つて居るより、今日を好機會として、此の昔ばなしの中にはなして置くことは、間違ひを矯し、僞を取り消すよすがともならうと存じて斯くは話をしたやうな譯であります。

何、因みに、彼の柏木貨一郎氏は、後年、確か、某家の飛鳥山の別莊へお茶の會に招かれての歸り途、鐵道のレエルに下駄の歯を取られ、あつと云ふ間に汽車が來て、無慘の最後を遂げられました。

是は明治三十一年九月の事と記憶してゐます。

また、三枝龍之介といふ方は、先年、私が一二度大隈邸へ招かれ參つたことのあつた時、お玄關で一人の老人にお目に掛つたが、その方が龍之介氏であつたことを記憶して居ります。

皇居御造營の事
鏡縁、欄間を彫つたはなし

御徒町に轉宅しまして病氣も概かた癒りました。

其時が明治二十年の秋……まだ本當に元の身體には復しませんが仕事には差閊へのない程になつた。

すると、其年の十二月、皇居御造營事務局から御用有之に就き出頭すべしとの御差紙が參りました。何んの御用であるか、孰れ何かの御尋ねであらう、出て行けば分らうと思つて出頭しますと、皇居御造營に就いて宮城內の御間の御裝飾があるによつて其御用を仰せつけられるといふことであつたので、誠に身に取り名譽のことで、有難き仕合はせと謹んでお受けをして退出したことでありました。

此の皇居御造營の事は日本美術協會の方にも關係がある。協會の役員の一人である山高信離氏は御造營の事務局長でありました。氏は當時有數の博識家で、有職故實のことは申す迄もなく、一般美術のことに精通して居られ、自ら繪畫をも描かれた位でありますから、建築內部の設計裝飾等の萬般に就いて計劃をして居られまして、各種に亘つた技術家諸職工等を招き其等の考を聞き、自分の考と參考斟酌して概略のところを先づ決定されて居られたやうなことであつた。それで氏は私のことをも美術協會の關係上多少知つて居られ、私の技術をもお認めになつて居つたものか、氏のお考へによつて私にも御用を仰せ附けられた次第であつたことゝ思はれます。

宮城內の事は雲深く、其頃の私は拜觀したことも御座いませんから分りもしませんが、其御化粧の御間に据えられる所の鏡の鏡縁の彫刻を仰せ附けられたやうなわけでありました。

鏡縁は大きなもので、長さ七尺、巾四尺位、縁の太さが五寸。その周圍一面に葡萄に栗鼠の模樣を彫れといふことで御座いました。右の材料は花櫚で、隨分此れは堅くて彫り難い木であります。早速お引受けは致したが、何しろ押詰つてのことで其年は何うにもならず、明けて明治二十一年、新春早々から取り掛りました。普通、庶人の注文とは異つて、宮中の御用のことで、わけて御化粧の間の御用具の中でも御鏡は尊いもの、畏きあたりの御目にも留まることで、仕事の難易は兎に角、事疎かに取掛るものでないから、齋戒沐浴をするといふ程ではなくとも身と心とを清淨にして早春の氣持よい吉日を選んで其日から彫り初めました。

木取りは御造營の方で出來てゐて、材料はチヤンと彫るばかりになつて私の手へ廻されて居りますので、此方は鑿を下せば好いわけであります。其所で彫るものは葡萄に栗鼠といふので、ざつとした下圖も廻つて居る。先づ、從來から誰でも知つて居る圖案であるので、葡萄は分つてゐる。栗鼠も分つてゐる。が、栗鼠は生物で、平生から心掛けて概略は知つて居るものであるが、いざ、此れを手掛けるとなると、卒直には參らぬので、栗鼠を一匹鳥屋から買ひまして家に飼ふことにして、朝夕その動作を見る爲に箱の中に木の枝又は車などを仕掛けてそれを渡つて活動するその輕快な擧動を研究的に見究めなど致した上で、葡萄の中に栗鼠の遊んでゐる所をあしらつて圖案を決め、いよ〳〵彫り初めたのでありました。

けれども、前申上げた通り、私の家は手狹であつて仕事場も充分でない。廣い室と云つて六疊しかありませんから、其所へ七尺からの鏡縁の材料を運んで仕事をすることは出來ませんので、仕方無く、私の實家（私は高村家の養子であることは前申した通り）の菩提寺が淺草松葉町にあるので、其寺の坐敷を借りることにしました。寺の名は凉源寺と云つて至つて閑靜で、お寺のことで廣々として居りますから、仕事には甚だ都合が宜い。併し宮内省からお預りをしてゐる品物は、木地とは云へ、大切のものであるから、不慮のことでもあつてはと中々心配。それに日限りもあることで、毎日其寺に通ひ充分注意を致して仕事に取掛りました。

仕事は私一人ではなく、弟子を使ひ、荒彫りは自分がして、仕上げは弟子にも手傳はせ、先づ滯り無く仕事を終つて首尾能く掛りの方へ納めたことでありました。出來上つたのが四月……櫻の花の散る頃でありました。（手傳はせた弟子には林美雲氏も山本瑞雲氏も居りました。美雲氏は既に故人となつたが、後

に美術學校の助教授をもしたことであつて、至極穏健な作をする人であつた。東雲師のお宅で年季を勤め上げ、一人前にならうといふ所で師匠が歿されましたので、其後は私の許に參つて私の弟子のやうになつたのであります。また山本瑞雲氏は現存で今日盛んに活動して居ります。此人は元藤原國吉と云ひましたが、後に實家の山本姓に復し號を瑞雲と改めました）

鏡縁が納まると、今度は御欄間の彫刻を仰せつかりました。此は七寶に山鵲の飛んで居る圖であつた。（山鵲と云ふ鳥は一寸鵲に似て、羽毛に文采があり、白冠で、赤い嘴、尾が白くて長い。渡り鳥の一種で、姿の上品な趣のある鳥です）それが濟むと、次は同じく欄間で鐵線蓮唐草の圖（鐵線蓮はよく人家にある蔓草で、此も紋様などにして舊くから使はれてゐるもので、大變趣のあるもの、葉は三葉で一葉を爲し、春分舊根から芽を出し、夏になつて一莖に一花を開く。花の大さは二寸餘で、六瓣のものも八瓣のもある。色は碧か白、中心に小さな紫瓣が簇がつて一寸小菊の花に似てゐるもの）それが終ると、今度は小鳥に唐草を一組仰せつかつた。此の一組は二枚の處も四枚の所もあつて、中々大きく手の籠んだもの。……此等は孰れも首尾よく納まりました。それから暫くすると、今度は御學問所の欄間で蝙蝠を彫工會の方へ御命じになつて、大勢で一つ宛彫れといふ命令。つまり合作であります。私は白蝠を一つ彫りました。

此等の彫刻は掛りの方から下繪が出て居るので、さうむづかしく意匠することも入らず、得手々々に彫刻して雲形の透しに配置したものです。何しろ、宮中のお仕事ですから謹んで落度のないやうに心掛けたことであります。

葉茶屋の狆のはなし

さて、鏡縁御欄間の仕事が終りますと、今度は以前よりも、もつと大役を仰せ附かりました。

此は貴婦人の間の裝飾となるのださうで御座いますが、貴婦人の間の何ういふ所へ附いたものか、その御場所は存じません。何んでも御階子を昇り切つたところに柱があつてその裝飾として四頭の狆を彫れといふ御命令であつた。

此は東京彫工會へ御命令になつたので、木彫で出來るのでは無く、鑄金となつて据えられるので、鑄金の方は大島如雲氏が致すことになつたが、原型の彫刻は高村にさせろといふ御指命で彫工會がお受けをしたのであります。

其所で、私は原型を木で彫ることになりました。凡その下圖は廻つて來ましたが、今度は鏡縁欄間のやうな平彫とは違つて

狆の丸彫といふのですから、下圖に便つて居るわけに行かない。先づ何より第一番にモデルとする狆の實物を手に入れることが必要となつて來ました。

併し、狆を手に入れるといふことは容易でない。狆なら鳥屋へ行つても何程もあるが好いものは稀です。もし好いのがあれば高價であるから私も當惑しましたが、以前要たしで淺草の三筋町を通つた時に或る葉茶屋に中々好い狆がゐたことを思ひ出したので、早速出掛けて行つて見ると、店先にチヤンとその狆は居る。それは中々狆らしい狆で、どうも好さゝうに思はれるので、それが欲しくなりましたが、葉茶屋では自慢にする程可愛がつて居るらしいので、一寸何うするわけにも行きません。

けれども、先づ當つて見ない分には容子も分らないので、そんなに入用でもない番茶やお客用の茶などを買ひまして、店先に腰を掛け、そろ〳〵その狆を褒め出したものです。可愛がつてゐるものを褒められゝば誰しも惡るい氣持はしませんが、細君が奥から出て來て狆の講釋を初める。私は一服やつて狆の話を聞き乍ら、細君があやしてゐるその狆の樣子を見ると、どうも、如何にも狆らしくて好さゝうである。

それで私は言葉を改め、

「實は、私は近日一つ狆を彫らうといふのですが、お宅の狆は如何にも種が好さゝうで、此を手本にして彫つたら申分なからうと思ふのですが、手本にするには手元に居らないと仔細な所を見極めることが出來ませんので、甚だ當惑して居る次第ですが、如何なものでせうか、無躾なお願ひですが、此の狆を一週間ばかり拜借することは出來ますまいか。もつとも狆の手當てはお習ひして、決して疎略にはしません。一つ御無心をお訊き下さるわけには參りますまいか。」

斯う私は申込みました。

すると、細君は大變驚いた顏をして私の顏を今更のやうに眺めて居りました。

「さうでございますか。貴方が狆をお彫りになるのですか。でも、生物のことで、一寸お貸しするといふわけにも參りませんよ。此はもう私の子供のやうにして、斯うして可愛がつてゐますんで、暫らくも私の傍を離れませんので……」

といふやうな挨拶。

どうも、一寸話が纏りさうでないから、もう何もかも本當のことを云つて頼むより仕方はないと思ひ、……もつとも、愈々となれば、さうする考へでもゐましたので、私は更に押し返して、

「……實はまだ詳しいことも申上げず、いきなり狆を拜借したいと申しては藪から棒で嘸ぞ變にお思ひでせうが、私は、今回、皇居御造營に就いて、貴婦人の御間の裝飾に狆を彫刻することをお上の方から命令されましたので、其爲、いろ／＼好い狆を見本に探して居りますやうなわけで、貴店の狆が如何にも狆らしく美事であると、平常からも思つて居りましたので、今日、實はお立寄して拜借を願つたやうな譯なので……」

と、話し出しますと、細君は二度吃驚といふやうな顏をしてゐる。

「まあ、さうで御座いますか。皇居御造營になるとか申すことは私共も噂で承知して居りますのですが、すると、貴君は狆を彫つて貴婦人のお間へそれをお納めになるのですか。」

「さうなんです。それで鳥屋へも二三軒行つて見ましたが、どうも氣に入つた狆が居りません。とても、貴店のに比べると狆のやうにも見えませんので……此が、その彫刻をして置物にでもしますのなら、氣に入らない見本でも間に合はせも出來ますが、何しろ、宮城の貴婦人の御間へ備へ附けられますので、よほど本物が上等でありませんといけませんのでして。」

「まあ、お話を聞けば勿體ないやうなことで御座いますね。すると、此狆を見本にしてお彫りになれば、此狆の姿が九重のお奥へ參るわけで御座いますね。」

「さうです。御場所柄のことで、高貴の方の御集りになる所へ飾られますわけで。」

「さうでございますか。では、まあ、お見立てに預つた狆は、隨分名譽なことでございますわね。」

「左樣です。狆に取つては此上もないことゝ申しても好いかと思ひます。」

婦人相手のことで、掛引をするではないが、中々、その應對が念入りで、私も一生懸命ですから、願望を遂げたい爲に辯を振ふ。細君も譯を聞けば勿體なくも右の次第と分つては、可愛がつてゐる生物のことでお貸しするわけには參らんと斷るわけには行かなくなつた。

それはかりで無く、話を聞いては案外。皇居云々のことがあるので、細君も深く感じたものと見えまして、暫らく考へてゐましたが、良人や娘などに相談した結果、細君は快よく貸してくれることになりました。

「畏れ多いお場所のお飾物に此の狆の形が彫られるのでしたら、形のある限りは後に殘るわけでございますねえ。それでは、お役に立つものなら立てゝ下さいまし、私共も大よろこびでございます。それで一週間といふのも何んですから、まあ十日と

いふことにしてお貸しませう。」

といふことになりました。私は思ひの外事が容易に運んだので安心しましたが、實に日本といふ國でこそあれ、皇居といふ一帶で、私の名も所も聞かないで、難有がつてお役に立つものなら立てゝ下さいと誠の心を動かして來た心持は、全く、他國の人の眞似の出來ぬことであらう。と非常に私も嬉く感じたことでありました。

其所で、私は、自分の名札を出し、住所氏名を改めて名乘り、此れから自分で狆を伴れて行かうかと思ひましたが、貴君の書附けを持つてお出でならお使ひでもお渡しゝますと、充分に私を信じて呉れて居りますので、私は家に歸り、弟子の荻原國吉を使ひにやりました。（此の國吉は今の山本瑞雲氏の舊名。當時の青年も今は五十以上の老人となつて居る）國吉は早速中風呂敷をもつて三筋町の葉茶屋へ狆を借りに參り、遠い所でもないので暫らくすると抱いて歸りました。

二三日は座敷に置いて狆の擧動を眺めてゐた。普通の犬ころなどゝ異つて品の好いもので中々賑やかで愛嬌がある。其所で第一に一つ彫り初めました。

今日のやうに脂土などで原型をこしらへるのでなく、行きなり木をつかまへて彫るのです。何んでも十日といふ日限りもあることとで、一つ寫して置けば、後はまた出來るからと先づ粗打ちに掛り、四五日經つて概略狆が出來、これから仕上げに掛らうといふ所まで漕ぎつけ、モデルの本物の狆と引き比べて眺めて見ると、どうやら狆に似てゐるやうである。先づ此れならと思つて、なほ、きまり所など仔細に觀てゐる所へ、かねて懇意の合田義和氏が計らず來訪されました。此の人は此前話した漢法の名醫で私の難病を癒してくれた人であります。

「どうですね。お身體は悉皆よくなりましたか。」と合田氏は云ふ。

「お蔭様で、此の通り仕事も出來るやうになりました。全く此れは貴方のお丹精の賜です。」

「それは何より結構……狆を拵へてお出でゝすね。狆とはまた珍らしいものですね。」

「實は皇居御造營の御仕事を命ぜられましたので、狆の製作を仰せつかつたやうな譯ですが、此れは狆と見えませうかね。物が物なので、此のモデルにする狆を探すのに大骨折をして、初めた所ですが、何んなものでせう。狆と見えますかね。」

私は狆の見本を得ることに困難した話などしながら、出來掛

つた彫刻を合田氏に見せてゐる。合田氏は默つて私の製作を眺めてゐました。

「成程、彫刻は中々よく出來てゐるやうに素人の私にも思はれますが……あなたが狆を彫刻なさると、も些つと早く知つたら、丁度好いことがあつたのに洵に殘念なことをした。」

と、さも殘念さうに合田氏は云つてゐるので、私はそれは何ういふことですと問ひました。

好き狆のモデルを得たはなし

合田氏のはなしを聞けば、成程耳寄りな話である。

合田氏は、私の今使つてゐるモデルの狆を口ではそれと悪るくは云はないが、此の狆よりも數等上手の狆がゐることを話された。それはツイ先月の話のことだが、合田氏の知人に、徳川家の御側御用を勤められた戸川と云ふ方があつて、その御隱居が可愛がつた一匹の狆があつた。それは中々の名狆であるのだが、戸川家も世が世で微祿され、御隱居も東京を引上げ、郡部へ引込むに就いて、狆を田舍まで伴れて行くのも大儀故、何處か好い貰手があれば呈げたいものといふので、合田氏へも話しがあつたが、合田氏も狆を飼つて見る氣も無いので話は其切りになつてしまつたのである。今少し早かつたら、注文通りのお手本があつたのに惜しいことをしたといふ話である。

「どうも、此れはあなたが殘念がるよりも私は一層殘念なことに思ひますが、もうその狆は何處かへ呉れてしまたでせうか。」

私が訊ねますと、合田氏は

「さあ、多分、もう何處かへ緣付いたことゝ思ひますが、ひよつとすると、まだ其儘になつて居るかも知れません。一つ聞いて見て上げませう。ツイ此の御近所の御徒町四丁目に戸川の親類が荒物屋をしてゐますが、ひよつとすると、其所へ貰はれて行つてるかも知れません。私が手紙を附けて上げますから、誰かお弟子を使ひに上げて下さい。」

といふことになつた。

戸川さんの親類の荒物屋といふのは、此れもお武士の微祿された方で、荒物渡世をしてどうにかやつて行かれてゐるのだと合田氏の話。何はとまれ、狆が其處にゐてくれゝば好いと、私は國吉を使ひにやつた。

「もし、狆が荒物屋に居なかつたら、行つた先を其家で聞けば分ります。郡部へ伴れて引込んだか、人にやつたか、當りは付きます。其事をよく聞正して見て下さい。」

合田氏はいろ〳〵注意して下さる。

毎度國さんは御苦勞だが、例の中風呂敷を持つて出掛けました。近所のことなり、若い者の足で、間もなく歸つて來た。話を聞くと、狆は荒物屋にはゐないといふこと。

「狆は、もうゐないのかね。」

「えゝ、狆は荒物屋にはゐません。ですが、四谷の親類の方にゐるんださうです。」

「四谷にゐると、本當に。」

「ゐるんださうです。それで荒物屋さんの御主人が、私が附手紙を四谷へ書いてあげると云つて、それを貰つて來ました。此を持つて四谷へ行けば、狆は多分貰へるだらうといふことです。私は直ぐ四谷へ行かうかと思ひましたが、一寸お知らせしてからと思つて歸つて來ました。」

國さんは斯う云ひ乍ら立つた儘でゐる。それがまだ晝前のことで、此れから四谷へ行くは大變、お午餐をたべてからといふので、早晝食をたべて國さんは四谷へと出掛けて行きました。

國さんは午後四時頃に歸つて來た。

見ると、何か嵩張る箱のやうなものを背負つて、額に汗を掻いて大分疲勞れた體である。まだ馬車もなく電車は無論のこと、人力に乘るなど贅澤な生計ではないので、てく／＼四谷から、何か重さうなものを背負はされて戻つた。見ると四角張つたものは狆の箱で、箱ぐるみ貰つて來たといふ譯、箱だつて中々手を盡したもので、きり／＼す籠の大きいやうな鹽梅に前へ竹の管の千木格子が這入つてゐる。箱を座敷へ上げて中を見ると、動物がその格子の内に縮ころんで此方を見て居りました。

その動物を見ると私は驚きました。といふのはその權識が實に異ひます。見てゐると氣味が惡い位です。その目が素晴しく大きく、鼻と額と附着いて頬の毛が房さり達筆に垂れ、ドロンとした目をして此方らを見てゐる所を此方から見ると、何か一種の怪物のやうな氣もしてどうも變なものだと思ひました。

「どうも此れは妙だね。」

「どうも妙なものですね。」

家のものもさう云つて見てゐる。

私は近寄つて箱の蓋を明けましたが、直ぐに飛び出して來やうともしません。寢轉んだ儘で悠々としてゐる處、どうも動物とも云へ甚だ權が高い。

「名は何んといふのかね。」

「種つていふんだつて敎へて與れました。」—

國さんは云つてゐる。

私が「種、種」つて呼んで見ますと、やがて、のつそりと起き出て來ました。出た所をよく視ますと、まるで栗茶屋の狆とは雲泥萬里の相違で、同じ狆とは云ひ乍ら、似ても似つかぬやうな風采です。のそりと疊の上を步るく音がバサリと云ふやうに聞えます。バサ〱と疊の音がするのです。さうして悠々然と四方に人も居らぬと云つた風に構へてゐる處は鷹揚と云つて好いか、寛大と云つて好いか、兎に角その迫らぬ態度は栗茶屋の狆のチョコマカと愛嬌あつて活潑なのとは比べもつかぬ。もつとも、此の戸川さんから來た狆は大分年老つてゐるので血氣旺んといふのでないから、その故もあるか、私達が狆らしい狆だと思ふ種類とは掛け離れたものに見えます。併し、何方が好いとも分りません。何方が好いとも分らないが、戸川さんから來た方は指と爪が長くて、指と指との間に毛が一杯生へてゐる。それが步くとバサリといふ。尻尾の毛は大鳥毛のやうで高く卷き上つて房さりして居り、股の所にも件毛が長い。胴は短かくつまつて四足細く指が長く步く時はしな〱する。頭が割方大きく見ゆる。さうして眼は今申す通り度はづれ大きく、どんよりして涙を含んでゐるやうに見えます。それに大きさも栗茶屋の方のよりは一廻り大きく、全體の毛がボツサリして、如何にも大々として立派に見ゆる。兩つを比べて見ると人間ならば階級の違ふ人が並んで立つてるやう、その相違は不思議な位でありました。

私は今日迄、栗茶屋の狆を本當に狆らしい狆だと信じてゐたのですが、今度の「種」が來て、その權識の高いのを見て、狆といふものは斯ういふものか知らんと思つた。それで二三日は坐敷に放つて置いていろ〱その動作を眺めてゐましたが、一寸手を附ける譯に行かない。彫つて見やうといふ氣になれないのです。それに一方、栗茶屋の方は既に荒ぼりが濟んでゐる所でありますから、今、何方へ取り掛つて好いか氣迷ひがして何方にも取掛ることが出來ないのでありました。

併し、また二三日すると、目に馴染んで來て、今度來た方の狆が、どうも本當の狆といふものだといふことが分りました。同時に栗茶屋の方のは、狆と思つてゐたが、何んだか洋犬のやうに見えて來て、どうも貧弱で、下品で、一緒に並んでゐても「種」の方へは寄りつけないやうに見えて來ました。私も只愛玩的に狆を飼つたのでなく、名作な仕事の見本となる生きたモデルでありますから、眞劍な態度でいろ〱と骨格態度を一々仔細に觀察するのでありますから、物を公平に觀ることが出來

るのですが、少しも贔負目を附けず、「種」の方が全く良種であることに得心が行きました。

もつとも、狆を見ることに巧者な人に話しても、兩方の能姿や動作を二三點云へば直ぐに「種」の方がずつと上手なのだと云ひもしますし、見れば一見して「種」の方を好いと云ふのでも證據立てられました。

此も後に分つたことですが、疊ざわりのバサツといふ感じのするのは狆として良種であるのださうです。斯んな鹽梅で、一度に二頭の狆を坐敷に置いたやうなことで對比的に自然研究したやうなわけで、隨分狆ではをかしい程に細い處を見たものでありました

さて、「種」をモデルにして愈々彫ることになりました。

葉茶屋の方のは一つ出來ましたので、厚く禮を云つて還へしました。先方も、お役に立つて滿足とよろこびました。

「種」を手本に毎日鑿の數が進んで行くにつけて、如何にも御尤と感じて、彫る上にも氣乘りがして來ました。それで、つくづく私は思ふことには、物の形を表はすものは、世間を廣く見てモデルも撰ばなければならない。疎そかにしないまでも、狭くては、充分でないものをも結構と心得て飛んだ手落ちをするやうなことを生ずる。此は心得ふべきことだと感じたことであつた。

四頭の狆を製作したはなし

愈々狆の製作が出來ました。

先のと、それから「種」のモデルの方が三つです。一つは起つて前肢を擧げてゐる。(此は葉茶屋の方のです)一つは寢轉んでゐる。一つは驅けて來て鞠に戯れてゐる。今一つは四肢で起つてゐる所であつた。此の四つの製作は孰れも鑄物の原型になるのであるから、材料を特に木彫として勘考することもいらぬので、私は檜で彫ることにしました。云ふ迄もなく、檜の材は中々鑿や小刀を撰むもので、やはらかな癖に彫りにくいものですが、材としては古來から無上のものとなつてゐる。荒けづりから仕上げに掛り、悉皆出來上つて、彫工會へ納めました。

木型が出來ましたので、大島如雲氏はそれを原型として鑄金にしましたが、中々能く出來て、原型を更に仕生かす程の腕で滞り無く皇居御造營事務局の方へ納まりました。私は、即ち鑄物の原型を作つたといふにとゞまるわけであつた。

其所で、毎度除り物の値を露はに云ふやうでをかしいが、是れも參考となるべきことですから、云つて置かねばなりませんが、私の原型を作つた手間が何うかと云ひますと、狆の丸彫四つで百圓であつた。一つが二十五圓……今日の人が聞くと不思議と思ふ位でありませう。其當時、檜の最良の木地が一つで一圓五十錢二圓もしたか。材料などのことは何とも思はない時分、今日で見れば木の値にも及ばぬ位のものでありませう。併し技術家としてはさういふ問題は別のことで、製作に掛つては只一向專念で、出來る丈け腕一杯、やれる丈け突き詰めて行くことで、隨分私も此の時は苦心をしました。彫工會の方でも餘り氣の毒だと云ふので後で五十圓御禮が參りました。

四頭の狆の製作は、彫工會の幹部の人達、また賞技家の方の人々の見る所となりました。私が、自分の口から云ふのはをかしいけれども、此は大變に評判がよかつた。といふのは、第一見た所が如何にも派手で、鮮かで、而かも圖の樣が變つて珍らしい。非常に綺麗なものであるから見榮がある。材が檜であるから水々しく浮き立つてゐる。此を見て幹部の人々もよろこんだことでありましたが、併し、今日から見れば、まだ〱凡てが幼稚なもので、今であつたら彫り直したい位に感じますが、當時は斯うした作風は先づ嶄新であつて、動物を取扱ふことは此迄もあるとしても、その行き方が從來の行き方と違つて、實物寫生を基として何處までも眞を追窮したやり方でありますから、本當のものを目の前に出されたやうな氣が觀る人にも感じられて「此れはどうも」と云つて感服されました。

私は、今も申した如く、人より早くから寫生といふことを心掛け、西洋の摺物のやうなものから、物の形を倣つたものは何んでも參考材料とし、一方にはまた自然に面して自然を其儘寫して行くことを長い間研究したことでありますが、……併し、此れもまだ解剖的に內部を根から掘り返して窮理的に觀極めて行つたといふ所までは行かず、外觀から物の形を見て研究した程度に止まることではありますけれども、何しろ、寫生といふ一生面は先づ兎に角作の上に現はれて、從來とは、別の手法を取つて居るものでありますから、非常に賞讚を博し、私も普通の注文品と異り、提きあたりの御たのみで、名譽の仕事でありますから、面目を施したやうな譯でありました。

凡て此の製作が完了致したのが、其年の秋。丁度第二回の競技會の開催される間際に打つかりました。確か、二十一年の十一月であつたと覺えます。さういふ時期であつたから彫工會の幹部の方々達が、右の製作を見られて滿足に考へて居られる時

でありますから、折角、此迄の出來であるから、折も好し、此を一つ競技會へ出すことにしたら好からうといふことになりました。

けれども、他の事とは違ひ、まだ御造營の方へ納めない前に私に陳列して此の製作を公衆へ發表するといふことは、どうも僭越なことではないかと氣遣ふ向きもありましたが、その心配は山高さんにお聞きすれば直ぐ分ることだと幹部の方で是非出したい方の人の考へで御造營事務局長の職に在られた山高信離氏の池の端七軒町の住家へ人を遣つて氏の意向を聞かせますと「それは差閊へないだらう。」との事であつたので、とう／＼競技會へ製作が持ち出されることになつたのでした。

斯ういふことは皆他のしたことで、私は、出された方が好いものか、惡いものか、最早製作は濟んで彫工會へ渡したもので自分の自由にはならない。兎に角同會の幹部達が出せといふので陳列することになりました。

會場の中でも大きな四方硝子の箱の扉をはづして眞中へ敷物を敷いて四ツの狆を陳列べました。數が四つといふので、見榮えがする。見物が大勢それに從つて中々評判がよろしかつた。

此の競技會の審査員は學藝員の人々また、實技家の主立つた人々で、私も其一人でありました。で、愈々審査することになると、審査員は困りました。此の作品は高村が競技的に自分の作を出したのでなく、彫工會が出品したのであつて、御造營の方からの命令で出來た品であるから、それを審査するといふは如何なものかといふのが頭痛になつたのであります。で、問題になると面倒臭いから、此れ丈けは避けた方が好からうといふ審査員達の考へもあつたことゝ見える。併し高村の作として出品されてゐるものを、審査しないといふことも、競技會の性質として工合が惡るい。それで審査員の方では一案を考へて、此は我々は傍觀態度で、此の作の始末は幹部の方へ一任しやう。さうすれば、理事、會長の考へで處置されるであらうといふので、幹部へ持ち込んだものですから、幹部の山高信離、松尾儀助、岸光景、山本五郎、鹽田眞、大森惟中諸氏の手に掛ることになりました。

幹部の方々は其事を協議されたことですが、何ういふ風になつたか、私は自分のことでもあり、また審査員の一人ではあるが、まだ年も若しするので、何事も控目にしてゐるのですから、只、傍觀してゐましたが、自分考へでは、成可くならば審査して呉れない方がよろしいと思つて居りました。審査の終了

の時は、審査員總てが更に寄り合つて、今一度精選して萬一の疎忽の無いやうに審査會議がありますが、其際、萬事濟んで行つた後で、一つ事項が殘つて居る。
「高村の此の作品をどうするか。」
といふ問題。
「何うすると云つて、既に出品した以上、競技會だから審査せんといふ譯には行くまい。それに故人でもあることなら兎に角、現存でまだ年も若い人であり、而かもこの作は丹誠の籠つたものだ。審査せんわけに行かん。」
斯く幹部の意見が一致した。
其所で審査することになりました。

すると、まだ審査の結果が發表にならない前日に金田氏に逢ひますと、氏の云はれるには、審査の結果、君の狆は、金賞になるといふことを聞出して來たが、どうもお目出度いとの話。どうも此はお目出度いかも知れませんが、私は困りました。その困るといふのは一寸理由もあつたことであります。話が大變管々しくなつて煩はしいが、委曲話す丈けは話しませんと自分の思惑が通りませんから話して置きますが、一寸話しが少し戻つて、私の狆の作が陳列されて幾日目かに會場へ後藤貞行氏といふ馬専門の彫刻家が見物に來ました。此人は私の弟子ではないが、物を彫ることは私が教へたんで親しい間柄。私の作の前に立つて、つく〴〵狆を見てゐる。
「後藤さん。斯んなものが出來たんだが、どう見えますか。狆に見えますかね。」
私が批評を聞くと、
「まことに結構です。併し、只今、お作を拜見して、此の彫刻の結構なことを思ふにつけて、いと殘念に思ふことは、此の狆をお彫りになる前に其事を私が知つてゐたらよかつたが殘念なことをしたと思ひますよ。實を云ひますと、此のお作はどういふ狆をモデルになすつたか。中々狆としては名狆の方ではあるが、どうも大分年を老つてゐるやうに見受けます。」
斯ういふ答。私は後藤氏の言葉を聞いてゐる中に、成程、さすが馬専門の人で、動物を平生からいぢりつけてゐる丈けに、中々詳しい。此の狆を老年と見た目は高いと思ひ乍ら、默つて聞いてゐますと、氏は言葉を次ぎ、
「それで、殘念なことをしたと思ひますのは、此のモデルの狆よりも、もつと上手で、恐らく日本一の名狆と思はれる良い狆が私のお知り合ひのお方が持つて居られます。その狆をあなたに參考としてお見せしたら、必ず此の作以上のものがお出來だ

つたらうと、只今、感じ乍ら拜見してゐる處でありますが、惜しいことをしました。」

「……御尤のお言葉で……その狆は誰方がお持ちなんですか。」

「それは侍從局の米田さんの狆です。何でも餘程高價でお求めになつたとかで、東京にも此れ以上のものは先づなからうといふ評判で、年齡もまだ若し、それは實に素晴しいものですよ。」

といふやうな譯。

其所で、私も、良きモデルを得ることに苦心した前述の話などしまして、更に此の次狆を彫る時には、右の米田さんの狆を是非見せて頂きませうなど話しましたことであつたが、それにつけても考へられることは、モデルを選むといふことは、世間を廣く見た上にも廣く、深く探し求めた上にも深く探究しないで、好い加減の所で、もう、此れで好いと自分一人決めにするやうなことがあつては意外な缺陷を製作の後に殘す悔がある。此は注意の上にも注意すべきことだと深く感じたことでありました。

斯ういふ事などもあつて、私は、どうも、今度の製作には、まだ充分といふ確信が持てない。それに自分も審査員に加はつてゐるにも拘はらず、審査の結果は金賞になるとの事。金賞と云へば此會では上の無い賞で、また此を貰ふ人は外に無いといふ事でもあり、どうも、充分の確信のない作に、金賞とあるのは少し過賞過ぎるやうに感じられて心苦しくなりましたから、此は止にしてお貰ひしたいと、其夜、岸、鹽田氏其他の幹部學藝員のお集りの處で、一寸薄々承はりますと、私の作は金賞になるとか云ふことでありますが、まだ充分といふ所迄行つて居るものでありませんから、此賞は此の次ぎ更に努力しました時迄お預けすることにお願ひして、今回は無賞に願ひたいが、折角の御厚志でありますから、せめて銀賞を頂くことになりましたら、私も至極滿足に思ひます」云々と自分の心持ちを正直に申述べた上、後藤氏との談話の結果、モデルが充分でなかつたこと、米田さんに充分なものがあることが判り、此次それを參考として更に力作をしたひ下心であることなどお話しました。

幹部の人々も、至極もつともの話で、心持はよく分つたが、それは君のモデルの穿鑿が足りなかつたと云へば云へもしやうが、彫刻といふ美術上の伎倆の上には別に大した關係のないことで、選んだモデルをモデルとしてやつた結果が優秀と認める以上、さういふ遠慮は君の謙遜した心持としておもしろいと思ふけれども、我々の考へは一に製作其物の出來際如何を批評鑑

賞するのが任務で、當然君の作が金賞に値する上審査した結果であるから、此は我々の意見に一任されたがよろしからうとのお言葉であつた。成程、承はつて見れば此れもまた一理あり、先輩はまた先輩の見識もあることで、まだ私も後進のことなり、今度は何も云はずお任かせしやうと思ひまして其儘にしたことで、遂に金賞となりましたが、今日から考へても、隨分努力の作とは申し乍ら、まだ考へが足らず、誰方にもやれさうな仕事で、今見れば銅賞にも及ばぬものかとも思はれます。

併し、大嶋如雲氏の手に掛つて鑄物にして、また見直したことで、其年の中に鑄造も出來して御造營事務局へ彫工會から納めました。

其後に於ても、今日に至る迄、宮城は度々拜觀も仰せつかりましたが、昔婦人の間といふのは拜觀人にはお許しにならぬ御場所でもありますから、何ういふ工合に飾られてあるか、更にそれは知りません。

それから、右の木型の原型は彫工會の事務所に保存してありますが、其中四肢で立つてゐる分(此の分一番出來がよかつたと思ふ)が、何處かへ貸した際紛失してしまつて、今は三つ丈け殘つて居ります。其頃、私が狆を作つた爲、それが珍らしかつたか、一時諸方に狆を拵へたのを見受けたことがありました。

今度の製作に就いては、隨分幹部の方々にもお世話を掛けたやうなわけで、別して山高氏には御心配をかけました。同氏は先申す通り、博識で、美術界の爲に大に盡された方で、池の端に宏壯な邸宅を構へて居られました。今日でもその建築は池の端に高く聳立つて居ります。何んでも、かね勾配をもう一層高くした程の高い屋根の家でありますから、山高さんのことを「屋根高」さんなど人は云つた位でありました。

此から引續いて鷄の話をする順序となります。

鷄の製作を引受けたはなし

狆の製作が終つてから暫らくして不圖鷄を彫ることになりました。

其頃京橋南鍋町に若井兼三郎俗に近兼といふ道具商があつた。此の人は同業仲間でも好い顔で、高等品を取扱ひ、道具商とは云ひ乍ら、一種の見識を備へた人であつた。また其頃、築地に起立工商會社といふ美術貿易の商會があつて、此は政府の補助を受け中々旺んにやつて居つた。社長は松尾儀助氏で、右

の若井兼三郎氏は重役と云つた所で、まあ松尾氏の番頭さんのやうな格でありました。此の若井氏から私が鷄の彫刻を依囑れたのであつた。

松尾氏も若井氏も共に美術協會の役員であつたので、或日の役員會に一同が集まつてゐました。旭玉山氏が來てゐられたが、私は玉山氏から此の若井氏を紹介された。同じ會員の人であり乍ら、其時迄双方共に一面識も無つたのです。玉山氏が特に私を若井氏に引合はせたことには理由があつたのでした。

是より先、若井氏は或る目論見の爲に各種に亘つた作品を各名手の人々に依囑してゐたのであつたが、蒔繪、彫金、牙彫のやうた製作は凡て注文濟となり、作品も出來上つた物もあつたが、唯、一つ、木彫丈けが殘つてゐた。それで木彫の方を誰に賴まうかといふことを其席で旭玉山氏に相談をされたのであつた。

玉山氏は木彫の方なら高村光雲氏にお賴みすればよろしからうと答へましたが、若井氏が少しも高村のことを知らないで、何處に其人は居るかとの質問に、何處に居るかと云つて其人は協會員で、現に今日も役員會で來て居られるといふと、では早速逢ひたいといふので、玉山氏が若井氏を私に紹介したやうなわけです。(此のことは後で知つたことですが。)

若井氏は私に逢ふと、一つ木彫をお賴みしたいのですが、詳しいことは拙宅でお話したいと思ひますから、明晩お出で下さるわけに行くまいかとの事。

それで私は南鍋町の若井氏宅へ出掛けて行きました。

道具商と云つても若井氏の宅には商品などは店に飾つてはなく、立派なしもた屋である。若井さんは頭の禿げた年輩な人で、江戸ッ兒のちやき／＼といふ柄。註文の要點を訊くと、成程、一寸、立話位では埒の明かない話……それは先づ次のやうなわけ……若井氏は佛蘭西に美術店を出してゐる。巴里でも可也評判が好い。所で、來年の春には巴里に博覽會(一八八九年萬國博覽會)が開かれるので、同所に店のある關係上、出品をしないわけに行かない。又出品する以上は普通の物では平日の店に障るので、中々苦しい立場である。で、今度の事は、一時の商賣的ではなく、只々店を保護する爲である。それで、利益があれば作家へも上ますし、又、賞は、製作者の名前で貰ふことにします。自分の利益は平日の店にあるので……云々。就ては、當代の名匠にいろ／＼な製作を賴んで、既に大分目鼻が附

いたのであるが、唯一つ木彫の製作をする人に困つて今日迄延びてゐる。で、其製作を私に頼むといふことであつた。

さうして同氏が更に附加へていふには、何んでも今度の出品は、日本の美術を代表するやうな傑作揃ひを出品したい。世界の美術の本場のやうな佛國のことで觀る人の目も高いから、若し、拙劣ないものを出しては萬一自分の店の名に係るので、算盤づくでなく傑いものばかりを選り抜くつもりで、一つヤンヤと云はせる目論見であるのだが、それには一趣向あるので、自分の案としていろいろ考へた結果、日本の鳥を主題にして諸家に製作を頼んだのである。此れは、日本の美術を代表しやうと思つても此れと云つて題材としておもしろいものが無いが、只、日本の鳥丈けは出品になりさうなので、さう思ひついたわけである。で、蒔繪、燒物、鑄物、象牙、……何んでも鳥を題にして製作して貰ひましたが、一つ木彫の方では高村さんあなたが代表して鳥を一つ拵へて頂きたい……といふ注文であつた。

此の話を聞いては、私も迂濶とは手が出せないと思ひました。「是非一つやつて見て下さい」と云はれて「では、やつて見ませう」と輕彈みな返事は出來ない。それに、鳥と云つて何んの鳥を彫るのか。一應、主人の考を聞いて見ると、何んの鳥と自分でも考へてはゐない、それも決めて頂きたいといふ。さうして、此迄注文した分には、鷹、雉子、鶺鴒、鶴、鶏など……もう、それぞれ諸家の手で取掛つたものもあり、また出來掛つてゐる物もあるのだといふ。日本の鳥の中でも製作しておもしろさうなものは、もう夫々手が附けられてゐる。自分の手に掛けてやるとして、扨て、何の鳥をやつたものか。私も聊か當惑しましたが、不圖、思ひ附いて、鳥として西洋人に示しておもしろい題になるものといふ考から矮鷄は何うかと思ひました。矮鷄はちんまりして可愛らしい形……木彫として相當味が出さうに思はれる。それに、もう一つ軍鷄も面白いと思つた。矮鷄の温柔なちんまりした形に對して、軍鷄の勇猛な蹴合打ち半分で、かさかさと荒けづりの仕事を見せると、形の上からも矮鷄の軟らかさに對して剛柔の對比にもなるし、また、仕事の上では粗密とか強弱などの調和も見せられる、此は話して見やうと思ひ、其事を話すと

「それはどうもおもしろい。それは名案だ。一つやつて下さい。」

と若井氏は非常に乗込んで來ました。

さうして、矮鷄のやうなものを木彫にしては隨分骨が折れる

ことであらうが其所を一つ是非やつて頂きたいと呉々も云はれる。

それで、日限りは今年の暮一杯。此れは掛引のない處で、實は來年の四月博覽會が開かれるので、日本からは一月に出る船が積み切りだから、是非とも其迄に間に合はせてくれといふことであつた。

當時の私は相當世にも知られ初めて來てゐましたが、まださう仕事が澤山にあるといふ時ではない。現に其道の若井氏さへまだ私の存在を知らなかつた位ですから、仕事の手は充分開いてゐます。それで、自分に出來る仕事ならば引受ける積りであるから、同氏の懇請に對して、私は、やれる丈けやつて見させうと引受けたのでありました。

歸る時に、若井氏は、此れで材料でも買つて下さい、又、入用があつたら何時でも差上げますと云つて紙包を私に渡しました。私は製作に掛つてから頂きますと云つても、それでは賴んだ主意が立たないからと云つて聞かないので、それを持つて歸りました。家に歸つて見ると、五拾圓包んでありました。其當時のことで、仕事の前に此れ丈けのことをするは其人の氣性にもよりますが、傑作を要求した同氏の心持が察せられますので、私も充分に力を入れやうと思つたことであつた。

矮鷄のモデルを探したはなし

以前狆のモデルで苦勞した經驗がありますから、今度はチヤボのモデルは好い上にも好いのを選みたいといふのが私の最初の考であつた。

併し、矮鷄は狆と違つて其穿鑿も樂であらうと思つた……兎に角、早速、狆のモデルの事で注意を與へてくれた彼の後藤貞行氏を訪ねて、今度の製作のことを話し、チヤボの良いのがなからうかと相談しました。

動物には何かと關係のある人だから、早速、或人を私に紹介してくれた。其人は、元農商務省の役人をしてゐた人で、畜産事業をやつてゐたが、目下は役をやめ家禽飼養をやつてゐる、本郷駒込千駄木林町の植木氏といふ人であつた。

私は直ぐ其人を訪問しました。丁度、現在の私の宅と同町内で、其頃長壽齋といふ打物の名人があつた、その横丁を曲つて眞直突當つた家で、いろ／＼家禽が飼つてあつた。

植木氏に逢つて、是々と話をすると、同氏は暫く考へて、矮鷄の見本として上乘のものがある、といふ事。それは何處に

ありますかと訊くと、自分の宅にある。が、併し、それは、世間でおもちやにして飼つてゐる矮鶏とは異つて、本當の矮鶏で、自分が六代生れ更らせて、チヤボの本種を作り出さうと苦心して拵へ上げたもので、此れ以上本筋のチヤボは無い。世間で一升桝に雄雌這入るのが好いとか、足が短かくて羽を曳くのが好いとかいふのは、是は玩具で、云はゞ不具同様、斯んなのは矮鶏であつて矮鶏ではない。今、それをお目に掛けやうと云つて、主人は書生に命じて其雌雄のチヤボを私の前へ持つて來させました。

見ると、此れが矮鶏かと思ふやうな鶏である。

しかし、立派なことは中々立派であつた。脚が長く、尾は上へ背負つて居る。羽毛は切れ上つて非常に活潑で、鶏としては好い鶏とは思へますが、どうも、從來、私達が目に馴染んでゐる矮鶏とは形が餘り大まかで、矮鶏といふ感じがない。けれど、以前、葉茶屋の狆と、戸川さんの狆との對照のこともあるから、家禽專門家の言葉を信用せぬわけには行きません。

それに植木氏は斯う云つて說明を加へられてゐる。

「お話を聞くと、佛蘭西の博覽會へお出しになる木彫の見本になさるといふのだと、日本の在來のおもちやのチヤボでは困りませう。あれは型にはめていぢめて作つたもので鉢植の植木と同様、さういふ不具物を見本にしたのでは佛蘭西の家禽通が承知をしまい。矢張り、モデルとするとなると、此の私の丹誠して仕上げたものが適當で、此れなら萬非難の打たれやうはあるまい。」

との事。至極もつともな話だ。では、何か此を拜借することにお願ひしたいと頼みますと、植木氏は一風變つた人で、お役に立てばお持ちなさい。あなたに差上げませう。私も道樂に六代も生れ變らせて作つたものが、さういふことに役に立てば甚だ滿足ですと云つて、早速書生さんに苞を拵へさせ。一匹づゝ入れて、兩方に繩を附けて、提げて持てるやうにしてくれました。鶏は苞から頸丈け出して、びつくりした顔をして居る。私は素直に植木氏の好意を謝し頂戴して歸りました。

狹いけれども宅には庭がありますから、右の矮鶏を、撫世籠を買つて來て、庭へ出して、半月ばかり飼つて置きました。

さうすると、色々な人が來て庭にゐる植木さんから貰つて來た鶏を見て、

「あれは何んの鳥ですか。」

といふ鹽梅。

「矮鷄ですよ。」

と云つても、どうも腑に落ちないやうな顔をして、

「へゝえ、矮鷄ですか。……」と云つて、チヤボにしちや變だなあと云ひたさうである。私は、其説明をする爲に楠木さんの受賣りをするのだが、どうも誰も承知しません。中にはチヤボ通などがあつて、

「どうも、チヤボとは受取れませんね。元來、チヤボは占城國とかから渡來したもので舶來種だが、此の雞は舶來なんですかね。鷄の中でも極端めて小さいもので、脛の高さが僅か一二寸、それが低い程、また體が小い程好いものとなつてゐます。小さいのは南京チヤボとか地擦とか云つて脚も嘴も眼も黄色です。此れはチヤボの化けたやうなものでせう。」

など講釋するものもあつて、十中の十まで右の鷄を本當のチヤボと云ひません。私も半月程もいろ〳〵鷄の批評を聞き乍ら、その姿や動作を見てゐたことですが、右のやうなわけで少し不安心になりました。

それで、今度は普通のチヤボの、つまり背の低い方のを探したいと思ひ、御成街道の錺屋に好いのが居るといふ話を聞いたので、また出掛けて行きました。

御成街道の何の邊であつたか今日能く記憶しませんが、訪ねて行つて其錺屋の主人にチヤボを見せて貰ひました。が、此は、今の南京チヤボとか地擦りとかいふ方のものでせう、小ぢんまりした可愛らしい如何にも矮鷄らしいチヤボですから、又、事情を話して借りたい旨を申込んだ。すると、此人は工人だけに分りが早い。御同様に仕事のことでは苦勞します。是でよければ持つて行つて御覧なさいと云つて快よく貸してくれました。

其所で此の方の鷄も庭に飼つて、前のと兩方、別々の掩せ籠に入れて置いた。

さうしますと、來る人毎に錺屋の方のチヤボを見て、此れこそチヤボだと云つて賛成しますが、楠木さんの方のは依然として反對します。私も何方をどうと判斷に苦んでゐる處へ、例の後藤さんが見えた。

で、早速、先日の禮を云ひ、楠木さんから貰つて來た鷄を見せますと、何んだか不得心らしい顔をしてゐる。實は此れ〳〵と例の受賣りをやつて見ましても、後藤氏は腑に落ちた樣子がない。で、錺屋の方を見せると、

「此れは好い、此れは何う見てもチヤボです。」と、首肯いてゐるので私も案外、猶の時とは違つて、立派に見える方が落第と

ひふことに先づなつた。

つまり、私は、十目の見る所、世間に通用する矮鶏をチャボのモデルとする方に考が決まりましたのです。毎度此のモデル問題では大眞面目でありながら滑稽に近い話などが湧いて、家のものなども大笑ひをしたことが度々ありました。

矮鶏の製作に取掛つたこと

彼是批評を聞いたり、姿形を研究したりしてゐる間に一月餘りも經つてしまひましたので、愈々取り掛ることにしました。材は櫻です。其時分はまだ櫻の材で上等のものが澤山あつたが現今では甚だ稀です。南部の方から出るのが良材であります。先づ、雄鶏の方から初めました。(木彫の順序は鑿打で形を拵へ、鑿と小刀で荒彫り、それから小作り、仕上げとなる)無駄をしてゐたわけではないが、前述のやうな次第で思はず時日を費したので、隨分精出してやりましたけれども、其年の十二月の末になつて漸つと小作りが出來た位でした。(仕事の順序から云ふと、此小作りといふのは荒彫りと仕上げの間となる)十二月の末と云へば若井氏と約束の日限でありますから、當然ならば全部出來上つてゐなければならない所であるが、器械的の仕事と違つて斯ういふ側の仕事は、さう日限通りに參るわけには行かない。それも自分で怠惰てゐれば兎に角、毎日精を出して一生懸命やつて見て、漸つと此所まで來たのでありますから、どうも仕方がありません。

と云つて日限が來たのですから、其儘、打ちやつて置くわけには行かない。それに若井氏の心持も分つて私も其厚志に感じてやつてゐる仕事であるから、孰れにしろ、御返事をしなければならないが、返事をするとなると、申譯をするより外ない。譯を話して日限に間に合はなかつたことを云つて、以前受取つた手附けの金をお返しするより外はないのでありますから、私は考を決め、二十一年の十二月の大晦日の晩、手附けの金を懐にし(此の金は封を切つた儘手箪笥の抽斗に入れて手を附けずに置きました。萬一間に合ひ兼ねた時、此が無くなつてゐては申譯が立たないから)荒彫りの儘のチャボを風呂敷に包み、てく／＼南鍋町の若井氏の宅を訪ねました。

「其後は何うしました。時に、御願ひしてあつた鶏は出來ましたか。」

といふやうなことになりました。

私は、其後の製作の經過を物語り、とう／＼日限に遅れた旨をお詫びし、手附けの金をお返して、一時、前の契約を解いて

頂き……彫かけでは置きません、何れ仕上ます。出來上れば是非御覽に入れます、其時御意に入つたら御取置き下さい。兎に角、御約束を無にしたのは私が悪いのですと若井氏へ申納れました。

若井氏は私の申納れを大分不機嫌な顏をして聞いて居りましたが、其話はそれとして、何より先づその荒彫りを見せて頂かうと云ひますから、私は風呂敷を解きました。

すると、中から彫刻の矮鷄が出て來たので、若井氏はそれを見てゐましたが、急に機嫌が直つたやうな様子になつた。

「どうも、此れはおもしろい。此はよく出來ました。」

さう云つて感心したやうな顏をして居る。そして、手に取つて打ち返しなどして視た後で、

「高村さん、あなたのお話はよく分りました。ですが、私はお約束を解きませんよ。博覧會の日限は一月の船が積み切りで、もはや間に合ひません。併し、それは、それでよろしうございます。今後、あなたが何時此れをお仕上げになるか分らんが、此の矮鷄は出來次第私が頂戴することに願ひます。それから、此金は、木の代といふ積りで差上げて置いたのですから、私へお返しになることはいけません。それに今夜は大晦日ですよ。お入用のことがあつたら、後をお持ちになつて下さい。差上ませう。」といふやうな譯となつて、若井氏は少しも私の日限に遅れたことを咎め立てをせず、製作を見て、何所か氣に入つたものと見え、私に對して厚意をもつていろ／＼云ふてくれました。

是は思ふに、若井氏が荒彫りを見て、此れならと思つたよりも、同氏の氣性が私の氣持をよく理解しておもしろいと思つたことが手傳つたのでありませう。兎に角、私には好い氣持な人だといふ感を與へてくれました。で、私は其厚意を謝し、此の矮鷄の製作は出來得る丈け早く仕上て若井さんにお渡しゝやうと云ふ考へで、其の約束をして、私は持つて參つたものた、また元通り持つて歸りました。

大晦日のことで、私も隨分入用の多い時、それを耐へて返濟しに行つたのですが、話が一層進んで歸つて來たのですから、其金を諸拂に使ひ、都合がよかつたことでありました。

明けて明治二十二年、一月二月何事も無く鷄の仕上げを續けて居りました。

矮鷄の作が計らず展覧會に出品されたいきさつ

それから、三月一杯掛つて、四月早々仕上げを終る……其前

後にまた一つお話しをして置くことが出て來る……」

美術協會の展覽會は、毎年四月に開かれることになつてゐる。丁度私の製作を終らうといふ間際にそれが打附かつたのです。

協會の方では開會の準備の爲にそれ〴〵技術家達へ出品の勸誘などをしてゐた時であつた。

或日、役員達の集つた時に、幹部の方の一人が私に向ひ、高村さん、今年は君は何をお出しになります、と尋ねましたので、私は、今年は生憎何にも出すことが出來ませんと答へました。

すると、其人は意外なやうな顏をして、私を覗て、

何も出せないとは何うしたことです。怠けてはいけないね、君のやうな若い會員が出品しないなんて困りますね。是非何か出すやうにして下さい、といふのであつた。

其人の言葉は何んでもないのであつたでせうが、不圖、今云つた言葉の中に、「怠けてはいけない。」といふ一語があつたので、私の癇に障りました。

怠ける所の話か。自分は此の約一年間、一羽の鷄を彫る爲に散々苦心し、まだそれも全部出來上つたといふ所迄も行つてゐない。それ程、自分は仕事の上に丹誠してゐるものをつかまへて、怠けてはいかんとは少し人を見そこなつた云ひ分ではないかと私は思ひました。

まだ年も若し、蟲の居どころでも惡るかつたか、何んだか心外なやうな氣がしましたから、私は斯う答へたのでした。

「私の出品しませんのは、怠けてゐて作が出來なかつたといふのではありません。年に一度の展覽會のことですから、出したいのは山々ですが、出す作がありませんのです。なまけてもゐないに出す作がないと云ふと、矢張りなまけてゐたとお思ひになるかも知れませんが、私は據所ないことで、人から頼まれたものをやつて居るのです。」

といふ話から、行掛り上、若井兼三郎氏の依囑によつて矮鷄を彫つてゐて既に二年越しに亘つてゐることを私は話し、怠けてゐないことの證據を擧げました。

其席には山本氏、岸氏など幹部の人々が居られましたが、右の話を聞くと、

「それは、どうも、さういふ仕事をやつて居られたのですか。君が矮鷄を拵へたと聞くと此れは何うも拜見しないわけには行かん。一つその新作を見せて頂かう。」

といふことになりました。

私も、證據を擧げて申開いた以上、證據物件を望まれて見せないわけに行きませんから……また、私としても此等の幹部の識者の批判を受けることは望ましくないことでありませんから、まだ脚の方のつなぎを切つたりしない九分通り出來てゐる矮鶏の作を次の日の集りの席へ持つて行きました。

私が人々の前で、風呂敷の中から矮鶏を出して、机の上へ飾つて見せました。

「此れは面白い。」

「此奴は素晴らしい。」

などいふ聲が人々の口から起りました。

此の席上には會頭も居られましたが、

「此れはどうも傑作だ。」

と云つて乘り出して見て居られました。

「成程、斯んな大仕事を君は默つてやつてゐたのですか。それを怠けてゐたなどゝ假りにも云つたのは云つた人の失言だね。」

など笑つて云つてゐた人もあつた。

兎に角、私の製作は此の席上の人凡てが賞讃してゐるやうに私には見えました。

私は、作の上に就いての非難を聞きたいつもりであつたのに、皆から只ほめられて少し氣拔けがしたやうな形でありましたが、併し、なまけてゐなかつたといふ言葉の僞でないことが分れば、それで私は好いのでしたから、別にいふこともありませんでした。

すると、幹部の人から、

「どうでせう。折角此れ程に出來たものを今度の展覽會に出品しないで、直ぐに若井の手に渡すのは餘り惜しい。一つ出すやうにしては頂けませんか。」といふ聲が起ると、一同またそれを贊成したものです。

「それは困ります。」

私はさう答へるより外ありませんでした。只、さう云つた丈けでは承知されないから、若井氏と私との間に此の作をした事情を掻い摘んで話して、斯んな譯ですから、とても出品するわけに行かない旨を述べました。

「若井の方へは會から話をします。此は是非出すことにして下さい。」

斯う幹部の方は云つて居る。

私は、此の作を終つて若井氏の手元に屆けさへすれば私の役目は濟むことで、後は出すとも出さないとも若井氏の隨意であることを述べ、私一己の考としては、どうしても、若井氏に對

して出品出來ないことを云ひ張りました。

これは、注文者が若し素人の數寄者とでもいふのであれば、或はさうすることも時宜に依てはかまはぬことでもあらうが、若井氏は商賣人である。商賣用の爲に此作を特に私に依囑したものとすれば、注文主に斷り無しで此を公衆の前に發表することはどんなに其人の損害となることかも分らぬ。此事をも私は附加へて出品の出來ない理由を云つたことであつた。

それでも幹部は承知せず、若井氏へ人を遣つたが、丁度若井氏は上方へ旅行中で、旅行先の宿所へまで手紙を出して問合せたが、商用で轉々してゐたものか何んの返事もありませんでした。

それで私の作を出す出さない件は行き惱んだなりになつて居り、私は殘つた仕事を續け脚の方を仕上げてゐました。

其中開會の日は來てしまつて、常例の通り何時何日には　聖上の行幸があるといふ日取まで決りました。

すると、或日、幹事から私を呼びに來ました。

出て見ると、幹部の人のいふには、

「高村さん、あなたも御承知の通り、愈々明後日は　聖上の行幸といふことになりました。就ては、本會の光榮として、特に天覽に供するものが無くてはならないのですが、それに就いて、いろ／＼協議の結果、濤川惣助氏の無線七寶の花瓶と、あなたの作の矮鷄とを出品中の主要なものとして陳列することに決議しましたから、どうかお作を出すことにして下さい。此れは會場へ陳列するとはいふものゝ天覽に供し奉るのでありますから、公衆の前に發表するで無く只々上御一人の御覽に供する丈けで御還御の後は直ちにお引取りになつて下さい。右は幹部一同から特にあなたにお賴みします。それで若井の方のことは會で責任を負ひますから少しもあなたに御心配はかけません。」

との云ひ渡しであつた。

是には私も大に困りましたが、どうも斯うなつては前說を固守するわけに行かず、兎も角も會へ一任する旨を答へて歸りました。

明日は私は自作を午前の中に會場へ持つて行かねばならないことになつた。

聖上行幸當日のはなし

さて、當日になりました。

午前中に準備に取掛る。

濤川惣助氏の無線七寶の花瓶といふのは、高サ二尺、胴の差

渡し一尺位で金属の胴の上に卵色の無線の七寶が施されたもので、形は壺形をしてゐる。その鮮麗さは目も覺めるばかりです。

そうして、私の矮鷄はその右側に置かれました。

大きな硝子箱の中に古代裂の上に据えた七寶と、白絹の布片の上に置かれた鷄とは丁度格好な對照であつて、自分ながら幹部の人々の趣向の旨いのに感心した位であつた。

いよ／＼　聖上行幸に相成りましたので、幹部の人達は御迎へを致し、御巡覽の間我々平の審査員は休憩室の方へ追ひ出され、靜粛にして居りました。

すると、良々暫らくして、會場の方に當つて、鹽田眞氏が擦足で彼方此方を驅けてゐるのが此方から見えました。その容子は何か俄かに探し求めてゐる風……何うしたのだらうなど他の人も云つて不思議な顔をしてゐる處へ、鹽田氏が驅けて來た。さうして、私の顔を見附けるなり手招きする容子が如何にもあはたゞしい。

私が側に行くと、

「君、あの矮鷄は凡そ幾月位で出來ますか。」

と、いきなり變な質問、幾日で出來ると云つて貴下も此れは御存じのことでせう。二年越し掛つたのです。と、いふと、

「あれは、もう一つ同じのが出來ますまいか。」

と鹽田氏は重ねていふ。私は、何を此の人は此際斯んなことを自分に訊くのかと思つた。

「もう一つ同じものは出來ません。丸一年も精根をからしてやつたものです。もう一度同じやうなものを氣息をくさくしてやる氣はありません。」

「どうも始末が悪るいな。困つたな。……實は君のチヤボが聖上のお目にとまつたのだ。」

と云つたなり、鹽田氏はばた／＼と驅けて行つてしまつた。

やがて、　聖上には御還御に相成りました。

で、私は會場に參り、前約通り、もはや用濟みのこと故、自作を持つて歸るつもりで行くと、會頭初め幹部の人々が立つてゐて、

「一寸、俟つて下さい。」といふ。松尾儀助氏が私に向ひ、

「先程、鹽田氏が一寸お話した事でせうが、あなたのチヤボが聖上のお目に留り、御用品に遊ばさる旨仰せ出されたに就き、當會の光榮此の上もないことゝお受けを致しました。それで此の作は此の松尾が凡ての責任を引受け、若井とあなたとの

間のことは充分な解決を附けますから、何うかそのお積りに願ふ。何しろ、本會無上の光榮で、あなたに取つても名譽此上ないことである。」

といふ話で、まるで煙に捲かれた形。私も若井氏の思惑を心配したが斯うなつては何うすることも出來ませんでした。

さうして、自作は、宮内省御買上げといふ下げ札が附いて閉會期中其儘陳列することにして公衆の展覽に供した。此はお作の方が直ぐお持ち歸りにならうといふのを、本會の光榮を一般奬勵の爲公衆に見せたいからと御願ひしてお許しを受けたのであるといふことでした。而して、此作と、濤川氏七寶の花瓶と並んで金賞となりました。

叡覽後の矮鶏のはなし

さて、展覽會もやがて閉會に近づいた頃、旅先から若井兼三郎氏が歸つて來た。

云ふ迄もなく矮鶏の一件のことは直ぐ同氏の耳に入つた。早速、同氏は會場へやつて來られた。私はどうも直ぐに若井氏に逢ふのが氣が引けますから、はづしてゐると、若井氏は松尾儀助氏に向つて何か話してゐられる。無論、今度の一件であることは分る。其所で、どういふ風に松尾儀助が若井氏を云ひなだめたかといふと、當日同氏が 聖上へ作品を御説明申上げた時のことを其儘話したのである。卽ち 聖上が右のチヤボに御目が留まつて、ほしいと仰せ出された時、右の矮鶏を彫刻した高村光雲と、依賴主なる若井兼三郎といふ者との間の意味合ひをお話しした。卽ち、斯る傑作の出來た事は、作家當人の丹誠によることと素よりなれども、美術工藝のことは他より奬勵援助する厚意があつて、依囑者と作家と兩々相俟なければ、斯く渾然たる作品を得ることは困難でござりますといふ意味を概略陳述して、若井兼三郎の作家に對する好意を御披露に及んだ所、 聖上にも御嘉納あらせられた旨を松尾氏は有りの儘に若井氏に物語つたのであつた。

「さういふ譯でありましたか。それは私も無上の光榮。文句をいふ所ではありません。目出度いことであつた。」と其所は物分りの早い江戸ツ兒の若井氏、さらりとしたもので、私に向つても祝意を述べなどされ、此の事件は美しく解決されたことでありました。(松尾氏は御説明を申上げた時、濤川惣助氏の無線七寶も、佛蘭西人の賴みで、日本に無線七寶がまだ出來てゐないといふことは日本の技術の上の名譽に關するといふので、同氏は非常に努力され、また佛蘭西人は費用を惜まず作家を援助し

たことをも申上げ、共に美術界には奬勵の必要といふことを奏し上げたとの事を私は承はりました。）

斯くて、宮内省からは、矮鷄の代價として百圓をお下げになつた。

協會からそれを若井氏の手に渡した。

すると、四五日の後、若井氏は突然私の谷中の宅に訪ねて來られました。（私は、其頃は谷中茶屋町に轉居して居つた）

「今度は、どうもお目出度かつた。共々名譽のことであつた。就いては、宮内省より百圓お下げになつたから、此金を君へ持參した。まあ、赤飯でもたいて祝つて下さい。」

といふ言葉。

いつも乍ら、若井さんの仕打には私も一方ならず感激してゐますから、

「それは、毎々御志有難うございます。併し、私は、前既に充分頂いて居ります。此金はお返しします。若しお祝ひ下さるお心があつたら、私はさういふ事は不得手で分りません。あなたが此金で宜敷樣になすつて下さい。」と云つて押戻しますと、

「さうですか。宜しい。では、さうしませう。」と云つて歸られた。

五六日經つと、京橋釆女町の松尾儀助氏から、何時幾日、拙宅にて夕餐を差上たく御枉駕云々といふ立派な招待状が參りました。

當日、私は出て見ると、松尾邸では大層な饗宴が開かれてゐました。主人役は松尾氏と若井氏、お客は協會の會頭及幹部は素より、審査員の人々が皆來てゐる。

今夕は、高村光雲氏作が無上の光榮を得られたるに就いての祝宴であると松尾氏起つて一場の趣意挨拶を述べられ、私が會頭の次の正客で、盛大な宴會が開かれたことであつた。

吉原から選抜きの藝妓が大勢來てゐました。餘興に松尾氏と若井氏とが得意の一中を語つたりして陽氣なことでありました。

（「矮鷄」終り）

禁酒國の秘密食堂にて

佐々木指月

ビリーが死んだ。

『どうも、まことに氣の毒なことをしました、昨晩、ビリーが死にました。』と、いつたのは、六十ばかりの法學博士だ。鶴のやうに痩せたからだは、始終こまかくふるへてゐる。白髪ばかりの頭に黒の高帽子をかぶつたその首もふるへてゐる。

『あらまあさうですか。』と、呆れ返つて博士の顔を見てゐた鼠子さんは、後ろに立つてゐた私の顔を見返つて、『聞いたかい。ビリーが死んだとさ。』と、云つた。

『さうかなア』と、私は返事した。

さうして私たちは出て來た博士と入り違ひに其處の戸を押して、私たちが毎晩集まる、ペリロと云ふレストランのなかへ這入つた。

入り口の食堂を通り過ぎて、臺所を通りぬけやうとすると、そこに、ミセスペリロが、棒のやうに、立つてゐて、その痩せた顔に微笑を浮べて、

『今晩は、夕べビリーが死にました。』と云つた。

『さうですつてねェ、今博士から聞きましたが、ほんとに、急なことでしたねェ』と、鼠子さんは挨拶をしてゐる。

『こゝで、飲んで、ひどく醉つて行つて、家へ行つて、すぐ、死んだのださうですよ。』と、ミセスペリロは云ふ。

『まあ』とそこを通り過ぎた、鼠子さんのあとに續いたのは私である。

『今晩は。』と、私の方から聲をかけて、いそいで、そこをぬけやうとすると、

『タデーさんや、昨夜、ビリーが死んだのを知つてますか。』と、ミセスペリロはまた云ふ。

『悲しいことです。どうも死んだとは思はれません。』と、私も、何とか、云はなければならなかつた。

『だが、彼は死んぢやつた。』と、ミセスペリロは、その尖つた肩を、ちよいと、上げて私に見せた。

私たちは、臺所を通つて廊下へ出た。このレストランでは、お酒を呑ませるので、秘密食堂が別にある。食堂の入り口には戸がしまつてゐて、なかゝら錠が卸りてゐて、誰でも這入るといふわけにはゆかない。鍵はミセスが握つてゐる。

ミセスは、何か忙がしいと見えて、すぐ來ない。私たちは戸の前に立つて待ちながら二た言三言話した。

『ミセスペリロは、ビリーの死んだのを少しも氣の毒に思つてはゐないらしい。』と、鼠子さんはいふ。

『さうさ、他人の死んだのを誰も心から氣の毒に思ふものはありアしないさ。』と、私は答へた。

『それでは、若しも、私が死んだらば、おまへは氣の毒に思はないかい。』と、鼠子さんの質問は妙なところへ飛んで行つた。

『氣の毒に思はないどころではない。私はきつと氣が狂つて頸をくゝつて死ぬだらう。』と私が答へると、

『タレワレや、私は、おまへの云ふことは信じられない。』と、鼠子さんはいつた。

タデーといふのは、昔から私についてゐた名で、誰がつけたか知らないが、私には、さういふ綽名がついてゐた。ところへもつて來て、今度は、タレワレと云ふ名が私についた。それはこの鼠子さんのつけた名で、私が、日本語で自作の詩をうたふと、そのなかに、きつと、誰れ、我れ、といふ音が出てくるといふので、以前からの綽名のタデーが訛つて、タレワレとなつたのである。

タデーといふのも、何んでも同じやうなことからついた名で、私の作つた詩のなかに、夕霧立てば我が家のといふ句がある。それを私がよく日本語でうたつたので、その立てばといふ音から、タデーと云ふ名が出たやうに記憶してゐる。

序でだから、鼠子さんといふ名を説明して置くが、これは、この女についてゐるマウスといふ綽名の譯語である。小さくつて、穢なくつて、ほんの少しのいたづらをするので、さういふ名がついたのだが、小さくつても怒ると人の指を噛む。全く、マウスに違ひない。

ミセスペリロは鍵をもつて來た。秘密食堂の戸が明いた。なかの火爐頭で燃えてゐる火が、ぱつと、赤く私たちの目にうつつた。私たちはなかへ這入つた。部屋は三つあるのだが、奥の二つの部屋は、もう、ふさがつて、この入り口の部屋にだけ、テーブルが明いてゐた。

『やア、いらつしやい、サムライ』と、聲をかけたのが、ボーランドの伯爵である。

鼻のあたまの赤い、痩せつこけた伯爵は、日露戰爭の時には露西亞方の將校で、奉天の戰ひの時には、偉い働きをしたのださうだ。その後日本へ渡つて、東京にも一二年住んでゐたといふので、日本の紳士の禮儀作法を心得てゐる。サムライ崇拜家で、日本のサムライは常に死と云ふことを覺悟してゐる。死ぬときには、最も苦痛な方法をとる。それは彼等の意力を示したものである。苦痛なしに死のうとする死かたは臆病もの丶やることで、それは彼等の恥辱としたところだ。死は苦痛の表象(シムボール)である。その苦痛に堪えながら、笑つて腹を切つたサムライは、實に驚くべきものである。と、この伯爵は、醉ふ度に私に云つてきかせた。

彼は、この部屋に二つある、もう一つの方のテーブルに向つて、三四人の男女とともに一盃呑んでゐたところだが、わざ〱テーブルを離れて、私を迎へた。

私は、帽子をとつて、外套を脱いで、そこの壁のホツクに掛け、序に、鼠子さんの、鼠色の毛皮の外套も脫がして、やつて、同じところに掛けながら、

『時に、今聞きましたが、ビリーさんは、まことに、お氣の毒なことになりました。』と、云ふと、

『さア、それを今話してゐたところで、お氣の毒なのはこのミリアムさんです。』と、伯爵は、そこにゐた一人の若い女を指さした。

ミリアムさんは、ビリー君とは、長年のスウイトハートで、同じ天井の下で共同生活をしてゐたなかであつた。

ビリーが死んだといふことを、最初に、私が法學博士から聞いたときに、私の腦へ、ぴいんと來た問題は、このミリアムさんが、これからどうなつて行くだらうといふことであつた。

ミリアムさんは、こ丶へ來る女たちのうちでは、一番平靜な心をもつた女であるといふことは、私に以前から感じられてゐたことだつた。はたしてさうかどうかは、深い交際をして見ないからわからないが、何しろ、この邊の不良少女とは違つて、その顏つきも穩やかだし、いつ見ても、その表情が亂れてはゐなかつた。この邊の女たちの顏といふものは見るたびに違ふのが通常になつてゐる。その表情は皆な彼女たちの技巧から出てゐるものだから、彼女たちのその時々の心もちの差によつてそれが自然に違つて來る。さうしてこの邊の不良少女たちは自分の心の不斷の姿などといふものは振り返つても見たことがないし、また、振り返つて見られた沙汰ではない。そんな怖い恐ろしい事は彼女たちはしたくはない。その顏にお白粉を塗つて、生地の小皺や、そばかすをかくすやうに、彼女たちはその心を、さは

つて見れば手ざはりのいゝ絹の長い靴下のなかに包んで、その日〳〵を知らぬ顔をして暮してゐるのである。

そのなかで、このミリアムさんだけは、いつも眞心を剝き出しにしたやうな顔をしてゐた。別に化粧もしてゐはしなかつた。でも顏色は好かつた。愛嬌がこぼれるやうだといふ程ではなかつたが、調つた顔をしてゐて、その體の恰好は衣服の上から見てさへも、ちやんと、まとまつてゐた。體の恰好の申し分のないことは、それによつてミリアムさんが生活をしてゐるのでもわかる。といつてこの女はモデルではない。この女は遊泳師である。劇場の水槽のなかへ、泳ぎ襦袢一つになつて、飛び込むところを見せたり、泳ぐところを見せたり、色々な體の形をして見せることを自分の藝にしてゐる女である。

スウイトハートに持つならば、かういふ女を持ちたいと、こゝにあつまつて來る若者たちで思はないものはなかつたらしい。そのミリアムさんのパアテナーのビリーが死んでしまつた。さあ、ミリアムさんは、遲かれ早かれ、誰かの手に渡つてゆくだらうが、はたして誰の手に渡つて行くだらう。問題はそこにあつた。

私と鼠子さんとはこちらのテーブルに差し向ひになつて、鼠子さんは、ミセスペリロに食事の品々を注文してゐた。それから鼠子さんは、このアメリカが禁酒國になつてから、お酒を呑むことを覺えて、近頃ではなか〳〵いけるやうになつたらしい。それでブラックジヤックといふお酒を注文してゐた。私は多血質だからお酒はつゝしんでゐる、心臓でも破裂されてはこまるから呑むなと友人からも云はれてゐる。だが、鼠子さんは、いつでも私に、スープの匙に一ぱいだけくれる。カクテルだと舌を打ち、ウイスキーだと甜めて呑み、グラツパアだと一息に嚥みおろしてしまふのが私のお酒の呑み方だが、その一匙のお酒を藥のやうにして呑むのが評判になつて、いつかも例の鶴髮の法學博士は、私をからかひながら、今日はマウスさんがゐないから私がかはりに君に一匙のお酒を進ぜましやうなぞといつた程だ。

ミセスペリロは私に向いて、私の耳をひつぱりながら、

『そんなに、向ふのテーブルばかり見てゐるものではありません。あなたの見なければならない顔はあなたの前にあるぢやアありませんか。さア、何を御注文なさいます。』と、云ふ。

『マカロニ、アラマリナラ。それから、スカラピネ。今夜はそれだけです。』と、答へた。

ミセスペリロは行つてしまつた。うしろの戸が、ぴインとしまる。

鼠子さんは新聞を讀みはじめる。私はミリアムの顔をつくづ

く見た。

いつもは、顏色のいゝミリアムも、流石に今日は、まツさをだ。髮が、かう、鬅に亂れて、若々しい姿がどこかへ消えてしまつて、所帶やつれをした女房のやうに見える。どちらかと云へば、それ程、生粋の紐育風の女ではなかつたけれども、それが、また、今夜は、まるで、田舍の女のやうだ。なりもふりもかまはない。洗濯女のはくやうなスカートをはいて、頸のまはりから、海老茶の毛糸の襟卷を卷いてゐる。彼女の母親が歐羅巴からこの亞米利加へはじめて渡つて來たときには、きつとあんななりをしてゐたらう。女は心の緊張が、すつかり、なくなつてしまうと、彼女の心で彩色されない、本當の姿を現はすものなんだなア。このミリアムは、眞心そのものを常に現はしてゐると思つてゐたが、今日の有樣を目に見ると、そこにはまだ色々な心持のお化粧がほどこされてゐたのであると云ふことがわかつて來る。あれはきつと、彼女が田舍から紐育へ出て來たときに卷いて來た襟卷に違ひない。ミスシツピーの河のほとりで、泳いでばかり育つた彼女は實はこの都會に住むべき女ではないのだらう。今日は彼女には悲い日だ。都會の空氣が拵へた薄い絹の、短い裾の着物は今日の彼女の心にはそぐはない。寧ろ、あゝした態をして、何もかも打ち棄てゝ、生れ故郷で生れた時の心もちに歸つてゐる方が彼女にはどんなに樂だらう。なぞと私は色々と、今夜のミリアムを眺めながら考へた。

それにしても、彼女は家に引ツ込んでゐないで、なぜこゝへ來たのだらう。誰かゞきつとつれ出したに違ひない。ことによつたらこの伯爵が連れ出したのであらうと私は思ひついて、そのテーブルを圍んでゐる外の人たちの顏を見た。

そこには、もう一人、女がゐた。年の頃三十二三の女で、どこかのハウスワイフのやうな態をしてゐたが、彼等の話してゐることから推察して、ミリアムの伯母さんであるといふことが知れた。こゝのレストランでは遂に見かけたことのない種類の女ではあるが、今夜こゝへ來たところを見ると、ミリアムのところへ悲みを分ちに來てゐたものらしい。

もう一人、そこにゐたのは、あのポーランドの伯爵の友人として知られた露西亞人で、滅多にこゝへは來ない男であるが、丈の高い、色の白い、三十代の立派な男で、態もこの貧乏伯爵とは比べものにならない程光り輝いてゐて、何んでも下町に工場とかを持つてゐるといふことをこの前に聞いたが、今夜どうしてこゝへ來たのか、偶然か、それとも伯爵が招いたのか、まさかミリアムの家へ悔みをいひに來たわけではあるまい。しかも、話しは伯爵一人が例の達辯のブロークンイングリツシで喋つて

ゐて、たまにミリアムの伯母さんが返事をするだけで、あとの二人は默り勝ちであるから樣子はわからないが、私は不思議な興味をそこに感じて、彼等の語り合ふことにそれとなく耳を澄ましてゐた。

『タレワレや、煙草を持つてゐないかい。』と、鼠子さんがいふ。私はポケットから、買ひたてのダリートンを出して與へた。鼠子さんは目で新聞を讀みながら、指では卷烟草をつまみ出して、

『マッチはないかい。』といふ。この女は萬事につけてまことに手數のかゝつた女だ。交際するのには一と骨折れるが、別に新らしいメートを見つけるといふことは、もつと骨が折れるので——向ふでもさう思つてゐるらしいので、自然私たちは顔を合せる時が長らく續いて來た。

私はポケットからマッチを出して、テーブルの裏でこすつて火を出して、それで女の啣へてゐる卷烟草の先に火をつけてやつた。

マッチの火は消え殘つた。赤い火は私の指にはまだ遠かつた。

『おい、マウス。』と、私は呼んだ。

『何んだい、タレワレ。』と、彼女は新聞からその近眼をはなさない

『一寸、こつちを見な。』と、私は云ふ。

鼠子さんは見當を定めかねたやうな目つきをして、私の指の先で燃えてゐる火を眺めた。

私はそれをふッと吹き消した。

『何んだい。』と、さも、つまらなさうにいつて、鼠子さんはまた新聞に目を落した。

どんな深い哲學も、どんな難有い宗教の默示も、こんな女にかゝつてはさつぱり値うちを落してしまう。ビリーが死んだといふことは、もうこの女の腦にはないらしい。私は損をしたやうな氣がして、そのまつちの燃えさしを捨てた。

私は死んだビリーの事を思つた。一言にして云へばビリーは呑みぬけだつた。

私がはじめて彼を知つたのは、やはりこゝの食堂で、彼はミリアムをテーブルの向ふに置いて、その時も、もう、ずぶ六だつた。ぐてんぐてんになりながら、そのづんぐりした體をこちらのテーブルの脇まで持つて來て、ポープが天國でキリストに追はれた話と云ふのを、身振りをしながら私にして聞かせた。

ポープになりきつた彼は、ハロークライストと、そのぐんなりした手を出した。さうして今度は、まッ直ぐに立ちなほつ

て、キリストに彼はなつたが、赤らんだ大きな童顏の口をつぼめて、アイドンノーユーと云つた。彼のポープは彼そのまゝでよかつたが、彼のキリストは、何たる樂天的のキリストだつたらう。

そこに並んでゐた使徒たちのうちには、一人もポープを知つてゐるものはなかつた。ポープはキリストの前で途方に暮れた。目を圓くしたり、頰ツペたをふくらまかしたりしたが、吃りながら——ビリーは、吞むと吃る癖をもつてゐた。——キリストのうしろに立つてゐる童貞マリヤを指さして、オー、ア、ア、ア、アイノーハー、ウエル。さうだ、さうして見ると、私はおまへのファザーインローに當るわけだと云つた。キリストは吃驚して、ゼン、ユーゴーツーヘル、と、答へたといふ。どうだ、名作だらう。これは俺が書いたんだぜと、彼は、さも面白さうに話した。

向ふのテーブルでこれを聞いてゐたミリアムは、またはじまつたなと云ふやうな顏をしてゐた。それから察して、これはビリーの十八番といふことがわかつた。私のテーブルの向ふには、その時も鼠子さんがゐた。と見ると、これは、何とこのビリーの話を批評していゝか困つたやうな顏をしてゐる。私は三人の顏を順繰りに見くらべた。さうさ、ただの女には、ちと聞きにくい話だらうが、こゝらの女の前で話すと、これが幾分皮肉な意味をもつてくると私は思つた。

そこで私も負けてはゐなかつた。私は、祭司の神聖なる奉仕といふ話を語り出さうとした。最初の一句をいひ出すと、鼠子さんは立ち上つて止めた。それは、あまりひどすぎるから止せといふことだつたが、かまわないから話せとビリーがいふので、とうとう私はそれを話した。

昔印度に二人の國王があつて、一人は娘を持ち、一人は息子を持つてゐた。二人の國王は相談してその娘と息子とを婚した。ところが、どうしたものだか、その娘はその夜のうちに送り還されて、その翌日から兩國の間に戰爭がはじまつた。さうしてその戰爭は十年も續いて、近隣の諸國も、ひどく、迷惑した。それからといふものは、この地方の國々では、どんな娘でもお嫁入りをする前には必ず神の靈廟に送られる。さうして祭司によつて神聖にされた後でなければ、お婿さんのところへは行けないといふことになつた。これで話はおしまひだ——と、かう私は話をした。

ミリアムと鼠子さんは、どちらも默つて目を光らしてゐる。まさか感慨無量といふわけではあるまいが、こちらでは淺黑色の目あちらでは黑味がゝつた目を光らして、さういふ事が出來

るのならば、自分たちもお嫁にゆけると云つたやうな顔をしてゐる。いや、私にはさう見えた。

ビリーは、こんな悪い話は聞いたことがないと、少し醉でもさめたか、テーブルに向つてその大きな腹をふくらまして、妙に、ものを考へてゐる樣子だつた。こいつ、醉ッぱらひではあるが、深い思索をもつてゐるなと、私は、その時、見て取つた。ビリーが獨逸人であるといふことは、彼の言葉の訛りをきけば誰にでもわかるところだ。

ビリーたちは先に來てゐたので、もうそろそろ立ちかけた。壁のホックに掛けてあつた古ぼけた外套をミリアムに着せて貰つて、ソー、ロングといひながら、片方の手を重さうに肩のところ迄あげて、笑ひ顔を私たちに見せながら、のこのこと出て行つた。ミリアムは彼のあとに續いた。これも、にこ／＼と、その笑ひ顔を私たちに向けながら、入口の戸をその足音のうしろに締めて行つた。

それは去年の秋のことだつた。そのミリアムは今こゝにゐる。然しビリーは、もうこの食堂の戸を明けて這入つて來ることはないのだ。

彼は畫家だつた。ことに落書が上手だつた。木炭をもたせると、醉つたまぎれに書くは書くは、戸の上でも壁の上でもところきらはず書きたてるが、さうして書かれた絵からこそ彼の本當の心は語られた。

この秘密食堂の壁のまはりに、こすりつけた木炭畫は、皆ビリーの落書である。さうしてその傍に書いてある文句は、それはここへ來る客の一人で、これも呑みぬけの、ハーレー、ケンプといふ詩人のつけた讚である。百姓が馬の尻を叩いてゐる絵には、特別に、その尻に白い絵の具が塗つてある。馬の形は尻だけであとはない。

一度ここへ税務官が押し入つて、酒を賣つてゐることを見つけ出して、ここの主人のミスタア、ペリロは二百七十何弗とかの痛いお灸をすえられたことがあつたが、さうしてそこに呑んでゐた客は、皆一度警察へ送られたが、その場の光景をビリーは後でこの壁へ樂書した。

一人の税務官と一人の巡査とは、ミスタアペリロを睨みつけて、手を擧げて何か詰問してゐる。この大發見を税務官自身も驚いたといふ風だ。後ろ向きになつたミスタアペリロの肥つた大きな猪のやうなお尻は恐怖のために慄へてゐる。彼は、母親に叱られてゐる赤ん坊のやうに、だらりと手をたれて、もう何んとも云ひわけの言葉もないといふ樣子だ。

ところが、その傍へもつて來て、鼠子さんと私とを書きつけ

たビリーは少し慘酷だつた。鼠子さんの顏は窄みかゝつた風船玉の如く皺くちやで、私の顏は支那人の洗濯屋の御用聞きのやうだ。その晩、私たちは運好くそこにはゐなかつたのだが、かうしてそこへ書かれて見ると、私たちも警察へ引つぱられた仲間のやうだ。

その外に、まだ、ハーレー、ケンプが怒つて稅務官を罵倒してゐるその顏が書いてある。ロツキイ山の岩のやうに四角張つた顏にもつて來て、鼻だけが赤い繪の具で染めてある。大きな口をあいて、詩人のことだから、さぞ、その罵倒の文句は奇想天外より來るの趣きがあつたらうと思はせられるやうな書き方だ。

だが、これ等の落書は、今では皆、ビリイの殘した哀れな形見になつてしまつた。ミリアムにはこれが何と見えるであらう。彼女はそれには背中を向けて、氣にも掛けないやうである。死んだビリーのことを、腦一ぱいに思つてゐる彼女には、彼の書き殘したものなぞは、まだ目には入らぬと見える。

伯爵は、しきりに彼女を慰めてゐるらしく、死に就ての彼の考を述べてゐると見えて、それらしい言葉が私の耳へきこえて來た。

『肉體は死んでも精神は死なゝい。精神は凡てのものゝ上にある。』と、伯爵は、虛ツぽになつた、ウイスキイグラスを、握つたまゝで力說してゐる。さうして私の方を向いて、私が傾聽してゐたのに氣がづいて、『どうです、間違ひはありますまい、ドクトルよ？』と、今度は私をドクトルにしてしまつた。彼に云はせれば先生といふ程の意味だらうが、博士といふ意味にとると、云はれただけでも餘程不思議な感じがする。サムライにされたり、ドクトルにされたり、この人に逢ふと、私もなかなか忙がしい。

訊かれてぴつたり困つたのは私の答だ。それに相違ありませんといつてしまへば何んでもないが、私も先程からその事が腦のなかにあつたので、これがなか〳〵容易でない問題のやうに私の耳へは響いた。

『さうだ、ドクトルは佛教國の人だ。一つドクトルの說を拜聽してみやう。ビリーは果して死んだか、それとも彼はスピリツトとなつて生きてゐるか、どうお考へです？』と、意地の惡い伯爵があつたものだ。これでは私はまるで哲學か何かの試驗をされてゐるやうなものである。

私は考へた。ビリーはまだ生きてゐると云つたならば、若い女の身をもつてこれからまだ活きて行かなければならないミリアムは不自由を感ずるだらう。また、もうすつかり死んでしま

つて靈魂なぞと云ふものも無いといつたら、伯爵の鼻を明かせることになる。こいつは弱つたなア、ミリアムが後日、新いスイートハートをこしらへた時に、心懸りにならないやうに、また伯爵の先程の說にも相應の花をもたせるやうに、何とか答へがありさうなものだと私は腦を痛めた。

『ビリーは戶の外にゐるが、永遠にこゝへ這入つて來ません。』と、私は答へた。

ミリアムは思はず後ろを振り向いた。そこの壁にはビリーの書いたミスターペリロが大きなお尻をつき出してゐた。

私の答はミリアムにはその心持が感じられたらしかつた。彼女は、ぞツとしたものと見えて、しばらく顏が靑くなつた。しかし、靈魂不滅論者の伯爵には、私の云つた言葉の眞意は分らなかつたらしい。彼には却つて戶の外にビリーがゐるといふことは信じられなかつたらしい。戶の外にゐれば、犬でも猫でもビリーでも、またはそれが酒樽でも、一切同じであるといふことは、一寸、この邊の西洋人には摑めない。可愛さうにミリアムは怪談でもきかされたやうに思つたらう。

後ろの戶の明く音がして、ミセスペリロは水注とグラスとを持つて這入つて來た。すると、今迄、私たちのお喋りを空吹く風と聞き流して、新聞にその目を透してゐた鼠子さんは顏をあげて、

『おゝ、ミセスペリロよ、私はお腹がすいて死にさうだ。明日の朝までに私たちの食事は間に合ひますか』と、訊いた。

『あなたには、もう食事はあげないつもりです。タデーさんにだけこれから食べさしてあげるつもりです。ねエ、タデーさんや。』と、ミセスペリロは私の髮の毛をなでる。

『おゝ、ミセスペリロよ、如何にあなたは殘酷なことよ。私よりもこのタデーを愛しますか。』と、鼠子さんは恨めしさうだ。

『愛するのなんのつて、こんなに可愛ゝ赤ん坊は世界のうちにありません。』と、ミセスペリロは私の肩を抱きすくめる。冷たい骨ツぽい指が、私の頰にぴたりとあたる。

私は左の手をのばして、ミセスペリロの毛糸のスウエタアのどり／＼した上に卷きつける。さうして私は甘ツ垂れた聲を出して、

『ねエ、ミセスペリロや、今度、鼠子さんのゐない時にねエ、そら、あの、そら。』と、目くばせをすると、ミセスペリロはうなづきながら、伊太利女の持つてゐる黑い眸から、とろけたやうな光を私の目に流し込む。

『あゝ、よしておくれ。』と、鼠子さんは叫んだ『タレワレや、そんなところを若しもミスターペリロに見つかつたらば、お前は

窓から外へ抛り出されるよ。』と、云ふ。

向ふのテーブルの人たちは、面白がつてこちらを見てゐる。私は鼠子さんの目の底に、はたしてどういふこまかい感情が動くかを見やうとした。

鼠子さんは立ち上つて。私を新聞で打つた。

『お丶、可愛さうに。』と、ミセスペリロは私の頬を撫でまはす。何といふざらざらした手のひらだらう。私はとてもくすぐつたくつて身を縮めないわけにはいかなかつた。

伯爵は、見るに見かねて立ち上つた。

『どうも、これは、紳士淑女の間にはあるまじきことで。』と、その眞面目くさつた云ひ方が、向ふのテーブルの人たちを、くすくすと笑はせた。

ミリアムも、仕方なささうに笑つてゐた。私たちのお芝居はおしまひになつて、ミセスペリロは出て行つたが、やがて、注文した料理を運んで來た。

私たちは食事をはじめた。マカニロ、アラマリナラは、私のフオークに卷きつけられて、ガーリツクの匂ひを立てる。鼠子さんのブラツクジヤツクは、グラスのなかに注がれて、鼠子さんのつけた火が、その上で幽かに青く燃えてゐる。彼女は祈禱でもするやうな様子をして、凝ツとそれを見つめてゐる。私たちは無言だ。私はたべながら、また、ものを考へた。

昨日まではこのミリアムもビリーのスイートハートだつた。しかし、もう、今日からはさうでない。今日からは彼女の好いた男を見立て丶、それと一緒にならうとも、誰も文句のいひではない。籠から出された鳥だ。飛び立つて差し支へないのであるが、それは他人の考へで、ミリアムの身になつて見れば、なかなかどうしてそれどころの騷ぎではない、今が悲歎の最中だ。籠を失つた小鳥が、その籠のあつたところを離れず、もとの棲木をさがしまはつてゐるやうなものだ。空は廣いといふことには氣がつかない。

だが、それも暫くのあひだで、鳥ならばきつと飛びたつ時がくる。このミリアムの目の涙が乾いて、情に潤んだ光が流れはじめる時は、さう、たいして、遠い未來のことではない。それは見てゐるうちのことだ。それを見越して網を張つてゐる男もどこかにあるだらう。いや、どこかどころではない。もうこの食堂のうちにも、ちやんと控えて、隙をうかゞつてゐるものもあるやうな氣がする。私だつて大丈夫とはいへない。伯爵は今夜は少し若返つてゐるやうだ。ことに危險なのはミリアムと向ひ合つてゐる露西人だ。その青い目が据つてゐる。

あぶない、あぶない。ミリアムも、時々、露西亞人の顏を見

てゐるが、彼等の目と目が逢ふたんびに、私はひやひやする。男女の間といふものは石鹸玉のあつまりのやうなもので、その間の隔が隔にならない。ぱちッとそれが破れゝば二つの泡は一つになる。今、こちらの泡も消えて、あちらの泡へ這入つたかと思ふと、もうその泡も消えて別な泡に屬してしまう。誰のスウイートハートだ、彼のスウイートハートだと云つてゐるのも瞬間だ。

何もそれは男女の仲に限つたことではない。世界のうちにあるもので、人間に屬してゐるものは、皆この泡の壁で仕切られたものではあるが、ことにこの都會の男女の戀仲は湯氣の上の石鹸玉だ。ぱちぱちぱちぱちと變るは變るは五色の泡は、見てゐるその目も目まぐるしい。

そのなかで、私はお前に惚れてゐる。お前は私に惚れてゐる。變つちやいけない、變りはしまひ、なぞと云つたところで追ひつくものではない。またそんな誓ひなんかを立てゝゐれば、毎日のやうに、やきもち喧嘩をしなければならない。それは實際大仕事だ。指を切つて誓紙を書いた昔の江戸人を連れて來て、この紐育の女と戀をさしたら、彼は一日のうちに惱亂して死ぬだらう。

いや、事實はこの都會にだつて、それは長年惚れ合つて、水ももらさぬ好い仲のスイートハートもあるけれども、晴れて夫婦にならない限りは、その戀に保險はつけられない。いや、夫婦になつたところで安全と云ふわけにはゆかない。實際この都會では、男も女も、自分一人を愛すといふより外に變らない愛はない。うつかり日本流に自分を捨てゝ、惚れた女に打ち込まうものなら。男の恥を晒すことになり易い。人間も、かう、大勢あつまると、お互ひに嬉しい戀も出來なくなる。泡の壁で築いた都紐育は、戀をするものには呪はしい。

鼠子さんは、鯨の血のやうな色をしてゐるブラツクジヤツクを呑んでゐる。私はなかば考へながら、なかばマカロニを卷きながら、何の氣なしにその顏を眺めてゐた。

『何だつて、あたしの顏を眺めてゐるんだい。』と、彼女は云ふ。

『人間と人間との間には眞實といふものはないが、保たれてゐる調和そのものが眞實だといふことを考へてゐたのさ。』と、私は答へた。

『調和は破れる時があるからねエ、眞實とは云へないよ。』と、鼠子さんは批評する。

『破れたら破れたところに調和が出來てくる。』と、私は云つた。

『どういふ工合に。』と、鼠子さんが訊く。
『グラスのなかの水へ、アルコールをたらしたやうな工合に。――見てゐると綺麗だ。それは丁度ブロードウェイの戀のやうだ。』と、私は答へた。

食堂の戸の外で女の泣き聲がする。かちかちと鍵の音がしてやがて、かちりと錠が明くと、そこへ飛び出したのは、黒繻子の衣裳の上へ黒貂の毛皮の外套を卷きつけた美人だつた。
『ペギイ、オーネル！』と、伯爵は叫んだ。
『ビリーが死んだ！』と、ベッギイは伯爵の膝の上へ身をなげかけた。
『おゝ、待つてくれ、酒がこぼれる。』と、伯爵が云ふ。
『ビリー、ビリー！どこにゐる？』と、彼女は食堂のうちをめぐり歩いた。

ペギイはモデル女だ。巴里仕込みの女で、正眞正銘の美人だ。ミリアムがいくら美いと云つたとても、このペギイにくらべれば、月の下の水母のやうなもので、光が遮ふからしかたがない。
『おゝ、ビリー、ビリーどこへ行つた？』と、ペギイは、まだ、食堂のうちを廻つてゐる。右の目尻の下にある美人黒子が涙のなかでぬれてゐる。

ペギイは左の手を腰にあて、肘を、くの字に突き出して、爪先かるく歩いてゐるが、その姿があまり美いので悲んでゐるのだか、躍つてゐるのだか殆んどわからない。

ミリアムは、默つて下を向いてゐる。少し笑つてゐるやうである。ミリアムの伯母さんは呆れ返つてペギイを見てゐる。鼠子さんはたゞ眺めると、これは興味の目をもつて、度の強い近眼鏡のなかゝら向ふをのぞいてゐる。

ペギイ、オーネルは、私のテーブルの前へ來て立ちどまつた。
『プロフエッサアよ。』と、彼女は私を呼んだ。彼女は近頃になつて私をプロフエッサアと呼び出した。前にはダデーとか、ベービーとか呼んだものだ。赤ん坊が急に教授になつたわけだ。
『昨日までは、ここに來てゐたビリーが今夜はもう來ない。人間の智識はなさけない。これがどういふわけだか私たちには分らない。プロフエッサアには分つてゐるでしやう。』と、彼女がいふ。
『分つてゐるとも。』と、私は答へた。
『どう云ふわけです。』と、彼女は訊く。
『ビリーはねエ、酒を呑み過ぎて死んだのさ。』と、私は云つた。
鼠子さんは笑つた。この答は鼠子さんの氣に入つたものと見

える。
『死んだ？たゞそれだけでいゝのかい。』と、ペギイは押して訊く。
『さうだ。それだけでいゝのだ。』と、私はきつぱり云つた。
『死んだ。』と、彼女は天井を見てしばらく默つてゐたが『ビリイが死んだ、ビリイが死んだ。』と、謡ふやうに云ひながら、今度は前よりも大袈裟に跳り出した。
『はツはツはツ！ビリイが死んだ。』と、ペギイは叫ぶやうに笑つた。人間の絶望は、そこにある。彼女の甲高な笑ひ聲が、私の胸に、ぴインと來た。
ペギイ、オーネルは、跳りながら、また食堂を一と廻りまはつて、伯爵の膝の上へ、どつかりと腰をおろした。
『おゝ痛い、痛い。痛い。膝の上へ掛けるなら斷つて掛けてくれ。』と、痩せてゐる伯爵は飛び上つた。
ペギイは、伯爵の頸へ手を卷いて、そこにあつた呑みかけのグラスを高くあげながら、ぐりツと、そのお尻を動かす。
『痛い、痛い、痛い。』と、伯爵は身悶えをしながら、『おまへのお尻は剃刀かへ。』と、彼は、うまいところを云つた。
『ペギイ、オーネルの、テンヒツプ――鋼葉のお尻を誰も知らないものはない。』と、彼女はグラスの酒を一息にぐつと呑み乾す。
彼女の目には、青ざめてゐるミリアムも、その伯母さんも、映らないと見える。血のやうに臙脂をぬりつくつた唇を、伯爵の口のあたりに押しつけた。
『ペギイよ、今夜は我慢してくれ。今夜はビリーの死を弔ふために、ミリアムを招待して、かうして靜に呑んでゐるのだ。』と、伯爵は云ふ。
『ビリーの死が、そんなに悲しいかねエ、死といふものが、そんなにまで悲しいとは、どうも私には信ぜられない。』と、ペギイはお得意の張り肘で、形をつけて、つんとすます。長い睫毛の先から下を見おろして、ミリアムの窶れた姿をながめてゐる。
『だつて、お前は戸の外で、さツき、泣いてゐたではないか。』と、伯爵がいふと、
『それは、一時は悲しかつた。だが、今はもう悲しくはない。』と、ペギイは、けろりんとしてゐる。
私は思はず笑つた。このペギイと云ふ女は、年は幾つか知らないが、良心とか不良心とか、そんなものは、とツくに擦り切れて無くなつてしまつたすれツからしだ。だが、云ふところが、ちやんと壺にはまつてゐるから面白い。
私も、先程から、ミリアムの窶れ方を見て、スイートハート

が死んだにしては、少しく悲嘆が大仰だが、これをも、心の上のお化粧と許しては可愛さうか知ら。眞心をいつも顏に現はしてゐるミリアムとしては、これは、世間の型に着き過ぎたやうにも見える。それとも彼女は今夜はあゝしてゐたいのか。悲しい氣持も少し離れて味へば、まんざら、惡いものではないがと、思つてゐたところなのだ。

そこを、ペギイも感じたか、肘の先から横目でミリアムを見渡したところは、如何にも上出來だつた。鐵葉の、ぺかぺかするお尻の持主でなければ出來ない藝だ。女も捨鉢になると、赤裸々になつて來て、達人の心を持つ。尤も、このペギイは、モデルが渡世だから、赤裸々になりつけてゐるには違ひないが、それにしても圖拔けてゐる。

『ペギイは、いくつなんだい。』と、私は、鼠子さんに囁いた。

鼠子さんは、しばらく天井を見ながら考へてゐたが、

『今年は、もう、四十の上だよ。如何にも若く見せることが巧みではないか。どうしても三十前としか見えないだらう。』と、これも、囁きながら答へた。

海山千年の化物でないと、あゝした心境には這入れないのだなと、私は大きに感心した。

鼠子さんは、にたにたと笑つてゐる。少し、ほろ醉ひ機嫌だ。

『どうしたい。』と、私が訊くと、

『あんまり惡いから話すまい。』と、彼女は答へる。

『なんだい、話せ話せ。』と、私が云ふと、

『では話すが、丁度、ペギイはおまへのやうだよタレワレや。おまへも四十の上を越えながら、見たところでは、廿七八としか見えないよ。その手で私をだますのだらう。』と、鼠子さんは妙な目つきをする。

私は、ぞつとした。

『さう云ふお前は幾つだと思ふ。今年とつて三十六歲、それで見たところ十九か二十とは、ちと掛け値がひどすぎる。』と、私も負けずに云つた。

戸が明いて、ミセスペリロは、私のスカラピネと、鼠子さんのラムチヤツプスとを運んで來た。さうして私が行儀よくしてゐるのを見て、

『タデーさんは、ほんとうに、好いボーイだねエ。』と云ふ。

『ねエ、ママーや、ママーは私が好きだねエ。』と、私は、ミセスペリロのエプロンに髮の毛をすりつけた。猫のやうに、ころころと咽を鳴らして凭りかゝると、

『ママーに違ひない。自分より年の下な女をママーだなんて。

ミセスペリロよ、この男には、日本に三人の子があるのだよ。さうしてワイフもあるのだよ。』と、鼠子さんは素ッぱ抜く。こゝが、私の急所といふことを、彼女は知りぬいてゐるからである。

ペギイはこれを聞きつけて、伯爵の膝の上から聲をかけた。『これこれ、日本は燒くには少し遠すぎるよ。』と、これは思ひ切つた先廻りだ。流石の鼠子さんも二の句が繼げない。

伯爵は立ち上つた。ペギイは、そこへ、おつこちた。

『淑女及び紳士よ。』と、伯爵は演說口調だ。だいぶ、醉がまはつてゐる。

ペギイは、床へ落とされたのが悔しさに、伯爵に武者振りつかうとしたが、靴の踵で裾を踏んで、よろ〳〵とよろめいて、後ろの窓に、そのお尻をぶつつけた。

かちやん、びん、がらがらと、硝子が割れるところだけれども、生憎そこには硝子はなかつた。

さうだ、その硝子は、この正月に、詩人ケンプが醉つぱらつて、拳骨で一撃のもとに打ちこはした。

ビリーはそれを見てゐたが、これもひどく醉つてゐたので、足をあげて、次の一枚を蹴破つた。

さうして、窓にはとう〳〵大きな孔が明いて、奥にも、まだ、隱してある食堂の、お客の椅子のきしむのが聞こえるやうになつた。

さうだ、この孔はそれ以來明いてゐるのだ。醉ひが醒めたら償ふだらうと、思はれてゐたケンプ君は、その後、醉ひの醒める期もなしにロンドンへ行つてしまつた。さうして、殘つたビリー君は、これも醉ひの醒める時なしに死んでしまつた。

その孔に、ぶつかつたペギイのお尻は、隣の部屋へ、はみ出した。

泡の壁は透明で目に見えない。無いやうであるものだ。有るやうでないものだ。そこに硝子が嵌つてゐると隣の客は思つてゐたらう。なかからは女の驚く聲がした。

それはエレナと云ふ女文士の聲だつた。鼠子さんは聞き耳たてる。男が一人ゐるやうだが、その聲は、いつもの男のとは違つてゐる。

到るところで泡の壁は破れてゐると私は思つた。

ペギイ、オーネルは、伯爵にひつぱり出されて、片手でその有名なお尻をさすりながら、片手ではその窓にしきりにキッスを送つてゐる。

『哀れなるビリーよ、痛かつたかい。』と、彼女はくりかへす。そこにビリーの生前の俤を見出したものと見える。

ミリアムは、テーブルに兩肘ついて、手の平でその顔をかくしてゐた。

—完—

新聞記者懺悔錄

—此の一篇を德富蘇峰先生にさゝぐ—

松崎天民

「大阪の卷」にも、まだ書き落した事件や感想が澤山ある。公生活と私生涯と、時代と世相とを織り交ぜた私の追憶は、今、東京の十八年間に飛で居る。平凡人の平凡な半生記錄にも、汗と涙の喘ぎはありました。

一、波の起伏

「さうかなア、東京に來てから、もう十八年になるかなア……。ほんとに早いもんだな、月日が經つのは……」自分でもさう思ふほどに、「東京の十八年」は、あはたゞしく過ぎていつた。國民新聞、東京朝日新聞、每夕新聞、都新聞、二六新報と云ふ風に、社から社を轉々してゐた間に、二十九歲の私は、四十六歲に老いて居た。そして今は、心にも形にも、何一つこれぞと云ふものを獲ずに、たゞ悔恨に似た心淋しさに、行き詰つて居るやうな鬱陶しさを、感じて居るに過ぎない。

その十八年間に、新聞社を背景とした私の生活は、何んな風に變つていつたであらう。新聞社の窓から見た東京の世相は、何んな風に遷つていつたであらう。今こゝに、東南に面した窓際の机上、頰杖ついて考へるには、餘りに目まぐるしい十八年間の諸相が、私に樣々の喜怒哀樂を思はせる。その過ぐ世の生

計の波の起伏に、私は餘りに愚直であり、餘に我が儘であつたことよ。「何も彼も、成行きなんだ」とは思つても、そこには何か知ら諦め兼ねるものがあつて、私に斯うした追憶の筆を執らせるのか。――

私の記者生活に於けるスタートは、大阪新報社であつたけれど、その「大阪時代」の六年半は、豫習期間と云ふに過ぎなかつた。私の乏しい新聞記者生活に、若し禍福と云ふものがあつたなら、それは東京に來てからの前半期――國民新聞時代と、東京朝日新聞時代とであつた。明治三十九年十一月十六日から、大正三年十一月二十日まで、その八年間は順風に帆を揚げて、春の海を航行したかの觀があつた。遮二無二と猛進猪突する健康と勇氣とに、若い私の記者生活は惠まれて居た。

「新聞記者の勤務は、若い間のことだ」

と、能く誰でもが云ふが、私の經驗に省みても、三十から四十まで、その十年間が、最も脂の乘つて居る時代らしかつた。

二、十年振り

大阪朝日新聞を辭退して、十年目に上京したのは、明治三十九年十一月十六日のことであつた。長男は五歳、二男は當歳、三男は未だ生れて居ず、私も二十九歳と云ふ客氣に逸る青年であつた。

妻や子供は、南の妻の實家に預けて、私は單身で上京した。朝日の舊同僚で、鐵道方面を受持て居た武田頴富久君は、「送別の寸志やから！」と云つて、湊町から名古屋までの無料乘車券を贈つてくれた。その頃の關西線は、まだ關西鐵道株式會社と云つて、大きな私線の一つであつた。奈良から笠置の渓谷を通つて、龜山から美濃、尾張へと入つて行く汽車路の景觀にも、私は淡い名殘が惜しまれたりした。

名古屋へ着いたのは、深夜の十二時近くで、午前零時何分の東京行が出る迄には、三四十分の餘裕があつた。私は一二等待合室に入つて、發車を待つ間にも、胸深く食入つた「大阪」を想つて、疼くやうな氣持がした。そして何よりも先に、北新地の女に宛て、短い文句ではあつたが、愛着の心を寄せた端書を、走り書きせずには居られぬのであつた。私を待受けてくれる東京の生活に、これから先、何んな樂しい悲しい苦しい遭遇があるにもせよ。私の前途多望な東京行に、一脈の哀思をそゝつたは、何と云つても大阪の「其の女」なのであつた。

それにしても、十年振りに行く東京の世の中は、何んな風に變つて居ることであらうと、又しても思ひ起されるのは、十年前の慘苦で彩られた私の東京生活であつた。片山潜、高野房太

郎兩氏の勞働組合期成會の書記――人力車夫――活版のロール廻し――新聞配達、國民新聞社の小使――絶食――放浪といふ風に、明治三十年の東京は、雨にも風にも辛かつた。

「その東京へ、その國民新聞社へ、記者として迎へられて行くのだ……」

私はさう思ふと、嬉しい得意な心地もした。

三、國民新聞

妹の良人の市川由吉君も、國民新聞の社會部に勤めて居た。

「一先づ芝南佐久間町の拙宅へ、落着いては何うですか」と云ふ手紙が、妹夫婦からも來て居た。大阪に別れる輕い哀しさは、何時の間にか、「東京へ行く」と云ふ、深い喜びに變つて、私の理智も感情も、一種の勇躍に燃えさかつて居た。

十年振りに入つた民友社、國民新聞社は、凡ての形觀が十年前と同じであつた。天井の低い薄暗い編輯局には、中央にストーブがあつて、德富蘇峰先生の大きな机は、昔の儘に置かれて居た。山路愛山、深井英五、人見市太郎、平田久、宮崎湖處子、國木田北斗、中村樂天、松原二十三階堂、中野其村、濱田佳澄の諸家は、その十年間に、編輯局から姿を隱して居た。けれども其處には、十年前の阿部充家翁や、川山瑞三翁や、草野門平翁や、栗原武三太翁などが、老を知らぬ氣な姿を見せて居た。小使であつた私に、喜多川の饅丼を食はせてくれた草野茂松氏や、何時までも年を取らぬ村高幹博氏なども、懷し味ある態度で、十年目の私を迎へてくれた。

事務の方にも、渡邊爲藏翁や、尾間明氏などの舊知人が居て、私の顏を記憶して居てくれた。度々當直して居た受付係の福田と云ふ青年は、日本畫の福田眉仙と出世して居たり、能く私を叱つて居た芳野駒彦氏は、神戸新聞の事務局へ赴任して居たりした。その昔、私を小使に採用してくれた湯淺氏も、社を退いた前後であつたが、そこには何か知ら、私の追懷心を唆る親しさが流れて居た。

「大阪朝日のやうな大世帶ではないが、國民新聞は愈々これからなんだ。……少數の讀者を相手にした英國式の上品な新聞から、多數を相手にする普遍的の新聞に變るんだ」

さう云つた氣持が、既に紙面の隅々に漲り初めて居た。私は「好い時に迎へられて來た」といふ喜びに、「これなら安心して働ける」と云ふ喜びに、輝くやうな氣持がした。

四、前途多望

社の新進氣鋭には、吉野左衛門、伊達源一郎、結城禮一郎、

河上哲太、篠原温亭、石川六郎、永井瓢仙、鹽津誠作、守武陶雨の諸豪が居て、新陣容に備へて居た。吉野氏と伊達氏と河上氏とは、政治經濟の方面に關し、石川氏は論説班を受持ち、篠原、結城の兩氏は、社會部を擔任して居た。

德富先生が、滿鮮七十八日の遊を終へてから、國民新聞は其の編輯製作上に、新しい立直しを發心したのであつた。そして、我が結城禮一郎は、その陣頭に立つべき荒武者として、入つて社會部面の改革に當つて居た。俳趣味に沒頭して居た温厚の温亭氏が、自ら部長席を結城氏に讓つて、副部長席に就いたのも、私が入社してからであつた。「今に見ろ、國民新聞は東京の第一紙になるぞ」と云つた氣分が、皆の眉宇にも漲り渡つて居た。

「因緣と云ふものは、ほんとに不可思議ですね。大阪新報社に居て、私に記者修行の手ほどきをしてくれた結城さんが、また此の國民新聞に居て、私を働かしてくれるなんて……。ほんとに、不思議な廻り合せです」

私はさう云つて、感謝せずには居られぬのであつた。それに、初めて入つた社と云ふ氣持が少しもせぬのが、私には何よりも心丈夫であつた。長い間、父兄の溫情に背いて、旅から旅を放浪して居た我が儘息子が、久し振りに家鄕に歸つたと云ふやうな親しさと懷しさとに、私は心から幸福を感じて居た。

吉野氏と結城氏とは、私をとり屋の原島へ連れて行つて、大に働くやうに、大に勉強するやうに、いろ／＼と新計畫の話をしたりした。

「月給も少し辛抱して居ると、乾度、澤山出せるやうになるから……。それに新しい記者も、ドシ／＼入つて來るから……」

私は、私の世の中が、私の記者生活の前途が、俄に輝かしい光明に惠まれたやうな氣持がした。「死ぬるまで、國民新聞社で働かう」と、さうも決心した程であつた。

五、蘇峰先生

「先生、白髮が殖えましたね」

それが德富先生への最初の挨拶の言葉であつた。大阪の守山又三氏の宅で、親しくお目にかゝつたこともあるし、芳野山の花見の歸途、人力車上で挨拶したこともあつた。それに、大阪の「小天地」に、「民友社の小使」と云ふ一文を公にした時には、わざ／＼長い手紙を寄來されたりした。少年の頃から「靜思餘錄」などを讀み、曾ては小使として、洋行から歸られたばかりの先生を見て居た私は、何の用意もなく、かう口を突いて出たのだつた。

「さうかなア、だけど、未だ若いよ、我輩も……」

先生はこんな調子で、大阪から上つて來たばかりの私を、いろ〳〵と激勵してくれた。白髮は少し殖えたけれど、然し何處となくお坊ちやんらしい、利かぬ氣の我儘者らしい、癇癖持らしい相貌は、十年前と同じやうに、私の心をビクツとさせずにはをかなかつた。政治、外交、教育、文藝、感想などの「東京だより」には、經世家としての言論が讀まれて居たけれど、記者としての先生は、更に新聞經營者として、新しい世界への門出に就かれたばかりの時であつた。

社の前の角に在る新館で、一週に一度か月に二度は、必ず私達を集めて、いろ〳〵と鼓舞の言葉を與へられて居た。「最初は五萬計畫の積であつたが、この勢だと十萬計畫に向つて、勇猛邁進せねばならぬ。新聞は少數の特權階級を相手にしては駄目で、何うしても多數に向つて進まねばならぬ」と。鰻丼を食べたり、原島のとり鍋をつゝいたりしては、能く其の計畫を申渡されて居た。

社長自ら社會部會に出席して、部員達と共に懇談すると云ふやうなことは、何處の社にも見られぬ心易さであつた。月々の業蹟に應じて、二圓、三圓、五圓、十圓と云ふ風に、臨時賞が出て居たのも、働き榮えがあるやうで、愉快な事の一つであつた。

私は、一所懸命の心持で、仕事に精勵した。

六、昔の東京

南佐久間町の妹の家に暫く滯在して、私は社へ通勤して居た。篠原溫亭氏の住で居た赤坂一ツ木町、圓通寺坂上の路次の中に、肥塚龍氏の貸家があつて、そこに一家を構へたのは、十二月に入つてからであつた。

六疊二室の三疊と二疊で、家賃は十一圓そこらであつた。妻と妻の妹と子供二人は、その借家に來てから、明治四十年の正月を迎へた。月給四十圓餘で、十一圓の家賃を拂つても、一家五人が口を糊するに、やつと事足る世の中であつた。向側の溫亭氏の家では、主人が晩酌の葡萄酒に陶然として、謠をうたふ聲が、長閑に聞えたりした。

その頃の東京は、もう電車に進んで居たが、それでも今日のやうに、四通八達しては居なかつた。品川から上野と淺草行の他は、外濠線が開通して居た。青山線は一丁目まで、廣尾線は天現寺まで、新宿線は四谷見附までと云ふ風に、また東京の町の中には、十年前の田舍びた景趣が流れて居た。帝國劇場も有樂座もなく、丸の內の三菱原には、まだ雜草が離々として居た。

三越呉服店も白木屋も、今日のやうな構へではなく、此所にも彼所にも、舊い江戸の面影が殘つて居た。京橋際に貧しいビーヤホールがあつたのと、銀座裏に加六と云ふ居酒屋があつた他には、カフヱーもバーも、探ねることが出來なかつた。それでも臺灣喫茶店だけは、今の所に開業して居て、私はよく吉野氏に連れられては、一杯五錢のウーロン茶や、ウヰスキーなどを飮で居た。

名古屋驛で、大阪の女に端書を送つた程の私であつたが、東京に着いてからは、もう何も彼もケロリと忘れたやうになつて居た。そして東京の凡てに、或る懷しさと好奇心とを有つて居た私は、少しもじツとして居ることが出來なかつた。社の歸途には、必らず何處かへ寄り道して、珍しい東京に接觸して居た。

働きながら遊ぶと云ふやうな生活が、やがて次々に、私の前に展開した。

七、吉原ゆき

大阪以來の知己である喜多村綠郎君を、本鄕座の樂屋に訪問したのは、東京に着いた日の晩であつた。「俠艶錄」の女優に扮して、重の井子別れの一幕を演じて居た喜多村君は、「よく來た、よく來た」と云つて、私を迎へて吳れた。

隣棧敷に下町らしい二人連の若い女が居て、歯切れの好い東京言葉で話して居るのが、私には何とも云へず懷しかつた。「さよか」と「さうだつせ」と「そやさかい」とに、かなり耳くなつて居た私の聽覺は、久し振りに聞いた東京女の東京言葉に、胸の透くやうな爽快さを感じた。「空氣も、女も、氣候も、言葉も、仕事も、暮し向も、何も彼も東京に限る」私はさうも思つて、東京に來た甲斐があつた幸福を、感謝せずには居られなかつた。

喜多村君の門人である俳人增永徂春君を誘つて、生れて初めて吉原遊廓へ遊びに行つたのは、その夜更けてからのことであつた。十年前の東京生活に、吉原遊廓を見ることの出來なかつた私は、「東京へ行つたら、第一番に吉原を見やう」と、さう思つて居たのだつた。かなりの通であるらしい徂春君は、私を張店の前に連れて行つては「何うです、盛なものでせう」などゝ云つた。あの格子の中に、化粧した女達が列んで居て、それを素見客がぞめいて行く有樣は、私に異樣な驚きを感じさせた。

「これは、人道問題ですね……。私はあの前に立つて、女達を正視するに忍びない……」

「誰でも最初は、さう感ずるのですが、少し馴れて來ると、

あの吸付け莨と云ふ奴に、千萬無量の面白味を覺えるのです……」

私達はこんな事を話ながら、中米樓と云ふ家に登つた。そこは中店（ちうみせ）で、二人で十圓もあれば、一夜を興ずることと出來るらしかつた。大阪の遊廓とは違つて、氣分にも情緒にも、特殊のカラーが流れて居ることに「遊び」の面白さがあるやうに思はれたりした。

東京は愉快な都だ……私はたゞ何となく、そんな風の事が考へられるのであつた。

八、探訪日記

國民新聞で、最初に課せられた仕事は「探訪日記」と云ふ題で、一種の續き物を書くことであつた。松崎天民と署名して、目黒の競馬場に、賭博公許の盛觀に驚嘆したのが、その日記の第一回であつた。

「淺草公園の水族館で、鰐が子を生むださうだよ。君、一つ行つて見て來ないか、鰐の子供を訪問に……」

結城氏の探訪的奇才は、何時もこんな風に、奇想天外に動くのが例であつた。何がな紙面に新味を齎して、新取材に、新表現に、讀者の心をアツと云はせやうと云ふ點に、結城氏の新聞製作者としての非凡な技倆が顯はれて居た。それ火事だ、それ心中だ、それ殺人だ、それ大雪だ、それ大洪水だと云ふ風に、天變地異、何でも彼でも手にかけねばならぬ探訪記者は、鰐が子を生でも出かけねばならぬ仔細を、私は教へられたやうな氣持がした。

私は水族館に行つて、一匹の子を小瓶に入れて貰つて、それを編輯へ持て歸つたりした。繪心のある守武陶雨君がそれを寫生して、木版として挿入したのを見ると、立派な一つの記事となつて居るのに、私は心から感嘆した。大きな問題や事件にのみ、記事價があるのでなくて、何んな小さな出來事でも、取扱ひ方と表現の方法一つで、獨立したニュース價が出來る所以を、私は實地に就いて教へられたやうな氣持がした。

二十二字詰六段組を、十九字詰七段組に更へてから、まだ間も無い頃であつた。初號や一號の大活字を標題に使ひ、社員の署名に四號活字を用ゐたのは、國民新聞が最初であつた。その頃の報知新聞は、本文の中に二號活字を盛に用ゐて居たが、初號、一號の二段抜き三段抜きを初めたのは、國民新聞が第一番であつたやうに記憶して居る。

滋味で、上品で、納つて居た國民新聞は、次第に派手に華かになつて、先つ同業者の注目を強く惹くやうに變つていつた。

九、同業記者

本所と深川の木賃宿に泊つて「木賃宿通信」を書いたのは、十二月中旬のことであつた。今は何處かの住職に納つて居る田口杏村君が、私と其の行を共にして、業平町や富川町に出沒した。觀察にも、記述にも、何の新味も無かつたけれど、それが私のためには、東京に於けるお目見え仕事であつた。

その頃の同業者で、私の記憶にあるのは、朝日の山本笑月、黒田撫泉、水谷幻花、右田寅彥、饗庭篁村、都の遲塚麗水、伊原青々園、林田春湖、渡邊默禪、岸田菊作、中央の水田南陽、鄕司重次郎、報知の鹿島櫻巷、田中萬逸、煙山二郞、萬朝の松居松葉、中内蝶二、田口掬汀、東京日々の齋藤弔花、落合浪雄、時事の伊坂梅雪、多和田菱仙、岩本盤門、二六の野澤枕城、守田有秋、山田旭南、本吉豐次郎、渡邊利喜松、讀賣の松川二郞、日本の井上劍花坊などの諸家であつた。その他、有名無名の若い探訪記者達とは、能く出先で落合ふことが多かつた。

大阪の金尾文淵堂の二階で、薄田泣菫氏の紹介に依り、初對面の言葉を交した德富蘆花、正宗白鳥の二家のことが、思ひ起されたりした。高槻の齋藤弔花の山莊で、初めて國木田獨步氏に逢つたことや、曾根崎の角田浩々歌客の假寓で、黒眼鏡した遲塚麗水翁を見たことなども、それからそれへと思ひ起されたりした。道頓堀の朝日座で、新派劇の「己が罪」を見物して居た時、作者花房柳外の紹介で、初めて伊原青々園翁と言葉を交したことなども、次々に想ひ起されるのであつた。

私は餘りの懷しさに、芝櫻田本鄕町の家に、國木田獨步氏を訪ねたりした。朝寢の獨步氏は、睡むさうな眼をコスリながら、「何時來た、國民新聞へ、さうか」と、ぶつきらぼうに云つて、私に不快な感を與へたこともあつた。獨步社の沒落で、肝癪玉がぐう／＼して居た時のやうで、健康も其の頃から、大分勝れぬ勝のやうに、私には見受けられた。

一〇、議會見學

政治記者として、非凡の腕を揮つて居た吉野左衛門氏は、私を衆議院に連れて行つて、いろ／＼と見學させてくれた。園城寺天山氏や、倉辻白蛇氏などの顏を見たのは、議會の階下に在つた食堂で、飯を食つた時のことであつた。他にも技倆のある若い政治記者達が、一社から二人も三人も出張して、政治季節の消長を傳へて居た。

社會部からはまだ誰も、議會に出入して居ぬ時代であつた。今日では一社から三五人の他に　社會部面からも一二人の記者

が出かけて、盛に雜觀記事を書いて居るが、その頃は政治部面の事に少しも手出しの出來ぬ時代であつた。從つて議會議事を、社會記事化したのは、國民新聞が最初であるとも、主張し得るのだつた。私は何も彼も手探りではあつたが、それでも吉野氏の教導に依つて、議會の空氣に馴れていくことが出來た。吉野氏の本記事の他では、萬朝に出る倉辻氏の議會記事が、好評を博して居た。

初めて芝の紅葉館や、烏森の湖月に行つて、酒の不味に驚いたのも、議會季節中のことであつた。一種のあこがれに似た氣持で、紅葉館で飲むことに、紅葉館で食べることに、そこの女達を見ることに、私は強い期待を抱いて居た。けれども、そこで飲だ酒は、酒精分が強くて、大阪の酒に馴れて居た私の舌は、たゞ徒らに苦澁を感ずるのみであつた。そこの女達にしても、大阪の仲居はんと同じやうなもので、藝妓ともつかず、私娼ともつかぬやうな風體が、私には異樣に感じられたりした。「東京で美味い酒を飲まうと思ふな」と、大阪の友達は云つて居たが、その東京の酒が、これほど不味であらうとは、全く思ひも寄らぬことなのであつた。

烏森の湖月で食べた料理なども、たゞ盛澤山と云ふだけのことで、長い間大阪の料理に馴れて居た私の味覺には、見る物食べる物が、たゞ何となく不味であつた。

一一、水天宮裏

「大阪のやうに、美味い海魚(さかな)は食へないし、牛肉も駄目だけれど、東京には私の好きな物が二つある。一つは例のべつたら市の淺漬で、一つは蛤鍋なんだよ。これだけは大阪で、何と思つても食べられないからね」

私は友達に向つて、よくこんなことを云つて居た。東京は「漬物の都」と云つて宜いほどに、澤庵漬にしても、淺漬にしても、私の味覺を喜ばせてくれた。それに、吉原歸りの千束町、「お風呂いお召しんさい」と怒鳴つて居た小松屋の蛤鍋は、私に嬉しい食べ物の一つであつた。その頃は、蛤一人前が五六錢で、五六十錢もあれば飲で食べて滿腹することが出來て居た。大阪のやうに、美味い牛肉は食べられなくても、此の蛤鍋あつて、僅に私は慰めることが出來た。

水天宮の裏通りに、巣うて居た私娼窟へ、出入することを覺えたのも、冬の寒い夜半であつた。「木賃宿通信」が終つて、正月を待つばかりの心の閑散を、私は田口杏村君に案内されて、初めて其のTと言ふ家へ行つたのだつた。そこには高髷や銀杏返しや、束髮や大丸髷やらが、白粉を濃く塗つた白い顔を、明る

い電燈の下に見せて居た。田舎から出て來たばかりらしい、銘仙の不粋な姿をしたのや、お召の上に黒縮緬の羽織を重ねたのや、紋羽二重のケバ〳〵しい扮装をしたのや。皆が世の光を隠れるやうに、怯々した態度で、淋しさうな笑顔を見せて居た。

十一時頃から行つて泊つても、五圓とはかゝらぬ安價で、女色を漁り得る機關が整うて居るのは、如何にも東京であるらしく感じられた。そこには代議士も、俳優も、作家も、批評家も、畫家も、商人も、軍人も、記者も、會社員も、銀行員も、華族も、平民も、何人もが大手を振つて、出頭沒頭して居た。

住むに甲斐ある東京であることを、私はさうした遊びの方面にも、強く〳〵喜ぶやうな男になつていつた。

一二、足尾事件

足尾銅山に坑夫の暴動事件が起つて、東京の各社から續々と出張したのは、明治四十年二月上旬のことであつた。此の事件を逸早く報道したのは、宇都宮市に居た國民新聞の通信員で、米山蟻兄と云ふ人であつた。

「こいつは、大事件になるぜ……」

結城氏はさう云つて、先づ市川由吉君を第一特派員として、足尾銅山へ急行させた。大々的に報じた國民新聞の記事は、讀者よりも先づ同業者を強く刺戟したと見えて、各社からも社會部の手腕家らしい連中が、續々と足尾へ出張した。飯場を破壞したとか、事務所を襲ふたとか、爆烈彈が紛失したとか云ふ通信は、事件の色彩を一層誇大にして、私達の心持までも昂奮させた。

市川特派員の行方が、不明になつたと云ふ急報と、遂に軍隊が出動することになつたと云ふ事實は、編輯局の感情を極度に高潮させた。私が第二特派員として、足尾へ急行すべく命ぜられたのは、事件が起つてから、四日目か五日目のことであつた。當面の事件は、軍隊の出動に依つて、稍下火になり初めて居ても、私は私としての仕事が、そこに殘されて居るやうな氣持がして、喜び勇んで出張した。私は其の頃、大阪から持越して居たゴノコツケン菌のために、攝護線を病で居たけれど、天下の一大事と、功名を成すべき絶好の機會を前にして、病氣の苦痛などにかまけて居る譯にはいかなかつた。

宇都宮驛前の旅館白木屋支店で、米山通信員と會見した後、翌日は日光から細尾峠に向つた。今日のやうに、足尾線は開通して居ず、雪は一二尺も積つて居る中を、足尾と云へば遠い〳〵山の中の別世界のやうな氣持がした。その深い雪の中で、坑夫達は求めるために騒で居るのだと思ふと、私は最初から此

の事件に對して、坑夫達に味方しても宜いやうな、一種の感情に燃えて居た。

呎尺を辨ぜぬ程に、吹雪は猛り狂うて居た。

一三、吹雪の中

軍隊の背嚢を積だトロ馬車の上に、私は腹這になりながら、大谷川のほとりを細尾峠の麓へ運ばれて行つた。峠路には雪が深くて、駄馬に賃しても、蹄が滑り勝で、寒さと冷たさとに、手足は凍へる程であつた。

足尾では鶴屋と云ふ宿屋に、各社の人々が本陣を構へて居た。電報一線、電話一線の不便では、何んなに競爭しても、交通線を占領する譯にはいかなかつた。そこで特派員達は、鶴屋の二階に合同編輯局を設け、電話係、電報係、訪問係、探訪係、會計係と云ふ風に、手別けをして働いて居た。萬朝の龍澤、毎日電報の松内、朝日の太田、日本の近藤、日々の落合、やまとの加藤、中央の郡司、國民の市川、二六の野澤、渡邊、中外商業の尾崎、讀賣の後藤と云ふ風に、一騎當千の猛者ぞろひであつた。

馬肉鍋を食はされては、吹雪の中を活動するのが、私達には愉快であつた。中央の水田、報知の田中兩君は、私達の仲間に入らず、別の宿に泊つて、別な活動をして居たが、合同編輯の方で、電話も電報も占領した形なので、一方ならず不便のやうに見受けられた。そして事件が落着してから、各社の人々は次々に引揚げたけれど、私だけは四五日滯在して、足尾銅山を見物した。坑夫に扮裝して通洞坑内に入り、「爆烈彈の響」と題した十回ほどの續き物を書いたり、いろ／＼の足尾だよりを送つたりした。私のさうした何でも無い働きでも、世間の注目を惹くことが出來たほどに、その頃の社會記者の取材や表現は、幼稚の域を脫せぬのであつた。

滯在十日、側面觀察の任務を終へて、日光まで引揚げた時には、俄に明るい世の中へ蘇へつたやうな、嬉しい氣持がした。寒さ凌ぎのために飲だ酒のために、尿道周圍炎の腫物が潰れて、全癒症狀になつて居たのも、私には氣持が好かつた。

社からは、臨時賞與として、金二十圓也を頂戴した。

一四、先生の癖

「や、御苦勞、御苦勞……」

と云つて、德富先生は先づ肩を叩き、そして堅く／＼握手されるのが例であつた。何んなに爲事に苦勞をしても、先生からお褒めの言葉を下さることに、私は凡てが報ゐられるやうな氣

持がして居た。まだ十七八歳の少年時代、村役場の臨時雇として、村税の徴收書を配付したり、種痘の布令を持歩いたりした時から、新聞記者に爲りたいと思ひ、德富先生の名に憧憬れて居た私であつた。

「せめて山陽新報の記者にでもなつて、月給を十五圓も取るやうになりたいなア……」

さう思つて居た私が、天下の大記者である德富先生の下で、國民新聞記者として働き得る境涯に置かれたことは、たゞ其の事のみで、既に報ゐられて居るやうな氣持がして居た。そこへ、いろ／＼と激勵の言葉をかけられたり、御苦勞／＼などゝ云つて、肩を叩かれたり握手をされたりすると、私はもう有頂天になつて、無條件に幸福を感じたものであつた。

其の昔、結城禮一郎氏などは「この小僧ッ」などゝ怒鳴られて、新聞つゞりを卷いたので、よく撲られたと云ふ話であるが、先生の眉宇の間には、さうした怖い一面が、全く無いとは思はれなかつた。それに先生は、編輯局が散亂して居るのが大嫌ひで、莨の灰が机の上に落ちて居ても、直ぐ給仕を呼では、それを掃かせて居た。靴に泥が附いた儘で、編輯局に入つて來ると、誰でも彼でも其の不注意を叱り飛ばされて居た。少し髭が延びて、モジャ／＼して居ても、先生は不愉快さうな表情をして、それを眺めて居られた。

建物は古いけれど、日本の新聞社中で、何處が一番清潔なと云つて、國民新聞社ほど能く掃除の行屆いて居る社は、さう澤山は無いらしく思はれた。新聞社と云へば、編輯局と云へば、亂雜な所のやうに思つて居る人々へ、見せたいのは國民の編輯局であつた。

今も昔と變らぬことであらう。

一五、新入記者

何かの過失事件で、大阪の堀川監獄に入つて居た同郷の友、佐藤去來が上京したのは、恰度その頃のことであつた。一ツ木町の私の宅に居て、ブラ／＼して居るのを氣の毒に思ひ、國民新聞社に入れてくれたのは、結城禮一郎氏であつた。

上野公園に博覽會が開かれて、私と佐藤とは其の方を受持つことになつた。痩せては居るが背の高い、五角形の顏ではあるが、眼に一種の魅力を有つた佐藤は、若いに似合はず世俗の才にも長けて居た。田舍者に化けて、上野界隈の宿屋に泊り歩いた彼の通信は、短かつたけれど、探訪取材の急所を突いて居た。その文章は器用一つの俗惡であつたが、新聞記者向らしい達者が、洗煉一つでモノになりさうに見られて居た。

此の佐藤は、岩倉具幸氏と知合になつて、その借金整理に奔走したり、いろ／＼の女に思はれたりして、一年内外で社を退くやうになつた。何んな仕事を遣つても、才氣一つで押して行く强い力と、世辭と智惠とを有つた彼は、それから後今日までも、様々の世間を渡つて居るらしかつた。新聞記者としての一筋道に、勇往邁進して居ても、今頃は一家を成して居る男であるに、何となく惜い心地がした。彼と前後して、澤田撫松君も入社したし、高須梅溪君も入社したが、一番輪廓がハツキリと、强く濃く思ひ起されるのは、其の頃の佐藤去來であつた。

國木田獨歩の紹介で入つた澤田君は、趣味的の筆致で、情話物を書いて居たが、餘り長く居ずに、退社したやうであつた。高須君にしても、若い時から文名を馳せて居た人だけあつて、新聞社の社會部の外交など云ふ仕事は、馬鹿／＼しくて興味が無かつたのであらう。僅に一年内外で、私達に「左様なら……」をしたやうであつた。川端龍子畫伯も平福百穂畫伯も、その頃はもう入社して居た。

さうした同僚達の出入を數へるだけでも、私は其の頃が懐しく想ひ起されるのである。

一六、浮かれ心

社の同僚達の中で、最初に親しくなつたのは、永井鳳仙君であつた。浪花節の事を續き物にして居た永井君は、本職の繪の方よりも、演藝記者として立つことに、格別の興味を覺えて居るやうに見受けられた。

私は此の永井君に連れられて、方々を飲み歩き食べ歩き、遊び歩いて居た。櫻花の咲いた四月の如きは、僅に五六日歸宅したのみで、多くは鳳仙君に連れられて、紅燈の巷に出入して居た。東京の温柔郷に就いて、若し少しでも私に知ることがあるなら、それは主として永井君の教導に負ふ所淺からぬからであつた。飲むにも、食べるにも、女と遊ぶにも、その頃の東京はまだ大に安かつたけれど、私は何時も永井君におごられては、あらゆる方面を漁り歩いて居た。一つには、珍しい東京の世の中に、少しでも多く接觸したいといふやうな、眞面目な記者的慾望も手傳つたけれど、それは表面の申譯に過ぎなかつた。私は引張られたり、永井君をそゝのかしたりしては、明るい燈火の巷へ、浮かれ歩いて居た。

初めて新橋の藝妓を見たのも、神樂坂と云ふ所を知つたのも、下谷へ泊つたのも、烏森で寢たのも、芝の神明で遊んだのも、澁谷方面まで深入したのも、皆この永井君に導かれたのであつた。濱町の小常盤で、大阪以來の美味い料理に舌皷打つた

のも、逆浦の餓の鬼から拔いて、あわびの水貝に、美味い／＼と云つたのも、皆この風仙君が案内人であつた。痴態た遊びのやうであつても、私は此の浮かれ歩きのために、何んなに「東京と云ふ所」を、詳しく知ることが出來たであらう。これをしも記者的教養の一つとして、私は永井君に向つて、感謝せねばならぬのであつた。

永井君は色の黒い小柄の人であるが、その聲は銀鈴のやうに透つて居て、その鈴さびや有明や磯節には、一脈の哀音が流れて居た。私は其の哀調に陶醉したいために、殊に永井君と一緒に遊び廻つたらしかつた。

一七、地方版を

新聞の第一面を廣告ページにしたのは、東京朝日か中外商業が最初であつたけれど、各欄の下に二三段づゝの廣告を入れたのは、國民新聞が第一着手であつた。最終の一ページや、中央の一欄か半欄に、廣告だけを組込むやうな遣り方は、時代に遲れたのであらう。

横濱版とか、千葉版とか、長野版とか、兩毛版とか、東北版とか云ふ風に、地方行の地方版を創始したのも、國民新聞が第一着手であつた。今日では朝日、時事、日々、報知、萬朝、讀賣と、何の社も此の地方版を入れて、地方の讀者に便し、地方の讀者を得ることに、汲々として居るが、第一に此の地方版に着手したのは、結城氏であり、國民新聞であつた。編輯記者としての立場から見ると、此の地方版の存續と云ふことには、多少の疑議もあり異存もあるが、大勢は地方版の存置に依つて、都會新聞の地方新聞化と云ふやうな、珍妙な現象を呈して居るのであつた。

晝は編輯の手傳をしたり、外交に出かけたり、時には地方版の編輯をしたり、夜は宿直の編輯に從事したり、爲事は何でも手にかけねばならなかつた。三苫落魄居、新谷貢など云ふ若手が入つて、編輯局は人數の上からも、次第に膨脹して行くやうであつた。大阪で遊んで居た高山血米君が入社して、雲峰と云ふ號で何か書くやうになつたり、北海タイムスに居た長井柳歩君が入つて、先づいかさまの秘密娛樂書を賣る輩を、堂々と征伐したり、社會部は賑やかになつていつた。門田稻葉と云ふ東北の熱血男兒が入社して、社を休んだり出たりして居たのも、其の頃のことであつた。

「今月は廣告料が、一萬二千圓を突破したから……」

と云つて、廣告部の方からカステラを御馳走してくれたのも、其の時分のことであつた。紙數も次第に増加して、五萬六

壘を突破して、八萬に手が屆きさうになつて居た。

一八、谷中村へ

谷中村の破壊事件と云ふ、珍しい出來事が、宇都宮通信員の米山君に依て、逸早く報ぜられたのは、矢張り國民新聞であつた。渡良瀬川の治水方針で、谷中村一帶を貯水地にするため、その住民に立退きを命ずると云ふ、一寸、私達の探訪興味を唆る事件であつた。

社から出張を命ぜられて、早速、古河町へ出かけた時、夕闇の堤の上で逢つたのは、時事の多和田菱仙君であつた。「早いな」「君も早いな」と話ながら、加美屋と云ふ旅館に投宿して、私はいろ〳〵と記述の樣式を考へたりした。今日では初號二段抜きか、一號三段抜きにして、見た目本位の大々的に報じて宜い事件であるが、當時は僅に二號標題で、然も長さには制限が無く、書いても宜い時代であつた。それに事件の內容は、強制執行に依て住宅を破壊し、村民を立退かせると云ふ、極めて單純な行動を報ずるだけなので、觀察と文章とに依らねば、その實情を讀者に傳へることは出來ぬのであつた。

一二日を經ると、東京の各社からも續々出張して來て、加美屋は「新州屋さん合宿所」のやうな光景を現出した。私は口語體で、鷄が啼いたとか、老人が腰を屈めて歩いて居るとか、空は曇つて居るとか云ふ風に、見たまゝ感じたまゝを書いて、社に送稿した。そこには義人と云はれた田中正造翁や、島田三郎氏や、木下尚江氏や、福田英子女史や、警察部長や、巡査や、村民の老若男女やが居て、一つの悲劇的場面を展開して居た。事件の內面を探索するのでなくて、表面に現はれたそれ等の光景を書いたゞけで、一つの記事が出來上るのであつた。

「東京の新聞記者樣……栃木縣の役人は泥坊でがすぞ……。お前達、死でも此の土と離れるでねえ。警察の暴力で、人民の墳墓の地を、何うすべいと云ふのか……」

斯う云つて怒號して居た義人田中正造翁の面影は、深い感銘と強い印象とを、私に與へずには居なかつた。

一九、田中正造

雜誌「文章世界」の「新聞記者中の文章家」と云ふ項で、「松崎天民は新聞記者の手に、小說家の眼を具へて居る……」などゝ褒められたのも、此の谷中村通信が、國民新聞に出てからであつた。島田三郎氏と共に、此の破壊事件を見て居た東京每日の小山鼎浦氏も、「あなたの通信が一番實感的で、また最も面白かつた」と云つて、賞讃してくれたりした。

猪を交へた頭の髷を薙でくゝり、黒木綿の色褪せた紋付に、黒毛繻子の行燈袴を穿いた姿が、半生を官權に對する反抗と、人民のための獅子吼に、老い疲らした田中正造翁であつた。血涙をふるつて怒號するかと思へば、狼のやうな鼾聲をあげて晝寢したり、私達に向つて、強制破壊の非道を訴へたり、その一擧手一投足には、高潮した劇的興趣が溢れて居た。この田中正造翁在つて、私の谷中村通信にも、初めて精彩を放つことが出來たと云つて宜いやうな、私はそんな心持がした程であつた。

加美屋旅館には、若い美しい、娘さんが居たり、色氣盛りの女中が居たりして、若い私達の間には、いろんなエピソートが醸されたりした。時事の多和田、二六の渡邊、朝日の太田、中央の郡司、萬朝の伊藤、讀賣、報知、日々の某、某、某など、皆が血氣盛りであつた。熱血の多和田君などは、少し酒に醉うて來ると、矢でも鐵砲でも持て來いなどゝ云つて、私達を驚かしたりした。淋しい古河の町にも、藝妓が居たり、遊廓があつたりして、夜を興ずるには何の不便もなかつた。足尾へ行つた時には、雪の中をしる粉屋や貸座敷へ登つて、夜の世界を經驗したが、社用で地方へ出張滯在して居る若い記者達にとつては、此の仕事の暇の輕い遊びと云ふことが、何よりも嬉しいことなのであつた。

古河驛を通過する度毎に、何時も私の心を強く突くのは、谷中村であつた、田中村正造翁であつた。加美屋旅館や、若い女達や、果は三十歳の私が、懐しまれるのであつた

二〇、作家招待

時の内閣總理大臣西園寺侯爵が、駿河臺の私邸に小説家を招待して、三日に亘る雅宴を張つたのも、其の頃のことであつた。何がな新しい新聞材料に、功名手柄をあげやうとして居た私にとつて、其の催しは好い一つの機會であつた。

私は當夜の光景を、讀者に實際を見るやうに報じたいと、そればかりを苦心して居た。普通の雜報的樣式では、餘りに平凡であると共に、取材の上にも、表現の上にも、新味を出したいと心構へて居た。そして其の準備行動として、私は西園寺邸に、座敷の結構や裝飾などを問合せ、濱町の常盤にお料理、献立を訊き、更に席に侍する新橋藝妓の甲乙なるかをも、手帖に書きとめて居た。更に大久保に國木田獨歩氏、牛込に小栗風葉氏、麻布に廣津柳浪氏、本郷に徳田秋聲氏などを訪ねて、會が果てから何處かで會同し、當夜の光景を話されるやうに、前以て交渉したりした。

最初の晩は廣津柳浪氏に依て、席上の委曲を盡す豫定で居

た。小雨そぼ降る中を、西園寺邸の玄關前の植込の中に隱れて、來着の順や服裝などを、それとなく點檢して居た。他社の人々も、門の内外に押寄せて居て、恰も一人を爭ふ宿屋の客引のやうに、油斷なく氣構へて居た。大阪以來の知人である横井時雄氏は、植込の中に私を發見して、

「おい、穩探しか。駄目だぜ、駄目だぜ！」

などゝ、大きな聲で笑つたりした。やがて待受けて居た十時過ぎになると、柳川春葉、川上眉山、廣津柳浪の三家が、何れも蹣跚とした足取りで、玄關前に現はれるのであつた。

「廣津先生、松崎です、何うぞ……」

「や、僕の後に後いて來給へ、それから、それから……」

斯う云つて、此の三家の乘つた車は、門前を右の方へ馳せて行つた。「それ逃がすな」とばかり、同じく車で急行すると、一行は神田の金清樓へ、スーと入つて行くのだつた。

二一、興味記事

「や、來ましたね、巧く遣つてるな……」

と、見れば朝日の黑田撫泉君や、瀨戸半眠君や、山本笑月君などが、二階の廣い座敷に陣取つて居た。そこは朝日新聞社が、此の三家を迎へるために、特に設けた場席なのであつた

それをも構はずに、他社の連中も續々と詰めかけて來て、柳川春葉氏の口から、坐つた席順やら、寄せ書の文句やら、席上の雜話などを、詳細に聽き取るのであつた。廣津氏は大分醉つて居たが、それでも時々、春葉氏の誤りを訂正したりした。十年前、國民新聞社の小使であつた當時、牛込矢來中の里の居に訪問して、「小說家になりたいから、弟子にして下さい」と賴んだ因緣があるので、柳浪氏は何となく私に懷しかつた。

「や、お初めてゞす。私、川上……」

さう云つて、川上眉山氏は、叮寧な言葉を返されたりした。

短い時間内に、大急ぎで一切の事を聞いて、急いで社に歸つて、私は三段餘りの長い記事を書いた。それも、編輯長足下に宛た復命書の形式にして、當夜の光景は細大漏れなく細敍したのであつた。

三四人も出て大掛りに働いた朝日の記事は、一段内外の閑素なものであつた。他社の記事も短かつたり、間違ひだらけであつたりして、勝利は私の上に落ちた。豫備行動に二日を費した甲斐はあつたと共に、「幾行でも書き給へ、君に任せるから……」と云つた結城氏の言葉が、私にそれだけの力となり、氣勢も添えてくれたので　つた。

二日目は神田の多加良亭で、德田秋聲氏から席上の樣子を聞

き、三日目は神田の製本屋の薄暗い店の間で、國木田獨歩氏に會の模様を話して貰つた。そして二日目からは、行數を短かくして、一段内外しか書かなかつたが、朝日の方は大變であつた。第一日の失敗を取返すためか、巖谷小波、大町桂月の兩家を拉して、兩夜とも全ページを費し、宴の模様や感想やらを、長く〳〵記述し報道してあつた。

興味記事にも、私達の苦勞は多かつた。

二二、牛と驢馬

大阪毎日の社會部に居て、有力な活動家の一人であつた田井羊公が、家庭の事情やら、氣分の行詰りやらで、その新夫人と共に上京したのは、谷中村事件の前後であつた。彼は本郷の下宿屋に居て、これから何を爲やうの考へも無いらしく、たゞブラ〳〵と遊んで居る風に見えた。

「結城さん、田井羊公ですがね、遊ばして置くには惜しい男ですよ。社の方へ、何とかなりませんでせうか……」

その前から、大阪に田井羊公と云ふ多望な若手が居ることを、私は結城氏に度々話して居た。そこで田井君の入社は、割合に話が早く運んで、彼も亦た私と同じ社で、同じ社會部で働くことになつた。大阪では朝日、毎日と、敵味方に別れて居ても、東京では同じ社の月給袋を貰ふ仲になつたのであつた。

この田井羊公が、東京に於ける目覺しい仕事は、新聞界の記錄破りとまで云はれた例の牛と驢馬の東海道五十三次ノラクラ競爭であつた。紙上の懸賞やら、關西遊覽會やらを催して、常に紙面を賑はして居た國民新聞では、更に斯うした催し物に依つて、紙面を賑はすと共に、讀者の興味を強く惹くことに、苦心經營して居たのであつた。

田口杏村君は牛方となつて、京都の三條大橋を出發し、田井君は驢馬係となつて、お江戸日本橋から出掛けると云ふ、その頃では隨分思ひ切つた、人を馬鹿にしたらしい、それでも面白い催し物であつた。この二人の道中通信と、二人は東海道の何處で、何日頃落合ふかと云ふことを、懸賞で讀者に募つたのが、一寸振つた思ひつきなのであつた。

私は京都に出張して、牛君の出發の光景を通信したり、東海道に驢馬氏を訪問して、その訪問記を書いたり、愉快な勤務の日が續いた。杏村の眞面目なやうで、おどけた道中通信と、羊公のユーモアに富だ紀行文とは、奇想天外の此の催しに相應したものであつた。

二三、乃木將軍

私の月給は五十圓となり、別に月手當として、十圓づゝを支給されて居た。日本新聞に居た千葉龜雄氏も、社會部の方に入社して、編輯をする傍ら、例のキビ〳〵した筆致で、文藝批評の筆を揮つて居た。

東京朝日の社會部は、石田寅彦氏の時代が過ぎて、澁川玄耳氏が新鋭の氣を以て、着々と新味を漲らして居た。「我輩は猫である」に依つて、一躍文壇の大家となつた夏目漱石氏が、大學の教職を拋つて、東京朝日に入社を傳へられたのも、其の頃の事であつた。鐵野椋十と云ふ戯名で、澁川氏が東朝に書いた「東京見物」は、文章のスタイルの斬新な事と、觀察の奇警な點とが、評判になつて居た。國民新聞では、國民文學の一欄を設けて、高濱虚子氏を主將に迎へたり、文藝的價値のある小說を掲げたりして、陣容に生氣を添へたのであつた。

私は此の前後にかけて、前橋市の選擧騷ぎに出張したり、甲州の水害地を觀察に行つたり、忙しい世の中を送つて居た。相州の片瀬の海濱に、學習院の游泳寮を訪問して、白砂の小松原に、斜陽を浴びた乃木將軍と、初見參したのも、その年の夏であつた。日露戰役に愛子二人を失つたと云ふことに、悲劇的の感想を抱いて居た私は、この初對面の時所に、かなり感傷的の詠嘆を感じて居た。それに伏見若宮殿下に、謁見を仰せ付けられたりして、記者としての分際に、一種の昂奮を覺えて居たと見え、私は極度に主觀的な一文を書いて、それを本社に送つたりした。

「何時か一度は、お目にかゝりたいと思つて居ました……」

斯う私が云ふと、乃木將軍は眞面目に、

「こゝも能く觀て下さい。房州の方の學生游泳の模樣は、何んな鹽梅かな……」

と、夕陽を浴びて、小松原の中に直立した姿は、私に劇的興味を想はせるのだつた。

市川左團次の歸朝を横濱に迎へて、門前拂ひを食つたのは、その翌朝のことであつた。

二四、河原乞食

横濱の上州屋の店頭で、大柄な浴衣姿の裾をハタげた儘で、立つて私に挨拶したのは、木村錦花と云ふ芝居者らしかつた。親しく左團次に逢つて、洋行中の感想を聞けよと云ふ、社命の重きに考へても、私は何とかして、新歸朝の俳優高島屋に面會したかつた。

「今、寢て居ますから……」

が「病氣ですから……」になつたり、「何人にもお目にかゝれ

ません」に變つたりして、私は馬鹿にされて居るやうな氣持がした。乃木將軍にも逢へたし、伏見若宮様にも謁見を許されたのに、何うして左團次は逢つてくれぬのであらうと、私は不思議に思つたりした。

不快にこそ思へ、左團次に對しては、何の恩怨も無いけれど、私は左團次に逢へなかつたことを、社に復命すると共に、讀者に對しても、報告せねばならなかつた。「左團次に逢へぬ記」と云ふ、一段餘の署名した記事は、斯うして國民新聞に掲げられたのであつた。そして心の中では。「私が新聞屋ならお前は河原乞食なんだ」と云ふやうな、嚙で吐き出してしまひたいやうな感情が、こんがらがつて居た。

明治座で旗揚げした時には、樋野屋のおやぢが、三越の呉服切手を持て來たり、演藝通信の小出緑水君が、左團次を連れて社へ挨拶に來たりした。私のさうした記事には、日本の井上劍花坊や、朝日の水谷幻花翁が共鳴して、「遣つつけてしまへ」など云ふ、凄い文句が聞えたりした。當時の左團次の人氣と云ふものに、私の記事が少しでも支障になつたとすれば、それば思ひも寄らぬ影響とでも云ふべきものであつた。

新聞社の用件を帶びて、知名の人々を訪問した場合に、快く引見されるほど、愉快なことは無かつた。同時に、居留守を使はれたり、取次の者に「何用で來たか」などゝ云はれたり、面會を斷られたりした時ほど、ツク〲外交記者を「厭だなア」と思ふことは無かつた

「人に逢ふ」それが既に、一つの仕事なのであつた。

二五、山田桂華

京都日の出新聞の社會部長で、大阪以來の友人である山田桂華君が、私の紹介に依て、國民新聞に入社したのは、田井羊公の入社と前後して居た。

「東京で一修行したい」と云ふのが、山田の表面の申分であつたが、その實は京都でも行詰つて居て、一轉機を劃する必要に迫られて居るらしかつた。色の白い背の高い、少し猫背ではあつたが、何となく人柄らしい男に見えた。先斗町の藝妓を安價に落籍して、その女と一緒に上京した後は、本郷森川町の下宿や、月島の海氣館に居たりした。

都新聞の懸賞脚本に當選して、その作「醍醐の花見」が、歌舞伎座に上演されたのが、彼のためには不幸な動因であつた。「新小說」に書いた脚本に對して、川上音二郎が上演する時の謝儀とか稱し、二百金を彼に贈つたのも、彼が不幸に陷る素因となつて居た。彼は國民新聞を退くと間もなく、中央新聞に入

社して居たが、それも長くは續かなかつた。社に居る時から、極く緩速度ではあるが、彼の精神狀態は、異常な方へ傾いて居た。月島の海氣館でも、築地の待合でも、吉原の貸座敷でも、輕い狂態を盡した後、果は京都に歸つて、發狂と肺病とで、短い生涯の幕を閉ぢたのであつた。

「死ぬる時には、氣違ひの方は癒つて居たらしいが、肺病患者の常でね。病氣が快くなつたら、東京へ一緒に行かうなどゝ云つて居たが、先生たうとう大往生さ。それでも不思議だねえ、京都へ歸つてから死ぬるなんて……。人間は死ぬる時には、自然に死所へ導かれて行くのかも知れないね……」

などゝ、臨終の時に居た大阪の高尾楓蔭は、そんな事を語つて居た。誇大妄想狂や、偏執狂は、新聞界にも少なく無いけれど、三十そこ／＼の若さで死でしまつては、ほんとに口惜しいことであつた。

それから、もう十年以上にならう。

二六、獨歩の死

田井羊公の連れた驢馬が、東海道の茅ケ崎を通つた時、そこの南湖院の海に面した部屋には、國木田獨歩氏が病軀を横へて居た。心優しい羊公は、その獨歩氏を訪問することをも、道中の樂しみの一つに數へて居たらしかつた。

德富先生より托された果物の大きな籠を持て、私が獨歩を病床に見舞つたのは、それから間もない時のことであつた。「獨歩の病狀を報ずる書」と云ふ、眞山青果氏の文章が、讀賣新聞に出て居た頃のことで、容態は次第に惡化して居るらしかつた。驛から人力車で、病院の方へ向つて行くと、向ふからも人力車で歸つて來たのは、見舞から歸途の田山花袋氏であつた。

「田山先生……ですね。私は國民新聞の松崎です。國木田さんの容態は如何でせう！」

これが田山氏と私との初對面の場面なのであつた。十六七歲の頃、曉天生などゝ署名して「小說家になりたいから、弟子にして下さい」と云ふ手紙を送つたが、何の返事もくれなかつた、それが其の田山花袋氏なのであつた。

「國木田の見舞ですか……、少しは落着いて居ますがね…」

さうして別れた後、私は南湖院の病室で、痩せ衰へた獨歩氏の傍に、一時間近くも坐つて居た。大阪で逢つた時には、引入れられるやうな座談の上手に、感嘆したものであるが、病氣で食意地の張つて居る病人は、千疋屋の果物が好いとか、牛肉はヒレに限るとか云つて、凋れた聲で話して居た。

國民新聞の小使時代に、令弟北斗氏から親切にされて居たゞ

け、私はさうした意味からでも、獨歩氏を死なしたくないと思つて居た。けれども「國木田獨歩の死」や、その葬儀の記事を書かねばならぬ日が、やがて私の前に迫つて來たのであつだ。

「人間は正直に生きることだ！」

と、大阪で醉つた時に、獨歩氏は云つて居たが、死でからもう十年以上の月日が過ぎていつた。

二七、眉山自殺

「川上眉山さんが死にました」

「え、何時です、」

「今朝、小石川の宅で……」

さうした電話を聽いた刹那、私は直ぐ、

「自殺だ、自殺だ。自殺に違ひ無い」

と叫んで、そのまゝ編輯局を飛出した。小石川の宅へ行つて見ると、五分刈頭の山田旭南君が出て來たかと思ふと、入れ違ひに江見水蔭翁が顏を出して、私にいろ／＼と話をした。

「病氣では無いのでせう……」

「さうです。けれども死んだのです」

「自殺では無いかと思ひますが……」

「何うして、それが判りました？」

「たゞ何となく、そんな氣持がしたのです」

「實はね、君、君だから見せるが……。其れ此の玄關の横の室で、剃刀で、こゝを……」

「さうですか！。何うもさうだと思つた。で、原因は何でせう、お判りになりましたか」

「さうだね、いろ／＼考へて見たが、全く何うも夢幻的の自殺と云ふ他は無いね！」

「夢幻的の自殺！妙ですね！」

「眞の闇夜に、庭の松の枝に、蜘蛛が巢を張つたのさへ、川上君には見えて居たのだから……。何うも夢幻の間に遣つたらしいのだよ」

水蔭翁とこんな問答をした後、特に奥の室に招せられて、線香の煙たゆたふ所へ進んで見ると、そこには石橋思案氏や、細川風谷氏や、來馬琢道氏などが居並んで、白布を掩ふた故人の遺骸を守つて居た。

私は「川上眉山の自殺」と題して、四段餘に及ぶ長い記事を書いた。そして原因は「夢幻的」と云ふことにして、此の作家の藝術的煩悶や、生活上の惱みなどには、わざと深入りすることを避けたのであつた。

「君の第六感は當つたね」

と云つて、徳富先生は私の肩を軽く叩かれたりした。他の新聞の記事よりも、一番詳しく要領を得て居たので、私は自分を最限度に働かしたことの愉快さに、人知れず微笑むで居た。

二八、原因探訪

朝日新聞の記事は、僅に三十行ばかりで、最も見劣りがした。けれども、其の翌々日の紙面に、「川上眉山の自殺は生活難なり」として、原稿料から家賃、米屋、魚屋、薪炭屋など、各方面を調査した記事が、前日の失敗を償つて居た。

「夢幻的自殺なんか云ふことがあるか。調査を進めて行けば、朝日のやうな材料も得られるんだ。探訪記者と云ふものは、あすこまで突込まなくては嘘だよ」

酒を飲み過ぎて、何時も蒼白い顔をして居た吉野氏は、さう云つて居合せた篠原温亭氏に當つて居た。私は一人で探訪して、一人で書いて、たとへ原因は夢幻的と云ふことにしたにせよ、それも一つの見かたであつて、褒められこそすれ、妙に貶されやうなどゝは、夢にも思ひがけぬことなのであつた。

温亭氏は、「折角松崎君が得意になつて居るのに、あんな事を云はれては困る」とて、それから三四日、社に顔を見せぬやうな事もあつた。吉野氏にさう云はれて見ると、江見水蔭翁の話を其の儘に受け入れて、「夢幻的自殺」と云ふことにしてしまつた私の探訪上にも、手抜かりが無いとは云はれぬのであつた。同時に、何んな事件でも、その内容に深く立入つて見ると、善悪正邪の差別がつかなかつたり、悪が善になつたり、正が邪に變つたりするやう事が、私達の上には珍しいことでは無いのであつた。

「江見さんに、一杯食はされたかな」

私はさうも思つたけれど、また私人の感情としては、自殺の原因を朧氣にして置いて宜かつたとも、考へられるのであつた。そして此の探訪記者としての心持と、私人としての感情が、常に相錯綜したり、或は違つた方面へ反背する點に、「新聞製作者の悩み」があることを、思はずには居られぬのであつた。

私は斯う云ふ風にして、國民新聞社の二年間を、何の不平も無く、幸福に暮して居た。

二九、空氣動搖

意見の衝突があつたのか、それとも都合があつてのことか、私達の部長であつた結城氏は、牛と驢馬の競走が終つてから、次第に社に出ぬ日が多くなつていつた。そして、突然、退社の事が發表されてからは、温亭氏が實際の事に當り、計畫その他

の事は、吉野左衛門氏が引受けることになつて居た。

社會部員の出入も、相當に多かつたけれど、部長の結城氏が退社したことは、私達の心持の上にも、小さな波瀾を起さぬ譯にはいかなかつた。千葉、永井、田井、高山、長井、新谷、守武の諸君が居て、仕事の上には、何の差障りもなかつたが、然し氣分の動搖と云ふことは、何としても否む譯にはいかなかつた。心持好く働いて居た私の氣分も、何だか俄にダラけたやうになつて、怠け勝の日が續くやうになつていつた。

「結城さんが居なくなつてから、何だか仕事が面白くなくなつたやうぢやないか」

と云ふ者もあれば、中には平然として、

「今度は吉野さんが、大に遣るのださうだ。我々は部長が何人になつても宜い、たゞ當り前に勤めさへすれば宜いのだから……」

などゝ云ふ者もあつた。

「徳富先生は良い人だけれど、社内の事は先生の一存にも、行き兼ねることがあるらしいね。つまりいろ／＼と姑が多くて、結城さんも厭氣がさしたのだらう」

こんな風に、取沙汰する者もあつた。何れにしても、社の擴張事業は第一期戰を終へて、これから愈々第二期戰に入らうとする氣勢が、社内の空氣に漂ふて居た。

私と田井君とが、何でも無い事から、吉野氏の態度に不快を覺えて、それを理事の段隆介翁と、主事の山川瑞三翁に訴へたのは、明治四十二年一月四日のことであつた。別館の二階の一室で、いろ／＼と心持を語つて居るところへ、顏色を蒼白にした吉野氏が入つて來て、事柄は遂に大きくなつたのであつた。

三〇、退社の日

「何だ、貴樣達は、……。言ふことがあるなら俺に云つて見ろ、生意氣な…。貴樣達が社を辭めても、俺は少しも困らないぞ……」

吉野氏も餘程、私達の態度に對しては、不快に思つて居たのであらう。入つて來るや否や、聲色を慓はして、斯う頭から怒鳴り飛ばしたのであつた。

「何うです、萬事がこんな體裁です。田井君、引取らうではないか。段さん、山川さん、もう何事も申上げません……」

「こんな風ですからなア、怖うてしようがおまへんわ。歸りますから、何うぞ宜しう！」

私達は斯う云つて、社の門を出たのであつた。けれども、國民新聞社を退いて、一定の月給から離れてしまうと、その日か

ら生活に困る私達なのであつた。二人は社を出たけれど、赤坂の宅へ歸らうとはせずに、雪後の泥濘路を、銀座の方へ歩きながら、今後の身の振り方に就いて、いろ〳〵と相談した。

「朝日新聞に澁川さんを訪ねて、一つ相談して見やうではないか……」

私は斯う云つて、時を移さず澁川玄耳氏を訪問することを主張した。田井君は、

「社の方から、何とか云つて來るかも知れん依つて、それからにしては何うや」

と云つたけれど、私は此の氣持の覺め切らぬ間に、今後の事に就いて考へもし、方法も取つた方が、心持が好いやうに思はれるのであつた。社の方では心配して、篠原溫亭氏など、再三使者を宅の方へ寄來されたさうであるが、その時はもう朝日新聞社の應接室で、澁川氏に會つて居る最中なのであつた。

「ほゝ、二人ともさうかね。短氣は損氣と云ふ事があるから、熟考しては何うです」

澁川氏はさう云つたけれど、二人の入社志望に就いては、まんざら不可能のことでも無いらしい口吻を漏らすのであつた。

何と云ふ果敢い、何と云ふアツ氣無い、何と云ふ無造作な、退社であつたらう。——（東京の卷、前篇、終）

天民附記——若し機會が恕したならば、東京の卷後篇として、東京朝日時代を書いて、これを池邊三山翁の靈に、デジケートしたいと思つて居ます。

（六月一日夜）

葉扇羽扇から電氣扇まで

竹内大三位

一、扇子の國日本

日本人程、扇子を愛する民は世界に國多くとも見當らない。試みに女學校の生徒に問いて見ても、平常使ひとか、他所

行きとかの二三本は屹度持つて居る。更に下の小學校生徒の男の兒までも夏は大抵持つて居り、未だ乳の匂ひの抜け切らない樣な可愛らしい幼稚園の坊ちやん孃ちやんまでが、携えて居るから外國人は奇妙に感ずるのである。盛夏の日電車の中では、老若男女とも扇を持たぬ者は一人も無いと言つて宜しい位、若し持たぬ人が有つたら、其人は其を忘れて家を出たのであるか、又は嚢に忘れて來たものを取りに行く所位なものであらう。それは不思議な位貴賤の別も無く、老幼の境もないまでに、盛んに扇をバタ／＼と使ふのである。

今日と比べて社會百般の事情が單純だつた昔は、一層盛んに扇や團扇を愛用し、夜も晝も持ち廻つたものである。ステツキも無ければ帽子も無い、オペラバツクや抱き革包も、双眼鏡も懷中時計も、萬年筆も指輪もネキタイピンも、亦勿論扇風機も無かつた時代には、襟卷は有つても今日のショールとは違ふ、煙草入れは有つても今日のシガレツトケースとは異る、日傘は有つても今日のパラソルとは比べにならぬ單純なものであつたから、ツイ輕便な裝飾的日用品としての扇子が、少からず巾を利かしたといふ事も、亦無理からぬ事情なので、昔の風俗や器具類の模樣などに見ても、それは明らかに推察出來るのである。

一寸古名士の肖像を見ても、織田信長も、加藤清正も、二宮尊徳翁も、武田信玄も、九郎判官義經も、菅原道眞も、學者も僧侶も、白拍子も俳人も横綱も、皆悉く扇子の一本を持つて居る。轉じて支那の聖賢や英雄の肖像を見よ、又其れ等に關する種々の繪畫を見よ、扇子を持つものゝ極めて少いのを何人も意外とする、それも悉く皆團扇の方である。更に歐米の偉人傑士に至つては、扇や團扇を持つものは殆んど絶無である。尤も支那でも歐洲でも世界各國共婦人は少からず扇を持つのであるが、それも扇といふの大部分は團扇で、僅かに有る所の扇も其主要目的は風を取る爲めで無いから、レースとか羽毛とかいふ變はつた材料で造られてる。

日本に於て浮世繪の美人には盛んに扇や團扇を持たせ、美人を畫かねば浮世繪にならず、扇を持たせねば美人にならぬとさへ思はせた時代も有つた、今日でも各劇場などで見る所謂中幕物には舞踊せぬ美人も無く、扇持たぬ舞踊も無いやうな姿。一方又外國人に對しては日本人も盛んに扇を振り廻はすのである。英國からコンノート殿下御來訪の時、我が外務大臣の宴會は、主客全部へ象牙骨秋草の金扇にメニューを書いた、此價當時でさへ一本十圓。佛國からジョッフル元帥が來た、これにも夫人令孃へは扇を贈る。巴里の郊外で大負傷遊ばされた朝香の宮は、

跡見女史の花鳥山水を畫いた紫檀骨黒檀骨等の扇子數十本を土産とせられた、其他世界旅行者は、一つには輕便だからだが大部分土産物は扇を携帶する、生糸を始め輸出品のマークに扇が多く、海外から輸入する雜貨などにも日本人の嗜好に投ぜんとして扇を模樣とした物が更に多い。殊に奇拔とも滑稽とも思はれるのは、先年ロンドンでサヴオイ座で上演した『ミカド、オペラ』では作中の主人公副主人公等男女四人がズラリと舞臺に並んだ時、四人共扇子を後生大事と持つて居る。『猫で無い證據に竹を畫いて置き』と川柳子は皮肉るが、銅色で目の釣り上がつた丁度寺内伯の樣な顏は東洋人と定めて居る歐米人は、それが支那で無い證據として扇を持たせるを普通とするまでに、日本人の扇は廣く知られたものである。

之等は流石に世界に於ける、扇子の元祖たり本家たるの名譽を保持するに似合はしい事とでもいふべきである。

暑いから扇を使用するに相違無いのだが、然らば九州より琉球、それよりも臺灣、更に南洋と、南方へ熱帶へと、行けば行くほど、益々大形なので、愈よ頻繁に、扇を使ふかと思はれるが事實は全く反對である。一寸扇の製產地を見ても、日本だけでも皆中央部に在る。卽ち京都、奈良、名古屋、東京、岐阜、伊勢、紀伊、備中撫川等で、九州も四國も東北も北海道も扇の產地を有せないのである。朝鮮でも全州、羅州、支那では舊都の杭州が最も有名で、それから蘇州、廣東ではあるが、之等は何れも比較的氣候溫和の地方である。南太平洋のサモア島では三角の團扇を使用するが、之れ亦氣候が溫和で濕潤で樹木繁茂し風土頗る我が日本と似て居るのだから面白い。

斯うも盛んに日本人が扇子を使用するに至つた理由は何れにあらうか、元より色々あらうけれども、第一には氣候の濕潤な爲め夏は著しい蒸し暑さを感ずる事と、我々は特に汗が澤山に出る民族であるからだらうと思はれる。次いでは最初上流社會から流行し出した事と、原料の竹も紙も豐富な關係から、頗る容易に、甚だ安價に製造販賣出來るからでもあらねばならぬ、更には又扇子を使ひ乍ら用談を辨じたり、執務にも勞働にも屢々煙草を吸ひ、茶を啜り、汗を拭ひ、扇子を使ひつゝ爲すといふ樣な暢氣な風俗と習慣と、且つ又それ程な多忙ならぬ、規則立たぬ、生活程度にある事なども、其重なる原因として數へねばなるまい。

歐米では官署でも會社でも、扇片手に茶を啜り乍らペンを走らせてゐるやうな者は中々見たくとも見られない、それは幽靈を見るよりも困難な事である。と一獨逸人は言つた。從つて男子が扇を使ふ事は、丁度日本で男が日傘を差し翳す程に稀に

思はれるのである。ステッキさへ男妾かなんどの閑人でなければ餘り持たぬ米國などでは況んや扇は暇な女の玩具位に思つてゐるであらう。歐洲で女が持つ扇子とても、全く風を招く爲めのみでは無く、其過半は男子がステッキを持つ位な心持ちで持ち、日光の直射を避け、他人の視線を避けストーブの火の餘りに熱きを避けたりする事、恰も昔の支那の一種の團扇たる『便面』と甚だ似てゐる。舞踊なり、假裝なりの夜會へは必ず携へるから、一口に夜會扇と言つてるが、扇を携える時又屢々にして目鬘が携えられて、支那提灯の薄暗い木陰に人目を忍ぶ戀も無遠慮に横行したり、トーダンスが極度に蓮葉に踊られたりするのだが、かうした夜會は冬の夜が多いのだから扇は冬の物と成つてゐるなどは日本と反對で面白い。尤も日本にも昔の本には『冬の扇』といふ言葉が散見される、けれども、之れは夏の扇有つての冬の扇で、夏は輕便な紙や絹地の竹骨扇を使用するに反し、冬は本式の重苦しい板製の檜扇杉扇を使用するから其れを指して言つたのである。

歐洲では絹地紙地の扇もあれば檜扇の一種かとさへ驚かれる骨ばかりの物もある、けれども其種類は十種か廿種に過ぎない。一方支那では其大部分は團扇であるけれども、先づ四五十種は有るらしい。日本に至つては、名ばかりで今は用ゐられないものも有れど約一百種類は扇だけで有り、別に團扇が四十種程有るから、此點矢張り世界第一である。

二、扇は何時頃から有つたか

『續日本紀』に依れば、天平寶字六年御史大夫文室眞人に對し、年老へ力衰へたるを以て、優詔特に扇と杖とを宮中まで使用する事を許可された。それは今日から指折り數へて千百六十何年の昔である。

『萬葉集』二十卷の内に扇は唯だ一首だけ見當る、之れが日本に於ける最初の扇の和歌であつた。

とこしへに夏冬ゆけやかわころも扇はなたぬ山に住む人。

讀人不知

以上の二つは共にまだ團扇で有るらしい。

扇の起元には神功皇后が三韓征伐の途中、筑紫の國博多の港にて船待ちの間、武内宿禰が蝙蝠の羽から考へて始めて製造したと書いたものもあり、伊三榮義の繪などは此說から取つたか宿禰が日の丸の扇を持つて居る。然し今日普通に行はれて居る武者人形には、何に依つて造つたかわからないが、皇后に軍配團扇を持たせ、宿禰は赤子を抱いて居る。その何れにしても神功說は信ぜられないし、軍配團扇も假りに一歩を讓つて有つた

としてもアンナ人形に見る樣な立派なもので無く、精々羽扇位なものでは無かつたらうか。更に角團扇さへ神功の頃は有無に若干の疑問が伴ふのである。

『竹取物語』は今日から千四五百年前に出來たものであらうが『蝉の君はかなり扇を打ちならして、豐原の寺の西なるや。と謠ひ』と樣子だが、之れは讀んで見て一寸扇らしく思はれるけれども、亦疑問たるを免れない、團扇でも團扇太鼓の樣に叩いたら鳴らうから。若し團扇にしても『今はむかし』と書き出してある物語だから團扇も可也に古い事が知られるし、鳴らしたとあるから鳥羽や木の葉や葦を編んだものではあるまい。其れ等は鳴るといふ程には出ないから。必ずや其れ等以上の人工が加はつた——少くとも竹を網代に編んで紙を張つた位——ものでは無ければならぬ。

寶龜八年五月、渤海使史都蒙等が歸國に際し、渤海王に賜ふ書中に『檳榔扇十枚至宜レ領レ之』とあるが、之れは唐風に眞似て製造されたものである事は稍や明白である。

それから菅原輔實に扇の詩があるが『團々執素扇、隨レ手幾成レ功、一轉看二孤月一。』などあるし、道眞の師たりし都良香が渤海使二十名に二十枚の扇を送り一々それに銘を題して渡した其詩の中に『團體可レ愛』とか『團々者扇』とか『往還月轉』などあるから、良香の時も、道眞の時も、未だ團扇の世界であつたらしい。斯くして奈良朝には遂に扇らしいものは文書の上には見當らない。

下つて醍醐帝の時に類聚された、源順朝臣の『和名鈔』には扇も團扇も蒲葵扇も翳も別々に一々說明してあり、又『職員令』に款扇とあるに對し、その義解には扇は團扇なりとあるから『令義解』や『和名鈔』の時にはモウ明白に扇と團扇の區別が有つたから大體に於て平安朝の凡そ千百年程前に、初めて薄い檜の小板で造つた。そして折り疊み出來る扇が世の中へ現れたと見て宜しからう。もつと露骨に言へば、其れは桓武帝から醍醐帝までの約百三十年程の間に於て扇が産れ出てゐるのである。

それ以前のものは皆、扇の字を使つて有つても殆んど團扇であらうから、大體扇字をうちはと訓讀して差支無いと思はれる。而して其の團扇が何時頃から有つたかは亦複た厄介な問題である。

一般には遣唐使の歸朝と伴ふて、支那から渡來したものと見られてゐるやうだが、それは支那からは可也立派な團扇も輸來したであらう事は、何人も拒みはせぬが、けれども不完全乍ら日本にも神代の上古から必ず有つたものと思ふ。唯だそれが大

孫が携へて來たか國の神が持つて居たかまでは分からぬが、此推察は違はぬと私は確信する。

團扇は無論羽扇と葉扇が一番早く出來て、朝鮮でも支那でも、恐らく世界各國共大方は上古から此二種は有つたものと思ふ、埃及や印度は勿論である。今其時代を言明する事は出來ないが、數千年前から有つたらしい。『釋氏要覽』には『扇、西天多用、如二阿含經云一。阿難羅云。皆執レ扇侍レ佛。優婆離結二集律藏一。波斯匿王與二象牙裝扇一。令レ執二誦律一。』と波斯匿とは喬薩羅國王プラセーナヂトといふ者で、釋迦が入滅せざる前既に佛の像を彫刻して禮拜供養した人と傳へられるし、又釋迦の說教を承はるに當つても夏座中は蚊蟲と毒蛾を避ける爲め、弟子達一般に拂子と扇子は之れが持用を許されたものと聞くが、共に二千四五百年の前の事である。

それから支那で五明扇を造つた話には四通りの說あれど、其人を舜帝とすれば四千年以上の昔の事で、若しそれを黃帝とし、又は夏の禹王、周の武帝の何れとしても二三千年の昔の事である。勿論其れは團扇で有つたらう。

三、朝鮮へ、支那へ

支那の詩文に扇の字を用ゐるもの古くは皆團扇である。それへ宋時代になつてから日本製の扇が始めて輸入されたものらしい。故に北宋からの眞の扇には、單に扇と言はずに特に摺扇、聚扇、聚頭扇、撒扇、折扇などゝことわつてある。『五雜俎』には『元以前多用二團扇一。絹素爲之。未レ有二摺者一。太明始用二摺扇一。出二入懷袖一殊便。』とあり。又趙翼の『陔餘叢考』卷三十三に『唐時尙未レ有二摺扇一。』ともある。『劉氏鴻書』には『宋元以前中國未レ有二摺扇之製一。元初東南夷使者持二聚頭扇一。當時譏二笑之一。我朝永樂初。初有二持者一。然特僕隷下人用以便レ事之爲耳。至二倭國以一レ貢。朝廷以賜二群臣一。內府又倣二其製一。於レ是天下遍用レ之。古團扇。唯江南婦人猶存二其舊一。』と大分詳しい。

更に『通雅』には『東坡謂。高麗白松扇。余合レ之。止二兩指許一。自二北宋一已有レ之。智按。遊宦記聞曰。宣和二年高麗松扇三合。摺疊扇二隻。倭人亦製。爲二泥金面烏竹骨一。貢。唐韻有レ扇。殆亦折扇之萌芽乎。』とあるから可也珍らしく感じた事もわかる。又『南宗以來詩。詠二聚扇者一多。予收二得楊妹子所レ寫絹扇面一。摺痕尙存。蓋自二北宋一已有レ之。』ともあるし尙ほ『春風堂隨筆』にも『今摺扇。蓋自二北宗一以來有レ之。』とあるから、大方それ位な事であつたらう。

『異稱の日本傳』には一寸面白い記事がある。『[illegible]亭末。余遊二相

國寺。見下賚二日本國扇一者上。琴漆柄。以二鵶青紙一。如二餅揲一。爲二旋風扇一。淡粉畫二平遠山水一。薄傅以二五彩一。近岸爲二寒芦衰蓼一。鷗鷺佇立。景物如二八九月間一。艤二小舟一漁人披二蓑釣一。其上。天末隱々。有二微雲飛鳥之狀一。意思深遠。筆勢精妙。中國善レ畫者。或不レ能也。索レ價絶高。余時苦レ貧。無レ以還レ之。毎以爲レ恨。其後再訪二都市一。不二復有一矣。」と、當時は日本では藤原の盛時なので、彼の豪麗にして鮮美且つ濃麗を極めた扇面古字經などの出來た頃に當るから、上品で精巧な日本製美扇が、支那の一文士をして如何に珍奇に思はしめ、又羨望、垂涎せしめたかは想像するに難くない。支那の扇と同じく無い所を稍や詳しく記してる邊(あた)りに當時摺疊扇の無かつた事を證明して居るのである。元來熙寧は北宋神宗の時だから、其末年は日本の白河天皇の、丁度朝鮮から高麗王文宗病みて名醫を日本に求めた頃なのである。其使節と共に來朝した高麗の商人が、日本扇の精巧美麗なものを多數買ひ求めて歸鮮した筈だから、そんなのが轉々して、北宋の頃には支那でもチヨイ〳〵有つたのであらう。

斯うして宋に入り、續いて元に入り、明に至つては朝鮮からも日本からも多數に輸入した。從つて永樂年中には、支那でも模作品が大分出來且つ流行したらしく、爾來貴賤とも夏期は常用とする風習と成り、清朝に這入つて始めて、支那獨得の材料を以てして支那式技巧に成るものが盛んに販賣され、國内の普及は言ふまでも無く、一部分は日本へも逆まに輸入されるに至つた。それが丁度日本では漢學全盛の時代だつたので『唐物』と稱して、孔雀の尾羽を欲しがる樣な一部の人達の間には頗る珍重愛用されたのである。

永樂年中の支那の書籍に『倭國以て貢に充つ』とあるのは、我が足利義滿が、外臣の禮を以て、書を明帝に送りし時、金千兩、馬十頭、薄樣(うすやう)千帖、扇百本などを贈遺したのを指して言つたもので『賢奕編』には『上喜二其卷舒之便一。命レ工如レ式爲レ之。』などゝある。

應永八年即ち支那では明國惠帝の建文三年には足利義滿が僧祖阿、商人肥富(ひつとみ)などを支那に派遣して隣好を脩め、方物を獻じた目錄の中に『扇、百本』とある。同十年成宗帝に贈りしものゝ中に『屏扇、一百把』とあるのだが之等が即ち支那人の好愛心を惹き起し、遂には支那の上下一般國民に萬斛の涼風を容與した樣な次第である。

更に大宰大貳の大内義弘が、關西の雄鎭として外交の事を掌り、朝鮮、支那とも交通したから、永享七年即ち明國の宣德七年の日本進物次第に『朱扇子、百把、皆彫骨蒔繪箇入之五重』とあり。別に貨物中にも『御扇子。二千二百本、代四百四十貫文』

とあるから、其頃は續々として輸出されたことが充分想像出來るのである。

それから足利義教も義政も亦扇子を海外へ輸出した一人である。永享十二年、朝鮮の使節が赴闕御暇乞ひの爲め參殿した際には、將軍は親しく對面して、扇子百本、太刀十振其他を與へたとある。義政の時は屏風と繪扇であつた。

四、支那に扇は無かつたか

特に疊扇とか撒扇とか、摺扇、聚頭扇、折扇など斷はつて無い限り、單に扇とあるは支那に於ては皆團扇である事は言ふまでもないが、中には偏扇と書いたものや方扇といふもの等がある。之等は多分四角い扇、又は半月形の扇であつたらう。然もこうした文字は、宋時代以前に於ける文書では極めて稀にしか見當らないのである。ところで『通鑑』卷百三十齋紀帝建元二年の所に『淵入朝。以二腰扇一障レ日』の文字あるに對し、胡三省の注には『腰扇。佩二之於一レ腰一。今謂二之摺疊扇一』と説明してゐるのに對し更に『陵餘叢考』には、當時尚ほ未だ摺扇あらず『何得二六朝已有レ之一。胡三省蓋以二後世之物一。妄爲二附合一耳。』と論駁して居るし、又滿朝の新聲朝も、大明以前摺扇無し、多く團扇を用ふ、と言つてゐる。

斯うして支那では宋以前にも摺疊扇が有つたものと思つてる人は無いでもなかつたが、團扇では腰に佩び易からず、扇を折り疊んで腰に差したらう位では、胡三省の注は少々斷言に過ぎる樣だが、或は一種の摺疊が有つて、それを腰扇と言つたので有らうか。更に『五雜俎』には『然淡强倣以レ便面一拊レ馬則又似二今之摺扇一也。』とあるが、之れも螢の千百倍の馬の尻は團扇で打つても埒あかぬ事は誰にも分かるが、元來支那の團扇は椽には太い木や竹の枠が有つたりして、頗る精巧な出來で無いだけ、それだけ丈夫な物である、特に古い物ほど頑固に强く造られてあると見て差支は無い、徳川時代の川柳に『團扇では思ふやうには叩かれず』とあるが、昔の支那には丹次郎式の好男子には叩かれて一寸位は應へる團扇も有つたのである。もう捨てゝも惜く無い程の團扇なら、馬の尻を打てない事も無く、一尺内外の扇で打つと何れを何れと言つた所であらう。然し便面は團扇と限らないので、自分の面を蔽ふて、他の視線や、日光の直射を避けるなどの必要から出來たものであるから、丁度今日の婦人のパラソルで、中には可也大形の物も有つたらう、丁度今日のパラソル程のも有つて不思議は無い。全然木の板のも有つたらうし、其中央には鵝卵大の穴の有るものも有つた。從つて其柄の長さも、今日の日本扇の比では無い、時と場合に依つ

では馬を拂つといふに敢て不思議は無いとも思はれる。更に他の一面から考へれば、此便面には羽から進化したばかりの、鳥の羽を廣げたものや、棕梠の葉や檳榔の葉に僅かな加工したものも有つたと思ふ、若し夫れ棕梠の葉製の便面なら、其長さも大さも、馬を拂つには頗る適當なもので有つたらう。

轉じて詩文について見ると。

却恨含レ情掩二秋扇一。　王昌齡
流風入レ座飄二歌扇一。　李邕
唯憑二雲扇情相似一。　魚玄機
娟々薫風扇影閑。　元遺山
清照雲間雉扇過。　高青邱
雲移雉尾開二宮扇一。　杜甫
輕羅小扇撲二流螢一。　王建
丘巒崩摧。洞天石扇。　李白
日暮天無レ雲。春風扇二微和一。　陶淵明
柳老香糸宛。荷新鋼扇圓。　白樂天
細汗凝衣集。微涼待レ扇過。　耿緯

之等の何れもが、詩句と其前後に照合して見て摺疊扇であるとは思はれない、けれども團扇である事の確實なものが二三は有る、まア全部團扇であらう。然るに爰に唯だ一つ『子夜四時歌』（晉宋齊辭）七十五首の內、夏二十首の一に『疊扇放二床上一』の句がある。疊扇とあるは如何考へても一片の團扇で無い、それは現今日本で使用する扇とは比べて何れ程同じく無いにもせよ、兎に角折り疊み出來る扇であらねばならぬ。而して其形式は如何なもので有つたかは大なる疑問であるが、既に疊扇といふ言葉が支那の六朝時代に有る事は大に注目に價する。

斑婕妤の有名な怨歌行には『裁爲二合歡扇一』。團々似二明月一』とあるが、その合歡扇とは如何なる形質のものであるか、甚だ不明瞭なのであるが、要するに二枚張りの團扇か、左も無ければ二つに折り疊みの出來得る團扇で有つたに相違無いらしいのである。數年前英國倫敦の交際社會で、二枚張りのマスク兼用滑稽團扇といふのが一寸流行した。それは見た所では普通の花鳥などの繪團扇であるが、二重に成つてる他の一枚には、奇怪な支那人の顏や黑奴などが頗る上手に畫いてあるから、舞踏室や音樂の或る會合席上、劇場などでそいつを一寸廣げて顏に當てる、卽ちマスクにすると今迄其所に居たと思ふ美人が急に居なくて奇怪な黑奴婦人が居るのに、誰れも一度は吃驚させられるのである。それを元通りの花鳥の繪團扇にして素顏で知らぬ振りして居れば又候一寸まごつかされるといふ物だつたが、合歡

扇は其れの取換え出來ぬものか、然うでないならば『唐書儀衛志』に『太皇々后升車。偏扇、團扇、方扇皆二十四。宮人執レ之。』とある。その偏扇を二つ合はせたものではあるまいか。折扇と呼ばれるものも此れか又は此類のものであるらしく思はれる。そして偏扇は印度其他中央亞細亞の二三の國に見る半月扇と同様のものと思はれる。果して然らば其使用法は、普通の團扇とは著しく異るものなので、其使用方法の厄介な爲め、其後は自然に廢れて、今日の支那には見當らなく成つたのではあるまいか。

北宋以前の支那に扇は全く無かつたであらうか、有つたとしてどんなものだつたらうか、まだ〳〵充分の研究調査を要するで有らうが、吾人をして想像を逞しうするを許すならば、それは有つたであらうけれども其製造方法の厄介な上に、破損し易い爲め卽ち支那人の不器用なため、遂には消滅するに至つたのではあるまいか。今日に於ても支那製の扇は日本製と比べて、頗る粗末なもので、その技術の幼稚と不熟練とは何人の目にも容易に見分け得るのである。兎に角、團扇から扇に進歩するまでの途中に有る二つ又は三つ折り位に疊む、折扇とか疊扇とか合歡扇とかいふやうなものが、或る時代に於て有つたらしく想像される。

五、扇の字義と翳

漢字に於ける扇はとびら卽ち門扉である『乘德錄』には『扇は門扉より起る。故に戸に從ひ、門扉の開閉鳥羽に似たるが故に又羽に從ふ』とあり、又一説に『羽は翅の略省畫、而して翅は風を切る、故にあふぐの義あり』とある。卽ち蝶番ひの附いてゐる扉なので、今日ステーションの驛長室などに、押して這入れば、あとは自然と彈機裝置で反動的に閉されて行くドアがある、あれが最も字義に適當した扇である。

其他火焰をあほる、凉風をあふぐ、他をおだて〻教唆する、さかんなり等の意義が有つて、煽、謆、搧、傓、騸など略ぼ相似た意味の文字から、扇動、扇蕩、扇揺、扇惑、扇述、扇揚、扇開などの熟語が出來てる。一面に於て箑も翣も翢も亦復た扇であつて、翳と翿などは場合に依つては扇である。こんなわけだから寒と熱とを問はず、風を煽るものは何んでも扇である、況んや其形狀の三角と四角と圓と半圓とを問ふべき筈のものでない。更に又それが折り疊み出來得やうとも、出來得まいとも、必ずしもそんな事に頓着するものでない。故に日本に比べては隨分廣い意味のものと成つてゐる。

歐洲では扇も團扇も、風車も、農家の唐箕も、鍛冶屋の鞴も

等しく扇である。例んでも空氣を動搖させ得る葉面ならば、それは殆んど悉くが扇即ちファンである。孔雀や七面鳥の尾羽までが扇になるなど支那よりも一層廣い。俳聖芭蕉翁が芭蕉の眞趣味を解し得ざりしといふ如く、扇字を始めて製作した頃の支那人は、扇其物を充分に了解し得なかつたかと思ふ、それは團扇蛯、團扇蟖蛉、軍配虫など有れど虫邊に扇といふ字は無い。團扇鯛、團扇鮫などあれど魚邊に扇といふ字は無い。扇茶、扇茄子、檜扇草、扇芭蕉、團扇提灯苔などあれど草冠に扇の字が無い。其他石邊、水邊山邊、金邊竹冠など、なくてはならぬ様に思はれて一つも無い。之等から推察しても昔の支那人は團扇を餘り好愛しなかつたものと言ひたい。

唯だ隨分古へから有つたのは翳である。翳は大上月宮殿の嫦娥御前や、海庭龍宮の乙姫など上古支那の貴人には、其背後から童女が差しかざす所の柄の長い大形の團扇である事は、毎度繪畫で散見するところである。あれには、香木の板のも、絹や紈のも、鳥の翼なのも繪や字の有るもの、香水、香粉、香煙をかけたものなど、形式の多種多様、それ〳〵時代と地方に依つて色々雜多で有つたらう、が其元は『射獵の時に身を蔽ふ具』との説明もあるから、山野で休憩の時など、貴人が虫除け、塵除け、日光除けなどに使用したのが最初で次第に庭園、露臺、室内とまで其使用範圍が廣まつたものであらう。垂蓋、即ち美しき蔽ひ、羽の旗鉾など日本譯して然るべきもので、それが漸次宮殿の内に使用されるに及んで、柄が短くなり、稍や輕便なものとなり、終に貴人中の餘り高貴ならざるものなどは親ら携帶する様にも成つたであらう。別に『雉尾扇の類。かざしの羽。舞者の執るもの』との解説もあるのを見ると、舞踊の時にも持つたのである。斯くて邪氣を拂ふとか、威嚴を保つとか、優美高尚な飾りといふ様な、翳としては第二次の目的から、更に轉じて、日光の直射を避け、他人の視線を免れ、風塵を遮り、蚊蠅や毒蛾の類をも拂ひ退け、時にはまた涼風をも取り得る所の團扇とまで進歩發展したのではあるまいか。

元來『扇』は『うちは』と訓べき文字なのである、支那も印度も扇とあるは殆んど悉くうちはの事であるのみならず、歐洲に於ても亦大體そんな事である。それと同時に『うちは』に團扇と書くも面白く無い、日本に於てうちはの大部分は[illegible]いから團扇と書いたであらうけれど、日本に於ても、四角形な澁團扇の様なものが、隨分多いのみか、世界の各國を見渡せば種々雜多な團扇がある、例令ば、南太平洋のサモア島には三角のうちはがある。メキシコ國には方扇と言つて其四角の一角に柄の附

着してゐる言はゞ菱形なのがある。安南國には竹扇とて稍やハート形を倒まにした樣なものがある。支那には繭の形のがある、鳥の翼そのまゝは數ヶ國に在る。羽團扇楓の葉の樣な、鶴か鷺の羽を七枚又は九枚或は十數枚並べたものには種々の形は有るが之れ亦決して丸いとは言はれない。ギリシヤ國には桃の形のものがあり、印度には半圓形のがあり、アフガニシクン其他には斧の形のがあり、朝鮮には五六七八九角などがあり、暹羅國には葉扇と稱してハート形に似たものがあり、臺灣の生蕃には日本の羽子板と同じい形のがあり、昔渤海國から輸入して今日尙ほ修驗の家で護摩壇に用ゐる蒲葵扇は菱形の一角が崩れて居て三角でも四角でも無い珍妙な形である。ジヤワの水牛扇は八咫の鏡の形で、印度には孔雀の尾羽を周圍へ出して丁度『槌車』の樣なものもある。それから古い所では五百羅漢の内の跋陀羅尊者の團扇と、日本で山王七社の内の聖眞子權現の團扇とは、古今獨歩の奇扇として好一對のものである。斯く一々數へ來ればまだ〳〵澤山にあるが、其何れもが丸く無いのであるから、正しくは團扇とは言へないのである。

『萬葉集』に『とこしへに夏冬ゆけやかはごろも扇はなたぬ山に住む人』はあふぎ放たぬで無くうちは放たぬと訓むべきを誤つてゐるものである。同時に、今日の扇には是非とも折扇とか摺扇とか疊扇とか言はねばならぬ。支那で團扇はトワンシヤンだが、日本の四角な渋團扇をもトワンシヤンとは言はない。英米では團扇はラウンドフアンであらう。けれども半月扇や三角扇をラウンドフアンとは決して言はないのだから此間違が先づ無くなるの便利がある。

事の次手に、煽風器と書く人の方が多い樣だけれども、扇風器の方が宜しく扇風機の方が更に穩當らしい。が扇と風は二重である。則ち扇機又は風器で宜しいと思ふ。又一方から言へば扇の字が下へ着いて機風扇、機扇、風扇で行つて欲しい。分かり易くは自動扇又は電機扇でも宜しいのである。先づ機扇が最も適當らしく思はれる。

尙ほ翳は日本に於ても御卽位式の時に使はれ、女孺の翳にて初め龍顏を蔽ひ奉りしものが、除かるゝに及んで文武百官の拜賀萬歳があつた。絕世の美人で才華爛漫たりし埃及の女王クレオパトラが、靜かに眠れる傍には、彼女が寵愛の奴隷カルミオンは、紅鶴の翼にて造れる扇を以て、靜かに煽いだといふ話がある。此鶴翼扇は卽ち支那の翳と略ぼ同じく、立てる女王や眠れる女王を稍五七尺の遠方から煽いだものらしい。元來埃及では儀式に翳を使用したのみならず、一種の折り扇も有つたといふが、どんなもので有つたか分からない。

六、搏羽(うちは)、打葉(うちは)、內翳(うちは)

煽ぎて風を起すが故に『あふぎ』即ち扇、羽に信(まか)せて飛び來る蚊や蠅や毒蛾の類を搏(うち)ち拂ふが故に『うち羽』即ち團扇(うちは)、などいふ古人の說も一應は尤であるが、屋外に持ち出づるは專ら折り疊み自由な扇の輕便に委せ、多くは屋內で使用したから『內翳(うちは)』即ち團扇ならんと『松の落葉』にも記されてある。私は其何れをも否定せぬと共に、或は打ち葉で有りはせぬかと思ふ。それは道行く旅人などが蚋(ぶよ)又は虻(あぶ)の集合に苦められる時、道傍の萩でも笹でも桔梗でも楓でも櫻でも、其れ等の小枝を折り取つて蠅(はへ)などの群がりを打つ事は、古今東西共有り得る事であつた。之れも遊ふ樣には書いて有るが『枝扇』といふものを昔の僧侶が使つたのである。丁度扇の要を、蟹の目の如く突出して居るから『かに目』の意だとか、蚊の目の如く突起した黑點が有るから、蚊の目即ち要(かなめ)であらうとか言つた類で、或は然らん或は然らざるべし、どちらでも宜しい、大した事では無いと思ふ。

が日本では實際に於て團扇が外に持出される事は極めて稀で、屋內にのみ多く起臥する婦女子は、常に團扇のみ使用したのである。德川時代の或る一しきりの如きは、女は內にも外にも扇は持つまじきものとして團扇ばかり愛用した事も有つた。

之れと甚だ相似て朝鮮に於ても婦人は、尾扇即ち團扇ばかりを使用して來たのである、今日に於ても尚ほ未だ其風習が依然として殘つて居るらしい。蓋し尾扇の名は團扇の柄が尾に當るからで、此尾が蝌蚪(おたまじやくし)の如く進化して落ちて仕舞たものが即ち扇であらう。支那に於ても婦人は大體團扇を使用する、唯だ外出の時は多く扇を用ゐるらしい、それには腰に着ける扇入れの風雅な小袋も出來てゐる、それは團扇は扇と比べて稍や携帶に不便だからである。

日本の旅館又は料理店に於て備ふる所のものは悉く團扇である、之れは客の戲れに持ち去らん事を恐れて、携帶に便利な扇を避けたのである、客(きやく)は悉く女でも無ければ、屋內なるが故に內翳なのでも無い。

然るに印度安南暹羅南洋のやうな熱い國々では男も女も多くは團扇で有つた、屋內も屋外も殆んど悉く團扇で有つた。それは之等の南國では扇の使用は頗る遲く、扇も團扇も其必要が日本人程痛切に感せられての使用でないから、從つて扇の折り疊んで携帶に便利な事が、左程有りがたく思はれないからであらう。熱帶地方で氣溫が百度を越へ、百何十何度などいふ時、熱い〳〵と叫んで熱心に煽げば、出る風も熱い上に身體內が運動に依る溫熱で、一層の熱さを感ずるのである。從つて熱國の住

民は一般に、暑氣を避けるには消極的の方法を取つて、實倘ほ暗く繁茂せる大森林中の小川のほとりとか、若し自分の家屋ならば、一番奥の薄暗い室、又は地下室、椽の下の樣な所で、何事も爲さず、出來るなら何事も思はず、靜座又は横臥して心長閑に暑氣の減少するを待つのである。斯くして數時間を經過する内に、日盛りの炎勢は漸次に去つて、涼しい夕風が吹きそめ、淺黄色の大空から、星がチラ〳〵と水に寫つて來ると言つた樣な順序らしい。

であるから熱帶の國々では、溫帶の支那や日本の樣に盛んに扇を使はない、扇は反つて開閉が厄介だと言ふ樣にも見えて團扇の開かざるに擴がつて居るのを重寶とし、一面又その團扇を折り疊んで腰に差し挾まねばならぬ程の多忙は彼等に無いのである。その團扇も半ば風を招くで有らうが、半はステッキ代はり、女ならばパラソル代はり位な意味に於て携帶するのである。

東京で夏祭りの神輿をかつぐ町内の若連中一同を、一時に煽ぐための大團扇の中には、直經六尺位な大物を必ずしも珍しとせぬのであるが之れも半は飾りである。昔の支那には、一層大きな團扇が有つたと見えて『晉魏五朝小説』には『大皆經丈』云々とあるから周圍三十尺からの團扇が出て、滿堂の者が悉くその風の寒きに顫へたとある。考へて見ると其室は隨分大きなものでなくてはならぬ。同時に煽ぐ方の者は熱くて汗を流した事であらう。

更に大きな團扇は印度の各地方に使用されてるブンカスである。之れは室は十疊でも二十疊でも、凡そ其室に一杯ほどの大きな布類を天井から吊り下げて、それに着け結んだ紐を室外の一方から、絶えず引いて動かさせるものである。こんな風であるから一時に四十人でも五十人でも涼しいし、その上に又蚊や蛾の如き小虫も飛び込まぬ樣に追ひ拂ふ、利益もあるし、更に室内の空氣を頃合ひに轉換させるといふ德もある。一寸重寶なものだから、近年南洋の各地方にも、使用されるに至つた相なが、之れが恐らく世界第一の大團扇であらう。

歐洲の夏は英、獨、露、佛など大體に於ては如何に暑いの避暑のと騷いでも、それは日本と比べては可也に涼しいもので、避暑は愚か、扇を使ふ必要も無い位である。けれども、米國の紐育では盛夏には頗る暑くなり、日本人には迚もやり切れない程熱いのである。けれども紐育市民の扇を使ふ事は、東京市民の廿分一にも三十分一にも及ばないのである。三十分の一でも使ふ者は有るには有るのだが、それが殆んど悉く女か小供である。それも丁度熱帶地方の人々が團扇を持つと同樣の意味に於て持つのであるから其れ此れ思ひ合はして、日本人はバタ〳〵

と少からず扇を使ひ過ぎるのである『七尺の屏風は躍らば越えつべし、綾羅の袂も引かばなどか切れざらん』とも言ふのであるから、氷は喰はでも夏は通せるのである、扇を使はで過せないといふ夏も有るまい、と一應は思はれるが、今日の電氣扇が如何に普及しても、日本人の扇携帶癖は中々二十年や三十年では止み相にも思はれない。

それにしても大形の扇風機が、高い天井に廻つて居る其下の大理石のテーブルで、膝の出てる洋裝の少年少女等が、ガスの風船玉や模形飛行機を片手に持ち乍ら、アイスクリームのストロベリー曹達水を吸ふ、夏の夕の心輕さと涼しさは、昔々重い檜扇や杉扇を携えた少年少女等の、夢想をだに許さない事共である。いづれ未來は捩一つ捻れば、室内は蒸氣裝置なり、冷却裝置なりで、夏でも冬でも六十五度位から七十五度位の氣溫と爲し得る時代も遠からぬ事であらう。

七、太古から有つたろう

團扇の最初は何時頃からとも、誰が始めて製造したとも、正確には分からないけれども、支那とか印度とか埃及とか波斯等の古い國は勿論其他の或る國々にも隨分古くから、有つたらうと察知されるのである。それは勿論簡單粗末なものとしてゞ、我が日本に於ても神代に於て、既に早く鐵を切つて釣魚の針を造り、木を穴洞に削つて舟を製し、枝を曲げて弓と成し、穀菜を植え、布を機織した程だから、木の葉や草の葉の團扇や鳥の羽や木片の團扇位は必ず有つたに相違無からうと想像されるのである。

然し乍ら今日までの所は支那から渡來したものと一般に思はれて居る。

若し夫れ鞍馬山の大天狗といふものが結構な羽團扇を持つて居る。此大天狗が我が天孫を御案内申上げた、猿太彦の神の姿であるとすれば、日本には高天が原の神代から團扇が有つたわけである。

太古は河一つが間に在れば左右の兩村は言語を異にした。蓮の浮葉や木片に蛙の乘つて流れ行くものなどを見て、舟を希望し舟を案出したであらうが、如何に未開野蠻の程度が其れ以上なる民族でも、炎暑の日盛りに、少しばかりの風に芭蕉や棕梠や其他の木の葉などがゆらりそよろと動くのを見ては、それが自分等の身の周圍での出來事で有れば善いといふ考へから更に一歩を進めて、左樣したもの——見る目心地善き綠色の大葉——を手づから採つて以て、自分親らの手でもつと〱鮮やかな風を、自分の身體に與へたいといふ積極的の考へ位は、當然起るべきの慾望である。

一方に又自分の脛なり、頸なり手なりに來る蚊や虻は、丁度木や草の枝葉で打ち拂ふに宜しいのであるし、葉のまゝ小枝で脛を撲つ時、其所に少量の微風微痛をも伴ふは、蒸し暑い風のない身體の倦怠い日などは多少の快感を覺えるのである。殊に上古は世界各國共蚊蛾の樣なものが非常に多かつた筈であるが、これが眼前へ來る時、何物を以て打ち拂つたであらうか、其所には如何しても團扇の樣なものが無くてはならぬし、又欲しいに相違無いのである。痛切に其必要を感ぜねばならぬ。

更に又道路の極めて不完全だつた上古は、勿論その栞となるべき電信柱も鐵道も無いから、山へ登つて『國見』を爲るの必要が頻繁で有つた、それで無くとも今日の帽子の庇の樣に、日光を遮つて先方を見得る、翳としては掌や袖ばかりでも不充分だらうし、且つ又帽子の無い世界には急雨小雨に際して、せめて顏だけを蔽ふもの、同時盛夏の强烈なる日光の直射を避け得る樣な、或る『葉面』を時に携帶するなどは、屹度必要な事で有つたに相違ないのである。

それで小枝のまゝ煽いでは間も無く破損して仕舞ふ。次に枇杷の樣な稍や大形で強い葉の七九枚を綴つて、手頃な木竹に挾むとか、棕櫚とか檳榔とか竹の皮とかに多少の人工を加へたものを持つに至つたらう。それと殆んど同時又は一歩進んで鷲、鳶、鷺、山七面鳥、雉子など手近の鳥の尾羽を十數枚集めて造つた團扇が出來たであらう。

支那に於て商時代には雉尾扇があり、周時代は鵲翅扇があるから、大形ならぬ鳥は翼全體を擴げて團扇に使つたであらう。又『翳は上古の扇なり』とあるし、翿も亦うちはと訓ませ、翣も翳も團扇だから、支那の昔の團扇は九分通りまでも羽扇で有つたらう、其他葉扇、魚皮、蛇皮、竹皮の扇などは海濱とか山間とか其地方にも依るが案外少かつたらしい。『郎集雉羽爲扇。以障翳風塵。』ともあるし其他の文書に見ても雉羽が一番多く扇として用ゐられて居た事が分かる。その頃の雉の目的は風を招くを專らとするもので無い事も明白で、便面といふ扇も面を蔽ひ日光を避けるためのもので有つた。

斯うした時代を經過して後始めて布や絹製の團扇、それから草や竹を網代に編んだもの相前後して一般に使用されたで有らう。そんな種々雜他なものゝ内から、折り疊み出來る扇に至つて一大進歩を遂げさせたものは、手先の器用な日本人で有つた。何れは蝙蝠の羽などから考へ付いたでもあらう。それが薄い小板の集りから紙や布や絹に進み、骨も木から竹や牙に、要も粗から金具、鹿角、鯨鬚と進んで始めて今日の優美、精巧、輕快な日本名物の美扇が出來たのである(十二、六、三)

指紋の研究

科學的採證法の社會的意義

法學博士 牧野英一

指紋法がわが邦に採用されてから、刑事司法の實際に於て改良されたものが甚だ大きい。恐くは、そのことは、世の中から氣付かれて居らぬかも知れない。しかし、私は、最近二十年來のわが邦の刑政に就いて考へて見るに、其の最も大きい進歩であつたのは、刑法の改正よりも、刑事訴訟法の改正よりも、將た又、陪審法の制定よりも、むしろ此の指紋法の採用であつたと思ふのである。――指紋法と謂つては事が小さい。指紋法は刑事現象に對する科學の應用の一つである。私は、廣く、刑事現象に對する科學の應用といふ意味に於て、指紋法の採用を重要視し、其の社會的意義を考へ、さうして、其の精神を更に擴充することに付て世の人に訴へて見たいと思ふのである。

(一)

刑法の理論には舊派と新派との爭がある。舊刑法に依つて其の舊派が代表せられ、新刑法に依つて其の新派が代表せられる。しかし、その舊刑法の下に於て、既に、吾人は、大に新派の理論を實行して來たのであつた。抑も、新派の理論といふのは、社會と個人との調和といふことを標的として刑法の組織乃至運用を考へて行かうといふのである。其爲めにおなじ犯罪でも、危險性の少ない犯罪人に對しては寬大な處置を考へ、危險性の大きい犯罪人に對して、嚴に社會から離隔する途を講じよ

うとして、一方には、刑の執行猶豫といふやうなことを考へ出し、他方に於ては、累犯加重を嚴密にすることにしようとして居る。新刑法は、其の主義の下に制定されたのであつた。一方に於ては、犯罪に對する社會防衛を其の最大限度に擴充しようとするし、他方に於ては、刑罰に因る個人の利益の剝奪を其の最少限度に止めようとするのが、其の全體を一貫する主義である。之に反して、從來の刑事思想は、善因に善果ある如く、惡因に惡果あるべきである、といふのが其の立脚點になつて居たので、舊刑法では刑罰が犯罪事實の大小で定まり、犯罪人の性格に依つて適當に寛嚴の調節を爲すことが困難であつた。しかし、法律は如何に古くとも、社會的思想の變動は、法律の運用をしておのづから展開せしめねばならぬものである。吾人は舊刑法の運用の下に於て、旣に相當に新派の主義を實行することができた。寛大な處遇をしたいとおもふときには微罪不檢擧といふこともあり得たし、證憑不十分と認めて無罪を言渡すといふやり方もあり得たのである。又嚴重な處分が講ぜられねばならぬと認めるときには、其のせまい刑期量定の權限を最大限度に利用することに依つて、竊盜に對して五年七年といふ刑を言渡すことができたのであつた。——新刑法は、新主義を明かにして、裁判官の其の從來の行動に對して裏書をすることになつた。それで、舊刑法に對する新刑法は、形式に於てこそ大變動であつたれ、其の實質から謂へば、刑政の發展にただ一歩を進めたものに過ぎなかつたものと謂ひ得るのである。

□

刑事訴訟法が新たに改正された。之も從來の古い刑事訴訟法に對して一大斧鉞を加たものだといふことになつて居る。さうして、其の要點は、手續の經過に於て、大に人權を尊重した點であるといふことになつて居る。しかし、人權の尊重せざるべからざるは謂ふまでもないことで、單に人に嫌疑をかけただけで之を犯罪人視するの不當なるは勿論、自由心證に依つて取捨せらるべき各種の證據を蒐集するに付ては、愼重な用心と謙遜な態度との全うせられねばならぬのはあたり前のことにちがひない。現行の刑事訴訟法は、裁判所と檢事局と司法警察官とをして、此の當然な立場に立たしむべく旣に十分にできて居るのである。若し、當局が、現行法上形式的に權限の存することを楯として敢て其の人權蹂躪を續けようとおもふならば、新刑事訴訟法に於ても、それはやはり十分可能なことになつて居る。新刑事訴訟法は、其の構成が相當に論理的で、其の行文が比較的に流麗であるけれども、訴訟手續の實質を社會的に考へて見ると、改正といふべきほどの改正はないのである。

□

近く陪審法が制定された。或學者は、之に依つて、わが邦は完全に立憲國になつたとさへ謂つて居られる。勿論、私は、陪審法の制定を以て、わが邦の爲め、何等のたしにもなつて居らぬとは申すまい。しかし、私は、陪審法に依り、わが邦の刑政が、世にしかく傳へられるが如く、多大の發達を爲すであらうとはおもはない。民衆をして司法に參加せしめ、裁判に對して社會の悦服を得ることが陪審法の趣旨だとされて居る。固より、私は、民衆をして適當に司法に參加せしめるやうにしたいものであるとはおもふし、裁判に對する社會の悦服は、今日の程度を以て滿足すべきものであるとは思はない。しかし、抽籤に依つて定められた陪審員が單に起訴にかかる事實の有無の判斷をするといふだけで、陪審制の其の豫期せられた効果が全うされるものであらうか。少くとも、私としては多少の疑をそこに持たねばならぬのである。陪審制の功過に付ては、ヨーロッパ、アメリカの諸國に、既に永い經驗と深い研究とがある。私は、此の制度の樹立せられたことを喜ぶよりも、此の制度を其の豫期の如く進行せしめることに付て、今から十分の準備と覺悟とが明かにされねばならぬと考へて居る。

□

斯やうなことを考へつつ、玆に、指紋法のことを論ずることは、餘りに比倫を失することのやうにおもふ人があるかも知れない。しかし、先づ、刑法の新理論と指紋法との關係を論じて見よう。

刑の量定を如何にすべきかといふことに關して、新派の學者は激しく舊派の學者に對して爭つたのであつた。しかし、犯罪に對する刑罰の效果の、今日の如くしかく擧がらないのは、果して、刑の量定が宜しきを得ないといふことに、其の重きを置いて考へるべきであらうか。――假に、今、苟も罪を犯さんか。どうしても逃れる途がないとなつたとして見たならば、其の刑はよし輕くとも、刑の效果は甚だ大きいものではあるまいか。刑は如何に重くとも、其の刑を逃れる機會が甚だ多い以上、刑の重いといふことは何の作用をも爲すことができないと思はねばなるまい。實際に行はれる犯罪のうちで實際に檢擧される率は甚だ小さいとおもはれるのである。此の率を統計的に示すことはできない。しかし、學者の想像する所では、三分の一、四分の一、五分の一といふ極めて小さい數になつて居る。特殊の兇漢が死刑に處せられたとき、民衆は一種の痛快を味はふかも知れない。しかし、新聞をさわがした幾多の重大な事件が、わからずしまひになるの多きを見る今日に於ては、吾人の

生活は必しも安泰といふわけにはゆかぬ。さうして、そこに今日の刑政の大きな缺點があるのである。

街路を適當に照明することは犯罪を少なからしめることである。即ち、犯罪は兎角、暗を好むものだと謂ひ得よう。しかも刑法そのものは、如何に改良されても、直接に社會に照明を與へる力は弱い。事實に於て、假りに百の犯罪が百ながら發覺せねばならぬ運命にあるならば、それだけで、刑法は、その內容が如何に貧弱であつても、適當に社會防衛の作用を營み得よう。刑法の理論の新舊を爭ふことは、實際上さまで重要なことではない。實際上重要なのは、犯罪の行はれる社會の暗黑面を照明するものがあつて、犯罪が何人に依り、如何にして行はれたかを手にとるやうに明かにする方法の存するや否やの點である。若し、幸に、犯罪發覺の方法を適切ならしめる方法が全うされるならば、舊い刑法でも、十分に犯罪を豫防することができることになりはすまいか。

指紋法は、謂ゆる科學的探證法、即ち謂ゆる科學的警察の一方法として、此の目的の爲めに存するものである。指紋法は科學的警察の一方法たるに過ぎない。さうして、斯く指紋法を採用して、犯罪を明かにし、累犯を明かにすることにした精神を玆に更に擴充し、更に廣く、犯罪に關する探證の科學的方法を考へるといふことが之からの問題であるのである。

□

刑事訴訟法は大に人權を尊重する筈になつて居る。しかし、刑事訴訟の目的は、謂ふまでもなく、犯人と犯罪とを明かにするに在るのである。無罪の宣告をするのが其の主眼でなく、社會の爲めに犯罪人を處分するのが其の趣旨である。それで、刑事訴訟の局に當る者は、裁判所にしても、檢事局にしても、將た又司法警察官にしても、おのづから其の職務の其の社會的使命の爲めに影響を受けるのは當然ではあるまいか。

玆に於て、人權蹂躙の問題が起るのである。當局は、徒らに人權蹂躙を事として居るのではない。蹂躙された方面から見れば其の蹂躙は忍ぶべからざるものであるけれども、當局は、十分善意に、さうして、相當の注意を以て其の職務に從事して居るのである。若し、單に『疑はしきは輕きに從ふ』べきの原則に從ひ、證據の十分ならざるが爲めに終に犯罪人を發見する能はずとしてお役が濟み得るものとせんか、當局は畢竟土偶としてのみ存するに過ぎなくなる。しかも、當局が相當に其の活動を全うせんとせんか、そこには人權蹂躙が、少くとも或程度に於て止むを得ないことになつて居るのである。

斯やうな狀態は、果して刑事訴訟法の改正に依つて救濟され

るものであらうか。私は、刑事訴訟法の改正を無用だといふのではない。しかし、刑事訴訟法の改正に依て人權蹂躪が影を潜めるといふことは、決して待ち設け得べきことではあるまい。指紋法は玆に於て活躍せねばならぬのである。一方に於ては、犯罪の證據を的確にするといふことが、他方に於ては、採證上無用に人の利益自由を侵害しないといふことを意味する。——昔は、採證上神裁主義が行はれた。謂ゆる盟神探湯の類である。中世には、謂ゆる法定證據主義が行はれた。其の結果、特殊の犯罪には被告人の自白を必要としたが爲めに拷問の制度を生ずることになつた。今日は、自由心證主義に依ることになつて、拷問はなくなつたやうに謂はれながら、矢張、拷問又はそれにちかい方法が少なからず行はれねば、實際、採證ができなくなつて居る。惟ふに、自由心證主義を全うするには、科學的採證主義が採用されねばならぬ。手續上、被告人に答辯の義務なしといふことを明かにした新刑の訴訟法の主義を徹底せんが爲めには、其の採證が是非とも科學的に經營されることにならねばならぬのである。之に依つて、第一に、無辜が檢擧訴追せられることの虞を少くとも著しく減ずることにならう。第二に、犯人それ自身を裁判するに付ても、公正に且人道的に事態を運ばしめ得ることにならう。

□

陪審をして事實の判斷を爲さしめることは、事態をしてでき得るだけ常識的ならしめ、一方に於ては、常職裁判官の免かれ難い弊害を避けしめると同時に他方に於ては適當に自由心證主義を運行せしめんとするものである。しかし、今や、當面の急務は、事を單に常識的に解決せんとするの點ではなくしてできるだけ科學的ならしめようといふことになつて來たのである。

刑政を從來の哲學的乃至常識的な基礎から科學的な或ものの上に移さうとしたのが、刑法に於ける新派理論の勃興であつた。斯くして、先づ、刑法上の思想が科學的實證的になつたのである。さうして、之に續いて、刑政に關する技術に對し科學の應用といふことが考へられて來た。斯くして玆に科學的警察即ち科學的採證法が唱道されることになつた。——勿論、陪審の常識を重んずるといふことは輕視されてはならないが、しかし、陪審をして其の認定を爲さしめるの資料が科學的に構成されるのでなければ、陪審の常識は氣まぐれに陷りやすく、感情に流れる虞があると謂はねばならぬ。

指紋法といふときは、事は甚だ狹い。私は指紋法を第一歩として、廣く科學的採證法といふことに付て考へて見たいのである。換言すれば、指紋法を採用した精神が更に擴大して考へら

れねばならぬのである。

□

フランスのベルチーヨンは、フランスに於ける現下の科學的警察の基礎を立てた人である。氏が一九一四年の二月に沒せられたとき、私は哀悼の詞を書いて『法治主義より科學主義へ』といふことを論じ、其の中に次のやうに書いた。『一體、罪刑法定主義といふことは、中世の刑法に對して近世の刑法に一大進歩を與へたものであることは疑ないが、罪刑法定主義だけでは、單に裁判所の擅斷に對して個人の地位が保護されるといふのみで、刑法の社會防衛的作用はそれが爲めにむしろ阻害されて居るのである。それで現代の刑法論は、罪刑法定主義の從來の意義から漸次遠ざかりつゝあるのであるが、此の刑法の新理論を實際に適用して、一方には刑法の社會防衛的作用を全からしめ、他方には個人自由の確保を全からしめんとするには、刑事事項に對する科學の應用に力を致さねばならぬことになるのである。私は、將來の刑法が、從來の法定主義の刑法に對して、科學主義を特色とするであらうといふことを信ずる者で、此の點に於てベルチーヨン氏の訃に付ては一種の感慨なき能はざる次第である。』

□

オーストリヤのハンスグロース教授は、謂ゆるクリミナリスチックといふ科學をこしらへ上げられた。フランス、イタリヤの學者が科學的警察と稱して居るものを、教授獨特の立場から組立てて、之をクリミナリスチックと名づけられたのである。ドイツの學者は之に倣つて、此の名稱を用ゐることになつて居る。クリミナリスチックでは、裁判所が證據を蒐集するに付て、科學的に如何なる方法を採るべきかを論ずに止まらない。裁判所や、陪審員や、證人や、鑑定人や、被告人やが、事物の認識や判斷やに關し、如何に錯誤に陷り又如何に行動するものであるかを科學的に研究しようとするのである。一九一五年十二月にグロース教授は故人になられたがそれを傳へ聞いた折、私は、又、一片の弔辭をものして其の中に教授の語を引用したとであつた。教授はクリミナリスチックを以て生活の實際の研究だとし、それが刑事法一般の上に及ぼすべき影響を次の如く說いて居られる。曰く『今日の刑事法組織の全體から見ると、裁判官が主體で、被告人が客體で、證人其の他の者が補助者で、さうしてそれ等の者が固定した法律の下に於て働くのである。之に對し、被告人は謂はば代替物のやうに取扱はれて居る。被告人はそれが甲であつても乙であつても、之を一樣に看做して取扱はふのである。それと同時に、證人は之を價値あるものとし

て、法律は之を確固不動のものとして、裁判官は之を完全無缺なものとして取扱ふのである。しかしながら、クリミナリスチツクの敎へる所に依ると、事物の實體は千差萬態であるし、人間の認識は甚だ不完全なものであるのである。されば、證人の供述必しも深く恃むに足らず、裁判官必しも過誤なきものに非ず、さうして犯罪及び犯人は千態萬態なもので、法律はそのすべてを網羅して規定して居るものではないのである。されば、吾人は被告人を證據方法として取扱ひ、之を仔細に研究せねばならぬし、又裁判官や法律を以て法律を發見する單純な手だてとして取扱はねばならぬ。さうして、被告人や、證人や、裁判官や、法律やの種種の要素を併せて同列に置き、公平に其の價値を判定せねばならぬのである。すべて是等のものは、人間であるか、人間の產生物であるか、又は人間の測定物である。此等は皆缺點多きものである』と。斯くして、グロース敎授は、是等のすべてのものの上に立つてクリミナリスチツクを構成し、裁判官と陪審員と證人と鑑定人と被告人との實際を對象とした科學を組立てられたのであつた。

□

單に之を指紋法に限るときには、事態はまだ輕いとも謂ひ得よう。又、之を科學の探證的應用といふときには、むしろ技術的なものに過ぎないとも考へ得よう。しかし、私の考へる所では、犯罪及び刑罰を科學的に處置するといふ上から見ると、其の一種の運動の社會的意味は甚だ大きいものである。其の精神は刑法理論の爭の上に立ち、刑法刑事訴訟法を脫却し、裁判官、陪審員、證人、鑑定人、犯人のすべてを超越して居る。――私は、刑法理論の爭がほぼ一段落を告げ、刑法刑事訴訟法の改正が一先づ終り、さうして新しく陪審法を制定したわが國民は、一般社會の思潮の一面として、此の重要な運動に十分の理解を持たねばならぬと考へる。

指紋利用の實際

警視廳鑑識課長　岩藤章

指紋利用の方面

指紋に關することは近頃の新聞雜誌の記事に珍らしくないと云ふよりも、寧ろ一の流行であるかの樣、夫程頻繁に現はれる。けれども指紋の實際に如何に利用されつゝあるかを或程度まで通俗的に書いた、纒つた記事とては餘り見受けないやうである。夫が爲か、指紋利用の途に就いて、隨分、滑稽じみた履き違ひをして居る人が尠くない。『私の處では多數の從業員が居て中にはいろんな不都合を仕出かす者がゐます、盜癖のあるものはどういふ紋樣で、又嘘つきはどういふ紋樣かを教へて貰へぬでしやうか』と聽きにくる人もあれば、『一つ運勢を鑑て下さい』と手を出されて面喰ふこともある。是等は手相、人相と聯想し指紋法を以て手相の進歩した位に考へたのであらうが、強ち、笑ひ話ではない。實際、指紋と個人の性格との間には或神秘的な關係があるかも知れない、事實ありそうにも思はれる。併し、縱、さる關係があるとしても神秘はどこまでも神秘であつて科學の力で容易に之を闡かにせられやうとは思はれぬ。吾々の取扱つて居る範圍のものは、決してそんな進化の秘を探るやうなものでなく、たゞ現實に各人の指紋の相違から人と人との異同を最も的確に識別することの外にはない。

私は今、指紋の特色と其の利用法を述べやうとする前に、個人の異同識別が如何に世間に有用なことであるかを語らねばならぬ。何となれば現在に於ける指紋の効用の殆んど大部分が個人識別てうことに係つてゐる以上、其の觀念を措いて指紋を語る譯にはいかぬからである。

いつたい個人識別と云ふ言葉は耳慣れたものではないけれども、苟くも二人以上の人の居る處には必ず隨伴する問題である。吾々の周圍に起る諸多の問題は殆ど十が十まで人と人との關係を出ない、從つて人に對する認識——即ち個人識別——てうことが其の裏に横はつてゐる。就中民事刑事の法律關係にあ

つては人を確むると云ふことを常に先決問題とする。
流石に神樣は其の點を慮かられ、人間が相互に識別のつくやうにと一人一人必ず其の顏かたちを違へて生み出して下さる。幾千人、幾萬人、入代り立代れど未だ曾て私は自分とも他人とも寸分違はぬと云ふ今一人を見掛けたことがない。人間も亦別に他人と紛れないやうにと、自分又は自分の子に各々異なつた名前を附ける。乃ち太郎は次郎と違ひ、田吾作は杢兵衛と實體が異なることを表明することにしてゐる。彼を實體的の識別法だとすれば此は形式的識別法と名付けて然るべし。若し世の中にして今程に複雜でなく、もつと土地も狹く人も少いならば、此の二つの識別法で充分に甲は乙、乙は丙に異なる人たることを證明し得るに相違ない。實際吾々の過去の世界は夫で濟んで來たのである。然るに現在は最早さういかなくなつた。げに十五億といふ大衆が世界の隅から隅へ入亂れ行きかうて凄ましい競爭を續けてゐる。私共は到る處で殆んど見知らぬ、氣心の知れぬ人々と、斷へず接觸し交涉を保つていかねばならなくなつた。相手方の顏を覺え、其の名を暗ンじてゐても、人の顏のうつろひ易く人の名に同名の多く、後になつて定かに其の人に相違ないとは云へぬ。猾いのになれば己の所爲を知らぬ存ぜぬで濟まし返つてゐるかと思へば、甲某が乙某の名を騙り乙某が丙某であるかの風に裝ふて關係者を欺くと云つた類の手合も少くはない。假令顏を覺えて居ても顏に番號札が懸つてゐる譯でもなければ、慥かにお前だと云つても知らぬとあれば埒があかず、名前を記憶して居ても假名であつては仕やうもない。かゝる際に的確に人を見別ける工風がなくてはならない。是に於てか所謂個人識別法として佛人ベルチロン氏の人身測定法と指紋法とが生れて來ることゝなつた。

歐米諸國に於ては多く兩者を併び用ゐて居るが、其の一を採用してゐる國もある。我が司法省が先年前科者を識別する爲に何れか一を採らんとするに當つては勿論相當に議論があつて結局指紋法のみが行はれることになつたと聞く。

指紋の特性

指紋とは說明する迄もないが指頭の隆線、稍詳しく云へば人の各手指の內面第三關節から指頭に至る間に隆起してゐる曲線のことで、物を掴むときに滑らぬやうにと造物主が造つたと博物學者は云ふ。夫には三つの特性がある。一つには各個人に就き其の一生を通して紋樣に些の變化を來たさないこと——勿論生れたては少さく、長ずるに從つて大きくはなるが隆線の方向、配置、長短大小の比例に增減變化の行はれることが絕體に

ない――。二つには如何程多數の人の指紋を比較して見ても未だ曾て全く同一の紋様に遭遇せないこと、三つには指紋は各自異なれども而も弓狀、蹄狀、渦狀、若くは其等の混合紋に限られて突飛な紋樣とては決してないことである。第一を指紋の終生不變性と云ひ、第二を指紋の萬人不同性と云ふ。

之等の特性を學問的に研究し決定を與へたのは無論遠いことではない、けれども昔の人も大體指紋にそんな性質の有ることに着眼しては居つた。我國は勿論、支那にも、印度にも、埃及にも到る處指紋又は掌紋を或はサインの代りに、或は印章の代りに押し後日の證左にした習慣の今に傳はつて居るのでも窺ひ知られる。今の手形と云ふ名詞の語源もそこにあると云ふ。たゞ私は當時の人が指紋の終生不變性のみに即し、萬人不同性を促へ進んで個人の異同識別に應用しやうとするに思ひ及ばなかつたのを惜しいと思ふ。けれども亦其の時代に今日の樣に煩はしい個人識別の要があつたかどうかを考へるとき、寧ろ其の工風なきにこそ然らめと思はぬでもない。

今を去る百年、千八百二十三年獨逸ブレスラウ大學生理學教授プールキンエ氏が其の著「觸官及皮膚の組織の生理上の研究」の中に、初めて前記指紋の特性を事實について發表したことが、偶々刑事實際家の注意を喚ぶに至つて以來英國にてはヘルシエル氏、ガルトン氏等各別個の研究を致し、ヘンリー氏に至つて指紋の分類法を大成し、又亞爾然丁、墺太利等にも先覺者があつて夫々指紋利用の上に相當の貢獻を爲した。而して吾々の現に用ゐて居る分類法はハンブルヒの警視總長ロツセル氏の組立てた式に則つたものであるが、之を概言するに這の百年間諸家研究の總和が指紋の特性を學理的に明かにし、且紋樣の分類に依つて實體的に個人の異同を識別し得る系統を樹立したにある。

指紋の分類

指頭の紋樣は弓狀蹄狀渦狀の三種に大別され更に之を一定の標準に依り容易に而も明細に分類するを得る。指紋に依る個人識別法の長所は此の分類の容易にして明細なる點にある。今其の分類法を語る前に個人の識別が如何にして成されるかを一言したい。夫は通例先づ或時或場所に在る多數の人の指紋を採取して保存し、他日或個人にして曩に指紋を採られた一人ではなからうかと云ふ疑を持つとき、必要に應じ新たに其の者の指紋を採り保存中の前の指紋に對照し之を確めるにある。例へば一定の刑罰に處せられた凡ての人の指紋を採取してあるならば、後日前科者と覺しき者が捕はれて來た時其の指紋を在受刑者の指紋原紙と對照し、果して前科者なりや否やを糾し、進んでは

何某と稱し何罪にて何刑務所に服役した者かを知らうとするが如き仕組になるのである。

さて個人識別の爲めに採取する指紋は一枚の原紙に左右十指の指紋を廻轉式に押捺したもので上段に左手、下段に右手を各示指、中指、環指、小指、拇指の順序に左より右に騈べて押捺させ、一定のルールにて之に一つ一つ0乃至9の中の相當せる價を附ける。試みにロッセル式の分類標準を示すならば

一、弓狀紋――隆線が悉く指頭の一側より反對側に向つて走り逆流せざるもの――は、 1.

二、蹄狀紋――指頭中央に於ける隆線が指頭の一側より起り蹄狀を描きて元の一側に復るもの、特徴として蹄線と反對側下方常に一個の△狀線(三角洲と云ふ)あり――中

(イ)、甲種蹄狀紋――蹄線が拇指側より起り拇指側に復るもの――は、 2.

(ロ)、乙種蹄狀紋――蹄線が小指側より起り小指側に復るもの――にして

A、中核と三角洲との間に假想直線を引き其の直線を横ぎる線の數一乃至七なるとき は、 3.

B、同八乃至十一なるときは、 4.

C、同十二乃至十四なるときは 5.

D、同十五以上なるときは 6.

三、渦狀紋――指頭中央に於ける隆線が渦狀を形成し又は環狀を形せるもの、特徴常に二ケ以上の三角洲を有す――中、

(イ)、左側の三角洲の底邊を成す隆線の延長が中途消滅するときは其の下方の線を延長す)最右側の三角洲の內方に入ること右三角洲より算し四線以上なるときは 7.

(ロ)、同上延長線が右側三角洲の內方に入ること三線以內なるか又は外方に出づること三線以內なるときは 8.

(ハ)、同上延長線が右側三角洲の外方に出づること四線以上なるときは 9.

四、指頭の缺損又は基準部位の隆線の缺損又は不分明 0.

是に依ればどんな指紋に對しても0……9の內の何れか一の數値が附けられる。指紋原紙に押捺された十本の指には斯かる方法にて夫々相當の分類價を附し、且其の分類價を指の押捺順序に横線の上下左右に書き分くるときは分母子各五桁を有する分數式と同形の一種の記號が出來るから之を其の人の指紋番號として標記する。五桁の分數式の數字を有ゆる方法に置き換えて得る變化の數は、10^{10}即ち百億通りであるから指紋分類番號も同く百億種に分れる。指紋原紙五十萬百萬の多きに達すと雖も、之を番號順に排列整理する以上、一絲亂るゝ處なく所定の函の所定の部に收まることになるのである。

萬人不同の特性は唯一本の指に就いても認め得らるる、まして十本の指が十本ながら同じ順序に互に相等しい場合の有ろべき筈がない。けれども指紋番號は、素、あらゆる紋樣を僅かに十種に大別して附した價を組合せて作り出したものであるから異なる人にして指紋番號を同うする場合のあるは異とするに足りない。尤も實際上に於ては同一の指紋番號に遭遇するは極めて

稀有の例で、なんせ、百億も變化のある中の偶々同一番號に逢着する場合なれば求めて得らるゝとではない。此の意味に於て個人の指紋番號も尙其の人特有の番號と見て差支なく、生れ代はるか指を裁離するかせない限り終生變へることの出來ない一種の符牒である。顏貌は年と共に變化極りなく、氏名は突拍子のものでない限り同名が少くはない。前者には變裝を施すの餘地があり後者には變名僞名を名乘る機會があれど、獨り指紋、延いて指紋番號に至つては終生其の人と離るべからざること尙影の形を追ふが如きものがある。指紋に依りて迅速容易に而も極めて的確に個人の異同を識別し得る所以のものは實に此の分類方法の賚である。

以上の方法で原紙が保存せらるゝを知らば更に個人の異同識別方法に關し最早多くを聽くまでもなく讀者の腦裏には自ら其の如何なる手續を取るかゞ映ずるであらう。即ち例へば或者の前科の有無を調べむとならば、其の者の指紋を檢査して指紋番號を作り監獄受刑者の指紋原紙の棚について之と同番號同紋樣の原紙の有無を調査すれば事が足り、若し又全國民の指紋原紙が戶籍票の代りに豫め準備保存さるゝならば後日同樣の方法にて其の者が氏名を名乘るまでもなく其の戶籍なり身許なりが分明すると云つた譯になるのである

指紋に依る個人識別の過去及現在

一千八百八十年頃英人ヘルシェル氏其の任地印度ベンガルのフーリー縣に於て、豫て研究せる指頭印象を以て個人を識別する方法を實際に施行せしを世界に於ける指紋に依る個人識別法實施の嚆矢とし、次いで今世紀の初めヘンリー氏の分類法成るに及び歐洲諸國は競うて之を採用し殊に英國及其の殖民地の如きは從來施行せし人身測定法を去て全く氏の指紋法に移つた。我國が犯罪人異同識別法にロッシェル式指紋分類法を採用したは明治四十一年十月現行刑法實施と時を同うするものであつて、當時全國監獄に在監中の禁錮以上の受刑者(死刑囚を除く)並に爾後入監せる同種の全受刑者の指紋原紙今や積んで四十三萬餘に上る。其の正本は司法省行刑局指紋部に、其の副本は警視廳鑑識課に夫々分類保存され前科者を識別する唯一の資料となつて居る。尙警視廳は外に明治四十四年以來の禁錮以上の刑に該るべき刑事被告人及び必要ありと認めた拘留囚の指紋原紙を作成し、其の數約十萬を同樣に保存し一度檢擧された人を識別する用に供して居る。

何人も舊惡は隱したい、況んや旣に前科あり、前科なくも或種の罪に關して檢擧された事實のある者が、之を取調官に申立

つるは甚に不利益な心證を受くることになるのだから隱せる丈は隱し通さうと考へるは當然である。一面刑法は累犯を防止せんとする政策上五年以內に再び罪を犯した者をば特別に重く所罰することを規定してる。さればそんな羽目になれば、尙更素直に、本名を名乘る筈はなく或は僞名を稱し或は口を鉗して語らないこと丶なる。か丶る場合に前記指紋原紙は忽ち彼の化の皮を剝ぎ、又彼の剛情を挫く。爾來前科者も指紋法の前には觀念して實名を語るけれども尙且警視廳の關門を僞名で通らんとして發見さる丶犯罪人、一ヶ年五百名乃至六百名を算へる。又全國の裁判所で再犯者が初犯者を裝ひ僞名にて一旦刑を受け、刑務所に送られた後指紋から累犯者と判り、改めて刑を言渡される者も一ヶ年三百名を下らない。

紐育州に於ては子兒が學齡に達すると同時に其の指紋を採り母の證明書を添へて州の警察局に屆出しむるそうである。かくせば一面に於て戶籍の代用となり、迷兒となるも變死體となるも直ちに指紋に依りて身許を徵し得らる丶利便ある、と同時に犯罪の豫防及檢擧に役立つ。其の他指紋に依る個人識別法を活用せしむるに都合のよい方面は多々あらう。たゞ我國に於ける試みとしては右に述べた一事に限られてゐる。

犯罪搜査に利用さる丶指紋

犯罪現場より採取さる丶犯人の偶然にして遺した指紋よ……勿論詮じ詰むれば矢張個人識別と云ふ範圍を脫するものではないが……別個の方面に於て犯罪搜査の資料として又犯罪を確證する資料として極めて重要視さる丶。

生理の書籍を繙くまでもなく吾々人類の皮膚からは絕えず脂肪を含む一種の液分泌しつ丶ある。特に吾々は顏面及び手の內面と足の裏に於て其の著しいことを感じ、更に肉體的に將た精神的に手重い事柄に當るほど右の機能が一段の旺盛を極むることを數々體驗する。所謂手に汗を握るとは這般の消息を語るものではないか。而して其の分泌液は肉體の觸る丶如何なるものにも附着し就中平滑なる固體に附着したものは最もよく其の儘の印象を遺し注意して見るときは肉眼にも明かに之を認むるを得る場合がある。抑も手は物を摑み足は身を運ぶ機關なれば、手袋を箝め足袋を穿たざる限り最も多くの機會に於てそうした印象を遺すものである。犯罪の現場に斯して偶然附着した指紋を現場指紋と唱へ之を搜査上に利用するは周知のことである。

犯罪の種類にも依れど、實際手を下さずして犯す犯罪とては殆んど有りやうがない。特に屋內に侵入して金品を搜索して持

去る強窃盗事件は勿論、室内にて行はれた殺傷事件の多くは、犯人は或は外閣を超え、或は戸締を明け、或は金品を物色し、或は犯罪の前後飲食其の他の行爲ある等の事實を作ふ爲、其の間どこかしらに手を觸れ從つて必然指紋を遺すこととなる。指紋附着物の如何に依つては肉眼にも夫と知れるが、假令肉眼には見分難くとも指の觸れたと思はるる個所に相當の物理的又は化學的操作を試むるならば容易く指紋を現出せしむることが出來る。此場合に於て若し幸に賊の把握した何物かを發見し夫に附着した連續數指の指紋を得るならば之に價を附し直に監獄受刑者又は警視廳管下にて檢擧された刑事被告人の指紋原紙と對照して、居ながらにして犯人が前科者又は曾て檢擧されたことの有る者なりや否や、更に進んで前科者の何某なることさへも明かになし得る。若し又斯くお誂向に指紋が採れなくとも特徴ある一個以上の指紋が採らるれば、後日被疑者の上りたるときに其の指紋と對照し犯人と被疑者の異同識別をなし得るのである。寔に現場指紋ほど捜査上に調法なものはない。

現場指紋は夫程普遍的に採られる筈であり、調法なものであるにも係はらず、事實對照可能の指紋を採取する機會が案外に尠ないのは如何なものか。夫は勿論犯人は指紋を遺さんが爲めに遺すのではない……イヤ用意周到の者ならば指の觸れたと感付いたら何等か之を壞滅する手段を採つて行くに相違ないのだ……から附着が充分でないのもある。又附着してから現出法を試み採取する迄には通常相當の時間が經つてゐるので顯出成績の思はしからぬのもあらう。けれども其の主なる原因は他にある。第一、家人に其の邊の知識がない爲に不用意に現場を攪亂し又は取片付て折角の指紋を無くすることと第二に、訴に依つて最先に出張する受持の巡査や刑事巡査等が第一着に斯の如き有力なる證憑資料となるべきものを保存するやう、豫て教へてはあるものの兎角慣れない者の多く、只管被害の状況を聽取つたり、何等かの手取早い捜査資料を捜すなどの爲に家人と同様不用意の間に肝腎の賊の指紋の附着個所に手を觸れ其の紋様を壞すのみならず、時としては賊の指紋と思ふて採つたものが刑事巡査の指紋であつたと云ふ『盜賊を捕へて見れば吾子なり』を今様に描き出す滑稽の種を蒔くことである。已に警察官にしても物慣れざる者はそうであるとすれば民衆就中當面の被害者に於て、取込の際却々其の邊の注意の屆かぬは當り前である。又取亂した有様を臨場の人々に見らるることを厭ふて其所等を取片付けるも無理からぬ。併し私共は犯罪現場の保存が宜しくなかつたが爲めに獨り指紋に限らず、この場にある捜査の資ともなるべき幾多重要の資料を失ふた苦い經驗に餘りに多く遭遇する關係上、今少し一般に這個の知識を普及し、警察官は勿論民衆にも細心の注意を拂つて貰ひたいと思ふ。

犯罪捜査に指紋を應用した具體的の實例を書けとのお求めであるが、今は其の時機でないやうだ。（完）

時論

法學博士 吉野作造

無產階級運動の爲に

◎

最近の早稻田騷動に於て、僕は所謂反動的勢力の馬鹿に頭を擡げ出したのを見、一種妙な感に打たれざるを得ぬ。或る意味に於ては當然の成行の樣でもあり、或る意味に於ては困つたものだと思はざるを得ないからである。

◎

何故當然の成行と觀るかといへば、所謂進步改革を僭稱する一部の急進運動が昨今度を超えて過激の色彩を濃厚にして居つたからである。僕は先年來例へば勞働運動などに從ふ人々に對して、理想主義的立場から、言動の徒らに矯激に失するを警戒して懈らなかつた。社會問題の解釋につき如何なる理論的見地に據るかは、純理の問題として別に大に爭ふの餘地ありとして、只差當り運動の功果を擧ぐるといふ實際的目的よりしても、勢に激せられて自ら昂奮を抑制するの努力なくしては、少くとも、世上の同情を失ひ、果ては無用の反感をそゝるに至るは已むを得ないと考へて居る。理窟の判斷に於て孰れが正しいかは今論ずる限りではない。どんなに正しい道理でも、之を押し通すに幾分の强制を伴ふと、人情として玆に反抗の勢が釀成せられざるを得ないものである。勞働運動にしても小作運動にしても、將た水平運動にしても、極めて少數なる頑迷者流を除いては、其の主張なり要求なりの本體に就ては恐くは何人も異議はないだらう。いろ〳〵の利害關係から、其等の主張要求に無條件の同意を表し兼ね、又は其等の運動を内心快しとせざる者があつても、時勢が時勢だけに、きまりが惡くて正直に其の思ふ所を表白し得ぬといふのが當節の實狀であつた。所が昨今に至り、之等の反動者流が臆面もなく社會の表面に飛び出し、我は顏に橫行濶步して、而かも社會の之を制するの力が案外に微弱なるを見ることになつた。是れ畢竟先きの正しい運動が、正しい運動でありながら、事に當る者に不謹愼なもの〻あつたため、之に對する社會的同情の全般的に衰退したことの反映では

あるまいか。されぱと云つて僕は、之に乘じて起つた反動的運動の時代錯誤的愚擧を毫末も是認しやうといふ考は勿論無い。

◎

次にまた何故困つたものだと嘆ずるかといへば、之に由て革新主義の諸團體が、復た無反省に低い見地で輕佻な結束を堅め、同じく矯激の方針の下に防衞的陣容を新にすべきを怖るゝからである。といふと僕は之等諸團體の結束を忌む樣に聞ゆるが、必しもさうではない。結束は必要だ。が其の結束の仕方如何に依ては、必しもすべて之を歡迎すべきだとは思はぬのである。革新運動をして社會の健全なる發達に貢獻せしむる爲には、最も深く此點に關心することが肝要だと思ふ。

あらゆる社會革新運動は、先づ「現狀に執着する者」に於て可なりに手堅い第一の障碍を見出すを常とする。所謂現狀謳歌者中には種々の分子あり、其の言ひ分や其の勢力の度合は固より一樣ではないが、彼等はとにかく攻守兩面に於て鞏固なる連結を以て對抗するを常とするが故に、其の突破は革新主義者に取てなか〳〵容易の業ではない。之が爲に彼等が從來如何に窘められたかは今更說くの要はなからう。此の難關が强ければ强い程、其の打破に專念する度合が强くなり、其極遂に之を以て唯一の實際的目標とするに至るのである。鹿を追ふ者山を見ずの諺の通り、實際事に當る者としては亦已むを得ないと謂はねばならぬ。そは斯くなるが人情の當然たるのみならず、其程までに熱中しなければ、此の第一難關は突破すること到底出來なかるべきを以てゞある。即ち這般の成效の爲には斯種の妄信狂熱も實は必要なのだ。けれども我々は同時にまた、此の實際的必要の裏に實は將來の危機を含むことを忘れてはならぬのである。何となれば、この第一難關の突破に熱狂盲進するの極、知らず識らず第二第三の事業に必要なる用意に傷くの恐あるからである。於是熱狂せる實際運動の背後には常に冷靜なる理智の批判の存在することが必要となる。否らざれば第一難關の突破に成功しても、其上に新しい建設を爲すべき精神が既に滅茶〳〵にされる恐あるからである。

◎

社會運動の實際の發展を見るに、其初期に於ては凡百の現狀打破論者は皆第一戰線に結束するを常とする。現に我國に於ても、數年前までは、可なり過激な社會主義者も比較的穩健な社會政策主義者も、或點まで行動を共にして居つた。田舍の警察などに行くと、今でもさうだと考へて、僕等と幸德一派とを同樣の危險人物と觀るもあるさうだ。斯くして相當の年月を積み、現狀打破の主張も漸を以て世間の聽容を得る樣になると、

現狀打破の後に來るべき新建設の目標に對して自然色々考を廻らす樣になり、而して之に就てはまた自ら種々意見の岐るゝ所から、彼等の結帶は從前の如く鞏固なるを得ない。目前の成功に熱心なる人々は頗る之を憂ふべしとするも、僕等から觀れば之が寧ろ本當の發達の途上に一歩を進めたものと考ふるのである。我國社會運動の趨勢は最近實に此邊まで進んで居つたのである。之が今度の騷ぎなどで逆轉することがなからうか。之が僕の心配の一つである。

社會問題に關する論究が此の一二年この方可なり深く微細の點に入つて居つたことは言ふまでもない。從つてまた單純なる目標で以て猫も杓子をも糾合するといふが如きは甚だ困難となつた。之が爲に如何に某々一派の實際運動家が憂慮懊惱し、而してまた大同合衆の好題目を探すに狂奔して居つたかは、這般の方面を注視する者の看逃すことを得ざる事實であつた。けれども僕等は却つて之を以て進歩の一徴候となし、斯の段階を經て後に協働する所にこそ本當の確實なる進展が存するのだと觀て居つた。であるから、僕はこの趨勢をこの儘でもつと進めさせたかつた。之を妨礙する樣なことは出來る丈避けたかつたのである。然るに今度の騷ぎは如何。又昨今の形勢は如何。之を社會運動に對する有力なる迫害といはゞいへ、一面に於てはまた大同合衆の策士に提供するに持つて來いの好口實を以てするものではないか。斯くして再びもとの樣な低級なる大同合衆の勢を成すが如きあらば、僕は彼等の運動の爲に又社會の爲に之を悲まざるを得ない。

小題小言三則

◎遠い南國の某師團在勤の一年志願兵からの書信に曰く……昨年より今年にかけて、私の隊では三人の兵卒が自殺しました。一人は便所で、一人は炊事場の蔭で、共に縊死。もう一人は實彈です。皆軍隊の叱咤教育に餘りに戰々兢々とした結果だらうです。……電燈の傘の掃除が下手だとて、室中の兵卒が一人殘らず傘の塵埃を甜めさせられました。雜巾掛けが粗漏だとて、汚い雜巾水を無理に口中に流し込まれた人もあります。一寸した敬禮の仕方が氣に喰はぬとて、上履（スリッパ）で毆られたりするは毎度の事です。かねがね耳にはしてゐましたが、斯かる野蠻行爲が今日尙實際に行はれて居るのを實驗して、今更ながら驚きました……と。敢て當局者に告ぐ。之れ丈けは何とでもして本當に絕滅して貰ひたい。

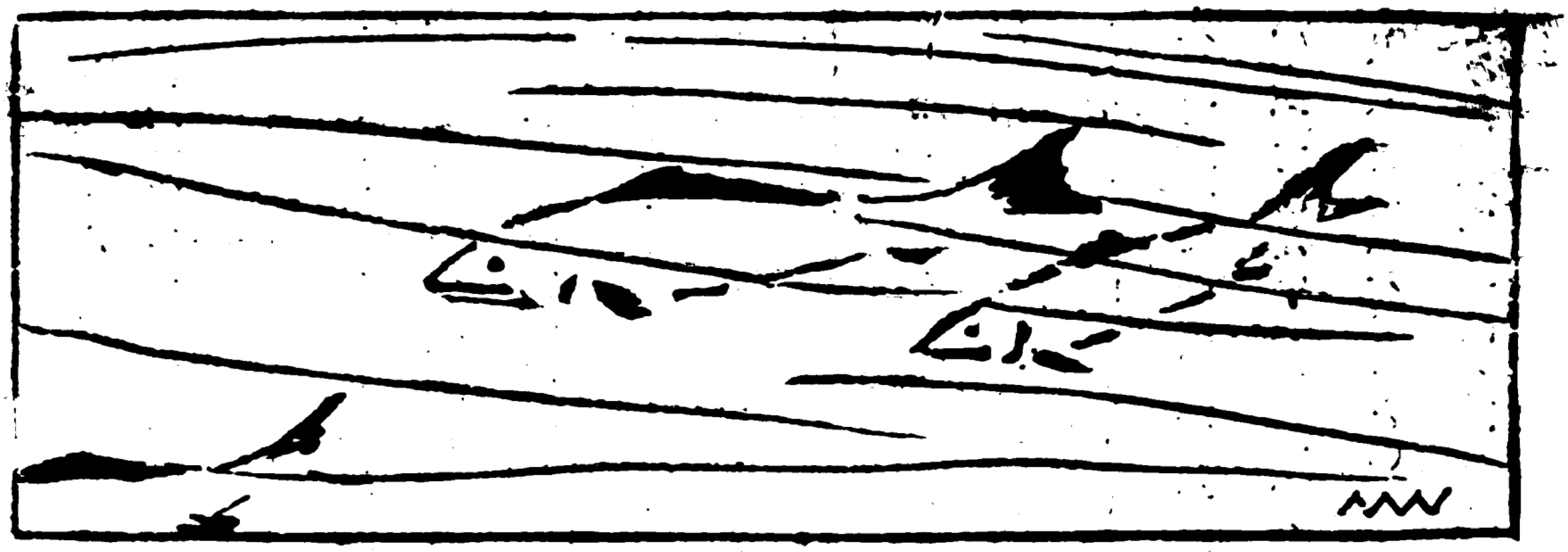
◎

六月十四日ケーベル先生が死んだ。日本の學界は此人の恩を忘れてはならない。僕は親しく教を此人からうけたことはないが、むかし法科大學の學生たりしとき、一度先生の文科大學生に授ける哲學概論の講義をぬすみぎゝしたことがある。その時の講義の中の一句、學者が本當の眞面目な學者である限り、その學說は必ずや其人の品格に密接の影響を與へてゐなければならぬと云ふ樣な意味の言葉が、不思議に異常な感激を僕の小さい胸に起さしめたことを、今なほ忘るゝことは出來ない。哲學者としてどれ程偉らかつたか僕には判らぬが、風貌からが哲人のおもかげありとは衆評の一致する所、先生の如きは言葉の最も深い意味に於て本當の「先生」であつたと思ふ。聞く所に依れば先生の晩年は眞に氣の毒なものであつたといふ。併し生活上の窮迫の如きは先生に於て何でもなかつたらう。晩年は成る程頗る陰鬱を極めたものであつたが、併し先生の一言一行は、その氣高さに於て又その親しさに於て、おのづから云ひ難き芬香を放つて居つたといふではないか。かくて先生は始から終りまで日本に於ける一道の明星であつたのだ。其の光りは微(かすか)でも、人の心に喰ひ入る力は比ぶものなく鋭い。鋭いといふ言葉が應しくないと云ふなら、如何なるものをも融解させる溫味を有つて居つたと云つてよからう。微にして而かも淸き、弱くして而かも長き感化を殘したる此哲人の長逝に際し、先生を識らざる僕達と雖も一言の悼辭を吝むことが出來ないのである。

◎

ケーベル先生の長逝に連れて想ひ起すは、故友小山鼎浦の薄倖な生涯だ。哲人の面影ある點に於て彼は先生と酷だ似た所がある。彼は極度の溫情と極度の聰明とを兼ね有し、謂はゞ最も天分の富豊な神の寵兒であつた。不幸にして性來多病、比較的短命にして世を終つたが、彼の殘した業績と感化とは、其廣さに於て其深さに於て又其の純潔さに於て、當代殆んど他に匹儔を見ないと思ふ。而して其人格の渾然玉の如き、之に接するものをして常に春風駘蕩の思あらしめずば熄まない。つとめて派手な生活を避けたから割合に人に知られないけれども、彼が如きの生涯と業績とは、ケーベル先生のそれと同じく、知己を百載の後に待つて年と共に段々と其光を增して行くだらう。

今僕は彼の親友の一人として他の二三の同志を語らひ、彼の全集を編纂して不日公刊せんとして居る。僕も關係者の一人であるだけ、玆に之を吹聽するは聊心苦しき感ないでもないが、併し彼の如き人格は益々之を當世に復活せしむるの必要あるを思ふとき、私情に殉して之を默過するに忍びないのである。ケーベル先生の遺稿も必ずや遠からず公刊を見るだらう。僕は哲人の風貌を多分に有せし此の二人を並べるを敢て不倫と思はず、而して彼等の書き殘した物は是非とも之を揃へて我等の座右のたからとしたいものだと考へてゐる。



星を賣る店

A merry tale

稲垣足穂

日が山の端にかくれると、この港の街には滑らかな夕べがやつて來た。と同時に、私もやつと息をついだ氣持になつて、新らしいワイシャツに、この間買つた細い紫色の蝶ネクタイに結び更へると、ぶらりと外へ出た。

兩側に青々した葉を一ぱい茂らせたプラタナスが、フイルムの兩端の穴のやうに點々とならんでゐる山本通りにさしかゝると、海の方から、そよ〱と涼しい風が吹き上げて來る。教會の隣りの空地にあるテニスコートのそばで、グリーンやピンク色の西洋の子供が、バネ仕掛の人形のやうに、威勢よく繩とびをしたり、ボールを投げ合つて遊んでゐる。樅の梢越しに見える蔦をからませた煉瓦建のベランダから、ピアノのワルツがもれて來る。「やはり神戸はいゝなあ」と、私は打ち水をした歩道の上を、コツ〱歩きながら、あたりを見まはした。ほんとうに、こんな夕方の一ときを、ハヾナの細卷でもくゆらして、トレアドルソングの口笛でも吹きながら散歩する

のは、何とも云へぬ清新な、そしてはいからな氣分がするものだ。――人通りだつて、下の方のやうにゴタ〳〵しないで、ほんの數へられるほどだし、したがつて、その一人〳〵に親しみを持てるし、いやな埃をあびせかけるオートモービルだつてあまり出食はさないし、少しも自分の考へや氣持が他力のものに邪魔されない……それで、私は、こんな夕方の山ノ手一帶のそゞろ歩きを何よりも愛してゐたのだ。

「ところで、さう〳〵、煙草があつたつけ」と、氣がついて、私は右のポケットに手をつきこんだ。が、次の瞬間「あれを、もう一ぺん稽古してみやう」と思つて、ポケットのなかに入れた右の手の指先を、すばやく動かして、そこにあるABCの紙箱のなかゝら、シガレットを一本拔き出さうとした。

――と云ふは、私の友だちにTと云ふ、やはり活動寫眞や自動車の好きな男があつて、そいつが、どこで覺えて來たのか、實に、ポケットのなかの箱から卷煙草を取り出すのが、おどろくべきほど上手なのだ。それはつい一週間ばかり前の話だが、淺川の聚樂館のまへで、私がスターを二つ買つて、一つをTに渡したところが、どうだ! 私の手が、その箱をやつの手に移した次の瞬間に、もうTはそのなかに入つてゐる煙草を口にくはへて「マッチは?」つて云ふのだ、中島さんの造つた飛行機が速いつて、コダックのシャッターの下りるのが速いつて、この速さに、私はまつたくたまげて、目を圓くしてしまつた。だが、すぐに、何かの手品でごまかしたのではないかと思つて、Tのポケットに手を入れて驗べてみた。が、やはりそこには、箱が一つ、たつた今Tの手によつて入れられたばかりのスターが一つきりしか入つてゐない。それで、私はさらにTの左のポケットの方も、上衣の裏側の方も、それから、ズボンも、チョッキも、およそポケットといふすべてのものを探して、おしまひには、頭に載つかつてゐる麥藁帽子の裏までひつくり反してみた。が、やはり前もつて用意された煙草の箱なんか、一つも見當らない。又、あたりの路の上に落ちてゐるやうな

模樣も格別ないのである。しかも、右のポケツトにあつた箱を手にしてみると、正しく、一本抜きとつてあつて、その上から錫紙がきれいにたゝんであつた事は勿論、箱そのものにも、別に無理をしてひねつたやうな様子がちつとも見えない、そして、Tがもうパツ〳〵と吸つてゐる卷煙草には、その時初めて氣がつくと、あの蠟引きの吸口までちやんとついてゐるではないか！「これやほんとうだ!!!」私は二度目にびつくりして叫んだ。「カーター氏そこのけだ、聚樂館を貸りて公開しちやどうだい？　行けるぜ、俺がマネジヤーになつてやる！」私はさう云つて、曾我酒家五郎の赤や綠の旗がたくさん立つてゐる、その大きな劇場の玄關口の方を指さした。が、さて、實際、まあその手付きのすばやい事と云つたら、くり返して云ふが、スターの箱をつかんだTの手が、ポケツトにかくれて、こんど見えたと思つたら、もうそのなかの一本を指の間にはさんでゐるのだもの、これじや、今ちよつと早くなれば、私が煙草を買はないうちに、Tはもうその店先につんであるスターの五つ六つを、ポケツトのなかに入れてゐるかも知れない。勿論こんな事になつたら大變だが、まつたくそのやり方は、人間抜とも思はれなかつたと云つても、決して差支へはない。ところが、Tは案外平氣な顏をして「何、何でもないんだよ。僕は三月ばかり稽古をしたんだ。練習をつめば、もつと早くだつて出來る。君だつてやつてごらん、わけはないさ……」つて云ふのである。で、私はちよつとその眞似をやつてみた。ところがどうして！　そんな神變不測の早業が、さう簡單に出來てたまるものか。指先をもつらかせて、ポケツトのなかで鼠でも捕りおさへるやうに、スターの箱をひつくり反したあげくに、やつと、一本抜き出してみると、情けないことには、くの字になつてゐるのだ。「そのうちにやれるよ、只指先の熟練にすぎないからな」さう云つて、Tは又ポケツトへ手を入れて出したと思つたら、さらに新らしいやつを一本、しかもちやんと吸口をつけて取り出してゐるのだ。……こんなわけで、それがしやくにさはつた私は、あまり感心された話ではないが、間がなすきがなに、その煙草抜き出しの早業

を練習する事をおこたらなかつたのである。一度などは、人待のまどろつこしさに、平野の電車終點をぐる〲歩きまはりながら、くり返してそんな稽古をやつてゐたので、とう〱箱がこはれて、ポケットのなかゞ、刻み煙草で埋まつてしまつたといふやうな、とんでもない奇術に終つた。ところで、私は今も、それにふと氣がついて、まさに取り出さうとしたABCの箱を、又元のポケットへおさめて、そのなかゝらすばやく一本を拔き出さうと試みたのである。

もういくらかうまくなつて、親指と藥指とが、紙箱の兩端をおさへて、中指が下から Push this end のところを突き上げると、同時に、親指がはね上つて蓋をあけて、人差指と一しよに錫紙をめくつて、一本のシガレツトの上部を器用につまむ。それだつて相當の時間がかゝる。それにわるくすると、實際おそろしく急激な運動が加へられるので、きやしやな紙箱の端がすぐにやぶける心配があるし、錫紙と來たら勿論、玉手箱を開いたミスター浦島の顏のやうにしはくちやになつてしまふ。それが少しもいたまないやうに、しかもTのやうに電光的にやつてのけるなんていふのはとてもの事だ。「だが、この調子じや、どうやらうまく出來さうだぞ」と、私は、最初の一回が案外巧妙に行つたので、その取り出した金口を、左の方のポケットにうつして、もう一度、さりげなく右の手をかくしに突きこんだ。ところがこんどはうまくやらうと思つたせいか、前よりは時間がかゞつて、拔き出した卷煙草はねじれて、少し紙が破れてゐた。「これやいけない！」私はさらに一回試みた。もうてんで駄目だ。「えゝくそ、もう一度！」私は又やりなほした。やけ氣味にグツとつかんで引き出すと、錫紙と他の煙草がくつゝいて來た。「もう一回！」……かうして私は、とう〱つぶれかゝつた金口の七八本も、左のポケットへうつした時、これや、どれもかも目茶苦茶になつてしまふと氣がついて、そのなかの比較的完全な一本に、やつと火をつけた。ところで、取り出した紙箱はと見ると、まるでカリガリ博士の馬車のやうにゆがんでゐるじやないか。——「やつぱりいけないなあ、だが、出來さうなものだ、落ちついてやれば

……から無造作にグッと突きこんでと、それから、この指とこの指とで、かうしつかりおさへて……」私の手は又、いつかその箱をポケットへ入れて、いじりまはしてゐる。「もうよさう！　他方から見たらまるで氣ちがひ沙汰だ」私はひとりでそんな愚にもつかぬ事にやつきになつて、もの〻二三丁も夢中に歩いて來た自分がをかしくなつて、氣がついたやうにあたりを見反つた。もうトアーホテルの下まで出てゐた。

「いくら何だつて、あんなに早くやれる筈はないぞ。ひよつとすると、やはり何かの手品かも知れぬ。Tの奴、あの時、へんにニヤ〳〵笑つてゐたやうだ。よしこんど會つたら、とつかまへて白狀させてやる！」私はさう思つて、苦笑をもらしながら、角をまがると、三宮神社の前までつゞいてゐる廣い坂路を下り出した。理髪館や、花屋や、大きな會堂や、小さなホテルや、仕立屋や、自動車屋や、浮世繪や刺繍を出した店や、女の帽子を飾つたショーウインドーや、そんな小ぎれいな西洋館が兩側にずらりとならんで、その大小さま〴〵な看板が、いづれも英字で記されてゐるのも氣持がい〻。下の方から、クリーム色の輕快なハドソンが、ブル〳〵とリヅミカルな響を立て〻やつて來る。商館歸りの洋服がたくさんのぼつて來る。そのなかには、白い麻服にでつぷりしたからだを包んで、葉卷の香をのこして行くヘルメツトの老紳士もあり、水兵服をきた子供の手をつり下げるやうに引いて、せつかちにスカートをからげて步を運んで來る奧さんもあれば、又、チユーイングガムをかみながら、活動の話をして行きすぎる、カウボーイの帽子をかむつた半ズボンの連れもあり、青い布で頭をまいた舶來タバコのビラ畫にあるやうな印度人もまじつてゐる。坂の下の方は、自動車や電車や人ごみが、ゴタ〳〵ともつれて、いかにも、いろんな國の色彩と音とが騷然とからまつた貿易港のたそがれ氣分を織り出してゐる。その上の方に、ちやうど、この坂の中途から視線を水平にのばした眞正面に當るところに、どこかの倉庫か。それとも建てかけたコンクリートビルデングか、いづれとも判別しかねる、灰色の長方形と三角

形のつみ重つたものが見えて、その高いところへ、山の間からさすらしい夕日が、桃色にあたつてゐる。いづこゝ青ばんでゐる鼠色のなかで、その一區劃だけが、まるでキネオラマの舞臺のやうにくつきりと浮き出し、奇妙な幾何模様に見える影と形とが、キーユビズムの製作に接したやうなエフエクトを造り出してゐる。その向ふには、林のやうな碇舶船のマストがならび、赤や黒の船體や、黄や青色の煙突が亂雜にひつかゝつてゐる。「これや面白いぞ、何か畫が描けさうだぞ……」私はそんなことを思ひながら歩いてゐたが、さて、ふと氣づいたやうに「これから一たいどこへ行かうか知ら？」と考へた。活動寫眞を見やうかと思つても、さう變つたものも來てゐないやうだし、K氏の音樂會は來週の今日だし、ロシヤの曲馬團だつて明後日からだ。さあ……私はちよつとその先とはうにくれた。「ともかく誰かさそひ出してやらう、いや、それも面倒だなあ――元町を歩いてみやう。じや誰かに出食はすかも知れぬ」さう決めて、私はすたすたと歩を進めた。が、ものゝ半丁も行かぬうちに、右の方に、キラ〳〵と瓦斯に照らされた美しいショーウインドーを見かけて、思はずもその方に近づいて行つた。と云ふのは、それは大きなパラソル店で、いろんな格好をした蝶々のやうな女の傘が、その大きなガラス板の向ふに、一ぱいぶらくつたり、花壇のやうに組み合はしてあるのだ。それらに、花やかな青い瓦斯の光が、水のやうにながれて、そこだけ、この街上の夕方の光とは又まるで異つた――云はゞ、水族館の魚を入れた箱をのぞいた時のやうな、不思議な別世界を造つてゐたからなのである。けれども、私の足がまだその店のまへに行きつくさないうちに、私の目はいち早く別のものを見つけて、私のからだをそこに立ちどまらしてしまつた。その青い飾窓から二三軒ばかり手前にある幅一間ばかりの露路の向ふに――支那街になつてゐるところに、何か黒だかりが見えたのである。で、私は、こんどはパラソルの方を打ちやつて、その方へつか〳〵と入つて行つた。

纏足に赤い繻子の沓をつけた娘さんや、潮風にやけた額の下に、綠色の目を光らかしたセイラーや、會社歸りのアル

パカや、はだしになつた支那の子供たちが、煉瓦建の倉庫の下を半圓形に取りまいてゐる。のぞくとその黒い鐵の扉の前への石段に、黄いろい服をきて、頭の上に、赤い毛絲の玉のついた青い帽子をちよこんと載つけた支那人が、あぐらをかいて、色のはげた赤毛布の上に、小さな皿を三つならべて何かやつてゐるのだ。「博奕かな？」さう思つて、私はもつとからだをのばした。

「一二三！」

支那人が聲をかけて、伏せてあつた皿を取りのけると、その下には木質のやうな黒い粒が、一二三箇づゝをいてある。

一同はどつとどよめいた。

「ホイツ！」

と、支那人は器用な手付で、その粒をまとめて一つの皿の下に入れると、他の二枚をその左右に伏せた。ところで「一二三！」と、まんなかのを裏反しにすると、もう空になつてゐるのだ。「ヤツ！」と云つて、左右の皿を同時にひつくり反すと、その下に、いつのまに變つたのか、黒い粒が四箇づゝに分れて現はれた。それをかこんだ人の輪から、パチパチと拍手が起つた。支那人は、さらにタンバリンのやうなものを取りあげて、チヤラ〳〵と五六回ふり鳴らすと、こんどは、そこに何かをおほつてあつた更紗を取りのけた。青い壺が出て來た。そのなかへ手を突きこんで、スル〳〵と引き出したのは蛇の子である。勿論、生きてゐる。太さは普通の鉛筆ぐらゐで、長さは、それでも一尺五寸より決して短かくはない。それを右手につかんで、高くさし上げながら、支那人は、一同に生きてゐるといふ證據を充分に見せた。ピン〳〵うねらせながら。そこで、蛇がキユツ！と奇妙な聲を出して鳴いたのである。いや、それは支那人が懐中かどこかで、そんな笛を鳴らしたのだらう。それから、どうするかと云ふと、自分の鼻の穴へ、その蛇の頭の方からする

〳〵とさしこみ出したのである。見てゐるうちに蛇のからだはだん〳〵と鼻の奥の方へ入つて、外部に出てゐる部分が七八寸ほどになつた。それも次第に短かくなつて行くと、こんどは、支那人は口のなかへ二本の指を押しこんで もう咽喉まで下つて來たらしい蛇の頭をつまんで、口の外に引き出して、それを上下の唇でしつかりおさへてしまつた。鼻の外にあまつて、ピンコ〳〵してゐる尾の方はどうしたかと云ふと、ひよいと無造作に、眼鏡のつるをなぶるやうな工合に、右の耳たぶへひつかけてしまつたのだ。どうも氣味のわるい事をするものだ、と感心してゐると、支那人は青い帽子を脱いで、前の方へさし出しながら、蛇をくはへたへんなくゝみ聲で

「イハチガケ！　イノハチガケ！……」

　と云つて見物をうながした。

　その汚れた絹帽のなかには、忽ち銅貨や、白銅や、銀貨が放りこまれ出したのである。

「おい！」

　この時、突然、私の肩を後から押した者がある。ふり向くと、活動役者のやうな派手な縞シヤツをきた男が立つてゐる。顔を見るとNなのだ。帽子も上着もつけてゐない。

「やあ君か！」

「何をめづらしさうに見てるんだい？」

「何つてごらん！　命がけの事をさ」

「何、命がけ⁉」

　Nは私の言葉をついで、からだを乘り出したが、へんな日本語で「イノチガケ、イノチガケ……」をくり反してゐる

支那人と、その唇の間に蛇の頭が見えたので、ふき出しながら

「成程、こいつはイ、ノ、チ、ガ、ケ、に相違あるめい！」

と、さう云つて口眞似をしながら、ズボンのポケットから、キラ〳〵した新らしい銀貨をつまみ出して、青い帽子の上に投げつけた。もうその時、最後の危險術が終つたので、集つてゐた人々は散りかけてゐたから、私とNとの足も、又向くともなく本通りへ出て、鐵道の踏切の方にさしかゝつてゐた。

「この間、君の作をよんだよ。スターメーカーを。――ありやえゝぜ」

Nが云ふ。

「出たらめを書いて、小使が取れるつていふから愉快だよ、君は。だが、あれを讀んで、神戸にそんな事件があつたんだらうかと、云つてた奴があつたぜ。どうも血のめぐりのにぶさにはおそれ入つたものさ――」

早口につゞけながら、Nはふと立ち止つて「時に君、飯はまだゞらう？　どこかへ行かうか？」

「うん、今パウリスタへ行きかけてゐたのさ」と答へると

「何だつて、あんな感じのわるいところへ行くのだ、ガチヤ〳〵して、落ちついて何も食はれやしまいが!?」

と、怒るやうに云ふのだ。

「だつて、俺はあまり娘さんの居るところじや、氣がねをするのでね」と云ふと

「あゝさうだつたつけな、ハッハッハッ……」

Nは、大きな聲で、あたりの人もかまはずに笑つた。

「だつてさ、何もあんなまづいところに決めたくたつていゝじやないか？　サロンもあるし、ロンドンだつていゝし

さ。ロンドンには可愛いゝギャルソンがゐるじやないか!?」

この荒い縞のワイシャツをきたホテルの息子さんは、何事もやりつ放しのくせに、御商賣柄とでも云はうか、そんな事にかけては、なか／＼神經が鋭敏なのだ。

「それじや、君とこで食べればいゝのだな」

と、私は冗談のつもりで云つた。

「そりや家だつていゝ。あんなとこよりはうまいものを食はすよ」と云ひかけて

「さう、ほんとうに家にしやうか？　すぐにこゝさへさすよ。それに俺――こんな裝じや三階へも上られぬのでね」

Nはその時初めて氣がついたやうに、帳場に腰かけてゐるまゝの自分のなりを顧みた。

「ちよつと、おやぢの用事でそこまで來たのだが……ねえ、かまはないなら、さう決めやうじやないか？」

そこで、二人は又元來た路の方へ踵を反した。先程の露路へ入つて、煉瓦建の下まで來ると、もううす暗くなりかゝつたなかで、靑い帽子の支那人が、忙しく布や太皷や皿を、古ぼけたカバンのなかへ、取りかたづけてゐた。

「イハヽヽチガケ！」

とほりすがりに茶目坊のNが相手になると

「イハヽヽ　イハヽヽチガケ！」

と、支那人も笑ひながら、手をあげて蛇を使ふ眞似をした。

「こゝを通ると、いつも左右から黑いものがやにはに飛びかゝつて來て、アッといふ間に箱のなかにつめられて綱にしばられて、スル／＼と下されると、そこから地下道が埠頭場の方へ連絡してゐるやうな氣がするつてさ――」

漢字をならべた赤い紙が見える窓や、褐色の豚肉がさがつてゐる店や、又、そこにともつてゐる灯を映した水のたまつた狭苦しい石甃の上を歩きながら、私は云つた。

「誰がさ？」

「Mが、そらグランマースクールへ通つてゐる――」

「あいつの考へさうな事だ。だが、あんな男を盗んだつて三文にもなりやしまい。それよりか君、この間は險呑だつたぜ。知つてるかい？　俺の頭の上でキラツと短刄がひらめいたんだぜ！」

Nは急に思ひついて、目をかゞやかせた。

「うん、さうだつたつてな、Rから聞いたよ。新聞にも載つてゐたね」

と云ふのは、二三日前、Nのホテルへ夜遲く、醉つぱらひのマドロスがやつて來て、酒を飲まさないと云ふので、海軍ナイフをふりまはして暴れたといふのだ。

「そりやおどろいたよ。何しろ向ふは外國人のでつかい奴だからな。――それも君、その時までは、おとなしく二三人の連中と歌をうたつてゐたのだ。手風琴を持つてるやつがあつて、スペインの何とかいふ曲を奏いたが、それや素敵なものだつた。ところで、店をしまひかけたゞらう、大將出ないつて云ふのだ。突然、亂暴を初めやがつて、椅子を蹴とばす、風琴をひつたくつて投げつける、友だちがおさへたつて何したつて承知しねえのさ。だしぬけに、俺とおやぢの方へ突きかゝつて來やがつてね。すると、おやぢがバツとピストルをさしつけたのさ。奴の胸の前へ。どうだ君、大將、ハツと電氣にかゝつたやうに手をあげちやつたよ。それに氣をつけてみると、大將を止めてゐた連中も、三人が三人共お揃ひでハンダップをやつてるのさ。まるで活動そつくりで、俺や何だか冗談みたいな氣がして仕方がなかつた

よ。まつたくふき出しかけた。その格好つたらないんだもの、大きな男が四人も立ち上つて、かうやつてやがるんだ……………」

Nは身ぶり手ぶり巧妙に、その痛快な活劇の有樣を語る。

「何しろ君、こんな商賣もいゝかげんなものだよ。へんな奴は入れない事にしてゐるが、それだつて店を開けてる以上、さう無闇にことはりも出來かねるのでね――」

さう云つてゐるNの身のこなし方と云ひ、表情と云ひ、もうすつかり一人前になつてしまつてゐるので、私は思はずも口に出した。

「だが、えらいものだね」

「何がさ?」

「何がさつて、ついこの間まで自動車屋の前に立つて、遲刻ばかりしてゐた坊つちやんが、もうそんな立派なホテルの若旦那になつたのだからね」

「何云つてやがる、くだらない……君だつて同じではないか? あのハモニカは何だい? そらあの赤いハンカチを……俺やおぼえてるよ」と反對にやられたので

「止せ止せ、もうわかつた!」

私はあはてゝさへ切りながら

「時にN氏、いやBホテルの若旦那、タバコはあるかい?」

と、てれかくしにポケットのABCを取り出した。

「何、これや表現派じやないか!?」
Nはとんきやうな聲をあげて、いびつになつた紙箱を取りあげた。それで、例の早業練習の一件を持ち出すと「ハツハツハツ、とんだ閑人もあつたものだ!」
又快活な笑ひをぶちまけて
「Tの奴、どこへでも持ちまはつてやがるんだな。つまりからいふあんばい式だな」
と云つて、その箱を自分のポケツトへ入れて、一本取り出したが、それは私がやるのよりずつと時間がかゝつた上に、下手くそであつた。
「だがね、君、ありや手品だぜ」
Nは蠟マツチの火を、口にくはへたその一本にうつしながら、忠告でもするやうな口調で云ふのである。
「さうだらうな」と相槌を打つと
「そうとも、それにちがいないよ。でなきや、あんな不器用な奴に、そんな事が出來てたまるかい、それこそお月さんが西からのぼらあ……」
「さうかな、だつて先生、そりやうまい工合に拔き出すぜ」
「いや、そこがごまかしなんだよ。あの男、マンドリンをもう六ケ月もいじつてゐるが、君、いまだに滿足な曲一つようひきやしないぜ。あんな手先の動きのわるい奴も又とないよ。俺だつたら半日でやつてみせる。――そりや、何かのごまかしをやつてるのさ。きつと!――そして、カーターだつて『全世界に只一つの謎あり、そは我輩の魔術なり』だなんてえらさうな事をぬかしてゐるが、やつぱり按ずるところ、そんなやうな簡單なペテンさ。格別さはぐほどの事で

もないんだ」

Nは、いつの間にか、彼一流の哲學を引き出し初めた。

その時、私たちはゴタ〳〵と曲りくねつた狹い街區をぬけて、中山手の本通りに出た。うしろから自動車が一臺そばをかすめて、ルビーのやうなテールライトを、鳶色の夕やみのなかにうるませながら、向ふの辻をまがつて行つた。

「ガソリンの匂ひつていゝものだなあ。ちよつと頽廢的で、……」

私は云ひかけた。

「文明的厭世氣分とでも云ふかな？　まつたく現代人は、こんなところにニルバナを認めなくちやいけないのだ。それに俺は、この匂ひと、ツーステツプザラゴザとの間に共通點があるやうな氣がする」

さう云つてNはみづから廿世紀の悲しみを表はしたと解釋してゐるそのみぢかい舞踏曲の一節を口笛でならして

「ねえ、こいつとね、さう思はないかい？」

「成程、だが、ちよつとばかし甘いね」

私は今さらこの男のかうした方面の敏感さに感心しながら、さう評言を呈した。

「甘いたつて君、耽美主義は卽ちセンチメンタリズムさ。しかし、これやそのセメン樽のなかでも高踏的だな、星や菫のつていふやうなものと、おのづから類を異にしてゐる」

なか〳〵うまい事を云ふ。

「今とほつたのはフランクリンだね？」

思ひ出したやうにNがつけ足した。

「さうだ、セルフレザーにある車だ」
「あれにはラジエターがないんだな」
「うん、エヤクーリングだからファンがついてゐるのだ」
「あいつはやかましくなくていゝな。今日、晝、ちよつと店のまへに來たオーバーランドに乘つてみたが、ありや、座席が少さくて、レバーによく足がとゞくから工合がいゝね……」
　話は自動車から煙草に向つてとんだ。
「こんど來たジャコつていふ鳥のついたドイツ製は、貴婦人向きだね」
「だが、そりやきつと夜の貴婦人だぜ。ありやよくないよ。やはりサルタンスの二號がいゝ――」
「赤い三日月と星のマークが君の氣に入つてるのだらう？　何もわるくはないじやないか、そら、エジプトの神様のついた……アイシスさ！」
「うん、だつて箱がまづいや」
「ハーピーも流行だが感心しないね？」
　こんなことをしやべりながら二人は、フランクリンがまがつた辻を折れて、鬱蒼とした生田の森のうしろにあるBホテルの表門をくゞつて、明々とかゞやいた玄關の石段を上つた。
「ちよつと待つてくれ給へ」
　云ひすてゝNは、客間をのぞきに行つたが、人がつまつてゐると云つて、長い廊下の突き當りのドアーをあけて、石段を下りると、ジュツ、ヽ、ヽと肉を燒く音がするコツク部屋の隣りにある厚い壁の部屋に案内して、頭の上の瓦斯にボ

ッと火をつけた。

Nに御馳走になつた私は、七時頃葉卷をくはへて、そのホテルのつい近所に、最近、蓄音器の店を道樂に開かうとしてゐるＫのところに訪れた。

戸をたゝいても返事がないので、押してみるとすぐ開いた。うちらへ入ると、もう店は九分通りまで出來上つて、新らしいペンキとワニスの香が鼻をつく。が、電燈が皎々と化粧煉瓦の床を照らしてゐるだけで、誰の姿も見えない。で、奥の突き當りのドアーをあけて、かまはずに二階へあがつてみると、ふすまをはづした八疊と十疊のぶつとほしのまんなかで、そのぐるりに一ぱい重なつたレコードや、器械や、美しいカードやポスターにうつもれて、Ｋがひとり寢ころんで煙草を吸つてゐた。

「やあ！」と云ふうちにＫは「君の好きさうなのが來てるぜ」と、のつそり立ち上つて、Red white and blue といふ新らしいコロンビヤのレコードをかけた。成程、そいつは氣に入つた。聞いてゐると、ひとりでにからだが踊り出して來るのだ。「もう一度」それがすんだ時私は云つた。それから、ハワイヤンギターや、トレアドルソングや、コミックの早口を五六枚引きつゞけて鳴らした。こんなことをしてゐるうちに、時計を見ると、もう八時になつてゐる。

「まあいゝじやないか？　Ｒもやつて來る筈だし……」

とＫは引きとめたが、私は日のくれ方に、あの坂路の青い洋傘店を見た時、ふと頭にうかんだ或るお伽噺の構想を、さつきから頭のなかで、ひねくりまはしてゐたので、そして、Ｓと一しよに飯を食べてゐる時、それがどうやらうまくまとまりかけたので、感興の去らないうちに、早く歸つて書いてしまはうと思つてゐたのだ。この機會をはずしてしまへ

ば、お流れになつて、これも又、頭のなかに五つ六つもたまつてゐる書かない物語になつてしまふやうな氣がした。で、早々に立ち上つてKに失敬した。

ぞろ／＼と、人が出さかり初めた賑やかな通りをぬけて、私は三角形になつた辻に出た。「さて、電車に乘らうか？」と思つたが、何となく氣分の輕快な夜であるし、ブラ／＼と歩いて歸るのも一興だらうと、私は中山手通りの南側の步道を、コツ／＼と西へ步を進めた。もうこのあたりは、人通りがほんのチラホラと見える切りだ。兩側の家は大方、植込につゝまれた西洋館で、このうす暗い廣い路の左右にならんでゐる瓦斯燈が、殊の他、靜かな街區にふさはしい美觀をそへてゐる。「ところで……」と私は考へた。「それから、どういふやうに筋を運ばうかな？」頭にうかんでゐるお伽噺をあちらこちらにうごかせた。「それよりか、何でもかまはず、思つたとほりにぐん／＼書きとばしてしまつた方がいゝか？」いろ／＼に考へをめぐらしながらも、私は又あたりを見まはさないではをられなかつた　と云ふのは、そこはほんとうに私の好きな、これこそ注文通りとでも云ひたい山手通りの美しい夜なのである。それに今晩は、いつにない不思議さへもふくまれて、そこら中一たいに、ちよつと口では云はれないファンタシーが、たとへばうすい霧のやうなものになつて柔らかくひろがつてゐるやうに思はれ、遠い辻に現はれて、又どこかへ消えて行くギラ／＼目玉を光らした自動車や、又、前後からゴーッと通りぬけて行く明々としたボギー電車のなかに、非常にきれいな夢――言葉はをかしいが、さう云つた感じのものが漲つてゐるやうな氣がするのである。その上、二つのレールのまんなかに一列につゞいてゐる鐵柱の上にある二つの燈火が、やはり、二列の光の線を空間に引いて、それが向ふの下り坂のあたりから、鋭角をゑがいて下方に折れて見えるのか、ちよつと表現派の舞臺を步いてゐるやうな感じを起させる。

私は、いつか夢であつたか、それ共氣まぐれな空想であつたか、そんなやうな奇異な都會に入つてゐた事を、ふと頭

によび起した。――それは、見上げるばかりの急坂や、判斷がつかぬやうな螺旋形の道路や、又、非常に細くほとんど二尺ほどの幅につぼまつたところや、さうかと思ふと、おそろしく廣大な、グラウンドのやうな幅の路がある夜の街で、その間を縫つて、私の乘つた明るい電車が、走馬燈のやうに走つてゐるのだ。新らしい大きなボギー車で、私は鏡のやうな天井板や、きれいな窓ガラスをよくおぼえてゐる。が、乘客は私の他にほんの二三人しかなく、それらの人はみんな立派な裝をしてゐたが、何か物思ひに沈んでゐるやうに顏を伏せてゐた。そして、眩しい車内の明りが、ガランとした黑い腰掛のビロードの上に淋しく落ちてゐた。ゴーと呻りながら、電車はどこへも停らずに全速力で走つてゐる。私はモーターマンのそばに腰かけて、前面のガラス越しに展開して來る街景を、おどろきながら見守つてゐた。やはり左右に青い瓦斯燈がならんでゐるこの山手通りのやうなところで、その時にも、電柱の燈火が一列に先の方につゞいてゐたが、その街には不思議にも、誰一人の姿も見えないのである。すると、行つても行つてもその先がのびて無限に思はれた燈火の線が、はるかの彼方で下へ折れてゐるのが目についた。と見る〳〵それは近づいて來る。「ヤ來た！」と思ふうちに、からだが宙に取りのこされたやうな氣がして、電車はその崖のやうな急坂の上から、除々するやうにビユーと下つて行く。兩方の窓の外の瓦斯燈が、もう一本の光の線に見えて、チラチラとうしろへ飛び去ると、こんどは軌道が二十度近くにまで傾いて、電車はクル〳〵と、グリルをやる飛行機のやうに、何かゴチャ〳〵した滅法に屋並のつまつた路を、ほとんど家の壁をこはすかと冷々するやうに、亂暴に廻るのだ。そのとたん、右と左の窓ガラスをかすめて、キラ〳〵したショーウインドーや、その前にこみ合つてゐる人影らしいものが、未來派の畫のやうにこんがらがつて、おそろしい勢でうしろへ走るが、あまり速いので、見きはめるもへちまもない。と、見ると電車は又元のやうに、人通りのない瓦斯のともつた淋しい路を、しかも、こんどは見上げるやうな斜面を一氣にのぼつてゐる。この

瞬間に、又目のまへに、電柱の燈火の線の折れ目が迫つて來て、電車はそこから軌道を直角に下へまげて、空間にとび出しさうな勢で落ちて行くのである……

私はそれを思ひ出して「こんな晩に歩いてゐると、あんな街へ來てしまふのではないか？」と考へた。「今、うしろから來た電車にとび乘つたら、黑いビロードの座席があつて、あの緑色のシグナルの見える燈火の線が折れたところまで行くと、ウオターシユートのやうな斜面があつて、その下に、あの表現派めいた奇怪な都會が存在してゐるのではないか？」ほんとうにさう思はれる。と云つて、そこは只A公園の下に通じてゐるなだらかな坂にすぎない事は、萬べんも承知してゐるのだが、さう考へると、何だか、急に坂上にあたるその緑色の灯のところから、向ふがのぞいてみたくなつて、私の足なみは思はずも早くなつた。が、すぐに私は、鐵の門がしまつた、とある煉瓦塀のまへに來かゝり、そのうちらのふかい木立の向ふに見える、カーテンをとほした青い灯影がもれる二階からつたはつて來るピアノを聞きつけて立ち上つた。それが聞きおぼえの Roll on silvery moon つていふツーステツプだつたからだ。ところで耳をすますと、何だかへんてこなメロデーなのである。「こいつはちがつたぞ」と私は思つたが、考へてみると、やはりその曲に相違ない。「どうしたんだらう？」不審に思つて私は、ものゝ五分間ばかり、青い門燈に照らされて、煉瓦塀に化物のやうな影を落してゐる棕梠の葉を見つめながら立つてゐたが、「氣のせいかな」と歩き出した。が、何だか今晩は、想像も出來ないやうな奇異な事件が、今にも自分の上に突發するやうな氣がして仕方がない。「いやまつたく」私は思つた。「こんな晩には、壁にかけたバンジョーがひとりでに鳴り出して、おどろいてベランダへ放り出したら、サウンドホールから、赤いホーキ星がプーツと飛び出したつて、格別に不思議ではあるまい」

で、かうして、私の足はともかく、坂上の緑色の灯の下までやつて來たのである。勿論、そこにウオターシユートの

軌道なんかゞあらうわけはない。私はやはりそのまゝに、南側の歩道にそつて、坂下に向つて歩きつゞけたのである。このあたりには、カフエや、ビリヤードホールがあつて、人影も又かなりたくさんに見かけられる。ところが、おりや、たしか中山手三丁目の辻だつたらうか、何にせよ、新規に建つた四階の石造の小學校から、A公園までの中間であつた。その辻から、北側の歩道にうつらうした私は、辻をへだてた向ふに——即ち、まんなかにスクエヤーをはさんだ歩道の私が立つてゐる對邊のところに、青くかゞやいた一つの美しいショーウインドーを見たのである。

ガラス屋かな？ その輕い輝きがさう見えた。だが、それにしては品がよすぎるので、眼鏡屋かな？ あるひは時計屋かなと思つた。寶石が飾つてあるやうにも見える。私はふと、夕ぐれに見た洋傘店の事を思ひ出した。辻向ふのショーウインドーにも、やはりそんな不思議な氣分がたゞよつて、そこだけを、まるで別世界のやうな觀をあらしめてゐたからだ。何にしても、ちよつと見當がつきかねたので、私は好奇心のまゝ、驅けるやうにして接近した。すると、これは又、何と奇妙な代物を見出した事だらう！

その一間四角ばかりの大理石の窓のなかには、一めんにガラス製（？）の小さな星がならんでゐるぢやないか!?——ボンボンの粒くらゐから、空氣銃の玉ほどまで、大きさはいろ〱あつて、大たいは水晶のやうに無色透明であるが、又、赤や、青や、綠や、紫や、なかには金色や銀色のものまで混つてゐる。そして、三段になつた青ガラスの棚の上に、觀兵式のやうに整列してゐるのと、針金にとほされてしだれ柳のやうにたれてゐるのとが、互に上部の明るい花電氣の光を受けて、八方にキラツキラ、ピカツピカと反映し合つてゐるきらびやかさつたら、おぼえずうつとりするほどだ。

まあ！……と私は瞳を張つたまゝ立つてゐたが、さて、夜の街を氣まぐれな思ひに耽りながら歩いてゐた矢先に、こ

んなとほうもないものにぶつゝかつた事に、我知らずに笑がうかんで來る。「それにしても、これやガラスなのだらうか?」私はショーウインドーに額をくつゝけるやうにした。やはりガラスだらう? だが、その微妙なかゞやきは何と云はう?……こんなに無數にならべてなかつたら、私は寶石と思ひこんだにちがひない。實際、そのすきとほつた金米糖は、それと、その上にたれてゐる電球と、一たいどつちがどつちを照らしてゐるのか、判斷が六つかしいほどピカピカしてゐる。「これや何か、寶石まがひの新らしいガラスで造つた裝飾品とでも云つたものだらう?」そんな解釋を下してみたが、この時、私はめづらしいその品物に注意をうばゝはれて、氣がつかなかつた廣告畫——キラ〳〵した金米糖の向ふに張り出されてゐるポスターに目をとめたのである。

ツル〳〵した三尺四方ばかりあるその紙面に、極彩色で印刷されてあるのは、寶玉の屑をぶちまいたやうな美しい星が、燦爛としてきらめいてゐる夜の空である。下方のわづかな部分に、高い山の頂きとも見える岩肌があつて、そこに身にまとつた白い頭巾とけさのやうなものによつて、エジプト地方の風俗だと察せられる人物が五六人集つて、先の方に袋様のものを取りつけた長い竿をふりまはして、頭上の星をかき集めてゐるところである。「これや奇拔な意匠だ…」と笑ひかけた私は、その畫面のすみの方を占領して、黑い夜空に黄いろく拔いて記された英文の一部を見て目をまるくした。

PRECIOUS STONES

The star in the Heaven gatherd by the most ingenious means known solely to us (*not made of glass in shallow imitation of them*) wonderfully useful in all the manners………

と。よみあげて私は、さらにまぶたをパチクリとやつた。このガラスの星は、決してガラスではなく、ほんとうの空

から得た星だとしてあるのだもの！　が、いく度見なほしたつて、文章はそのとほりだ。「冗談じやないぞ！」私は店のなかに飛びこんだ。

——なあんだ、と私は思つた。唐草模様のついたピンク色の壁紙が張られた六坪ばかりの店のなかには、花瓦斯にてらされた陳列箱の上に、オモチヤの汽車と汽船が載つてゐるじやないか？　その向ふの戸棚にも、そんなふうな風車や、ビツクリ箱のやうなものや、繪本などがゴタ〳〵とつみ重つて、その上に、私にはよめないドイツ語がならんだやはりそんなピストルや人形の廣告らしい繪ビラがたくさんに下つてゐる。それはハイカラな、しかしこの都會には格別めづらしくもない舶來の玩具店である事を證してゐる「オモチヤ屋なら問題にするほどのことでもなかつた」と、私はあはてふためいて、鐵砲玉のやうにとびこんだ自分の氣まぐれさかげんに失笑しながら、間がぬけた氣まりわるさをおぼえて、その陳列箱のまへにストツプした。

が、そのむかふで背中をこちらに向けて本をよんでゐた若い背廣服の店員が、これは又あまりに突調子な客の闖入に泡をくつて、向きなほりながら「いらつしやいまし」をやつた以上、引き反すわけにも行かぬ。

「これや何です？」

私は、ぶつきら棒に、表に出てゐるやうな金米糖がキラ〳〵してゐる陳列箱の底を指さした。このめづらしいオモチヤについて聞いてをくのも、差支へなからうと考へたのである。

「星でございます」

色の白い細面の青年が、氣さなつくり聲で答へる。

「星はわかつてゐますが、一たい何に使ふものなのです？」

問ひ反すと、彼は、その言葉を初めから承知してゞもゐたやうに「しばらくお待ち下さい」と愛想笑ひをして、クルッと身をかはすと、そのうしろのテーブルの上に、ピラミッド形につみ上げてあつたマッチのやうな小箱を取つた。その青いゼラチン紙の包み紙がパリ〳〵破られると、なかゝら、店員の指輪をはめたきやしやな手のひらに一つころげ出たのが、れいのガラスの金米糖だ。それを左に握つて、店員は右手で、陳列箱になつたスタンドの上に組立てゝある間いレールと、それに載つてゐる少さな機關車を示した。

「ごらん下さい。今取り出したこの星を、この汽車のなかに入れてお目にかけます。何事が起るでせう？」

こんな奇術師のやうな口上をのべる店員の顏と、エナメル塗の小さいレコモチブとを、まつたく子供の心理をうきくつかんでやがるなあと、私は等分に見くらべた。

「ようございますか？　それッ！」

懸聲をして彼が、指先につまんだ星を、機關車の運轉臺のなかに入れたと思つたら、ピイーッ！　と一聲威勢のいゝ汽笛がなつて、オヤといふうちに、汽車は圓形の軌道の上を走り出した………

「成程！」

私は煙にまかれてそれを見つめた。

見てゐるうちに、汽車はだん〳〵速力を增して、一分間もたつうちに、その形もハッキリ見とめられぬくらゐ速く、空氣を切つてブル〳〵とまはり出した。店員はそれをすばやくうけとめて、星を出すと、こんどはその次にあつたモーターボートの煙突のなかに、コトンと落して「おあらためをねがひます」

「うん、アルコールランプも、ゼンマイもついてないんですね？」

私は、可愛らしい眞鍮のスクルーがなめらかな音を立てまはつてゐる小さいブリキの船を手にしながら、うなるやうに云つた。

「さやうでございます。何の仕掛もありません、取り出してごらんなさいませ」

そこで船をさかさまにして星を出すと、機械の廻轉は忽ちにして停止した。

手にした金米糖は、案外に重いものである。瓦斯の下にさし出すと、中心から矢のやうな光が放射して、それが視線の位置によつて、紫や、緑や、青や、赤や、さま〴〵な色に變化する……が、まつたく、何であるかわけのわからぬ代物である。

店員はそばから口を出して

「こゝには生憎ありませんが、マンドリンやギターのなかに入れても、實に面白い現象が起ります。糸がひとりでにひゞき出して、何とも云へぬ奇妙なメロデーを構成するのです……」

「へえ、これをね、この石をね……」

私は指先の星をひねくりながら云つた。

「――それから、カクテルにお入れになつても、なか〳〵しやれたものになるし、粉末にしたのを、ペーパーに巻かれると、パチ〳〵と涼しい花火が散つて夏向きの奇拔な煙草になります。少し贅澤ですが、たくさんにつながつたのを、夜分、庭の木影などにおつり下げになると、その上品で清新なお慰みは、螢如きの比ではありません。これらはすべて固い方を申してゐるのですが、硬度の低いのは、お召しあがりになることも出來ます」

「食べられるのですか？」

私はおどろいて店員の顏を見つめ、さらにくはしく指先の星に注意をはらつた。

「さやう、フラスコに二三箇入れて、アルコールの焰で暖めながら、パイプで吸ふと、ちやうどオピアムに似た陶醉をおぼえます。しかし、阿片のやうに有害ではなく、その夢見心地が非常に輕快で且つモダーンなものです。が、淸凉劑として、このまゝお頰ばりになつても差支へございません。赤いのは甘く、靑いのは少し酸味を帶び、綠色のは苦味を呈しますが、決していやな味でなく、どなたのお口にも適します」

と、手ぶりをしながら說明する店員の言葉の切れるのを待ちかねて、私は「これや一たい何と云ふものです？」何か電氣でも起す石ぐらゐに想像してゐたが、話を聞いてみると、いよ〳〵へんなものだ。私はこんな珍妙奇てれつなものに會つたのは、生れてたつた今が初めてだ。

「星でございます」

やはり店員はさつきと同じ事を云ふ。

「星はわかつてゐますが、品物は一體何でせう？」

私も又同じことをくり反した。

「星なのです」

やつぱり同じ返事である。

「いゝえ、星といふ事はわかつてゐますがね。品質はガラスでせうか、石でせうか、何でこしらへたものだと、おたづねしてゐるのです」

ずいぶん分らず屋だと思つた私は、小學の讀本をよむやうに、一句づゝ區切るやうにして云つてみた。

「ところが、それが星だと申すのでございます」

これも又頭のにぶいお客さまだといふやうな顏をして店員が答へる。

「星だと云ふと……」私は少しムッとして突きこんだ「空にある星だとおつしやるのですか⁉」

「さやうでございます！」

短かい一句をキッパリ切つて、店員は取りすましたものである。

「え⁉」

私はびつくりしてその顏をにらんだ。

頭の上の瓦斯は音もなく、店員のきれいに分けた頭髮をてらし、店のまへをゴーッと電車がとほつた。が、格別、この男は氣ちがひでもないらしい。

「そりやほんとうに云ふのですか？」

私は笑ひながら、いく分、調子を低くして云つた。

「實際なのです。私どもにも奇妙に思はれてならないのですが、これがあの大空にある星だと云ふのです」

くり反してのべる彼の顏には、いさゝかの冗談氣もまぢつてはゐない。私は何だかへんな氣になつて來た。

「君は實際にさう信じてゐるのですか？」

「信じるより他には仕方がございません」

「どうしてゞす⁉」

私は向きなほつた。

「どうしてだつて、その大空から取つたと云ふ星が、現にこゝにあるではありませんか！」

店員は、私の手のひらにあるガラスの金米糖を指した。

「何故、こんなものが星だと云へるのです？」

私は、こんどは怒るやうに云つた。

「何故だつて、これやガラスでなし、石でなし、寶石でもなし、人造物でもない、加ふるに、いろんな不可思議な現象を起させる。これもその力でまはしてゐるのです」店員は云ひかけて、かたはらに五色のリボンをヒラ〳〵させてゐる扇風器を指さし「この臺の下に五箇入れてあるのです。それから、お召し上りになることも出來る。その他どんな事にも使はれる。その上にあんなふうにして」と、頭の上に五六枚ならんで下つてゐるショーウインドーに出てゐるやうなポスターを見上げながら「あんな風にして採集したと申すのですから、どうしても星だときめる他に、致し方がないじやありませんか？」

店員は、さらに手をのばして、テーブルの引出しから圓い罐を取り出して私のまへにをいた。「何はともあれ、一度食べてみて下さい」

なかには、ちひさな金米糖が一ぱい入つてゐる。

「いや、これが星であるないはともかくおきなさい！」

私は罐の上に手をのせた。

「私は第一に、君がどうしてそんな簡單な條件で、星で扇風器をまはしてゐるなんていふ馬鹿な事を信ずるのか、その頭腦をうたがふのです。ねえ、吾々はお互に瘋狂院に居るのではありません。近代文明の精華を集めた東洋屈指の貿易

港神戸市にゐるのです。そして、人も許し自らも許した一箇の紳士ではありませんか？」

「さうです、さうですからこそ紳士たる私は紳士たる自尊心をもつて紳士たるあなたに、何はともあれこれを一つ試みに召し上れと云ふのです。こんな不思議な味を經驗して、これを星だと云はなければ、その人はきつとどうかしてゐます」

店員は私の手を押しのけて、無理にも星を食べさせやうとする。まるで喧嘩だ。」

「君は天文學の初歩を知らない」

持ちあまして私は云つた。いやはや、あきれ反つたわからず屋もあつたものだ！

「知つてゐても知らなくても、ともかくさう云ふ事になつてゐるのです」

店員もまけてはゐない。

「どうしてそんな輕々しい事が云へますか？　君は、アルフアケンタウロウスといふ地球に最も近い星にも、三光年の距離があるといふ事を知つてをられるだらう」

癇が立つて來た私は、圓い鐺でコツ〳〵とガラスの臺の上をたゝいた。

「――三光年と云へば、こんな小學生に對してゐるやうな事を君に云つちや失敬だが、三光年と云へば、光が三年かゝつて通過する距離です。光が一秒間に地球を三まはりするぐらゐはお存じだらう、そのおそろしい快速の光をもつてしても、なほ三年間もかゝらなければ到達されない距離つて、一たい君は想像に及びますか？　その一等近くにあるものだつて、なほそれほどへだゝつてゐるといふ星か、山の上なんかで竹竿をふりまはして落されるかどうか、一たいそんな事が、この圓い地球の上に住んでゐる吾々の現實に對してあたへられ得る問題か、考へるさへバカ〳〵しい話です。

君は何か、吾々の頭の上にある空が、銀紙の星をペタ〳〵はりつけた芝居の背景とでも心得てゐるのですか？」

たゝみ重ねた私の聲は少しふるへた。

「しかし、そりやあなた御一人の考へ方にすぎないでせう？」

こんどは、店員がいやに落ちつきはらつて云ふ。

「私一人の考へ方だとは？……」

「アルフアケンタウロウスの星座へ、三光年の距離があると云ふのも、煎じつめれば、結局、人間の頭のなかに與へられた一つのもの〻考へ方にすぎないではありませんか？」

「勿論、さうです、だからどうしたといふのです？」

思ひがけぬ詭辯論者の飛入りに、私はちよつと途まどつた。

「だから、その考へ方さへ變つたら、竹竿で星をはたき落したといふ事が、ほんとうであつても、一からうに差支へないではありませんか？」

「いや〳〵そんな亂暴な議論はない！」

私はあはてゝさへ切つた。

「そんな事を云つたら、この文明といふものが根柢から意味を失つてしまふ。君は各國の天文臺で、たくさんの學者が望遠鏡をのぞいて、天界を觀測してゐる事を知つてゐるだらう、又、それらの人々によつて提供された研究が、吾々の生活にどんな貢獻をなしつゝあるかもわかつてゐやう、君はそれを否定するのですか？　如何にも、考へやう次第に世界は變る、しかし、天文學などゝいふ三千年もの昔からずつと繼續されてゐる研究が、一朝一夕に、赤が青といふやう

に變るものじやない。君は何か、星を三つ取つたゝめに、どこかの星座から星が三つ足りなくなつたとでもおつしやるのか？　じや、ローエル博士やピケリング教授なんていふ人は、一たいどんな仕事をしてゐるのだ、君はこの地球が四角い板だと申されるのか？……」

「勿論私は知つてゐます」

私の言葉の切れるのを待ちかまへて、店員は顳顬をピク〳〵ふるはせながら云つた。

「――方々の天文臺で有名な學者が一心に星を研究してゐる事を知つてゐます。それを學校でならひました、本でよみました、新聞で承知してゐます。しかし、望遠鏡にうつゝた星と、自分の現に目のまへにあつて、自由に觸れる事が出來る星と、この二つのいづれを取るかといふと、そりやまづ手近な方から信ずるのが、人間として普通のやり方じやないかと思ふのです」

「又君はそんな事を云ふ！」私はどなるやうな聲を出した。「まだわかりませんか？　どうしてあなたは、こんなガラスの金米糖を星だと信ずるのかと云ふのです？」

「ところが、これがガラスの金米糖じやないのです」

「いや、ガラスと云つたのは私が間ちがつてゐる。ガラスか何かは知らぬが、ともかく、ゼンマイも蒸氣の罐もついてゐない汽車をうごかしたりするのだから、奇妙なものにはちがひない。しかしだ、その奇妙な或る物をつかまへて……よろしいか」私は人差指を店員の鼻のまへにさし出してふつた。「よろしいか、それが只星の格好をしてゐるからとか、キラ〳〵するとか、煽風器をまはしたりするからとかいふぐらゐの事でもつて、何故星だと云ふのです？　私が論じてゐるのは只、その名稱の問題なんだ！　如何にもこれはめづらしい代物だ、だから、私はその名前を聞きたいのです。

どうか、これ以上苦しめないで云つて下さい。子供ならともかく、君にもわかつてゐるこの一個の男子をとらへて、かりそめにもそんな冗談でとぼされたものか、胸に手をあてゝ考へてみなさい…」

私はもう眞赤になつて、からだ中は汗づくになつた。

「でも事實は如何ともする事が出來ないではありませんか！」

これ又青すぢを立てた店員が叫んだ。

「ど、ど、どんな事實があるのです！」

「この星はエジプトで採集されたのです」

「何エジプトで？　そのエジプトでどうして取つたのです⁉」

「お聞かせしませう。まあおかけ下さい」

「よろしい聞かう」

私は初めて椅子に腰を下して、ポケツトからハンケチを出した。

興奮した店員は、まるで急行列車のやうな早口で、プリ〳〵しながら語り出した。

「つい三ケ月ほど前の話です。カイロの或る英國の商館につとめてゐるスツキントンといふ、この人は歐洲大戰でかなり名を賣つた飛行大尉ださうです、この人が或る夜トルコ人のバーで、隣席のアラビヤ人の間に交されてゐた不思議な會話に耳をはさんだ。それは、ナイル河を五六十マイルばかりさかのぼつたところにある土人の部落、何とかいふのです、名はちよつと忘れましたが、その村で最近世にも奇怪な事が行はれてゐる、と申すのは、その村の坊主で賢者をかねて、豫言もやれば魔法も使ふカツサンといふのが、大空の星を食べてゐる。――それも最初は、カツサンがついぞ食事

をしてゐるのを見かけぬ村民たちが、不審を起して、それとなく注意を拂つてゐたところ、或る夜更に、カッサンが自分の小舍のまへにヒョロヽヽと出て、棒のやうなものを眞向にふりかざして、エイッ！　と聲をかけると、頭上にかゞやいてゐた星が一つ、ツーと草むらに落ちた。彼が走つて行つてそれを口中に入れた。こんな事を目擊した者あつて、騷ぎが持ち上り、人々がその小舍に押しかけると、カッサンは平氣なもので、これはイルエルが——土地の神樣ださうです——それが特にこの村の人民に許し給ふた長壽の方法であると申して、一同を村のうしろにそびえてゐる岩山の上に導いて、長い竿で星をたゝき落してみせた。これが村中にひろまり、もう女でも子供でもが星を食べてゐるといふのださうです。奇異な思ひに打たれてスッキントン大尉が、さつそくその事の眞疑を問ひ正すと、隣席の二人のアラビヤ人は、聲をそろへてこれには寸分のうそもない、自分らも食べたことがあるが、少さい素燒の壺に入れて、火にあぶりながらパイプで吸ふので、その味のいゝ事は、こんなものゝ及ぶところでないと、大尉の口先から紫の煙をあげてゐた葉卷を指さすのださうです。その云ひ草の馬鹿らしさに大尉がふき出すと、どうして、二人の男は目を光らせて、決していつはりでない、アラアの神の名に誓つて云ふ事だ。旦那がそれをごらんになるつもりなら、明日にでも案內してみせやうと云ふ。そこで、ともかく、好奇心に引かれた大尉がその部落を訪れてみたところが、アラビヤ人の言葉にうそはなかつた。まつたく神話のやうな事柄が、正直正銘に、これは幻術にかゝつたのじやないかと疑ふスッキントン氏の眼前に展開された。大尉はカッサンに會つて、親しくどうしてそんな荒誕な事が行はれ得るかについて、さまヽヽな話を傾聽した上、空から取つた透明な魔法の石數十箇に、合はして、それを吸ふための土器や、村の人々が山上から星を取つてゐる現場の寫眞をたづさへて歸つて來たのです。……」

のべつまくなしに口上のやうにしやべつて來た店員は息をついで、聲を落した。

「これが初まりで、各國人が續々とその部落へ入りこむやうになつたのです。カツサンの話によると、そこが世界中で一ばん空に近いところだと云ひます……」

「わかりました！」

私はとう〳〵辛抱がし切れなくなつて立ち上つた。「君は夢でもごらんになつてゐるのですか？」

「何、何ですつて？」

店員は目をしばたゝかせた。

「夢でも見てゐるんじやないですかと云ふのです！

再び私は尊大な口調で云つた。

「私は醒めてゐます。めくらじやあるまいしよくごらんになつたらわかるでせう!?」

店員は唇をかんだ。

「じや、君は今一たい何を云つてゐるのです？」

「私は今、あなたがガラス製だとおつしやつてゐるこのキラ〳〵した金米糖か、實際の空に光つてゐる星であると云ふ事を話してゐるのです！」

「さうですか、だが、私にはそんな造り話を聞いてる閑はないのです」

「これが造り話だとおつしやるのですか!?」

「いや造り話でないかも知れません。しかし私は、この星形のガラスが一たい何であるか、只それだけ聞きたいのです」

「それを今話してゐるじやありませんか」

店員は泣聲を出した。

「そんな出たらめが、廿世紀の人間にほんとうにされるかされないか常識で判斷しなさい。ねえ、强情をはらずに、いゝかげんに正直なところを云つたらどうだい？」私はもう一度諄々と說き伏せやうとした。「――くり反してこんな事をグズ〳〵云ふのはお氣毒だが、私は君を苦しめてゐるのではないのです。こゝがオモチヤ屋であることは充分に承知してゐます。だから、オモチヤ屋でこんな事をたづねるのは大人氣ないとも思つてゐる。しかし、私は一度不審を起したら、それを聞き正さないではすまされぬ性分なのです。ですから、君の方でも、私を子供あつかひにせずに、ほんとうのところを話してくれても、よさゝうなものじやありませんか？　これはガラスか、化石か、鑛石か、それとも何かの藥品で製造したものか、いづれだかは知らぬが、ともかくそんな種類にぞくしたものであるだらうぐらゐの事は、私にだつてわかつてゐます。だが、私はそれだけでは氣がすまないのです。私の判斷では、これは何か電氣を起す鑛石だと思ふがどうでせう？　それとも熱帶地方に產する木實か何かですかね？　云つて見給へ、さあ、いやにくどい客だと思ふかも知れぬが、それを聞いたら、私はすぐに歸る。ねえ、こんなつまらぬことでお互に貴重な時間を費したくはないではないか？」

「でも私は人にうそがつけない性分です」

「さうですか」

私は冷淡に云つた。何といふしぶとい野郎だ、こんなに手數のかゝる動物を取扱つたのは、變妙な金米糖と共に、生れてから今夜が初めてだ。

「君はさつき、スツキントン大尉がナイル河をのぼつたのは、三月ほどまへだと云ひましたね？」
「さうです」
「ところで、この店は一たい何時から星を賣り出してゐるのです？」
「一昨日からです。ハンブルグに本店があるドイツの東洋更紗商人の取引きになつてゐるのです……」
「エジプトの內地で取れた星がハンブルグへ行つて、そこから日本へ來る、それがたつた三ケ月間の仕事ですか？」
「いや、それは私が間ちがつたかも知れません。半年、あるひはそれ以上以前の事です」店員は云ひわけした。
「成程、君は自由に歷史を變更する不可思議な能力をもつてゐられる。さすが星を賣る店の人だけある。ついでに一つそれを應用して、この空から取つたといふ星を、ガラス製の星に變へてみてくれませんかね」張り合ひがなくなつた私は、ポケツトから早業練習にまがつた金口を出して、こつ〳〵と、親指の爪の上へ打ちつけながら「でなけりや、吾々の如き健全なる頭腦の所有者は、心配で夜の散步をすることも出來ない。實際、風でも吹いて頭の上にはらひ落されて來て見給へ、こんな少さなものだつて、多少の損害はうける——」
「…………………」
底員は口をとんがらかしてゐる切りである。
「ついでにたづねるが、それほど破天荒な事が發見されたにかゝはらず、世界の人が一かうに評判してゐないのはどういふわけですかね？　この神戶にしたつて、空の星を賣り出した店が出來たとなつたら、一騷動は起つてもかまはぬ筈じやないか？　君はそのへんを矛盾だと思はないのですか？」
「そ、それはこんなわけなのです。最初、スツキントンの話を聞いて、カツサンの村へつめかけた連中は、誰でもそれ

があまりに超絶的な事柄なので、ひとしく夢を見てゐるのぢやないかと或る時期まで疑つてゐたせいと、一つには、そのおどろくべき物質の專賣權を我物にしやうと互に暗々裡の行動をとつたために、一般に知れるのが遲れたのですそれから、こちらにしても、まだ店を開いて三日にはならないし、試驗的にやつてみてゐるまでゞ廣告をしてゐないからです。それに、あまりに目安い個所にあるせいか、ショーウインドーを見たゞけで、寶石とでも考へて、素通りする人が多いのです。でも、この日曜の大阪朝日には、附錄全部にわたつて、今申したやうなくはしい話が掲載されますし、店の方へもそのうちに寫眞入のパンフレットが到着する筈になつてゐます。――あちらのエジプトの村でも、あまりに星を取りすぎたので、もう夜になつても、ほんにチラホラと、遠いところにあるのが淋しく光つてゐるにすぎぬさうですが、他にも續々と候補地が見つかつてゐる樣子でございます……」

「いゝかげんな事を云ひ給ふな」

私は吐き出すやうに云つた。

「いゝかげんな事ではありません。今月のポピュラーサイエンスにも紹介が出て、The first star catcher thro the world　としてカッサンの寫眞が載つてゐます。それをごらんになつたらわかるでせう」

店員は金切聲をあげた。

氣がつくと、どうだ、店のまへは黒山を築いて、押し反しひし合ふ盛況である。これや大變な事になつた！　と私は思つた。いやそれより、こんな男に相手になつてゐちや、こちらの方がほんものゝ氣ちがひになつちまふ、切りあげなきや……そこで、煙草に火をうつしながら云つた

「この箱はいくらにどするものだい？」
「五十錢です」
「何、五十錢？」
「さうです」
聞きまがひでない。私は表の方を見ながらふき出した。
「今のところ相場がきまりかねるのです。しばらく立つと、とてもこのお値段でお願ひすることが出來なくなるでせう」
「さうだらう、星が一箇五十錢だなんて云ふ法があるものか、ともかく二箱もらはう……」
私は五十錢さつを二枚出した。そして、店員がさし出した二つの箱をつかんでポケットに入れながら
「ともかく君の話はよくわからない。歸つてからゆつくり研究してみやう」
云ひすてゝぷいと店を出やうとしたうしろに聞えたのは
「さうだ、この店は煙になつて消えやしないから、いつだつてやつて來い！」
私は踵を反してツカ〳〵と店へ入つた。
表の黒山はどつとゆれた。
『君は今何と云つたのだ!?」
私は煙草をすてゝ、カフスをまくしあげながら店員の方へつめよつた
「さあ、何と云つたのだ？　あれが客に對する言葉だと君は思ふのか!?」

「あなたは職責を妨害するのですか！」
店先に目白押しをしてゐる群集を見反した店員は、血相を變へて叫んだ。
「ほざくな！　俺は貴樣の道化役をつとめてゐるのじやないぞ！」
私はどなりつけた。
「私は只眞理を主張してゐるのです」
「やかましいわい山師！」
「オヤ！？」
店員は私をにらんだ。
「あなたは山師だと云ひましたね？」
「さうだ、山師と云つた、それがどうしたのだ？」
「どこが山師です、どこが山師です！」
店員はわめいた
「ガラスの破片とも、木の實とも、魚の睪丸とも、えたいの知れぬものを引つぱり出して、星だなんて名をつけて人をだまさうなんて、これを山師と云はずに何を山師と云ふのだ！　君は、夜店で鳥の毛を取りつけた紙の箱をX光線だと云つて賣つてゐるのを知つてるだらう、君の仕事とそれとどれだけのちがひがあるのだ!?」
「大變なちがひがある！」
「どんなちがひだ！」

「鳥の羽毛と大空の星とのちがひがある！」
「馬鹿野郎！　そんな事を千萬べんくり返したつて、この地球の上に住んでゐる人間は、君のやうな白痴でないかぎり誰もほんとうにしやしないから安心しろ！　いゝかげんに引つこまなきや、ひどい目に合ふぞ！」
「ほえるな、ヒヨツトコ奴、貴様こそ用心しなきや、アバラが五六枚折れるぞ！」
「何を！」
私は店員を咽喉笛をつかまうとした。店員はすばやく身をかはした。はづみを食つて、スタンドにぶつゝかつたので、汽車とモーターボートがころげ落ちた、私はその上をとびこえた、店員はむしやぶりついて來た、とつ組んでころがつた、ガチヤンドタンバタン……店員は表へ逃げやうとした、私は椅子を投げつけた、頭に當つて店員は毒團子を食べた鼠のやうにフラ〳〵、パタリと、散亂したガラスと星の上にぶつ倒れた。私の腕は左右からグツとつかまへられた。「こいつだ、これが亂暴したのです」その屈強な二人の男は、續いて入つて來た警官に私を渡さうとした。
「いや俺には罪はない！」
拘引されやうとした私は叫んだ、
「俺は只まとまりかゝつたお伽噺の構想を無茶苦茶にしてしまつたまでの事じやないか！」

小母のいたづら

長與善郎

一

月のいゝ八月のある晩であつた。

毎年今頃になれば、此海岸の別墅に來る例になつてゐる小母が、もう多分來てゐる頃と、私は妻と濱づだひに、松の間の彼女の寓居を訪ねた。私には、いつのまにか林のやうに大きくなり茂つた松の生長が驚かれたほどそれは珍らしい訪問であつた。

まだ來てゐないのかと思はれた小母は、庭から廻つて見ると、明りも點けず、椽側に蚊遣りを焚いて、一人涼んでゐた。

「これは〳〵、珍客。珍客。」

と思いがけぬ意外な訪問に驚いて、一應のくだけた挨拶がすむと、鷺のやうに姿のいゝ小母は、老女らしい輕い夏帶の腰の結びをポンとたゝいて立ちながら

「えゝ月ですな。」

と、團扇を取りに行つた。

私は此六十に近い後家のいかにも落ちついた、雅な感じを見て、老境に入つた私の亡き母に、その風の甚だ似て來た事を思はずにはおれなかつた。

「ねえ、小母さん。――急に變な事を云ふやうですが、昔、僕らが麻布にゐた時分の事です。小母さんがしばらく家に來ておられた事がありましたね。――」

もう何年か小母のそばに侍してゐる美しい小間づかいが入れて來た茶を飲むと、私は早速から切り出した。

「わたしが？あんたの家に。おう、あの時のことですか。」と小母は細い煙管で高さを示し乍ら云つた。「さう〳〵あんたがまだこれんばかりの頃にな。」

「えゝ。あれやどう云ふわけだつたんですかね。いや、どう云ふわけつて事は分つちやゐるんですが、――」

私がこゝ迄云いかけると小母はもう笑つた。

「大方そんなこつちやらうと思いました。」と「た」に力を入れて、「信さんが、柄にもない、こんな婆さんを訪ねて來るなんて。――又小說の種子かな。」

「いや、冗談ぢやないんですよ。――だけど、小母さん。僕はえらい事を聞いたんですがね。僕に――知らない同胞がゐるんだつて事――いや、ゐるんですつてね。」

「知らぬ同胞？あんたの。」

だしぬけな異な質問に、冗談ずきな小母も靜かに此方をむいた。

「つまり、僕の親父に、何か妾のやうな女がゐたつて事を、聞いたんですが。小母さん、知つてらつしやるでせうね。」

「えゝ、知つてます。」

　小母は尻上りな調子で云ひ、うなづいた。

「ぢや、ほんとなんですね。」

「あゝ、ほんと。」小母は何か自分自らの回想に耽るやうに答へた。「信さん、その事、今頃知つたの？まア、頓間な。小説家のくせに。」

　口のわるい小母はそろ〳〵こんな風に人をからかひ始めた。

「本當に頓間でしたよ。尤も僕が小説家だから皆はかくしてゐたのかと思ひますがね。」私も止むを得ず微笑し乍ら云つた。「――で、その人に子供があつた事も本當ですね。」

「それも本當。」

「男ですか、女ですか。」

「これやまるで警察にしらべられてゐるやうでつな。」

と小母は妻の方をむいて、まだ綺麗にそろつてゐる白い歯を見せたが、又眼を丸くして、

「女よ。女どころか、それや美しいな、阿母さんに似て、人形のやうな娘さんでしたわ。」

「何だか少し怪しくなつて來たやうですね。今夜はふざけないで下さい。小母さん、本當に知つてるんですか。その娘の人を。」

「娘つて、あんたなどから見たら婆さんや。もしまだ生きてゐると――。」

なぜか一寸默つてゐた小母はまじめにかう云つて、彼女の夫が長崎縣の知事をしてゐた間にちよい〳〵會つた事があ

るから、その母親は勿論その前からよく知つてゐるが、その娘の人も知つてゐるし、その後も便りを貰つた事があつた。

「しかし、今はどうしてゐますかな。あのおかよは。」

と靜かに扇ぎながら空の方を見上げた。

おかよと言ふのはその母の名だと云ふ。

「あの阿父樣にも、そんな事がおありになつたんですかね。」

寫眞で見た顏や風格の感じから推して、又體が虛弱だつた故もあるが、大體淡白な處から比較的身持ちもよく、殊に老年に入つてからは、誰からも君子のやうに思ひ做はれてゐた私の父に對して、一種美化した敬愛の情を抱いてゐる私の妻は、つい傍からかう口を挿まずにはおれなかつた。

「此人の阿父さんはな。」妻に向つて小母は云つた。「それや心持ちの水のやうに綺麗な、優しい品のえゝ人でした。けれど、あの事ぢや、壽命を縮めなすつた。阿母さんも苦勞されたが。皆の女と同じにな。」

「それと云ふのも……」と一服した小母は又私の方に向き直つてつゞけた「あんたのお父さんちふ人は到つて呑氣な人でな。云はんでもえゝ事を、うつかり喋舌つて了ひなすつたのが原なのよ。あゝ、ぢやから妾も餘計な口はきかぬ事。お父さんの二の舞は御免。御免。」

　小母は又から笑い乍らお茶をにごしたが、今更口を噤まうとしても既に遲いと知つたのか、どんな事を親父は喋舌つたのかと云ふ私の問に

「もうあんたの阿母さんもあの世の人やから氣にもなさるまい」と話し出した處によると、父は或る夜の寢物語に遂い

昔話として、「あの時俺は本當に、お前を離縁して了はうかと迷つてゐたのだ。」と口を辷らした。父はもうかれこれ卅年近くも前の事であるからと安心して喋舌つたのであらうが、丁度又それが長い看病に疲れぬいてゐた母の生理的にも具合のわるい時であつた。その事を聞くや否や、母は見る〳〵顏色が變つて、氣が遠くなつたやうに見へたと云ふ。

「ふーむ。一體いつ時分の事だつたんですかね。その女を圍つてゐたと云ふのは。」

「隨分古い話よ。何せ、阿父さんが長崎の最初の病院長をしておられた頃の事やから幸さん（私の三番目の兄の事）抔もまだ生れぬ前の話。阿母さんがしばらく阿父さんと離れて、鄕里に殘つてゐなされた間の事よ。――

「そのおかよと云ふ藝妓にお父さんは一時深くはまつてしまはれたんや。そして妾にされた。その妾宅での豪奢な事と云ふたらな、勝田の伯父さん抔もそれを見て來て、お律さん（私の母の事）は本當に氣の毒ぢやつて、よう憤慨してぢやつたものよ。それは〳〵八釜しいお姑達にかこまれて、三人の子を負ふて、つましい暮らしをしてゐなすつたんぢやからな。」

　小母から是等の話を今聞き知つて見て、私には子供の時、父母の間に、子供には譯のわからない、物凄いいざこざがあつた事の眞意が明かになつた。一時、――父はもう六十を超え、母は五十に入つてゐたが、――母の烈しいヒステリーは小さい私達の胸をおののかせた。私は二つ齡上の姉と二人で、父の寢室での母の聲とも思はれぬ狂氣じみた嗚咽のふるへ聲と、時々ぼつ〳〵と聞へる父のいがらつぽい咳拂ひ、苦し氣な咳のからんだ重い聲とに耳を澄まして、そこでの無氣味なシーンをいろ〳〵に恐ろしく想像しつゝ、まんじりともせず、戰慄して、冬の幾夜かを明かした事を思い出す。

「かあ樣。どうしたの？」

私はよく廊下迄出て行き、痙攣的にガタ〳〵と齒を顫はせ、肋骨の讀める胸を高く波打たせながら、寒い廊下に佇み、壁に突つ伏して、泣くともつかず咽んでゐる背の高い母の亂れ姿にとりついて、せがむやうにから訊いた。

「何か容易ならぬ事で父母は爭つてゐる。多分父がわるいのだらう。」

母贔負の小さい私達はから思ひながらも、病衰の父に同情してゐた。

その當時、母の義理の妹で仲のよかつた此小母が、心配してゐる私の兄姉達に賴まれて、執り成し役として家に泊りつゞけてゐたのだつた。

其後、小母のすゝめで、肋膜の病後であつた父は、母と須磨に保養に行つた。小母は丁度姑の急病で家へ歸つた。しかし須磨に行くが否や、父はそこでの一層はげしい「困つた事」の繼續にほと〳〵閉口しぬいてゐる由を總領の兄への手紙に訴へて、末つ子の私をつれて誰かをすぐ迎えに寄來してくれるやうにと書き送つた。私は兩親の間の謂はゞ緩衝器（バッファー）であつて、私のわきでは母は和らぐからであつた。

「今夜信ちやん、兄さんと一緒に須磨に行くんだよ。」

二番目の兄から或日突然から笑顔で云はれた時、何も分らない私は、休暇中でもないのに、どうしたと云ふうまい話かと、一寸それを信じられなかつた程喜んで、踊り上つたものであつた。

私は須磨に二三日ゐて、恰度小母の姑である小父の養母が亡くなつたのを母を喘ます口實にして、父母達と歸つて來た。

此「困つた事」のほとぼりは弱い程度に於て、殆んど父の最期迄つづいたかと思はれるが、而もその最もはげしい時ですら、母は二人の看護婦も及ばぬ程父の看護には寢食を忘れた周到な勞苦を惜しまなかつたのである。

「石にかぶりついても阿父さんの今度の病氣はなほさなければね。」

母はさう云つてゐた。さうして母のその熱誠な言葉は決して虚僞ではなかつたのである。

月がいゝからと云つて、小母は、歸りの私達を由井ケ濱まで、團扇を持つてゆつくり送つて來た。私達はもう他の話をしてゐた。そして私には瀧の川の彼女の家に栗が澤山實るので、秋、その栗飯を御馳走になりに行く約束をした。

「では、又秋に。」

キラ／＼と輝く波打際で私が帽子をとつてから云ふと

「三年後の秋にな。妾が石になつた頃に。」

と、小母は月光の下で笑つてゐた。

二

「いかにも俺の親父らしいな。そんな事をベラ／＼喋舌る處は。」

私がかう云ふと、

「だけど、阿母樣の氣持ちも妾には本當によく分りますわ。」妻は先刻から云い度かつた事のやうに云ひだした。「そんなにひどい苦勞を辛棒してゐらしつて、逃げ歸り度いと泣いて思つた事も幾度かあつたつて、妾におうちあけになつた事がありましたけれど、唯、夫に愛されてゐると思つて我慢してゐらしつたんでしよ。それが、さうぢやなかつたつて事が後で分れば、それやたまりませんわ。想つても。」

「まんざら「さうぢやなかつた」とは阿母さんだつて思つてやしなかつたらうが。さう云ふ狂つた時の氣持ちで凡てが誇張されて來ると、實際自分が可哀想になるんだね。いろんなその間のつらかつた事や煩悶を思ひ出して。自分は實に貞淑で、親父を愛しきつてゐたんだからな。しかもあの性質ぢや……」

實際私にも母が唯所謂悋氣の爲めにのみ、そんな古い事にそれほどひどく心を亂したとは考へられなかつた。しかし父の晩年の子で、その穩やかな生活ぶりだけを見てゐた私は、今卅六になつて始めてあの父にもそんな事があつた事を知り、自分に未知の同胞が此世にもう一人あると云ふ事を知つたのであるが、父に對するいゝ感じは素より些かも影響をうけやう筈はない。却つて面白く思はれる位である。私の如き、比較的平穩無事な境涯と、比較的幸福な家庭に育つた者にとつて、此事は一種の神秘感となるほど、意外な驚異たらざるを得なかつたけれども。

そのくせ、私が此夜小母を不意に訪ねたのは、妻から其事を二度目に話されたからであつた。同じ事でも或る時に聞けば感じがなく、或る時に聞けば打たれると云ふのは有り勝ちな事でもあるが、人の云ふ事を聞いてゐない癖のある私は、ある晚から一寸聞いて來たその話を最初妻が私に語つた時、只ぼんやり「さうか」と云つた丈だつた。

「さうでせうねえ。」再度の話で私がひどく驚いた時妻はかう云つた。「だから妾、貴方つてずゐ分感じの鈍い人だつて思つたワ。あの時。」

「しかしかう云ふ事は……」妻は又一寸間をおいて云つた。「隨分ザラにある事なんでせうね。誰でも本當にしらべて見たら。」

「さうだよ。お前にだつて、ひよつとすると、知らない同胞がゐないとは限らない。」

「まさか。」

さう云ひ乍ら妻は闇の中でぶる〳〵と體を顫はせてゐた。

尤もあの小母は、嘘を吐くのではないが、冗談のいたづらに時々出鱈目を云ふくせがある。だから彼女の話は全然は當てにならぬ。その娘の人に小母は逢つたと云ふが、どうかしら。誰でもさう云ふ話を聞けば、男だつたら、まあさし當り女を想像する。想像する以上は慾が加はつて美しく想像するのが人情の普通である。小母はそこに悪戯氣を起して、「人形のやうな」抔と出任せを云つたのではないか。本物の正體は「會つて二度びつくり」といふ類の代物ではなからうか。――私はかう疑つた。

が、それはとに角、私には父を同じくする一人の同胞がまだ一人どこかにゐる、或はゐたと云ふ事は事實である。私はその事をふつと考へる毎に實に變な氣がした。私は嬉しいやうな、なつかしいやうな、謂はゞミスチックな好奇心と興味とをそゝられずにはゐられなかつた。そして小母の言を疑りつゝも、一度それを耳にした私には、一つの想像の印象がヘンに腦裡に固形して了ふのだつた。恐らくその人は、今やカナリの高齢であるその母人と一緒にN――と云ふ私の家には只ならぬ感じと、興味とを抱いてゐる事であらう。自分の同胞である私達の身に吉凶の何事かあらうと、便り一つ寄せる事もようせずに、會へば顔を見せる事も羞じはゞかつて、しかし蔭からひそかにのぞき見る事もないであらうか？私達家族の者の事が新聞にでも出ておれば、一種の親しい、しかしどこか淋しい感じで、かすかな動悸すら胸に覺へながら注意して見はしないであらうか？N――と云ふ名を人が云ふのを聞けば、ほのかに顔を赭らめはしないか？それどころか、事によつたら、私の書くものさへ、讀むやうな事はないであらうか？

こんな風に想像を走らせると、人間の浪漫的な癖で、その親子二人の人が小母の言ふ通り、いかにも美しい人々につい想像されて來るのだつた。「まあ大抵會はずに想像してゐる方が花にきまつてゐるね。」なぞと口では云いながらも、

「長崎に今もゐるとすると　一昨年の秋俺はあつちへ行つたのだがな。」
私はこんな事も思つた。そして何となく不安はあり乍ら、しきりに會つて見度いやうな氣がした。そんな邂逅は此世では有り能はぬ事のやうに信じつゝも。私は心から彼等の幸福を祈り度くなるのだつた。
しかし私はだん／＼その事を考えなくなつた。そして忘れられたやうに月日は經つて行つた。

三

栗の實る秋はとうにすぎて、冬と春を超え、梅雨と云ふにしては早すぎるが、早すぎると思つた人達も「矢つ張り之が梅雨だつたかな」と思はされる不順の初夏であつた。
朝寢の私が例の如くおそく起きると、次の二疊で髮を梳いてゐる妻が
「小母さんのお手紙、御覽なつて。」
と云ふ。
「小母さん？小母さんて……」
と云いながら私は新聞をふるつた。
「瀧の川の小母さんよ。そこに御座いません？」
とかしたまゝの髮で妻が此方をふり返へつた時、手紙が新聞の下から現はれた。
「――勿論あてにはしてなかつたが、秋、栗が澤山實つたので、ふと貴方々と約束した事を想ひ出して了つた、……」

と云ふ意味の書き出しで、宿はもうおそいが、丁度今百合が滿開だから、天氣のいゝ日に子供をつれて遊びに來てはどうか。泰子さん（私の妻）は近頃お茶にこつてゐるとか云ふ事を聞いたから、會席のおもてなし位はする。それに是非信さんに見せ度いものがあるから……。」

かう云ふ事が書いてあり、終りに、小説家なんて者は時々呑氣に遊ぶ事が出來なくちやいけない。たまには利口でない人間も訪ねてくれるもんだと書いてあつた。小母の字は意識的でない、とぼけた、錆のある字である。

私はほゝ笑まされて了つた。「又、あのいたづら婆さんが何を見せるつてんだ。」

「事によつたら、いつぞやのお話しの、その人ぢやないでせうか。」

妻はもうすつかり興味をそゝられた調子で云つた。

「そんな馬鹿な事があるもんか。」と私は一笑に附した。

「だつて、是非貴方に見せ度いものつて、……」

「出鱈目だよ。」

「まさか。でも、とに角上らうぢやありませんか。一寸面白いわ。貴方今、どうせ頭がおわるいんでしよ。」

私は笑つたが、結局、その日直ちに私達は子供をつれて小母を訪ねる事にした。

「なんぼなんでも今日すぐぢや、あんまりだしぬけぢやないでせうか。」と妻は着換へながら云つて、眩ぶし相に、はれぼつたい空を縁側に出て見上げた。

瀧の川の小母の門を私達がくゞつたのはそれでも午後の二時過ぎであつた。人氣の少ない廣い邸は森としてゐた。

「まあ、信さんの氣まぐれた事。」

眩のあたりまである黒い絹の手袋をはめて、庭で草むしりをしてゐた小母は片手を陽に翳して、近づき乍らかう云つた。

「阿父さんにそつくりやな。來ると思い立つたらすぐ出かけて來なさる處は。今丁度百合が見頃でな。もう二三日おくれたら駄目やつた。」

「まあ、ほんとに何ですか、此處まで匂つて來ますわ。」

妻がかう云つたのは噓ではなかつた。そこからは森の茂みの間にちらほらとしか見へないが、庭の鼻先きに高くそば立つてゐる崖には、嘗て小父が千株餘りの百合を植えたのが、今では何千株と云ふ程にふへて、それが一時に咲き亂れてゐるのであつた。

「あの森へ行て御覽。」小母は小供達に云つた。「妾やおそこへ行くと匂ひで頭痛がする。」

私達は子供と一緒にその美事な百合の山を一巡して、下駄をぬいだ。

「何です。僕に見せるものつて。」

私がほゝ笑みながら云ふと、小母は一笑して

「後で。後で。」と云つた。

差し向つて別に話もないので、私は久しぶりに、昔或る成り金が京都のどことかに模して作つたと云ふ此廣大な家を子供と一緒に見て巡つた。成り金の時代に「小桃廬」と名づけられた桃山風の茶室の前には古寺に見る如き池があり、そこには紅い筋のある大輪の花が咲く蓮がもう葉を水面一杯にひろげてゐた。

私は又二階へ上つて見た。そこは昔小父が臨終した室である。私はそこで、死に行く男が生き殘る健康者に對する嫉妬

を交へた憎悪を現はすのを見た事がある。その時の小父の冷たい顔を私は今眼に浮べながら窓に腰をかけて、外を見た。

と、眞下に梅の古木が青葉を茂らせてゐる處に、一人の見知らぬ男が立つて、ふと上を見上げ、私を見た。私達の眼はカチ合つたが、その男はすぐ視線をわきへ向けて歩き出した。

「待つて。」

とその時云ふ聲がして、一人の銀杏返へしの女が下から庭下駄を突つかけて飛び出した。飛び出し乍ら女は梅の實を見ると、

「姿これ一つ」

と云つて、肉附きのいゝ白い腕を伸ばし、それを一つもいだ。そして一嚙りして、酸つぱ相に顏をゆがめながら

「おいしい！」と言つた。

馬鹿。毒だぞ。」

先きへ行つた男が云つた。

「大丈夫よ。」

女はから云ひ乍ら猶ほ一嚙りすると、ポイとそれを館第の中へ放り捨てて、此方を見上げたが、見つかつては氣の毒と私は姿をかくしてゐた。

「一間雛だらう。」と私は訝つた。「まさか、あれがさうだなんて、そんな筈はないが。」

私は見知らぬ男女の事をから異に思ひながら、階下へおりた。

「お客さんがありますね。どなたです？」

「あれですか？」

「あれでつか」と聞こえるやうに小母は云つたが、横を向いた時薄皺のよつた顔が少し赭らんで見へた、

「別嬪さんでしよ？ あれはな、あんたのきやうだいよ。」

小母はさう云つて又笑ふやうに口をあいた。

「え？」妻は驚いて疑ふやうに私の顔を見た。

「へ。そんなこつたらうと思いましたよ。」私はからかふやうに云つた。

「あれを僕に見せやうつて云ふんですね。」

小母は庭の方をむいて只笑つてゐた。

「あれが僕のきやうだいだとすると、妹ですね。あんな妹なら一寸持つてもいゝな。」

「まあ、一體どんな方。妾、見たいわ。」

妻はもう起ちかけて云つた。

「俺の姉さんだよ。東京の人でな、俺より若いんだ。」

「けどな、あれはあんたにもまんざら關係のない人ぢやないのよ。それは本當。」笑つた小母は眞面目になつた。「あれはな、あんたのいとこ。」

「どつちがです。男の方ですか。」

「いゝえ、女の方よ。――あれはな、妾の子やないけれど、此處の小父さんの子や。」

そして小母はぽつと赭くなつた。

「なるほど、さうかな。」と私は思つた。叔父に妾があつたと云ふ事を私は忘れてゐたが、聞いた事のあるのを思ひ出した。
「信さん、昔あの事があつた時、なぜ妾があんたの家に行つてゐたか、あんたは知らんやらう。」と小母は云つた。「あんたの阿母さんとは實の姉妹でもない妾があの時頼まれたのは、妾にもさう云ふ同じ苦がい經驗があつたからよ。しかし妾は、しんぼうした。泣きましたけれどな。そして育てゝやりました。妾には子がないでな。とう〲嫁入りまでさせて……。そやから、御覧。今でもあゝして妾ん處へちよく〲やつて來ます。」
「なるほど。あの男の人は御亭主ですね。」
「あれはこゝの長屋にゐた人でな、矢つ張り妾が仲人――ちふ譯でもないが、世話をしてやりました。――しかし妾があんたに今日見せやうちふたのは、あの人達ぢやない。まあ、こつちへ來て御覧。」
かう云つて小母は佛壇のある奧の四疊半に私達を導いた。
小母が支那簞笥の中から出して見せたものは私には親しみのある手蹟の古い幾通かの手紙であつた。皆小父にあてた父の手紙である。
「これ〲。信さん、これを一寸讀んで御覽。小説の材料ぢやありませんよ。あんたのお手本よ。」
冗談のやうに眞面目にかう云つて、小母のひらいた須磨からの一通には例の事件當時の父のいろ〲な心持ちが訴へてあつた。
「――か丶る事の話より不圖か丶る面倒を惹起したる次第なれ共、目下親子共に上京し居るとか聞きては、流石に娘の方になり一目見おさめに對面し度き心も起り――！おかよには逢い度からず、（略）元より乳飲兒の折に別れたるのみなれ

ば、……」

此數行には私は一寸呆然たらざるを得なかつた。此苦しい事件の間にあつてまだこんな事を書いてゐる處は流石に父らしいと思つた。同時に私には小母の意圖が讀める氣がした。何と云つてもいくらか警碌してゐる彼女は、私の見知らぬきやうだいが「私から見たら婆さん」であると私に話した事を忘れて、此手紙を私によませ、その上で、私の「いとこ」と云ふ先刻の女を私に見せやうとしたものではなかつたか。

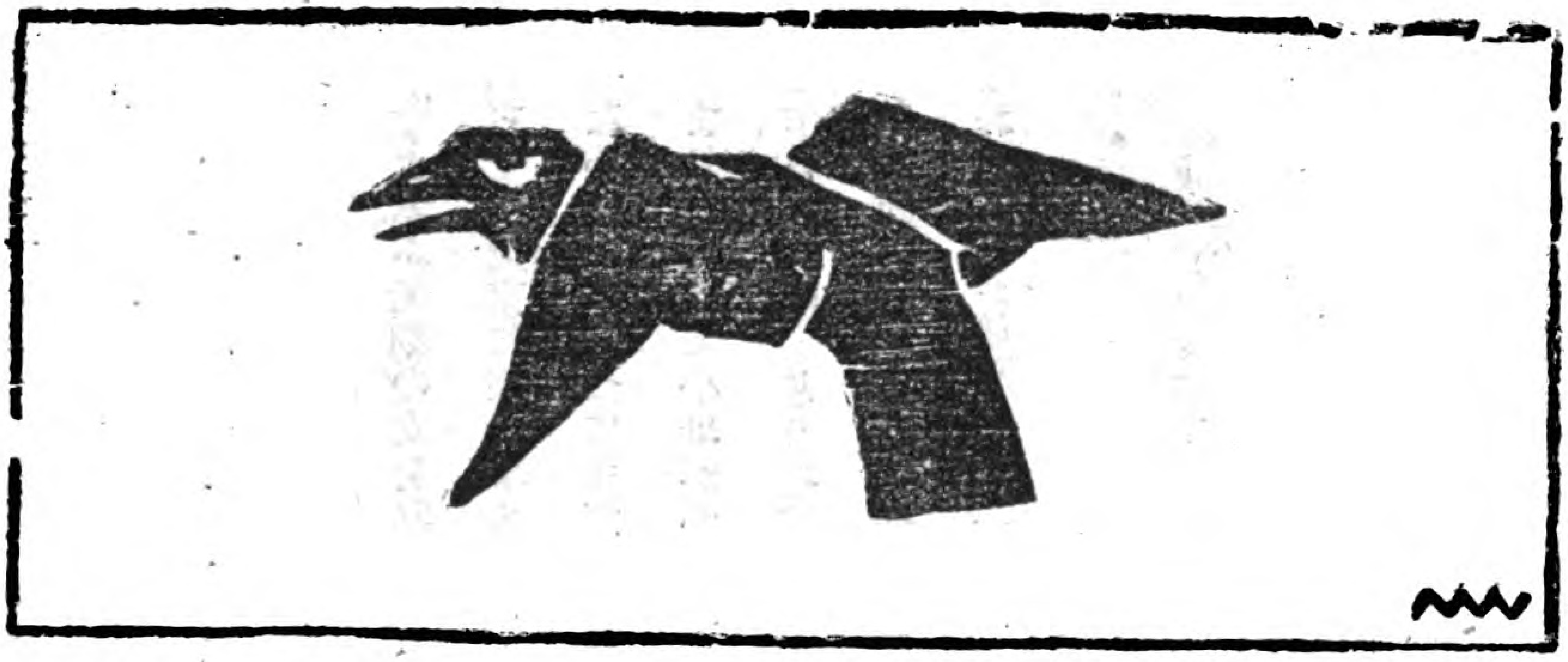
「ぢや、東京に來た事もあると見へますね。」

「なあに、今だつてまだ、ゐないとも云へませんわ。」

まじめ臭つて小母がかう云つた時、襖があいた。そして先刻の銀杏返へしが行儀よくそこに座つて、やゝ高く手をつき乍ら「では、どうぞ、あちらへ」と云つた。

私は此初めて見る「從妹」にあたる人のお手前で薄茶を啜るべく、茶室へ案内され乍ら、何となくむづ〳〵したへンなおかしみを感じて、一人ほゝ笑んでゐた。

——一三、六——



心づくし

宇野浩二

三月の半のことで、或晩私の母は半年も前から指を折つて樂みにしてゐた、私の死んだ父の墓參りに大阪に向けて出發した、彼が死んでから丁度三十年經つのである、やがて彼女は今年五十九歳であるから、彼女が夫に別れたのは三十歳の時であつたらう。彼の本當の墓はその死んだ土地である九州の博多にあつたが、便利の爲に代りの墓が大阪にこしらへてあつた。彼女は數年前から、お父さんの三十年祭の時は何とかして九州まで行きたいものである、どうかさう出來るように、お前（と私に）心掛けておいておくれ、そしてなるべくならお前も一緒に行かうではないか、と言ひ言ひしてゐた。いや、さうではなかつた、それは未だ私の二十歳以前の時分のことである、彼女は父の死んだ年と私の年とを並べて指を繰りながら、お父さんの三十年祭にはお前は（と私に）三十三歳になる、おゝ、その時こそ博多へお墓參りに行かうではないか、ね、お前の三十三歳の時には。」斯う彼女は目に希望の光を湛えながら、言ひ言ひしたものである。が、それから

六七年後になつて、私は二十五六歳の所謂男子一人前の年頃になつたのに、それから殆ど五年もの間、自分一人の下宿料さへ拂ひ兼ねて、母の彼女を親類に追ひやつたまゝで、彼方此方を放浪してゐた、だから、彼女は死んだ夫の墓參りどころか、生きてゐる自分自身と子の身の上の心配で殆ど窒息しかゝつてゐた。それが、この四五年來になつて、漸く私たちの生活が、その日暮しの安定ではあるが、多少他をかへり見る餘裕を得られるやうになつたところで、母は、彼女の胸の中でその事は決して消えてゐなかつたものと見えて、再び父の三十年祭とその墓參りに就いて時々私に話しかけるやうになつた。然し、それは十年前の頃のやうに空想の場合ではなかつたので、彼女はそこ迄行く爲には大阪への倍以上の費用が掛るところの、九州行のことは遠慮して言はなかつた。そして又、彼女はもう昔の時のやうに私を誘はうとはしなかつた。で、彼女は今度一人で大阪の墓に參らうと決心したのである。

彼女はさう決心すると、再來月は、來月は、後もう三週間したら、などゝ子供のやうにその日に會ふのを樂んでゐた。彼女は大方の女たちがさうであるやうに、私が斯うして東京に住むやうになるにつけて、彼女も亦人間は何處に住んで何處で死ぬのもいづれは同じ土になるのだから、そればかりでなく同じ住むなら斯うして王様の城のある町に住む程結構なことはない、斯う言つて、五十年の間使ひ馴れて來た國言葉をもなるべく氣をつけて出さぬやうにしてゐる位である。それに彼女は明治以前の人間としては珍しく開けた心持を持つてゐて、大抵の老人が鼻を抓むやうな洋食や支那食をも厭がらないで食べるといふ風な女であつた。だが、人はそれがどんなコスモポリタン的な氣風の者でも、年とつて一通りこの世の與へられた營みを終つたと見える時、或ひはそんな時にならないうちにでも、ふと古郷の庭の大木や壞れかゝつた門の扉が、彼の心を恰も琴の絃を彈くやうに打つのに會はないものはないだらう、或ひは又その逆にどんな心の忙しい時や、頭の混亂してゐる最中にでも、ふと古郷の道を通り掛つた時があるとすると、その時彼の心は忽

ち搖籃に乘せられた心地を感じることがあるだらう。そして、私の母もその例に洩れなかつた。不斷は古郷のことなど忘れて居るやうに見え、又實際最早や古郷には彼女の歸つて行く家はないのであり、それどころかそこには偏狹な、他を非難し合ふ事を仕事のやうに心得へてゐる親類たちが大勢ゐるので、彼女はいつも輕蔑を以て彼等に就いて話すのが常であつたのに、一旦何かの用事が出來て、そこへ出かけて行くとなると、彼女はまるで遠足を樂む小學生のやうな氣持になるらしかつた。もつとも、大體が彼女は年寄りに珍しく外出好きの性質を持つてゐたので、この四五年來、彼女自身に暮しの心配がなくなつてからと言ふものは、彼女は少しでも小遣錢があると、知人の家を訪問に出かけたり、チヤツプリンやデブ公の出るのや、或ひは毎週間に續る續き物やの活動寫眞に出かけたり、さては又近くの公園の中にある動物園や、淺草の花屋敷やに出かけたり、三日と家に閉ぢこもつてゐたことがない位である、それも、私自身に子がないので、彼女はそんな所へ出かけるのに孫の手を引いて行くなどといふ譯ではなかつた。それには始終嫁である私の妻を誘つてゐたが、家に用事を持つてゐる妻は三度に二度は一緒に行くことが出來なかつた、それでも母は一人でさつさと出かけて行き行きするのである。それが今度は動物園や活動寫眞ではなく、百五十里も離れた古里へと行くのである、汽車の中の寢臺も、食堂車の朝の御飯も、窓から見る久しぶりの野や山の景色も、悉く彼女には樂しい豫想であるに違ひなかつた。ところでその第一の目的はと言へば、即ち彼女の別れた夫の墓參ではあつたが、最早や三十年前の悲みは夢の繪を見るやうな記憶に違ひないのである。だが、その旅に於いて、私は今まで言はなかつたが、彼女にもう一つの目的があつたのである

私に一人の兄があつた。私より七年早くこの世に生れたものであるが、彼は二歳の時ひどい腦膜炎に罹つて辛うじて命だけを取止めた代りに、多分その時彼が頭腦に受けた打撃が、四十歳の今になる迄、恐らく彼が墓に行く迄、癒えな

いのであらう、やがて彼は這ふやうになつても、立つやうになつても、さては物言ふやうになつても、その發育なり働きなりが世間一般の子より劣つてゐるやうに見えた　流石に彼の父は幼い時からの彼の仕草を見ながら、「此奴は、此奴は……？」と首を傾げて嘆息し始めるやうになつた、やがて學校に行き初めた彼の成績を見ても、彼は「どうしたものだらう、此奴は、此奴は……？」と溜息と共に言つて、長い間沈默に陷るやうになつた。そして彼が十一歳の時、そして彼の次に生れた私が四歳の時、即ち今から三十年前の春の三月、私たちの父はこの世を去つたのである。

更に兄が五歳の時のことであつた。彼は中耳炎を患つて聾になつた。そこで元々腦の組織が緩んでゐるのと、耳の遠くなつたのとが兩方から作用し合つて、彼の智識の一年は他の人間の一日分位しか進歩しなくなつた、それでも彼は尋常科四年と、高等科三年の半位までの課程を一年おき程に進級しつゝ、十七の年まで學校に通つてゐた。その年に私たちの家が解放しなければならぬ運命にあつて、母は大和の親類に居候に行き、兄と私とは神戸にあつた父の從兄弟の小阪といふ家に預けられることになつた。然し、私だけはそこに半月以上ゐないで、大阪の伯父の家に歸つて來た、そこには私の母方の祖母がゐたので、私はそんなに家を失つた者の悲みを嘗めずに、そこで小學校に通ひ、中學校を卒業する十九歳の年まで暮したのである。私が世間一般の、相當な親のある子弟のやうに、煙草をすつたり、小說を讀んだり、學校を拔け休したりする中學生の生活を送り、又二十歳の時には高等教育を受ける爲に上京して、下宿屋で氣儘な日を暮したり、酒色を勸誘する女と交際したり、それ等の費用は悉くその小阪の家から、兄と違つて少年の頃秀才であつた私に望を囑して出してくれたのであるが、悉く幸福な、活氣のある少年時代を過してゐた間に、兄はその同じ神戸の父の從兄弟の家の、廣い屋敷の一隅に建つてゐる二疊と六疊の、書生や下男やが住んでゐる建物の中に寢起きして、朝夕そこの庭を掃いたり、水を撒いたり、使に行つたりして暮してゐた。

だが、その家の主人である私の父の從兄弟は決して彼を一生下男として買ひ殺すつもりではなかつたので、常人より腦力は劣つてゐるし、耳は遠いし、どうするのが彼が世を渡る最もよい方法であらうかと色々心配してくれたらしかつた。で、彼は彼のやうな人間は何でもいゝから手に職を覺えさすのがいゝだらうと考へて、伜手を求めて楠公神社の門の近くにあつた或足袋屋に兄を奉公させた。その時、彼は十九歳か二十歳かであつた。當時中學生であつた私は一二度彼をその足袋屋に訪問したことがあつたが、彼はそんな大人でありながら、いつ行つた時でも、その店中での一番初步の職人であつた證據に、店の間の一番端のところに幼稚な恰好で胡坐をかいて、木綿の紺足袋の甲ばかり縫つてゐた。彼よりも五歳も六歳も年下らしい、小さな子供の職人さへも、彼から見ると、彼の大きな身體の蔭に見えるところの奥に坐つて、彼がこしらへた甲に底を縫ひつける仕事を敏捷な手附でやつてゐた。私はその店先に一分間以上立つてゐるに堪えられなかつた。私はそこの隣の家との境目に掛けてある看板に半分姿を隱すやうにして、奥の方の簿記臺の前に坐つてゐる主人の方にいつも眞赤になつてお辭儀した。が、兄は私の姿を見付けると、何とも言へぬ喜ばしさうな顏をして、即座に縫ひかけの足袋の甲を下において、私が却つてはら〳〵して、彼の傍に行つて耳元で「それだけ一と切り縫つてからになさい、僕は神社の中のお墓の前のところで待つてますから、十分でも二十分でも……」と忠告したにも拘らず、彼は主人にも、他の兄職人たちにも碌に挨拶もしないで、そこ〳〵に飛出して來るのが常であつた。

俗に、人間の心の動きは悉くその目に映寫されるといふのは本當だらう、犬でさへ賢い犬の目の光は賢い色に光つてゐる、が人間である私の兄の目の色は賢い犬の目の色よりも鈍いやうに見えた、又五歳の時に耳を患つて以來、彼はこの世の正當の音響の記憶を持たないせゐであらうか、彼の發する音聲に何處か調子の狂ひがあるやうに聞えた、謂はゞ彼は人間の身體のうちで最も大事な部分であるところの首から上に悉く故障を持つてゐる人であつた。彼の存在は、他

人であれば抹殺してしまへるが、兄であるだけに、私には私たちの何方かゞ消えてなくなる迄は負擔であると思ふと、私に堪らなかつた。私は、だから、彼と一緒に楠公神社の境内の最も人通りの少ない部分を選んで歩いた、すると、偶然あの社殿の後の「嗚呼忠臣楠子之墓」の前のベンチに腰を下ろすことになつた。

その頃、彼は私の顔を見ると「少年世界」の廣告に出てゐるピストルの話をして「あのピストルは見かけは本當のピストルと一寸も變らない、矢張り六連發になつてゐて、つゞけ樣に六發うてるんだ、それで九十錢だから安いよ。」と言つた。

「あれは玩具ぢやありませんか、あなたは幾つです、今年二十歳ぢやありませんか？」と私は彼の耳元で一所懸命に言つた、出來るだけ彼に大きな聲で響くやうに、そしてあたりの人に聞えないやうに、私は私の口と彼の耳の間に手で圍ひをして叫んだ。

「だつて、あれは護身用になるよ。」と兄はその調子の狂つた聲で言ふのである、彼の鈍い光の目にも私の恐い表情をしてゐる顔がやつぱり映ると見えて、彼は物足りなさうな顔附を私の目から反らし勝にするのである。

「あなたは何故そんな事を考へる前に、自分の仕事のことを考へないんです？」と私はつゞけた。「祖母さんが言つてましたよ、もう半年もあの店へ行つてからなるのだから、どんな馬鹿な人でも、爪尖の又のところ位縫へなければならないのに。いつになつたらあなたの縫つた足袋が穿けることだらうと言つてましたよ。」

「だつて、あそこは難かしいんだよ。」と彼は言つた。「お前はそんな事を言ふけど、それは知らないからだ、辨さんだつてあれを覺えるまでに四ケ月かゝつたと言ふよ。」

「辨さんといふのは、あの十四五の子供でせう。」と私は溜息して言つた。「あなたはもう六ケ

月やつてるんぢやありませんか。」

「それや、私は人並より頭が惡いんだもの。」と彼は悲しさうな顔をして言つた。

「兄さん。」と私はいつの時でも、最後に斯う言つた。「あなたは僕の兄ぢやありませんか、而も七歳も上の、それだのに弟の僕からあなたはこんな事を言はれて恥かしいと思ひませんか。どうぞ、しつかりして下さい、ね、ね。」と賴むやうに言ふと、

「え、え。」と彼は遠くの方で言つてゐるやうな聲で答へた。

「これを上げますから。」とそこで私は祖母から貰つて來た汽車賃と小遣の殘りの分を半分分け位にして、五十錢銀貨を一箇彼に與へながら。「だけど、どうかこれでピストルなんか買はないで下さい、ね、ね、そして早く一人前になつて、二十錢でもいゝから僕に小遣をくれるやうになつて下さい。」

だか、彼は爪尖の叉が縫へるやうにならないうちに、その後脚氣に罹つて足袋屋を退いてしまつた。彼もその職業が厭であつたらしかつたが、幾ら義理ある目上の人であるところの、小阪の家から賴まれた人間とは言ひながら、足袋屋の主人の方でも彼には絶望してゐたらしかつたから、彼が病氣になつて、店から姿を消したことは、彼に厄介拂ひの思をさせに違ひない。

それから十年程後にもう一度兄の身の振り方に就いての問題が起つたことがある。それは矢張り神戸の小阪の方で心配してくれたことで、彼のやうな人間がこの世でやつて行ける職業としては、風呂屋の外にないだらうといふことになつた。彼だつてまさか金の勘定が出來ないとか、文字が書けないとかいふ程の馬鹿ではないのだから、少ししつかりした細君でも貰つて、彼女と相談して番臺に坐ることと、番頭を使ふことと、石炭を買ひ込むことと位心配すればいゝの

だから、出來ないことはないだらうと言ふのであつた。それには妻を貰ふ迄は、幸ひ母親が遊んでゐることだしするから、彼女に來てもらつて始めたらいゝだらう、と言ふので私の母が呼び寄せられて、神戸へ相談に行つたことがあつた。

この考は一應甚だもつともであるやうに思はれた、が、實は私の母が心の中で風呂屋の番臺に坐ることなど迚も厭なことだと思つてゐたらしかつた。で、彼女は私の伯父に會つてその話を聞いて見たところが、そこで彼女は都合のいゝ意見を聞くことが出來た、と言ふのは、風呂屋といふものは誰にでも出來る樂な商賣のやうに見えるが、内情はあれ程むづかしいものはない、何故といふのに湯屋の番頭などといふものは渡り者の中でも最も質のよくないもので、とても女などに使ひこなせるものではない、のみならずあの番臺といふものは、冬は寒く、夏は暑く、人並以上の健康なものでも馴れないうちは必ず一ケ月に一度や二度は當てられて病氣になる位のものである、等、等といふのである、然し、それは本當の事であるらしかつた。で、小阪の方では、丁度都合のいゝ風呂屋の賣物があつたので、七分通りまで買ひかゝつてゐたのだつたが、止めになつてしまつた。もつとも、風呂屋を好まなかつたのは母だけではなく、當人の兄も餘り進んでゐなかつたらしかつた、彼は風呂屋は厭だが、それをすれば妻が貰へるかも知れないといふことだけに樂みを持つてゐたらしかつた、無理もないので、彼は當時最早や三十歳にもなつてゐたらうが、多分童貞であつたらう、それに、彼は首から上は悉く病人ではあつたが、その外は何の片輪でもなかつたのであるから。

そして又十年經つたのである。彼のやうな、さういふ頭腦の人にでも少しづゝ、それは實際蝸牛の歩みよりももつと遲くではあつたが、智識の進歩の認められることはどういふ神の意志であらうか。その證據に、或時三十歳の彼に、私が幾分試すやうなつもりで、例の玩具の六連發のピストルの話を持出すと、彼はにたりと鈍い笑ひ顏を浮べて、あんな

ものはもう馬鹿らしいと言つてゐた。私たちは、それは私たちの境遇の爲からだが、幼少の頃から離れ離れに暮したので、謂はゞ緣の薄い親子兄弟であつた、何故と言つて、私たちは三人とも別々の土地に住んでゐた、私は母にも兄にも一年に一度ぐらゐづゝしか會はなかつた、だから、少年の頃、先にも言つたやうに大して不自由なく育つてゐた私であるが、その私の唯一の悲みは母と一緒に暮すことが出來ないといふことであつた、無論、兄にもさうであつた、唯私がそれを自分の胸の中に秘じて人には言はなかつた反對に、兄はそれを幼な兒のやうに人に打明けたといふだけの違ひがあつた。そのうちに、然し私はそんな事を以前のやうに悲みに思はなくなつた、と云ふよりもそれを打消す外のいろ〳〵の心を傾けるものを發見した、が、兄は三十歳になつても、そして多分四十歳になつても、その心持を少しも變らず抱いてゐるやうに見えた。先の風呂屋の話が出た時にも、それは何とも厭な商賣ではあるが、それをするなら妻が貰へることと、それよりも母と一緒に住めることとが彼の心を引いたらしかつた。その話が立消えになつて、半年程の間彼はぼんやりして見えたといふことである、小阪の家の人の話に、一時は氣が變になりはしないかと心配した程だつたとのことであつた。それは、私の考では、性の惱みが彼を苦しめたのかも知れなかつた。

考へて見ると、彼の人生での最もの不幸は、彼は物心ついてから、彼自身が斯うありたいとか斯うしたいとか、幾ら彼のやうな頭腦の人間にしても色々と考へることはあらうが、一つとしてそれが成就されたことがないであらうことであつた、それどころか、彼はいつの時でも彼の心の望まないことやものにばかり出合つて、その度每に恰も物が言へない、彼自身の考を發表出來ない動物のやうに、彼自身の意見といふものは少しも聞かれないで、無理耶理にさういふ惡い境遇にばかり追ひ詰められてゐたことであつた。先づ第一に神戸の小阪の家に預けられたことから始まつて、下男部屋に住まされたり、足袋屋に奉公にやられたり、風呂屋にされ掛つたり、犬でさへそれが厭なら逃げ出すといふ方法が

あるのに、彼にはそれも出來なかつた。そして又彼自身が窃かに考へてゐた志望を言ふと、母と一緒に暮したいとか、草花を造る職業をしたいとか、細君が欲しいとか、それを然し、彼は言ひ出すことが出來ない境遇にあり、又そんな事の出來ない性質でもあつた。そして實は彼の眞實の弟である私にしてからが、彼のやうな人間にそんなに色々の希望や慾望があつたのか？と驚かされた程、――考へて見ると、私も亦それを當然のことのやうに彼の意志を無視してゐたので、――或時細々と、廻らぬ筆で、當て字だらけの文章で認められてあるものを見て驚いたことがあつた。

さうだ、彼はよく文章を書いた。初めは、彼が二十五六歳で、私が十八九歳であつた時、或夏私たちが會つた時、彼が私に紫色のリボンで綴ぢた十枚ばかりの原稿を出して「これ、私が作つたんだが、お前なんかゞ見ると可笑しなものかも知れないが、……？」と恥かしさうな顔をして、一篇の小說を見せたことがある。それには、今はもうどんな事が書かれてあつたか忘れたが、當時もう田山花袋一派の自然主義の說が唱へられてゐて、それにかぶれてゐた私の目からすると、無論とるに足らない甘いものであつたに違ひない、殊に作者はさういふ首から上の病人であつたのだから、多分形の古い新しいを言ふ迄もなく、全體から言つて支離滅裂のものだつたらう。私はそれを半分も讀まないで、わざと顔を顰めて「こんなつまらない事をして遊んでゐたら、若し小阪の誰かに見付かつたら叱られますよ。」と忠告した。すると、彼は心に反抗的な分子を少しも持たない者が悲しい時にするやうな顔附になつて、「だつて、これは毎日用事が濟んで、寢る前にこの部屋に歸つてから書いたんだもの。」と言つた。

だが、その頃、私自身はと言ふと、保護者や後見人たちの反對を退けながら、今日のやうな職業の人間になる爲に、つまり小說家になりたいと志望して、中學の勉强を傍において、その方の勉强に沒頭してゐたのであつた。世に、親子だとか兄弟だとかゞそろつて文學に携つてゐる人たちを屢々見かけるにつけて、私はその事を思ひ出す毎に、私の一族

にも、父からか母からか、文學の血が流れてゐるのだと考へて、何故となく顏が赤くなつて心が寒くなることがある。卽ち私の兄も亦その頭腦の一部に文學を愛したり文學を著したりする組織を持つてゐるに違ひない。そして彼が二歳の時に彼を襲つた腦膜炎が、彼の肉體を半分殺したやうに、その組織も亦半殺しにされたまゝで生きてゐるのであらうか。その後も私は彼からさういふ種類の文章を二三篇見せられた、そして又時代と共に彼の讀む小說の類も少しづゝ變つて行くのを發見した。ところで、彼が私にいつの時でも虐待されながら、一年おきに、或ひは二年目位に見せた彼の所謂小說の中で、私が今でも唯一つ覺えてゐるのに『書生部屋』といふ一篇がある。

書生部屋といふのは、彼が養はれてゐる小阪の家の、例の廣い屋敷の一隅に立つてゐるところの、彼と外二人の書生と下男兼抱車夫とが寢起きしてゐた、二疊と六疊との一棟の家の事を指すものらしかつた。その中にゐる彼自身らしい男を中心にして、そこに住んでゐる書生たちの外に、何人かの女中たちの活鬪を書いたもので、時々主人の小阪や彼の細君なども影の人物として現れるのである。無論、例に依つて首から上の病人である彼が書いたものであるから、讀者である私が要所要所を想像を加へて判斷しないと分り兼ねるやうなものではあつたが、以前のやうな變な甘さはなくなつて、彼も亦自然主義や夏目漱石風やの影響を受けてゐると見えるのが愛嬌と言へば愛嬌であつた。だが、私がその小說から讀んだものはその愛嬌の方ではなくて、それを書いた作者の心持であつた。そこでは、非常に作者の同情を引いてゐる抱え車夫や、蔭では主人の不平ばかり言つてゐながらその前に出るとお世辭を弄する書生や、飼犬や小鳥やに不深切なのだけが作者の氣に入らないもう一人の書生や、然し大體から言つて作者はその篇中に出て來る男たちにはそれ〴〵敬意を拂つてゐるやうに見えた、それに反して意地惡で始終男子部屋の人々を目の敵にして、彼等の言行を一々主婦に告口する女中や、人に依つてお菜の盛り方を變へる女中や、下女中や書生たちに剛慢な振舞をする、變な片言の東

京辯を使ふ上女中や、唯一人家庭教師の婦人を除いて、女たちは悉く作者に依つて筆誅されてゐた、それに依つて見ると、彼は明らかに反女性尊重主義者であると見えた。首から上の病人の反女性尊重主義！

然し、私はもうその小說の中のそれ〲の筋は忘れたし、又決してそれは小說と言へる程に纒つたものではなかつたが、中で一つその作者自身であるらしい、耳の遠い男が、どうも外の人たちが自分にばかり辛い働きをさせるのが心外だ、と言つて、自分は面と向つてそれ等の人たちに談判することが出來ない、彼等は自分が耳が遠いのと、少し人並でないのとで、(作者は自分自身の事を人並でないと書いてゐるのだ、)頭から輕蔑してゐる、そこで彼はそれを警戒する爲に書生部屋の上り口の間の壁と、その棟と向ひ合はせの位置に立つてゐる下の便所があるのだが、その便所の壁とに、箇條書きの約束のやうなものを認めた紙を貼りつけるといふ一節があつたのを忘れることが出來ない。もつとも、その事は小說の中ばかりでなく、實際にも、私はその書生部屋を訪問した時、そこの入口の間の壁と、便所の壁とに、兄の筆蹟として、右上りのぎくしやくした、當て字だらけの、そして如何にもそれが彼の精神狀態を證明してゐるかと見えるやうな、變なところで一劃足りなかつたり、點が拔けてゐたりして間違つてゐる字が一行に五つも六つもある文章で、第一條第二條と、凡そ十箇條ばかり認めて貼られてあるのを見た。それには、今はもう大部分忘れたが、第何條、庭の掃除は書生部屋の四人が一日交替ですべきものなりとか、第何條、便所は特に不潔な場所なれば、せいぜい心掛けて汚したり、紙屑を撒いたりしてはならぬ、殊に女中諸君は、自分たちが便所を掃除せぬと言ふて、便所には便所紙屑籠があるのだから、鼻紙などは必ずその中に投入れるべしとか、第何條、我が身をつねつて人の痛さを知れ、等、等と言ふのであつた

私はそれを讀んだ時、小說そのものゝ方はわざと無視してしまつて、「あんな貼紙などしない方がいゝ、人にはなるべく

く憎まれないやうになさい、だから、あれは取つて破つておしまひなさい、」と忠告したものである。「だつて、默つてゐると、みんなが人を輕蔑するんだもの、」と彼は例の情けなさうな表情で言つた。が、それでも私が無理にすゝめて、彼にその貼紙を取らしたことであつた。然し、私は彼に別れて、神戸から大阪へ歸る汽車の中で　彼がその貼紙を壁から破りとるところの、何とも言へぬ哀れな後姿が心の目に浮かんで、目の中が熱くなつて來るのに抵抗し兼ねたものである。彼のやうな一見犬にも劣つた人のやうに見えるが、矢張り人としての不平や憤りや悲みが心に湧いて、それを何かの形で現さないでゐられないのだなと氣がついた時、中にも彼が彼自身を「人並でない」と認めてゐる小說の一節を思ひ出した時、私は汽車の中で到頭泣けて來た。

さて、そんな風にして兄は、或者は半年位で、又或者は三年ほどで、次々と入り替り立ち替りする書生や、女中や、抱え車夫やを何人送り迎へしたらう、その中の或者はいつの間にか背廣服を着た銀行員になつたり、又或者は髭を生やした紋付姿になつたり、さては見違へるやうな丸髷姿になつたり、或ひは乞食のやうな落振れた者になつたりして、彼の以前の同僚の書生や女中やが次々と訪問して來る中で、五年經つても十年經つても、少しも變らず彼は庭を掃き、打水し、使歩きをして暮してゐたのである。今から五年ほど前、小阪の家が一家を擧げて神戸から須磨のこれ迄別莊であつた方へ引越して行つた時も、彼は亦その家の道具の一つでゞもあるやうに移されて行つた。そこは海を見晴らす丘の上にあつて、淡路島も手に取るやうに見えると言ふのである、書生部屋は今迄のやうに別棟ではないが、然し割合に新築なので氣持がいゝ、殊に嬉しいのは彼の部屋としてそこの四疊の部屋を當てがわれた、などと書いて來た。彼は變に潔癖な男で、自分の身に着けてゐる物を片附ける場合など、たゝんだ着物と足袋とを一緒に置くことは決してしなかつた。それは彼のやうな不完全な頭がいつどんな時に覺えたのか、體につけるものと、足に穿くものとは一緒にしてはな

らないと考へた事に原因してゐるらしいのである、そしてその他すべてがその流儀で、例へば手拭にしても之れ等を顔を拭く用のや、外の身體の部分のやに分けてあるなど、出來るだけ規則正しくすることに興味を持つてゐると見えた。が、そんなに規丁面でありながら、脫ぐと直に疊んで折目などのくづれぬやうにと心掛けてゐる着物を着たところの彼の恰好は、始終下前と上前とが喰ひ違つてゐたり、後の方の裾が持上つてゐて、帶の上の邊が袋の樣に脹れてゐたり、それが折目が正しくついてゐるだけに、彼の人間を見るやうに、何とも言へぬ愚かしさと不細工さとを表現してゐた。

だが、さういふ恰好の兄の姿を、私は一年に一度か、甚だしい時は三年も見ないで過ごすことがあつた。殊に、私が二十四歲の秋から、即ちその時からもう小池の家でも私に學費をくれなくなつたので、私は自分で自分を養ふ途を講じなければならなかつた、その上、長い間その長男には何の望みもかけられないので、次男である私に苦勞の多かつた一生の晩年を寄せようと待つてゐた母が、その年から私を他依つて上京して來た、それが然し先にも言つたやうに、それから五六年の間といふもの、私が私自身をも養ひ兼ねるやうな境遇に轉々としてゐたので、母は今迄よりも一層慘めな境遇に陷つた譯だつた、自然、私たちは、私の兄である不幸な存在に就いてまで心配してゐる餘裕を持たなかつたのである。私は實際その苦勞の何年かの間彼の存在を全然忘れてゐたと言つてもよかつた、そして母も、多分彼女もそれを忘れてゐる時が多かつた。が、彼の方では決して私たちを忘れてゐなかつた、その證據に私が或ヒステリイの女と同棲して墮落の底の生活をしてゐた時、その事が誰からともなく彼の遠い耳にも傳はつたと見えて、或時不意に彼が私に寄遣した手紙に、お前は自分の仕事も成就しないのに、聞くところに依ると皆に無斷で細君などを持つて、而もその爲かどうか知らないが、母上を見捨てゝゐるといふ事であるが、本當か、若しそれが本當なら、何といふ心得違ひな事をしてくれるのだ、と攻めて來た、これは多分私たちの一生のうちで、私が彼から兄らしい叱りの言葉を受けた唯一の事件

だつたに違ひない。彼は彼のやうた頭の人間がさうであるやうに、最も初歩の正義派であつた。今から二十二三年前まで、その時はもう私たちの父はなくなつてゐたが、辛うじて存在だけはしてゐたところの私たちの家がなくなつた以來、私が預けられたところの母の兄の家、即ち彼女の里であり私たちの伯父に當る者の家が謂はゞ私たちの第二の家となつた。そこには私にも彼にも祖母にあたる人も十二三年前まではゐた、又そこには私が預けられた後に、主人である伯父に嫁いで來た後妻などもゐた。その後妻である人の腹から私たちの何人かの從兄妹たちも生れた、やがて祖母といふ人が死に、最近五六年前には伯父なる人も墓に行つた。元來、私の母は彼女の兄であるその伯父と餘り仲がよくなかつたので、私がそこに預けられてゐた時でも、私を祖母に任せ切りにして一年に一度位しか顏を見せなかつたが、彼女の子である私は伯父に比較的可愛がられてゐたので、二十歳の時その家に別れて東京に出てからも、夏の休暇毎にはその家へ歸つて行つた、が、その私でさへ伯父が死んでからは自然その方へ足が向かなくなつた。けれども、さういふ中で兄だけは、彼はさういふ人間だつたので、伯父からも疎まれ、まして彼の後妻である伯母に虐待され、年と共に生長して來る從兄妹たちにも輕蔑されながら、生れる者は生れ、死ぬものは死に、入れ替る者は入れ替つても、毎年春と秋との一二日をその家に五十錢の菓子折を持つてゞも訪問することを忘れなかつた、又その家に行くと、必ず先祖たちの墓に參ることを忘らなかつた。だから今から三四年前、初めて私がどうやら斯うやら一軒の家を持つて、母と暮すやうになつたと聞くと、彼は早速小阪の家から五日間の暇をもらつていそ〳〵と東京の私の家に尋ねて來た。その時私が彼と會つたのは五年以上見なかつた後のことであつた、彼は三十六歳であつた。

　その時、彼が私の家に滯在してゐた三四日の間、私は私自身の仕事が忙しかつたし、或ひは訪問客や友達やと會つてゐる時間が多かつたし、更に最も重要な理由は彼のやうな兄と話をしたり、行動を共にしたりする事は、私に限りない

負擔と悲しみとの感じを抱かせるので、殆ど言葉さへ碌に交さなかつた。が、母は流石に久し振りで見た彼女の不具な子に對する愛情を更めて目覺まされたのであらう、私や私の當時一緒になつたばかりの妻やの氣を兼ね兼ね、彼を活動寫眞や物を食べる場所やへ連れて行つてゐた。六十歳に近い母親と、四十歳に近い不具な息子とが、そして母は老年の爲に、兄は先に言つた理由の爲に、二人とも耳が遠かつたので、彼等は物言ふのに互ひに互ひの口を互ひの耳に近づけ合つてするのだが、それでも中々通じ兼ねる事があつた、さういふ二人の人間が私の家の門を出て行くところの、小説的な餘りに小說的な光景は私の心に變な刺戟であり過ぎた。しかし私は、彼が小阪の家に歸る前の日、二階の部屋から下の便所へ行く途の廊下で、ふと彼と顏を見合はしたことがあつた。すると、彼は私に何か物言ひかけさうな素振をしたが、私はそれに氣が附いた時はもう便所の戸を開けてゐたので、然し彼は餘程言ひにくい事であると見えて、私が再び便所から出て來た時には、ちらりと私の顏を見て、直に目を下に落してしまつた、その表情が如何にも氣の毒に見えたので、私はわざと椽側に立つて、木が一本しかない小さな庭を見てゐた、何か言ふことがあれば今話してくれと彼に思はせるつもりで。然し、その時は到頭彼は何にも言ひかけなかつたが、その次に私が何かの用事で下に下りて行つた時、彼は私の傍に來て、その鈍い、それは多分もう長い間人間の聲を明瞭に聞いたことがない爲か、それとも長い間餘りに日蔭に育つて彼自身の所謂「人並み」でない爲に他人から屈辱を受け通した爲か、如何にも壓へつけられたやうに聞える低い聲で私に言ふには、「あの、お前、あの、今でなくてもいゝんだが、お前の、あのお前の都合のいゝ時でいゝんだが、私にセルの袴を一つ買つてくれないか、それやその。お前の古いんでもいゝし、又買つてくれるんだつたら、そんなに上等のでなくてもいゝから……」

「えゝ、えゝ」と私は大きく點頭いて見せた。

その時母が傍に來て、彼女も耳が遠いので、私と兄との會話が遠くからでは聞きとれなかつたと見えて、「何、何？何を言つてるの？」と私に聞いた。私がそこでセルの袴のことを話して、「何とかして明日歸る迄に間に合はなかつたら、後から送つて上げるやうにでもしませう。」と言ふと、

「何を、お前！」と彼女は三十六歳の子に叱るやうに、「お前、袴なんか入ることがないぢやないの？」と叱つてゐた。

私はそれを背中に聞いたまゝ二階に上つた。その時が初めで、彼はそれから一年に一度位づゝ、一週間ばかりの暇を貰つては、今は須磨にある小阪の家から私の家へと歸つて來るのが例になつた。彼は、彼の弟に違ひないのだが、その弟の私を煙たく思つてゐるらしかつた、又彼の母には、彼は少年時代の感想そのまゝに、限りない愛慕の心を寄せてはゐたが、然し始終叱られたり誡められたりする點で遠慮するところがあつた、唯一人私の妻だけは、彼女は私たちの家庭に於ける彼女の位置からして、そんな愚かな兄ではあるが、私にするやうに目上の者に對する禮儀で深切に仕へそして面倒を見てゐたので、然し兄にして見ると、彼は彼のこれ迄の四十年の長い生涯のうちで、彼の目下の弟の私は言ふ迄もなく、その外に彼は目下の者といふ者を持たなかつたが、その外友達からでも、ましてどんな人間にも一生に一人や二人はあるべき者の戀人とか妻とかを持つたことがないから、一人の女からも、嘗て私の妻の如く、たとへ表面上のそれであつても、つとめてさうするのであるとは言ひ條、そんなに彼とうるさがらずに話をしたり、深切に受返事してくれる者に出遭つたことはない譯だつたから、彼は彼女に言はうやうない親みを感じたらしかつた。だから、彼は須磨から殆ど一日おき位に私の妻に手紙を寄遣して、新しく來た女中のことや、雇人一同のストライキのことや、飼犬の病氣のことや、庭に蛇が出たことや、その他樣々と彼の心に考へることやを、彼のその病氣の頭から生み出される文章で書いて來た。それに又妻が一々返事を出すので、時には母から、そんな用もない手紙を屢々出してはいけないと叱つて

やらねばならなかつた。彼は私には多分一年に一度位手紙を寄遣すだけであつたが、妻を通して始終新聞の廣告などで見るものと見えて、新刊の小説本を貸してくれと申し込んで來ることがあつた。然し、私は私の家族の者にさうであるやうに、私自身の著した本は決して貸さないことにしてゐた。

私の妻　それは私と一緒になる迄は信濃の國の下――といふ町で藝者生活をしてゐたものであつた。私は彼女を知る前から彼女の友達であるもう一人の藝者に戀してゐた。そして運命が私と今の妻とを一緒にしてからも、私のもう一人の女に對する心持は増しこそしたが劣へはしなかつたので、私は屢々機會を得る度に矢張り下――町に出かけてその女と會つてゐた。そしてその事を私は幾篇かの小説の材料にした。そこで、たとへ私の單行本に纏めた小説集を貸さなくても、何かの雜誌でそれ等の小説の一つを兄が讀んだことがあつたと見えて、それに就いて或時珍らしく彼が私に手紙を寄遣したことがあつた。彼の手紙はその時のに限らず、始終私の妻へのにしても、三枚より短いことはなかつた、殊にその時のは六七枚もあつて、確か三錢の切手が二枚貼つてあつたから、そのまゝこゝで讀む煩雜を避けて、その大略を傳へると、「お前の書いてゐる小説などに、私が口を挾むと、お前に叱られるかも知れないが、」と言ふやうな風に書いてあつた。「お前が此頃書いてゐる小説の中で、信濃の國のことを書いたものを讀んだが、よし子殿（私の妻の名前）の外の女の人のことが書いてあるが、まさかお前がよし子殿と喧嘩してゐる譯ではないだらうのに、あんな風に書くと、よし子殿は悲しく思ふに違ひない。お前は、私は直接によく知らないが、子供の時分から女の人のことでよく迷つたことがあると聞いてゐる、お前は私などゝ違つて立派な考を持つてゐるのだらうから、私などがこんな事を横合から言ふのは可笑しいことだが、どうか氣をつけてくれ。――」

私はそれに返事を出さなかつた。彼からもそれ切り何とも言つて來なかつた。が、彼は今迄通り私の妻には相變らず

屢々手紙を寄遣してゐたらしかつた。そして又一年の春か秋かには、歸省する學生のやうな樂しさで、須磨の小阪から一週間ほどの豫定で東京の私の家に歸つて來ることにも變りはなかつた。

ところが、去年の秋、丁度彼が私のところへ歸つてゐた時のことであつた、或日私の母方の遠い親類に當る者で、當時淺草區の高――町で切屑屋をしてゐる中戸丈助といふ男が、この男は實に遠慮する性質で、人の家に來て飯を呼ばれるどころか、茶を振舞はれることにさへ恐縮を感じるので、滅多に尋ねて來ることがないのであるが、その時はどういふ風の吹き廻しだつたか、一寸この近くまで商賣の用事で來たものだからと言つて、私の家に立寄つたことがあつた。

初めに、私は私の家が解散しなければならなくなつて、私は大阪の伯父の家に預けられ、兄は神戸の小阪の家に預けられ、そして母は大和の親戚の家に行つたと書いたが、それは私の祖父の先妻（ところで、母は後妻の子であつた。）の姪が嫁入つてゐる先の家の事で、卽ち親類としても極めて遠緣で、且つ血の關係は全然ない譯であつた。そして今言ふ中戸丈助はその家の主人の弟に當る者であつた。だから、多分私の父が早世しなかつたら、そして母がその大和の中戸の家へ手傳ひといふ名儀で居候に行かなかつたら、私たちはその存在さへ辛うじて知る程の親類に違ひなかつた。ましてその人の弟の丈助など、同じ家に偶然同居するやうなことがあつても、お互にそれがどういふ關係の人であるかを知らずに過ぎたかも知れない。

母がその大和の中戸家に居る時分にも、丈助とは、長年の間のことだが、片手の指で數へる程しか會つたことがなかつた、何故と言つて、次男であつた丈助は自分の生れた國で、僅かな田地などを貰つて、百姓をして暮すことがどうしても厭だつたので、大阪に出たり、馬關に行つたり、さては新領土になつた朝鮮に渡つたりして、思ひつく限りの商賣を始めては、錦を故鄉に飾らうといふ志を立てゝゐた、だから、彼は三年に一度か、長い時は七年に一度位しかその故

郷に歸つて來なかつたのである。然し、こんな風にだけ言ふと、讀者に彼の性質を誤解される恐れがあるから、もう少し彼に就いて言葉を費すと、彼はそんな風な奮闘家によくあるやうに、成功の爲に手段を選ばないといふやうな性質は少しもなかつた、それどころか、稍々馬鹿と言はれる程正直者であつた。私は屢々彼のことを考へて、彼のやうな氣質の人間はどんないゝ運にめぐり遭つても、由來人を欺し合ふことがその肝要な條件であると見える商賣に於いて、彼が成功するであらうといふことは思ひも寄らなかつた。ところが、それは私の短見であつて、正直も彼のやうに徹底してゐて、そして更に重要な事は、彼のやうに小野道風が見た蛙のやうな奮闘的な精神を持つてゐる者には、どんないゝづらな神でも惡魔でもが、彼を邪魔する事が出來なかつたに違ひない。だから、彼は屢々その商賣に成功して、萬で數へる金を貯へたことがあつた。ところが或時は番頭に置いたものに横領されたり、又或時は大勢の人に悉く金を借り倒されたり、それ等の事は一寸普通の人には想像のつかないやうな手拔かりの爲に、その度毎に貯へた財産を無一物にまで失つてしまつた。すると、彼は、この商賣はこんな風で損をするんだなとか、この仕事はこんな風にして人に取られる缺點があるんだななどと考へて、次の商賣に移るのが常であつた。が、次の商賣に變つても、それが屹度成功するといふ譯には行かなかつたし、又十に一つが成功する爲には矢張り少なからぬ年月が掛つたことだし、自然彼は三年或ひは五年目に故郷に歸つても、いつもそれは彼の失意の時で、そこへ骨休めに歸つて來るといふやうな場合であつた、然し彼は直に又これではならぬと志を起して、成功を夢見ながら、故郷を去つて行くのが常であつた。

彼は今年六十五歳であつた。丁度私の母が私を他依つて、長い間世話になつてゐた丈助の兄であるところの、大和の中戸の家を立つて東京に來た時分、彼、丈助も亦これまで幾度となく成功したり失敗したりした歴史を繰り返した末、例に依つて無一文になつて兄の家に歸つて來てゐた。すると、同じ頃に彼の妻がふとした病氣で亡くなつたので、彼は

一層力を落して、一人の娘と、その娘が生んだ私生兒である孫と、三人で珍しく半年ばかりごろ〳〵してゐた、それは多分彼が五十五六歳の時であつた。彼はふと私の母が私を他依つて東京へ行くと聞いて、「私も東京へ行かうか知ら。この年になる迄、大阪から西の方ばかり彼方此方してゐて、未だ東京の土を踏んだことがない。私はもう西の方の人間のこすいのに飽き飽きした、東京の人間は江戸ッ兒といふ位やから、もつといゝ人間に違ひない、さうだ、私も思ひ切つて東京に出て、何か一つ商賣を始めて見よう、」と彼は言つた。

で、彼は私の母が東京に來た後、二三ケ月してから、娘と孫とを連れて、彼の兄の知人が淺草で金貸をしてゐるのを他依つて、出て來たのであつた、

彼は上京してから二三日目の或日、當時私が母と前途に何の成算もなしに、取敢ず友達から敷金を借りて、下宿屋から引越して來てゐた本郷の西―町の家に訪ねて來て、私はその時彼に會つたのは生れて二度目であつた、彼は私も東京へ來ましたが、未だどつちが東やら西やらさへ分らん田舍者のことだすさかい、宜しう頼みます、」と言つた。「私は東京に外に親類も知り合ひもないんやさかい、これから色々御厄介になるかも知れまへん、その時はどうぞ何分……。」

「で、丈助さん、」と母が彼に聞いた。「此方へ來て、どんな商賣をお始めになるつもりです？」

「それが未だ見當が付かんねやが。然し、一日でも二日でも遊んでたら食ひ込むばかりやさかい、何とか急に思ひつかうと思うてんね。私は兄貴に二百圓貰うて來たんや、それがもう百五十圓になつてしまうたさかい、一日もぐづ〳〵してられへん、商賣の本がなくなつてしまふもん。」

そこで、間もなく彼が始めたのは羅紗の裁ち切を買ひ集めて來ては、それをミシンによつて、子供用の靴をこしらへる商賣であつた。彼は彼の二十四歳になつてゐる娘を仕込んで、彼女と一緒に夕方灯のつく頃から十二時頃迄、到頭近

所の家から夜が更けてからのミシンの音が喧しいと言つて抗議を申し込まれた迄、せつせと稼いだ。氣の毒なことに、その彼女の娘といふのは、私の兄と同じ部類に屬する人間で、彼に比べて、唯彼女は耳が遠くないといふだけ位の違ひではないかと思へる程、少しぼんやりした性質であつた。現に彼女は今年四歳になる子供の父親が誰であるか、それが分らないのか、隱してゐるのか、未だに父親である丈助も知らない位で、兎に角、人並でないところがあつた。すると彼女の子であるその四歳になる男の子も亦、母親に似て、どんなに最負目に見ても、何處か頭惱に缺陷があるやうに見えたが、彼には祖父に當る丈助はその子を盲目的に可愛がつてゐた。彼は自分が三度の飯の菜を廢しても、その子には好きな物を食べさせたいと言つてゐた位だつた。そして、彼はさういふ娘を督勵しいしい、彼女にその靴のやさしい部分を受持たせ、自分はそのむづかしい仕上げを分擔して、無數の子供靴を山と積みつゝあつた。彼はそれを又、材料を買ひ出しに行く一方、賣りにも行かねばならなかつた。が、その商賣は容易にうまく行かないやうであつた。

その間に、彼に少し息を吐かせる事が起つたといふのは、今言つた彼の娘は、どういふ譯か彼にも彼の死んだ妻にも似ず縹緻よしだつたので、仲に口を聞く人があつて、靜岡縣で圍碁の師匠をしてゐるところの、先方の年は彼女より三十歳近くも上であつたが、或人に後妻に緣づくことになつたのである。で、その緣談が纏まつて、それは丁度彼が東京に來てから一年半程後のことであつたが、彼の娘の嫁入りと共に、彼女の子である彼の孫を、大和の兄の家に預けて、全くの一人身になつた、そして相變らず羅紗の子供靴をせつせとこしらへてゐた。それが切屑屋に變るやうになつたのは、ゴム靴といふものが流行り出して、見る見るうちに彼の方の商品が壓倒された爲であつた。そこで、彼はこれ迄の商賣から思ひついて、羅紗のみならず、一般に切といふ切の裁ち切を買ひ集めて、それをミシンでつなぎ合はすことを考案した、それで座蒲團だとか、座蒲團の皮とかをこしらへるのである。又、そんなものにもなり得ない小さな切は、

それを玩具の材料にして賣るとかするのであるが、この商賣は始めて見ると案外需要が多かつた。それ等を彼が買ひ出しに行く先といふのは、これ迄は洋服屋に限つてゐたが、その時分から羅紗類は羅紗の問屋とかで、初めのうちはそれ等の行く先々で乞食か何かのやうに煩さがられて、寄り附くことにさへ少なからぬ困難を嘗めたが、謂はゞ彼の買ひに行くのはそれ等の家でも不用になつて遣り場に困つてゐる見本切や何かだつたので、今では何處の家でも彼の廻つて來るのが待たれるやうにさへなつた。自然、彼は次第に手を擴げて、終には見本切ばかりでなく、服物の反物などをもどん〳〵買ひ込むやうな、今日の隆盛を見るに至つたのである、だから、今は彼は切屑屋ではなくて、反物端切その他一切商といふ長い肩書の商人になつて居るのである。

彼に就いては、私に忘れられない思出があるのである。それは彼が子供靴屋から切屑屋に變つて、半年も經つた時分のことであつたらうか、當時下宿住居をしてゐる友人のところや、辛うじて借家に夫婦暮しをしてゐる友人の家や、そんな少しでも入れてくれさうな家から家へ、或ひは二日或ひは五日づゝと、居候して廻つてゐた私が、どんな用事を持つてだつたか、多分何の用事もなくてだつたらう、ぶら〳〵と町を歩いてゐた時、ふと道の向うから大きな黄色の風呂敷包を背負つてやつて來る中戸丈助に會つたのである。

「おゝ、」と彼は持前の大きな聲で叫んだ。「お前はんたちはどうしたんや？　この間西――町へ尋ねて行つたら……」と彼はそこ迄言つて、まさか道のまん中で「夜逃げしたといふぢやないか、」とも言へなかつたので、一寸言葉を切つて「お前はん、矢張り女子やろ、女子やろ、あの女子の爲やろ？」と叫んだ。その當時私が同棲して苦勞してゐたところの、ヒステリイの女を、それはいつか私の兄が神戸から手紙で攻めて來たのと同じ女である、彼は一度か二度私のところへ來た時、彼女を見知つてゐたので、さう言つたのであつた。「お前はん、然し、お前はんはえゝけど、お母はんはどうし

た、何處にゐやはんね？」

そこで私は彼に小さな聲で答へて、母は親類の家に預けてあること、ヒステリイの女とは別れたこと、さて今こそ自分は一人身になつたから、折角志を立てゝ長年その爲に浮身をやつして來たところの、小說を書くことに一心をこめるつもりであることなどを話した。實際、私は長い苦勞の後で、心も肉體も苦みと惱みと悲みとの頂點にあつた。その思を誰に語らう？　私は今こそそれを小說の中にこめて現したいといふ、胸を突き上げるやうな衝動に興奮してゐる時であつた。それに依つて、私は天才の名を世間から貰へるだらうなどとは考へなかつたが、斯ういふ人間もあつたかといふ程の注意は引けるだらうとは信じてゐた、然しそれよりも何よりも、それに依つて、將來私の小說が讀者が彼の藝術に依つて、大工が彼の職能に依つて、それぐこの世を人の世話にならずに生きて行けるだけの報酬を得てゐるやうに、私もなれるだらう、さうだ、それだけの才能は十分持つてゐると私は信じてゐた。そして希望に燃えてゐた、だから、私は初めは黃色い風呂敷包を背負つた切屑屋から、闊詭り丸出しの大聲で話しかけられて、往來の人々からぢろぢろ見られてゐることの恥かしさに震へてゐたが、いつの間にか、相手が誰であるかを考に入れてゐる餘裕がない程興奮してしまつて、然し出來るだけやさしい言葉で彼に向つて私の意のあるところを辯明すると、彼は、單純で正直な彼は、立ち所に私を信用して、

「私には分らんが、その何かい、それを書くのにどれ位の日數が掛るんだす？」と聞くのだ。「ふむ、一ケ月か二ケ月……その位の間なら。それでその何が書き上つたら、お前はんが出世するといふのなら、私んとこへ來て書いたらどうや、え、どうや？」、

私は直には答へないで、暫く考へてゐるやうな振をして默つてゐたが、實は何にも考へてゐなかつた、即座に彼の家

に置いてもらへることになつたら、今日迄のやうに二日か三日位で遠慮しいしい或家から他の家へ、又或下宿屋から他の下宿屋へと轉々する浮き目は免れられるし、多分、さういふ境遇にあれば、屹度この胸にたまつてゐるものに形を與へて、何篇かの小說に作り上げることが出來るだらうと思つたので、無論一分間後には、

「さう願へれば、さうして下すつたら結構です。」と答へたのである。

その晩から、私は切屑屋中戸丈助の家の居候になつたのであるが、當時丈助の家は彼と、ミシン工である十七八歲の歌劇好きの職人と、二十七八歲になる元俳優の馬の脚であつた番頭との三人暮しであつた。下は店の間と、次が四疊半の茶の間で、もう一つ奥に三疊の部屋があつた、それから階段用としては最小限の薄い板を使つてある、私のやうな目方の輕い者でも、それを踏む度にぎい〳〵と氣味惡く鳴るところの梯子段に依つて通じてゐる二階は、その梯子段の口の爲に穴倉のやうにその中の疊一枚分を削られてゐるところの六疊と、隣に物置代りの三疊の部屋から成立つてゐた、即ち居候である私はその二階の、中央が高くて、窓の方に寄れば寄る程低くなつてゐる天井を持つた六疊の間を與へられたのである。私はその邊では天井が私の背の半分位の高さしかない窓際に、丈助が彼の心盡しで送荷箱の板を剝がしてこしらへてくれた、うつかり安心してそれに肘でも突かうものなら、忽ちめり〳〵と音して歪んでしまふ机の前に坐つて、昨日までは親類や、母や、世間やに對しての申譯にもと思つてゐたが、今日からはその中にもう一人丈助を加へて、その丈助の爲にも是非一篇の小說を作り上げねばならぬと發奮しながら、窓の外の景色を睥みつゝ冥想した。その手製のぐら〳〵の机の上には、これも亦丈助の心盡しとして、彼の商品であるところの小切類をミシンでつぎ合はした一枚の切が、机掛として掛けられてあつた。それが紺絣の切屑の集合なのでこれではあんまり見つともないから、私が一枚いゝのをこしらへて上げませうと言つて、歌劇好きのミシン工がその後夜業の餘暇に更紗の切屑を縫ひ合はしたも

のをこしらへてくれた、私はそこで又このミシン工の手前でも、是非とも一篇の小説を仕上げねば申譯がないと思つた。

毎日々々、朝の七時半になると、私を加へて四人の者がその下の六疊の茶の間で、「今日は私がたいたんだ、どうや、うまい飯が出來たやろ、」と丈助が言ひ、「佐アさん(番頭の名前)の掃除番の時は、流石に綺麗やな、」と丈助が又言ひ、「矢張女形をしてた人は何處か違ひますね、」とミシン工が賞めると、「よしてくれよ、もう女形の話は、」と佐アさんがたしなめ、「どうや、小説はちつと書けたか、」と丈助が私に聞き、――實際、當節の流行言葉で言ふと、これ等の人たちはプロレタリアに違ひなかつたが、あゝ、これ等のプロレタリアは惠まれたる哉！　東京中で幾つこれ程樂しい朝の食事の光景が見られるだらう！――そして、食事が終ると、丈助は例の黄色い風呂敷を懐中にして買出しに出かけ、ミシン工は奥の三疊の間のミシン臺に就き、元馬の脚の佐アさんは青白い顔のきやしやな身體を店の間の火鉢の前に坐らせ、そして私はそのめき〳〵鳴る梯子段を上つて、窓際の机の前に坐るのである。

丈助は決して電車に乗らなかつた、その電車賃を一家の夕飯の菜に加へたなら、ミシン工も、番頭もそして居候もどんなに喜ぶだらうと彼は考へるのである、彼は又決して晝飯をどんな一膳飯屋にも立寄つて濟ますことはしないで、その日和齒の齒をかち〳〵と鳴らしながら、半分ふくらんだ黄色の風呂敷をかついで、家へ食べに歸つて來るのである。ところが、その晝飯の時は大抵お香の物と定つてゐた、だから、それの仕度は當番になつてゐるミシン工か番頭かの手を五分以上煩はさなかつた、そして丈助が歸つて來たのを合圖に、その當番の者が二階の私に向つて、「さあ、御飯ですよ、入らつしやい、」と叫んだ、ミシン工は前にも言つたやうに歌劇が好きで、現にこの丈助の家に來てからもみんなに内所で金龍館の樂屋を訪問に行つて、その役者の一員に加へてくれと申込んだ事があつた位だつた、彼はその事を一週間ほど後に夕食の膳の前で、弟子入を頼んで斷られたことを白狀したのである、もつともそれは未だ私が來ない前の出

來事であつた。それでも今でも一日と十五日には、彼は金龍館へ行く事を彼の唯一の樂みにして居た。だから、彼が當番の時は下から梯子段の上を見上げて、「飯だ、飯だア――、下りていらつしやい――、例に依つて――何にもないが　、」などと歌劇の節で叫んだ。

　然し、それも今はもう六七年も前の話である。私はその當時、丈助に誓つたにも拘らず、到頭仕事らしい仕事をしないで、彼の家に別れを告げたが、それから一二年後になつてから漸く少しばかり芽を吹き出して、今、その頃には見もしなかつた土地の、見も知らなかつた女を妻に持ち、長い間私同樣轉々として居た母親をも、親類の家から引取つて來て、どうやら斯うやら形ばかりの一家の主人になつてゐる、そして彼、丈助はといふと、彼の商賣はその後益々發展して行つて、それから二三年後には彼は大和の方から後妻をも迎へ、それと共に娘が他所へ嫁入したに就いて兄の家に預けたところの孫をも引取り、家は昔ながらの家であつたが、今その家中全體が品物の藏になつたかと思はれる程、所謂反物端物切類で充滿して、ほころびさうになつて居る中に彼は坐つて居る。又、番頭の佐アさんと歌劇好きのミシン工とは、彼の家の直近所に借家して、彼の補助のもとに同じ商賣の店を開いて居る、ミシン工は佐アさんとの日常の會話に今でもも歌劇の節でうたつて居るであらうか？　丈助の家には今は佐アさんの代りに彼の後妻の弟が坐り、歌劇好きミシン工の後には又別の三人ものミシン工も來てゐる。然し爭はれないもので、最早六十五歳になつた中戸丈助の顏には、何處か六七年前まではそんなものゝ影さへなかつたところの、老いと疲れと一種憂鬱な表現が見られるやうに思へた。

「どうです、御商賣の方は？」と母が彼に聞いた。

「まあ、お蔭で、相變らずどうかかうか忙しいよ、」と彼は答へた。

「あなたの方が相變らずなら、結構な譯ですね。もう隨分お金が出來ましたやろ、」と彼女も亦いつの間にか國言葉にな

つて應酬して居た。

「あゝ、二三日前に一寸勘定して見たら、現金だけで六萬圓ほど出來てたから、品物や何か入れると八萬はたまつた譯だつせ、」と彼は答へた。彼のやうな人物であつたから、それには或る種類の人にあるやうに誇張もない代りに、又他の種類の人に見られるやうに何の割引もないことは確かだつた。

先にも言つたやうに、その時分丁度私の兄が須磨から歸つて來てゐたので、多分その時も彼は家に居たのであらうが、彼は昔彼の小說の中に書いて居たやうに彼自身が並でないことを、そして彼の存在が私たちの家の中で、殊に客などが來た時には目障りであるだらうことを、色々な時に色々な場合に自覺させられて居たに違ひないので、母と中戶とがそんな話をしてゐる奧の八疊の間から逃れて、その隣の二疊の女中部屋に這入つて、彼の好きな小說本でも讀んで居たか、或ひはそれに顏を伏せたまゝ居眠りでもして居たのであらう、そして私の妻は餘りそこへ顏を出すと中戶が遠慮して落着かないことを知つてゐたので、わざと茶の間に引込んで針仕事か何かして居た、女中は多分臺所で水仕事をしてゐた。

「まあ、そんなにお金が溜つて結構ですわね、」と母は中戶と向ひ合つて坐りながら、彼との會話をつゞけて居た。

「あゝ、お蔭でな、」と、然し、餘り元氣のない聲で中戶が言ふには、「然し、私、もう金はこれより上は入らんよ。入らん言ふても、商賣の方は相變らず忙しいもんやさかい、賦でも增えて行きよるさかい、ほかす譯にも行かんけど、金はないとないで苦勞するし、あるとあるで又苦勞なもんやな。」

「どうしてゞすね？」と母が笑ひながら冗談をまぜて、「そんなに入らんお金があつたら、私のとこへちつと貸しくとなはれ。」

「何言うてんね、あんたのとこなど今はもう困ることはあれへんやろ。それより私の氣にしたら、貸してやりたいと思ふとこが仰山あるのやけど、斯うして娘が居たり、孫を引取つたり、娘が戻つて來よつたり――あゝ、さうさう、お紋が今度靜岡から戻つて來よつてな……。」

「お紋さんが……又、どうして？　もう行きはつてから三年位にもなりますやろがな、それに、どうしてだんね？」

「さあ、どうしてやら、私も知らんね。」と丈助は言つた。「お紋はあんたも知つてはる通り、あんな少し足らん奴だすやろ、何を聞いても何にも言ひよらんし、私も戻つて來たものに聞いても仕様がないと思ふし……」

「そんなまあ、中戸はん、何ぼ何でも呑氣な事はないやおまへんか。」と母が聞いた。「それにしても、先方からにしても、又口をきいた仲人からにしても、何方からか何とか挨拶をして來んといふ法がないやおまへんか？」

「うむ、さうさう、」と中戸は何をうつかりして居たのか、思ひ出したやうに、「それは先方から手紙で言うて來よつた、そや〳〵、手紙で言うて來よつた、子が出來んよつてに、三年待つたけど子が出來んよつてに、家風に合はんさかい返す言うて來よつた。……」

「だつて、それや無理ぢやありませんか、」と母が氣の毒さうに言つた。「……お紋さんは今年二十七ですか、八ですか。……だけど、先方の何は大分のお年ぢやないんですか！」

「私より二つ下やさかい、六十三やがな、少し無理やな。」と丈助は普通の調子で言つた。「と言うて、戻す言うて來たんやさかい、受取らん言ふ譯には行かんしな。まあ、阿呆な娘を持つた私の因果や、仕樣ないと思うてまんね。」

「それぢや、あの狹いお家で大勢さん一緒で大變だんな。」と母が言つた。

「うむ。然し、今私の家は忙しうて何ぼ人がゐても手が足らんね、もつとも家内と、今度又家内の弟の嫁が來よつたさ

かい、女手はもう入らんけど、彼女が男やつたらよかつたんやが、今になつて製造しかへる譯に行かんからな、」と言つて、丈助は愉快さうな聲で笑つた。

「私も金が出來たからだつしろやか、此頃めつきり身體が弱うなつてな、」丈助はつゞけた。「三四年前迄は牛肉の百目位腹の中の何處へ這入つたか分らんやうに食うてしまうたが、此頃は五十目の牛肉を半分から殘すがな。酒も一合飲むと、寢床へ這入る間もないうちに寢てしまふやうな具合でな、すつかり意氣地がなうなつた。然し、私、今死んだら忽ち騷動やがな。家内が一派やろ、それからお紋に義造（彼の孫の名前）やろ、それから私の兄貴の家、あそこがあんた知つての通り、兄貴が死ぬ前時分から惡なつて、私の方を他依りにしてよるやろ。さあ、そいつ等が私が死んだら財産をうまい具合に分けよつたらえゝけど、みんな慾の皮が突張つてるよつてに、どんな喧嘩を始めよるか分れへん。私、今のうちに遺言を書いとこ思ふんやけど一つあんたとこの（私を指す）にその書式を書いてもらひたいと思ってな、どやろ、頼んで見とくなはれんか？」

その時彼等の隣の二疊の間にゐた私の兄が、便所に行く爲に、彼等の部屋の前の廊下を通りがゝりに、その光の鈍い目でちらと中を見て、直に又目を反らして歩いて行つた。深慮家の丈助はそれを見ると、思ひがけない人間が今迄知らなかつた隣室にゐたといふことと、殊に今迄の彼の話をその人に聞かれたらうと思ふ驚きとで、忽ち恐縮の樣を現してもぢ〳〵し出した。

「お客樣やおまへんか？」と彼は聞いた。

「いゝえ、」と母は多少極りの惡さうな調子で、「あれが須磨にゐます兄の方の子ですね、四五日前から來てますのやが、もう又明後日あたり歸るんですけど、困りもんです、」と言つた。無論、いつとなく彼のことは中戸も聞いて知つてゐた

ので、彼女はこんな風に言つたのであらう。

「もう大分の年輩やおまへんか、あの、耳が遠いとかいふ人だすか?」と中戸が聞いた。

その時、便所から出て來たその問題の人間が、再び彼等の部屋の前の廊下をのそ〳〵した歩調で通りかゝつたので、

「大造、大造!」と母は半分立上つて、出來るだけ大きな聲で呼びかけた。

「はあ?」と彼は間の拔けた、持前の遠いところから響かすやうな低い聲で答へて、しかし急に部屋の中へ這入つて來ようとはしないで、癖で、斜めに首を傾けて、呼びかけられた人の方を眺めた。その態度は矢張りどうしても普通の頭の人間らしく見えなかつた。その時、彼に向つて、中戸の方から挨拶をしたので、

「御挨拶しんかいな、」と母はもどかしさうに叫んだ。「此方へお出で、淺草の中戸丈助さんや。」

「……」兄は默つてのつそりと彼の傍にやつて來て、何か口の中で言ひながら、中戸に向つてお辭儀をした。然し彼はさういふお辭儀をすることとか、挨拶の言葉を言ふこととかは、その言葉が彼の癖の壓し潰されたやうな低い聲の爲に誰にも聞きとれないのだが、普通の人の持つてゐる仕方なり、或ひは用語なりと少しも變らなかつた。然し、彼にあつてはそれが又妙に調和しない感じを現して居た。

「人間はそれは片意地な程正直な男ですねけど、」と母は中戸に向つて說明した。「何しろ耳が遠い上に、人間が少し――少しやおまへん、大分ぼんやりしてるもんですよつてに、……」

然し有難いことに、中戸は大抵の人がさういふ人間に對する時にするやうに、少しも輕蔑するやうな樣子なしに、「今年幾つになりはりまんね、」と母と兄とを半分づゝ見ながら聞いた。

「來年四十になるんです、」と母が引取つて答へた。

「それで、これ迄ずつとその神戸の小阪はんとか言ふ家にゐやはりましたんか？」と中戸は聞いた。「ずつと獨身だんのか？」

「獨身も獨身でないも、こんな人のところへ誰が來てくれるもんだつかいな、それでも財産でもうんとありましたら何だすけど。二三年前に小阪の家が須磨の方へ引越しましたので、今は須磨の方に行つてるんです。私の家がなくなりました時からだすよつてに、この子が十六七の時分でしたやろ、それからずつともう二十年から居る譯なんです、」と言ひながら、母はふと、所在なささうに彼等の傍に兩手を膝に置いてぽつねんと坐つてゐる兄に氣がついたので、彼の耳の方へ口を近づけながら、「もういゝよつてに、彼方へ行き、」と言つた。

「そして、何してはつたんだす？」と中戸が聞いた。

「何をしてたつて、斯ういふ人間ですもの、何にも出來やしまへん。まあ、然し、さうして長い間ゐますよつてに、私たちの家と違つて大きな家だすけど、その家の勝手はいつとなしに分り過ぎる程分つてますやろしな、外に置いた者は大勢ゐますけど、銀行へ行く使とか、さういふ事にはこんな人間だけに彼方の家でも安心して任せますやろし、何處の親類は何町の何丁目とか、何月の何日はどういふ定つた仕事があるとか、さういふその家にだけの特別の用事は、家の奥さんが忘れてらしやる事まで覺えてもゐますやろし、知つてゐますやろから、今ではあの家では割合に重寶な人間になつてゐますんだす、まア、その外庭を掃くとか、犬や鷄の世話をするとかいふ仕事は、あんな男ですから、陰日向なしに働きますやろしね、さういふと面白い話がありまんね、といふのは彼處の家にお猿がゐるんですが、それが大變氣むづかし家で、あの大造でないと、外の者がどんなものを持つて行つても中々物を食べないんですつて、そして外の者には御主人でも誰でも、一寸からかつても怒る癖に、あの男にだけは懐いて、肩に上つて頭のふけを取つたりするんですつ

て、その外犬でも鷄でもみな、家中であの男には一番懐いてゐるんださうですが、そんな鳥獸と何ぼ仲がようても仕樣がおまへんわ。然し考へてやりますとあんな事をしてゝも、あの男にしても何一つこれといふ樂みがある譯やなし、可哀さうは可哀さうなもんだすけど、又考へて見すと、あゝいふ大きな家ならこそ、何ぼ親類の端になるとは言ひながら、ようあんな人間を長い間默つて置いてくれてゐるんですよ。」

「だけど、それは可哀さうやおまへんか？」と中戸は言つた。

「可哀さうは可哀さうだすけど、肝腎の人間があんなですよつてに、私も思案に餘ります。」――

そんな話があつてから、一週間ほど後のことだつた。その翌々日だかに、兄は豫定の通り須磨の小阪の家に歸つ行つたが、或晩、中戸丈助が再び私の母を訪問して來たのである。遠慮家の彼は長い間玄關に立つたまゝで、「あんまり來てお邪魔やろから、今日はこゝで失禮する。一寸話があつて來ましたんやが、……」と言つて、中々上つて來なかつた。それでも、やつと勸められてから、「そんなら、一寸上げて貰ほかな、」と言つて、奥の間に通つたが、そこでも又入口の隅の方に坐つてしまふと、幾ら勸めても、「いや、もうこゝで結構だす、一寸話して直に歸るから、」と腰を下ろしてしまつて、「と言ふのは、あんたのとこの兄さんの事でやがな、」と彼はその用事の話といふのを切り出した。「もう須磨へ歸りはんたんか？」

「えゝ、あの翌々日に歸りましたけど……」と母は流石に膝を乘り出した。

丈助が言ふには、自分のとこでは人手が足りなくて困つてゐる、殊に自分は今だに買出しや何かの事で家を始終空けるので、何にも仕事は出來なくてもいゝから、正直な人に一人來て貰ひたい、と言つて、一生そんな店番のやうな事をしてゐるのでは、本人にとつてつまらないだらうが、然しさうして店に坐つてゐるうちに商賣の事が自然に分つて來て

覺えられるだらうから、そしたら私の方から品物を貸したげる、そして何處かで店を持つて商賣の出來るやうにしたげる、それは實に樂な商賣で、現に電車の車掌をしてゐる人が三人も私の店へ三日に一度位づゝ品物を卸してくれと言つて來る、どうするのかと言ふと、電車の休の日に、家には店も何もないのだが、品物だけ擔いで、場末や、田舍やを廻るんだが、それが普通の店よりまあ二割方安いといふので、よく賣れるんださうだ、大抵月に五十圓位の利益があるといふ話だ。どうや、あんたのとこの兄さんも、いつ迄もそんな犬や猿やの番人をして居ても、末の見込がある譯やなし、私の家へ來て、一年もしたら私んとこから商賣の元手も貸したげる、そして品物を持つて廻らいでも、場末の家を一軒借る位何でもない、それに商賣も汚い商賣やない、吳服やから」と丈助は言ふのである。

斯ういふ丈助のことであるから、彼の言葉の通り聞いて決して間違ひのないことと見て差支へなかつた、彼は彼の店の人手の足りない事から思ひついたのでもあらうが、然しそれは私の兄のやうな者に心から同情して考へてくれたことに違ひなかつた。それを聞く私の母としても、彼女は早く夫に別れたのと、本人がそんな人並でない人間であつたのとで、氣にかゝりながらも四十歲の今日になる迄、そんな風に人の家に預けてあつたのだが、實際母の心として、恐らくその片輪の子の行末を一日として案じなかつた日はないだらう、そして彼の弟である私が放浪して居た時は時で、彼女は私に彼のことを賴めなかつたゞらうし、さて私がどうにか斯うにか一家を持つやうになればなるで、矢張りそんなに餘裕があるとも見えないものだから、親としても兄の世話をどうしてくれ斯うしてくれと遠慮なく賴めないので、矢張り默つて心を煩はしてゐたのに違ひなかつた。それに、兄のやうな人間は、面と向つてゐると、耳は遠いし起居振舞は間が拔けてゐるので、他人は尙更のこと、親としても嘆息をもつて眺められる外ないが、離れて考へると、その無類に正直なことや、犬や猿にも親しまれてゐるといふことなど、いゝ方面ばかりが想像されて、あんな男でも早や四十歲

である、それに全然讀み書きが出來ないといふ譯ではなし、數の勘定が出來ないといふ程ではなし、何とか仕込んで貰つて彼女自身後見になりそのうちしつかりした嫁でも貰つてやつたなら、せめて半人前位の商人になれないこともないだらう、と所謂親の慾目が考へるのである。彼女は目に喜びと望みの光を浮かべて、「どうぞ宜しくお願ひ申します、」と言つた。「丁度この三月はあの子等の父親の三十年祭になりますので、私は大阪まで行つて來ようと思つてます。その時須磨へ行つて、小阪の家へも話をし、あの子にも話をして、是非そんな風にお願ひすることにします。」

だが、それから中一日おいて、又もや中戸丈助が姿を現はした。遠慮家の彼は、これ迄は一年に二度以上來たことがないのに、そんなに屢々尋ねることに餘程氣を兼ねたと見えて、その時は勝手口の磨硝子の嵌まつた戸を、而も彼の四角な顔が辛うじて這入るだけの幅に開けて、そこで夕飯後の仕舞事をしてゐた女中を驚かした。が、幸ひにも、その時は私も私の妻もそれ〳〵何かの用事で外出してゐたので、母が出て來て、

「まあ、どうしてそんな所から……？」と言つた。「どうぞ表の方へ廻つとくなはれ。今みんな留守で、私一人ですよつてに、そんなに氣兼せずに上つとくなはれ。……えゝ、そこからでも宜しおますけれど、どうぞ、どうぞ。」

「此間はどうも失禮しました、」と母は彼を漸くのことで奥の間に案内して、「一度此方から伺はんならんと思うてましたのに、失禮しました、此間は又いろ〳〵どうも……」

「いゝえ……」と言つて、中戸は極り惡さうに頭を下げたが、その日はいつもより尚一層もぢ〳〵して居て、何か大切な話がありさうな樣子なのに、その方に一寸も及ばないで、寒さの激しいことだの、道の惡いことだの、そんな取り止めのない話題ばかりを、而も上の空のやうな調子で話してゐたが、やつとしてから、如何にも言ひにくさうに、

「私、今日妙な相談に來たんやがな、」と切り出した。「私ね、此間來た時は決してそんな事思うてたんやないで、あれか

ら家へ歸る途でふッと思ひついたんだすが、考へて見ると、あんな事を勸めたんが、何や斯うその下心やつたやうに思はれへんかとそれが氣になつて氣になつて、あの時も直に引返してそい事を言はうかと思うた位だす、思ひ直して昨日も亦半分家を出かけたんやが、矢張り二の足を踏んだ樣な譯で、然し今日は思ひ切つて出かけて來ましたんだす。」
「何だすね、一體そんなに言ひにくい事なんて？」と母が問いた。「あんた、いつもの遠慮から何でもない事をそんなに言ひにくがつてなはるのやおまへんか？」
「思ひ切つて言ひますわ、」と丈助は然し矢張り言ひにくさうにして、「私んとこのお紋な、あいつが歸つて來てよるといふ話を此間しましたやろ、あいつはあんな子供まで生みよつて、おまけに又一度緣づいて、今あゝして戻つてよるんやが、そんなものを、惡いけど、つまりそれが相談なんだすが、あいつをあんたのとこの兄さんが貰うてくれんやろか？……」斯う言つて、丈助はその持前の赤い顏を文字通り火のやうに眞赤にした。
「何だんね、そんな事だつかいな、」と母は笑ひながら言つたが、流石に即答し兼ねたと見えた。「然し御承知の通り此方もあんな足りない人間ですよにてなア。」
「足らんのは私んとこも同じこつたす、」と丈助は言つた。「それにあんたのとこは初めてやけど、私んとこは二度も三度も出戻り見たいなもんや。その代り、その代り、失禮やけど、あいつの食ひ扶持は持たしてやるつもりだす。……」
「それや、あんな子でも一生一人で置いてやるのは親の身として可哀さうだとは思うてますんだすよつてに、私は結構やと思ひますけど、それはまあ、いづれあの子がお家で御厄介になることになつてから、その上で相談することにしやうぢやありませんか？」と母は言つた。
彼女はその翌日私にその話をして、「あんな人たちが夫婦になつたら、どんな事になるだらう、それで若し子が生れた

ら、それこそ何方に似方ても仕様がないがな。」と言つて笑つた。然し彼女は心のうちで、長年の彼女の心の中の蟠りが思ひがけなく雲切れがして來たやうな嬉しさを、包み切れない樣子に見えた、彼女の亡夫が、そして私たちの死んだ父が、墓になつてから三十年目の紀念に、彼の殘された一族に喜びを吹き送つて來たとも思ひ做したであらう。「どうせ二人とも、あつてもなくてもいゝ人たちなんだから、子が生れぬやうな仕方もあるだらう、當人同志がいゝと言ふなら、それもえゝやないか。」と彼女は冗談めかしい口調で笑ひながら言つたが、それは全然の出任せとも見えなかつた。

さうして、彼女は先に言つた三月の半の或晩、彼女がこの世で殘されてゐる唯一つの仕事を仕上げる喜びを胸に持つて、大阪に向つて出發したのである。

彼女が大阪から歸つて來たのは、それから十日ほど後のことであつた。希望といふものは不思議なもので、それ以來彼女の年寄つた顔に何處となく明るみが射してゐるやうに見えた。彼女が言ふには「小阪の家でもそれはいゝだらう、事に依つたら自分の方でも多少の補助をしてもいゝと言つてゐた。大造にも話したら、十分得心してゐたやうだつた。だけどお紋さんの話は默つておいたよ。」そして彼女は滿足さうに笑つた。

「それで、いつから來ることになつてるんです？」と私が聞くと、

「いつからでも、と小阪の家でも、さういふあの人の爲になる事なら、いつでもそちらの都合のいゝ時に行つてもいゝと言つてくれてるの。ところが、大造が、あの男も妙な男やで、自分が急にゐなくなると、あとの人が困るかも知れないから、そんな不便のないやうにして置かねばならんし、又荷物を始末したり、犬や猿を外の人に馴らしてやつたり、いろ／＼用事があるから、それを濟ましてからにしたいと言うてるの。」

「だけど又此方へ來たら、」と母は珍しく多辯になつて言ひつゞけた「直に淺草の家へ行つてしまふんだらうから、大し

た世話は掛らないやろけど、あの男はあんな規丁面な人間やよつて、洗濯物とか、仕立替えとか、随分手が掛つてうるさい事だらうな。それに、向うへ行つてしまうたら、幾ら近いとこでも、さう〳〵歸つて來る譯に行かんだらうから、時々此方から見廻りに行つてやらんならんし、それはまあ私が遊んでるんだから行つてやるとして、まるで學校行の子供を他所へ預けるやうなもんだわね。」

が、さう言ひながら、彼女はその手數の掛る日の一日も早く來ることを、樂んで待つてゐるやうな口吻に見受けられた。だが、彼女はそれを、自分一人の幸福に醉うものが餘りその自分の思ひを露骨に現はすことを、他の人たちの手前憚るものゝやうに、努めて私たちの前では抑えるやうにしてゐる風であつた。然し、それから一週間しても、又一週間しても、須磨の兄の方からは、例に依つて私の妻宛に手紙を寄遣しはしたが、そして思ひ出したやうに、着物の類や、手廻りの品々を鐵道便に托して送つて來たりはしたが、彼自身いつ來るといふはつきりした事は少しも言つて寄遣さなかつた。母はそれ等の着物の類や、手廻りの品々やの包を自分で開きながら、「妙な男やな、斯うして着物にちやんと折目のついてあるところを見ると、一々叮嚀に疊んでゐるに違ひないけど、一寸揮發油で襟を拭く位の事をすればいゝのに、それには氣がつかないと見えて、どうや、この襟垢は？」とか、「をかしな男やで、まるで子供見たいな人間やな、これ、この箱の中には繪葉書ばつかりが詰まつてゐるんやで、何百枚あるやろ。然し感心に規丁面な男だけに、これ、一寸外の者の手が附けられない程、ぎつしりと隙間なしに、ようこんなに上手に詰められたもんやな。」とか言つては、何か彼か彼から美點を認めようとしてゐるやうに見えた。

「私、思ふんですが、」と或晩母が寢てから、私の妻が私に言ふには、「兄さんは今度の事に餘り氣が進んで入らつしやらないんぢやないでせうか！」

「まあ、俺にはその邊の事はちつとも分らないが、お前のところへは何かそんなやうな事でも言つて來てるのかい？」

「いゝえ、別にさうとはつきり書いてはありませんけれど、私、何となくそんな氣がしますの。それにね、以前はあなたも御承知の通り、私のとこへは用があつてもなくても大抵一日おきか二日おき位には、終ひには母さんが怒りなすつた位に、手紙を下すつたでせう。ですのに、肝腎のこの頃は、私が母さんに催促されて三度も出した手紙にやつと一度ぐらゐ返事があるかないかで、私、そんな事も何か斯う、どうつて事もありませんが、何かそこにあるんぢやないかと思ふんです。」

「兎に角、俺にはちつとも見當がつかないが、」と私は言つた。「唯、俺にはあゝいふ人が、母さんが望んでゐるやうに、そんな商賣人の店になぞ坐つてゐられるかどうかと疑はれてならないんだ。それを今言ふと、母さんががつかりしてしまふだらうと思ふから、俺はまあ行くところ迄行かせるより仕様がないと思つてるんだがね。第一、同じ耳が遠いのでも、母さんのは年を取つての何だが、兄貴のは病氣の爲にあゝなつたんで、見たところでは何方もさう變りはないやうだが、……兎に角商人には向きさうにないね。」

「然しね、母さんはアッカスチコンとかいふ、あの耳の器械がありますね、あれを買つて上げると言つてらつしやいましたよ、」と妻は言つた。

「アッカスチコンをね、」と私は言つた。が、その次には言葉の代りに、三十年前に死んだ私たちの父は流石に男の事だつたから、兄が未だ三歳か四歳位の頃は、何といつても親の欲目で、「こいつは、こいつは？」と首傾けながらも、心の中で多少の希望をつないでゐたらしかつたが、やがて六歳七歳になつた頃には彼は彼の前途を見通して、全くの失望を感じてゐたらしかつたといふ事を、誰からとなく私は聞いてゐる、それに反して母は、あゝ彼女は女だから、そんなに

年をとりながらも、今だに彼に何か彼か期待をかけようとしてゐるのだ、と考へて氣の毒になつた。そこで、「まあその話はこの邊で止めておかう。」と私は妻に言つた。

そして半月經ち一月過ぎた。然し、兄は中々姿を見せなかつた。母はだん／＼焦れ出して、初めのうちこそ私たちの手前多少遠慮して辛抱してゐたやうだつたが、終には二日おき三日おき位に私の妻に言ひつけては、その度毎に言葉を强めて、此方でこんなに心配してゐるのに、其方はどういふつもりでゐるのか、歸つて來ないつもりか、又その間にどんな差支へや用事が出來たにしても、お前のこれ迄の性質として、何故もつと度々言ひ譯の手紙でも寄遣さないのだ？等と彼女の名に於いて書かしてやつた。すると、直であつたり、或ひは二三日間を置いたりしての彼からの返事に、別れの挨拶に大阪の親類を廻つて來たとか、二日程頭痛がして寢てゐたとか、もう大抵何日位したら行くつもりだとか、愈々何日に立つつもりだとか、そして手紙で返事を寄遣さぬ時は、例に依つて持物を鐵道便にして送つて來たりした、或時は彼が愛讀してゐるらしい小說本を一纏めにして、木の箱に入れてあつたり、又別の時は座蒲團と下駄とを一つにして菰包みにしてあつたり、それは考へやうに依ると、そんな風に荷物を幾つにも分けて、幾日も掛つて送るだけ、それだけ日を延ばしてゐるやうにも思はれた。

が、到頭五月に這入つて間もなくの或晩、電報が來て、その翌朝彼は廣い額に汗を一ぱいかきながら、私の家の玄關に立つた。彼のやうな人間は、離れて考へる時、人は彼が正直者であることとか、鳥や獸に親しまれてゐることとか、規丁面であることとか、さういふいゝ方面の事ばかり思ひ浮かべて、好感を抱くのが常である。が、或種の人間に對しては、離れて考へると、その人が狡い男であるとか、お世辭者であるとか、ともすると惡い方ばかりを思ひ出す癖に、面と向ふと、つい相手に籠絡されるのか、決して惡い感じを持たせられないといふ例の反對に、私の兄のやうな人間は、

面と向うと、その曇り硝子のやうな光を放つてゐる目といひ、別に開いてゐる譯ではないが、何處かしまりのない口といひ、何彼と悪い印象を與へるものである。多分、私の母にしても、彼を毎日見てゐたなら、今度のやうな、彼を中戸の家に商賣を見習ひにやるなどといふ事は斷念したに違ひない。彼女は彼を見ると、早速、年の行かぬ子供にでも言ふやうに、彼の耳の傍に口を持つて行つて、

「お前、何をしてたんや、今頃まで？」と攻めた。「淺草の中戸さんの方へは早くから頼んであつたので、未だ來ないのか、未だ來ないのか、と言つて始終催促されて、此方でどんなに氣を揉んだか知れないぢやないか？」

「へえ、へえ、」と彼はその持前の鈍い聲で唯返事するだけであつた。

「人のことぢやない、お前のことぢやないか、お前、一體今年幾つになるんや？」と母は年寄りらしくくど／＼と言ひつゞけた。

彼はそれに對して、唯「へえ、へえ、」と分つてゐるのか、聞えてゐるのか、判斷に苦しむやうな返事をしてゐた。そして、たまに少し纒まつたことを言はうとする時には、何か非常に苦しさうに、二三度も唾を呑み込んで、咽喉の奥から絞り出すやうな聲で、「そんなに言つても、それやいろ／＼用事がありましたり、又身體が悪かつたりしたものですから……」と切なさうな顏をして言つた。

「それぢやあ、そのやうに何故手紙を寄遣さないの？」と母に詰られると、彼は忽ち詰まつてしまつて、相變らず、「へえ、へえ、」と言つてゐた。然し、彼は、彼だつて決して彼自身の意見を持つてゐない譯ではないので、昔、『書生部屋』といふ彼の小説に書いたやうに、彼も亦彼並の意見や不平やを持つてゐるのである。が、彼は生れてから多分人に叱られる外、賞められたといふ經驗を持たなかつたらうし、又彼の意見を打消された事の外、それが通つた事など殆どな

かつたに違ひない、だから、彼のこの世の中の字引には自信といふ言葉がなかつたに違ひないのである。多分、彼は鳥とか獸とかを除いて、人間といふ人間には絕對に引け目を感じてゐたと言つても、私の言ひ過ぎではないだらう。然し、彼は或時私の家の十七歳になる女中に、「私は淺草へ行くのは餘り氣が向かないんだよ、氣が向かないんだが……然し、誰にも言つちやいけないよ。」と言つたさうである。その事を女中が私の妻に報告した、そして妻が私に報告した、その時、彼は言葉をつゞけて、「私は一體商賣なんて好かないんだよ、商賣人は嫌ひだよ、」と附け加へたさうである。

私はその話を妻から聞くと、忽ち二十年前に彼が神戸の楠公神社の傍の足袋屋の店先に坐つてゐた姿を思ひ出した。そして、彼のやうな、そんな人並でない頭腦の持主でも、さういふ好き嫌ひの感情は無論あらねばならぬといふことを、今更らしく考へた、そして彼を氣の毒に思つた。が、妻が言ふには、「今、あんなに一生懸命に母さんがなつて入らつしやるのに、そんな事を母さんに話したらどんなに怒りなさるか、又どんなにがつかりなさるか、それを思ふと、私、氣の毒でこの話は母さんに出來ません。あなたからその內折を見て、うまく話して下さい、」と言つた。

だが、私には又忙しい仕事もあれば、考へ事もあつて、さういふ事に頭を煩はしてゐる暇が容易にないやうな氣がした、その內にも母は淺草の中戸の家へ、或時は一人で、又別の時には兄を連れて、彼女の不幸な子の前途を幾重にも賴む心からであらう、屢々出かけて行つた。彼女は然し、初めてこの話が持上つた時分の、希望に輝いた顏色に比べて、斯うして彼が愈々須磨を引上げて來てからといふものは、急にその顏色が暗くなつたやうに見えた。彼女は彼が愈よ此方に歸つて來ると定つてから、いろ〳〵と事を設けてその日を延ばしてゐた頃は、「あんな男だから、それに何と言つても、二十年から住んでゐたところを別れるのだから、それが辛うて一日延ばしに延ばしてゐるのであらう、その代り又

中戸さんの家へ行つて、少し馴れたら、今度は中戸さんの家を出るのが厭になるといふやうな性分に違ひない、」などと自分と自分の氣を安める言葉を言つてゐたが、實際はその頃から彼女の心の隅で、彼は今度のことに氣が進まないのぢやないかな、然し、あの時自分が彼に話をした時、彼は確に承知してゐたんだが、考へて見ると、あの返事は厭々のそれだつたのかな、などと不安に思ひ出してゐたのに違ひなかつた、その證據に、一旦明るくなつたやうに見えた彼女の顏色に、暗い影がさし初めたのはその時分からの事だつたから。

彼女はふと思ひついて、彼を奮勵させる或事を思ひついた、それは例の丈助の娘のお紋との結婚談のことであつた。彼女はそこで思ひ切つて、私や私の妻やが傍にゐなかつた或時、その事を彼に話したところが、それは豫想した程ではなかつたが、多少彼の心を引立てることに役立つたやうだつた、彼はそれ迄にお紋を一度母と中戸の家を訪ねた時、彼女が茶を持つて來たことがあつたが、その時見たことがあつた、が、彼のやうな人でも、矢張りお紋が彼の所謂人並の者に見えなかつたと見えて、「あの少しぽーッとしたやうな女の人ですか？」とその時母に聞いた。

この彼の言葉は、それが恰も彼その人がぽーッとした人間ではなくなつたかのやうに、母を喜ばしたものである。で、彼女は私たちとの約束にも拘らず、と言ふのは、ずつと以前に大阪の方の親類の者が彼に結婚談を持ちかけた事があつたが、それが結局ぐづ／＼に立ち消えになつた時に、彼がいつ迄もその事を心に止めてゐて、その後長い間あの話はどうなつたかと攻めて人々を困らしたことがあつた、それが駄目になつたと知つた當分の間は、氣が變になりはしないかと人々に案じられたやうな事件があつたので、今度のお紋のことに就いても、愈よ話が定る迄は彼に打明けないでおかうといふ私たちの約束だつたのだ、それを母は破つたことをも忘れて、「ね、あんな男が見ても、矢張りさう見えると見えて、お紋さんの事をぽーッとしてゐる人かなんて、言ふんだよ、自分の事を棚に上げてね。さあ、何方が馬鹿や

ろ、大造の方でさう言ふとこを見ると、大造の方が少しましなのやろかな、」と彼女は嬉しさうに言ふのだつた。

だが、何と言つても、その結婚談に就いて母が兄に話してからは、彼はこれ迄よりも幾分か淺草行に勢がついたやうに見えた。母は私に氣の毒さうに、「お前にばかり心配さして濟まないが、大造が中戸さんに行くに就いて、あのアカ何とかいふ耳の聞える器械を買つてやりたいと思ふんだが、どうだらう、」と言つた時に、私は「月末までに何とかして買ひませう、」と答へておいたが、彼女はそのアツカスチコンさへ買つてやれば、兄は完全に耳が聞えるやうになつて、さうしたら幾分見直した人間になるかも知れないと望みをかけてゐたやうだつた。さう言へば、私にしても、その器械に依つて、耳が聞えるやうになれば、幾分かいゝだらう位に思つてゐた。が、私たちのそんな心遣ひを全然他所にして、兄は例の奥の間の隣の二疊の部屋に這入つては、小說本を讀んでゐるか、居睡りをしてゐるか、さうでない時は以前私のものであつた鳥打帽を被つて散歩に出かけた。彼は身體の外の部分が弱い割合に足が達者で、大抵電車に乘らないで、今日は芝公園から泉岳寺の方へ行つて來たとか、今日は靑山の乃木將軍の邸跡から明治神宮の方へ廻つたとか言つては、妻や女中たちを驚かしてゐた。そして、彼自身の身の上に就いて、母や弟やがどんなに心配してゐるかと言ふことは、十歲の少年かなぞのやうに頭の中にないやうに見えた。

或時、私が、彼が須磨にゐる時分に、彼から注文されて貸した創作類や飜譯類の本が、いつの時でも彼から返つて來たのを見ると、彼の規丁面な性質に似氣なく、殆ど一頁毎に折目が附いてゐたり、手垢で汚れてゐたりするのを攻めたことがあつたが、此頃になつて注意してゐると、彼はその一頁を讀むのに普通の人の五倍もの時間をかける上に、何度も何度も讀み返すらしいのである、それはさうしなければ多分彼の腦力がそれ等の本を讀み得ないのであらうが、又そんなに迄してそれ等の本に讀み耽つてゐると言ふ事は、私に一種の驚きを持つて來た。

が、何は兎もあれ、彼の存在は私にとつても、母にとつても又私の妻にとつても、私たちの心に、それ〲の内容に違ひはあつたが、一種の暗い影を投じてゐることは事實であつた。私は屢々夜更かしをして、一家の者たちがみんな寢てしまつてからも、机に向つて本を讀んだり、物を書いたりすることがある。殊にその頃は、私の不幸な兄の爲に、いつも月末に妻に渡す金の外に、アツカスチコンを求めるだけのものを餘分に得なければならなかつたので、毎晩二時頃まで起きてゐた。すると、階下の方で突然、おや、未だ誰か起きてゐたのか、と驚かれるやうな話聲が一晩のうちに何度となく聞えるのである。耳をすますと、それは男の、而も兄の聲であつた。然し、初めてそれを聞いた晩などは、どうしても彼とは思はれないので、そつと階下に下りて行つた。そこには母と女中と、そして彼とがそれ〲別々の部屋で寢てゐるのであるが、即ち男の聲は彼の外に立てる者がない譯だつたから、私はそつと彼の寢てゐる二疊の部屋の障子の扉を開けて見た。然し彼はすつかり眠り入つてゐるやうであつた。廣い額にしつとりと汗をかいて、兩手を蒲團の外に出して、それは四十歳ではあるが、その寢顏と雖も決して四十歳の人の智慮を持つてゐないことを、彼を知らない人が見ても、十分想像せられるやうなそれであつた。そしてその枕元には、私自身それを藏してゐる覺えがないから、多分彼自身で買ひ求めたのであらう、「ナナ」の飜譯本が半開きになつて、その上に彼の一本の手が載つて、置かれてあつた。彼れは生れつき色が餘り白い方でなかつた上に、何でも二十三四歳の時、小阪の家で何か催し物があつて、書生たちと花火を上げる準備をしたことがあつたが、その時彼は書生たちにうまく欺されて、一番危險な煙硝を調合する役目をしたらしいのである、それが爆發して彼は顏一面に火傷を負つた爲に、以來少し氣味が惡い程黑光りのした顏の色になつた。その顏が、私が覗いた時、確かに寢てゐたのである。私は、だから、今聞いた聲は誰のだつたらう、と少し氣味惡くなつたが、どうせ長屋建のやうな私の近所の家々のことであるから、それは多分夜更かしの癖のある隣家の聲

だつたのだらうと思ひ直して、階段を上りかけた。ところが、その途端に、「さうしよう、さうしよう。どうも、有難う。」といふ、到底寢言とは思へないはつきりした言葉が、今見捨てた二疊の部屋から、兄の聲として起つた。私は吃驚して、階段に足をかけたまゝ立縮んだ。聲はそのまゝで絶えてしまつたが、一分間程後に再び「はゝゝゝゝ」といふ實に快活な、然し、確に兄のに違ひない笑ひ聲が起つて、そして又それ切り元の靜けさに返つたのである。

　私は近頃これ程驚かされたことはなかつた。何故と言つて、兄の不斷の聲は前にも度々言つた通り、變に空虛で、低くて、何處か遠くの方から響かしてゐるのかと思へるやうなそれであつた。それは多分、幼ない時に耳を患つて以來、彼はいつとなくさういふ聲になつてしまつたもので、つまり耳の勘の惡い人の音曲が所謂調子外れであるやうに、耳全體を少年の頃に患つて病氣になつてしまつた彼が、さういふ壓し潰されたやうな聲しか出せないのは、無理からぬことなのであらう。それが、私を驚かしたといふのは、寢言の彼の言葉は、それが多分彼の本來の聲なのであらうか、實にはつきりした、少しの調子狂ひもない、それでゐて確かに彼の聲に違ひないところの聲であることだつた。して見ると、彼の身體の中の聲の出る部分には少しも異狀はないのであらうが、耳の病氣の爲に起きて意識の働いてゐる時には、彼は却つてその本來の聲を出すすべを知らないと見えるのである。

　そして、その翌晩も、又次の晩も、同じことが起つた。或晩、私の妻も未だ目を醒ましてゐた時、その聲を聞き咎めて、「あれは兄さんの寢言でせうか？……あゝ、變なのね、兄さんは寢言の方が不斷の聲よりずつとはつきりしてるぢやありませんか、どういふのでせう？」と彼女は私に問いた。

「えゝ、直に歸ります。あなた、それはいけませんよ。」と階下から階上まではつきり響く兄の寢言が再び起つた。

「ね、どういふのでせう、はつきりした聲ぢやありませんか、氣味が惡いやうですね、どういふんでせう?」と妻は私に重ねて聞くのである。

「さあ、どういふのかね、」と私は言つたまゝ目を閉ぢた。

「毎晩言つてらつしやるやうですね、」と彼女も毎晩默つて聞いてゐたと見えて、つゞけて斯う言つた。「矢張り何處か頭に病氣があるんでせうね。なほらないものでせうか?」

「さあね、」と私はわざとうるささうに答へた。「惡いんだらう。耳も惡いし、兎に角、常々言ふ通り、首から上がすつかり惡いんだよ。」

「淺草へ入らしつても、向うの方が吃驚なさるでせうね。一度念の爲にお醫者樣に見せたらどうでせう?」

「うむ、うむ、うむ、」と私はその邊で眠り入つた振りを裝つた。

「おや、もうお休みになつたんですか、」と彼女はつゞけた。「ね、あなた、お醫者樣に一度見せたらどうでせう?」

「明日あたり金が出來るだらうから、醫者に賴んで、醫者の手からアツカスチコンを買つてもらふ事にしよう、」と私は別の事を言つた。

そして、その翌日だつたか、私が前以て友達の醫者の手から、アツカスチコンの取寄せ方を賴んであつたのが、愈々屆いて來たのである。

そこで、母と私と妻とが好奇と期待の目を輝かしながら、その不思議な器械を圍んで坐つた。私はその說明書を讀み讀み先づ電池を懷中に入れて、その一端に電線に依つて通じてゐるところの、丁度電話の聽取器と同じ恰好の、無論同じ構造のものに違ひないそれを耳に當てゝ、もう一つ矢張り電線に依つて電池に通じてゐる、六角形の小さな盆のやう

な形のもの（それが他人の聲を受けるものに違ひないのである、）を、胸の前に勳章のやうに下げて、「さあ、小さい聲で話して下さい、」と言つた。

が、先づそれのいけないのは、電流を通じさせると共に、聽取器の中で忽ち電話を聞いてゐる時と同じやうな、ゴー〳〵といふ不快な音が鳴り出すことであつた。

「どうです、よく聞えますか？」と眞正面に坐つてゐる母が心配さうに聞いた。その聲が成る程びり〳〵した響で聞えるのだが、然しさしてよく聞えるとは思へない上に、それを五分も掛けてゐようものなら、頭の中ががん〳〵して來さうな不快さを伴ふのである。

「聞えるのは多少聞えるやうですがね、」と私は曖昧な聲で答へた。「然し、外してゐても聞えさうですよ、おい、お前、」と私はそこで、横手の方に坐つてゐた妻に向つて、「俺が斯うして片方の耳を閉いで聞いてゐるから、お前そこから何か小さい聲で言つて見給へ。」

「……」と妻は何か言つたやうだが、それは聞えなかつた。そこで、私は半體を彼女の方に向けて、

「もう一遍言つて見給へ、」と言ふと、今度は、

「具合は餘りよくありませんか？」と聞えた。それはつまり、例の胸に掛けてゐる受話器が、話手の方に正面を向いた時と、向かぬ時との相違らしかつた、即ち、多分側面からの聲には殆ど功能がないやうに思はれた。

それから、母が試して見たり、妻が掛けて見たりしたが、誰の顔も餘り滿足さうな色を浮べなかつた。然し母だけは、耳の遠い母だけは「けど、矢張り聞えることは聞えるよ。」と肯定してゐた、が、その肯定の仕方にどうも無理があるやうだつた。やがて、彼女は隣の二疊の間に相變らず小説本を讀んでゐたところの、此際最も肝腎の人物である兄を

呼んで來た。そして、母と妻とで、小供にするやうに、電池を懐中に入れる事から、胸に受話器を垂れることなどの世話を燒いて、漸くそれを彼に裝はすと、

「さあ、此方をお向き?」と母は大聲で叫んだ

「へえ、」と兄は例の鈍い聲で答へて、いつも人の聲を聞きとる時の癖の、身體を前に曲げ加減にして、おづ〳〵した目付で母の方を見てゐた。

「どうや、聞えるか?」と母は低い聲で言つた。

「へえ、へえ、」と彼は答へた。が、その「へえ、」は彼が聞えたので「へえ」と答へたのか、彼の習慣の「へえ」であるのか、分らなかつた。

「へえぢや分らないぢやありませんか?」と私が傍から彼の器械をかけてない方の耳元で叫んだ。

「聞えるなら聞えるとはつきり返事しんかいな、」と母も大きな聲で言つた。

「へえ、」と兄は答へた。

「よく聞えるか?」と母は低い聲で聞いた。

「へえ、へえ、」と又兄は答へた。

「母さん、何か別のお話をなすつたら如何です?」と、そこで妻がもどかしさうに注意した。

「お前、いつから淺草へ行くつもりや?」と母は低い聲で言つた。

「へえ、へえ、」と兄は答へた。

「お前、いつから中戸さんのところへ行くの?」と母は稍々大きな聲で聞いた。

「へえ、へえ、」と兄は答へた。

「お前、聞えるのか聞えないのか、分らないぢやないか?」と母は焦れつたさうな大聲で叫んだ。

「へえ、聞えることは聞えます、」と兄は曖昧な答をした。

然し、それから母と私と妻とが、代り代りに話手になつたり、試し手になつたりしてやつて見たが、少しもはつきりした要領が摑めなかつた。何にしても、それは餘り完全なものでない事は確だつた。が、母は、それ一つが近頃の彼女の希望であつたものなので、努めてそれの効果を認めようとして、倘いろ〳〵と兄を試してゐた。その間に私と妻とは低い聲で、アツカズチコンを掛けてゐる兄にも、同じやうに耳の遠い母にも聞えない小聲で、次の様な會話を交した。

「どうも矢張り駄目なやうだな、それや幾分か低い聲が高くは聞えるよ、然し何にしても兄貴のやうに斯う勘が惡くては駄目だね。その證據に同じ聲で試しても、母さんには分つても、兄貴には分らないんだからね。」

「さうのやうですね。」

「だから、母さんには多少役に立つだらうが、兄貴には全然駄目らしいよ。」

「私もどうもさう思ひます。」

その時、母は器械を兄と向ひ合つてゐる膝と膝との間に置いて、彼の耳の傍に口を近づけながら、

「お前、どうや、どう思ふ?」と子供に言ふやうに尋ねてゐた。「それをはつきり言はないと、安いものなら何だが、百圓からするものなんだから、役に立たないなら立たないで、今のうちに返してしまふから、はつきり返事しんかいな。」

「へえ、へえ、」と兄は同じ返事をしてゐた。

「返さなくてもいゝんですよ、」と私は傍から母に言つた。「兄貴に役に立たなくても、あなたに又使へるんですから。」

「それはさうだが……」と母は然し如何にも殘念さうに言つた。

それが五月の末のことであつた。それから二三日後の、六月二日といふ日に、兄は母に送られて、アツカスチコンなしに到頭淺草の中戸丈助の家へと出發したのである。

その時分、私は少し仕事に疲れた後だつたので、次の仕事に掛る迄の二三日を休養するつもりで、毎日ほど友達を尋ねたり、散歩に出たりして、殆ど家に居ることは稀であつた。或晩、それは兄が淺草へ行つた翌日だつたが、その通り遲く家に歸つて來て、十二時頃寢床に這入らうとした時、思ひがけなく、階下から例の兄の外のものではないところの、大きな寢言の聲が聞えて來たので吃驚した。

「あ、お話するのを忘れてゐましたが、」とその時妻が言ふには、「今日、夕方兄さんが本を取りにと言つて歸つてらつしやいました。そして、向うのお家へは明日歸ると言つて來たからと言つて、お泊りになつて入らつしやいます。母さんが大變お叱りになりましてね、家が近いからそんな事を言うて歸つて來られるんだが、遠かつたらどうするんだ、それに、病氣でもある事か、商賣人になつてそんな本を取りに來るなんて、本なんか持つて行つちやいけないと仰言つてね、直お歸りと大變お叱りになつたんですが、兎に角、今夜だけお泊りになつて、明日の朝早くお歸りなさるやうに、と私がお話したんです。」

「……」

「兄さん、何だか淺草のお家がお厭のやうなんですね。」

「ふむ。」……

そして、その翌日朝早く彼は母に攻められて、淺草の家へ歸つて行つたが、それから又四五日してからの事だつた。

或日の午後、中戸の家から、私のとこへ取次いでくれる家へ電話が掛つて來て、電話口に女中が出たところが、「奥さんに、」と言つて來た。

「あゝ、又大造のことやろ、」と母がそれを聞いて嘆息してゐた。

果して、妻が電話から歸つて來ての話に、それは矢張り兄のことであつた、彼は今朝から頭が痛いと言つて、つい今し方まで寢てゐたが、起きて來て言ふのに、身體の具合が惡いから家に歸らして欲しいとのことなので、そんなに大してゞなければ、何も遠慮することは入らないから、寢てゐたらいゝだらうとみんなして止めたのであるが、どうしても歸ると言つて、聞かずに歸つて行つた。「もう間もなくそちらへお歸りになる時分でせう、」とそこで中戸の妻が言ふのである。「何しろ初めてゞ、馴れない仕事だと思ふものですから、餘りむつかしいのでない、メリンスの端切をそろへる仕事をやつてもらつてゐるんですが、どうもそれがお厭らしいんです。……」と中戸の妻がつゞいて言ふところに依ると、彼は中戸の家の近頃手傳ひに來てゐる男に、メリンスの切を選り分けながら、自分はこんな屑屋のやうな仕事は厭だ、こんな事を一週間もしてゐると病氣になる、とこぼして言つたさうである。が、そこ迄は本當か或ひは中戸の妻の作り事か分らないが、兎に角、彼はどうしてもその商賣が厭であるらしいのだ。「私の方では折角さうして志を立てゝお出でになつたんですから、本人さへお望みならいつでも來ていたゞいて結構ですが、どうも本人さんが辛抱が出來さうにないやうに見えますが……兎に角、今そちらへお歸りになるでせうから、そしたらお母樣ともよく御相談下すつて、本人の考も聞いて見て下さい、私の方は來て貰つてる分にはちつともかまはないんですけど……」といふ話であつた。

妻が歸つて來て、その話の報告を終つて間もなく、兄が片手に小さな風呂敷包を持つて、その額にびつしより汗をかきながら歸つて來た、見ると、その兩方の顳顬に大きな頭痛膏を貼つてゐた。彼は玄關を通つて、奥の間にのつそりした

足取で這入つて來ると、そこに母と私の妻の姿を認めたので、隅の方にしよんぼりと坐つて、例の微かな、鈍い聲で、「あの、身體の具合が惡いもんですから、……」と言つた。無論、その言葉は稍々離れたところにゐる母には聞えなかつた。私はその時、二階での仕事に疲れて、下に下りてゐて緣側へ蹲んで、庭の楓の木を見ながら口笛を吹いてゐたが、わざと後を振り向かずに、妻にだけ聞える聲で、

「二疊へ寢床を敷いて、直に休まして上げる方がいゝだらう、直に、」と命じた。

だから、その時は母は兄に何にも叱りの言葉らしい言葉を言はなかつた。彼女は自分の今度の計畫がすつかり絕望であるのを悲む心で一ぱいになつてゐたのであらう。暫くすると、「私も今朝から少し頭痛がするんだが、何だか熱も少しあるやうだから、夕方まで一寸寢て見よう、次手に私の寢床も敷いて下さいな、」と言つた。

無論、母の病氣も、兄の病氣も、それ等が共に本當の病氣であつたとしたところが、大したものではなかつたので、その夕方には二人とも起きて夕飯の膳に着いた。その時私も珍しくみんなと同じ膳に着いた、不斷はみんなより後か先かに、私は一人で女中に二階まで膳を運んでもらふのが例だつたが、その時はわざとさうして、而も出來るだけ大分騷つてゐるらしく見える家の中の空氣を快活にする爲に、一所懸命に四方山の話などをした、私がそんな風に快活に口をきくのは珍しい事なので、母もそれに氣をまぎらされたのか、割合に快活だつた。それにはもつとも、長い間の寡婦生活を送つた經驗からの、女には珍しいあきらめのいゝ彼女の氣質が預かつて十分力があつたに違ひない。

その晚、兄を早く二疊の間に寢かしてしまつて、母は私の妻に、「あんた、面倒やろけど、あんたから明日でも大造によく聞いて見て頂戴ね。私が言ふと、何かなしに恐がつてしまうて、言ひたい事も、思つてる事も言へないやうだすよつてに、あんたからよう聞いて見てやつとくなはれ、何ぼ此方が一所懸命に力を入れても、どうしても厭といふものを

無理にさしても仕様がないからね……」

で、その翌日、詫び言を言ひに、淺草の中戸の家へ出かけて行つた留守の間に、私の妻が私の四十歳の兄を、まるで少年へのやうに宥めたり賺したりして問答した結果は次のやうであつた。

「兄さん、あなたはどうしても中戸さんの御商賣をなさるのはお厭ですか?」

「へえ、へえ。」

「あの、お厭なものを無理にするといふのは、それやいけませんし、又そんな事をすると身體が惡くなりますから、私に本當の事を話して下さいましね。」

「あの、私はどう思つても厭なんです。」

「そんなら、どうして母さんがこの三月にその話をしに大阪へ入らしつた時、お斷にならなかつたんです?」

「へえ、へえ。」

「いえ、もう濟んだことは何としても仕樣がありませんけど、どうしてせめて私に手紙でゞもその事を言つて下さらなかつたんです?」

「へゝゝ、それが、そのどうも言ひにくかつたものですから……。」

「そんな事とは此方で思はなかつたものですから、皆さんが心配して下すつて、あの、お聞きになつたでせう、半年でも一年でもあそこで商賣のことをお覺えになつたら、中戸さん始め皆さんが寄つて店を出すやうにして下さることに迄なつてゐたんですのに、それに、あの中戸さんの娘さんのお紋さんと結婚なさる話まであつたんですのに。」

「へえ、へえ。……然し、私、あのお紋さんといふ人嫌ひです、初めからもさう思つてゐたんですけれど、あそこの家

へ行つてから殊にさう思ひましたが、私のやうなものと、あんな人と一緒になつたら家の中が滅茶苦茶ですがな。へゝゝ。」
「然し、さうかと言つて、ね、兄さん、いつ迄も何にもしないで入らつしやるのは、誰よりもあなたが退屈でお困りでせう？　あなた、一體どんな事をなさりたいとお思ひになつて……？」
「へえ、へえ。その、別に斯うと言つて……私、こゝの家に居れなかつたら、須磨へ歸らうか知らとも思つたり……へえ、へえ。」
「だつて、一度出て入らしつたのを、又歸るといふのも何ぢやありませんか。それに彼方へお歸りになつたつて、又今迄の通り庭を掃いたり、お猿や犬のお世話をなすつたりぢやあ、本當につまらないぢやありませんか？」
「へえ、へえ。」
「何か斯う、どうかしたアいとお思ひになつていらつしやることはないんですか？」
「それや、ないこともありませんけれど……」
「それを仰言つて下さいな。」
「言つても、屹度、みんながお笑ひになるだらうと思ひますから……」
「何を笑ふもんですか。何です。何をなさりたいとお思ひになります？」
「私はその……私はその、弟のやうに、私もその……小説を書いて見たいと思ふんですけど……」
だが、この兄に就いての話は未だそれで終らなかつたのである。何故と言つて、その日絶望して、彼の爲に託や愚痴やを述べに淺草の中戸の家へ行つて來た母は、そこで色々と慰めや氣安めやの言葉で報いられて、最後に丈助から「も

のは三度といふ事があるさかい、もう一ぺん寄遣して見なはれ。まあ、大抵あかんやろとは思ふが、別にもう斯うなつたら同じこつたすさかい、寄遣して見なはれ、私んとこには遠慮は入りまへん。」と言はれて、彼女は又も「若しや」と思ひ返したのである。彼女は歸つて來て、私の妻から先の問答を、多少割引して聞かされたが、それは割引しても割増しゝても同じことだつたらう。彼女はその晩と、その翌日とかゝつて、頭ごなしに兄を叱りつけたり、宥めたり、賴むやうにしたりして、到頭もう一度彼を中戸の家に遣ることにしたのである。だから、その翌日、彼女は再び彼を連れて、中戸の家へ行つた。

すると、その日から又三日經つた夕方、兄は今度は丈助に連れられて、例に依つて額に汗を浮べながら歸つて來た。その時は私は家を留守にしてゐたが、もう母と中戸との間にも何のくど〳〵した話も出なかつた。兄は無言のうちに渡されて、無言のうちに受取られた。唯、丈助が歸りがけに、私の妻を通じて私に、「自分の方から言ひ出したのを、自分の方から引込めるのは誠に濟まんが、あのお紋との緣談もお互ひの爲に一先づ水に流した方がえゝやらうと思ひます。そして若し須磨の小阪はんの家へ歸ることにでもなつて、折角出て來たのにのこ〳〵と歸れないといふやうなことがあつたら、私がいつでも附いて行きます、そして私が何とでもあやまつて上げます。」とことづけした。

「緣談か、」と私はその話を聞いて笑ひながら妻に言つた。「兄貴の方でも厭がつてゐたが、お紋さんの方でも愛憎をつかしたんだらう。」

そして、その兄は今私の家の例の二疊の間に坐つてゐるのである。

（六・十六）

◇小林榮子新著◇

(前編桐壺より若菜の下まで)

全壹册箱入

新刊(發賣)

源氏物語活釋

(著者多年研究の大著完成)

源氏物語は只文學に興味を持つ人ばかりでなく苟も日本國民たる者は皆讀まなければなりません。それは日本の國民性を知らなければ世の中に立つて何の仕事も出來ないからです。さて現在の日本國民性を知る爲には過去の日本國民性を知る必要がありますが平安朝に於ける日本國民性は源氏物語に盡されて居ります。枕の草紙も文學的價値に於ては源氏と匹敵するかも知れませんけれども其時代の一般社會の様子は少しも現はれては居ませぬ。ですから本當に眞面目に成て此物語を研究するは日本の國民性が如何なる經路を通つて今日に至つたかゞよく分ります。斯様に大事なしかも千古の名文を一般の人々にたやすく分るやうに十數年の考慮を費して成たのが此の活釋です。體裁は例の妥當な漢字をあてゝ講義に代へた上に煩多な古註を精選したものと著者の見解によるものとを頭註としてありますから初めて古文に面接する人も直ちに堂奥の源氏物語を了解する事が出來ます。

—(前編出來發賣す)—

四六判最上製本
全壹册約壹千頁
正價金四圓八拾錢
送料十八錢

東京帝國大學文學部助教授
植松安氏著

記紀の歌の新釋

(好評)

東京日々評：古事記日本書紀にある歌の全部を原文に就て一々丁寧な語釋を加へその大意をも書き添へたものであどけない無邪氣な祖先の魂から流れ出る悦びや悲しみの情がひし〳〵と心にせまつてくる。

四六判最上製
美本全一冊
正價金貳圓
送料十二錢

小林一郎著

日蓮主義日訓

(五版)

忙しき世に立つ人は靜なる心をもつことを必要とす忙しき人は決して修養を忘るべからず本書は法華經と日蓮聖人遺文集とより修養上に適切なる金言三百六拾五を選出し之を毎日に配し之に簡單にして明快なる解釋を加へたるもの何人も毎朝本書を開かば愉快にして力強き心を以て其日の業に當り得べし。

袖珍最上良書
美本四百餘頁
金壹圓八拾錢
送料十二錢

東京市神田區
表神保町七番地

大同館發行

振替貯金口座
東京八七貳番

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區通神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）
但支那を除く

册數＼國別	内國	外國	
六册	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢	以上郵稅共
十二册	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢	

▲但し新年號春秋二期臨時號增刊號は各特號に付特價一册の代金を申請くべし、即ち一ケ年分計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は内國は金拾壹圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども臨時の都合にて變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合に發送を止むべし

一振替貯金　口座番號は東京三十四番なり

一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず

一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す

一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但代金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

一金二圓以上五圓迄　金七錢
一金拾圓迄　金八錢
（集金委託料及送料共）

一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十二年六月廿二日印刷納本
大正十二年七月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木島三

發行所　東京市丸ノ内ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話　局丸ノ内三〇二
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正十二年六月廿二日印刷納本

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.



中央公論 七月號 （第三十八年第八號） 定價金八十錢